
夜の灯火

彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の灯火

【Nコード】

N6103I

【作者名】

彼方

【あらすじ】

ピアニストのテアは、名門シユレ音楽学院に入学する。彼女がそこで出会ったのは、美貌の生徒会長ディルクだった。高名なピアニストのレッスンを受けるテアは周りから妬まれるが、ディルクはそんなテアの音を気に入ってパートナーとなり、彼女を支えてくれる。二人は様々な困難の中で惹かれあっていくが、テアには想いを寄せるディルクにも言えない秘密があった…。じれったく、けれど甘い二人の物語です。

経済大国クンストは、大陸の北西に位置する。

主要産業は工業で、科学技術に優れており、他国からの支持もあつ
い。

特に現皇帝アウグスト・フォン・シーレの代に急激な経済成長を遂
げたと言われている。

そのように工業にのみ目を向けられがちであるが、この国は音楽に
おいても著名な作曲家や演奏家を多数輩出していた。

クンストの音楽の中心地は、その首都コアの北街ケーレ。

そこに、国立シューレ音楽学院はある。

シューレ音楽学院は、宮廷楽団を目指す者たちが集う、名門校だ。
宮廷楽団に所属する団員は、ほぼ全員がシューレ音楽学院の卒業生
であり、生徒たちは宮廷楽団の一員となるために、演奏の腕を磨き、
日々勉学に励んでいた。

そして、秋。

今年も、宮廷楽団を目指す若者たちが、シューレ音楽学院の門をく
ぐる季節がやってきた。

どうしたらいいのだろう。こつという場合…。

テア・ベーレンスは困ったように目の前の相手を見上げていた。

今日、この日。

彼女は、シューレ音楽学院の入学式に参加するため、入学試験、入

学手続きから三度目となる来校を果たしていた。

会場である講堂へ向かう途中で連れとはぐれてしまい、広い構内で迷っていたところを、先輩らしい男性が親切に話しかけてくれ、案内してくれると言うので付いて来たのだが。

「ねえ君、僕のパートナーになつてくれないかな。僕もピアノ専攻なんだ。きつと先輩として助言できることも多いと思うし…」

「えつと…、あの…」

講堂に向かうのではなく、人気のない場所に連れて来られ、パートナーになつてくれと迫られて、テアは困惑していた。

入学式までの時間が迫っているし、相手の言う「パートナー」が何を意味しているのか分からないのだ。

「僕はフォン・エーベルハルトの三男だ。色々な便宜をはかってあげられる」

「はあ…」

フォン・エーベルハルト エーベルハルト家と言えば四大貴族の一つだ。

平民であるテアは、そんな大貴族に声をかけられて、戸惑うしかなかった。

「ねえ、だから僕のパートナーに」

「こんなところで何をしている？」

ふ、と向こうから長身の人影が現れて、テアは目を瞬かせた。

「…あつ、デイルクさん……」

ぎくり、とテアに迫っていた男性の身体が強張る。

静かに、向こうから現れたのは、男性やテアと同じ白い制服を身に纏った美貌の青年だった。

「そろそろ講堂に集まる時間だが」

「は、はい。その、新入生が道に迷っていたので案内をしようとする」

「そうか。では彼女は俺が引き受けよう。一般生徒は早く講堂に向かった方がいい」

「は、はい…！」

彼は何度も首を縦に振ると、テアの方も見ずに講堂の方へ走って行ってしまった。

テアは、目をぱちくりとさせてそれを見送ってから、戸惑っていたところを助けてくれた青年に目をやり、思わず見とれてしまう。

美しい 男性だった。

男性に対して美しい、と思うのは初めてだったが、そう形容するにふさわしい美貌の持ち主なのだ。

赤みがかった鳶色の髪に、白藍の瞳。肌は健康的な色を持ち、容貌だけでなく身体づくり全てが精緻に、精巧につくられているようだった。

高潔な気品が宿っている眼差しがテアを捉えて、彼女はどきりとする。

「大丈夫だったか？」

「あ…はい。どうも、ありがとうございます」

我に返ってぺこり、とテアは丁寧にお辞儀をした。

「いや。すまないな。新入生を誘うのは入学式を終えてからというルールがあるのだが。彼はたまにああして…」

ふう、と少しだけ困ったように彼は笑った。

「いえ」

ふる、と彼女は首を振って、

「…あの、誘う、というのは、どういうことなのでしょう？」

テアの不思議そうな様子に、彼は目を見張る。

「もしかして、パートナー制度を知らない？」

「パートナー制度、ですか…。申し訳ありません、どういったものが教えていただけますか？」

丁寧に頼むテアに彼は驚きを隠せない様子で、

「そうか、知らないのか…」
と呟いた。

「その…、パートナー制度というのはそんなに有名なものなので

すか？ すみません、私、世間知らずで…」

恥入ったようにテアは俯く。

「いや 謝るようなことはない。講堂に向かいながら少しだけ説明しようか」

「あ、はい。お願いします」

青年に促されて、テアは歩き出した。

「そう言えば名乗っていなかったな。俺はディルク。ディルク・アイゲンだ」

「あ…、テア、です。テア・ベーレンスと申します」

少しだけ緊張しながらテアは答えた。

彼の立ち振る舞いはどう見ても貴族であるが、彼 ディルクは名前に「フォン」をつけない。

貴族ではないのだろうか、とテアはディルクを見つめて少し首を傾げた。

その仕草を、ディルクはパートナー制度の説明を待っているものだと受け取って、口を開く。

「…パートナー制度というのは、この学校特有のものだ。生徒同士が二人一組のパートナーを組んで、勉強や行事に参加する。前期と後期に一度ずつ登録期間があって、その間に必ずパートナーを決めて登録しなければならぬんだ」

「そう…なのですか。一応、学校のことについては調べてきたつもりだったのですが」

「有名な話だから、逆にパンフレットなどにもわざわざ書かずに行ったりするからな…だが、気にすることはないさ。この制度を知らなかったところで大したことはない。入学式でこれからちゃんと説明があつて、知ることになるのだし…」

「はい。教えて下さつて、ありがとうございました」

上辺だけではない、テアの顔を見ての優しい言葉だった。

テアはその言葉に素直に慰められて、静かに微笑む。

「…あそこが講堂だ」

ディルクの指す方に、白く大きな建物があった。

シューレ音楽学院の敷地は広大で、どの建物も芸術を極めたような素晴らしい建造物だ。

その講堂もどこから見ても美しく、大きなステンドグラスが輝いていた。

そこに、次々と白い制服の生徒たちが吸い込まれるように入っていく。

テアは間に合ったことに安心して、ほっと息を吐いた。

「わざわざありがとうございます。助かりました」

「いや。ここは広いから慣れるまで大変だろうが、迷って授業に遅れないようにな。…じゃあ、また」

手を振って、ディルクが颯爽とした様子で去っていくのを、テアは見送る。

本当に、綺麗な人だ…。

感嘆の眼差しで、テアは少しの間そこに佇んでいた。

中低音の声も、柔らかくけれどはつきりとしていて、耳に心地良かった。

彼のような人がいるところで、自分はこれから学ぶことができるのだ。

「テア、…テア！」

名前を呼ばれて、テアは我に返る。

呼ばれた方を向くと、はぐれていた友人が、心配そうな少し怒ったような表情でずんずんとこちらに歩いて来ていた。

「あれだけ離れるなど言ったでしょう！ ここは広くて迷いやすいんですよ」

「す、すみません…」

「探したんですからね、もう」

ぷりぷりと怒ってみせる彼女だが、そんな表情豊かな様子が魅力的だ。

竜胆色の長い髪に、菖蒲色の瞳を持つ彼女は、名をローゼ・フォン・

ブランシュと言う。

シューレ音楽学院の新二年生で、テアより三つ年上の彼女は、テアの幼馴染であり親友であり、姉妹のようなものだった。

フォン・ブランシュの名から分かる通り彼女は貴族であったが、本人は貴族ぶつた振る舞いをあまり好まないようである。普段名乗る時に「フォン」を付けないことの方が多いくらいだ。

「でも、何事もなかったようで良かったです。さ、入学式始まっちゃいます。行きましょう」

「はい」

ローゼに手を引かれ、テアは歩き出す。

ここで私は、音楽を勉強する。そしていつかは、あの人のように……。母が願ったように……。

テアはまっすぐに自分の未来を見つめていた。

「デイルク、遅かったな。何かあったのか？」

「すまない。迷っていた新入生を案内していたんだ」

テアを講堂まで送り届けたデイルクは、そのまま生徒会役員の活動場所である建物 通称「泉の館」に向かった。

清楚な白の館の裏手に、芸術的な石造りの泉があることから、そう呼ばれているのだ。

デイルクは、シューレ音楽学院生徒会会長だった。

入学式の準備などは、生徒会が中心となって行われる。

入学式前のミーティングが終わって、入学式が始まる前の休憩にとデイルクが出て行ってから戻ってくるまで、少し時間が経ってしまった。

生徒会の人間が集まる一室に入り、開口一番デイルクに尋ねたのは、副会長でありデイルクの親友でもあるライナルト・アイゲンである。水浅葱色の髪に、白藍色の薄い色素を持つ彼は、デイルクに似通っ

た美貌の持ち主だった。ディルクに比べるとやや冷たい印象を与え
る容貌であるが、その瞳には気遣わしげな色がある。

「この敷地は広いからな」

「ああ。しかも、エーベルハルトに絡まれていた」

「あいつか…」

ライナルトは嘆息する。彼は複数の女性に声をかけて問題を起こし
たことがあるのだ。

だが、ディルクはエーベルハルトの三男がテアに声をかけたことは、
理解できるような気がした。

テアはたおやかで繊細な容貌の少女だった。眼鏡の硝子の向こうに
ある穏やかな瞳は、水面を反射した光のような、美しい麦の穂が揺
れる様を連想できるような、自然の中で輝くような見事な黄金。背
に長く垂れる髪は、落ちて着いた空色。ぱつと見ただけでは、大人し
い印象でふと見逃してしまいそうにもなるのだが、一度しつかりと
見つめてしまうと目が離せないような、淡いのに不思議な存在感が
あった。

彼女はこれから色々な意味で注目の的だろうな、とディルクは思う。
テア・ベーレンス。

実を言えば、学院長から、既に彼女の名前を聞いていたディルクで
ある。

今までに学校に通ったことのない少女が、特別入学を利用してこの
学院に入学してくる。

慣れないうちは何かと不便もあるだろうと、学院長は少しでもいい
から気を掛けてくれないかと生徒会長である彼に頼んだ。

「特別」入学というだけあって、この方法で入学してくる生徒は、
これまでに大きな成果をあげてきたような、有名な者が大半だ。

だが、テアが実力で合格したのは間違いないことなのではあるが、
彼女には今までの功績などはまるでない。

この学院の生徒は特に向上心を持っており、プライドも高い。やつ
かみや反発をむけられることは避けられないだろうと、学院長もデ

イルクも考えていた。

今までにテアのような経歴でシューレ音楽学院に入学し、卒業したのは、たった一人だ。

彼は、今や音楽界で知らない人間はいないほどの人物となったが、彼女はどうかだろうか。

そこらの貴族よりもよほど礼儀正しい振る舞いで、理知的で控えめな視線を自分によこしたテアの眼差しを思い出し、ディルクはふとそんなことを思った。

「……そろそろ時間だな。行くか」

「ああ」

ライナルトに促され、ディルクは頷き、歩き出した。

それに並ぶように歩きかけ、ふ、と苦笑気味に振り返ると、ライナルトは他の生徒会役員を見渡す。

ぼう、と二人の姿に見とれていた役員たちは我に返って、歩き出した二人に続いた。

ディルク、ライナルトの二人が並ぶと、見慣れた者でもつい見惚れてしまうものがあるのだ。

「いつもながら、立っているだけで見事な誑し具合だな、生徒会長」
ライナルトはやや人の悪い笑みを浮かべる。

「お前も人のことは言えないだろう？」

「そんなことはない」

ディルクと比べて遜色のない容姿を持ちながらライナルトは本心から否定して、含みのある笑みでさらに続けた。

「…今年も、新入生が何人氣絶するやら、な」

「言うな。からかうなら歓迎の挨拶はお前がしてくれ」

「遠慮しておく。落胆の溜め息を吐かれるのは嫌だからな」

「心にもないことを…」

親友同士である二人は、他愛もない言葉を交わしながら講堂へ向かって歩いていく。

新入生を迎え、新たな年が始まろうとしていた。

t h e d a w n (後書き)

…というわけで、初投稿です。
のんびりと、テアとディルクの物語を綴っていければと思います。
どうぞよろしくお願いします。

鳥のさえずりが聴こえてくる。 。
まだ外はうつつすらと暗い。

そんな中、シユール音楽学院の女子寮の一室で、テアは目を覚ました。

昨日、入学式を終えた後、入寮式にも出席し、彼女はこの部屋にやって来た。

学生寮、というわりには備品にも金が掛けられたそれなりの部屋である。

一年生であり、平民であり、そうお金もかけられない と思っ
ているテアは二人部屋を希望し、希望通りの部屋があてがわれていた。
ルームメイトは、親友であるローゼである。

シユール音楽学院には、貴族などの後ろ盾を得ているが平民である者、貴族の嫡男ではない者、などさまざまな身分の者が在籍している。

学院の生徒である以上は、階級は関係ない というのが学院側の基本的な方針だ。

しかし、根強い階級意識はそう簡単に無視することはできない。

貴族ぶつた振る舞いが嫌いなローゼだが、今回はテアと同室となることを権力をもって強く希望した。

本当なら、同級生と同室になって新しい友人を作るほうがいいのでしようけれど とローゼは言ったが、テアは、見ず知らずの人間がいるようなところでは眠れないような潔癖なところを持っていたから、幼馴染である彼女は気を遣ったのだ。

もちろん、ローゼとしても姉妹のように親しんでいるテアと同室の方が気が楽でいられるということもあるのだろうが、テアはローゼ

の気遣いに感謝していた。

上半身だけ起こしたテアは、部屋の真ん中にあるテーブルを隔て、向かいのベッドで眠るローゼに目を向ける。

ローゼはまだ深い眠りの中にあるようだ。

幼い頃に戻ったような気がして、少しだけテアは微笑んだ。

ローゼと出会ったのは八年ほど前のことになる。

テアと、テアの母カティアは、それまでずっと逃げるような生活を送ってきていた。

それを救ってくれたのが、ローゼの父親であるモーリッツ・フォン・ブランシュだったのだ。モーリッツは「クンストの剣」と呼ばれるほどの貴族であったが貴賤を問うような性格ではなく、自身の所有する道場兼屋敷にテア親子を置いてくれた。

彼はあまり愛想の良い方ではなかったが親子に惜しみなく手を差し伸べてくれ、その娘であるローゼも屈託がなかった。

ローゼはテアにとって本当の姉妹のようなものであり、初めての親友であったのだ。

ローゼがテアより一年先に学院に入学してしまったので、同じ部屋で眠るといふ機会も減ってしまったが、こうしてまた同じ部屋で過ごせることが嬉しかった。

まだ起床時間には早い。

テアはローゼを起こさないようにそっとベッドから離れると、さっと身支度を整えた。

静かに、部屋を出ていく。

九月の朝は、わずかに秋を感じさせる風情で、空気が冷たさを纏っていた。

明かりの消された廊下は、まだまだ静かだ。

昨日ローゼに案内された寮内を、道を覚えていくようにテアは足音を立てず歩いていく。

テアの向かう先は、男女共同棟の練習室だ。

シューレ音楽学院の学生寮は、基本的に男女で分けられているが、

食堂と練習室は同じ建物内にあり、共用となっている。

テアは共同棟に立ち入ろうとドアに手をかけて、鍵がかけられていることに気づいた。

「やはり、施錠されていますか……」

落胆の溜め息を吐く。

もう丸一日、ピアノを弾いていない……。

テアの目当てはピアノだった。

彼女は、この学院に音楽を、ピアノを学ぶために入って来たのだ。ここに入学する前まで暮らしていたモーリッツの道場にはローゼのために購入されたグランドピアノが一台あって、テアはそれを毎日のように弾かせてもらっていた。

だから急にピアノを弾けなくなつて、テアは落ち着かない。

練習室には防音設備が整つていて、この早朝から弾いても少しなら迷惑にならないのではないかと思つて来たのだが……。

「仕方ありません、ね」

テアは焦がれるような目をして、けれどあと何時間かの我慢だ、と思つ。

今日から早速授業が始まる。そこでピアノを弾けるはずだと。

そう言い聞かせながらも、何となく立ち去りがたい気分していると、後ろから声をかけられた。

「何をしている？」

図らずも 昨日も同じような声で同じような台詞を聞いた気がする、と思ひながらテアは振り向く。

「あ……」

そこに立っていたのは、ディルク……ディルク・アイゲンだった。

その美貌を再び目の当たりにして、テアはかすかに頬を紅潮させる。昨日の入学式では、彼が生徒会長として新入生たちの前に現れ、テアは驚きに目を見張り、そして納得してしまったものだった。堂々としたたち振る舞いは、確かにリーダーにふさわしい。

入学式でディルクは歓迎の辞を述べ、学校のカリキュラムやシステ

ム、そしてパートナー制度について説明を行った。その間に、なぜかばたばたと倒れる新入生及び在校生が続出したのは、毎年恒例の行事のようなものらしい。

さらに、入寮式でも、ディルクは男子寮の寮長らしく、リーダーシップを発揮していた。

一方、テアに近づきながら、もしやと思っていたディルクは、彼女を正面から見とめて、やはりかと思いつつ目を見張っていた。

「テア・ベールンス、か…。おはよう また会ったな」

「あ、はい…。おはようございます」

丁寧にテアは頭を下げた。

「こんな朝早くから、どうした？ 食堂が開くのは、七時半からだ」と

「いえ、用があるのは食堂ではなくて、練習室の方です。その…も…」

「ああ…」

ディルクは顔を綻ばせた。

「練習熱心なのだな」

「いえ、そんな ただ、ピアノを弾くのが…好きなだけです」

控え目でいて、ピアノを好きだという本心が伝わるようなテアの風情が、ディルクには好ましいものに映った。

「そうか…。この鍵はいつも食堂が開く時に開けられるんだ」

「そう…なのですか」

テアは、分かつてはいたが肩を落とした。

「だが、頼めば開けてもらえる。規則では解錠時間は決まっているが、管理者も結構臨機応変に季節に応じて開ける時間を変えるしな。いつもは食堂と同時にこの鍵をあけるが、コンクール前となると寮生の希望でそれが五時になる。よければ、俺の方から管理者に鍵を開けてもらうように頼もう」

「よろしいのですか？」

「ああ」

「…お願いします！」

厚かましいとは思ったが、テアは自分の欲望に素直に従うことにした。

明るくなったテアの表情に、ディルクは不意を打たれ、そしてわずかに苦笑した。

「では、もう少しここで待っていてもらえるか？」

「はい」

テアが頷いたのを見届けて、ディルクは踵を返して管理者の部屋に向かった。

そう言えばディルクはどうしてこんな早朝から、とテアは少し疑問に思ったが、寮長の仕事か何かだろうと思いついて追究するのは止めておく。

数分後、テアは寝ぼけ眼でやってきた管理者とディルクに礼を述べて、一人、いくつも並ぶ練習室の一つに入った。

据え置かれたグランドピアノの黒い輝きに、テアは目を細める。

丁寧な仕草で蓋を開け、そっと鍵盤に触れると、ポーン、と澄んだ音が響いた。

当然ながら、きちんと調律がされているらしい。

上質な音に、テアは嬉しくなって、早速椅子に腰掛けると鍵盤に両方の手のひらを置いた。

お母さん…。

練習室にはテア一人だけなのに、背中に優しい眼差しを感じる気がする。

テアは温かい気持ちで、想いのままにピアノを奏で始めた。

「テア！」

ローゼが怒鳴り込むように練習室に入ってきて、テアは驚いて手を止めた。

「ローゼ…おはようございます」

「おはようございます、じゃありません！ もう朝食の時間ですよ。何にも言わないで先に出てっちゃうんですから…でも食堂にはいないし…探したんですよ」

「えっ」

慌ててテアは、ポケットから懐中時計を出すと時刻を確認した。

時計は、八時前を指している。

「もう、こんな時間に…」

「テアは全く、ピアノを弾きはじめたら時間なんて飛んじやうんですから…」

「すみません…」

「それより早く、朝食にしましょう。授業に間に合わなくなっちゃいます」

「はい」

テアはローゼに続くように、食堂に入って行った。

入寮している男女が使う食堂は、広い。

食堂はビュッフェ形式になっていて、豪華な食事にテアは気圧される。

入学式の時に出了た食事も、入寮式の時に出了た食事も贅沢を尽くしたもので、こんなものを自分が食べていいのだろうかとテアは躊躇したものだ。

ただ、特別な式が終わればもう少し質素になるかと思っていたのに、普通の朝食ですらテアにとっては贅沢なものだった。

別に、モーリッツの家で出る食事が貧しかったわけではなく、この水準が高いのだ。

学院には国から多くの資金が出ており、貴族出身の生徒が多いこともあって、金は何にでも惜しみなく使われているのだろう。

「そんなに気にしないで、せっかくだから食べつくしてやる勢いでいればいいんですよ」

と、ローゼは悩むテアの盆にひよひよいと皿をのせていく。

「ろ、ローゼ…」

「テアは小食ですからね。この機会にちょっとくらい太った方がいいんです」

「いえでも…、これは多すぎでは…」

そんなやりとりの後、二人は空いている席を探し、ある人が片手を上げて示してくれたので、そちらに向かった。

「ライナルト おはようございます」

ローゼは嬉しそうに挨拶する。

彼女の言ったように、二人に空席を示してくれたのは、副会長のライナルト・アイゲンだった。

「おはよう、ローゼ、テア。あと昨日は言えなかったが、テア、入学おめでとう」

「ありがとうございます」

テアは少し照れくさそうに言うと、ライナルトの右前の席に腰を下ろす。

ローゼはライナルトの隣、テアの正面に座った。

ローゼとライナルトは、パートナー制度上での、パートナーなのである。

ローゼが入学した去年から変わることなく二人はパートナーとしてやってきており、その関係でテアはライナルトを入学以前に紹介されて、知っていた。

二人は共にこの学院でフルートを専攻しており、それがきっかけでパートナーを組むようになったのだという。

テアはライナルトを紹介された際、「パートナーであり、お付き合いをしている」というように聞いたのだが、それを単に二人がデュエットをする際のパートナーなのだと認識した。そのため、「パートナー」というものが学院の制度とは知らないままだったのだ。

それはともかくとして、ライナルトという時のローゼは本当に嬉しそうで、家族や友人に見せる者とはまた違った表情でいて、それがまた可愛らしく見えるので、テアは二人が仲良くしているところを

見ているのが好きだった。

しかし、自分がこのようなパートナーを見つけることができるのか、テアは不安に感じる。

昨日ディルクが教えてくれたように、パートナー制度はこの学校特有のものだ。

生徒同士、二人一組のパートナーを組んで、勉強や行事に参加するというもの。孤立するような生徒が出てこないように、協調性が学べるように、また社交界での人脈を今からつくっておけるようにと考えられ、始められた制度だという。

パートナーの登録は、前期と後期に一度ずつ行わなければならないことになっている。前期と後期で異なる相手を選んで良いし、年間通して同じ相手をパートナーとしても良い。毎回違う相手をパートナーとする者がいれば、入学してから卒業するまで同じ相手をパートナーとする者もあり、様々だ。

パートナーを組む相手は、生徒同士であれば誰でも良い。同性でも異性でも、先輩後輩も特に制約はない。最も多いパターンは同学年で同性の友人同士で組むというもの。一番気兼ねなくやれるからであろう。下級生は上級生と組んだ方が助言を得られやすいなどの利点があるが、上級生からすれば下級生と組むことはその相手の力量にもよるがメリットは少なく、学年に差のあるパートナーはやや少数派だった。

また、現在社会では男女の役割の差ははっきりしており、男女でパートナーになるというのもあまり多くはないようだ。しかし一方で、音楽をやるのに男女は関係ないという音楽学院の姿勢から、社交界などと比べればこの学院での男女の関係はいささか緩いものがある。このパートナー制度によって出会い、恋人となり、卒業後結婚する男女も少なくはないと言い、それを狙ってここに入学してくる子弟もいるという。それから、パーティの際などは男女ペアでなくては格好がつかないので、パーティが多い前期は男女のパートナーが増える、という傾向もある。同性同士でパートナーを組んだ場合は、

男性なら例えば女性同士で組んでいる片方をパーティに誘うなどしなければならなくなるからだ。

もし登録期間内にパートナーを見つけられず、登録しなかった場合は、登録できなかった者の中からランダムで学校側がパートナーをつくることとなっているので、万が一パートナーを見つけないことができなくとも大丈夫なようになってはいるのだが。

やはり、できればお互いに認め合ってパートナーを組みたい、とテアは思う。

けれど、それは難しいかもしれない。

テアはあまり好意的ではない視線をひしひしと感じながら、思った。今までの功績も特になく、特別入学してきたテアに対しては、その実力を疑う者などが多くいるらしかった。専門学校の出ではなく、見覚えのない顔であることも、不審に拍車をかけているのだろう。ある事情から、後ろ盾を明確にしていけないのも、良くないのかもしれない。

万が一、気の合うパートナーが見つからず、テアを嫌悪するような人物とパートナーを組むことになったら、そう思うと、憂鬱だった。

登録締め切りは一ヶ月後…。それまでに、見つかるかというのですが…。

入学式の後、パートナー制度というものがあるなら教えてくれていても良かったのに、とローゼに言うと、彼女はきょとんとしていた。テアが知っているものかと思っていたらしい。ライナルトを紹介する時にも特にテアが疑問を示さなかったため、知らないなどは考えなかったのだろう。

そしてローゼは、もし良かったら慣れない最初は自分とパートナーに、と言ってくれていたが、ライナルトとローゼの邪魔はしたくなかった。テアは首を振っていた。

「そう言えば、今日はディルクは？」

ローゼの口からディルクの名を聞いて、テアははっとした。

「あいつなら、やることがあるからと先に行つたよ」

「彼は生徒会長と寮長を兼任していますし、大変ですね……」
そうか、と今さらながらテアは思い当たった。

ライナルトは生徒会役員で副会長なのだから、ディルクと知り合いで当然なのだ。

「……そう言えば」

さらにあることに気付いて、テアは口を開いていた。

「ライナルトと……その、生徒会長は同じ姓なのですね。親戚……とか？」

テアが聞くと、ライナルトは目を見張り、ローゼを見た。

「話していないのか？」

「……だって、テアがディルクを見たのは昨日ですよ？ わざわざ話しませんよ、そんな」

テアがパートナー制度を知らないと言った時のディルクと同じような驚き方を、ライナルトはする。

「いや……だが、つまりテアは、アイゲンという姓の意味を知らない……んだな」

「意味？ その……やはり世間ではそれは当然の話なのでしょうか？ すみません、知らなくて……」

テアは勉強熱心ということもあり、人の知らない知識から噂まで広く情報を取り入れるようにしているが、一方で一部の俗っぽい事柄などには疎いところがあった。

「謝ることはない。そうだな……、とりあえず最初の質問に答えよう。私とディルクは、異母兄弟だ」

「そう……なのですか」

さらりと告げられた事実には、テアはそう言うしかなかった。ぶしつけな質問をしてしまったか、と思う。

ディルクは現在四年生。ライナルトは三年生。しかしそれは、ディルクがライナルトより一年多くスキップしているからで、二人の年齢は同じである。つまりその意味するところは……。

テアの考えていることが分かったのだろう、ライナルトはふつと笑ってみせた。

「どちらかというところ、親友だと私は思っているがな」

「たまに妬げるくらい仲が良いんですから」

ローゼがそう言うので、ライナルトは苦笑する。

「それで、アイゲンの意味だが」

意味深に、ライナルトは言葉を切り、食堂にある時計を見やった。

「…そろそろ授業に行く時間だな。行こうか」

「え」

立ち上がるライナルトをテアは見上げる。

「多分、すぐに分かる。知らなくても良いくらい、大したことのない話だから、あまり気にするな」

「はい…」

腑に落ちないながら、テアも立ち上がった。

ローゼの方を見ると、彼女も知っているのだろうがライナルトがそう言うのなら話さないという顔をしている。

ライナルトが先導するように歩きだすと、生徒たちが道を開けるように退いた。

入学式、入寮式を通して、ディルクとライナルトの二人がとても生徒たちに慕われているのはよく分かったと思っていたが、本当にすごいとテアは思う。

生徒たちに慕われるライナルトのパートナーであるローゼも堂々としたものだ。

ブランシユ家はそう大きな家ではないが、「クンストの剣」とも呼ばれ、貴族に多くの門弟を抱えて国をその剣で守っており、尊敬される家柄だった。

それに比べて、私は…。

自分が場違いだということをテアは感じる。

ライナルトやローゼのような輝かしい二人にくっついていてあの少女は一体何者だと、多くの視線は不審そうな不快そうな色を宿して

いる。

その視線は痛く、怖い。

それでも…音楽を学びたいという気持ちに変わりはなく、学院を辞めたいとは思わない。

だが、こうしてローゼとライナルトは自分に親切に接してくれて、それでいいのだろうかと思う。自分といることで、ローゼとライナルトが悪く言われたら。二人の足を引つ張ることになってしまったら…。

食器を返して歩きだす。

俯きがちなテアに気づき、ローゼが気遣わしげに声をかけた。

「テア…？　どうかしましたか？」

「いえ…」

だが、構わないでくれと言っても、この優しい友人を傷つけ、余計に心配をかけてしまうだけだろう。

だからテアは何事もないように、笑う。

せめてなるべく負担をかけないように。

「初めての授業があると思うと、何だか緊張してしまっ

「そうですね。テアにとっては本当に何もかも初めてですものね。

でも、あれだけ本を読んで勉強してきたのですし、授業もきつと楽しいものになると思いますよ。困ったこととか分からないことがあったら、何でも助けになりますから」

「…だが、お前、勉強について聞かれて、一年前習ったことをちゃんと覚えているのか？」

からかうようにライナルトが言う。

「お…、覚えていますとも！」

むきになるローゼに、ライナルトとテアは笑った。

「だが…そうだな。何かあれば何でも言ってくれ。できる限りの援助は惜しまない」

「ありがとうございます」

頑張ろう、とテアは微笑む。

こつして自分を助けようとしてくれる優しい人たちに応えるために
も。

早速始まった授業は、テアにとって興味深いものだった。

彼女は公教育を今までに受けたことがない。

教師が一人教壇に立って、大勢の生徒がその話を聞く。その中に自分が混ざっているのは、何だか不思議な気がした。

だが、こんなに多くの人間相手に教えることは、効率的ではあるの
だろうが、生徒によって理解に差が出てくるのではないだろうか。
それはどうやって補うのだろうか。

テアは疑問に思い、今度教育に関する書物に手を伸ばしてみようと思
った。

最初の授業、というだけあって、話は本当に基本的なことだけで終
わり、テアにとって、内容的にはそう目新しいものはなかった。彼
女は読書家で、ここに入学するまでに多くの本を読み、知識を身に
つけて来ていたから、特に。

授業の内容にはついていけそうだとテアは思い、少しだけ安堵して
。そして周りの生徒の様子に、やや気落ちしていた。

広い講義室の中、決まった席はなく、生徒たちは皆思い思いの席に
腰を落ち着けている。が、テアはどうも遠巻きにされている。

専門学校からそのまま入学した生徒たちは、既に顔見知りの場合が
多く、友人同士で集まって座っていたりするので、テアはどうして
も孤立してしまっていた。

かといって、テアも人見知りする方なので、同級生たちに積極的に
話しかけるのは躊躇われる。

テアの事情を知っている教師たちも、やや困惑している部分がある
ようだった。

ほとんどの生徒たちは今までも学校に行ったり家庭教師に習うなどして教育を受けてきているが、テアはそれがない。

もちろん、試験を通してきているのだから、必要な知識は身につけているのだが、他の生徒とすべて同様に扱って良いのか、迷うところがあるのだろうか。

まだ、一目ですから…。

これからどうなるか分からない、とテアは前向きに考えるようにした。

頑張っていれば、認めてくれる人々はきつといるだろう、と。

そうして。

午前中最後の授業で、テアは困ったことになったと思った。

社交界での嗜みである、ダンスの授業である。

音楽とも関わりが深いというので必修科目になっているのだが、テアは、ダンスができないのだ。

実を言えば少しだけやったことはあるのだが、相手の足を踏むばかりだった。

しかも、ペアをつくって、という教師の言葉。

誰がテアとペアを組んでくれるだろうか。

話しかけようとしても男子生徒はさっさと他の女子生徒の方へ行ってしまう、相手など見つかりそうにない。

どうしよう、とテアが立ち尽くした時だ。

ダンスホールの隅で、あの、と控えめな声がかかった。

ふと視線を挙げると、柔和な顔立ちの青年がテアに近づいて来ている。

昨日の入学式で、テアの近くに座っていた、クラスメートの男性だ、とテアは思い当たった。

声をかけられたのは自分で間違いないのだろうか、テアはきよるきよるしてしまふ。

「あの、ペアいない… なんだよね。僕と組んでもらえないかな」
それは間違いなくテアに向けられた言葉で、テアは驚いた。

「私 で、よろしいのですか？」

「うん。ペアが見つからなくて困っていたところだったんだ。組んでもらえると嬉しい」

「…ありがとうございます」

仕方ないなという諦めの顔での申し出ではなかった。それだけでテアは嬉しく感じる。

テアが微笑むと、目の前の彼は顔を赤くし、少しだけ視線をそらす。

「えっと… 僕はフリッツ。フリッツ・フォン・ベルナー。よろしく貴族なのか、とテアは少し意外に思った。

別に、フリッツの様子が貴族に見えないというわけではなく、貴族ならばテアに対してもっと高圧的な態度でもおかしくはないのに、彼があまりにも優しげだからである。

「テア・ベーレンスと申します」

「ロベルト・ベーレンスと同じ姓なんだね」

「は… はい」

少しだけ動悸が早くなる。

ロベルト・ベーレンス。

テアと同じ、前歴がほとんど不明でありながら初めて特別入学でシユーレ音楽学院に入学し、卒業した男だ。その音楽の才は誰をも凌ぐものがあり、宮廷楽団は彼の音楽を欲しがったが、ロベルトはその誘いを蹴って、今は自分で楽団をつくり世界中を回っている。彼は宮廷楽団の、貴族にのみ演奏し、皇帝に仕えるという姿勢が気に食わなかったのだという。彼は音楽を楽しむのに階級は関係ないとして、平民、貴族問わず、求められればそこに赴いて音楽を提供し続けているのだ。平民の中でロベルトは英雄のごとき語られ方をすることもある。一方で、誰かれ構わず尻を振る犬だと貴族に蔑視されることもある。だが、彼の音楽が人の感性に訴えかける素晴らしきものであることを疑うものは誰一人としていない。この学院の者

は、宮廷楽団からの誘いを断った彼を愚かだと思いながら、それでも彼の音楽を尊敬していた。

「彼に妻子はいないはずだけど……。もしかして遠縁、とか？」

「いえ まさか」

フリッツは少しだけ首を傾げたが、納得したようである。

教師の合図に伴って、彼はテアの手を取り、テアもぎこちなく手を回した。

「あの、すみません。私、ダンスをほとんどしたことがないので……」

「うん、実は僕もあんまり得意じゃないんだ」

二人は言葉を交わしながら、手本を見せる教師を眺めた。

他のほとんどの生徒たちは、ダンスを今までもやってきているのだろう。ほとんど教師のことなど無視している。

やがて早速、踊ってみましよう、という教師の声がかかった。

教師の方も、かなりの生徒がダンスをできると分かっているのだろう。

ほとんど生徒たちの顔を見もせずに、号令をかける。

テアは顔を強張らせながら、一、二、三、と自分の足元を凝視してしまった。

フリッツは、必死な彼女の様子にかすかな苦笑を浮かべる。

苦手とはいえ、フリッツもそれなりにパーティなどで踊って来たので、彼女ほど必死ではないのだ。

そんなテアのぎこちない様子を見て、周りの生徒たちが失笑する。

テアは羞恥に顔を赤くしながらも、覚えることをやめようとはしなかった。

「……すみません、私のせいであなたまで悪く言われてしまいましたね」

「ううん。僕は…最初からあなどられているから」

「え」

思わずテアは顔を上げて、フリッツの足を踏んでしまった。

「あっ、ごめんなさい」

「大丈夫。それより、あんまり難しく考えないで、音楽を感じてみて」

今はまだ、曲はかかっていない。

テアは戸惑うような顔をした。

「僕も苦手だから、上手く言えないんだけど。昔、ダンスの先生に言われたことがあって…。音楽を楽しんで、旋律にのせて身体を動かせば、それでいいんだって。だからその、今は音楽がかかっていると。力を、抜いて」

「は、はい…」

テアはフリッツの助言に従ってみた。

音楽がある、と思うとそれだけで少し身体が軽くなった気がする。

「……でも、どうして、あなどられているなんて」

「…うん。僕は次男なんだけど、兄さんと違って、剣も駄目で騎士は諦めないといけなかったし、勉強もそうできる方じゃないし、あんまり積極的にもなれなくて、気の利いたことひとつ言えなくて社交的でもないし、美形じゃないし、とろいし、ダンスは下手でいつも笑われて、今も君以外の人は僕とペアになってくれなかった」
言う度に、彼の顔は笑っているのに曇っていく。

彼はこうして、ずっと自分を卑下してきたのだろうか。

出会ったばかりのテアは、かける言葉を多くは持たなかった。

「…でも、この学院に入るために、努力してきたんですよね？」

「それは、もちろん。…僕は、宮廷楽団に入りたいんだ。駄目な僕でも、誰かを楽しませる演奏をしたいと、思っています…」

「それなら、そんなに自分を貶めるようなことは言わなくても良いのではないでしょうか。少なくともあなたは、立派な志を持ち、そのために頑張っているのですから。その他の欠点を誰に貶されたとしても…、その思いと努力を誇りに思っていていいと、私は思います」

「そう、かな…」

フリッツはまだ自信がなさそうに、けれど少しだけ嬉しそうに呟いた。

美形ではない、と彼は言うが、親しみやすい彼の雰囲気は好きだとテアは思う。

実際、フリッツは確かにディルクやライナルトのような美貌の持ち主ではないが、そこまで醜悪と言うわけではなく、繊細そうな優しいような性格が表れたような柔和な顔立ちで、人好きのするものだ。それに、積極的ではないなどと彼は言ったが、テアを誘ってくれたのは彼自身の積極性によるものだ。

あなどられている、と彼は言うが、本当はそうでもないのではないだろうか。

「…ありがとう」

フリッツは素直に浮かんだ言葉を口にした。

「いえ…、偉そうなことを言ってしまった。申し訳ありません」
テアはかえって恐縮してしまい、また俯いてしまう。
さらり、とテアの長い空色の髪が揺れた。

ちらりと覗き見えた項に、フリッツはどきりとする。

テアは綺麗な少女だとフリッツは思う。性格も控え目で、優しそうだ。皆、彼女のことを警戒しているようだが、もし彼女が貴族で今までに何かを成し遂げていたなら、多くの男性が彼女にダンスの申し込みをしただろう。パートナーの申し込みをしただろう。

そうだ、平民だとか貴族だとか、そういう色んなことは関係ない、とフリッツは強くそんなことを思った。

彼女は僕を認めてくれた。こんな僕を…。

「…だいぶ、身体が自然に動くようになってきたね」

「そ、そうですか？」

まだ幾分かぎこちないが、先ほどよりは足がすんなり動くようになってきている。

「そう言えば君は…専攻は何を？」

「私はピアノです」

「僕はオーボエなんだ」

「へえ…。今度、よろしければ聴かせていただけませんか？」

「喜んで」

その言葉が嬉しくて、フリッツは笑った。心から。

苦痛になるはずだったダンスの授業で、学院での初めての友人ができたテアは、昼食を食堂で済ませると、午後最初の授業がある部屋に、逸る気持ちを抑えながら向かった。

昼休みを挟んでの授業。

それは、教師と生徒一対一で行われるピアノのレッスンだった。

一体一のレッスンなら、教師もテアも疑問や意見を交わしあうことができる。

大きな教室で講義を受けることと同じにはならないだろう。

良い先生であればいいと、テアは思う。

だが、何よりもピアノを弾けるということがテアにとって嬉しいことだった。

掲示板を確認して、指定された練習室に入る。

まだ教師は来ていない…、と思って部屋に踏み込んだテアは、床の上でのびている人影を見つけて、ぎよつと身を引いていた。

人が、倒れて…！？

「うっうん…」

しかし倒れていると思われた人は、うつぶせの状態から仰向けの状態に、ごろつと寝返りを打った。

窓から射す日差しのもと、健やかな寝息を立てている。

寝ているだけだと分かって、テアはほっとした。

だが、この気持ちよさそうに眠っている男性は何者であろうか。

制服でないところを見ると、生徒の付き人として来ている人間か、それとも教師か。もしくは調律師か何かかもしれない。

授業が始まるまでは、もしくは教師が来るまでは寝かせておこう、とテアは思った。

何しろ、あまりにも幸せそうに眠っているのだ。だが彼を起こしてしまいそうで、ピアノは弾けない。

テアは大人しくその辺にあった椅子に座り、授業が始まるまでのしばらくの間本を読んでいることにした。

ピアノに次いで、テアが好きだと思うのが、本だ。

教師という存在を幼い頃から持たなかったテアに様々な知識を教え てくれたのが、本だった。

小説は、見知らぬ世界へテアを連れて行ってくれ、それも楽しかった。

モーリッツのところに行った時、テアが何をしていたかというところ、モーリッツの家の手伝い以外はほとんどピアノか本の時間で占められていたくらいである。

しかしすぐにチャイムが鳴って、授業の始まりを知らせた。

「によわっ」

鳴り響くチャイムに、男性はがばりと身を起こす。

それがあまりにも急で、テアはまた吃驚した。

「やっべー、寝ちまつてたか……」

寝ぼけ眼の男性は、黒髪黒瞳の持ち主だった。その目はくりつとしていて、顔立ちは幼さを感じさせる。どこかのつぺりとしているその容貌に、テアは異国の香りを感じ、同時に既視感を覚えた。

「あの……」

テアは何と声をかけるべきか迷う。

「あ、テア・ベーレンスか？」

何故名前を知っているのか、テアは思って、答えはすぐに相手から提示された。

「来てたなら起こしてくれよ。ま、いつけどな。俺はエンジユ・サイガ。サイガって呼んでくれ。とりあえず、お前の担当になった。よろしくな」

エンジユ・サイガ。

この時になるまで自分の担当教諭の名前を知らなかったテアは驚い

た。

掲示板に掲示されていた用紙には、テアの学籍番号と場所のみ記されていて、教員の欄が空になっていたのだ。

この目の前に笑みを浮かべて佇む、エンジュ・サイガは諸国を飛び回る売れっ子のピアニストである。

雑誌記事でその評判はテアも知っていた。

よくよく見れば、雑誌の写真と同じ人物だと分かる。

だが、エンジュがこの学校の講師として招かれていたとは、知らなかった。

まさか有名なピアニストとこんな風に会うことができるなんて。

平民のテアの担当教諭ですらエンジュという大物ならば、他の生徒たちは一体どんな教師たちに教わっているのだろうか。

テアは半ば茫然としながら、差し出されたエンジュの手を握り、握手を交わした。

エンジュはクンスト出身ではない、外国の人間だ。身長はこの国の男子の平均より低く、雑誌に書かれていた年齢よりずっと若く見えるが、その手のひらは大きく、温かだった。

「テア・ベーレンスです。よろしくお願ひします…」

「うし」

うーん、とエンジュは大きく伸びをした。

彼が心地よさそうに眠っていた時から思っていたが、猫のようだとテアは思う。

「じゃ、早速、何か弾いてみてくれ」

「えっ」

「別にそんな驚くところじゃねーだろ。何でも良い。好きな曲を弾けてよ」

それはそつだ。担当教諭の前で、これから何回でもピアノは弾くこととなる。

だが、あのエンジュを前にして、今まで特に誰かに教わるということのなかった自分が弾くのか。

テアは緊張した。

緊張しすぎて、頭が真っ白になってくる。

それでも何とかピアノの前に座った。

落ち着け、と思うと余計にますます頭がぐらぐらしてくる。

何を弾けばいいのだったか、とテアは考え。

好きな、曲…。

『テアのピアノが好きよ。テアのピアノなら何でも好き』

『でもやっぱり…、この曲は特別ね。あの人もこうやって弾いてくれたのよ、この曲を…。テアによく似て、とても優しい音色だった』

…』

母の言葉が脳裏に鮮明によみがえった。

そう、母が笑ってくれたから。笑ってほしかったから。私はいつでも、あの曲を弾いていた…。

ずっとプレッシャーがテアから消えた。

今でも私は、あなたが幸せそうに笑ってくれることを、願って…。

ポーン、とテアは一音目を鳴らした。

静かな曲の始まり。

そして人々を　穏やかで優しい幻の景色に…誘い込んでいく。

先ほどまで無邪気そうな様子だったエンジユは、テアの演奏が始まると共に表情を消していた。

「月の光」か…有名どころでそう難しくない、弾き手のレベルが分かりやすい曲だ。本当に「好きな曲」を持ってきたんだ…。

そうして曲は進んでいく。

哀しげに、楽しげに。

月光が淡く差し、その中に感情は消えていく。

光は感情をのみこんで、川のように流れていく。

やがて光は　旋律は、たどりつく。

人々の心の中に戻ってきて、温かい光を灯す。

かたり、と思わずエンジユが立ち上がったのにテアは気付かなかっ

た。

余韻を残して、鍵盤から手を離す。

ほう、と弾き終わってから、演奏に集中してすっかりその存在を意識の外にしていたテアは、エンジュに曲を聴いてもらっていたことを思い出した。

はっとエンジュの方に目をやると、彼は立ったままテアの方を凝視している。

「ミスター…？」

テアが声をかけると、彼はようやく動き出した。

大きく手を鳴らして拍手を送る。

「なるほどね」

と、彼はしかし演奏に対する評価は述べず、続けた。

「まあお前なら弟子にしてもいいかな」

「はい…？」

テアはその独白に首を傾げる。

「ん、何となくお前のことは掴んだ」

にっ、とエンジュはテアが置いていかれているのも気にせずマイペースに笑った。

「じゃ、今度はこっちの楽譜、初見で弾いてみてくれ」

「え」

差し出された楽譜を受け取ったテアは、また固くなってしまったのだった。

step 3

初めて学校の授業を受けた一日を、新しい出会いと様々な経験を得ながら終え、テアは全てのレッスン、講義を終えた放課後、講義棟に隣接された練習棟へ向かった。

講義棟はその名の通り、講義のために使用される教室が並んだ建物で、一方の練習棟は防音設備などがしっかりとされており、ピアノやメトロノームなどの楽器や機器などが揃えられた部屋が並ぶ建物である。

エンジュからのピアノの指導は練習棟の練習室で、他の講義形式の授業は講義棟で行われていたのだ。

その並ぶ二つの棟を囲むように、ダンスホールや講堂など、いくつもの施設が設置されているのである。

練習棟の練習室は予約制で、練習熱心な生徒たちですぐに予約はいっぱいになってしまう。

テアは今朝、ローゼに助言を受け、最初の授業に行く前に予約をしていたので、練習棟の入口で早速鍵を受け取るうとした。

授業の際は管理をしている者があらかじめ鍵を開けておくことになっているのだが、授業以外の時は部屋を施錠することになっているのだ。

「すみません、鍵を」

テアは学生証を示した。

鍵を管理しているのだろう、年配の女性は予約表を見、テアの学生証を見て怪訝な顔をした。

「ちゃんと予約なさったのですか？」

「？ ええ、はい……」

テアは首を傾げた。

「ですが、こちらに名前がないんですよ」

「えっ」

「あなたが仰った部屋は他の方が予約なさっていて既に使われています。勘違いなさったのでは？」

「そんな……」

そんなはずはない。

テアは言いたかったが、女性の困ったような、少しだけ疑うような表情に口を噤んだ。

「……あの、それでは、どこか他に開いている部屋はありませんか？」

「申し訳ありませんが、今日はもう予約でいっぱいです」

「……そう、ですか」

テアが落胆を隠せずに肩を落とすと、女性も気の毒に思ったのだらう。

「……次からは、気をつけて予約をするようにしてください」

口調を和らげて、そう言った。

「……はい」

テアは何とか表情を取り繕って、頷く。

その直後。

「あの、もういいでしょうか？ どいてくださりませんか？」

テアの後ろに来ていた女子生徒が、テアを押しつけるようにした。突き飛ばされて、テアはわずかによろめく。

テアを押しつけた生徒は、そんな彼女に見向きもせず、鍵を受け取った。

テアはわずかに悲しげな眼差しを見せて、見えてはいないと分かっていたけれど管理者の女性に頭を下げると、その場を去った。

「お前、今期のパートナーはどうするつもりなんだ？」

放課後、ディルクとライナルトは揃って広い敷地内の青々とした芝生の広がる道を歩いていった。

生徒会役員としての仕事へ向かう途中なのだ。

「やはりピアノリストを…また探してみようと思っている」

ライナルトの問いに、ディルクは考えるようにして答えた。

「お前は、ローゼと、か」

「ああ…」

ローゼの名前に、ライナルトの瞳は優しく細まった。

「俺もお前のように理想の音に出会いたいものだ」

ディルクは心からそう告げる。

パートナーとなった人間とは、コンサートやコンクールで共に出場するなどの機会が増える。

だから、気が合うだけではなく、音を合わせてより楽しい相手、より素晴らしい音楽をつくりだせる相手をパートナーにしたい、と彼は思っていた。

こだわりを持ちつつも、誰とでも素晴らしい演奏ができるのがプロだとは思う。

だが、ディルクには譲れない音があった。

そのために、学生である今だけは…わがままを言いたい。

今までにディルクは、一人の相手とパートナーを組んできた　　と
いうより、一人の相手とパートナーを組んだことがあった。

スキップを経験したディルクがこの学院に在籍して三年目。

そのうちパートナーを組んだ相手が一人。

しかし、ずっと同じ相手と組んできた、というわけではない。

それはどうということなのか。

当然ながら、その一人とは、親友であるライナルトであった。

一年生の前期は、入学したばかりで互いに助けあおうとする二人がパートナーになるのは必然だった。

そして、学校生活に慣れてきた後期。二人は、お互いに様々な相手

と組んだ方が勉強になるだろうと思い、それぞれパートナーを探すことにしたのだが、その時の騒動はひどかった。

一年生後期の時点で、デイルクとライナルトを知らない生徒はいない、というほど彼らは有名になっており、彼らが新しいパートナーを探していると分かると、彼らを慕う生徒たちが次々と彼らにパートナーの申し込みをしたのである。そんな大勢の中からパートナーを選べるはずもなく、二人は登録期間中に登録をしないことを決めた。運に任せようとしたのである。

そうすると、今度は何が起こったかと言うと、二人が敢えて登録をしないということを知った生徒たちが皆、揃って登録しないという前代未聞のことが発生したのだ。登録しなかった場合、学校側がランダムにパートナーを決める。自分がデイルク、ライナルトのパートナーになれるかもしれない。生徒たちはそう考えたのだった。

しかし、結局、生徒たちの思惑に頭を抱えた学校側は、意図してデイルクとライナルトをもう一度組ませた。ランダムに相手を選べば、二人の相手になった生徒を中心にまた何か問題が起これると、それを危惧したのである。デイルクとライナルトも、騒動を巻き起こしたかったわけではない。彼らは学校の決定に大人しく従った。

そして、二年になり……ライナルトはローゼと出会い、彼女をパートナーとした。その時も事件は起こりかけたのだが、ローゼがフォン・ブランシュであるということが幸いした。ブランシュ家は昔から「クンストの剣」と呼ばれてきた家柄だ。当主である父親のモーリッツから剣、武術を学んできたローゼに下手に抗議をしたり手を出したりする生徒はそうそういなかった。また、ブランシュ家の門弟である生徒たちも多く存在したのだ。

一方デイルクは、学校側に特例を認めさせた。つまり、自分はパートナー制度のつくられた目的を、パートナー制度なしに果たせているので、パートナーは必要ない、と。学校側は、少し前の騒動の経験から、デイルクにパートナーをつくらずにいることを認めざるを得なかった。

だがそれは、ディルクがパートナーをつくることを放棄するものでも、禁止するものでもない。あくまで、望む者がいなければつくらなくても良い、というものだ。

ディルク自身は、去年一年間特例の中でパートナーをつくらずにいたが、しかしパートナーを欲さないわけではなかった。

「またピアノ専攻科の音を聴いて回るのか？」

「…不本意だが、こっそりとな」

二年の前期ではパートナーをつくることを諦めたディルクだったが、後期は積極的に動いた。ディルクはヴァイオリンと指揮を専攻している。彼は彼のヴァイオリンに伴奏をつけてくれるピアニストを探しており、彼の探す音の持ち主がいらないか、練習を見学させてもらっていたのだが、そこでもまた不本意なことが起こった。

ディルクを意識するあまり、相手の生徒が演奏に自分を出しきれない、というのはまだいい。だが、普段とは明らかに違うような媚を売るような演奏を試みたり、ピアノ専攻科同士での関係が悪くなったり…、ディルクは途中でパートナーを探すのを断念せざるを得なくなってしまうた。

「そう言えば、学院長がまたエンジユ・サイガを学院に呼んだらしいな」

ディルクの台詞に笑みを零したライナルトは、ピアノと言う単語にそのことを思い出したらしい。

噂で聞いたその名を出すと、ディルクも聞いていたのだろう、肯定した。

「ああ」

頷いてディルクは、視線の先に見知った姿を見つける。

ディルクの視線にライナルトはすぐに気付いた。

その先にいたのは、テアだ。

「テア！」

ライナルトは、友人であるテアが浮かぬ様子で歩いているのに、声をかけていた。

ディルクは親友が躊躇いもなく呼んだのに、驚いた様子を見せる。テアは呼びかけられて、すぐに二人の存在に気づいたようだった。どこかとぼとぼと歩いていた足を止めて、顔を上げると、ディルクとライナルトを認める。

「こんにちは」

テアは二人に挨拶し、二人との距離を詰めようとして。

何も無いところで、転びそうになった。

ひやり、としたディルクが、咄嗟に長いコンパスを利用してテアを支える。

「……大丈夫か？」

こける、と思つたテアは、衝撃がないのに首を傾げ、耳元で聴こえた美声に身を固くして、ぱつと後ろに下がった。

「す、すみません。ありがとうございます。その……」

ディルクに支えられた箇所が変に熱くて、テアは動悸がするのを抑えられない。

けれど、何とか彼女は動揺を抑え、口を開いた。

「あの、昨日も…今朝も、」

「いや…。練習はできたか？」

「はい」

二人のやり取りに、ライナルトが驚いたような表情を見せる。

「何だ、二人とも知り合いだったのか？」

「そう言うお前こそ」

そう言えば、ライナルトにもローゼにも、ディルクに二度も助けられたことを言っていなかった、とテアは思い当たった。

ライナルトが先に、自分の方の理由を述べる。

「テアはローゼの幼馴染みだ」

「ああ…それで」

「お前たちは、いつの間に？」

「昨日の迷子だ」

簡潔な言葉だったが、ライナルトは非常に納得できた。

テアは普段落ち着いて見えるが、時々どこか抜けているところがある。

しかも、エーベルハルトが声をかけていたというのがよく分かってしまった。

「その上今朝は、生徒会長に練習室の鍵も開けていただいでしまった…」

テアは恐縮する。

生徒会長、と呼ぶテアにディルクは苦笑した。

「そんなにかしこまらなくて良い。ディルクと呼んでくれ」

「えっ、いえ、そんな」

無理だ、とテアは思った。

「そのかわり俺もテア、と呼んで良いだろうか？」

「は、はい、それはもちろん」

かすかに頬を染めるテアは可憐な風情だった。

ライナルトは親友を見やり、罪な男だな、と思う。

「今朝ジョギングから帰るのが遅かったと思ったら、そういうことか」

「ああ」

ディルクは肯定する。彼は毎朝ジョギングすることを日課としていた。そこから帰ってきたところで、テアを見かけたのだ。

そうして一通り、お互いの事情を了解したところで。

「…それでテア、こんなところでどうしたんだ？」

テアの表情に翳りがあるのを読み取っていたライナルトは、そう尋ねていた。

「図書館に向かおうかと思っていましたが…もしかして方向が違いますか？」

「……そうだな。そちらの方向には泉の館しかない」

ライナルトが正直に答えると、テアは誤魔化すように微笑んだ。

「また私、やってしまいましたね…」

だが、ライナルトが聞いたかったことはそういうことではないのだ。

「今の時間ならば、サークル活動が始まっている頃だろう。図書館に行くのも良いと思うが、そちらの見学に向かってみてはどうだ？」
ライナルトの意図を汲み取りつつ、ディルクは探りを入れる意味で尋ねてみた。

「あ…、いえ、それはもう行ってみたんです。それより、お二人はどこかへ向かわれる途中では？ その、私などがいつまでも時間をとらせてしまっっては…」

ディルクの問いに首を振って、テアは身を引くような仕草を見せた。ディルクとライナルトは、テアの様子にびん、とくる。

出会った時の様子から気付いていたことではあるが、何かあったらしい。

「俺たちは大丈夫だ。それより、何かあったのではないか？ もし困ったことがあったなら、話してほしい。無理にとは言わないが…、生徒会長としても、生徒たちの問題をそのままにはしておきたくないんだ」

ディルクはテアの負担にならないように、声を和らげて告げた。

「……」

ディルクの言葉に、テアの瞳は揺らいだ。

覚悟は、してきたつもりだった。

弱音は吐きたくなかった。

けれど、白藍の優しい瞳に促されて、テアは口を開いてしまっていた。

新しい環境で、いわれのない悪意を向けられて、やはり気弱になっ
てしまっていたのかもしれない。

「あの…、本当に大したことではないのですが…」

前置きして、テアは淡々と事実を述べ始めた。
練習室の予約を確かにしたはずなのに、取り消されていて練習ができなかったこと。

ならばと思っ
て寮の方の練習室に行ってみたがそこも予約で埋まっ
ていて。

その後、練習できなかった代わりに彼女はサークルの見学に向かったのだが、どこでもあまり良い反応をされなかった。

「……」
テアの語る内容に、ディルクもライナルトも眉を寄せていた。

ここまで生徒たちが特別入学をしてきた者に対して過敏になっているとは思わなかったのだ。

「……予約の取り消しとは、嫌がらせにしては悪質だな」

「でも、もしかしたら私の勘違いかもしれないし……、予約の取り消しもすっかり間違っただけかも……」

テアはそう言うが、ディルクとライナルトはそれはないだろうとちらりと視線を交わした。

予約した時はローゼもいたと言うし、予約は紙にインクで名前を書くのだ。間違いなどそうそう起こるはずがない。予約の件は故意の嫌がらせだ。

だが、テアに対してはそのことをはっきりと告げず、ディルクは考えたことを述べた。

「もしかしたら、エンジュ・サイガが原因かもしれないな」

「え……」

その推測に、テアは驚いた顔になる。

「テアのピアノの指導教員は、エンジュ・サイガなのだろう？」

「そうですね。ですが、どうしてご存じなのですか？ 掲示板にも書かれていなくて、私も今日の午後に初めてお会いして知ったんです」

「誰かがテアとエンジュ・サイガが練習室にいるのを見たようだ。」

すでにほとんどの生徒に噂は知れ渡っていると思うぞ。何といても、エンジュ・サイガだからな」

「……やはり、もしかしなくても、さすがにエンジュ・サイガほどの人はこの学院にもそんなにいない……んでしょうか？」

ひやりとしながらテアが尋ねると、先輩二人は揃って頷いた。

「確かにこの学院には優秀な人材が教員も生徒もどちらも、どこよりも揃っているが……」

「さすがに、エンジユ・サイガほど現役で活躍している人間を何人もというのは…」

そう言えば、他に掲示板で見た教員名は知らない名前が多かったよ
うな気がする、と今さらながらテアは思い返した。

「しかもエンジユ・サイガはなかなか弟子をとらないことで有名だ
からな。珍しくて噂にもなるだろう」

「そ、そうなのですか？」

「ああ」

もしかしてあの授業で私は、試されていた…？

テアは授業でのエンジユの様子を思い返し、青くなった。

もしテアを生徒としないと判断されていたら、どうなっていたのだ
ろうか…。

「…けれどどうして、学院は私にエンジユ先生のような方をつけて
くださったんでしょう……」

「それは…学院長にでも訊いてみなければ分からないな。だが、特
別入試でも実技があったはずだから…、そこでテアにはエンジユ・
サイガを教師とするのが良いと考えたのかもしれない」

見込まれたということだ、とライナルトは言うが、テアは自信がな
さそうに首を傾げただけだった。

だが、ディルクには分かる。テアのピアノを聴いたことはないが、
この学院に入学し、エンジユ・サイガに認められたということは、
かなりの才能の持ち主であることに間違いがない。本人にその自覚
がないのは、幸いなのか不幸なのか…。

「だが、そのせいで生徒たちの妬心を煽ってしまったようだな」
嫌がらせは、生徒たちの悔しさ、やっかみから来たものだろう、と
結論できて、ディルクは嘆息するように告げた。

「…それに、私も少し迂闊だったかもしれない」
ライナルトは反省するように口を開く。

「今朝、食堂で少し目立っていたようだからな」

自惚れではなく、ディルクと同じように自分が目立つ存在だと一年

の時の騒動で認識していたライナルトは、あまり特定の人間と深く
かかわらないようにしてきたのだが、ローゼの親友であるテアに対
しては少し距離を近くしてしまっていた。

ライナルトを慕う人々がそれを見て、嫉妬を覚えることは、想像に
難くない。

「いえ、そんな。ライナルトがそんな顔をすることはありません。

私は、あなたが普通に話しかけてくださって、本当に嬉しかったの
ですから」

悔やむようなライナルトに、テアは焦った。

デイルクも親友の肩にぼん、と手を置く。

「ああ。友人に話しかけることは悪いことなどではない。有望な生
徒にそれに合った教師をつけることも、正しいことだ。…サークル
のこともそうだが、これは少しずつ生徒の意識を変えさせていくし
かないだろう」

「…そうだな」

生まれた時から存在している階級意識や差別を全て払拭することは
難しいが、少しずつでも変えていくために、努力が必要だ。

デイルクは変えていくために力を尽くしたい、と強く思う。

「だがとりあえず、それはまた今から多くを話し合うこととして…。
このままピアノの練習ができないのが一番つらいだろう。朝なら寮
の練習室が使えるだろうが、それだけでは足りないだろうし…」
このまま嫌がらせが続いたら、と思うだけでテアは暗い気分になっ
た。

ピアノに触れる時間が圧倒的に少なくなってしまう。

「テア、よければ泉の館のピアノを使わないか？」

デイルクの提案に、落ち込んでしまっていたテアは目を丸くした。

「泉の館…というと、生徒会執行棟…ですよね？ 一般生徒が立ち
入って良いもののですか？」

「もちろん。たまに役員でない知り合いに仕事を手伝ってもらっ
ともあるんだ。全校生徒でつくられているのが生徒会、だしな」

「泉の館…のピアノ、を」

「みるみると、テアの顔に喜色がのぼっていく。」

「本当に、よろしいのですか？」

「ああ。防音設備が練習室ほどではないので、少し音は漏れやすいが、そう遅い時刻にならなければ大丈夫だろう。あまり弾かれることは多くないが調律はされてははずだし、今日は特に役員もいない。いたとしても仕事をする階と違う階に部屋があるから、そんなに気にすることもないだろう」

「なるほどな。…そういえばピアノがあつたか。すっかり忘れていたが…」

「お前はあまりピアノは弾かないからな。俺はたまに仕事の合間の休憩で使うが…」

ライナルトに答えて、ディルクはテアに向き直った。

「…どうだ？」

「是非、使わせてください！」

喜びを湛えた瞳で強く、テアは言った。

「それでは、これから練習室が使えないような時は泉の館に行くと良い。三階の、一番の奥の部屋だ。多分、迷わずにいけるだろう」
ディルクがわずかにからかいを込めて言うと、テアはまた少し頬を染めた。

「…はい。ありがとうございます。せい…ディルク…先輩には、本当に何度も…」

「気にすることはない。困った時はお互い様と言っだろう。それに、同じ学校にいるよしみ いや、同じ教師を持ったよしみもあるしな」

意味深なディルクの台詞に、テアは不思議そうな顔をした。同じ教師に教わっているとえば、この学院の者は誰でもそうだろう、と思っただのだ。

「…ディルクも、一年の時はエンジュ・サイガに教わっていたんだ」
疑問に答えをくれたのは、ライナルトだった。

「そうなのですか！？ でも、ディルク先輩は、ヴァイオリンと指揮を専攻していると、昨日の挨拶では…」

「呼び捨てでいい。…一年生の時は、ピアノとヴァイオリンを専攻していたんだ。でも一年でピアノは止めてしまったよ」
ディルクは苦笑交じりに言う。

どうして、と喉まで出かかった言葉をテアは呑み込んだ。テアは知的好奇心が強く、何でもつい訊いてしまうところがある。しかし彼女は同時に、深くは踏み込まない慎重さと聡明さを持ち合わせていた。

「エンジユ先生はスパルタだろう。練習、頑張れよ」

「は、はい」

ライナルトはちらりと時計を見る。ちょうどいいくらいの時間だった。

「俺たちはそろそろ行くが、また何かあったら、相談してくれ」

「…時間をとらせてしまつてすみませんでした。お二人とも、本当にありがとうございました」

テアは心をこめて二人を見送ってから、早速泉の館に向かった。

二人は、テアがいつまでも二人を見送るためにそこから動きそうにないのを見越して、なるべく遠ざかってから、彼女が泉の館の方へ向かうのを見守る。

「素直な良い子だ。なるべく早く問題を解決してやれるといいのだが…」

テアに悪意が降りかかれば、ローゼも心配するだろうし、また何かに巻き込まれるかもしれない。それを含めてのライナルトの心配だった。

「ああ。…だが、焦つてもどうにもなるまい。できることを少しずつやっていこう。まずは、今からの会議だな」

「そうだな。先日学院長からもテアについては気をつけてくれという話があったが、まずは教職員と生徒会役員で意識をまとめるところから始めることが重要か」

今二人が向かっているのは、教職員棟の会議室だ。

そこで、入学式の反省と、今後のことについて、教師と生徒会役員で会議することになっているのである。

二人は、他の議題へと話を移しながら、並んで行く。

そんな二人を追う熱い視線が複数あったが、気付いていても二人は何も言わない。それが当たり前になってしまっていたからだ。

ディルクは、ライナルトと話しながらふと一瞬、テアを思い浮かべた。

今は、さすがにちゃんとピアノに辿り着けているだろう、な
…。

からかわれて頬を染めていたテアを思い出して、我ながら人が悪いとは思ったが、何となくおかしくて少しだけディルクは笑った。

interlude

暗くなつて、泉の館から寮の自室に戻ってきたテアは、ペンを片手に便せんに文字を綴っていた。

親愛なる私の「あしながおじさん」へ

几帳面で丁寧な字だ。

テアは手紙の相手を「おじさん」と親しみを込めて呼んでいた。

「おじさん」は、テアがシューレ音楽学院で学ぶことができるように推薦状を書いてくれ、学費を出してくれている人だ。

だからテアは、彼を自分の「あしながおじさん」だと思っている。ただ、「あしながおじさん」と言うが、小説の『あしながおじさん』の主人公のように、援助してくれている人の名前も顔も知らないということはない。

テアは、「おじさん」のことをよく知っていた。

前略

いかがお過ごしでしょうか。

私の方は、昨日、無事入学式を終えて、シューレ音楽学院に入学することができました。

学院はとても広く、まだまだ全貌を把握しきれません。

昨日は講堂へ行く時にうっかり迷ってしまい、生徒会長のミスター・アイゲンに助けられました。

彼はとても美しい人で、カリスマ性があり、生徒みなに慕われています…。

そこまで書いて、テアは我に返ってディルクに助けられたくだりを消した。

昨日は講堂へ行く時にうっかり迷ってしまいました。何とか入学式には間に合うことができました。

講堂も、他の建物もとても美しい建築で、見ていて飽きません。

寮の部屋も広くて綺麗で、とても驚きました。

驚いたと言えば、入学式と入寮式では今まで見たこともないような豪華な料理が出て、それにも驚かされました。でもこんなことを言うとかツクさんに怒られてしまいそうですが、私はローゼの手料理の方が好きです。ローゼが学院に通い始めてからは食べる機会は減ってしまったのですが、彼女の料理は本当に絶品なのです。学院ではローゼは料理をつくるサークルに入って、さらに料理の腕を磨いているようです…。

書きながら、いつもながら幼い子どもの作文のようだと思ったけれど、彼女は続けた。

ローゼとは寮で同室になることもできました。

ローゼはしっかりしていてとても頼りになるので心強いです。

私も彼女の力になることができればよいのですが…。

そう言えば、まだローゼのパートナーについては話したことがあります。ませんでしたね。

ローゼのパートナーは、学院の生徒会で副会長を務めているライナルト・アイゲンという男性です…。

そうして続けたライナルトの説明から、またディルクの名前が出そうになって、テアは慌てて軌道修正した。

そして今日は、早速初めての授業を受けてきました。

ここに来てから何もかもが私にとって初めてで、授業もとても興味深いものでした。

その中でも一番勉強になったのは、やはりエンジユ・サイガ先生の指導でした。

おじさんはもしかしたら会ったことがあるのかもしれませんが、サイガ先生が私のピアノの指導をしてくれることになったのです。

私はとても驚いて…けれどとても嬉しかった。

世界で活躍しているピアニストに直に教えてもらえるということが、本当にあるなんて…。

サイガ先生は、普通に話している時は猫のように奔放で屈託がないのに対し、指導の時はとても厳しいのですが、これからもピアノのレッスンをしっかり受けていきたいと思います。

それから、苦手だと思っていたダンスの授業で、新しい友人をつくることができました。彼は貴族なのですが、私を同じ学院の生徒として対等に見てくれたのです。これから少しずつでも、友人をつくっていけたら…。

今の状況では儂い希望だけれど。

テアは思いながら、続ける。

おじさんは、この学院に通っていた時、どんな風にすごしていましたか？

今度よければ聞かせてください。

これから、たくさんのことを学んでいくのがとても楽しみです。

おじさん、私がここにいられるのはあなたのおかげです。

本当に感謝しています。

またお手紙書きます。

少しずつ肌寒くなってきましたが、お身体に気をつけて。

草々

テアは読み返し、拙い文章に恥ずかしくなったけれど、出してしま
うことに決めた。

テアは手紙を出すことに慣れていない。

それでも「おじさん」は、いつもすぐにテアに手紙の返事をくれ、
ありがとうと言ってくれる。

テア心をこめて宛先を記し、用意してあった切手を貼った。

問題は簡単に解決しそうにはないけれど。

おじさん、私は頑張ります…。あなたに追いつくためにも…。

進級し、新しい年度が始まって数日。

放課後、デイルクは泉の館の裏にある、その名称の元ともなった泉にやってきていた。

彼の手にはヴァイオリン・ケースがあり、近くには誰もいない。

しかし、そのケースを開くことなく、彼は芝生の上にごろりと横になつた。

少し、疲れたな…。

思いながら、ぽかりと白い雲の浮かぶ空を見上げる。

去年のパートナー登録期間中もそうだったのだけれど、この時期デイルクにはパートナーの申し出が凄まじい数襲い、それにきちんと返事をしようとするのに労力を費やすのだ。

対人関係を適当にしないデイルクだから慕われているのだが、そのために苦労することもある。

今日は空いた時間にピアノ科の練習を（こつそり）聴こうと思つていたのに、人に囲まれているうちに結局果たせなかつた。今も逃げようにして、ようやくここまで一人で来られたのだ。

このまま、またパートナーはできないままかもしれない。

だがデイルクには、どうしても在学中にコンサートで演奏したい曲があつた。しかもそれは一人ではできないものなのだ。

彼の卒業まで、機会はそう多くはない。

だから少し、デイルクは焦りを覚えていた。

彼は横になつたまま、陽射しを遮るようにファイルから楽譜を取り出す。

デイルク自身が作曲したものだ。

タイトルは 「夜の灯火」

この曲をつくることになったきつかけは、もう十年ほど前のことになるだろうか。

王城の聳えるその城下町で祭が開催されており、その夜ディルクはひとり町に繰り出して、祭を楽しんでいた。そこで彼は、一人の少女がピアノを弾くのを聴いたのだ。

それは祭のために設置された特設ステージで、とびこみで人々かわるがわる自分の演奏を披露していいという趣向のものだった。その少女のピアノの、澄んだ音色の美しさに、温かさに、優しさに、ディルクは茫然と立ち尽くしてしまっていた。

　　こんな、音が…。

輝くような旋律の波に包まれて　　柔らかな余韻を残してしかし、音は夜の闇に溶けていく。

聴衆の拍手に、はっとディルクは我に返った。

曲が終わり、少女は立ち上がってお辞儀していた。

もう一曲と聴衆が言うのに困ったように笑いながら首を振って、少女は祭限定の仮のステージから退いていく。

ステージの下で、少女の母親なのだろう女性が待っていて、笑顔で少女を迎えていた。

少女も嬉しそうに母親に近付いていく。

二人は明かりを持っていくわけではないのに、ディルクの目に眩しかった。

ディルクは母親とあんな風に温かな眼差しを交わし合ったことはない。

ディルクは焦がれるように手を伸ばして、二人に近づこうとしたけれど、人混みに邪魔されて。

親子はやがて、大勢の人の中に紛れて消えて行ってしまった。

少女のピアノとあの時の親子の優しいまなざしをイメージして…つくらずにはいられなかったのがこの、「夜の灯火」。

この曲のピアノには、ディルクのイメージに合う音が、どうしても欲しかった。

しばらくディルクはそのまま過去を思い返してじっとしていたが、やがてはっと身を起こす。

ピアノの音色がどこからか聞こえてきたのだ。泉の館からだった。

他棟の練習室からというのはいない。練習室はどこも防音がつかりしているし、ここからは距離がある。

この音……。

ディルクは誘われるように立ち上がると、泉の館に入って行った。響く音色を奏でているのは誰だ。

生徒会役員ではない。彼らの音は知っている。

テア・ベールレンス……なのか……？

しばらくこのピアノを使うといい、と言ったのはディルク自身だ。階段を二段とばして上がって行き、間もなく彼は三階の奥に行き着いた。

窓ガラス越しに中を見ることができた。

そこにはやはり、テアがいた。

滑らかな指づかいは普段からの彼女の練習量を物語っている。

どうやら彼女はエンジュに出された課題曲の練習をしているようだ。

一生懸命な様子である。

そんな彼女の紡ぐ音にディルクは。

彼の理想とする音を、聴いた。

気を散らしてしまうかと思ったが、そのままそっと聴くというもの何となく気が咎める。

ゆっくりと彼女のピアノを聴きたいと、ディルクは部屋に入っていた。

ドアがからりと静かに開かれると、テアは気付いて手を止めた。顔を上げて、ディルクと目が合う。

「あ…、こんにちは。…私のピアノ、お邪魔でしたか…？」

テアはひどく恐縮している。

彼女のピアノは素晴らしいのにどうしてこつも自信がない様子なのだろうか。

彼女の瞳は落ち着いて理知的な色をしているのに、謙虚すぎるのだ。ディルクはそんなテアを安心させるように微笑んだ。

「いや…違うよ。お前のピアノが聴きたくてきたんだ。ここにおいて聴いていても良いだろうか」

「え…」

思わぬ言葉にテアは驚いた。

「構いませんが、ディルク…さんに聴いていただくほど大した演奏は…」

「呼び捨てでいいと言っているだろうか？ 俺は、お前のピアノの音が綺麗だと思う。俺のことはいいものだと思うって練習してもらえばいいから…ここにいてることを許してくれないだろうか」

「……はい」

ピアノの音を評価されてテアははにかんだように微笑んだ。

ディルクをいないものだと思うことなどできそうにないが…。

「本当に拙いですが…、それでは練習を続けさせていただきます」

「ああ…」

テアがピアノに向き直って、ディルクは聴きやすい位置にある椅子にゆったりと座ってテアのピアノを聴いた。

幼い夜に聴いた、記憶の中の優しい音と重なって、テアの音がディルクを満たした。

テアはやや駆け足で、寮の自室に戻って行った。

少し走ったせいなのかどうか、テアの顔は紅潮している。

あの方といると、私はどうも落ち着かなくなる…。

夕刻になって、夕食の時間も迫ってきたからと、テアは今日の練習

を終えた。

ディルクは、懐かしむような不思議な笑顔を見せて、ありがとう、と呟いて玄関まで送ってくれたのだ。

ここに来てまだ数日しか経っていないが、他の生徒がディルクのことを話すのはよく聞いた。

生徒は誰もが皆彼を尊敬し、慕っている。

教師も彼に一目置いている。

そして彼は、出会ったばかりの、平民であるテアに、何度も手を差し伸べてくれた。

出会って数日なのに、警戒心の強いテアがこんなにも心を揺らすほど、彼は誠実な人間なのだろう。

彼の側において緊張して、けれど不思議に心地が良いのは、彼が皆の尊敬を集めている人で、そして私も彼のことを尊敬しているからなのでしよう…。

そんな彼が、自分のピアノを聴きたいと、ずっと耳を澄ませていてくれたのだ。

嬉しかった　とても。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさい」

テアが部屋に入ると、ローゼが迎えてくれた。

「また泉の館で練習して来たのですか？」

「はい」

テアは練習室の予約がとれずにいたことをローゼに話していた。幼馴染であるローゼに隠し事は難しい。心配させると分かるので全てを赤裸々にはしたくないのだが、隠していて知られてしまった時のローゼの心情を考えると打ち明けずにもいられないのだ。

「私も今日は調理部でクッキーを焼いて来たんです。夕食の後、いっしょに食べましょう」

「ええ、楽しみです。…ライナルトにはもう？」

「はい」

予想通りの返事に少しテアは笑った。

「どうして笑うんです？」

「いえ…、ローゼは本当に可愛いですよね」

「何を…」

ローゼは顔を赤くした。

「私にも、ローゼのようにパートナーが見つかるの良いのですが…」

「…皆の様子は相変わらずなんですか」

「残念ながら…。でも、フリッツだけは話しかけてくれるんです。

この前は、サイガ先生が担当になったことを知って、感心されてしまいました」

「ああ、彼は、素直で良い人ですからね」

フリッツ・フォン・ベルナーを、ローゼは知っている。彼女はあまり社交界に積極的に参加しているわけではないが、それでも何度か行ったことのあるパーティーでフリッツとは顔を合わせたことがあった。純僕そうな青年で、好感が持てる。ただ、後継ぎである彼の兄に存在感がありすぎて、若干影が薄いところがあるのだ。本人もそれを気にしているようだったが…。

「フリッツとパートナーに、ということは全然？」

「それは　そう言えば、考えたことがありますでした…」

何となくローゼはフリッツが気の毒になった。彼をそうよく知っているわけではないが…何となく。

「けれど、これ以上彼に迷惑をかけるのも…。私と言葉を交わしているせいで、すでに迷惑をかけてしまっているのです」

「そんなことを言っていたらパートナーができませんよ」

「……自分たちで選ばずに登録せずにいて、ランダムに決められれば、仕方のないことだったと相手の方が周りに何かを言われることはないのではないかと考えてしまっただけ…」

つまり最初から諦めモードということか、とローゼは腹立たしい気分になった。

「そんな弱気でいてどうするんです？　前期を共に過ごすことにな

るパートナーなんですから、ちゃんと選ばなくては駄目です。ちゃんと探して駄目なら仕方ありませんが…。テア、貴方は自分のためにこの学校に入って学ぶことを決めたのでしょうか？」

「はい」

「それならば、自分のためにパートナーを選ばなくては。周りは関係ありません。周りに何か言われたら、二人で乗り越えればいいんですから。ね、ちゃんと自分が組みたいと思える相手を探してみてください。私も協力しますから」

「探して見つかったても断られるかもしれませんが…」

「その時は慰めてあげます」

力いっぱい励ますように言われて、テアは苦笑した。

パートナーに関しては諦める気持ちが強かったが、もう少し学院生活の中で考えてみよう、と思う。

「登録期間が終わるまで…頑張ってみます」

言いながら、組みたい相手か、とテアはふとディルクを思い出していた。

「ただいま」

ディルクは、テアを送って、寮の自室に戻っていた。

彼に割り当てられた部屋は二人部屋で、当然の如くルームメイトはライナルトだった。

学年が上がると一人部屋を希望することもできるのだが、一人部屋だと二人部屋よりも経費がかかるので、二人は利害の一致を見て二人部屋を希望したのだ。

「お帰り。ヴァイオリンの練習をしていたのか？」

「ああ、いや…」

ディルクは言葉を濁す。

珍しく発言を躊躇うようなディルクの様子に、おや、とライナルト

はわずかに首を傾げた。

「何かあったのか？」

「……イメージ通りの音を見つけた、と思う」

「それは 良かったじゃないか」

ピアノ科の音を聴くのにディルクは苦戦しているようだったのに、と急展開にライナルトは目を見開いた。

「ああ」

「もうパートナーの登録はしてきたのか？」

「話が飛ぶな」

ディルクは苦笑した。持っていた鞆とヴァイオリンをいつもの場所に置きながら、ベッドに腰かけているライナルトに答える。

「まだパートナーの申し込みもしていない」

「…慎重だな」

「慎重にもなる。俺の相手は 苦勞するだろうからな」

「だが、お前から申し込まれれば誰でもうんと言っただろう」

「そうか？ もうすでに相手がいる者であつたらどうする」

「その心配があるならなおのこと、早くに申し込むべきだな」

「それは…、そうなのだが…」

「相手に何かあるのか？」

「いや」

デアのピアノはまさに理想の音だった。

彼女をパートナーとしたい、と彼女の練習を聴いていて強く思った。しかし、今でさえ苦勞している彼女にディルクが接近すればどうなるだろう。

「それともお前、もしかして、怖いのか？」

「怖い？ 何がだ？」

ライナルトと少し距離を置きながら向き合つようにディルクは同じように自身のベッドに腰かけた。

「断られるのが、だよ」

不意を突かれた気がして、ディルクは黙り込んでしまった。

そんなディルクにむしるライナルトが驚く。

ディルクは相手が誰であれひるまずすぐに向かっていく性質だ。それなのにそんな彼がどこか足踏みをしているように見える。

「…もしかしたら、それも少しはあるかもしれんな」

ディルクは己の心を振り返り、認めた。

本当に、珍しいことは起こるものだ。とライナルトは思う。

「…数時間で随分と執着したものだ。しかし、かけがえのない出会いとはそういうものかな」

「執着…と言うほどではないと思うが。そうだな　数時間などで

はない、もう何年も重ねてきた思いだからな…」

あの音には、何年も何年も、焦がれ続けて、ここまで来た。

逃がしたくないという思いが強く、そのせいで逆に離れていってしまふことが他のことよりずっと怖いのだろう。

「手に入れたいなら後悔する前に行動した方が良い」

「…そうだな」

ディルクは頷いた。

「明日、また会いに行くよ」

あの音に　彼女に。

「…テア」

名前を呼ばれて、テアは顔を上げた。

昼休み、彼女は図書館の一隅に座って本を広げていた。

最近彼女の昼休みの行動は、食堂で昼食後図書館へというものに決まりつつある。

「デイ…ルク」

顔を上げた先にディルクの姿があつて、驚きに思わずテアは立ちあがつていた。

「敬称なしで呼んでくれたな」

意識せずディルクが微笑んだので、一瞬テアはそれに見とれた。

「いえあの…すみません」

「謝るところではないが？ これからもそう呼んでくれ」

テアは少し困つたような表情を見せたが、こくりと頷いた。

「……はい。…あの、こちらには何か調べ物をしに？」

「いや、お前に会いにきた」

「え……」

ディルクに促されてテアはまた座り、それを見てディルクもテアの向かいに座つた。

人の少ない静かな図書館の隅で、二人は小声で言葉を交わす。

「読書の邪魔をしてしまったってすまないが、少し話をしてもいいか？」

「ええ…はい」

テアは頷く。自分に会いに来たとは一体どういう意味だろうか、と嬉しくも疑問に思いながら。

「今日も泉の館に来るか？」

「そうさせていただけると嬉しいのですが…何か問題でも？」

「そう悪い方に勘ぐるな。俺の方が、お前に来てほしいと思っ
たんだ」

「え……」

「またお前のピアノを聴かせてほしい。だから、今日も泉の館に
来てほしいんだ」

「は……はい」

まっすぐにテアを見つめて語るディルクの言葉に嘘はなく、テアは
顔が熱くなった気がして俯いた。

「また……行かせてください」

「良かった。……それで、もうひとつ、練習の邪魔をしまして申
し訳ないのだが、この曲を弾いてもらえないだろうか。もちろん、
完璧でなくて良い。できるところまでで良いから……」

「『夜の灯火』……」

受け取った楽譜を、丁寧にテアは見ている。

「……聞いたことはありませんが、綺麗な旋律ですね。ストーリーが
あって……。あなたがつくられたものなのですか？」

「俺だよ」

「え？」

「その曲は俺が作曲したんだ」

「作曲もなさるのですか……」

テアは驚いて楽譜とディルクを交互に眺めた。ディルクは聞いている
だけで本当に様々な才能に恵まれていると思う。一年の時はピ
アノとヴァイオリンを掛け持ちで専攻し、今はヴァイオリンと指揮を
専攻。そんな風に複数の専攻を持つというだけで普通は考えられな
いことだというのに。

「そのピアノ譜をお前に弾いてほしいんだ。頼まれてくれるか？」

どうして私に、とテアは思ったけれど、この曲を弾いてみたい、と
思ったので素直に頷いていた。

「はい。弾かせてください」

「　ありがとう」

また微笑まれて、ときどきとテアは視線を逸らした。

デイルクは美しい。美しくて、眩しい。

だから直視できない、と思う。

「では放課後に、よろしく頼む」

「はい」

二人は約束を交わして別れ、テアはその後は本には手をつけずに、じっと渡された楽譜を見つめていた。

放課後まで、あつという間だった。

デイルクが全ての用事を終えて、少し遅くに泉の館に向かうと、すでにテアはピアノの前で練習を始めていた。

「お疲れ様です」

デイルクが入っていくと、テアは手を止めて笑顔で振り向く。

何となくほっとして、デイルクはお前も、と手を上げた。

「…それでは早速、弾きますか？」

「ああ、頼む」

「はい」

テアはすう、と息を吸って吐き、気持ちを落ち着けた。

デイルクの存在を感じて緊張するが、それは不快なものではない。

テアは「夜の灯火」を弾き始めた。

テンポの良い始まり。浮き立つ心。

ふっ、と過去の情景が思い浮かんで、デイルクははっとした。

瞬く間に、その音に、引き込まれていく。

曲の中で、またその旋律に出会い、驚き、「彼」は魅入られる。

ほとんど楽譜を見ていない…。もう暗譜したのか…？

彼はその旋律に近づこうとする。しかし、手を伸ばしても届かない。デイルクは思わず、ヴァイオリンを手に取っていた。

彼は既に楽譜がなくともヴァイオリン部分を弾けるようになってい
る。

ディルクが不意に奏で始めてテアは驚いたようだったが、ピアノを
途中で止めはしなかった。

楽しい。こんな風に誰かと音を重ねることができると...

ディルクの音は、力強く、それでいて優しい。

ぴたり、とテアの音に寄り添って響いていた。

そうして、旋律の表すストーリーは進む。

やがて消えゆく音。

音は、温かな眼差しの方へ去っていくようにする。

行くな、と「彼」は引き止めようとする。

音と「彼」の視線が...交わる。

不可思議な交錯。

温かく、優しく、悲しく、寂しく、切ない視線が交わり、やがて全
てが闇に溶けゆく。

しかし、その闇の中には...光が。

ゆっくりと最後の音が消えていく。

二人はしばらく音の余韻に酔った。

言葉に表せないこの感情は...何だろうか。

ディルクがゆっくりとテアを見ると、時が動きだした。

テアもそつと顔を上げて、ディルクを見る。

「あの...ありがとうございます」

先に口を開いたのは、テアだった。

「こんな演奏ができるとは思わなくて、何というかとても...」

「礼を言うのはこちらだ。...お前がこの学院に入学してくれて良か
った」

「.....！」

そんなことを言ってくれる人がいるとは思わず、テアは息を呑み、
胸が熱くなるのを感じた。

「テア…、俺とパートナーを組んでくれないだろうか」

これは夢なのかもしれない。

テアは思った。

あんなにも満たされる思いのする演奏ができて。

しかも音を重ね合わせたのは尊敬するディルクで。

その彼が、テアをパートナーにと…。

テアはだが、これは夢ではないと冷たい鍵盤に片手だけでそっと触れて、現実を認識した。

ディルクの真意を確かめるように、じつと彼の瞳を見つめる。

彼の言葉が本当ならば嬉しいと思う…けれど素直に喜べない慎重さを彼女は持っていた。

「…どうして、私を望んで下さるのですか」

確かに先ほどの演奏は呼吸があっていたが、それだけで、誰からも慕われているようなディルクがテアをパートナーに思うのだろうか。

ピアノが上手い人間なら、テアでなくともこの学院には山といえるはずなのだから。

「……この曲のピアノにはどうしても譲れないイメージがあってね」
ディルクはテアの問いに真摯に答えた。

「以前からずっと、ふさわしい弾き手を探していたが、見つからなかった。だが…、昨日お前のピアノを聴いて直感したよ。俺が探していたのは、この音だ、と…」

テアに対する憐れみなどではなく、彼自身がテアとパートナーになりたいと望んでいるのだと…それが分かる返事だった。

「この曲を、俺はコンサートでやりたいと思っている。それにはお前が必要だ。テア、俺のパートナーとして共に音楽をやらないか」

「……！」

手を差し出される。

この手をとつても良いのだろうか。

テアは逡巡した。

ディルクのような輝かしい存在に、これ以上自分のような人間が近づいて良いのか。

だが、ディルクはテアを求めてくれている。

テア自身、彼に憧れ、また先ほどの演奏は今までに経験したことのない心地よいものだった。

彼とまたあんな演奏がしたい…。

この手を取りたい…。

テアは躊躇い けれどやがて、その手をとった。

「…私でよければ、あなたと共に……」

テアは立ち上がり、二人は握手を交わした。

「ありがとう、テア。これからよろしく頼む」

「こちらこそ……」

ディルクは笑顔でテアを見つめていた。

眩しい笑顔にテアは視線をそらすように俯いて、握った手のひらの温度を感じた。

partner 2 (後書き)

7話目にしてようやくパートナーになった二人です。
これからもじれじれと近づいていきます。
更新も頻度がじりじりになっていくかもしれませんが、
お付き合いいただければ幸いです。

ディルクとパートナーとなることを決めたとテアが告げると、ローゼは驚いた顔をした。

「ディルクと…」

二人は、寮の部屋の真ん中に置かれている小卓を囲み、ローゼが調理部でつくってきた焼き菓子を紅茶と共に味わっていた。

驚きが過ぎると、ローゼはテアにパートナーができたと分かってほっとする。

「良かったですね。彼なら、とても良いパートナーとなってくれでしょうし…。けれど、突然でしたね。いつの間にディルクとそんなに親しくなっていたんです?」

「親しく…というほど、でもないかもしれませんが…。色々と助けられて、知り合って。あの方が、私のピアノを気に入ってくださいだったので」

照れくさそうに頬を染めながらテアは告げた。

「あの方は誰もに慕われている優れた方で、私では足手まといになつてしまうのではないかと、心配ではあるのですが…」

「その気持ちは分かります。あの二人は、すごすぎて…。私も、時々不安になるんです」

ディルクの片腕として、同じように他からの尊敬を集めるライナルト。そのパートナーとして、ローゼも彼の足を引っ張っているのではないかと、不安に思うことが多かった。

「でも、それでも私を選んでくれたのだからと、なるべく胸を張るようにしています。だから、テアも…」

「そうですね…。あの方の恥とならぬよう、背を丸めずにいたいと思います」

テアは控えめだが卑屈ではない。冷静で慎重を期すが、積極的であるべき時は積極的だ。そんな親友は誇らしい。ローゼは微笑んで、しかしふと心配事が首をもたげた。

「ですが：相手がディルクともなると、これからまた大変ですよ、テア。ディルクには度を越したファンが結構いるんです。テアが彼のパートナーになったと知れたら：、嫌がらせされることは必至です」

「あの方が私のせいで何かを言われるのは我慢なりませんが、私が嫌がらせされることなどささいなことですよ」

テアは虚勢ではなく本心からそう言った。

「そんな、テア」

「昔のことを考えれば：、大抵のことは耐えられます」
告げたテアよりも、ローゼの表情に翳りが宿った。

「私もできることはしますから：、耐えるだけというのは止めてくださいね。あなたは全てを自分で抱え込もうとしてしまうから：心配です」

「：はい。ですが本当に大丈夫ですよ」

テアはローゼを安心させるように微笑んだ。

「それよりも、これからの生活がまた楽しみなんです。彼と共に演奏できると思えるだけで：私は幸せですから」

幸せだというテアが今までに見たことのないような表情を見せたので、ローゼはどきりとした。

テア、もしかして……？

「どつだつた？」

「登録申請をしてきたよ」

ライナルトの問いは抽象的であったが、部屋に帰ったディルクは親友の意図を読み取って簡潔に答えた。

パートナーの話だ。

ディルクの答えに、ライナルトは微笑む。

「良かったな。それで、相手は誰だ？」

「テア・ベーレンス」

部屋の中央に置かれた机の前で、フルートの手入れをしていたライナルトは友人の名に目を見開いた。

「テアだったのか…。それなら昨日言ってくれば良かっただろうに」

「ふられたら恥ずかしいだろう？」

ぬけぬけと言つてのけるディルクにライナルトは苦笑した。

「…しかしそれなら、そのうちテアのピアノを聴くのが本当に楽しみだな」

「聴いたことがなかったのか？」

「ああ。彼女が入学するまでに会ったのが数回…。ピアノを聴かせてもらうような時間まではなかった」

「そうなのか。…それは、お前の驚く顔を見るのが楽しみだな」

「自慢か、それは…」

ライナルトが苦笑しつつ見上げると、ディルクはベッドに腰をおろし、感慨深げな表情で「夜の灯火」の楽譜を手に行っていた。

ふとライナルトは思いついて、それを口にする。

「…もしかして、お前が祭りの時に会ったというピアニストもテアではないのか？ 年頃は合うだろう」

「その可能性も、なくはないな。音はよく似ているから…。しかし、もう俺の記憶もおぼろげで面影が重なるのかはつきりしない」

「本人に直接聞いてみれば良いんじゃないか？」

「そうだな、今度、機会があれば…」

ディルクは楽譜をなぞるようにした。

何か懸念を抱いているような親友に、ライナルトは怪訝な視線を向ける。

「どうしたんだ？ パートナーが決まって、喜ぶところだろう」

「ああ、パートナーができたことは素直に嬉しいと思う。しかし、明日からのテアのことを考えると…」

ディルクのパートナーとなって苦労するのはテアの方だろう。

ディルクはそれを考えると気が重かった。

彼女と共に演奏したいだけだというのに、どうしてだ、と。

パートナーとなる人間が大変な思いをする…それは分かっていたことではあるが、実際にパートナーとなってしまつと余計にそのことを考えずにはいられない。

「気にするのは分かるが、あまり深刻に考えすぎなくても良いのではないか？ おそらくテアも、今まで以上に騒がしくなるのを承知でお前とパートナーになったはずだ。ローゼもついているし、私もお前もできるだけサポートする。それでは不満か？」

「いや…そうだな。少し気にしすぎていたようだ」

「せっかくのパートナーだ。もっと楽しい方向に考えた方がいい」

「そうしよう」

ディルクは親友の助言に素直に頷いた。

「テア、聞いたよ、ディルクさんとパートナーになったって!？」

翌日、テアが授業のために講義室の窓際に着席して教科書を読んでいると、フリッツが興奮したように話しかけてきた。

人の良い彼は、周りの視線も気にせずにテアと友人でいてくれる。

フリッツは貴族の出なので、周りもそう彼のことを悪くは言えないようだ。

テアにとって、そのことは救いだっただ。

「おはようございます、フリッツ。…情報が早いですね。パートナー登録したのは昨日のことなのに…」

「だってあのディルクさんだよ。去年は結局パートナーをつくらなくて、今期もそうじゃないかって言われてたのに、まさか君となんて誰も考えていなかったから…、あ、ごめん、こういう言い方は失礼だよな」

「いえ、いいんです。私も自分で驚いているくらいですから」
テアに断って、フリッツは彼女の隣に座った。

二人の会話にこっそりと耳を澄ませている人間は多かったが、二人は続ける。

「あの、ですが、去年パートナーをつくらなかったというのは…？」

「ああ、テアは知らないんだね」

ディルクの噂話はよく耳にするが、テアはあまり誰かの会話を外から聞くというのを好まないの、なるべく話に耳を傾けないようにしている。だから、ディルクに関する話でもその詳しい内容まではほとんど知らないのだ。

フリッツはテアのために、ディルクとライナルトにまつわるパートナー騒動の話をし、ディルクに与えられた特例について教えた。

「そうだったのですか…」

「うん。僕も話に聞くだけだけど、本当にすごい騒動だったらしいよ。でも、そんな騒動になるのも分かるな。ディルクさんたちは本当にすごいんだ。コンクール入賞の常連だし、かといって偉ぶるでもなくて、誰にでも優しいし…。それに、何よりあの二人は平民ではあるけど、まごうことなき高貴な血筋を受け継いでいるわけだから…、」

「？」

テアは熱を込めて語るフリッツの言葉に首を傾げた。

「それはどういう…？」

フリッツはテアの反応にはっと口を閉じた。

「もしかして、このことも知らない…？」

「多分…」

テアが頷くと、フリッツは困ったような顔になる。

「そうか…。誰でも知っているようなことだから、別に僕が話しても支障はないんだけど、ディルクさんたちはあまりこの話を好まれないだろうから…」

もしかして、ライナルトが言っていた、「アイゲン」の意味にかかわりがあることなのかもしれない、とテアは思い当たった。

違うかもしれないけれど、言いづらいようなことならば、深く聞くことはすまい。

テアにも人に話せないことはある。

躊躇うフリッツに、テアは微笑んで告げた。

「無理に話してくださらなくても、大丈夫ですよ。いつか、ディルク自身の口から聞かせていただけるかもしれませんし…」

「そう、だね。ごめん」

「いいえ、謝ってもらうことでは…。むしろ、色々と教えてくださいましてありがとうございます」

フリッツは、「ディルク」と呼び捨てにしたテアにどきりとして、胸に苦いものがよぎるのを感じた。

「……テア、君はすごいな」

「何がです？」

「サイガ先生が担当教諭で、ディルクさんがパートナーで…」

「すごいのは私ではなくて、お二人の方ですよ」

テアはそう言うが、その「すごい」二人に選ばれたテアを、フリッツは遠く感じてしまう。

「そう言えば、フリッツはパートナーは決まりました？」

「あ…僕は、まだ…」

本当は、できることならテアを誘いたかったけど…。僕にはその度胸はなかった…。ディルクさんには…敵わない…。

「私は微力ですが、何かできることがあれば仰ってくださいね」

「ありがとうございます」

それでも今、テアが隣でこうして笑いかけてくれるなら、いいか…。

「そーいやお前、ディルクとパートナー組んだって？」

レッスンが終わって、エンジュ・サイガにそう言われて、テアはこの人にも話が伝わっている、と驚いた。

「どうしてその話を？」

「教員室でも話題になってるぜ。あのディルクが、お前を、ってな」「そうなんですか……」

情報がこんなにも伝わっているのは、テアのパートナーであるディルクの人望の厚さ、注目度の高さを示しているのだろう。

「秋の学院祭のコンサートは二人で出るのか？」

「はい、そうしたいと」

「ふーん……」

エンジュはディルクに教えていた時のことを思い出す。

テアをパートナーにしたと聞いた時は、驚くと同時に納得してしまったものだ。

彼の求める音楽のかたちを、テアは持っているから……。

「楽しみだな」

にやり、とエンジュは笑った。

「……先生、プレッシャーをかけないでください」

「いやー、教え子二人が共演っていうのはなかなか感慨深いものがあるんだぜ。一人は元だけど。こりゃ公演の予定は学院祭には絶対入れないようにしなきゃな」

パートナーになったのは昨日の今日であるのに、その言葉に今から緊張してきたテアである。

授業の時のエンジュは厳しい。後悔するような演奏をするつもりなどないが、後でどんなことを言われるかと思うとプレッシャーだ。

「……で、テア、これからいくつか課題だすけど、その進みが早かったらレッスン中にコンサートの練習しても良いぞ」

「本当ですか！」

「おう。だからレッスンしつかりやれな。あと、学院祭で下手な演奏したらシメるかな、ディルクといっしょに」

「先生……」

でも、本当に楽しみだぜ……。ディルクが目指す音楽の最初の一步、早く聴きたいと思っていたからな……。しかもピアノがこのテアとなれば……。

想像もつかない音楽が目の前に現れてくれるかもしれない。エンジュはにやにやとして、困ったような表情を浮かべるテアが、時間になつて練習室を出ていくのを見送った。

楽譜を片付け彼も練習室を出ようとして、ドアから顔を出したところでエンジュはふと動作を止める。

彼の視線の先に。

「テア・ベールレンスさん？」

「ちよつと来て下さいませんか？」

廊下の先で、テアが数人の女生徒に囲まれていた。

おうおう、穏やかじゃねーな……。

自分が助け船を出してもいいが、適任は他にいるだろう。

エンジュは、テアが連れて行かれてしまった後、自分の方に歩いてきた生徒が見覚えのある顔であることに気付いて声をかけていた。

「その一年、テアの友人だな」

エンジュが言うと、彼は驚いた顔で立ち止まった。

エンジュが声をかけたのは、フリッツだ。エンジュは、フリッツと

テアが仲がよさそうに話しているのを何度か見たことがあった。

「サイガ……先生」

「ちよつと頼まれてくれ」

「は、はい。何でしょうか」

彼は大物に声をかけられた驚きで身を固くしながらエンジュの言葉を聞いていたが。

「テア……！」

話を聞くとすぐに駆けだして行ってしまった。

「…もしかしてそういうことか？ 青春だな…」

エンジユは廊下を走っていくフリッツを見送つてのんびりと呟いた。テアを心配する様子はまるでない。

出会って数日しか経っていないが、彼はテアがこの程度のことですぐにかなるなどとは微塵も思わなかった。

彼女は一見大人しそうに見えるが、強い。

それを、エンジユは彼女の音楽を通して知っていたのだ。

むしろ、助け船は余計なおせっかいだったか？ まあでも、何も無いよりはあった方がいいだろ…。

ふあ、と彼は伸びをして、あくびをこらえずに練習室の扉を閉めた。

フリッツは、他の生徒の驚き顔など気にも留めずに走っていた。

テアがどうも良くない雰囲気の生徒たちに声をかけられたとエンジンに教えられ、誰か呼んでやれと助言されて、フリッツはその言葉のままに動く。

このまま自分が直接助けに行きたいと思うが、上手い形でテアを助けられる自信がフリッツにはなかったのだ。

フリッツは、思いついた、たったひとりの人間　　ディルクの姿を求めて駆ける。

やがてフリッツは、泉の館に向かうディルクとライナルトの二人を見つけた。

「ディルクさん!!」

フリッツが駆け寄っていくと、ディルクは驚いた顔で振り返った。

「お前は　フリッツ・フォン・ベルナーか?　久しいな。どうした、そんなに慌てて」

ディルクは数年前までは、他の貴族と顔を合わせる機会を今よりもずっと多く持っていた。

フリッツとも何かのパーティーで数回だけだが言葉を交わした覚えがある。

「あの、テアが...!」

「テアがどうかしたのか?」

途端に、ディルクは厳しい顔になった。

フリッツは、エンジンに聞いた話を繰り返す。

不穏な雰囲気の生徒徒にテアが連れて行かれたことを。

「杞憂ならいいんですけど、やっぱり何かありそうで...」

「ああ。伝えてくれてありがとう。テアがどこに連れて行かれたか

は分かるか？」

「サイガ先生が漏れ聞いた感じだと、はっきりはしないんですけど、講堂の裏手の林の方じゃないかと……」

フリッツの言葉に顔を顰めたのは、その場にいたライナルトも同じだった。

「何とも穏やかならぬ場所に行くじゃないか。ディルク、私は他の役員にお前が遅れることを伝えておこう。それでいいか？」

横からそう言ってくれた親友にディルクは頷く。

「ああ、頼む。先にお前が話し合いを進めておいてくれ」

フリッツにもう一度礼を言つと、ディルクは早速目指す方向に走って行った。

「……テア、大丈夫でしょうか」

自分が付いていっても役に立てる場面は少ないだろうと、フリッツはディルクと共に走っていくことはしなかった。

行きたいと思う気持ちは強かったが、ディルクと並ぶことは、フリッツにはできなかったのだ。

「そんな顔をしなくても、ディルクに任せておけば間違いはないだろう。多分ディルクはテアを泉の館につれてくるだろうから、心配ならいつしよに泉の館で待つか？ さすがに会議には参加させられないが、茶くらいだせる」

「あ……、それじゃあ……、すみません、泉の館で待っていてもいいですか。テアが無事なのを見たら帰りますから」

「それでは行こうか」

恐縮しながらもフリッツはライナルトに従った。

テア……。

もっと自分が強かったなら、ディルクのように力強く駆けだしていただけるのに、とフリッツは自分の無力さを悔やんだ。

テアは、エンジュと別れた後、いっしょに来てほしいのだと五人の女生徒に囲まれて、講堂の裏手に連れてこられた。

そこは、何とも雰囲気のある様子で、木々が暗く生い茂っている。

講堂の裏はこのようになっていたのですね…。林はけっこう深い…。奥に入っただけでもいいなら、今度散策してみましようか…。フリッツやデイルクの心配とは裏腹に、テアはエンジュの予想通りどこかのんびりとした心境だった。

練習室の予約の取り消しというように隠れてこそこそされるよりは、はっきりしていて好ましいとすら思う。

「さて、テア・ベーレンスさん」

「はい」

「用件を単刀直入に言わせてもらいますわね。デイルク様とのパートナーを解消してください」

予想通りに過ぎる言葉を投げられて、テアは首を振った。

「申し訳ありませんが、それはできません」

きっぱり言つと、女生徒の殺気が増す。

「どうしてですか？ あなた、本気で自分がデイルク様にふさわしいとでも思っているのですか？ 平民のくせに…。ここに入学してきたのも、何か汚い手でも使ってきたのでしょうか」

そう言う彼女は、貴族のようだった。

彼女のように、テアの入学は不正なものだったのではないかと噂をする者がいることを、テアは知っている。

今までこうした世界とは離れて暮らしていたテアが、由緒ある学院に入学できるなど、何か裏があるに違いない、ということらしい。

「そうです。あなたのような方がデイルク様のパートナーだなんて

…おこがましい」

「特別入学を許されたからといって、何か勘違いなさっているのはなくて？」

女生徒たちはテアへの不満をまくしたてる。

テアはそれに対して一々反論したりはしなかったが、少しだけ悲しく思う。

「もともと、あなたのような平民とデイルク様とは口もきけないような間柄なのですよ。あの方は本来ならフォン・シーレを名乗るほどのお方…。もう少し身分をわきまえるべきです」

フォン・シーレの名に、テアは静かに衝撃を受けた。

テアに不満をぶつける彼女たちは気づいていないようだったが、テアが知らずにいたことを彼女たちは教えてしまったのだ。

フォン・シーレ それは王族が名乗る姓である。

デイルクがそれに連なる系譜だと聞いて、ようやくテアは思い当たった。

ライナルト・フォン・シーレ。皇帝の、第二王妃の息子。

デイルク・フォン・シーレ。皇帝の、第三王妃の息子。

彼らが王族であることを放棄したのは何年前のことになるだろうか。世間はセンサーシヨナルにわいた。

今までにない事態だったのだ。王族が王族であることを否定するなど…。

「アイゲン」の姓の意味をテアはようやく察した。

それは、王族であることをやめた王族が使うための姓なのだ。

フォン・シーレは王位継承権を持つべき人間が使うものだから。

自分の鈍さをテアは感じた。

ライナルトは自分たちのことを異母兄弟だと言っていたのに、どうして思い当らなかったのだろう。

ローゼにあまりにも自然にライナルトを紹介されたからか。

平民である自分にも自然に話しかけてくれたからか。

王には三人の息子がいるが、三人とも世間では評判で、皆そろって同じ名前を付けたがったから、違和感を覚えなかったのかもしれない。

ライナルトは大したことはないと言ったが、大したことの無い話で

はなかったのだ。

おそらくライナルトもデイルクも大げさに騒がれたくなくて、わざわざテアに打ち明けたりしなかったのだろう。

テアは衝撃から冷めて、デイルクとライナルトのことを思いやった。女生徒たちの言葉が途切れたところで、テアは静かに口を開く。

「……共に音楽を楽しむのに、平民も貴族も関係ないと思います。ふさわしいとかふさわしくないとか、そういうことは関係なく……あなたの方は私のピアノを認めてくださった。だから私は、あなたの方とパートナーとしてやっていこうと思います」

テアの金の瞳が眼鏡の向こうで凜と見つめてくるのに、一瞬女生徒たちはひるんだ。

「何て生意気な……！」

「どうしてこんな人をデイルク様はお選びになったのでしょうか」

「そんなの決まっています。この女があなたの方を誑かしたんですわ」

私があの方を誑かす……？

さすがにテアにそんな発想はなく、啞然とした。

デイルクは自分に誑かされるような人ではない。

そういう考えこそ、デイルクを侮辱しているのではないか……、テアは思った。

「あなたのような方には……罰が必要ですわ」

絶句しているテアの髪を、一人がぐいと引っ張り、テアは顔を顰める。

予期しない衝撃に眼鏡が地面に落ちた。

「……………」

「ピアノストの指を傷つけるのは止めておいてあげましょう。顔……も大事になりそうですわね」

「な、何を……」

テアは、一人が持つハサミに目をやった。

これはまずい状況になってきた、と思う。

彼女たちに手を出すかどうか、テアは迷った。

彼女も、「クンストの剣」であるモーリッツのところまで暮らして長い。ローゼほど武術に長けるわけではないが、護身術程度なら扱える。

だから、少し乱暴にすればこの手から逃れられるのだが、それをやるとまた大騒ぎになりそうで、できなかった。

テアが手を出せば、彼女たちはこれ幸いと騒ぎたて、テアを退学にまで追い込むだろう。

それはさすがに困る。

テアにはまだまだ学びたいことがあるし、何よりテアを学院に入学させてくれた「おじさん」に申し訳が立たない。

「ディルク様をこれ以上誑かすことがないように、髪を切って差し上げますわ。短い髪なんて、不格好なだけですものね」

何より、血を流すようなことは余りにも大事になる。

保身のためにも、彼女たちはただテアをみすばらしく見せてディルクの失意を誘因し、自らの不満を晴らそうと、そういうつもりだった。

髪くらいなら…、いえ、よくありません…。

髪を切るくらいで彼女たちの鬱憤が晴れるならそれでいいかと一瞬テアは思ったが、ふとあることに思い当って駄目だと首を振った。

「止めてください…」

やや青ざめてテアが言つと、女生徒は笑った。

「皆さん、ちゃんとこの方を抑えていてくださいね」

「ええ…」

テアはもがいたが、さすがに四人に抑えつけられて身動きが取れない。

ハサミの刃が光った…その時。

「テア！」

一瞬、誰もが幻聴だと思った。

しかし、彼女たちに近づいてくるのは紛れもない、ディルク・アイゲンだった。

ぱつと女生徒たちはテアの身体を解放する。

テアは地面に膝をつき、大きく息を吐いた。

「…お前たち…、彼女に何をしようとしていた」

「あの、ディルク様、これは…」

彼女たちは一様に真っ青になっていた。

ディルクは険しい顔で、彼女たちを一瞥する。

その威圧感に、ハサミを持っていた生徒は思わずそれを取り落とし
た。

そのハサミを見て、ますますディルクは顔を険しくする。

「ハサミなど持って…、こんなところで何をしていた？」

「それ…は」

「こんなところでこそこそとやるくらいなら、泉の館に来ると良い。
生徒会役員がいくらでも話を聞く」

「は…、はい…」

「こんなものを持ち出してくるのはもう止める。その暇があるなら
練習室で自分を高めることだ。分かったな」

女生徒たちはこくこくと頷いた。

「では、もう行け」
厳しい口調を崩さずにディルクが言うと、女生徒たちは涙ぐみなが
ら駆け足で去って行った。

それを見送ってもせず、ディルクはテアのところへ近づくと、

テアを見下ろすディルクにはすでに怒りの表情はなく、気遣わしげ
な色があるだけだった。

彼は膝をつくテアと視線を合わせるようにかがみこむ。

「テア、大丈夫か？」

「はい…。また助けられてしまいましたね。ですが、どうしてここ
に？」

眼鏡のないテアの美貌に見上げられ、ディルクは一瞬息を呑んだ。
が、すぐにテアの質問に答える。

エンジユが目撃し、フリッツが伝えてくれたことを言うと、テアは

そうでしたか、とどこか申し訳なさそうに言った。

「…彼女たちは、一体お前に何を？」

「大したことでは…」

「ハサミを持ち出して来て、大したことはない？ お前の髪を切ろうとしているように見えたが…」

見られていたのならそこは隠しだてをしても無駄かとテアは頷いた。

「はい。良かったです、間一髪で切られなくて…」

「髪を切ろうなどと…ひどいことをする」

「ええ…、収入が馬鹿にならないんですよね」

「収入？」

しみじみと呟かれて、デイルクは困惑の表情を浮かべた。

「…あ、そうですね、さすがにあなたは髪を売ったりなんてしないでしょうから…」

「髪を…売る？」

「はい。髪というのは高く売れるんですよ。長ければ長いほどいいんです。だから、もう少し伸ばしてから売ろうと思っていて…良かったです、本当に」

彼女はデイルクとは違うところで安堵している。

デイルクは何とも言えない気分になった。

「……こんなことを聞くのは失礼かもしれないが、テア、お前はそんなに金に困っているのか？」

「そうですね、今はそれほどでもないのですが、昔は…」

ぽん、とデイルクはテアの肩に手を置いた。

「今はそうでもないんだな」

「はい…？」

「それならば頼む、ぎりぎりになるまで、できればその髪は切らないでほしい」

「え……」

デイルクの意図が分からなくて、テアは不思議そうに首を傾げた。

デイルクは、このように自分の意見の押し付けになるようなことは

言いたくないと思いながら、懇願せずにはおれなくて、口を開く。

「短いのも似合うとは思うのだが…」

デイルクはふと手を伸ばして、テアの髪を一房手に取った。

その仕草がとても丁寧で、テアはどきりとする。

不意に近くなったデイルクの温度を感じた。

「俺はお前の髪がとても綺麗で…好きだと思う」

初めて触れたテアの髪は、デイルクの予想よりもずっと柔らかで滑らかだった。

そうだ、これが本音だ、と言ってしまってからデイルクは自覚する。

「だから、できればこのまま…」

「…は、い…」

デイルクの視線を熱く感じ、テアは頬を染めて俯く。

彼女は髪を切るまい、と心に誓った。

しばらくデイルクは手の中の手触りを楽しんで、やがて解放した。

「ではこの場所から退散しようか」

「はい…」

デイルクはテアを助け起こすと、ハサミを拾い、テアに眼鏡を渡してやった。

「泉の館へ行くか？」

「はい」

今日も練習室の予約を取れなかったテアは頷いた。

「俺はこれから会議だ。一緒に行こう」

二人は泉の館に向かって歩き出す。

「……彼女たちは、俺のせいでお前にああいうことをしたのだな」

確認ではない、確信の言葉でデイルクは言った。

「デイルク…」

「すまなかつたな。…俺は、こういうこともあると分かっている前にパートナーの申し込みをしたんだ」

デイルクが自分を責めているのがテアには分かった。

「いえ…それは私も分かっていますから。私とあなた、双方にか

かるリスクを承知の上で、承諾したのです。あなたと昨日のような演奏がしたいと、そう思ってた……」

「テア……」

「だから、謝らないでください。私は気にしていません。それよりも、あなたが助けに来てくださったことが嬉しかったです。本当に、ありがとうございます……」

そう言っただけで穏やかに微笑むテアは、木漏れ日の下で美しかった。

「……お前は、俺が思うよりずっと強いのだな……」

ディルクはぼつりと呟く。

聞き取れなかったのだろう、テアは不思議そうな顔をしたが、ディルクは同じ言葉を繰り返しはしなかった。

「何でもない。……それではテア、改めてよろしく頼む。またお互いに色々あるかもしれないが……、パートナーとして支え合い、お互いに高みを目指そう。最上の演奏ができるように尽くそう」

「はい」

ディルクの言葉にテアは力強く頷いた。

彼女が理想の音の持ち主で良かった、とディルクは思う。

いや、テアだからこそ、あの音が出せるのだな……。

ディルクは自覚せず、優しい瞳でテアを見つめていた。

interlude

親愛なる私の「あしながおじさん」へ

前略

公演の方はどうですか。

私は有意義で充実した毎日を過ごしています。

学院の図書館は蔵書が豊富で、勉強するのがとても楽しいです。

昼休みに毎日図書館に通うので、司書の方に名前と顔をもう覚えられてしまいました。

卒業するまでに図書館の本を全て読破できたらと思うのですが、蔵書冊数が半端でなく多いので、それはさすがに無理かもしれませぬ。

今日、無事に私にもパートナーができましたので、お知らせします。デイルクという先輩で、とても素晴らしい方です。

実を言えばパートナーを組むことができるのか、少し不安だったのですが…。

私のピアノを、彼は認めてくれました。

とても嬉しかったです。

彼に応えられるように、ピアノの練習も一層頑張っていきたいと思っています。

これから、学院祭の行事などで彼と行動を共にすることが多くなると思うのですが、とても楽しみです。

学院祭でのコンサートに、彼と参加しようという話になっています。おじさんも、もし予定の方が大丈夫でしたら、ぜひいらしてください。

い。

お待ちしています。

おじさんの頃からもう、このパートナー制度はあったようですね。おじさんのパートナーはどんな人でしたか。

また今度、話を聞かせてください。

それでは、お身体に気をつけて。

草々

テア・ベーレンスより

テアとディルクがパートナーとなつてから少し。

生徒会などで忙しいディルクとまだ慣れぬ学院生活で戸惑うテアは、お互いに空いた時間に学院祭に向けての練習を早速開始していた。シューレ音楽学院の学院祭は、今から二ヶ月後の十一月末に行われる。

学院祭は、普段は閉じられた学院を外部にも開放し、たくさんのお店、イベントが行われる大規模なものだ。

そのイベントの中に、学生たちによるコンサートがあった。

パートナーの絆を深めるため、そして普段の練習の成果を発表するために行われるもので、パートナーでの参加のみ許される。ただし、参加は強制ではない。

パートナー以外の人間と、もしくはソロで音楽をやるという場合には、一応他のステージも用意されているのだが、このコンサートが学院祭で一番の目玉となっていた。

学院祭実行委員は既にコンサート参加者を募り始めており、二人は早々と参加申し込みを終えている。

そして今日も、テアは泉の館に足を向けていた。

入学してからテアは生徒会役員でもないのに毎日のように泉の館に通っていて、すでに生徒会役員の面々とも顔なじみになりつつある。生徒会役員はディルクとライナルトの呼びかけもあってか、テアを迎え入れてくれていた。

今日もディルクは生徒会の仕事があつて、その後で少しでも二人で練習しよう、ということになっている。

そのディルクも、授業を終えた放課後、ライナルトと共に泉の館へ向かっていた。

「テアの方は、あれ以来物騒なことはないのか？」

「少なくともテアからは聞かない。お前が教えてくれることだけだ」
「私もローゼから聞くばかりだが……」

ライナルト本人もテアを気にかけると同時に、ローゼも気にしているのだろう。

ライナルトの問いに、やや苦々しげにディルクは答えた。

ディルクとテアがパートナーを組んだ直後、テアはディルクを慕う者たちにパートナーを解消しろと迫られた。

その時はディルクが助けに入って何事もなかったが、あれだけで他の生徒の反感がなくなつたとは思えない。

だが、テアは毎日同じようにディルクに笑顔を向けてくれていた。

何もありません、とテアは穏やかに告げるが、ルームメイトのローゼはテアに対する嫌がらせを目撃している。

それなのに何故テアは打ち明けてくれない、とディルクはもどかしく思っていた。

「……もっと打ち明けてくれれば、対処のしようもあるというのに、どうしてテアは……」

「そういう性質なんだ。ローゼもいつも心配して怒っている。テアは平気な顔をするばかりだと。周りの人間に心配をかけたくないのだろうが……」

「ああ……。テアの気持ちも分かる。俺もそうそう心を打ち明けるタイプではないからな。しかし、今回のような場合は……」

もどかしそうな顔をするディルクに、ライナルトは珍しいな、と思う。

ディルクは誰にでも優しい。それは相手が誰であっても等しく、平等で。悩みを打ち明けられればできる範囲で力になってやる。もちろん、相手が過ちを犯せば厳しく叱りもするが、過ちを認めて謝罪をすれば許す。

だが……いや、だからこそ彼は、自分からはそうそう相手に深入りしない。今まではしてこなかった。

しかし、テアに対するデイルクの態度はどうだろう。

やはり、待ち望んでいた音の持ち主は特別なのか…初めてのパートナーというのは…。それとも…？

「…だが、まだお前たちはパートナーとなったばかりだろう。そう焦るものではないさ。時を重ねるうちに、テアも少しずつでも本心を語ってくれるだろう」

「…そうだな」

ライナルトの言葉に、デイルクは表情を和らげて頷いた。

確かに、そうだ。パートナーとなってまだ日が浅い。

そのことに改めて思い至り、デイルクは自身を振り返って少し驚きを感じた。

求めていた時間が長かったからか、テアと出会って間もないという感覚が薄いのだ。

だからテアの慣れないうちから、何もかも求めすぎていたのかもしれない…。

デイルクは反省を覚えた。

そうして、ふと視線を向けた先に。

「テア」

眩きを耳にして、ライナルトも自分たちの行く手前をテアが先行しているのに気づいた。

「噂をすれば、だな」

「そうだな」

頷くデイルクの声が、予想外に優しく響いてライナルトは驚いた。隣を歩くデイルクを見やれば、今までに見たことのないような表情を浮かべている。

「…デイルク…」

「どうした？」

「いや…何でもない」

ライナルトは首を振った。

ライナルトの驚きに気付かず、デイルクはテアに視線を向けたまま

どこか気遣わしげな表情を浮かべる。

「綺麗…だな。だが…」

「デイルク？」

「いや、一度なんでもないとこで躓いたのを見て以来、どうもあぶなっかしいような気がするんだ」

「……そうか。それなら、追いついて隣を歩いたらいいじゃないか」「そうしよう」

デイルクは早足になってテアに追いついた。

二人に追いつきながら、ライナルトは意外な思いとすんなりと受け入れてしまえるような思いが同時に自分の中にあることを感じる。

デイルクが…。

ふ、とライナルトは笑う。

デイルク本人も自分の想いには気付いていないようであるが、幼い頃から時を共にしているライナルトにはデイルクの変化は明瞭だった。

テアもデイルクのことには尊敬し慕っているようであるし、ここは親友として応援しよう。

並んで立っている二人はかなりお似合いだと思いつながら、ライナルトはゆっくと二人に追いついた。

「デイルク様！」

合流した三人で泉の館に向かっていると、後ろからデイルクは呼びとめられ、振り返った。

「エツダ…」

そこに立っていたのは、後ろに付き人を従える、美しい女性だった。ウェーブのかかった濃紅の髪。琥珀色の瞳が、小さな顔に詭えたように配置されている。制服が包み込むのは目を見張るようなプロポーションの肢体だ。

彼女はデイルクを認めて最上級の笑顔を浮かべた。

「ごきげんよう、デイルク様。泉の館に向かうところなのでしょう？ 私もご一緒して構いませんか？」

「ああ」

デイルクは頷き、初めて見る顔にやや戸惑っているテアに彼女を紹介した。

「テア、彼女はエツダ・フォン・オイレンベルク。ピアノ専攻の一年で、学院祭の実行委員だ。エツダ…、」

デイルクはテアをエツダに紹介しようとしたが、エツダはそれを遮った。

「知っています。テア・ベールレンスさんですよ。デイルク様のパートナーの」

どこか挑戦的な瞳だ。ライナルトはふと眉を顰めた。

「エツダとお呼びください。以後、お見知り置きを…」

エツダは優雅な動作でお辞儀した。

「あ…、はい。よろしく…お願いします…」

テアの声にあまりに覇気がないので、デイルクもライナルトも怪訝そうにテアを見た。

そこで二人は同時に目を見開く。

テアの顔色が、蒼白に変わっていたからだ。

先ほどとは打って変わったテアの顔色は尋常ではなく、デイルクは心配そうにテアの顔を覗き込んだ。

「どうした。顔色が悪いぞ。医務室に行った方が…」

「いえ、大丈夫です」

テアは俯きがちに首を振った。

「あの…私、すみません、先に行きます」

デイルクとライナルトが止める間もなく、テアは駆け足で先に行ってしまった。

それを唾然と見送り、残された面々は顔を見合わせる。

「…あの方、どうなさいましたの？」

怪訝そうなエツダに尋ねられても、ディルクもライナルトも答えられなかった。

ディルクとライナルトには悪いことをしてしまいました…。きつと驚いたでしょう…。

テアは一目散にピアノを目指し、泉の館のピアノの前に座っていた。顔色はすでに元に戻りつつあるが、涼しい空気に触れて血の気の引いた顔が冷たく感じる。

エツダ・フォン・オイレンベルク…。フォン・オイレンベルクとここで会うことになるなんて…。けれど、気付かれてはいなかったはず。彼女にも、付き人の方にも…。いえ、きっとあの方たちは私のことなど知らないはず…。

テアは無意識に、ピアノを奏で始めた。

彼女にしては珍しい、激しく暗い曲 「悲劇的ソナタ」だ。

不安感を煽るような旋律だった。

フォン・オイレンベルク。

それはテアにとって、不吉な姓だった。

彼女は生まれた時からずっと、フォン・オイレンベルクに追いかけられ、そして殺されかけたのだから。

その理由は、テアの出生そのものにある。

テアの母は、カティア・フォン・オイレンベルクといった。

オイレンベルクは四大貴族のひとつ。

カティアはそのオイレンベルク家の三女で、しかしある時、平民の青年と恋に落ち…子を身籠ったのだ。

カティアは子を産むことに決めた。だが、オイレンベルクが平民との子を、しかも結婚もしていないのにできた子どもを認めるはずが

ない。

カティアは子どもを守るためにオイレンベルクから逃げ出した。テアの父である人がオイレンベルクによって抹殺されることを恐れ、愛した人にも何も告げず、カティアは乳飲み子を抱え一人で逃亡生活を始めたのだ。

逃げて逃げて、逃げ続けて。落ち着くことのできない生活だった。けれどテアは、母がいてくれたから幸せだった。

カティアはいつもテアのことを愛し守ってくれたから。だがオイレンベルクは醜聞が世間に出回ることを恐れ、執拗にカティアとテアを追った。

オイレンベルクの者が私生児を産んだなど、ただの恥だと考えられたのだ。

そして一度は、二人はオイレンベルクに捕まり、テアは殺されかけた。しかし、間一髪のところカティアに庇われ、助かり、また逃げて…。

負傷したカティアとテアを匿ってくれたのが、モーリッツ・フォン・ブランシュ。ローゼたち家族だった。

モーリッツの庇護のおかげで、テアは初めて落ち着いた生活を送れるようになった。

「クンストの剣」であるモーリッツには、オイレンベルクもやすやすとは手が出せなかったのだ。

しかし、負傷したカティアは、もともと身体が強くなかったこともあり、床に伏せることが多くなってしまうた。

そして二年前の春に、カティアは亡き人となってしまった。

「あしながおじさん」がテアを見つけてくれたのは、その後の話だ。「おじさん」に勧められて、テアはこのシューレ音楽学院に入学を果たした。

オイレンベルクに見つかることを恐れたテアに、「おじさん」は心配することはないと言ってくれた。

オイレンベルクにはテアに対して手を出させないようにするから、

と…。

だから、自分の行きたい道を。

だから私は、こんなにも怯えることはない…。

曲が終わって、一息つくくと、ようやくテアは落ち着いた。

後でディルクとライナルトに謝ろう、と考えながら、テアはエンジンに出された課題である楽譜を取り出し、練習に熱中することでオイレンベルクの影を追い払おうとした。

会議を終えたディルクは、静かにピアノの置かれる部屋に入ってしまった。

いつもなら気付いて顔を上げるテアは、ピアノに集中していてディルクに気付かない。

テアの顔色が元に戻っているのを見て、ディルクは安堵を覚えた。先ほどのテアの様子は本当に尋常ではなかったから、心配していたのだ。

やがてテアは鍵盤から手を離し、ディルクに気づいた。

「ディルク…、すみません、気付きませんでした」

「いや…」

ディルクはテアに近づき、もう一度顔色を確認した。

無意識に手を伸ばして、その頬に触れると、テアの顔は上気する。

「良かった。もういつも通りだな」

「…すみませんでした、妙なふるまいをして…」

「謝ることはない。だが、具合が悪いなら具合が悪いと言ってくれ。

俺は、できうる限りお前の力になりたい」

「…ディルク…」

テアは俯いた。

彼にそんなことを言ってもらえる資格が自分にあるのか、と彼女は思う。母カティアのことを考えるといつもテアは思うのだ。自分は

こうして人に大切にしてもらおう資格があるのだろうか。母はいつも優しくった。けれどテアを守ったせいで…母は。

それでもディルクが懇願するように見つめてくるので、テアは頷いた。

「…はい」

ディルクは頷いたテアから一歩離れた。

「…さきほど、『悲劇的ソナタ』を弾いていたな」

「聴こえていましたか」

「ああ。いつもお前はもつと穏やかな曲を弾くから、皆驚いていたよ」

「…嫌なことを思い出してしまって、つい八つ当たりするように弾いてしまいました…お恥ずかしい」

「いや…。お前があんな音も出せるのだと知ることができて、俺は良かったと思ってるよ。こういう言い方をされるのは嫌かもしれないが…」

「そんな…」

「お前は自分からは言葉にしない分、ピアノに思いを乗せるんだな…そういう風に言われると、これから弾きづらいですね…。ですが、それは誰でもそうではありませんか？」

「そうだな…。だから俺は、お前の音に惹かれるのだろう…」

「え？」

テアはしかし、その台詞を追究はできなかった。

「それではテア、体調が大丈夫そうなら練習を始めようか。今日はまた、最初から…」

「は、はい。大丈夫です」

ディルクが調弦をして、ヴァイオリンを構えた後にテアに視線を送る。

テアはその合図を受けて、ピアノを奏で始めた。

ディルクのヴァイオリンの音が漏れ聞こえてくる、泉の館。

会議を終えて、退出しようとするエツダ・フォン・オイレンベルクは、忌々しそうに顔を顰めていた。

「テア・ベーレンス…。ディルク様のパートナー…」

こつり、と付き人を従えながら、彼女はひそやかに、けれど強い想いをこめて呟く。

「許せませんわ。この私を差し置いて、あの方のパートナーだなんて…」

h a t r e d 1 (後書き)

テアの過去、経歴の一部分をお届けしました。
それにしても、エツダのような人は、
個人的にすごく書きにくいです…。
うーむ、ちゃんと彼女をストーリーに
上手く絡ませていけると良いのですが…。

「エツダ・フォン・オイレンベルク？」

ライナルトからその名を聞いて、ローゼは訝しげな顔をした。

彼女は昼休み、ライナルトと共に広場で昼食を広げているところだ。色とりどりのものが挟んであるサンドイッチには食欲をそそられる。どれもすべて、ローゼの手作りのものだった。

「心当たりはないか？」

ライナルトが尋ねているのは、テアとエツダの関係である。

昨日テアの顔が大きく変わったのは、エツダを紹介した直後。

もしかしたら、エツダとテアの間何かあるのかもしれないとライナルトは考えたのである。

しかし様子を見る限り、テアに直接聞いても彼女は答えないだろう。気にかかったのでローゼに聞いたのだが、彼女も首を傾げた。

「少なくとも、私の方で知っていることは何も……」

ローゼは記憶をたどりながら、茶の入ったカップを手にした。

「そうか。それならいいんだ。少し気になったものだから……」

「いえ……。……でも、ちょっと待ってください。フォン・オイレンベルク……」

ふ、と引っかかるものがあって、ローゼは眉を顰めた。

「もしかしたら……」

「何か思い出したのか？」

「いえ、何でもありません」

どこか慌てたようにローゼは首を振った。何か思い当たる節があるような態度である。

しかし彼女は何も言わないまま、告げた。

「でも、確かにテアのその反応は気になります。…エツダ・フォン・

オイレンベルクをなるべくテアに近づけないように、親友としては
したいところですね」

ローゼが上手く誤魔化そうとしているのはライナルトにも分かった。
それならば、追究するのは止めておこうとライナルトは誤魔化され
ておく。

「だが彼女は学院祭の実行委員で、しかもどうやらディルクに思い
を寄せているらしい」

「それは……」

また頭が痛くなるような事実だ。

「…早くテアに落ち着いた学校生活を送れる日が来ると良いのです
が……」

「全くだ」

ライナルトは嘆息する。

しかし、ローゼのサンドイッチを一口かじった彼は、ふと顔を綻ば
せた。

「…美味しいな」

「そうですね？ 良かったです」

ローゼはその言葉に、素直に嬉しそうに笑った。

ローゼの様子を見て、ライナルトはくすり、と微笑む。

「お前とこうしていると、他の何事も上手くいくのではないかと思
うよ」

「そ…んな」

「ディルクも、早く気付けば良いと思うのだが…」

愛おしむような眼差しでライナルトは小さく囁き、ローゼを見つめ
た。

「前回のレポートはとてもよい出来だったよ。今度からも気軽にここに遊びに来ると良い」

「ありがとうございます」

生徒たちからの白い眼は相変わらずだったが、テアに対する教師の態度は随分柔らかくなっていた。

教師たちは、毎日テアが図書館に通い、熱心に勉強に取り組んでいるのを知っているのだ。

その努力に比例するように、テアは課題でも教師の予想以上のものを提出してきている。

しかも、テアはどこか傲慢な貴族の子弟やプライドの高すぎる生徒たちよりもずっと控え目で好ましい。

態度が変わるのは当然というものだった。

もともと教師たちは、テアが優秀な成績で入学試験に合格したとは言え、今までに公教育を受けてこなかった生徒が授業についてこれるのかと困惑していたのだ。

その懸念が消え、むしろテアがずば抜けて優秀であることに大半の教師は安堵し、また期待しているようだった。

この日、昼休みにテアを呼び出した教師は音楽史の担当で、昼休み直前にテアが質問したことが良い指摘であったので、彼女を教務室に呼んだのだ。

教師に認められ始めたことが、テアは嬉しかった。

「それでは、失礼します」

「長々と引きとめてすまなかつたね」

教務室を笑顔で退出したテアは、昼食をとる時間はなさそうなのでそのまま練習室に向かうことにした。昼休みをはさんで最初の授業では、エンジュの指導があるのだ。

ローゼにもらったクツキーがあれば一食くらい抜いても問題はないでしょう…。

教務棟から出る途中、そんなことを考えながらテアが歩いていると、ふと視線の先にディルクの姿を見つけた。

デイルク…と、エツダ・フォン・オイレンベルク…。

学院祭での仕事の関係で連れ立って歩いているのだろうか。

エツダの姿を見て思わず足を止めてしまったテアは、デイルクに声もかけられなかった。

エツダはデイルクに想いを寄せているらしい。

それはテアにも一目瞭然の態度だった。

学院祭実行委員の彼女はあれから、何度も泉の館に通うテアの前に姿を見せている。

彼女を見かける時はいつも、彼女がデイルクに近づいている時だ。

彼女ならば…、きっとデイルクのパートナーになっても周りから何かを言われることはないのでしょうか…。

気高い美しさを持ったデイルク。生まれ持った気品のあるエツダ。並んで立っけていても、お似合いの二人だった。

デイルクに心を寄せる者が多いとは言っても、エツダが相手では文句のつけようがないだろう。

彼女は四大貴族のひとつ、オイレンベルク家の娘。美人で、成績も良い。彼女に思いを寄せる男性も多いようであるし、また彼女に憧れる女子生徒も少なくはないようだ。

しかも彼女はテアと同じ、ピアニストだ。その音を聴いたことはないが、この学院に入学する者がそうそう下手な音を出すわけではない。血がつながっていても、まるで別世界の人間のようにだとテアは思う。エツダは知らない。母カティアの苦しみを。

自らの家の冷酷さを、きつと知ろうともしない。

テアとカティアが、どれだけの恐怖の中にいたか。

いつ捕えられ、殺されてもおかしくはない、そんな生活を彼女は理解できないだろう。

今度は、母だけでなく、ようやく手に入れた穏やかな生活…そしてデイルクまで奪われてしまうのかもしれない…。

強く動悸がして、テアはぎゅっと拳を握った。

嬉しかった気持ちがあまたく間に萎んで、他の感情へとすり替わる。

ディルクとエツダから目をそらすと、早足でテアは練習棟へ向かった。

怖がらなくてもいい、分かっているのに恐怖が襲う。

それと同時にテアの中に溢れてくるのは、どろどろとした 憎悪だ。

一度落ち着けたはずの心。

だが、テアはエツダを見る度に、過去を思い出さずにはいられなかった。

そうして募っていた感情が、ここに来て抑えようもなくなってきている。

テアは飛び込むように練習室に入ると、継るようにピアノの前に座った。

母を亡くしてから、テアが心の全てを打ち明けられるのは、亡き母とテアをつないでくれるピアノだけだった。

どうしようもない思いを一人では抱えきれず、テアは鍵盤に指を走らせる。

何という音なのだろう。

溢れて、溢れて止まらない、怨嗟の声だ。

こんな音は出したくないと、聞きたくないと、テア自身ですら思っ
ほど。

けれども止められない。

なぜなら、彼らは母を殺したのだ。

直接彼らが手を出したのではないにしろ。

たったひとつ、テアが失いたくなかった存在を、彼らは奪った。
フォン・オイレンベルク。

彼らが憎い。

憎い。憎い憎い、憎い憎い憎い憎い憎い。

どうして彼らは生き続けているのだろう。

エツダはあんな風に微笑んでいるのだろう。
母は、もういないのに。

共に笑いあうこともできなくなってしまったのに。

ああ、でも本当は、私が一番許せないのは

「…テア」

テアは、自分を呼ぶ声にも気付かず、ただ一心不乱にピアノを弾いていた。

「テア、止める」

どうしようもなくなっていたテアを止めたのは、エンジユだった。彼に強く肩を掴まれ、テアはびくりとして手を止める。

「…ったく、来てみればなんちゅう音を出してんだ、お前は」

「サ、イガ先生…」

我に返ったテアは、師を見上げた。

「泣きそうな顔で弾いてやるなよ」

ぼんぼんと軽く頭をなでられ、テアは俯く。

自分の指先が、強い感情の残滓に揺れていた。

「…すみません…」

「謝らなくてもいいけどさ」

思いつめた様子のテアを眺めやって、エンジユは無造作に尋ねる。

「何かあったのか？」

「……っ」

ここで誰かに悩みを打ち明けられたなら、どんなにか。

テアは思って両手をぎゅっと握り合わせた。

「おじさん」という味方ができて、テアはオイレンベルク家から逃げる必要はなくなった。

しかし、その逃げなくてもいい、普通の生活のために、テアは何があっても自分の生い立ちに関わることを語ってはいけないのだ。そういう「約束」が交わされている。

もし「約束」が無効になって、オイレンベルク家が今度こそテアを捕まえるようなことがあったら…、テアの生まれを知ってしまった周りも、どうなるか分からない。

テアは、大切な人たちを巻き込みたくなかった。

これ以上、失いたくなかった。
だからテアは、黙るしかない。

ただ、ピアノに思いをぶつけるしかない…。
きゅつと唇を結んでしまった教え子の姿に、エンジユは小さくため息を吐いた。

「まったく、十七歳の小娘とは思えねーような音出しやがって…。
一体どんなもん背負っちゃまってんだか…。」

「…ま、無理に話せとは言わねーけどさ」

「すみません…。」

「だから謝らなつて」

もう一度テアは弱々しく謝って、エンジユは苦笑した。

「その…。」

テアはエンジユという人をこの一月ほどで少しずつ知ってきた。

あの深みのある音を出せる彼なら、詳しい話はできずとも、せめてこの感情のやり場に的確な助言をしてくれるかもしれない。

何より、テアのピアノから彼は様々なものを聴きとってしまうから。今も、隠し事をしていても、本当は何もかも見透かされているのかもしれない…。

「もう、これ以上あんな音を出したくないんです」

静かだが、吐き捨てるようにテアは言った。

「こんな思い…、どこかへやってしまいたいのに、この気持ちをどうすればいいのか、どうしたら消せるのか分からなくて…。」
どうしても抽象的な言葉になつてしまう。

テアは上手く言えない自分がもどかしくて、また俯いた。

こんな思いを抱える自分は、見放されてもおかしくはないのかもしれない。

やはり言うのではなかったか、とエンジユを見られないまま、テアはもう既に後悔を覚え始めていた。

しかしエンジユは萎んでいくテアの言葉を聞くと、くたびれた鞆から「ごそごそと分厚い楽譜を取り出し、

「…じゃあお前、今度これ弾いてみる」

そう、無造作にその楽譜をテアの前に出した。

「『クーブランの墓』…」

それは「プレリユード」「フーガ」「フォルラーヌ」「リゴードン」

「メヌエット」「トツカータ」の六曲で構成されている作品だ。戦

争への憎しみと、故人を悼むためにつくられたのだという。

「弾いたことあるか？」

「いえ、以前に楽譜を少し見たくらいで…」

「今のお前ならかたちにしやすいだろ。今日から課題はそれな。学

院祭前に、それを俺のリサイタルで弾いてもらうから」

「はい…え!？」

殊勝に頷いてしまつてから、テアは仰天した。

鬱屈した感情がどこかへ飛んでいくのではないかと思うくらいに。

「り、リサイタルつて何ですか!？」

「来月、十月末に近くの教会でリサイタルやるんだよ。チャリティ

一的なやつ。お前、それに出る」

「ででで、出るつて…」

「出ないと単位は出さないぜ」

「先生、ですが来月なんて、あと一ヶ月しか…」

「お前なら暗譜はすぐだろ。ラヴェルなら好きだろーし。聴かせら

れるくらいには完成するさ。しばらくその曲に集中してる」

無茶苦茶だ。

テアは啞然としたが、エンジユは本気のようにである。

「あ、でもそれだけじゃつまんねーから、お前が好きなあれ弾けよ。

『月の光』。楽しみにしてるぜ。俺に恥かかすなよー」

テアは絶句したまま楽譜とエンジユを交互に見ていたが、エンジユ

が「冗談だ」と言ってくれるような気配はない。

あの相談に対して、「じゃあ」と出された課題。

エンジユの意図ははっきりとしないが、もしかしたらこの思いの行

方を、どうすればいいのか導いてくれるかもしれない。

少なくとも、目前に迫るリサイクルに対し集中していれば、あまり余計なことは考えずに済みそうだ。

テアはそう考えて、楽譜を持つ手に力を入れる。

彼女は決意を固めた。

リサイタルで演奏することを決めたその日から、テアは以前よりもさらにピアノの練習に打ち込むようになった。

身体を壊してしまうのではないかとローゼが心配するほどだった。

朝は早くから起き、寮の練習室で練習。

昼休みは、自分の名義では練習室がとれないので、昼には練習をしないというローゼに名前を借りて練習。

放課後は、課題をこなし、ディルクとの練習をこなし、夜は部屋で楽譜と睨みあいを続ける。

本番まで間がない、ということが否が応にも緊張感を高めていた。

テアは、ローゼとディルク、ライナルト、フリッツにしっかりサイタルの話をしていなかったのに、学院ではひそやかにテアが公の場で演奏するということが話題になっている。

生徒たちの間にはやっかみと、どうせ恥をかくのだろうというあなどりがあつたが、友人たちが、そして顔なじみになった教師がテアがリサイタルで演奏するという噂を聴きつけて、応援してくれることがテアの励みになっていた。

「ですが、サイガ先生は一体何を考えているんでしょうね。まだ生徒にして間もないテアをリサイタルにだなんて…。本番までの期間も短いですし…」

「あの人は飄々としているように見えて多くのことを考えているからな。考えがあつてのことだろう」

そんな夕食時、食堂で会したローゼとライナルト、そしてディルクは顔を突き合わせていた。

テアは、もう遅い時間であるが、泉の館で練習しているようだ。

今日は生徒会の仕事のせいで、まだディルクはテアと顔を合わせて

いない。

先に夕食の席に着いたが、食堂が閉まるまでにテアが戻ってこないようなら迎えに行こう、とディルクは思っていた。

「おそらく、噂を知る生徒たちの多くがリサイタルを聴きに行く。そうすればテアへの認識は大きく変わるだろう。それを狙っているのかもしれない」

ディルクは確信の口調で言った。

「…そんなに簡単に、皆の意識が変わるとは思えませんけど…」

「いや…変わるさ。ローゼはテアのピアノを知っているだろう」

「それは…知っていますが……」

「私はテアのピアノは知らないが、最近教師たちがテアへの態度を軟化させてきたおかげで、生徒たちの認識も徐々に変わりつつある。リサイタルは成功すれば悪くはない、むしろ大きなきっかけになるはずだ」

ライナルトはそう言ってローゼに微笑みかけた。

「そう…ですね」

そんな二人を見て、ディルクは苦笑する。

「さて、それでは俺はそろそろテアを迎えに行こう」

「お願いしますね」

「ああ」

立ち上がって、颯爽と食堂から出ていくディルクを、ローゼとライナルトは見送った。

「…エツダが寮生でなくて良かったです、本当に」

ディルクの隣にエツダを見ることが増えていることを気にしていたローゼは呟いた。

テアはローゼの前ではエツダ・フォン・オイレンベルクのことには口に出しはしないが、気にしているだろうと推察できたのである。

テアの過去に、エツダが関わっているにしろいないにしろ。

ディルクに接近する女性を、気にしないはずがない。

テアが自覚しているかしていないかはともかくとして…。

もしライナルトの隣に自分以外の女性が立っていたらと思うと、嫌だと思うローゼだから。

「ディルクは、どんな相手でもそうそう邪険には扱わないからな」

「……あなたは、どうなんですか？」

「分かり切ったことを聞くな。私はお前がいてくれればそれでいい」
その答えが欲しかったのだが、直に耳にすると照れる。

赤くなったローゼにライナルトは笑った。

食堂にいた寮生たちはライナルトの笑顔に惱殺されそうになった。

一方、テアを迎えに、泉の館へ赴いたディルクは 。
部屋の外から、ピアノの前に座るテアの姿を見て、動けなくなっていた。

テアはピアノに触れてはいない。

窓からガラス越しに見える彼女は、ひどく思いつめたような…張りつめた表情で、じっとピアノを、楽譜を見つめているようだった。

それはリサイクルに向けて焦っている、というような表情ではなかった。

一歩間違えれば崩れ落ちてしまいそうな危うさを持ち、けれど決してそうはなるまいと踏みとどまるように強い眼差し。

一体彼女は何を見ているのか…。

ディルクは確かめたいと思った。

けれど、それをしてしまうと、そこにいるテアが脆く崩れ去ってしまうような気がした。

それは何の根拠もないものだったけれど、ディルクはぐっと踏み込むのをこらえ、ただテアを見つめて立っていた。

まるで激情を抑え込むようにも見えるテアの横顔を、ディルクが目撃したのは今回が初めてではない。

その憂いを取り払いたいとその度に思った。

けれど、ディルクはただ見守るにとどめている。

ライナルトから焦るなという助言を受けた、それもあつた。

最初は、テアのことを大人しく控え目な、優しい少女だと思つていた。それだけではなく、他人に理不尽な悪意をぶつけられても、自然体で凜と微笑むことができる、強い人間なのだと思つた。

おそらく今彼女がぶつかつている壁を、テアは彼女自身の強さで乗り越えるだろうと、ディルクは信じたのである。

テアのひたむきな眼差しが、ディルクにそうさせたのだ。

そうしてディルクがテアを見つめていると、やがて彼女は一度瞳を閉じ、深呼吸した。

そのまま鍵盤にその指が伸ばされるかとディルクは思ったが、テアは蓋を閉じてしまう。

そこでようやく、テアは部屋の外にディルクがいることに気がつき、慌てて立ち上がった。

そのうるたえようにディルクは苦笑し、部屋のドアを開けて声をかける。

「そろそろ食堂に行かないと食いはぐれるぞ」

「えっ、もうそんな時間ですか!？」

テアは制服のポケットから懐中時計を取り出し、驚いたようだった。時を忘れていたのだらう。

ディルクは苦笑しつつ、ふとテアの手の中にある時計に目を向けた。何度か見えているシンプルな銀の懐中時計だが、その二重蓋の外側にイニシャルが彫られているのを認めたのである。そこには、テア・ベーレンスのT・Bではなく、R・Bという文字が刻まれていて、何となく彼は疑問に思つた。

しかしテアはすぐに時計をしまつてしまい、その文字が見えなくなつてしまつたので、ディルクは疑問を追究しなかつた。

テアはディルクの言葉が本当だと分かると急いで楽譜を片付け、

「すみません、わざわざ」

と丁寧に頭を下げた。

律儀なところは相変わらずなのだ。

「いや…。少し急ごう。ライナルトたちがいるので大丈夫だとは思
うが…」

「はい」

二人は並んで泉の館を出た。

夜の冷たい空気がテアの頬を打つ。

ふと空を仰ぐと、夜の帳の一隅で、月が皓々と宝石のように輝いて
いた。

「寒くはないか？」

「大丈夫です」

ディルクの気遣いがテアには嬉しかった。こうして迎えに来てくれ
たことも。

オイレンベルク家への憎悪を持って余す自分に、彼に優しくしてもら
う資格があるのかと、そんな思いが胸中にはあるけれど。

微笑みながらも、ふと表情に翳りを見せたテアに、ディルクは心配
そうな顔をした。

「手袋を持ってきたら良かったか…」

「いえ、本当に大丈夫で…」

テアの表情のわずかな曇りに、ディルクはそう誤解したらしい。

テアが焦って弁解しようとする、不意にディルクはテアの手を包
み込んだ。

その温もりに、ぎよっ、としてテアはディルクを見上げる。

「次夜遅くなりそうなきは防寒具を持っていくように。今日はこ
れで我慢しろ」

我慢どころか、何という贅沢、という気持ちでテアは頬を紅潮させ
た。

ディルクは、テアの指先が思ったよりも冷えていたことに一瞬眉を
寄せたが、ピアノストの指を冷やしたままにしておくのはやはり忍
びない。こうして正解だと思った。

ディルクの手におさまってしまう、テアの華奢な手。

この手がディルクを魅せる演奏をするのかと思うと、何となく不思議な気がする。

「行こう、テア」

手をつないで、二人は友人たちの待つ食堂へと向かう。

ディルクに手を引かれ、その大きくて包み込むような手のひらに体温を上げながら、テアはふと懐かしい過去を思いだした。

『 行きましょう、テア』

そう告げて笑い、テアの手を引いてくれた母。

「……ああ、」

ぽつりとテアは声を漏らした。

答えは、ここにあったのだ。

こんなに、近くに。

ディルクがふとテアを振り返る。

「テア？」

「…何でもありません。ありがとうございます」

テアは暗闇の中で微笑んだ。

空に美しくたたずむ月のように、星たちを圧倒する輝きをまとい

一ヶ月はあっという間に過ぎていき、リサイクル当日は目前となっていた。

リサイクルに向けての最後の練習の日、エンジュはテアに次のように告げる。

「…予想よりも完成に近づいたな。それなら、及第点だ」

演奏へのコメントについては厳しい、エンジュにしては優しい言葉に、テアはありがとうございますと微笑んだ。

「日曜日の外出届は出してあるな？」

「はい」

リサイクル後に小さなパーティーも開かれるというので、夜遅くまで外出していることになる。

寮には一応門限が設定されているので、それまでに帰れない場合は外出申請をしなければならぬのだ。

「教会の場所はいつしよに行くから良いとして…、問題は服装だな」

「制服では駄目なのですか？」

てつきり制服で出るものだと思っていたテアは目を丸くした。

「悪くはないだろうが、やっぱりそれなりのを着たいよな。お前の初リサイクルになるわけだし」

「私の……」

エンジュに便乗させて弾かせてもらうことばかり考えていたが、そう、日曜日のリサイクルはテアの初リサイクルにもなるのだ。

「それなら、ローゼならドレスを貸してくれるかもしれません。身長もそう変わりませんし……」

「ローゼ・フォン・ブランシュね…。ドレスの色は？」

「ええと確か…赤と…」

「却下」

ローゼとテアでは雰囲気が違いすぎる。似合わないということはないだろうが止めておいた方が無難だろうとエンジユは即座に切っ捨てた。

「うーん、今から買っつていつものもなあ……。うっかりしてたぜ……」
エンジユは首を捻る。

「お金も……問題ですしね」

「おじさん」は気前よくテアに金を送ってくれるので、貯金はあると言えばあるのだが、使い辛いテアだった。

「ん、そうだな。じゃあ、日曜日は俺がお前に合いそうなドレスを持ってくる。サイズも何とかなるだろ。とりあえず制服で集合しろ。着替えの手伝いにローゼを呼んでおけ」

「あ……はい」

いいのだろうか、とテアは思ったがエンジユはそれで決めてしまったようだ。

「じゃ、日曜日に。練習のしすぎで急に体調崩さないように、ちゃんと食って寝ろよ」

「はい」

テアは素直に頷き、練習室を出ていくエンジユを見送った。

「……本番まであと少し、か」

この一カ月、ずっと向き合ってきた楽譜に目を向ける。

オイレンベルクに対する感情は、楽譜にだけ集中することで整理されようとしていた。

あれから何度もエツダを見かけているが、衝動的な思いに駆られることはもはやなくなっている。

この昏い感情は、胸の中にどうしようもなく蟠っているけれど。

答えは、もう見えているから。

ディルクのおかげですね……。

テアは大事に楽譜をしまうと、静かに立ち上がって練習室を出た。

そうして　リサイタル本番の朝。

別の手段で教会へ行くディルクとライナルトに激励され、別れた後、ローゼとテアはエンジュが来るのを校門で待っていた。

「待たせたな」

時間より少し遅れて、クリーム色の小さな車が二人の前に停まる。ハンドルを握っているのはエンジュだ。

まさか車で迎えに来られるとは思わず、テアとローゼは顔を見合わせていた。

この時代、この国では馬車が主な交通手段であるが、自動車というものもちろほら見かけられるようになってきている。特に工業が盛んなこの国では、その傾向が高いようだ。

しかし、運転できる者も、高級な自動車を所有できる者も、限られてしまっているのが現状である。

しばらく二人は自動車を驚きの眼差しで見つめていたが、我に返って挨拶をした。

「おはようございます」

「おう。じゃ、後ろ乗れ」

「失礼します…」

テアは初めての車にどきどきしながら、ローゼは実を言うと初めて間近に見るエンジュにどきどきしながら、車に乗り込んだ。

「ローゼ・フォン・ブランシュだな。クッキー美味かったぜ」

テア経由でクッキーの相伴にあずかったエンジュは気さくに笑う。

「あ、ありがとうございます。テアがいつもお世話になっています」

「ローゼ、それは何だか違うような…」

母親が言うような台詞に、テアは苦笑した。

「はは、じゃあ早速行くぜ。舌嚙まないように口閉じてるよ」

「え？」

「発進！」

舌を噛む？ と首を傾げていたテアとローゼは、ぐんと踏み込まれたアクセルに、座席に背中を押しつけられて、その意味を悟った。エンジンは スピード狂らしかった。

ぐんぐんと周りの景色があつという間に遠ざかっていく。

自動車というものがこんなに恐ろしいものだったとは、とテアとローゼは顔をひきつらせながら思った。

どうやら速度を示しているらしい数字を見れば、恐ろしい数値を指していて、二人は卒倒しそうになる。

別に急がなくても十分間に合う時間なのに…！

「せ、先生、スピードをもっと落として」

「ああん、何だつて？」

曲がり角で、ぐいとハンドルが切られる。

テアは遠心力でローゼに凭れかかった。

テア、大人しくしていた方がよさそうですよ。目でも瞑って…。

そ、そうですね…。

リサイクルが始まる前に心臓が止まる、と二人は思った。

事故を起こさなかったのが不思議だったが、やがて地獄の時間は終わり、教会の駐車場に車は駐車される。

ふらふらと二人は車の後部座席から出て、ぼやいた。

「…帰りは絶対、ライナルトたちと一緒に帰ります、私…」

「…私も、そうしたいです…」

初めてのドライブは二人にトラウマを植え付けてしまったらしい。

「ん、何だつて？ ほら、テア、トランクにドレス入ってっから出せよ」

二人とは対照的に晴れやかな表情のエンジンに急かされ、テアはよろよろしながらローゼとトランクを開けた。

そこには、大きめの、茶色くて古いケースが無造作に置かれている。ローゼが好奇心を抑えずにケースを引き寄せて開けると、紺青の清楚なロングドレスが納まっていた。

「綺麗なドレスですね。色も落ち着いていて、テアにきつと似合いますよ」

「そ、そうですか…?」

テアは、ドレスを着たことなどそうないので、自信がない様子である。

「先生、このドレスどうしたんですか?」

「ん、俺の前の弟子が使ってたやつなんだけどな、ちょっと」

前の弟子、と聞いてディルクしか思い浮かばなかったテアは、思いつくままに口にする。

「…ディルクですか?」

「ばっ、んなわけあるか!」

真面目にぼけたテアにエンジュは気持ち悪そうな顔をした。

「想像しちまったじゃねーか……。とにかく、それ持って行くぞ」

「は、はい」

さっさと歩いていくエンジュに、テアとローゼは従った。

裏口の方から、教会の大きな扉をノックすると、司祭がにこやかに出迎えてくれる。

「お待ちしておりました。こちらへどうぞ」

案内された控え室に、とりあえず着替えるとテアとローゼは詰め込まれてしまった。

「テアの話には聞いていましたけど…、サイガ先生って、何と云うか本当に…ざつくばらんな感じの方ですね…」

形容し難そうなローゼに、テアは苦笑した。

「おかげで、こういう時でもあまり緊張せずにすんでいます」

「もともとテアは、こういう場ではそう緊張する方ではないじゃないですか。…じゃあ、早速着替えましょうか」

「はい、お願いします」

テアは落ち着いて理知的な顔立ちのせいか、何でも器用にこなしそうに見えるのだが、意外に不器用だ。

ローゼの手を借りて、おそろおそろといった風に、ドレスに着替え

る。靴も、ドレスに合ったものに履き替えた。

「綺麗ですよ、テア」

ローゼの声は嬉しそうに弾んでいた。

眼鏡を外した、鏡の中のテアは戸惑ったような顔をしている。

「じゃあ、今度はメイクをしましょうね。髪もアップにした方が似合います、きつと」

「えっ……」

テアは抗議したそうにしたが、楽しそうにローゼに椅子に座らされて、何も言えなくなった。

ローゼは鼻歌交じりに、ファンデーションやチークに手を伸ばしていく。

「ずっとこうしてテアにお化粧してみたいと思っていたんですよ。

でも、テアはいつも嫌だっけ言うから……」

「勉強するのに化粧は必要ないじゃないですか」

「お化粧するのも勉強のうちですよ。社会人になったら絶対必要なんですから」

「それは、そうですが……」

ローゼはテアを言いくるめて、化粧を終えると、今度は髪に手を伸ばした。

「テアは本当に綺麗な髪をしていますよね……。羨ましいです」

「ローゼの方が、長くてさらさらしているじゃないですか」

「テアは手入れとかに無頓着なのにこれだから羨ましいんですよ。

それなのに、一定の長さになるとばっさり切ってしまうし……」

「それは……」

テアは言いかけて、口ごもった。

ディルクがくれた言葉が、脳裏によみがえって、顔が熱くなる。

「それは？」

「……もう、切らないことに決めましたから……」

ローゼは目を丸くした。自分が何度言っても髪を売り払ってしまったテアが、髪を切らないと言うなんて、と。

もしかして、デイルク…？

何となく複雑な気分になってしまったローゼだった。親友が離れていってしまうような…。

さらりと指の間から零れ落ちてしまう髪を、器用にまとめ終え、できましたよ、とローゼはテアから一步離れて鏡を覗き込んだ。

「…何だか、不思議な感じです」

「綺麗ですよ、テア。客もデイルクもイチコロです」

「い…イチコロ、って…」

「さ、早速サイガ先生に見せに行きましょう。待ってらっしゃるでしょうから」

「え、ローゼ、待ってください、もう少し心の準備を…！ それに眼鏡…！」

抵抗するテアの背を押して、ローゼは控室のドアを開けてエンジユのところへ行く。

「先生、支度できました」

「おー」

椅子に座っていたエンジユは、振り返って目を見開いた。

「あ…あの、変、ではないですか？」

「…すっげーな。変わるもんだなー女はやっぱ」

「もともとテアは綺麗ですからね。そのままでもいけますが、メイクをすれば美しさをもっと強調できるというもの」

「そうだな。よくやった、ローゼ」

「お褒めにあずかり光栄です」

な、何なんでしょう、このノリは…。

「でも、テア、眼鏡してなくて大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。テア、そこまで視力は悪くありませんから。ね」
念を押されて、事実であるので、テアは頷くしかなかった。

できれば眼鏡をかけていた方が、顔が隠れている感じがして、安心はしてられるのだが。

「よし、じゃあそれで行こう。で、早速だがリハーサルすっぞ。口

「ぜ、本番前にもう一回化粧直しに来てくれ」

「分かりました。じゃあテア、頑張ってくださいね」

「は、はい。ローゼ、ありがとうございました」

ローゼに見送られて、テアはエンジュと二人、リハーサルに向かったのだった。

「ライナルト、デイルク」

リハーサルも終わって本番前、ローゼは到着済みのライナルトの右手の席に滑り込んだ。

「良かった。少し遅かったから心配していた」

「すみません。…でもその代わり、テアの出来はすごいですからね。存分に驚いてください」

「楽しみだ」

ローゼが悪戯っぽく笑うのにライナルトは答え、客席をちらりと見渡した。

「見覚えのある顔がやはり…多いな」

「ああ」

ライナルトの隣でデイルクは頷く。

学院で良く見かける顔がそこかしこにあった。

とはいえ、大半は見知らぬ顔である。

けれど、三人の 特にデイルクとライナルトの 容貌には誰も

が目を引かれるものがあり、彼らは多くの視線を集めていた。それはやはり、いつものことで、三人は全く気にかけていないのだが。

さきほどからずっと見ているパンフレットにデイルクは目を落とす。

「クープランの墓」…。これを、テアが演奏するのか……。

テアの練習を漏れ聞くことはあったが、全てを通してゆっくりと聴いたことはまだない。

彼女がこの曲をどう表現するのか、デイルクは非常に楽しみにしていた。

練習を開始してずっと思い悩む様子を見せていたテアが、どんな演奏をしてくれるのか…。

「そろそろ始まるようだ」

司祭が客席前に現れて、開始の言葉を告げる。

「皆さん、今日はこのピアノリサイタルにお越しいただき、まことにありがとうございます。今日はピアノニストのエンジュ・サイガ殿とその弟子であるテア・ベーレンス殿をお招きしております。どうか最後まで、ゆっくりとお楽しみください……」

エンジュ・サイガの前にテアが「クープランの墓」を演奏することになっている。

早速、司祭の紹介でテアが前に設置されている扉から出てきた。

眼鏡を外し、髪は全て上に上げて、ドレスアップしたテアは、教会のステンドグラスの下で、美しく輝いている。

ローゼが誇らしげに胸を張っていたのがよく分かった。

いつもは眼鏡をかけて控え目に佇むテアが、美しいことは知っていたのだが……改めてそれを思い知らされた気がする。

一瞬息を詰め、ディルクはその姿に見入ってしまった。

彼女は堂々とした態度で、客の前にやってきて、深く丁寧に一礼する。

その姿に緊張は無縁に見えた。

テアは静かにピアノの前に座る。

誰もが彼女の演奏を、エンジュの前菜と感じながら、好奇心半分で見守った。

エンジュの弟子と言ってもテアは無名であるし、「クープランの墓」の難易度は高い。

エンジュのリサイタルと違って、大きな期待をかければ裏切られるだろう、と多くの者が思いながらも、滅多に他人に教えるということとをしないエンジュの、その弟子という肩書きに興味は隠せないのだった。

そんな大勢の客の思惑を他所に。

懐かしい気がする、とテアは客の前に立ってそう思った。

こんなドレスを着て、こんなに大勢の人々の前で演奏したことは、今までになかったけれど。

でも「同じ」だ、とテアは思う。

『テア』

思い出の中の母が笑った。

テアは知らず、微笑む。

私は、ただ

ピアノの調べに乗せて、想いを伝えるだけだ。

母が笑ってくれるように。

聴いてくれる人々に、少しでも何かを感じてもらえるように。

テアは、ピアノに触れた。

思いの行方を、その旋律に、乗せる。

「クープリンの墓」、「プレリユード」。

それは、生き生きとした旋律から始まる。「クープリンの墓」は全体を通し、「墓」という言葉を持つ割に曲調は明るさを感じさせるものなのだ。

それを、テアは。

速い…！

客席のディルクは強く拳を握る。

ただでさえ技巧的に難しい曲を、さらにこんなに速く弾くのか。まるで、感情を叩きつけるように。

これは、憎しみなのか…。こんなにも、激しい…。

普段のテアの穏やかさを知っている人間には信じられない激情が感じられた。

演奏前の思いも忘れ、誰もがテアの紡ぎ出す音の渦に巻き込まれていく。

「クープランの墓」、「フーガ」。

「プレリユード」とは一転して、緩やかな曲調になる。

「プレリユード」でその音の奔流に圧倒されていた聴衆はほっと息を吐き、けれど耳を離せなかった。

旋律は暗いものではない。

しかしどこか物悲しさを感じさせる…。

切ない音に胸を掴まれる…。

「クープランの墓」、「フォルラーヌ」。

また音が激しくなった。

重苦しく、何かを強く求めるような音。

聴衆は完全にテアの音に集中している。

「クープランの墓」、「リゴードン」。

目まぐるしく旋律は展開していく。

強い強い憎しみと、大切な人を亡くした悲しみはどこへ行きつづのか…。

次第に「迷い」が見え始める。

心が揺らぎ、旋律が一転二転する。

「クープランの墓」、「メヌエツト」。

ラヴェルのメヌエツト作品での最高傑作と目される曲だ。

テアはこのメヌエツトに、一番力を注いでいた。

自分の中の「憎しみ」にどう向き合うのか、その答えを出すために…。

音は強く弱く、それを表す。

光が明滅するように。

「クープランの墓」、「トツカータ」。

最後の曲である。

設定速度と比べ、随分ゆっくりとテアは弾き始めた。まるで何かを懐かしむようだ。

時折不安になるような旋律が表れながら、曲は壮大に盛り上がっていき、速度も速さを増していく。

どうして母があんなにも早く死ななければならなかったのだろうか。

テアはずっと思っていた。

優しく温かい人だった。

母が死ななくてはならない理由など、どこにもなかったのに。

許さない…、母を殺した原因を、母を奪った者たちを、決して許しはしない。

その決意は、今も胸から消えることはない…。

母といた日々は、とても幸せだった。

ずっと追われ続け、貧しかったけれど、満たされていた。

母がいつだって笑顔で、テアに愛情をくれていたから。

けれど、母はもういない。

もう一度会いたいのに、笑顔が見たいのに、もう会えない。

戻ってきて、くれない…。

憎しみが、燃え上がる。

憎い、憎い、憎い…、体の内側から焼かれるようにその思いが溢れてくる。

母を奪ったすべてのものが、憎くて憎くてたまらない。

この憎しみをどこにぶつければ良いのだろう。

許せない相手すべてに、この憎しみを分かせてやりたい…。

復讐を、果たしたい。

憎い、悲しい、辛い、苦しい……。

けれど、こうして憎み続けて一体どうなるのだろう。

溢れてくる負の感情を覚えながらも、テアはそう自問せずにはいれなかった。

このどろどろとした感情に身を焦がすテアを見て、母は一体どう思うだろう。

笑いかけてくれるだろうか。

喪失感を抱え、憎悪だけを胸に抱くテアを見て、きっと彼女は…悲しい顔をするだろう。

そんな母の表情を思い浮かべて、テアは我に返らずにはいられなかった。

自分の思いをもう一度、見つめなおす。

憎かったのは、テアから母を奪った彼ら。

けれどそれだけではなく、テアを置いてしまった母に対して、恨みを向けずにはいられないことに気付く。

だが、それ以上に何より許せなかったのは、全ての元凶であり母を救えなかった自分自身、だった。

最も憎くて、殺してやりたいのは、むしろ、自分だ。

けれど、「彼ら」のいない世界に母の存在はありえず。

テアという存在に優しく笑いかけてくれた母は、テアなしには存在しなかった。

この憎悪は、母が私を慈しんでくれた証。

この憎悪は、私が母を愛している証。

だから…。

心の中に大切に抱えておこう、とテアは決めた。

誰にぶつけることなどせず、誰を責めるというのではなく…。

母がいてくれた証として、持ち続けよう、と。
そう思えばその思いは、「憎悪」であって「憎悪」でなく。

そうして迷いの霧は晴れて。

静謐な悲しみと、愛しさがテアの胸の中でたゆたっている…。

母がいてくれたころ、テアは幸せだった。

そして、母がつくってくれた未来で生きている今のテアも、幸せだ。

あなたの娘であることが私の誇りです、お母さん…。

これからも、その思いを胸に、生きていけるとテアは思う。

たくさんのお難や苦痛があるだろうけれど。

また迷うこともたくさんあるだろうけれど。

それでも、母との思い出がテアの糧となってくれるから。

母がつくってくれた出会いが、テアの支えとなってくれるから。

母はここにはいないけれど、すぐ側に、そうやって「いて」
くれるから。

だから、母のように、力強く、私は生きていく……。

そして フィナーレ。

ジャン、とテアは最後の音を弾き終わると、ゆっくりと指を鍵盤から離していった。

わぁ、と拍手がわきおこる。

最初の思惑など忘れて、誰もが盛大に手を叩いていた。それこそ、
学院でテアを侮っていた生徒たちも含めて、誰もが。

まだ夢見心地にいるようなテアは、ゆるりと椅子から立ち上がると、笑顔を浮かべ、また礼をする。

拍手が止まない中、彼女は扉の向こうに姿を消した。

「お疲れさん」

「先生……」

エンジユは温かい微笑みでテアを迎えた。

「上出来だ。初リサイクルにしては、な」

「ありがとうございます……」

それ以上は言葉にできなくなる。

肩にエンジユの手のひらの温度を感じ、ようやくテアは現実に戻ってきた心地がした。

そしてその途端、テアの中で何かがどつと溢れてくる。

手足が震え出したテアを、エンジユは椅子に座らせてやった。

「悩みは晴れたみたいだな」

「はい……」

「じゃ、しばらくそこで身体落ち着けてる。あとお前の出番はパー

ティがあるからな」

「はい」

エンジユが扉の向こうに消えていくのを見送り、テアは椅子に凭れた。た。

演奏しきったのだ。

震える指先を、テアは見つめて、苦笑した。

恐れも、憎悪も、そう簡単に消えはしない。

けれど、もう私は大丈夫だ……。

テアは瞳を閉じる。

『テア、良かったわよ。やっぱりあの人の娘ね』

懐かしい声がよみがえり、私はやり遂げた、とテアは頬笑みを零す。

それと同時に、一筋の涙が彼女の頬を伝った。

「お母さん」

テアは自分にも聞こえないほど小さく呟き、

「……ローゼに怒られますね、お化粧が落ちてしまつて……、」
誤魔化すように、苦笑した。
やがて扉の向こうから聞こえてくるエンジユの演奏に、テアは身を
ゆだねた。

「テア……」

ローゼは、泣いていた。

幼い頃からテアと共に在る彼女は、誰よりもテアが曲に込めた思い
が伝わつたのだろう。

そんなローゼの髪を宥めるように撫でながら、ライナルトは感嘆を
隠せなかった。

驚いたな、まさかここまでとは……。

一ヶ月で、超絶技巧の曲を、表現もしつかりと固めて、こんな演奏
をされるとはさすがに予想していなかった。

ここまで曲を完成させることのできるだけの技量を持ったテアと。

その才能を信じ育て上げたエンジユ。

どちらにも感心と驚きを禁じ得ない。

そして、そんなテアを見逃さなかったディルク。

エンジユが聴衆の前に現れて、拍手がおさまっていく中で、ディル
クはテアの音を思い返すように瞳を閉じ、椅子に深く沈んでいた。

テアの音が、ディルクの中に染み込んでいる。

切なくも優しいテアの音楽の世界……。

まだその音楽を感じていなかった。

同時にその世界に自分も入っていきたかった。

音楽を奏でたい。

不意にこみ上げる衝動を、ディルクは抑えなければならなかった。

しかしやがて、エンジユの演奏が始まり、ディルクは少しずつ落ち
着いていく。

エンジユは普段の彼からは予想もつかない繊細な音の持ち主だ。それでいて、ダイナミックでもある。

エンジユの演奏は聴く者を飽きさせない。テアと比べると、当然であるが彼の音の方がずっと完成されている。かつての師の演奏を聴いて、デイルクはふと彼に学んでいた頃のことを思い出した。

エンジユと初めて出会ったのは、テアと同じように、彼のレッスンを初めて受けるという授業で、だった。

彼を見てデイルクは驚き、そして喜んだ。

あのエンジユ・サイガが自分の教師に、と。

『…お前、ヴァイオリンもやるんだって？』

『はい』

そういった曖昧にもとれる行動を彼は許さないのだろうか。デイルクは思いながらも頷いた。

『じゃ、まずお前の好きな曲を弾いてみる。気にいればこれからお前を見てやる。でも駄目なら、諦めてヴァイオリンだけにしろ』

その条件にデイルクは目を見開いたが、受けて立った。

そして、デイルクのピアノを聴いたエンジユはこう言った。

『若いな』

『…それは当然、俺は先生より若いですが』

『ちげえよ！ 真顔で突っ込むな！ 青いっつう意味だよ！』

『青い？』

『デカいって言ってやっても良いけどな。お前の目指すモンはデカくてピアノだけじゃ追いつかねーよ』

『それは…』

エンジユの言葉の意味は、その時のデイルクにとっては不可解なものだった。

『…途中までは、俺が見てやるよ。お前が気付くまでは…』
意味深な言葉。

最初は分からなかったその意味を、やがてデイルクは理解する。

それが、デイルクがエンジユのレッスンを受けた最後になった。

エンジユ・サイガ……。やはりすごい人だ……。

デイルクは演奏に聴き入りながら、感慨深くそう思った。エンジユのステージも、終わりに近付いていく。

最後の曲は、誰でも知っているだろう、「別れの曲」とも呼ばれることで有名な曲。

これ以上はないと言われる綺麗過ぎる旋律を、エンジユは感動的に響き渡らせる。

鍵盤から指が離れ、余韻を残し、彼は堂々と立ち上がった。

拍手がわきおこる中で、彼は一度、扉の向こうに消えてしまつが、鳴りやまない拍手喝采の中もう一度彼は姿を現す。

アンコールだ。

最後に彼が何を弾いてくれるのだろうか、彼の音楽が再び始まるのを待っている。

「最後にもう一人、ゲストを呼ぶぜ」

にやり、とエンジユは笑って告げた。

「デイルク・アイゲン！」

え、とローゼが目を丸くする。

デイルクを知る周りの人間も、彼女と同じ反応だった。

「デイルク」

ライナルトは苦笑を向けた。

「あの人は、全く、やってくれる……」

逃げるに逃げられない。

逃げるつもりもないのだが。

デイルクは静かに立ち上がると、衆目の中エンジユに近づいて行った。

「演奏したくてうずうずしてんだろ。『亡き王女のためのパヴァー」

又』だ。連弾で、行けるな？」

「相変わらず、無茶を言いますね」

「姉弟子の弔いだ。無茶も許されるってもんだろ」

「……ええ」

ディルクは一瞬神妙な顔になって頷いた。二人が揃って礼をすると、あっけにとられていた聴衆も、ディルクの美貌に期待の眼差しをよこす。

ディルクを知らない者たちは、さすがに彼を元王子だとは思いつけないようだった。それは、ディルクにとってもライナルトにとっても幸いなことである。

エンジュとディルクは並んで椅子に座り、戸惑う空気もなく、静かに曲が始まった。

テアは扉一枚隔てた向こうで呼ばれたディルクの名前に、思わず壁際に駆け寄る。

ディルクの…ピアノ。

テアの前でディルクはヴァイオリンしか弾いたことがないから、テアはまだ彼のピアノを知らなかった。

ディルクとエンジュは、揃って練習をしていないはずなのに、二人の息は合って、演奏は滑らかだ。

優雅に舞っているよう…、けれど、この悲しい響き…。

テアは、扉に耳をつけるようにして聴き入っていた。

聴衆も、ほう、と感嘆の溜め息を漏らしている。

けれどやがて…アンコール曲も終わってしまう。

「ブラボー！」

と、客は総立ちでエンジュとその弟子たちに温かい拍手を送った。リサイタルは、成功に終わったのだ。

リサイタルが終わると、一部の客は帰ってしまったが、残りの客を呼んで、教会横のバラ園でのささやかなパーティとなった。

ピアノもそこに移されて、乾杯の後、テアはエンジユによってディルクと共に紹介され、ピアノを弾くように促されて座る。

客たちが歓談する中、テアはどこかくつろいだ様子で、「月の光」を弾き始めた。

「…テアはよくこれだけの人を前に堂々としているな」

このような場は初めてだろうにと思いつながらライナルトが呟くと、ローゼは楽しそうに笑う。

「テアは場慣れしていますからね」

「場慣れ？」

「その辺りのことは本人に聞いてください。あ、ライナルト、あそこの料理、美味しそうですよ。行きましよう」

「…テアのことはいいのか？」

「ディルクがいますから」

ローゼは言って、ライナルトの腕を引いた。

ディルクはピアノの側に立って、テアの姿を見つめている。

ディルクに近づきたい女性たち、テアに近づきたい男性たちは共にどこかそわそわとしていたが、何となく近づけないようだ。

エンジユは少し離れたところで、知り合いなのだろう人々に囲まれて談笑していた。

テアの演奏が一段落つくと、他の客に声をかけて、ピアノが弾けるという客たちをエンジユは次々とピアノの前に座らせていく。

それを苦笑して見ていたテアに、ディルクは近づいた。

「テア」

「ディルク…、あの、ピアノ、素晴らしかったです！」

ディルクを認めたテアは、開口一番そう言った。

どこか興奮している様子で言う彼女に、ディルクは苦笑する。

「それはこちらの台詞だよ。…素晴らしい演奏だった。ありがとう」

「いえ…。私など、まだまだです。感情ばかり先行した演奏になってしまいました。次はもつと、落ち着いて弾きたいです」

もう次のことを見据えている彼女を、ディルクは温かい目で見つめた。

「…疲れているだろう。どこかに座るか？」

「はい」

ディルクに促されて、少し人から離れた場所に置いてある椅子にテアは腰を下ろした。

「寒くないか？」

「あ…」

テアはそこでようやく、自分がいつもと違う格好をしているということを出した。

ついでに、少し前の月夜の晩のことも思いだして頬を赤くした。

日が沈むとかなり冷え込む季節であるのに、テアはまた随分と寒い格好をしている。

ピアノを弾いていた時はそれに集中していて全く思い至らなかったが、確かに肌寒い。

しかもこの格好を、こんなに間近で見られてしまった…。

慣れない衣装のせいで、どうしても自信がないテアだった。

「えつと…」

テアが思わず返答に詰まっていると、ディルクは言った。

「寒いなら寒いと言っていいんだ。そのドレスはお前によく似合っているが…袖がないからな」

テアはその台詞にぱっと顔を上げた。

「あの、私、変じゃないですか」

「変？」

「その…、このようなドレスなど初めてなので…」

「ああ…」

デイルクは納得して少し笑った。

「変どころか…、とても綺麗だ」

素直に彼は思ったところを述べる。

「そのドレスはお前の美しさを際立たせてくれているようだと思うよ…」

天然の殺し文句だった。

こんなことを他の誰かに言われたことはない。

テアは顔を真っ赤にして俯いた。

「大丈夫か？ 先ほどから少し顔が赤いな。風邪を引いてはいけなし、これを羽織っている」

気付かないデイルクは自分の上着を脱いでテアの方にかけてやった。

「ですが、これではデイルクが…」

「俺は大丈夫だ。それより、少し待っている。何か温かい飲み物をもらってくる」

「あ…」

飲み物を取りに行くデイルクを、テアは見送った。

おずおずと、彼女は肩にかけられたデイルクの上着を自分の身体に引き寄せる。

デイルク、の…。

外側からも内側からも、じわりと温かさが広がっていく気がした。

そうして、デイルクはすぐに戻ってきた。

「コーヒーだが、これでいいか？」

「はい。ありがとうございます」

テアはデイルクからカップを受け取った。

デイルクはテアの隣に座る。

「そういえば、ずっと眼鏡をかけていないようだが、なくても大丈夫なのか？」

「はい。遠くの文字を読めと言われると難しいですが、普通に生活

する分にはなくても何とかなるんです。今日は、眼鏡がないおかげで客席が良く見えなくてよかったですかもしれない」

テアがおどけて言うと、ディルクは笑った。

「今日のお前は初リサイタルという割に緊張が少ないように見えたが、それは眼鏡がないおかげというわけか」

「それもありませんけれど…」

テアはゆっくりとコーヒーを一口飲んだ。

「実は、ローゼと出会う前は私、母とその……長い、旅をしていたんです」

少しだけ、こんな話をしてディルクはどう感じるだろうかと思ったが、テアは話していた。

「旅……」

「はい。それで、お金がない時に、私がピアノを弾いて母が歌ってお金を稼いだりしていたことがあって。ですから…」

「そうか、人前で演奏することに慣れているのだな……。しかし、旅をしていたというが、ピアノはそれでは母親に習っていたのか？」

「あ、はい。母が少しだけ……。あと、行く先でピアニストの方が助言をくださったり……」

母は、何も教えないうちからテアが自らピアノに触れたと言っていたが、それが本当なのかテアは知らない。ただ、覚えている最初の記憶から、テアはピアノを弾いていた。

「そうなのか」

ディルクは驚いた。

テアの口ぶりだと、きちんとした教師に師事したことは一度もないようである。それで今の技量を持っているというのなら、テアは天賦の才を持っていたのだろう。もちろん、彼女の努力も大きいのだろうが……。

また、テアは暗譜がひどく早い。「夜の灯火」を最初に合わせた時は楽譜をほとんど見ずに弾いていた。おそらく、旅の中で楽譜をいちいち持ち歩くことはできないから、すぐに覚えるように、その術

を身につけていったのではないだろうか。

そんな彼女が自分の前に現れてくれたことに、ディルクは感謝せずにはいられなかった。

「テア！」

二人がそんな風に話していると、先ほどから話しかける機会を見計らっていたフリッツが人の合間を縫うようにしてやってきた。

テアに話を聞いていた彼も、リサイタルに来ていたのである。

「フリッツ！」

テアは立ち上がってカップを椅子に置いた。

「今日は誘ってくれてありがとうございます。演奏、とても良かったですよ」

「いえ、来てくれてありがとうございます。楽しんでくださったならよかったです」

テアが嬉しそうに言うと、フリッツの背にぐさぐさと多くの視線が突き刺さった。

この中でこの二人は良く平然としていられるな、とフリッツは思う。ディルクにとってはいつものことであるし、テアは向けられる視線は全てディルクへのものだと思っ込んでいるからであるが。

「お前も来ていたなら、もっと先に声をかけてくれればよかったのに」

ディルクが笑いながら責めるでもなく言うと、フリッツは笑って誤魔化した。

人目を引くディルクとライナルトとローゼの存在には最初から気付いていたが、輝かしい三人にためらいもなく近づいていけるほどフリッツの心臓は強くない。

今も多少近寄りがたかったのだが、しかしテアに一言声をかけて帰りたかったのだ。

「あ…、眼鏡もなくて髪型もいつもと違うから、ちょっとびっくりしたよ。でも、似合ってるね」

話をそらすようにフリッツは言ったが、さすがにディルクのように直接的に綺麗だとか素敵だとかいう単語は口にできなかった。

「ありがとうございます」

テアは照れながら、もう一度礼を言う。

そんな二人を微笑ましいとディルクは眺めながらも、何となくもやもやとした気分になった。

そんな自分に、ディルクは首を傾げる。

「なんだ、これは…。」

「そう言えば、フリッツも楽器は持って来たのですね」

「ああ、うん。貰ったチラシに持参した方がいいみたいなこと書いてあったから…」

「それなら、ぜひ、あちらで演奏してくると良いですよ。私もフリッツの演奏を聴きたいですし」

「えっ」

テアの指す方をフリッツはおそるおそる見た。

先ほどから柔らかな旋律が流れている。

その音の持ち主は、ライナルトだ。

エンジュのピアノに合わせて、彼はフルートを吹いていた。

聴衆が　特に女性客が　演奏と彼の美貌にうっとりしながら聴き入っている。

「いや…、僕はちょっと」

敷居が高い…。

フリッツが冷や汗を流していると、ローゼがやって来た。

「そんなこと言わずに、演奏してくるといいですよ。良い経験になります。多少の失敗なら笑って許してくれますし。ね、ほらほら、遠慮なく楽しんでください」

「ちょ、ちょっと…!!」

ローゼに背を押されて、フリッツは人前に立たされてしまった。

ライナルトの演奏が終わって、逃れようもなく彼はオーボエを手にする。

緊張しているようだったが、やがてフリッツが笑顔で演奏を始めたのを見て、テアはほっと笑った。

「彼は、もつと自分に自信を持つと良いんですよ。あんなに良い演奏をするのですから」

ローゼが戻ってきて、テアに言った。

「そうですね…」

フリッツのオーボエに耳を傾けながら、テアは頷く。

そんなテアをちらり、と見て、ローゼは言った。

「テアの演奏も…素晴らしかったですよ」

「ローゼ」

「私、泣いちゃいました」

テアは驚いてローゼを見た。

「カティアさんのことを思い出してしまって…」

また不意に涙腺が緩みそうになる。

「…ありがとうございます、ローゼ」

テアは優しく囁いた。

「泣かないでください。…ライナルトも心配しますよ」

テアの言葉に、ローゼは頷いた。

向こうからローゼを見つけたライナルトがやってくる。

「…どうした、何かあったのか？」

「何でもありません。それよりテア、私、眼鏡を持ってきましょう

か。暗い中では、ないと少々不安でしょう。それから、食事もとっ

てきますよ」

「大丈夫ですよ、自分で」

「いいから、座っていてください。あなたも一応、主役の一人なん

ですから。ライナルト、付いて来てもらって良いですか？」

「ああ」

申し訳なさそうにするテアに、ライナルトは笑った。

「気にするな、ディルクの横で泰然としている」

「はあ…」

テアは曖昧に頷く。

「テア、あいつの言うとおり座っている」

ディルクはテアの後ろから声をかけた。

「暗くなってきたからな、俺もお前が転びそうで心配だ」

「こ、転びませんよ」

テアは反論したが、ディルクはそれを笑っていなした。

再びカップを手に、テアはディルクの隣に座る。

「…カティア、というのは誰か聞いてもいいだろうか」

ローゼの口から出た名に対し、テアは懐かしそうな寂しそうな愛しそうな表情を浮かべていた。

気になって、ディルクは尋ねる。

テアの演奏を聴き、今まで知らなかったテアの昔の話聞き。

テアのことをもっと知りたい、とディルクは思っていた。

「…私の母の名です」

テアは少しだけ躊躇ったのち、答える。

「亡くなってしまった、母の……」

「そうか」

ここ最近の沈みがちだったテアの様子、テアの演奏の背景にあるものをディルクは悟る。

リサイタルでの演奏曲が曲であるし、母のことを思い出して、塞ぎがちであったのかもしれない。

当たらずとも遠からずのことをディルクは考える。

リサイタルが終わった後のテアは、どこか憑きものが落ちたようにすっきりとして見えていた。

テアは、迷いをふっきったようだ。ディルクが思っていた通りに。

テアの強さを、改めてディルクは実感する。

「今日のリサイタルは…、追悼の意味もあるんだ。少なくともサイガ先生にとっては」

唐突にディルクは呟いた。

「え……」

「エンジュ・サイガは毎年この時期にこの教会でリサイタルを開く。先生は何も言わないし、客のほとんどは全く知らないことだろうが、

これは先生が亡くなった人に捧げる音楽会だ。ゲストを呼ぶのは初めてだが、毎回こうやって賑やかに皆で音楽を楽しむ……」

「……一体、どなたの」

「先生の初めての生徒だよ。プロのピアニストになって成功したが……、事故にあつて儂くなつてしまった。この教会が彼女を弔つてくれたんだ」

「そう……だったんですか……」

初めて知る事実にも、テアはエンジュの胸の内を思った。

ではこのドレスは彼女の形見なのだろうか、彼女は思い当たる。

「そう悲しそうな顔はしなくてもいいさ。先生は、彼女に……皆に笑つてほしくてこの催しをするのだから」

「……はい」

「この話をしたと知られたら先生に怒られそうだから、秘密にしておいてくれ」

ディルクがおどけたように人差し指を口の前に立てたので、テアは笑つて頷いた。

確かに感傷的な風情はエンジュには似合わない。

音を楽しむのが、音楽だ。

「テア、持つてきましたよ」

ローゼとライナルトが戻ってくる。

眼鏡を受け取り、二人が持つてきた料理の多さにテアは仰天した。

「……ローゼ、こんなに食べられませんよ」

「さつき食べた時全部美味しかったから全部持つてきちゃったんですよ。大丈夫、皆で食べればいいんですから」

ローゼとライナルトは椅子を引っ張つてきて、四人で料理に舌鼓を打った。

誰もが流れてくる音楽を、そうしていつまでも楽しんでいた。

h a t r e d 6 (後書き)

リサイタル後の和やかなひとときをお送りしました。

今回はディルクの台詞が非常にクサク…砂吐きにご注意クダサイ…。
書きながらこれはないかと思いましたがこのままで。

彼はただ思ったことを言っただけです。

計算はなしです。大変性質が悪いです。

そんなディルクですが1ミリ程度前進したようなそうでないような
こんな感じで今後も二人はじわじわと近づいていきます。

i n t e r l u d e

親愛なる、テアへ

前略

君の学院生活が楽しそうので安心していきます。

私も学院の頃を思い出し、とても懐かしく思いました。

先日のサイガのリサイタルでの君の評判は友人たちからよく耳にします。

とても素晴らしかった、と。

私もぜひ聴きに行きたかった。

公演で外国にいたのが悔やまれます。

今、私は北国にいます。

風は冷たく唸り、寒さの厳しさを感じました。

しかし、その中でも人々はとても温かく私たちを迎えてくれました。同封した写真を見てもらえれば、美しくも残酷な雪の中暮らしている人々の生活が見えると思います。

いつか君とまたこの国の景色を見たい…そう思ってここでの公演を終えました。

学院祭ですが、何とか仕事を終えて、君の演奏を聴きに行けそうです。

君がパートナーと奏でる音を聴けることを、楽しみにしています。

草々

追伸

立ち寄った店で君に似合いそうなものを見つけて、つい買ってしまいました。

この贈り物を気に入っていただければ幸いです。

君だけの「あしながおじさん」より

リサイタルから明けた、翌日。

学院祭まであと一月と学院中がどことなく浮き立つ中でも、授業は通常通り行われていた。

これまでリサイタルのことばかり考えていたテアは、それを終えてしまつて日常に戻り、昨日までのことがまるで嘘のように感じられたものである。

だから最初は、「それ」をリサイタルが終わってしまったが故の当然あるであろう違和感だと思つた。

テアはその日、朝からいつもと違う空気を感じていたのだ。

気のせいかと思つたが、しかし、どうやらそうではないようである。

この視線は…？

テアは特別入試によつて入学してから、天才ピアニストエンジュー・サイガを師とし、さらに生徒会長のディルクをパートナーにしたことで、周りの妬みや猜疑の視線を向けられていた。

だが、今日はそんな冷たい視線ばかりでなく、どこか戸惑うようなどうしたらいいのか分からないというような、今までにはないものが感じられるのである。

しかも、廊下を歩いてすれ違う際に会釈をした時、まれに返してくれる生徒までいる。

その上さらに、昼休みの食堂では、数人の同級生に話しかけられもした。今までは、学院長に取り入つただとかディルクに取り入つただとか、そういった噂があつてテアに近づきにくかつたらしいのだが、リサイタルを聞いて、噂はあくまで噂だったのでないかと思うようになり、テアと話してみたくなつたという。エンジューやディルクの話を知りたかつたというのが主にあつたようだが、それでも

テアは大きな前進に嬉しくなった。

午後のエンジュのレッスンの前にテアがそのことを話すと、エンジュは良かったな、と言った。

「先生のおかげです。ありがとうございます」

「別に俺は何もしてねーよ」

だが彼はこれをきつと狙っていたのだろう。

そっけないふりをするエンジュにテアはにこにここと笑いかけた。

「あ、それから、お借りしていたドレスなのですが、クリーニングから戻ってきたらすぐにお返ししますね」

「ああ。別に急がなくてもいいけどな」

エンジュは何を考えてあのドレスをテアに託したのか…。

聞いてみたい気持ちもあったがテアは堪えた。

やがて、授業開始の鐘が鳴る。

「…じゃ、今日から一ヶ月は学院祭のコンサートに備えるってことで。お前ら、何やんの？」

「これです」

テアは楽譜をエンジュに渡した。

ディルクには既に話をして、許可を得ている。

「これ、確かディルクが書いてたやつだろ」

「ご存じなのですか」

「たまに難しそうな顔で見てたからな。そうか、なるほどね……」
楽譜から目を離し、エンジュはテアを見つめた。

「二人での練習は、もう始めてんのか」

「はい。……最近は、あまり多くの時間はとれていませんでしたが……」

「そうか。学院祭は大物が昨日の比でなく集まってくるからな。また一ヶ月、気合い入れてけ」

「はい」

それでは弾くようにとエンジュに促されて、テアはピアノの前に座り、早速「夜の灯火」を奏で始める。

そのテアのピアノに、容赦なくエンジユの厳しい言葉が降り注いだ。

気に食わない、ですわね…。

エツダ・フォン・オイレンベルクは、寮ではなく学院の食堂のテラスのテーブルを、取り巻きの貴族の生徒らと囲みながら、不機嫌そうな顔を隠してはいなかった。

一日でがらりとテア・ベーレンスへの印象が変わった。

それが彼女の気に入らなかったのである。

今まで無名でいたテアに関しては、学長を誑かして入学したのだとか、デイルクの同情心を煽り、彼に媚びてパートナーになったのだとかいう噂もあつたが、それらが否定されようとしていた。

昨日のリサイタルに行った何人かの生徒、教師によってテアの演奏の評判は広がり、ほとんどが「思わず引き込まれてしまった」と唸つたものだから、聴きに行っていない生徒たちは半信半疑という状況なのだ。

もともと根拠のない噂話ばかりが存在していた。

また、テアが勉強にも練習にも熱心に取り組んでいたことが、以前から生徒たちの心になにかの影響を与えていたようである。それに、多くの教師がテアを認めるようになっていたことは生徒の目にも明らかであり、それもあつて、リサイタルをきっかけとして生徒からのテアへの視線が好意へと変わりつつあるようだ。

男子生徒に限って言えば、テアの整った容姿を見、テアに近づきたいという思いがもともとあつたこともある。彼女に対する間違つた噂が、それにストップをかけていただけで…。

けれど、とエツダは思う。

確かにテアのピアノはそれなりのものなのかもしれない。エンジユ・サイガを師としているのだから当然と言えば当然だ。だが、侮つて

いた分、予想以上に上手に聴こえた、その程度のものなのではないか、と。

そう。思ったよりもピアノができるのかもしれない、それでも私の方が上のはず……。

容姿も、家柄も、ピアノでも。全てにおいて。

エッダは、四大貴族の一、オイレンベルク家の長女として、それにふさわしい教育を受け、ふさわしい教養を身につけ、ふさわしい品格を身に纏っていた。

それが平民に負けるなど、ありえない。

しかしディルクが選んだのは、平民であるテア。

それゆえ、エッダはテアを……憎悪せずにはいらなかった。

それは、テアがフォン・オイレンベルクを憎むのと同様に。

幼い頃から、エッダは王子だったディルクにずっと憧れてきた。

彼がまだフォン・シーレを名乗っていた頃は、婚約者候補の筆頭として名が挙がっており、いつか彼の隣に立つのは自分だと、そう思っていた。

そして、いつか彼の隣に立つ、それを目指して女を磨き、努力してきた。

ピアノも、始めたきつかけは教養のひとつであったからだが、ディルクが同じようにピアノを、しかも相当に打ち込んでいると知り、熱心に練習に取り組むようになったのである。

シューレ音楽学院に入学したのも、ディルクに追いつくため。

オイレンベルク家は難色を示していたのだが、それを押し切ってここに入学した。

それなのに、私ではなくあのような女が選ばれるなんて、許されることはありません……。

学院祭実行委員に立候補したのも、少しでもディルクに近付くためだ。

ディルクは昔と変わらず優しかった。

学院祭の仕事で困ったことがあればすぐに手を差し伸べてくれた。

だが、それは誰にでも同じ。

平民であっても貴族であっても、エツダでも、他の人間でも…ディルクの態度は変わらない。

それでは、駄目なのだ。

エツダはディルクの特別になりたかった。

彼が王族であった頃も、今も。

エツダはディルクを慕ってやまない。

だからテアが許せない。

彼とパートナーとなり、よりディルクと近い存在になったテアが、幼い頃からディルクを慕ってきたエツダを差し置いて、突然に現れたただの小娘がディルクと肩を並べているなど、許されることではない。

テア・ベールンスという存在は、エツダにとって邪魔なものでしかなかった。

あの女をどうすれば排除できるでしょうか……。

学院祭実行委員の仕事によって、ディルクとの距離は詰められた。しかし、ディルクがエツダにもテアにも優しいのも相変わらずだ。彼らが前期でのパートナーとなってしまうのはもう仕方がない。だが、後期には…これからは、エツダを選んでもらわなくてはならなかった。

ディルクがテアをパートナーに選ばないように、何とか仕向けられないか。

このままでは、またディルクがテアをパートナーにするとということがあるかもしれない。

それは避けなければならない…。

どうしたら良いのでしょうかね。嫌がらせは続けていますがあの平民よほど神経が凶太いと見えて、落ち込む様子もなし…。自分から退学するように追い込んでしまつのが一番早いと思ったのですが…。

そして、エツダを囲む取り巻きたちは、そのように真剣に考え込む

エツダに話しかけられず、一体彼女は何を考えているのだろうか顔を
を見合わせていた。

エツダはオイレンベルク公爵の長女であり、彼女に取り入ろうとする
者は多い。

エツダの誇り高い様子に憧れて近づいてくる女性も男性も絶えるこ
とはなかった。

エツダは、そうした自分の人望をよく理解しており、それを利用す
ることを躊躇いはしない。

実を言えば、テアに対する嫌がらせの大半は、エツダが取り巻きに
命じてやらせたものだった。

エツダは学院に使用人を数人連れてきているが、使用人をそのまま
使って何かをやらせるといざとなった時にエツダの責任が問われる。
それを考えた時、エツダに近づいてくる者たちは非常に都合の良い
存在だった。

テアを快く思わず、かつエツダを崇拜する貴族に、そっと唆すだけ
で、直接言葉にせずとも思うように動いてくれるのだ。

危険も避けられ、素晴らしいことだった。

そうして取り巻きに見守られながら思索していたエツダは、ふと思
いつくことがある、一人微笑んだ。

エツダの微笑みは咲き誇る薔薇のように美しく、周りにいた者は思
わずどきりとさせられる。

エツダはおもむろに、テーブルを囲む者たちをぐるりと見回すと、
その一人に目をつけて艶やかに笑う。

そして、取り巻きたちが聞き惚れるような美しい声で、そっと「お
願い」を口にした。

duet 1 (後書き)

リサイタルも終わり、学院祭へと話は移ってゆきます。
リサイタルをきっかけに変わっていくテアの周囲。
そしてエツダも今まで以上に画策を進めていくようです。

学院際に向けて本格的に練習を始めて、少し経ったとある放課後。こっそり、という気分でテアは講堂裏の森に足を踏み入れていた。

一度散策したいと思っていましたが、まさかこういう目的で来ることになるとは…。

嘆息する彼女の手には、小さな白い箱と小さなスコップがある。

スコップはローゼの園芸用品を失敬してきたもので、白い箱は、昨日彼女に届けられたものだった。

寮の住所に送られ、管理人経由で受け取った小さな箱。

差出人が分からず、訝みながらテアは蓋を開けた。

入っていたものは、切り裂かれた鼠の死骸、だった。

驚いて蓋を閉めたのはすぐ。

テアは新しい嫌がらせだと悟った。

恐らく、テアに対する分かりやすい脅し。

お前もこうしてやるぞ、という…。

リサイクルをきっかけに、一部の生徒は態度を軟化させたが、一部の生徒にはテアその評判はますます面白くないものになったのだらう。

テアは、慣れてきた、生徒からの悪意を冷静に分析し、ローゼに見つからないようにその箱を隠したのだった。

動揺が皆無というわけではない。

だが、生き物の死体に限らず、もっと残酷なものを、テアは幼い頃からの逃亡の旅の中で何度も見てきていた。

だから一番に強く思うことは哀れみと申し訳なさ、だった。

家に住み着く鼠は駆除されるものではあるが、テアのためにこの鼠は切り刻まれるという残酷な殺され方をしたのだ。

だからテアは、せめて土に返してやろうと、誰にも見咎められないであろう、ここに来たのだった。

ローゼやディルク、心優しい仲間たちが知ればまた心配をかけてしまっただろう。

森の中に入ってしまったテアは、そう奥へは踏み込まず、柔らかそうな土を選んで掘り始めた。

ある程度の深さになったら、箱ごと埋めてやる。

土を盛ったテアは、静かに瞑目し、手のひらを組んだ。

彼女は信仰にはそう厚くないが、神のもとにいった魂が安らかであることを祈る。

ふっと息を吐いたテアは、すっと立ち上がるとスコップを持って踵を返した。

「ローゼに気付かれないうちに返してきましょう…」

そう呟いた時。

「テア？」

声をかけられて、テアはびくりとした。

聞き覚えのある美声である。

特に悪いことは何もしていないのだが、勝手に土をいじったのは良くなかったかも知れないが、彼女はぎくり、とする。

「ディルク…」

声だけでそうと分かって振り向くと、やはりそこにいたのはディルクだった。

「こんなところで…、どうしたんだ？」

ディルクはヴァイオリンの練習に行く途中らしく、その手にケースを持っている。

彼は躊躇わずテアの方に歩み寄って来た。

「え…と、前からこの森を散策したいと思っていたので…」
それは嘘ではない。

だが、ディルクは訝しげな顔を隠さなかった。

「そのスコップは？」

「何か珍しい植物があつたらローゼにお土産でもと思ひまして」
我ながら言い訳がうまくない、と思う。

ディルクの視線が、苦しい。
しかし、ディルクは常と同じようにテアに接した。

「…そうか。それならいいんだ。勝手に掘り返したりしたら学院側に何か言われるかもしれないが」

「そ、そうですね…」

ひやりとしながらテアは頷く。

「だが良かった。また誰かに呼び出されたのかと思つて心配した」

「それは…大丈夫です。リサイクル以来、皆さん気さくに話しかけてくれるようになりましたし」

それはディルクも把握していた。

ディルクがテアをパートナーにしたのは同情からだと思われていたが、彼女のピアノの腕を見込んでのことだったと、生徒間での話が修正されている。

だが、全員が変わつたわけではない。

ディルクは思いながら、何かを隠している様子のテアを見つめた。

ディルクがここに来たのは、テアを探していて、ある生徒がこちらに向かつているのを見たと教えてくれたからだ。

まさかまた、と思つたが、特に呼び出されたとか、そういうわけではないらしい。

だがディルクにテアのことを教えた生徒は言つた。

彼女は何か箱のようなものを持つていた、と。

しかし今のテアにはそれがなく、彼女の背後の木の根元には掘つたような跡がある。

ローゼへの土産とやらを持つている様子はない。

聞いてもいいものかどうか。

ディルクは迷つた。

余計な詮索は彼女の望むところではないだろう。

しかし。

知りたい、とディルクは思う。

テアのことを、もっと。

「あの…、ディルクは何故ここに？」

「ああ…」

首を傾げられて、ディルクは答えた。

「お前を探していたんだ。学院長に頼まれて」

「学院長に？」

テアは疑問符を浮かべた。

「何か渡したいものがあるとおっしゃっていた」

「そう…ですか。では学院長のところに行けば？」

「ああ。学院長室にいるそうだ。場所は分かるか？」

「大丈夫です」

テアは苦笑した。

最初に会った時、迷っていたところを助けられているから、照れくさい気分になる。

「では学院長の用を済ませてから泉の館に行きます。練習…しますよね？」

「学院祭まで間がないからな。やりたい」

「はい。では、行ってきます。わざわざありがとうございます」

テアは笑顔で頷いて、早速駆けて行った。まずスコップを置いて来るつもりなのだろう、寮の方へ向かって行く。

さてどうするか、とディルクは思った。

ゆっくりと彼は土の色が違う場所へ近付き、かがみこむ。

駄目だ、と思う。

けれど。

意を決して、ディルクは手を伸ばした。

心臓に悪かったと、スコップを寮の部屋のもとの場所に戻してきた

テアは、学院長室に向かいながら思った。
怪訝そうな様子だったデイルク。

あんな風に嘘をつくのは本当は嫌なのだけれど、本当のことを言うのも気が進まなかった。

ただでさえ忙しくしている彼の負担になりたくない。

教員棟の一階の奥に学院長室はある。

テアはドアをコンコンとノックした。

中から声がして、秘書の男性がドアを開けてくれる。

顔見知りのその男性はテアを認めて少し笑んで見せると、彼女を通してくれた。

「失礼します」

「わざわざすまなかつたな」

大きなデスクを目の前に座っていた学院長は、テアに向かって穏やかに告げた。

「いえ…」

「そこにかけて下さい。少しだけ待っていてもらえるか？」

「はい」

さつと学院長が書類に目をやる間に、秘書がテアに紅茶を出してくれた。

デスクの前に置かれたソファはふかふかとしていて、なんだかテアは落ち着かない。

学院長はすぐに書類から目を離すと、秘書に何事かを指示し、テアの前のソファに腰を下ろす。

「待たせてすまなかつたな」

「いえ。今日は何か…」

学院長は気安い微笑みを浮かべた。

「そう固くなることはない。いつも秘書任せだからな、今日は久しぶりに直接話したいと思って足を運んでもらった。……リサイタルを聴かせてもらったよ。素晴らしい演奏だった」

「いらして良かったですか……。すみません、気付かずに……。ありがと

うございます」

テアは恐縮した。

「自慢してやったらあいつが悔しがっていた」

「おじさんが？」

学院長の言う「あいつ」が彼女の「あしながおじさん」であるとテアにはすぐに分かった。

学院長と「おじさん」は友人同士なのだ。

学院長がテアにこうして気さくに話しかけてくれるのも、「おじさん」との繋がりがあるからである。もちろん、それだけでなく、テアのピアニストとしての才能に期待をしているということもあるだろうが。

学院長は悪戯っぽく笑うと、机の上に置いてあった少し大きめの箱をテアの前に置き直した。

「あいつからだ」

「え……」

「初りサイタルの成功を祝って、ということらしい」

いつも、「あしながおじさん」からの手紙や荷物は学院長経由でテアに渡される。逆にテアからの手紙も学院長経由だ。

「おじさん」があちこちを飛び回っていて一箇所にとどまらない人であるというのが理由のひとつ。

もうひとつの理由は、テアと「おじさん」の関係は余り表に出したくないという事情があるからだだった。

いつもは学院長の秘書がテアに手紙を届けて、そしてテアからの手紙を預かってくれていた。だからテアは、学院長の秘書と顔見知りなのである。

そうして、差し出された箱に、おずおずとテアは手を伸ばす。

「開けてみるといい。手紙も中に入っているそうだ」

「はい……ではお言葉に甘えて」

テアは丁寧に包装をはがすと、箱の蓋を開けた。

そこには。

「これは…、ドレス…?」

テアは驚きに目を見張った。

言葉の通り、空色のドレスがそこには収まっている。

リサイクルの時にドレスを借りたことを手紙に書いたのだが、それを気にしてくれたのだろうか。

テアは嬉しくなると同時に申し訳なく思った。

「サイズは大丈夫なのかと聞いたら、何の根拠か間違いないと断言していたよ。心配しなくてもあいつの見立てにまちがいはない」

テアの気兼ねを払拭するように、学院長は冗談ぽく言った。

テアは学院長の配慮にそつと笑う。

「…はい。ありがとうございます」

「それは今度会った時あいつに直接言っでやるといい」

「…そうですね。そうします」

テアは頷いた。

「学院生活はどうだ」

「楽しいです」

テアは思った通りに答えた。

「先生方がよくしてくださって、授業は面白いですし、図書館の蔵書も興味深いものばかりですし、毎日ピアノが弾けて…」

テアは嬉しそうに語って、ふと言葉を途切れさせた。

「そういえば…、あの、サイガ先生を私の担当にしてくださいだったのは…、」

学院長は意味深に笑った。

「彼は良い教師だろう?」

「はい、それは、もちろん」

「それなら良かった。学院の生活を楽しいと言ってくれるのは何よりだ。パートナーも無事に決まったそうだな」

学院長が明言を避けたので、テアは深く追究するのを止めた。

どうしてエンジュ・サイガのような人を教師に招いてくれたのか、それが少しテアの気にかかっていたのである。

もしかしてテアの後援者が「あしながおじさん」であることが関係しているのだろうか、テアはそのことを気にしていた。けれど、それはテアの考えすぎだったようだ。

学院長は、ただ「あしながおじさん」の存在があるだけで、特別なはからいをするような人ではない、とテアはそれを見抜くことができていた。

「あしながおじさん」の威を借りるような真似をしているのでなければ、それでいい。

「はい。ディルクのような方が私のパートナーになってくださるとは思いもしないことでしたけれど…。随分と助けられています。私ももつとあの方の役に立てれば良いのですが…」

憂慮の表情をテアは浮かべた。しかし学院長は穏やかに諭す。

「そう気張ることはない。ディルクが好きでしていることだ。何より、君がパートナーとなったことが彼にとって一番の幸いだろう」「

「そんな風に言っていたら、私は…」

テアは謙遜がすぎる。

学院長は思いながらそれ以上は言葉を重ねなかった。

ディルクはずっと自分の理想の音を探していた。学院長はそれを知っている。

それが見つかつたのだから、それに勝る喜びはないだろう。

しかしそれを彼女に言うべきは自分ではない。

「学院祭のコンサートで、二人の演奏が聴けるのを楽しみにしているよ」

学院長が温かく微笑みかけると、テアも緊張をほどいて微笑んだ。

「ありがとうございます。来て下さる方に少しでも楽しんでいただけるような演奏ができるようにしたいと思います」

テアの言葉に、学院長はさらに笑みを深めた。

あいつにはもつたいたないくらいよくできた娘だ、全く…。

と、友人である「あしながおじさん」にテアと言葉を交わしたことを話して悔しがらせてやろう、と意地悪く思いながら。

『ディルク……』

微笑んでいる。

あの人が、微笑んでいる。

いつもの気丈な微笑みだ。

寂しさを辛さを押し隠す、綺麗な笑顔だ。

あなたはどうして俺に笑いかけてくれる？

俺はあなたを守れなかったのに。

どうしてそんな風に微笑むんだ？

屈託のないあなたの笑顔を見たいのに。

俺では駄目なのか。

俺は守れないのか。

俺は大切なものを。

テア……。

「…ディルク！」

肩を強くゆすられて、ディルクははっと目を覚ました。

目の前に、兄弟であり親友であるライナルトの心配そうな顔がある。

「大丈夫か。魔されていたぞ」

「すまない……」

ディルクはゆっくりと身を起こした。

「それに、ちゃんと髪を乾かさないと風邪をひく」

「ああ……」

その言葉に少し苦笑して、ディルクは肩に引っかかっていたタオルを頭にかぶせた。

夜である。

ディルクはシャワーを浴びてベッドに座ってからそのまま、眠ってしまったようだった。

ディルクの次に浴室から出てきたライナルトも、髪に滴がついているのを無造作に拭っている。

思わずディルクが重い溜め息を吐くと、どうした、とライナルトは声をかけた。

「すまない……」

無意識だったディルクは謝り、

「……少し昔のことを思い出してな」と呟いた。

夢を見ていた。

昔の夢と、それから、今の夢。

昔慕っていたあの人と、テアの微笑みが重なっていた。

あんな夢を見たのは　そう、テアへの陰湿な嫌がらせの一端を見てしまったからだろう。

犯人を探し出して、止めさせることも容易ではない。

そんな悪質で、残忍な、人の心をいたぶるような行為を、ディルクは心から疎んじていた。

一方で、それを隠して微笑むテアがもどかしくてならない。

一線を引かれて遠ざけられているような……寂しさ。

守らせてはくれないのか、頼ってはくれないのかと詰りたくなる気持ちも確かにある。

だが、迷惑をかけたくない、心配をかけたくない、その気遣いが分かりすぎるほどに分かるから、ディルクには何も言えなかった。

結局、テアの隠し事をひとつ知ってしまったても、何もできずにいつ

もと同じように振る舞っている。

何もできない自分が不甲斐なく、ディルクは自分を嘲笑う。

ライナルトは、自嘲気味のディルクを横目で見て、そうか、とだけ頷いた。

昔の様々な思い出や思いを、ディルクはライナルトと共有している。だからこそ、二人に多くの言葉はいらなかった。

ディルクは誤魔化すように、

「…少し、疲れているのかな」と弱音を口にする。

ライナルトは、鬨りのある親友の顔を眺めて、

「…確かに最近、お前は根を詰めすぎだ」
そう事実を指摘した。

最近のディルクと言えば、日中は当然普通の生徒と同じように授業を受け、学院祭が迫ってきた放課後は常にその準備に追われ、さらにその後でテアと学院祭のコンサートに向けた練習をし、寮に戻ってきたと思ったら授業の予習や課題のレポートを仕上げる、という息を吐く暇もないような毎日を過ごしているのだ。

少しは手を抜ければ良いのだろうが、ディルクはそれができるような性格ではない。

「あまり一人で背負いこむな。もっと肩の力を抜いた方がいい」
親友の言葉に、ディルクは笑ってしまった。

それは、自分がテアに言いたいことだと。

「……分かつてはいるんだが、な」

テアも、こんな思いをしているのかもしれない。

そう考えて少しだけ笑ったディルクに、ライナルトは思案するように首を傾けていた。

「遠乗り？」

テアとディルクの言葉が重なった。
朝の食堂である。

テアとローゼが隣同士で、その前にディルクとライナルトが座っている。

他の寮生たちも授業に間に合うようにと食事をするざわめきの中で、ローゼが元気良く頷いた。

「ええ。明日の休日、四人で行きましようよ。最近、学院祭学院祭って、何だか切羽詰まったような雰囲気じゃないですか。今こそ、学院祭に備えて、余計な肩の力を抜くためにも、休養が必要だと思っ
うんです」

「それは確かに良い考えだとは思いますが、俺たちが付いていってはお前たちの邪魔なのではないか」

力説するローゼに、ディルクはざりと口にした。

「何を言っんですか」

「何を言っんだ」

赤くなるのはローゼ、平然としているのはライナルトである。

「ダブルデートと言う言葉を知らないのか」

「だっ……」

今度赤くなつて絶句したのはテアだった。ディルクも何とも言えない様子である。

しばらく妙な空気が流れたが、持ち直したローゼが話を元に戻した。
「……ともかくですね、皆で行きませんか？ 特にテア、入学してからレポートだりサイタルだコンサートだつて、ずっと学校に引きこもりつきりじゃないですか。せつかく学生の身分になったんです、学生らしくぱーっと遊ぶってこともしなくちゃ損ですよ絶対！」
「そ、そうですね……」

熱意のこもった言葉に、テアは頷くしかなかった。

確かに、入学してからずっと学校にいるばかりであり外に目を向けない日々だった。

モーリッツのところにいる時も「ターゲット」で「逃亡者」である

テアはそう遠くへは行けなかったし、それ以前はずっと逃げ続ける生活で、純粹に楽しむためにどこかに行くということはしたことがない。

「行ってみたい…かもしれせん」

ローゼに押されつつも、自分の意思でテアはそう思った。

テアがそう言えば、あとはもう決まったようなものである。

「デイルクも行きますよね？」

「ああ」

肩を竦め、苦笑を浮かべながら、デイルクは頷いた。

別に行きたくないというわけではないのだ。

実際に親友たちのデートを邪魔したくはないという思いもあるし、休日に予定していた仕事や勉強もあるけれど。

パートナーとして、テアとの絆を深めるために、よりより演奏をするためにも、息抜きは必要だ。

楽しそうにローゼと笑い合うテアを見て、デイルクはふと微笑した。

「仕事はおあずけだ」

デイルクの微笑みを見て、ライナルトがしてやったりと笑う。

親友とそのパートナーの共謀に、デイルクは潔く乗せられることにした。

そして、約束の休日、四人は学院から少し離れた乗馬クラブにやってきていた。

ローゼやライナルト、そしてデイルクが会員として利用しているクラブだ。

予約をしていない彼らが顔を出しても、スタッフは笑顔だった。

四人の若者たちの美貌に、他の客たちは受付の手を止めて見惚れてしまっている。

テアは他の三人と自身を比べてしまって、少し肩身が狭いような気

もしたが、それはいつものことながら、謙遜というものだった。

今日の四人の服装は、乗馬にふさわしいものだ。

上から、ポロシャツに、キュロットに、ブーツ。

身体の線が分かりやすい服装で、ほどよく筋肉のついた、均整のとれた体つきのディルクとライナルトはよりそれが強調されて見えた。ローゼも、長い髪を高いところでまとめて凛々しい装いとなっている。

普段と一番ギャップがあるのはテアだった。ローゼのようにポニーテールにはしていないものの、髪をひとつにまとめ、眼鏡を外し、綺麗なプロポーションが明らかになっている。

制服やドレスとはまた違った、爽やかな姿がディルクの目に眩しかった。

スタッフに案内されて、四人は厩舎に入っていく。

迷わず、ディルクは身体の大きな黒馬のもとへ、ライナルトは白馬のもとへ、まっすぐに向かった。

実は二人が目の前にする黒馬と白馬は、二人が王宮を出る際に連れてきた、幼い頃からの二人の愛馬なのである。二人で馬小屋を所有管理することができなかつたので、この乗馬クラブに預けてあるのだ。名は、黒馬の方をカイザー、白馬の方をユリウス、という。二頭は、久しぶりに会う主に親しみをこめて頭を寄せていた。

一方、ローゼには、その希望にかなった鹿毛の馬をスタッフが選んで引き渡している。

問題は、初心者であるテアだった。

「こちらでしたら、特に優しい気性ですし、初心者の方にも気軽に乗っていただけたと思います…」

そうスタッフが薦めてくれ、少し不安に思いながら、テアは親友にどうだろうかと目で尋ねた。

「そうですね…。せっかくですし、一人で乗ってみるのもいいかと思えますけど…」

ローゼは考えるような顔で、

「とりあえず今日は、ディルクと相乗りしてみる、というのはどうですか？ 万が一のことを考えると、ディルクが一番信頼できます。その方が、パートナーとしてもきつと良いと思いますし……」
もちろん、初心者であるテアにはスタッフがついてくれることになるだろうが、そうなる慣れているディルクとテアはなかなかいっしょに、ということにはならない。ディルクもテアに乗馬を教えることはできるが、彼もカイザーを走らせたいたろっし、そうすると相乗りというのが良い手段に思えた。
せっかくパートナー同士でやってきたのだから、それが良いだろう。

ローゼはそう判断し、ディルクの方を向いた。

「カイザーなら、相乗りしても大丈夫ですよ。どうです、ディルク？」

「ああ、俺は構わない」

ローゼはにつこりと笑って、

「そういうことで、テア」

「え、え、え、えっ……？」

事態を把握して、テアはうるたえた。

「じゃあ、私とライナルトは先に行ってきますから。二人は二人でゆっくり楽しんでくださいね」

「ローゼ、」

ローゼは馬を引いて外に出ると、ひらりと馬にまたがり、苦笑するライナルトと共に駆けて行ってしまった。

颯爽と駆けていく二人は凛々しく見惚れてしまうものがあつたが、残されたテアはこれからディルクと相乗りするという状況で置いていかれて、少々茫然としてしまう。

「それでは、お二人で行ってらっしゃいませ」

スタッフは、何事もなかったかのように、ディルクとテアにも頭を下げた。

「テア、とりあえず外に出ようか」

「は、はい…」

慣れぬテアは、もうデイルクに従うしかない。

二人は広く広がる草原の隅に出た。

固くなっているテアに、デイルクは微笑みかける。

「緊張しているのか？」

「…はい、少し…。何分、初めてのことなので…」

しかも相乗りと言うことは、普段よりもずっとデイルクの近くにいろことになるのではないだろうか。

「誰でも最初は怖いものかもしれないが、大丈夫だよ。…俺も、小さい頃からずつとやっているし、カイザーは利口なやつだから」

「はい…」

テアが少し視線を上げると、カイザーの、大きな黒々とした瞳が、テアをじつと見つめていた。

主人と言葉を交わすのにふさわしい人間かどうか、確かめるかのよう。

「…よろしくお願いします」

腹をくくって、テアはデイルクとカイザーに向かって頭を下げた。

カイザーはテアを認めたらしく、テアの方に頭を寄せてくる。

テアは少し戸惑ったが、その首筋を優しく撫でてやった。

「それじゃ、早速行こうか。ヘルメットをかぶって」

「はい」

デイルクの言うとおり、テアが乗馬用のヘルメットをつけ、手袋をしっかりとはめている間に、デイルクはカイザーにまたがった。

「テア、手を…」

デイルクに支えられ、テアはカイザーの背に乗った。

デイルクがテアの後ろで手綱を握り、テアがデイルクに凭れるような形で、デイルクはしっかりとテアの身体を支える。

「どうだ？」

近いです、という言葉でテアは呑み込んだ。

体温が、伝わる距離だ。

顔がほのかに赤くなるのを、この体勢では見られなくて済むとテアは思いながら、他の感想を口にした。

「思ったよりも、視界が高いですね…」

「そうだな。では、いつもとは違う高さから景色を楽しんでみるか？」

ディルクは、ゆっくりとカイザーを歩かせ始めた。

動き出して、テアは身体を固くしたが、少しずつ身体の安定のさせ方が分かってくる。

「…ゆ、揺れますね」

「酔いそうか？」

「いえ、何だか、メトロノームみたいで面白いかもしれません…」

「それはよかった」

楽しそうにディルクは笑った。

あ…。

テアはふと気付く。

最近のディルクは、こんな風に屈託なく笑うことがなかった、と。

ずっと忙しそうだったディルク。練習を一日くらい休みにしたらとテアは言いだそうとしたけれど、何事も一生懸命な様子のディルクに、止めるようには言えなかった。

まだ、今のテアには遠慮がある。パートナーとなって、既に一月は経っているが、「まだ」一月しか経っていないのだ。

やはり、こうした時間が必要だったのだ…。

テアはディルクの体温を感じながら思う。

空は穏やかに晴れていて、肌寒いけれど風は心地が良い。

ぽっかぽっかと、馬が規則正しい足音で進んでいく。

これほどまでに、穏やかな時間が過ごせるとは、ほんの一年前までは想像もできないことだった。

母以外の誰かといっしょにいて、こんなにも警戒を解いてしまえるなんて…。

「不思議ですね…」

「何がだ？」

「いえ…、ここに入学するまでは、こんな風に時間を過ごすことなど考えたこともなくて…。とても不思議な気がします」
感慨深げにテアは呟く。

ディルクは迷いながらも、少しだけ踏み込んだ質問をした。

「…出会う前のお前は、一体どんな風に過ごしてきたのか、聞いてもいいだろうか」

「…ええ、」

テアは躊躇いながらも頷いて、思索するように続けた。

「そうですね…、幼い頃に母と旅をしていたことはお話していたと思うのですが…、その後母が体調を崩して、それがきっかけでローゼのところへ居候するようになったんです」
静かな口調でテアは語る。

「母は私にとって唯一の家族でしたから、私はずっと母の側にいました。モーリッツさんのお手伝いをしながら…、あ、モーリッツさんのことはご存知でしょうか、ローゼの」

「大丈夫だ。分かる。何度か顔も合わせたことがあるからな」

「そうでしたか…。そう、モーリッツさんのところで今までにないくらい安心できる生活を送らせてもらって…。母が私のピアノをいつも好きだと言って、聴いてくれたので、私は毎日のようにピアノを弾いていたんですよ。…今と同じですね」

テアはそう言っただけで苦笑した。

「すみません、大して面白い話はできそうにないです」

「面白いかどうかは、構わないさ。俺は…、もっとお前のことが知れたらと、そう思っているから」

「え……」

テアはディルクを見上げた。

ディルクは前を向いたまま、真摯に口を開く。

「お前が話したいことなら、何でもいい。色々なことを聞かせてほしい。お前が自分のことを語ってくれるのが嬉しいと思うよ」

テアは束の間黙った。

テアには、誰にも言えないことがある。

大切な人たちを守るために、テアはずっと黙秘しなければならないのだ。

多くのことは、きつと語るができない。

それでも、ディルクが知りたいと思ってくれたことは、少し怖くもあり、嬉しくもあった。

「……ディルクも、たくさんのお話を話してくださいますか？ 何でもいいんです。私も、話せることは話したいと思います…。だから、あなたも…。私もその、知りたい、ですから…」

口にしてしまつてから、テアは恥ずかしくなつて顔を伏せた。

ディルクが、ふ、と微笑む気配が伝わる。

「では、お互い言葉をなるべく惜しまないでいようか」

「はい…」

カイザーはゆつくりとそんな二人を乗せていく。

二人の呼吸に合わせるように。

duet 3 (後書き)

えー、一応確認しておきますと。

この二人はまだ、無 自 覚 です。

今回はちょっとした休憩ということで遠乗りへ。

遠乗り、というと少し語弊がありそうですが、

この単語が使いたかったんです…。

次回もこんな感じでちょっと密着気味でゆきます。

しばらくの間、馬上で他愛もない話をして笑い合いながら、テアとディルクはゆったりとした時間を過ごしていた。

毎日時間に追われていた二人には、本当に良い息抜きになったようである。

この乗馬クラブは広く、ほとんどまっすぐやってきた彼らだったが、まだその終わりには辿りつかないようだ。

時折、他の客が馬を走らせたり、ジャンプするのを眺めながら、リズムカルに進んでいくカイザーの足並みを二人は楽しんでいた。

しかし、しばらくして、ふと会話が止み、テアがディルクに寄りかかってきたので、彼は首を傾げた。

「…テア？」

あまりの心地良さゆえか、テアはうとうととしていた。

これは珍しい、とディルクは思う。

テアは生真面目な性質で、普段から居眠りをしているところなど見たことがないし、ローゼも「テアは警戒心が強い」とよく口にしてるから。

ローゼの言葉を、最初はそうだろうかと、ディルクは疑問に思ったものだったが。

今では、ローゼのその言葉がよく理解できる。

テアは時折抜けたところも見せてくれるが、基本的にはとても慎重な性格だ。言葉の選び方や、行動の端々から、ディルクはそれを感じ取っていた。

謙虚すぎる言動も、もちろんテアがもともと控えめということもあるのだろうが、引くことで相手から離れ、相手のことをよく見て、判断するための一つの手段でもあるのではないかとディルクは思う。

ローゼや親しい人間といる時にはそういった警戒の態度は薄れるものの、テアはとても堅い鎧や盾のようなものを、その心にしっかりと持っているようだ。

まるで、フォン・シーレを名乗っていた頃の、親友と「彼女」しか信頼できなかった、デイルクのように…。

しかし、テアがこうしてデイルクの前で気を緩めてくれるということとは、テアはデイルクに少しでも気を許してくれているということだろう。

デイルクは、無防備なテアの様子が嬉しかった。

カイザーの背に彼女が乗った時もそうだった。

初めてのことでほんの少し怖そうな顔はしていたが、デイルクに対する不信などはまったくなかった。

むしろ、頼るように手を握られて、デイルクは本当に嬉しかったのだ。

けれど、それと同時に、少々動揺を覚えたのも事実である。

まるでデイルクがテアを抱きしめるかのような格好で、これまでになかった接触到デイルクの心臓は早くなっていた。

触れることに躊躇いも嫌悪もない。

それなのに、どうしてこんなに落ち着かなくなるのだろうか…。

デイルクはそのことに戸惑いを覚えていた。

テアの前では、そんなことはおくびもださなかったけれど。

学校の中で、音楽に関することばかりで、テアと接してきた。いつもとは違う状況だから、こんなにも落ち着かないのか。

デイルクには、まだ分からなかった。

これが不快でないというのが、またよく分からないのである。むしろ嬉しいと感じているのだから。

「カイザー」

デイルクは馬を止めた。

意識のないテアをこのまま乗せて歩くと、彼女が滑り落ちてしまう危険性もある。

ディルクは力強くテアを支えながら、カイザーから降り、テアを抱き上げて下ろした。

テアが起きるだろうか、と心配したが、驚くほどにテアは無防備にディルクに体重を委ねるばかりだ。

ディルクは少し迷ったが、近くの木陰に入り、腰を下ろして自分の足を枕にテアを寝かせてやった。

カイザーは自由になってもどこへ行くこともなく、忠実にディルクについていく。

そして座りこんだディルクに、そつと頭を撫でつけた。

「すまないな、しばらく休憩だ。あとで少しでも、思い切り走れる時間をつくろう」

気にするな、と言うようにカイザーは静かに瞬きをした。

ディルクから少し離れて、彼は気を遣うようにその木のそばから少々離れた位置で草を食む。

ディルクは主人のことを良く分かってくれる愛馬に感謝して、テアに視線を向けた。

木漏れ日の下のテアは、普段の理知的な瞳をまぶたの下にしまっていて、ややあどけなく見える。

「疲れが溜まっていたのだろうか…」

なぜか胸をつかまれるような思いがして、ディルクは誤魔化すように小さく呟いた。

目の前のテアは、ディルクのそばで安らいでくれている。

そしてディルクもそうだった。

その存在に癒されている自分を感じていた。

テアのピアノが魅力的で、パートナーになった。彼女のピアノが好きだった。

だが、テアがピアノを弾いていなくとも、彼女の存在、それ自体に惹かれている。

とても、大切な存在だ。

ディルクはそれを実感していた。

馬を走らせ、ローゼとライナルトはディルクたちと合流しようと、来た道を戻っていた。

「あの二人、少しは進展したでしょうか…」

「やはりそれが狙いか、ローゼ」

「だってはたから見ると丸わかりなんですけど、本人たちがどうにも鈍感すぎて…。余計なお世話だと分かっているけど、もどかしくてやっちゃんんです」

テアとディルクに相乗りを進めたのは、初心者のテアがこの時期に万が一落馬などしたら大変なことになるから、ディルクがいてくれた方が信頼できるし、よりパートナーの絆を深められると考えたからなのだが、やはりそういう理由もあったローゼである。

「…ディルクは、王宮にいた頃からそういった類のことはね退けていたから…。権力を笠に着て女性を思い通りにしようとする馬鹿もいるが、大きな権力があればある程、些細な行動にも気をつけなくてはならない。ほんの小さなことが、多くの人の人生を変えてしまうことに繋がりがかねない…。恋愛も個人の自由になるものではない…」

それはライナルトもそうであったのだろう。

ローゼは気遣わしげに自分のパートナーを見つめた。

「それに、王族や貴族というものには正妻を持ちながら愛妾を側に置くことが慣習としてある。父を…、いや、皇帝やその王妃たちを見ていれば、無意識にでも意識的にでも遠ざけたくなる気持ちも分かるぞ」

淡々と、父や母のことをまるで他人のように、ライナルトは言った。

「でも、今のあなた方は、ただの『ライナルト』と『ディルク』ですよ。身分にも縛られない、自由な…」

フォン・シーレを捨てても、王族の一員であったという過去が消えるわけではないし、流れる血は間違いないく王族のものだ。言葉にしたように、簡単なものではない。

それを分かりながらも、ローゼはきっぱりと言った。

ライナルトはだから、微笑む。

「ああ。私たちは自由だ。そうでなければお前ともこうしていられなかった。…だから私もあいつのことを応援したいと思っている。お前がテアを応援したいのと同じに」

「そうですね！」

俄然、ローゼは張り切った。

そうしているうちに、二人はふと視界の隅に立派な黒馬を認めて、スピードを落とす。

「カイザー、ですよね？」

「デイルクたちはどこへ…」

言いかけて、ライナルトは口を噤み、ローゼもすぐに探す二人の影に気付いた。

一本の木の陰、デイルクがその幹に凭れて座り、その膝を枕にしているテアの姿がある。

どうやら、二人ともまどろみの中にいるようだった。

「作戦が少しは功を奏したようじゃないか、あんな風に二人で…、」

「…テアが、あんな風に眠るなんて…」

ローゼの言葉に、隠しきれない喜びと驚きとショックの響きがあった。ライナルトはローゼを見つめた。

「どうした」

「いえ…その。テアは、眠れないはずなんです。こんなに近くに人がいるところでは…」

ライナルトは怪訝そうな顔になる。

「だが、お前たちは今まで共々暮らしてきたのだから？　今もル

ームメイトじゃないか」

「ええ、そうなんですけど…」

今は、テアはローゼのそばでも眠ってくれるようになった。だが、出会ってから随分と長い間、テアは近づけばすぐに起きてしまうほど、ローゼすら強く警戒していたのだ。

地面に耳をつけて、人が近付けばすぐに起き上がれるようにして、あの頃のテアは眠っていた。ベッドの上では眠らなかつた。

テアが唯一心を許していたのはカティアだけだったが、そのカティアも床に伏すことが多く、テアはカティアを守るようにいつも身を固くしていた。

ローゼは根気よくテアと過ごす中で、テアの心を解きほぐしていったのである。

テアがああしてディルクの傍で眠りについていてということは、テアのディルクへの想いはますます明白なように思われた。

ローゼが、親友の想いを応援したいというのは、本音である。

少しでも、テアが心を開く人間が増えたということは喜ばしい。

しかし、出会ってからそう経っていないはずのディルクが、そこまですでに信頼されていると思うと、ずっとテアのそばにいたローゼとしては、何となく複雑な気持ちにもなるのだった。

一方、そんなローゼを見つめるライナルトは、テアには一体どういった「秘密」があるのだろうかと思った。

テアのこと二人の間で話題にのぼる時、時折こうしてローゼは言葉を濁すことがある。エツダ・フォン・オイレンベルクのこと、最初に話題になった時もそうだった。挙げようと思えば、気にかかることは多いのである。

テア自身は、ディルクのパートナーとして申し分ない。

しかし、もしテアに関わる「秘密」がディルクに何かしらの害となるならば、前言を撤回してでも、ライナルトは親友を守るためにテアを彼から引き離すだろう。

ディルクのためにも、テアのことはもっとはっきりさせたいとライナルトは思っていたが、しかし無理に話せと強いることもしたくない。

今は、テアを見染めたディルクの目を、自分の人を見る目を、テア自身を信じたいと思っていた。

何より、ライナルトはローゼを泣かせたくはないので、結局のところ、ディルクとテアの味方につきよりほかにないのだが。

ローゼとライナルトが、それぞれ親友たちについて心を巡らせていると、木陰の下の気配が揺らいだ。

「…ん……？ …お前たち、戻ってきたのか」
目覚めたのは、ディルクのようだった。

起きたばかりではあるが、はっきりした声で、彼は首を馬上の二人に向けるとそう告げる。

「え、ええ。もう大分遅くなってしまいましたけど、皆でランチでも思いました」

ローゼは、背負っていたリュックサックを指して言った。

彼女ははりきって、朝からサンドイッチを作ってきたのである。

「ああ、そうだな。それなら、テアを起こさなければならぬか」
ディルクは少し迷うような、躊躇うような仕草を一瞬見せたが、優しくテアの肩を揺さぶった。

「テア…、テア」

テアは、すぐに目を開けた。

ぱっと敏捷にテアは身体を起こして、警戒するように辺りを見回す。その様子に、ディルクとライナルトは少し驚いたが、やがて状況を思い出したらしいテアは、蒼くなり赤くなり、一言。

「す、すみません…！！」

土下座でもしそうな勢いのテアを宥め、四人はローゼお手製の昼食に舌鼓をうった。

眠ってしまった上、ディルクの足を枕代わりにさせてしまったことが、非常に申し訳なく、たまらないテアだった。いくら心地良かつ

たからと言って、せつかく乗せてくれていたディルクとカイザーに謝っても謝りきれない。

ディルクは、あれだけくつろいでくれたなら、カイザーも自分も嬉しかったがと笑っていたのだが。

「昨日の夜、なかなか寝付かれないみたいでしたしね」
「からかうように、ローゼは言った。」

凶星のテアは反論できない。ディルクと初めて遊びに出かけるというのが何だかんだとやはり嬉しく、その上ライナルトが「ダブルデート」などというから、どうにも寝付けなかったのである。

テアが一人、初めての居眠りの失態に小さくなっていると、ライナルトが言った。

「さて、この後はどうする？ 帰りの時間までもうしばらく、ここにいられるが…」

「そうだな。四人で湖の方でも見に行くか？ 今ならあの辺りは紅葉が綺麗だろう」

「それはいいですね。湖の方には、私たちもまだ行ってませんし」
ディルクが提案し、すぐにローゼが頷いた。

「テアはどうです？ ここには他にも色々な場所がありますけど…」
「

「そうですね…」

行く時に説明された、乗馬クラブでの見どころをテアは思い出しながら、ふと思いついたことを言いあげた。

「希望があるなら何でも言うつと良い。俺たちは良く来ているが、お前は初めてなのだし…」

テア以外の三人は、その通りだという様子で、テアを見つめた。
う、とテアは躊躇い。しかし、やがて、口を開いた。

「…それなら、是非湖の方にも行ってみたいのですが、もうひとつ」
「

黒馬にまたがったデイルクが、颯爽とテアの前を横切っていく。綺麗だ、とテアは良く見えるように眼鏡をかけて、それをじっと見守っていた。

四人でゆっくりと湖の近くを散策し、戻ってきた後である。テアが述べた希望は、こうだった。

一日、デイルクはテアのためにペースを合わせてくれた。だから、デイルクの思うままに駆けてほしい、と。

それを見てみたいのだと、テアは言った。

だからデイルクは、風を切って、心のままに駆けている。凜と伸びた背筋、まっすぐに前を見つめる眼差し。

あの、たくましい腕の中に、先ほどまで自分はいたのだ。

そう思うと、自然と顔が熱くなった。

ローゼやライナルトのように、デイルクも走って行きたかったのではないか、テアは遠慮した方がいいのかと、最初は少しだけ、思ったのだ。

けれど、あまりにもデイルクが優しく微笑むので、楽しそうにしてくれるので、テアはその遠慮を封印した。

だから、デイルクとカイザーが走る姿を見たいと言ったのは、テアの純粋な思いだ。

こうして見つめていられるだけで、幸せだと、テアは思う。

それなのに、それだけでなく、デイルクは、テアに話しかけてくれ、笑いかけてくれ、手を差し伸べてくれる。

幸せすぎて、胸が苦しいような気が、テアはするのだった。

出会ってから、様々なことがあった。

それでも、まだそう長い月日が経ってしまったわけではない。知らないことも多くある。

それなのに、こんなにも引き寄せられている自分が、テアは不思議

だった。

さきほど眠ってしまったことも、自分自身、テアは驚いていた。多少寝不足だとはいえ、母やローゼ以外の人の前で自分が眠ることが出来るなど、考えてもみなかったことだ。

小さい頃から追われていて、それでなくても女の二人旅だったから、危険なことはたくさんあった。自分を守るために、母を守るために、いつだって神経を研ぎ澄ませていなければならなかった。だから、眠っている時も、何かあればすぐにでも起きられるように…、テアの身体にはその習慣が染み付いてしまっているのだ。それなのに……。

急速に、デイルクに心を開いていつている自分を、テアは自覚した。それ自体は、きっと悪いことではないはず…。だって、私はもう追われる身ではないのだから。もっと、多くの人とこれから関わっていけるのだから…。

けれど、同時に身の竦むような恐怖も感じるのだ。信頼すること、自分を他人に預けること…。

今までずっと追っ手から狙われてきたテアは、母以外の人を信頼するということをしらなかつた。

今では、ローゼやモーリッツがいてくれるが、やはり信頼できるのは彼らくらいだ。

いつ誰が自分を襲ってくるのか分からない、そんな風に生きてきたテアには、他人を信頼するということは、とても困難で、恐ろしいことのように思えるのだった。

それでも。

今ある絆を離さず、大切にしたい、とテアは髪を風になびかせ、揺れる瞳にパートナーの姿を映し出していた。

duet 4 (後書き)

今回はディルクがちょっといいところまでいった！
もうひと押し！ という感じでした。

まず、こんな感じでじわじわと、

ディルクに自覚を促したいと思います…。

その夜、テアは勉強机を前に、ピアノを弾くように指を動かしていた。

丸一日楽器にも触れず友人たちと出かけ、息抜きを挟んで後、テアとデイルクは学院祭のコンサートに向けての練習を再開している。そして、既に学院祭は一週間先に迫っていた。

だが、テアとデイルク双方から、焦る気持ちは消えていた。毎日練習を欠かさないものの、コンサートが迫っているという必死さはなく、熱心に練習を重ねつつ演奏を楽しむことを忘れない。

どうやら、ローゼとライナルトのつくつくしてくれた息抜きが、二人に余裕と良い影響を与えてくれたらしい。

お互いの演奏について、以前よりも遠慮せずに指摘をするようになり、日々音が理想とするものへ近づいていくのが、二人ともに実感できていた。

最初に演奏した時よりもずっと、あの方の音が近くにあって……。本当に目の前にピアノがあるかのように身体を動かしながら、テアは今日の夕方の練習を思い出す。

音が近付いたのは多分、デイルクとの距離が以前より近づいたからだろう…。

「ああ、もう、どうしましょう！」
物思いに耽りながら、ひとり練習するテアの後ろから、幼馴染みの困ったと言わんばかりの声が響いて、テアは手を止めた。

くるりと椅子に座ったまま振り向くと、後ろには色とりどりの、何着ものドレスが広がっている。

その中心に、ローゼが腕を組んで立っていた。

ローゼも、パートナーのライナルトと学院祭のコンサートに参加す

る。その時に身につける衣装を、彼女は選んでいるのだった。

「まだ決まらないんですか？」

まだ、とテアが言うのは誇張でも嫌味でもない。ローゼがドレスを広げ始めてから、かれこれ一時間以上経つのである。

「遺憾ながら……ライナルトと立つことを考えるといつまで経っても決まらないですよ！」

その、惚気とも言えるような言葉にテアは苦笑した。

普段は制服のため悩まずに済んでいるのだが、ローゼはライナルトとデートをする度こんな調子なのだ。

好きな相手の隣に立つことを考えて服装に悩むのは誰でもそうだろうが、その好きな相手がライナルトのような男性ならさらにその悩みも深くなるというものだった。何せ何を身につけていても、例えばそれが襪褌であつても、彼が身につければ立派な正装に見えるほど、本人が眩すぎるのだ。

とはいえローゼも誰が見てもそうと認める美女であるし、彼女が持つドレスはどれをとつてもセンスが良く彼女に似合っているから、結局のところテアはどれでも良いのではないかと思ったりする。

それに、ライナルトはローゼが何を着けていても「綺麗だ」と言うだろう。しかもそれは面倒臭がつていつもそう言うというような上辺だけのものではない。「いつもの……もいいが、今日の……も……でよく似合っている」というような具体的かつ外さない褒め言葉を毎回口にするライナルトは、本当にローゼのことを良く見ているのだな、とテアは嬉しく思っているのである。

しかし、ローゼもその辺りのことが良く分かっているからこそ、余計に悩むのかもしれない。先ほどから、うーんと唸って止まってしまうっている。

ファッションには疎いテアだが、目の前の親友のおかげでそれなりにセンスは良い。何か助言できることもあるかもしれないと、テアは口を開いた。

「ローゼたちは確か……エルガーの『愛の挨拶』をやるのでしたっ

け

「ええ」

「それならやはり、手前の深い赤のドレスが一番ではないですか？
暗い色は少々曲と雰囲気合わないでしょうし、色が明るすぎる
のもそぐわないような…」

「そうですね…」

ローゼはテアが指したドレスを持ち上げ、鏡の前に立った。

情熱的な、薔薇の色。情熱的とはいっても滾るようなものではなく
て、少し落ち着いていた大人の、慈しむような温かい赤は、曲に似つか
わしいようにテアには思えた。

愛の贈り物である曲を演奏するならば、それは鮮やかに音を彩るだ
ろう。

「何より、その色が一番ローゼに似合います」

テアはお世辞ではなく告げて、ローゼは照れくさそうに微笑んだ。

「では、これに決めちゃいます。ありがとうございます、テア」
いいえ、とテアも微笑む。

「楽しみです、二人の演奏を聴くのが」

「その期待に恥じないように頑張ります。…そう言えばテアは、衣
装はどうするんです？」

「私は…、おじさんからいただいたものを」

テアはにっこりと笑って、机の横に置いてある箱を示した。

少し前に、学院長を経由して受け取った、「あしながおじさん」か
らの贈り物。

テアは、コンサートではそのドレスを着ることを決めていた。

ドレスを受け取った日、早速帰ってドレスを試着したが、それは驚
くほどにテアにぴったりで、演奏する曲にも合っているから、コン
サートにふさわしいと思ったのである。

「……ああ」

しかしローゼは、広げたドレスを手早く片づけながら、テアの返答
に苦虫を噛み潰したような声を出した。

そのローゼの反応の理由が分からなくてテアが首を傾げると、ローゼはストレートに言った。

「テア、あなたの『あしながおじさん』は、一体誰なんです?」
その疑問に、テアは息を呑む。

ローゼは、テアの後援者について何も知らない。「あしながおじさん」の名前も素性も、テアは教えてくれないから。テアが手紙を見せてくれるが、それだけだ。

「ローゼ、」

「テア、男性が女性に服を贈る理由を知っていますか?」

「え…、相手に喜んでほしいからじゃないんですか?」

「違いますっ!」

ローゼは断言した。

「脱がせるためです」

「へ……、え、脱が……つて、ローゼ」

テアがローゼの台詞についていけなくなっていると、ローゼは追い打ちをかけるように告げた。

「だから私は心配なんですよ! テアのおじさんがそういう目的を持った人なんじゃないかって」

「は……」

テアはぼかんとした。

「そりゃあ、父も会っていると申し、学院長と知り合いだっけとも聞きました。テアがここに入学できたのも一応おじさんのおかげ…ですし、手紙を読む限りではとっても良い人ですよ。でも、下心がないなんて言いきれません!」

ぐっと拳を握るローゼの言葉を聞き、茫然としていたテアはやがて我に返るとくすりと笑った。

「どうしてそこで笑うんですか」

「いえ…、だって……」

そこで本格的に笑いの発作が襲って来て、テアはしばらく笑いを殺すのに努力しなければならなかった。

「笑い事じゃないですよ。援助者だつてことを笠に着て、何をされるか」

「ローゼ、それ以上は……、」

ローゼが言葉を重ねるほど、テアは笑いを止められなくなる。

「もう、何がおかしいんですか。そんなに見当違いなことは言っていないはずですよ。だいたい、テアが私に何にも打ち明けてくれないから、こうして……」

「それは、すみません」

テアは何とか笑いをおさめて、殊勝に謝った。

「ですが、『あしながおじさん』は誰だか分からないから、『あしながおじさん』なんですよ」

「でもテアは『あしながおじさん』の顔も正体も知っているんですよ」

テアは微笑して、その詰問を流した。

「おじさんは、ローゼが思っているような人じゃありませんよ」

「では何なんですか。実は『おじさん』と言いつつ女性だとも？」

「いえ、男性ですが……。彼には私よりもずっと大切な方がいますから」

「既婚者なんですか？」

「いいえ。ですが結婚しているに等しい恋人をお持ちです」

にこにこ答えるテアに、ローゼは疑わしそうな視線を向けた。

「それでも、私にとっては怪しいことに変わりありません」

「おじさんは……私を自分の子どものように思ってくださいただけですよ。だから、援助してくださっているのです。おじさんが私をそういう対象に見ることはありません」

きっぱりとテアは言った。テアがそういう風に断言するのは、余程の根拠がある時だけだ。

テアは「あしながおじさん」のことをよく理解しているからそういうのだろう。

だが、テアの「あしながおじさん」を知らないローゼはどうしても

心配せずにはいられないのだった。

テアは、ローゼのそうした心情も理解している。だが、慎重な彼女はおじさんのことを多く語るができなかった。それは、親友に對しても。

「……いつか、紹介できると思います」

それがいつになるかは、テアにも分からないけれど。紹介したいと思う気持ちは、確かにあった。

「その時まで、待っていてくださいますか？」

そんな風に言われては、ローゼも引き下がるしかない。

「絶対ですよ」

テアには秘密が多すぎる。

ローゼは、テアと出会う前の彼女と彼女の母のことを何も知らない。どうして彼女たちが逃げるようにして旅を続けてきたのかも。どのようにして、「あしながおじさん」の援助を受けるにいたったのかも。

テアたち親子を保護した父のモーリッツだけが、おそらく全てを知っている。

とはいえ、長い時間テアと過ごしてきた中で、ローゼも薄々事情に感じていることはあった。確証は、ないけれども。

ローゼは、テアがいつか自分の秘密に押しつぶされてしまうのではないか、それが不安だった。

大切な、妹であり幼馴染みであり親友であるテアを、ローゼは失いたくないと思っている。

だからこうして、余計なことかもしれないと思っても、テアに聞かずにはいられないのだ。

せめて自分にだけは打ち明けてほしい、と思っ

けれど、テアはあまりにも慎重だった。自分の秘密が漏れることで、周りに迷惑がかかることを恐れている。それは、ローゼにも分かっていた。

いつか、テアは自身の秘密から解放されるのだろうか。

ローゼはそれを、ずっと待っている。

「では、こちらの申請書を訂正しておきます」

「ああ。頼む」

「それから、こちらの書類なのですが……」

学院祭を目前に、学院祭実行委員は普通の生徒以上に忙しく慌ただしく動き回っている。

泉の館の一室が学院祭実行委員の実務室になっており、委員の一人であるエツダは、そこで仕事に取り組んでいた。

デイルクに認めてもらいたい、その一心でエツダは熱心に仕事をしている。それに加えもともと有能な彼女は、一年生ながら周りの委員からも頼られる存在だった。

仕事をテキパキと片づけながら、ふとエツダは窓ガラス越しに外を眺める。

デイルク様は、まだいらっしやらないのでしょうか…。

学院祭を実施する上で生徒会役員と学院祭実行委員は協力関係にあつて、生徒会長であるデイルクは当然毎日のようにこの部屋に顔を出して打ち合わせを済ませます。

エツダはデイルクと会えるこの放課後を毎日心待ちにしていた。

いつもならばそろそろやってくる時間なのだが、まだ待ち人は来ない。

と、窓の向こうに伸びる道から歩いてくる人影があつて、エツダは目を凝らした。

デイルク様とライナルト様、それに……。

テア・ベールレンス、と心の中でその名を呼んで、エツダの瞳に強い炎がもつた。

まだ、彼女は消えてくれない。

彼女に対する脅しは続いているはずなのに、よくも毎日呑気に笑っていられるものだ、とエツダは冷ややかに思った。

由緒正しい学院に身の程もわきまえず入学してきただけあって、鈍感の厚顔無恥ということなのでしょね。

テアが自分からリタイアしてくれないのならば、次の手段をとらなければならぬ。

それはあまり使いたくない手なのだけれど。

エツダはテアをディルクから引き離すために、様々な手段を用意していた。

先日テアに送りつけた「プレゼント」もその一つ。

そして、情報操作も、彼女によるものである。

けれど、流した情報はどれも根拠薄弱なものばかり……。何か本当にゴシップネタでも出てくれば楽なのですが。

エツダはそう考えて、実際にテアの詳しい情報を手に入れようと手を尽くしていたが、「テア・ベレンス」という人間はどうにも謎が多いようで、まともに分かっているのが、九歳の頃からフォン・ブランシュのもとで生活するようになった、ということだけなのである。

それ以前のこととは今も調査中だが、どうにも情報がない。出身地も両親のことも、どうしてフォン・ブランシュのもとに身を寄せることになったかも明らかでない。病気の母親を抱えていてブランシュ家がその世話をしたということらしいが、何故ブランシュ家がそうしたのがエツダの腑に落ちなかった。

それに、この学院に入学する上でのテアの後援者の存在も謎のままだ。フォン・ブランシュがテアの力になったのかと思いきや、フォン・ブランシュとは無関係の人間がいるようなのである。その辺りのことも、そうらしい、という程度で、詳しくは分かっていない。

ブランシュ家にテアが預けられて以後のことはおおそ掴んでいるが、その調査結果を見ても、特に弱みとなるようなものは見つから

ず、エツダはそのテアの知られざる謎の部分に、きっと何かがあるに違いないと、調査を進めさせていた。

その隠された真実に、自分を打ちのめすものがあるとは、考えもせず。

ただただエツダは、テアをディルクから遠ざけたいと、それだけを考えていた。

今も、視線の先にはディルクと…、そしてテアの姿がある。

あの場所は、彼女にはふさわしくない。

ディルクが微笑む隣に立つべきは、自分だ。

「やはり、あれを実行に移しましょうか…」

ぽつりとエツダは呟いた。

あまり上手い手ではないが、テアを引き離し、ディルクに目を覚ましてもらうためには。

「す…ごいですね」

学院の広い敷地内に広がる店の数々を前に、テアは半ば茫然と立ち尽くしていた。

あっという間に時は過ぎ、既に今は、学院祭当日である。

前日から準備の様子は見ていたが、やはり本番の活気とは比べ物にならない。

正門は堂々と開け放たれて、次から次に人がひっきりなしにやってくる。

そんな人々のざわめきと、客引きの声、そして演奏が学院中に満ちていた。

テアは国内をずっと旅してきた経験があるが、この学院祭の規模は国内でも有名な城下でのサマーフェスト、神誕祭市、ランタン祭、ヘンデル祭、オクトーバーフェストにも劣らないものがある、と思った。

学院祭の雰囲気にもなれているテアを見て、ローゼは笑って声をかける。

「さ、テア、いつまでもぼーっとしていないで、行きましょう！」

明日はコンサートで回る暇なんてないでしょうから」

学院祭は二日に渡って行われ、テアやローゼが参加するコンサートはその二日目を一日使って実施されるものだ。

ローゼはだから、今のうちにめいいっぱい楽しんでおこうと、テアの手を引いた。

テアはローゼに手を引かれて、人込みの中に入っていく。

所狭しと並ぶ露店では、小物から食べ物までたくさんものが売られていた。工芸品やアクセサリー、神誕祭を一か月後に控えて、そ

のための品を置く店も多い。それから、ザツハトルテやシュトーレンなどの焼き菓子、ステーキサンド、ソーセージ、ジャガイモのパスタ、美味しそうな料理がその匂いで客を引き付けている。成人向けには、ビールやグリューワインを振舞うところもあった。

「こんなにお店があると、どれを買うか迷っちゃいますね」
「本当に」

ざわめきに声がかき消されないように、大きな声で会話しながら、ローゼとテアはたくさんのお店を見て回った。今日ばかりは、テアもいつもより財布の紐を緩めている。

「あつ、テア！」

テアたちがアクセサリーの店から出てきたところで、テアを呼ぶ声がして、彼女たちは声がした方を探した。

「フリッツ！」

そこに友人の姿を見つけて、テアとローゼは人波を縫った。

フリッツは、焼き菓子の店の売り子をしているようだ。パーティシエ風に白いエプロンを身につけている。

「フリッツもお店を出していたんですね」

「うん、サークルの一年生で。どう、テアたちも買っていけない？
安くしておくよ」

「後でうちのお店にもお金を落とすにきて下さるなら」

ローゼは笑ってそう言って、フリッツは苦笑した。

ローゼは調理部所属であるが、調理部の喫茶店は毎年かなりの人気なのである。

「何だか、自分たちの店に自信がなくなりそうなんだけど」

ふふ、とテアとローゼは笑って、ベルリーナ（ジャム入り揚げパン）を一つずつ買った。

まだ作りたてのそれはほくほくとして、その美味しさに笑みがこぼれる。

「とても美味しいですよ」

「それなら良かった」

テアの素直な言葉に、フリッツは少し頬を赤くしながら安堵した。その様子を見て、ローゼはふと問いかける。

「フリッツは、いつまでここに？」

「今日は昼までで終わりだけど……」

「その後、他の友人と約束がなければ、いつしよに回りませんか？」

「えっ……」

フリッツはローゼを見、テアを見、何故か挙動不審になった。

「いいの、かな。僕なんかで……。その、ディルクさんやライナルトさんは？」

「二人なら学院祭の雑事に追われて、せつかくのお祭りでも遊ぶ暇なんてありませんよ」

ローゼが肩を竦めると、ローゼの提案に一瞬驚いたような顔を見せたテアも、深く頷いた。

「大勢の方が楽しいですし」

「三時から私も店の手伝いがあるんです。その時、テアと一緒に来て下されば、サービスできますよ」

「それに、ローゼが店番に入った後私は他に回る人がいませんから、フリッツがいて下されば嬉しいです」

「ぼ、僕でよければ！」

テアの言葉に、フリッツは勢い込んで頷いた。

ローゼは満面の笑みで、

「それでは決定ですね。昼まで、ということの後一時間くらいでしようから、その頃にまた寄ります」

「分かった」

「ではフリッツ、また後で」

「うん」

フリッツに手を振って、テアとローゼはまたメインの通りに戻っていく。

ディルクのことは、分かっているのですが……、何だかフリッツを見てみると、こう、不毛だと分かっているにも応援してしまいたく

なるんですよね…。

ローゼは内心とても残酷なことを呟きながら、親友を見た。楽しみですねと言う彼女は、全くフリッツの想いには気づいておらず、良い友人だとばかり思っているようである。

「ローゼ、どうかしましたか？」

無言でローゼが見つめてくるのを不審に思ったテアが首を傾げると、ローゼは何でもないと首を振った。

「……テアは、できればそのままできてくださいね」「はい？」

賑やかで楽しい時間は、あっという間に過ぎていく。

学院祭一日目がラストに向けてまた一段と賑わしくなる中、明日の準備があると言うフリッツと別れて、テアは誰よりも先にひっそりと静まる寮に戻ってきていた。

彼女も、明日に備えて早めに休もうと思ったのである。

寮の外に響く喧騒を聞き、祭りの余韻にぼんやりと浸りながら、テアは入り口から入ってすぐのところに設置されている自分のメールボックスを確認する。

今までこのメールボックスにまともな手紙が入っていたことは一度もない。

モーリッツからの手紙は来るがいつもローゼ宛のものに同封されているし、「あしながおじさん」の手紙は学院長の秘書がいつも渡しに来てくれるから。

では、まともでないどういった類の手紙をこのメールボックスが受け取っているのか、というところ。。。

こんな日にまで、よくもわざわざやるものです……。

テアは呆れながら、一通の手紙をメールボックスから取り出した。送り主の名がないそれは、もう飽きるほど毎日のように受け取り続けてきた、嫌がらせの手紙だった。最初は、不幸の手紙だった。

しばらくそれが続いて、やがて中傷や罵詈雑言が混ざるようになっていった。

テアの名を書いた紙を引き裂いたものもあった。

他にもたくさんレパトリーで送りつけられて、いっそ感心しているくらいである。

そして今は……。

「これはまた、少々値のはるものを……」

一見普通の手紙に見えるが、その中にどうやら薄い刃物を仕込んであるらしい、とテアは慎重にそれを確認する。無防備に開ければ指を傷つけていただろうが、テアはその点、人よりもずっと慎重で、多彩な経験もあるから、問題はなかった。

これは、中身を売れば多少家計の足しになりそうだ。

今度街に出る時に持っていこう、とテアは手紙をバッグにしまって、ふと明日のことを思った。

嫌がらせの手紙の送り主が単数が複数かは分からないけれど、おそらく明日、「彼ら」はテアの演奏を聴くだろう。

テアがここにおいても良い存在か、ディルクの隣に立つことを許されるべき存在か、それを確かめるために。

だから、失敗は、許されない。

テアはそう思ってしまった、ぎくりと身体を強張らせた。

人前で演奏すること自体は、テアに大きな影響を与えない。

誰かに楽しんでもらい、そして自分も楽しんで演奏ができればそれでいい。

けれど、その演奏に他の多くの要素が関わってくるのなら、話は別だ。

エンジユのリサイタルでは、迷いを振り切るため、演奏だけに集中

する、それでよかった。エンジユも、余計なことをテアに考えさせないようにはしてくれていた。

けれど明日のコンサートは違う。ディルクと同じステージに立つのだ。ディルクの足を引っ張るわけにはいかない。

テアの実力をはかろうとする生徒たちが、テアを試している。

テアをこの学院に來させてくれた、「あしながおじさん」もテアの演奏を聴きにきてくれる。

失敗できないというプレッシャーが、ここにきてテアを襲った。

ディルクと練習を重ねていた時間はただ楽しくて、コンサートで演奏することの意味を、テアは多分、ずっと考えないようにしてきたのだ。

ここまで緊張するのは入学試験の時以來だと思うが、あの時はまだこんなに心が重くなることはなかった。この学院に入学できたら、と願っていたけれど、入学しなければいけない方が、ひっそりと、フォン・オイレンベルクから隠れて生きていけると、それが事実としてあったから。

ふう、とテアは小さくため息を吐く。

テアは、早めに部屋に戻ってゆっくり休み、明日に備えようという考えを捨てた。

今のように胸が塞いだまま部屋に戻っても、ゆっくり休むことなどできない。変に思い詰めてしまうだけだ。ローゼがいてくれるならまた違うだろうが、ローゼは調理部の出店で遅くまで戻れないだろうと言っていた。

「……きつと、今なら」

テアは呟いて、部屋の方に行きかけていた足を反対方向に向けると、誰もいない静かな廊下を一人、まっすぐ歩いていった。

夕刻。

喧騒を背後に、ふ、と顔を上げたデイルクは、怪訝そうな表情になった。

寮の共同棟の一室に明りがともっている。

練習室の一室だけが、誰かが練習しているのだろうか。

この、学院祭の最中に。

もしかしたら明かりの消し忘れかもしれないと、デイルクは寮に足を踏み入れていた。

新学期が始まってから学院祭の準備を進めてきたデイルクだったが、やはり今日が一番忙しい日だったかもしれない。

朝からミスの調整をしたり、突然のハプニングに対処したり、揉め事をおさめたり、とにかく些細な問題から大きな問題まで、枚挙に暇がないのである。

しかし明日のコンサートに集中するために、今日の仕事を詰め込んだところがあるので、文句も言っていられない。

今は、先ほど最後の見回りを終えて、疲れた様子のデイルクを気遣った後輩たちが、少し早く今日の仕事から解放してくれ、ようやく肩の力を抜いたところだった。

まだ寮に帰っている人は少ないようで、人氣が全くない階段をデイルクは上がり、先ほど見咎めた部屋へ向かっていく。

明かりが零れる部屋にデイルクは近づいて、足を止めた。

ドアのガラス越しに見える人影は、間違いなく彼のパートナーで、少し驚く。

彼女はピアノの前に座っているというのに、ピアノには背を向けてその後ろの窓から外を眺めているようだった。

珍しい、とデイルクは思う。ピアノを目の前にすれば触れずにはいられないようなところがあるテアなのに、そのピアノに背を向けているとは、と。

何かあったのだろうか。

昼ごろにその姿を見かけた時は、とても楽しそうにしていたのに。まだ太陽が空の真上にあった時分、ディルクは実行委員のエツダと共に会場の見回りをしていた。

テアを見たのはその時で、ローゼと、それからフリッツと三人で店を見て回りながら無邪気な様子で笑っていた。

他の客も、そうなのだけれど。テアがあんな風に笑って楽しんでくれるなら、こうして祭りの最中も仕事を頑張る甲斐がある、とディルクは遠くからそう思っていたものである。

けれど、それと同時に思い出す感情があつて、扉一枚隔ててテアを見つめるディルクは、小さく息を漏らしていた。

あの時、ディルクは確かに矛盾する思いを持ったのだ。

仕事がなければ、テアのすぐ隣で、あの笑顔をずっと見ていられたのだろうか、と。

そして、その時、何を馬鹿なと自分の思いを否定しようとして、ディルクは見た。

人込みに流されそうになったフリッツの手を、ローゼとテアが掴む、その瞬間を。

彼女たちは顔を見合わせて笑って、うるたえるフリッツの手をそのまま引いていた。

あの時に胸を覆った感情は、一体何だったのだろうか。

触れるなど、そんな言葉が喉に詰まったように感じたのは、錯覚だったのだろうか。

考えに沈みテアから視線をそらしたディルクだったが、すぐに視線を戻してテアを捉えた。

いや、今は俺のことはどうでもいい……。

曖昧な形を見せて困惑させる自身の思いに蓋をして、ディルクはテアの後ろ姿を見つめた。

何か、違和感を覚える。

いつもよりもずっとその背中が小さいような、錯覚。

そう思えるだけなのか、分からない。
けれど、

独りだ。

ディルクは確かにそう感じた。
ひとりでいたいのかもしれない。

けれど、そうさせたくない。

ディルクは、思っただけにそれを実行した。
扉をノックして、鍵の掛かっていなかったドアを、開いた。

ピアノを弾けば少しは気が晴れるのではないかと思ったテアだったが、少しだけピアノに触れて、それは間違いだったと悟った。音が固い。思い通りにピアノが鳴らない。

テアは早々に諦めて、鍵盤から指を離したのである。学院祭である今日は、さすがに練習室の予約がどうこうという問題は起きなかった。

だが、そんな時に不調とは、しかも明日が本番なのに、とテアは溜め息を吐くしかない。

外はまだざわめきに満ちていて、テアはピアノから目を背け、そちらに目をやる。

陽は沈もうとしているのに、外は光で満ちていた。

温かく光る、オレンジ色の灯り。

それに何故か、昔を思い出させられて、テアは目を細めた。

こんな賑やかな祭りを、母と楽しんだこともあった、と。

私は、なんて遠くに来てしまったのだろうか……。

母が隣にいてくれた時、テアはそこにピアノがあって、ピアノに触れられるだけで幸せだった。

母が笑ってくれたから、いつだってピアノを弾くのは楽しいことだった。

けれど、母がいなくなってしまった、今。

楽しいだけではいられない自分がいる。

怖い、と思うのは、魔の手がすぐそばに伸びてきた時ばかりだったのに。

私は、変わってしまったのだろうか……。

明日の演奏も楽しみたいのに、心が委縮してしまっている。

どうしたらいいのだろう。

テアは途方に暮れた。

その時。

コンコン、とノックの音がした後で、静かにドアが開く音がして、テアは振り返った。

「…デイ、ルク？」

そこにいたのが、思いがけない人物で、テアは思わず立ち上がっていった。

「どうしてここに？」

「ここだけ明かりがついていたから、気になって、な」

ディルクはテアの方へ近づきながら、気さくに答えた。

「それは…すみませんでした。ややこしい真似を……」

テアは恐縮したが、ディルクは笑って首を振った。

「いや。練習するのなら、部屋を使ってもらう分は全く問題ない。ただ、お前の姿が見えたから、少し驚かせてやろうと思ってな。邪魔をしたか？」

本心を呑みこんでディルクが悪戯っぽく言うと、テアは苦笑いを零した。

「いいえ。ですが……私はこうして、あなたに不意を打たれてばかりいるような気がします」

拗ねているようにも聞こえる言葉に、ディルクは笑った。

「それはすまない。…だが、今日は特に、お前がピアノを目の前にして弾いていないというのが珍しい気がしてついな」

「そんなことは……」

ない、こともない……。

テアは否定できずに黙った。

「……何か、あったのか？」

テアが返答できないでいると、ディルクは一步、踏み込んできた。

それは絶妙なタイミングだった。

テアは静かにディルクを見上げる。

テアを見つめてくるディルクは、もう笑っていなかった。ただ、優しく、真摯な眼差しをテアに向けてくれていた。彼は、とテアは悟った。

テアのことを心配して、今ここにいてくれるのだ、と。

「その……」

テアはぎゅっと手を握った。

自分の屈託を他人にすぐに打ち明けられるようには、テアはできていないのだ。

ディルクはそれを分かっていたから、ただじっとテアの言葉の続きを待っていた。

「明日のことを考えたら……」

テアは躊躇いながらも、口を開く。

ただ、ディルクの目を見返すことはできなくて、外の賑わいをその瞳に移しながら。

「失敗できないと思って、緊張してしまって……」

言ってしまったばそれだけのことで、ディルクに呆れられてしまうのではないかと、テアは何だか恥ずかしくなって俯いた。

しかしディルクは、そんなテアにまっすぐな言葉を返してくる。

「何故、失敗できないと？」

「それは……」

何と言えばよいのだろうか。

「おじさん」が聴きに来てくれるから。それもある。

だが、おそらくテアが一番「怖い」のは、ディルクの隣に立つ資格を失うことだろう。

ディルクの足を引っ張りたくない。

ディルクは、ずっと「夜の灯火」を演奏したかったのだと言った。理想とするピアノを得て。

テアは、その音を持っているのだと、ディルクは言う。

だからテアは、自分なりの演奏をすればいいのだとそう思っていた。ただディルクと演奏を楽しめるならば、ふさわしくないとかそんな

ことは問題ではないと思っていた。
けれど、本番でミスをしてしまったら。

ディルクの今までの期待を壊してしまうことになるかもしれない。
そして、厳しい批判の目はテアに向いて、テアに反感を持つ者はこ
ごぞとばかりテアを攻撃するだろう。

そうしたら……。

ディルクはテアが失敗しても責めるようなことはないだろうけれど、
テアがその期待を裏切るようなことをしたくないのだ。

そして、せめてパートナーでいられる前期の間は、尊敬するディル
クの隣に堂々と立ちたかった。

だが、本人の前でそういったことを全て曝け出せはしない。

テアは口ごもってしまったが、ディルクはテアをフォローするよう
に言葉をくれた。

「……まあ、確かに、明日のコンサートはサイガ先生のリサイタル
よりも大きいものだし、場慣れしていても、やはりどうしてもかた
く考えてしまうな。大御所も多く訪れるし」

テアは否定もできず、曖昧に頷いた。

「だが、テア、俺たちには他にはない強みがある」

「強み、ですか？」

「ああ」

ディルクははつきりと頷いた。

「俺たちがやるのはオリジナルの曲だ。譜面をちゃんと見たことが
あるのは俺たちの他にサイガ先生くらいだろう。つまり……」

「はい」

「もし間違っても、自分は間違っていないという顔をしていれば、
誰も気づかないということだ。少しくらい不審に思われても、正し
いと言い張れば良い。だから、失敗を恐れるな」

「は……、」

真剣にディルクの言葉を聞いていたテアは頷きかけて、それでいい
のか、と思った。

思わずディルクを見返すと、彼の瞳は面白がるような色を湛えている。

「ディルク！」

からかわれたと思ってテアが声を上げると、ディルクは少し笑った。「間違っただけは言っていないぞ？」

「そうかもしれないけど、」

「それくらいの心意気でいい、ということだ。実際何かあればちゃんと俺がフォローする。もし俺が失敗した時は、お前にフォローしてもらおうことになる。一人ではなく、二人で立つんだ。だから、失敗しても互いに補えばいい。それだけのことだよ」

ディルクは至極あっさりと大切なことを言っただけのける。

ディルクの言葉とやりとりで、テアの心は随分軽くなった。けれどまだ彼女がどこか浮かない様子なので、ディルクはぽんとテアの肩を叩いた。

「では、本番失敗しても平然としていられるように、失敗する練習をしておこうか」

「え…？」

「そこに座って」

ディルクはテアをまたピアノの前に座らせた。

そして自分は、もうひとつこの部屋に設置されているアップライトピアノの方に座る。

「あの、ディルク…？」

「俺がこちらで弾くのに合わせてくれればいいから」

「あの、だから何を……」

戸惑うテアに構わず、ディルクは鍵盤に指を置いた。

あ…、ディルクの、ピアノ……。

それを聴くのはリサイタルの時以来である。

しかも、あの時のように扉越しではなく、直に聴くのは初めてだ。

テアは一瞬戸惑いも忘れ、二小節ほど、ただただ聴き入ってしまった。

ディルクが弾き始めたのは、「夜の灯火」のピアノ譜……つまり、いつもテアが担当する部分である。

もしかして、とテアが思っていると、その箇所ディルクはテアを振り向いて合図した。

やはり、と思つてテアは焦りながら鍵盤に手を伸ばす。

ディルクは、テアにヴァイオリンのパートをやれと言っているのだ。

やるしか、ない……！

テアは、初見が得意な方であるし、楽譜も暗譜しているし、毎日ディルクの演奏を聴いてきた。だが、さすがに突然ヴァイオリン部分を弾けと言われてすぐさま対応するのは難しい。

テアはいつも以上に集中して、ディルクのピアノに少しでも合わせられるように食いついていった。が、ところどころミスを重ねてしまう。表現のことなど考えている暇はない。ただディルクの音についていくばかりだ。

だが、やはりすごいな、テアは……。

ディルクはそれでも、ちゃんと追いかけてくるテアに驚きを禁じ得ない。テアの実力は分かっていたが、もっと苦戦するだろうと思つていたのに、予想以上に形になっている。本番がこれでもいいかもしれないと思うくらいだ。

やがて、曲は最後の小節を迎え、最後まで何とか弾き切ったテアは、肩で荒く息を吐いた。

振り向いたディルクは、疲れているテアの様子に苦笑する。

「どうだった？」

「……ハードでした……」

集中していた分、余計なことは考えずに済んだけれども。

「だが、あれだけ失敗しておけば、本番で少しくらい何かやらなくてもどうということはない、という気持ちになるだろう？ 誤魔化し方も覚えただろうし」

本当にそれでいいのか、とやはりテアは思ったけれど、ディルクの笑顔を見ると、少しくらい失敗してもいいかという気持ちにな

つてきて、テアは破顔していた。

「そうかもしれません…ね」

二人はそして、顔を見合わせて笑い合った。

そうこうするうちに、外でも学院祭第一日目が終わろうとしていた。ピアノを片付けていたテアは、ようやくそのことに思い当って、慌てて顔を上げる。

「そう言えばディルク、今更ですけど、お仕事の方は……！」

「ああ、それならちゃんと終わらせてあるから、大丈夫だ。どうやら、一日目は無事に終わりそうだな」

ディルクは安心させるようにテアに微笑みかけた。

邪魔になっていないのなら良かった、とテアは呟いて、

「明日も、恙無く進むと良いですね」

「ああ……」

ピアノを整えたテアは、また外に目を向けた。

その、輝く黄金の瞳に外の明かりが写り込んで、まるで本当の光のように美しい、とディルクはその揺らめきに一瞬、見とれる。

そしてその瞳がディルクの方を向いて、今度は彼の姿を映し出した。見透かされるような気持ちになって、けれど目が離せずに、ディルクはその瞳に息を呑む。

「…ディルク？」

「……いや…、そろそろ行こうか」

一瞬ディルクの様子に違和感を覚えたものの、テアはその言葉に頷いて、二人は練習室を出た。

暗い廊下を、外からの明りを頼りに二人は歩いていく。

「今晚は、よく眠れそうか？」

「はい」

余計な肩の力は、ディルクのおかげで抜けていた。

テアの気負いがなくなっているのは、ディルクの目にも明らかで、少しでも彼女の不安が晴れたのならそれでいい、とディルクは思う。「ディルクのおかげです。ありがとうございました」

照れくさそうにテアが頭を下げると、ディルクは少し笑って首を振った。

「明日、今日と同じことをやってみるのも面白いかもしれないな」

「…それはお願いですから止めて下さい。ヴァイオリンで急にピアノ部分を弾き始めたりしないでください」

テアがぶるぶると首を振ったので、ディルクは笑った。

「では、明日に備えて今晚はゆっくり休め」

「はい」

男子寮と女子寮の別れ道で、二人は立ち止まる。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

このまま別れたくないような気持ちに襲われたけれど、だからこそ振り向かずに二人は自分の部屋を目指した。

明日は、ディルクと音楽を楽しみましょう…。先ほど、夢中になつて、楽しんだように。

『おやすみ』、と何故か甘く感じられたディルクの言葉を反芻しながら、テアは学院祭一日目をそうやって終えたのだった。

duet 7 (後書き)

学院祭一日目はこのような形で無事終了。
二日目はいよいよコンサートとなりますが、波乱の予感です……。

学院祭二日目は、ますます盛り上がりを見せていた。

外に出された店も昨日に負けない売り上げを見せ、室内でのイベントも多くの人で溢れている。

しかし、やはり一番のメインは、学生たちのコンサートであった。広いコンサートホールいっぱい人がつめかけている。

これだけ人が集まるのは、現在活躍している学生・将来有望な学生による演奏と、聴きどころが満載だからである。それに加え、客席にもちらほらと有名な演奏家、音楽家の顔を見ることができるといふことも関係しているだろう。

コンサートに参加するパートナーの数は毎年二十から多くて三十組程度で、午前の部と午後の部に分けて行われる。

演奏の順番はくじ引きで公平に決められ、テアとディルクは午後の後半、全体を通して二十一曲目に演奏することになっていた。

一方、ローゼとライナルトの二人は午前の部のラストを飾ることとなり、テアとディルクは二人の演奏を聴き逃さないように、開場の時間から席に座っていた。

「楽しみですね」

「ああ。他の生徒たちの演奏も、勉強になるだろうしな」

かくして、音楽馬鹿なパートナーは、午前の部が終わるまでの二時間、演奏に夢中になることとなった。

注目度の高いコンサートだけあって、主観的にも客観的にも「できる」生徒たちが参加しているのだろうが、それにしてもやはりシュール音楽学院のレベルは高いのだな、とテアは改めてしみじみ思ってしまったものだ。宮廷楽団を目指すことがほとんどなのだから、それはそうなのだろうが、実際に生徒たちの演奏を聴く機会はそう

ないから、実感に乏しかったのである。

それに、演奏の方にもそう文句はつけられないが、コンサートホルの音響もよくできていた。聴く方もそうだが、演奏する方も良い音が出せれば出せただけ大きな快感となるだろう、と思えるくらいに。

そうして、時間はあっという間に過ぎ、午前の部もあと一曲で最後となった。

ライナルト、ローゼとピアノ伴奏者がステージ上に現れて、テアもディルクも大きく拍手を送る。

エルガーの「愛の挨拶」は、エルガーが妻に感謝と愛をこめて贈った曲で、優美な旋律は有名だ。

それを、ライナルトとローゼはゆったりと、奏で始めた。

まずは、ライナルトのソロである。彼は、情感たつぷりにそのメロディを刻み、ふつと笑顔を見せて、ローゼに続きをたくす。

ローゼもライナルトの視線を受けて微笑み、メロディを引き継いだ。まるでその手をとるような、誘いかけるような、音。

やがて、二人の音が重なる。甘く甘く、絡み合い、睦み合う。

その素晴らしい演奏に感動してしまうのはもちろんだが、別の意味でもどきどきして目が、耳が離せない、そんな音楽だった。

しかしそれも、そつと終わっていく。恋人たちが、ただ二人だけの世界へ向かおうとするように。

テアは、そうして交じり合う音を、愛しむ者同士がまるで抱きしめあうかのようだと思った。

そして、大きな、拍手。

自分たちを夢から現実の世界へ引き戻そうとするようなそれは、誰も目の目が覚めるまでしばらくの間、響くことを止めなかった。

「あの二人らしい演奏だったな」

ホールから出て、ディルクは苦笑を覗かせながらそう言った。

「そうですね」

けれど、ライナルトがあそこまで情熱的……というのか、甘い音を出すというのは、テアには想像できないことだった。

リサイタルで初めてライナルトの演奏を耳にした時も、その音の響きに意外の念を抑えきれなかったものだが、それも今日の比ではない。

普段はクールに見えるライナルトだが、心の中はその分誰よりも熱いのもしれなかった。

「……らしすぎて、伴奏者が気の毒だったかな」

付け加えられた一言に、テアは噴き出しそうになる。

演奏はもちろん素晴らしかったのだが、練習の時から二人の甘さを最も目の前にしなければならなかった伴奏者は確かに気の毒だったかもしれない。ローゼとライナルトとは対照に、もう慣れたと言わんばかりに極めて平然としてピアノの前に座っていた伴奏者の顔を思い出し、テアはディルクと顔を見合わせて笑う。

それから二人は出店で昼食を買い求め、学院祭中は誰にも開放されている、校舎側の食堂の空いている席に落ち着いた。

この後、二人は最後の確認練習をしてから、本番に臨むつもりである。

和やかに昼食をとりながら、ディルクは昨日のかたさがとれた、明るい表情のテアにそっと、安堵していた。

午前の部の演奏について話すテアの表情は輝いていて、ディルクも常より言葉を尽くしてテアと語り合ってしまったくらいだ。

「テアっ！」

その談笑のひとつときを打ち破ったのは、鉄砲のようにやってきたローゼだった。

ローゼは、ステージに立っていた時のような赤いドレス姿から既に白い制服に着替えていて、いまだ興奮冷めやらぬという様子でテアに勢いよく抱きつく。

「ローゼ、」

テアはローゼを受け止めて、親友を温かく抱擁した。

「お疲れ様です。とても良い演奏でしたよ」

「ええ、自分でも満足できる音が出せたと思います。だからか、何だか落ち着かなくなつて」

テアはくすりと微笑んだ。

ローゼは一度ぎゅつと腕に力を込めて、テアから離れる。

「でも、テアの顔を見てちよつと落ち着きました。ありがとうございます」

「私は何もしていませんけど」

テアとローゼが顔を見合わせて微笑み合っていると、こちらも制服に着替えたライナルトが優雅な足取りで近づいてきた。

「ローゼ、昼食を買ってきたぞ。…隣の席を借りる」

「ああ」

ライナルトがディルクの隣に座ると、ローゼも礼を言つて昼食を受け取り、テアの隣に座つた。

「どうだった、午前の部の演奏は」

「今年は例年と比べてもレベルが高いな。聴き応えがあつた」

「レベルを引き上げた本人が平然と言うな…」

ライナルトが笑つと、ディルクはどこか憚然とした表情となる。

「ライナルト、その話は全てが終わつてからにしてくれ」

「ああ、分かつている」

ライナルトはそこで意味深にテアを見て微笑んだ。

テアは二人の会話の意味が良く分からずに首を傾げるが、ディルクが今はその話題を避けたそうにしているので追究はしない。

「…テア、そろそろ行こうか」

ディルクはさりげなく食堂に置かれた時計に目をやり、立ち上がるそぶりをみせた。

「はい」

テアは頷き、ディルクと共に立ち上がると、昼食をとりはじめた友

人に頭を下げる。

「では、ローゼ、すみませんが後でお願いします」

「ええ。本番前に控室、ですよ」

今回のコンサートでも、テアはローゼに着替えの手伝いを頼んでいた。

ローゼはこんな楽しい役を誰にやらせるものかと、テアが頼む前から立候補していたのであるが。

「では、後で」

ディルクは二人に短い別れを告げて、歩き出す。

テアも、二人に小さく手を挙げて、ディルクに続いた。

残された二人は、消えていく二人の背中を見送って、視線を交わす。

「ディルクがようやく学院のコンサートに参加、か……。二人はどんな演奏を聴かせてくれるのだろうか」

「楽しみ、ですね」

ローゼやライナルトだけではない、多くの人間が各々思惑を持ちながら、テアとディルクの演奏を心待ちにしていた。

テアとディルクは練習棟の練習室に一時間ほど籠り、指を温めると同時に最後の仕上げをした。

後は本番で練習の成果を出し切るのみ、と二人は練習室で頷き合う。本番に舞台袖に来てほしいと委員から伝えられていた時間までまだかなり余裕はあったものの、最後の練習を終えた二人は練習室を出て別れ、それぞれコンサートホールの控室へと向かった。

コンサートホールはステージと客席それぞれ自体もかなりの容積を持っているのだが、その裏にもかなりの広さがあつて、控室の数も相当なものだ。

今回のコンサートに出場する生徒には、小さい控室が一人一つずつ割り当てられていて、テアと別れたディルクは指定された控室でさ

つと着替えを済ませた。

上質の黒のテールコートは長身で均整のとれた体つきのディルクにぴたりと合って、彼のフアンである女性陣が見ればまた卒倒するのではないかという様子である。

よどみなくディルクは格好を整えると、舞台袖へと向かった。

コンサート本番、か…。

ディルクにとつては、それは待ちに待ったものである。

テアが彼の前に現れてくれなければ、今もまだステージに立つことはできず、他の生徒の演奏を聴くだけで終わっていたかもしれない。生徒会長として、学院祭を仕事だけで終わらせていたかもしれないけれど、待つ時間は終わったのだ。ディルクはテアというパートナーを得て動き出すことができた。

テアは失敗できないと緊張していたようだったけれど、本心から、ディルクはテアがもし大きなミスをしたとしても、彼女とならばそれも楽しめるのではないかと思っている。もちろん観客により楽しんでもらうために失敗はしない方が良く、テアも気に病むだろうから、練習通りに演奏できるのが一番良い。だが、ディルクはテアの音があれば、何があっても二人で聴衆に訴えかけるような感動を与えられるような音楽ができるのではないか、と思うのである。

テアとならば、とディルクはヴァイオリンを強く握りしめた。

ディルクの胸に光を灯してくれた、あの音を奏でることが出来る彼女がいれば、どんな奇跡も起こせるのではないか……。

ずっと焦がれ続けてきた音。その音に出会って尚、光のような音の輝きに焦がれている自分にディルクは気付かされる。

何度でも、あの音と最高の音楽を奏でたい。

けれど、このコンサートが終わってしまったら……。

そう考えると、ずっと待っていたステージだというのに、そのステージをもっと先延ばしにしたいような気すらする。

すれ違う人々の視線を釘付けにしながら、ディルクは演奏者が集まる舞台袖へと入っていった。

入ってきたディルクに、一瞬で視線が集まる。

ほとんどの女性はディルクを見て固まるか瞳を輝かせるかし、男性ですら彼の姿に見とれた。

そこで生徒会副会長として学院祭委員に指示をしていたライナルトは、さすがにディルクとよく似た美貌の持ち主だけあってひとり平然としていたが、委員が固まってしまうたのを一瞥し、やれやれと肩を竦める。そして、現在行われているステージに響かない程度に手を打ち鳴らした。

「準備の続きを」

はつと我に返った人々は、これは仕方がないことなのだと言顔を見合わせて動き出す。

それでもなかなかディルクから視線を外せないところに、ディルクのカリスマ性が現れていた。

ただ外見が美しいだけならば、これほどまでに人を引き付けることはいないだろう。ディルクがディルクたればこそ、人々の反応なのである。

指示を出して少々手のあいたライナルトは、苦笑を向けてディルクに近づいた。

「早かったな。もう少し遅くなると思っていた」

「ああ。…テアの着替えのこともあるから、ぎりぎりになるよりは余裕があった方がいいだろうと」

「ギリギリの方が、テアは余計なことを考えずに済むかもしれないぞ」

「それはもう、昨日までで終えている」

テアを信頼する瞳で、ディルクは答えた。ライナルトの目に笑みが宿ったが、ディルクはそれに気付かずに生徒会長として副会長に尋ねる。

「…問題などは、今のところはなしか？」

「ああ。皆、よくやってくれている。気は抜けないが、このままいけば無事に成功させられるだろう」

しかし、そんな風に誰もが学院祭の中で楽しんでいる時にも、ひそやかに悪意は蠢いていたのである。

心配げに眉を寄せてディルクは時計を確認した。

「遅いな…」

舞台袖で順番を待つ間、ディルクは委員たちの仕事ぶりを見たり、他の演奏者と言葉を交わしたりしていたのだが、そろそろ着替えも終わる頃なのではないかという時刻になってもテアが現れないのである。

演奏までまだ時間はあるが、それにしても先ほど練習室で別れてから時間が経ち過ぎているような気がする。ローゼが張り切っていたからそのせいかもしれないが、ローゼもこのコンサートの重要性は分かっているから、そうそうテアを控室に長くずっと留めておきたくないだろう。

「誰かに呼びに行かせるか」

ライナルトも少し気になっていたのだろう、ディルクの様子に近づいてきて聞いた。

「そう、だな…。彼女たちのことだから大丈夫だとは思うのだが、誰か女生徒に確認を」

まだ時間に余裕はあるから待っていてもよいのだが、ディルクは嫌な予感を覚えてそう言いかけた。

何故か、テアへの嫌がらせの一端が頭にふと思い出される。その時だ。

誰かが、舞台袖へ入ってきた。

その人影を認め、ディルクはずんずんと裏手の入り口に近づいていく。

入り口に立ってきよろきよろと誰かを探すようにしているのは、ローゼだった。

「ローゼ、どうしたんだ」

「ディルク！…その、テア、ここにいませんよね」
尋ねるローゼの言葉は、不安と心配に揺れていた。

「テアが…：どうか、したのか。ここにはまだ来ていないが。俺は
てつきりまだお前と」

ローゼの様子に感化されたように、ディルクの声も掠れたようにな
る。

まだローゼからはつきりと何かを告げられたわけでもないのに、デ
イルクはぐらりと視界が揺れるような錯覚を覚えた。

「いないんです、どこにも」

ローゼの声が、涙の気配を帯びる。

「練習棟も、コンサートホールも探しました。寮の部屋も…。でも、
いないんです…！」

その言葉がしつかりと認識されないうちから、ディルクは頭が真っ
白になるような衝撃を感じた。

そうして、ディルクはただ、立ち尽くした。

コンサートの本番前、ディルクと最後の確認を終えたテアは、用意
された控室に向かった。

ローゼにはそこに先にドレスを持ってきてもらい、着替えを手伝っ
てもらえるように頼んである。

いよいよ本番前となって、テアの心臓はとくとくとその存在を主張
していたが、それは嫌な緊張ではなく、演奏前につきものの快い緊
張というものだった。

「控室の番号は、三〇五…：…」

呟いて、階段を三階まで昇りきったところで、テアは廊下に立って
いた女性と目が合った。

「…すみません、演奏番号二十一の方でしょうか？」

学院祭実行委員の腕章をつけたその人から、低姿勢で語りかけられて、テアはやや目を丸くする。

この学院で、テアに対し、こんなにもへりくだる人間に今まで会っていないかったからだ。

「ええ」

テアが驚きつつ頷くと、その女性は申し訳なさそうに続けた。

「その…、指定させていただいた控室の方なのですが、午前の部で使われた際に…あの、鼠が出まして。大変申し訳ないのですが、他の控室を使っていただけでもよろしいでしょうか。今、急ぎ委員が部屋を整えているところなのですが、ちょっとまだ…」

つまり、まだ委員が鼠退治に追われているらしい。

そういうこともあるのかとテアは首を傾げた。

「控室が変わるのは構いません。ただ、私の連れが先に来ていたと思うのですが、彼女は…」

「はい、先にご案内しております」

それなら良かったとテアは頷き、彼女に新しい控室まで案内してもらうことにした。

彼女は階段を上り、五階の廊下を歩いていく。

階を上がるほどに人の気配がなくなつて、祭りの喧騒も遠ざかり、テアは何だか妙な予感を覚えていた。

何かがおかしい　と彼女の鍛えられた勘が告げる。

どうして彼女は、こんなにも…、「怯えている」のだろうか……。

前に行く女性の後ろ姿に、テアはそれを感じ取った。

だが、確証があるわけではなく、闇雲に相手を疑うのも、昔とは状況が違うために気が引ける。

もしかして、先ほどの言葉は嘘で…、誰かが何かをしようとしている……？

テアをディルクと同じステージに立たせたくない、と彼のファンが考えてもおかしくはない。

だが、その考えはディルクにも大きな迷惑をかけることになるもの

だ。

警戒のしすぎだとテアは思うことにした。

まだ、昨日の固さが残っているのかもしれない…。

目の前に行く彼女の様子がおかしく感じられたとしても、もともと彼女がそういう気性の持ち主なのだと考えれば説明はつく。

「こちらです」

彼女は五階の奥の部屋のドアノブに手をかけ、外側にドアを開くと、テアに入室を促した。

「ありがとうございます……」

テアはドアをくぐろうとして、一瞬戸惑い立ち尽くした。

部屋の中が暗かったのだ。

太陽はまだ高い位置にあり、ローゼも先に来ているはずなのだから、部屋の中を窺えずに目を凝らすということは、本来起こり得るはずもない。

誰かが待ち伏せているのか、それとも何かが部屋の中にしかけてあるのかとテアは警戒を強くしたが、それが逆に仇となった。

「あ……っ」

後ろから突き飛ばされ、テアは部屋の中によるめく。

素早くドアが閉められ、暗闇の中にテアは閉じ込められた。

「……っ」

部屋の中には誰もいないようで、テアに話しかける者も襲い掛かる者もなかった。

まさか……！

テアは急いでドアに飛びついた。

ドアノブを回し、ドアを開こうとして 愕然とする。

ドアには鍵がかけられてしまっていた。内側には鍵がなく、開けることができないようになっていた。

がちゃがちゃとテアはドアノブを動かしてみたが、やはりドアは開かない。

テアは、閉じ込められたのだ。

テアの現在の状況を分かるはずもないディルクは、ローゼの言葉の意味をもう一度確かめるしか術を持たなかった。

「最初から…説明してくれ、ローゼ。つまり、テアが控室に来ず、お前は今までテアを探していたと、そういうわけなのか」

「そうです…。そろそろ来る時間なのにおかしいと思って、もしかしたらまだ練習室にいるかもしれないと、委員の方に呼びに行ってもらったんです。二人ともすっかりしてますけど、練習ともなる時間を忘れてしまいますから…。行き違いにならないように、私の方は控室に残って…。けれど二人がいないと委員の方が戻って来てたんです。すれ違ったか何かかもしれないし、もう少し待てば来るだろうと思っていたのですがやはりテアは来なくて…。だから今度は私が探しに出たんです。練習棟を除けば…今テアがいるとすれば、寮かコンサートホール、もしくは泉の館でしょうから、そこに行く」と委員の方に伝言をお願いして、もしテアが戻ってきたら、先に着替えておいてもらえるように…。ですが、心当たりの場所を探してみてもう一度控室に戻ってもやっぱりテアはいなくて…。あと考えられるのはここくらいで、それなのに…!」

最後にテアがいるとすればここだけだったのに、とローゼは声を抑えながらも悲痛に声を上げた。

おそらくローゼも、ディルクと同じ心配をしているのだ。テアがこんな時に理由もなく姿を消すはずがない。

リハーサルの時にここには一度来ているから、迷っているということもあり得ない。万が一入学式の時のように迷子になってしまったとしても、学院祭の真っ最中であちらこちらに人はたくさんいるのだから、適当な人間に尋ねればいいだけの話である。

それならば他に考えられるのは、何か事件に巻き込まれたのではな

いかということだ。

エンジュのリサイクルから彼女への風当たりは弱くなったとはいえ、嫌がらせは続いていた。

テアに悪意を向ける人間が、彼女をコンサートに参加させたくないと考えても不思議ではない。

テアは彼らの悪意のためにここに来られない状況が生じているのではないか。

デイルクは強く拳を握った。

脳裏にはつきりと蘇るのは、切り刻まれた鼠の死体。

それをおそらく送りつけられたのであろうテア。

何事もなかったかのように、彼女は笑っていたのに……。

彼女があのような動物のような目にあっているとしたら？

ローゼとデイルクの小さな、けれど深刻そうなやりとりは、舞台袖にいた人々の顔も曇らせ、周りの声はさきほどよりもずっと小さな囁きとなっていた。

しかし、周りの声がいくら大きくても、今のデイルクには聞こえていなかっただろう。

彼にはただテアの安否を思う気持ちしかなかった。

「……練習棟でテアと別れてから、もう一時間が経つ」

デイルクは誰に言うでもなく呟いた。

「俺が探しに行く。ローゼ、テアが万が一ここに来たら準備を。控室にも誰かを置いて、彼女が来次第連絡をとらせるように。それから、信頼できる役員で手の空いている者にも搜索を頼んでみてくれ」

「え……っ、デイルク！」

言い置いて、デイルクは何より大切にしているはずのヴァイオリンを目の前にいたローゼに預けると、舞台袖から出ていこうとした。

いつもとは様子の違うデイルクに、ローゼはますます不安を強くする。彼の鋭い表情が、嫌な予感を裏付けているように思えたのだ。

しかし、今にも駆け出してしまうそうに大股で歩き出したデイルクを止めた声があった。

「デイルク、待て」

デイルクの後ろから、二人のやりとりを聞いていたライナルトだった。

「お前はここに残った方がいい」

剣呑な表情で、足を止めたデイルクは振り返る。

ここにいる誰もが先ほどとは違う意味で凍りついてしまいそうな迫力が、今のデイルクにはあった。

「……止めるな。今はお前の言葉を聞いている暇はない」

「落ち着け。何も分かっていない状況で、お前が行ったところでどうなる。頭に血が昇っていては守れるものも守れないぞ」

デイルクとライナルトの物言いに、ローゼははらはらした。

普段の気の置けない二人の仲を知っているだけに、張り詰めた今の空気は余計に恐ろしいものがある。

デイルクはライナルトに何も言い返さず、険しい眼差しで親友を睨むと、忠告に従わずまた舞台袖から出ていこうとした。こうしている間にもテアが危険なことになっているのではないかと、デイルクは気が気ではないのだ。

しかしライナルトは、そんなデイルクの腕を掴んで引き止めた。

「デイルク」

「邪魔をするな、ライナルト！」

とうとうデイルクは声を荒げた。

それは大きな声ではなかったが鋭く強く、その場はしんと静まり返る。

だがライナルトは、周りが蒼くなる中、眉一つ動かさなかった。

「彼女が逃げたと、そんな風に言われるのをお前は許すのか？」

淡々と彼は告げ、デイルクはそれに強く言い返す。

「テアは逃げたりなどしていない！」

「分かっているさ」

ふとライナルトは微笑み、デイルクは押し黙った。

「だが、先ほどローゼがテアがいなかった時、周りが口にした

言葉をお前は聞かなかったのか？ お前と共にステージに立つプレッシャーに負けて逃げたのだと…、はつきりと言った連中がいたぞ。この様子では、口に出さなくともそう思っている者も多くいるだろう」

その台詞に、ディルクはようやくここに他の多くの人間がいたことを思い出した。

彼がその場を見渡すと、誰もが俯いて目を合わせようとしない。

ディルクはそれに、激昂を抑えなければならなかった。

エンジン・サイガのリサイタルで見事な演奏をしてみせた彼女が逃げるなどと、どうしてそんなことが言えるのだろうか。

それがなくとも、テアはそんな少女ではないのに。

「それに加え、ステージを控えているはずのお前が学院中を走り回ったりしたら、口さがない連中がテアをどう言い出すと思う。お前が自ら動けば悪戯に根も葉もない悪評を増やすだけだ。それこそ、今の状況をつくった相手の思いつぼだぞ」

ライナルトは、ディルクがその言葉に耳を傾ける程度に落ち着いてきたことを分かって、掴んでいた腕を離した。

「何より、テアがもしここに来た時お前がいなかったら、彼女が困るだろう。動くのは私がやる。お前はここで指示を出しながら待たばいい」

ライナルトは言い終えて、ディルクが結論を出すのを待った。

ディルクはじつとライナルトの冷静な瞳を見つめていたが、やがて小さく溜め息を吐く。

「…すまない、お前の言うとおり頭に血が昇ってしまったようだ」

素直に自分の非を認めるディルクからは、既に先ほどの取り付く島もないような空気は消え失せていた。

こうした潔さは、ライナルトが尊敬するディルクの長所の一つである。

謝るディルクに、眼差しで気にしていないことをライナルトは告げ

た。

こういう時、自分のことを良く分かってくれる親友がいてくれることをディルクは非常にありがたいと思う。

闇雲に動き回ったところでテアが見つかるとは限らない。

ライナルトが言ったように、冷静になる必要がある、とディルクは反省した。

深呼吸をして一拍置いてから、ディルクは素早く頭を回転させる。

「だが、ローゼが探し回っても見つけれなかったというのはやはり尋常の事態ではない。考えたくはないが、もしかしたら…」

「ああ。私もその可能性は大きいと思う。だから、協力してもらえば実行委員ではなく…、役員たちだ」

ディルクは焦る気持ちを抑え、ライナルトとひそやかに言葉を交わした。

「目撃者を探す必要があるな。あとは、人目に付かないような場所の確認を」

「ああ。では行って来よう」

ライナルトは無駄口を叩かず頷く。

「すまない。…頼む」

「いや」

ライナルトは、ディルクの肩をぽんと叩き、彼に背を向けた。

早速行動に移そうとするライナルトをディルクは見送る。

すっかり元通りの雰囲気となった二人に、ローゼを含め誰もがほっと息を吐いた。

自分にも手伝えることがあるだろうと、ローゼは何も言われずともライナルトに続き、ディルクもそれを止めたりはしない。親友としてテアを思うローゼはここではとても貴重で頼りがいのある存在だ。ディルクは二人の背中を見つめながら、ローゼから受け取ったヴァイオリンを強く抱えた。

ライナルトの言葉に納得しているものの、どうしても動かさずいられない衝動はいまだにディルクの中であって、彼はそれを抑えるの

に苦心する。

テア…！

何事もなく、彼女に目の前で笑っていてほしかった。

こんなにも、切実に誰かを思ったことが、今までにあっただろうか。こんなにも、失う可能性を苦しいと感じたことが、これまでにあっただろうか。

失うことなど考えられない…。まるで彼女は俺にとっての音楽そのものではないか……。

duet 9 (後書き)

一室に閉じ込められてしまったテアはどっぴなってしまったのか…。
次回をお待ちいただければと思います。

コンサートホール五階の一室に閉じ込められたテアは、しばらく今の状況が信じられずに茫然としていたが、やがて我に返った。

油断した…！

テアは悔しさに拳を握る。

少なくとも母といった頃の彼女であれば、こんな失態は犯さなかっただろう。

あの頃の彼女は、相手の敵意や害意に対して敏感で、自分の勘に従い魔手からいくらでも逃れることができていた。

やはり、虫の知らせが告げていた予感に、従うべきだったのだ。

テアをここに連れてきた彼女は、今から自分のすることへのおそれを抱いていたのか、ディルクにかかる負担を考えて罪悪感を覚えていたのか、もしくは誰かに脅されたかしていたのかもしれない。

それでも、目的のためにテアをここに導く術しか選べなかったのだろう。

彼女がこれ考えたのか、それとも彼女ではない誰かが指示したのかは分からない。

けれど、姑息なことをする、とテアはドアを強く叩いた。

これがテア一人でステージに立つというものならまだいい。

しかし、テアは一人で演奏するのではなく、ディルクと共に立つのである。

彼に迷惑はかけられない。あんなにも、このコンサートで演奏することを待ち望んでいた、ディルクなのだ。

何よりテアも、ディルクと音楽を奏でたいのだ。

テアをここに閉じ込めたかった人間が、テア自身を疎んでこうしたのか、ディルクとテアを共に立たせたくない妬心で実行したのか、

それとも他に理由があるのか、それは分からない。

だが、「敵」がいずれの目的を持つにせよ、テアはここで大人しくしているわけにはいかなかった。

いつまでも後悔をしても仕方がない。

テアは、暗闇に慣れてきた目で部屋を見回した。

部屋は、四十人程度が入る教室くらいの大ささのようであるが、机や椅子、多くの箱や楽器が所狭しと置かれていて、かなり狭く見える。どうやら倉庫の用途で使われているようだ。

部屋が暗いのは、窓に黒い遮光カーテンが引かれ、物が窓際から詰めて置いてあるかららしい。

この荷物をどけて、窓から出ることはできなくもないが、この荷物の置かれ方を見るとかなりの時間がかかるだろうと予想できる。何よりここは五階だ。テアは運動能力にそれなりには自信があるが、さすがに五階の窓から脱出を図って成功する自信は持てなかった。

外側に面した窓と、テアをこの部屋に閉じ込めたドア以外に、外に通じるものはない。通気口はあるが、とても人間が通れる大きさではなかった。

どうする、とテアは自問した。

いつもポケットに入れている時計を確認すれば、まだ時間に余裕はあるものの、そうそうのんびりと構えてはいられない時刻である。

R・Bとイニシャルの刻まれた時計をぎゅっと握りしめ、テアはプレスチャーに耐えた。

お母さん……、お父さん……。

時計をポケットにしまい、テアはくるりともう一度ドアに向き合うと、そのドアを強く叩く。

「誰か！」

もしかしたら誰かが気付くかと思ったけれど、やはりそうしたことには望めないようだった。

今の状況を仕組んだ誰かが、テアの助けとなるような人間をこの辺りに近付けないようにしているのかもしれない。

もともと、そう誰かの助けを求めるようにはテアはできていないから、落胆もなかった。誰かを呼ぶよりも先に、自分で解決する方法を探そうとするのが彼女だ。

テアは強い意志の宿る瞳で、もう一度部屋を見渡す。

そして彼女の目に留まったのは、ピアノを弾く際座るのによく見るタイプの黒い椅子であった。

テアはここから出るための一番簡単な方法を実践することにして、今度は探るように木製のドアのあちこちを叩き、その音を確かめた。

ありがたい、これならいけそうですね…。

テアは一人頷き、積まれた箱からはみ出していた布を引っ張りだすと、両手にしっかり、ぐるぐると巻きつけた。手を傷つけないための措置である。

それから彼女は、目をつけていた黒い椅子に手を伸ばした。

では、いざ

やおら、テアは椅子を高く振り上げる。

腕だけに負担がかからないよう、彼女は体全体を使って、強く、力いっぱい、ドアの弱い部分にめがけて、椅子を叩きつけた。

ドン、ドン、とドアが強く内側から叩かれて、テアを閉じ込めた張本人である女性はびくりと身を竦めた。

いつまでもこの音が続くのだからと顔を強張らせたが、すぐに音が止んでほっとする。

彼女は、学院祭実行委員の腕章をつけてはいたが、実際には委員の人間ではなかった。その上、学院の生徒でもなかった。

彼女はさる貴族に仕えるメイドなのである。

だが、学院祭であるこの日、本来なら入校を許されないはずの彼女は学院へと足を踏み入れた。

それはひとえに、主からの命令を受けたからである。

テア・ベーレンスという少女を誰にも知られずにコンサートの演奏前に閉じ込める。そして、彼女の演奏開始時間直前もしくは直後に解放するようにと。

ずっと閉じ込めておくのではなく、ぎりぎりの時間を選ぶことが重要なのだと主は言ったが、彼女は最初その意図が分からなかった。

主はその少女を目の敵にしているようだった。それならば、ずっと閉じ込めておけばよいではないか。

だが、それではいけないのだと言う。それはただテア・ベーレンスを被害者にするだけになってしまう。必要なことは、彼女を「加害者」に仕立て上げることだと言う。解放されたテア・ベーレンスは閉じ込められたことを主張するだろう。しかし、信頼されていない彼女の言を一体どれだけの生徒が信じるだろうか。閉じ込められたならどうして演奏が終わって姿を現すことができたのかと、誰もが不審に思うだろう。

そうして、演奏をサボタージュした人間として、彼女を貶める必要があるのだと主は言う。そして、彼女のパートナーに、テア・ベーレンスを選んだことを間違いだつたと気付かせる必要があるのだと何としてもこの計画は成功させなければならぬと主は厳しく告げた。

そう、だから、失敗は許されない。

もしも失態を犯したならば、主は容赦なく使用人である彼女を責め立てるだろう。

それが、彼女にとっては恐ろしいことであつた。だが、このように誰かを閉じ込めてしまうという行為も、後ろめたく恐ろしいことだつた。

だが、もう少し待てば命令された時間になる。時間になれば静かにそつと鍵を開けて、彼女はここから立ち去つてしまえばいい。

それまで、誰もここに来ないようにと彼女は祈つた。

テアの控室に、ローゼが入っていったような、予期していなかったことが起こらないように。

主から告げられていた人物とは全く違う人間が控室に入っていた時、彼女の心臓は凍りついた。控室を聞き間違ったのか、主の指示が間違ったのかと思っただのである。

しかし、周りの生徒たちがひそやかに交わす話を聞いて、控室は間違っておらず、ローゼ・フォン・ブランシュという貴族がテア・ベールンスと親しい友人であるということを知ることができて彼女は安堵した。

『どうしてローゼ様のようなお方が…』

と顔を顰めていた生徒たちの会話に、テア・ベールンスという少女はそんなにもひどい人間なのかと、心臓に悪かったのではあるが。しかし、目の前に現れたテア・ベールンスは大人しそうな印象の美しい少女だった。主が忌み嫌うような人間にはあまり見えなかった。それでもメイドである彼女は主に従うほかになく、こうして計画を実行に移したのだ。他の生徒に見咎められないか、ローゼ・フォン・ブランシュが今にも控室から出てきてしまうのではないか、それが心配だったが、何とかテア・ベールンスを部屋に閉じ込めることができた。

早く時間がくれればいい…、と主に渡されていた時計を確かめて彼女は嘆息する。

ドン！！

その時、彼女の後ろでひときわ大きい音が鳴って、彼女はびくりと肩を揺らした。

怯えた表情の顔を浮かべる彼女の前で、ドアが凶暴な音を立て続ける。

何：！？

ドアの前で戦々恐々としている実行犯のことなど露知らず、テアは何度も黒いピアノ椅子をドアに叩きつけていた。

鍵の部分を壊すのが一番良いのかもしれないが、今使える道具とテアの力ではそれは少し難しい。

なので、ドアの装飾の関係で薄くなっている部分を彼女は攻める。

「……っ」

そうして、木製のドアはへこみを見せてきたが、細い椅子の脚の方が先にぽきりと折れてしまった。

テアはすぐに振りかえって代用品を探す。

幸いなことに、山と積まれた箱の一つに金属製の棒のようなものがあって、テアは顔を輝かせた。

ピアノ椅子よりもずっと使えそうな道具だ。

体全体の力を使って金属棒をぶつけると、先ほどよりもあっさりとドアに穴が開いた。

これならばいける、とテアは確信を持ち、根気よくドアに穴を開けていく。

外からの光が入って来て、それが目に眩しかった。

ドアのあちこちに穴を開け、テアはそろそろいいかと乱暴にドアを足で何度か蹴りつける。

脆くなっていた板は、ぎしりと軋んで向こう側に吹っ飛び、これでも誰もこないものかとテアは思った。

人が通れるくらい大きな穴ができて、彼女は持っていた金属棒を床に落とすと、ささくれ立ったドアの切り口で怪我をしないように慎重に部屋からの脱出を図る。

部屋を出たテアの目に、廊下を走っていく女性の後ろ姿が見え、一瞬追いかけるべきかと体を動かしかけたが、テアは踏みとどまった。再びポケットから時計を取り出して時刻をまず確認する。

間に合う…！

テアはさっと時計をポケットにしまうと、破壊したドアはそのままに、女性を追いかけるためではなく走り出した。ディルクと音楽を楽しむために。

ライナルトとローゼがテアを探すために舞台袖を出ていこうとするのを、デイルクは見送っていた。

ただ待つことしかできない己を悔やむデイルクの表情には苦悩と不安の翳りがある。

そうして、ライナルトとローゼがちょうど入り口から姿を消そうとした瞬間。

彼らは、同時に同じものを目にし、ぴたりと足を止めていた。ざわりと空気が驚きに揺れる。

デイルクは異変を感じて顔を上げた。

「テア！」

一番に声を上げたのはローゼだった。

まさしく、今探しに行こうとしていた目的の人物であるテアが、廊下の向こうから人を避けながら走って来ていたのだ。

デイルクはローゼの声に反応して大きく足を動かし、二人の後ろから求めていた人の姿を認める。

テアがローゼたちの前に辿り着くまで、そう時間はかからなかった。荒い息を抑えながら、テアは大切な人たちの前で安堵したような表情を一瞬見せて、

「すみません、遅れました」

テアは本当に申し訳なさそうに、そう言ったのだった。

「すみません、遅れました。まだ…時間、大丈夫です、よね……」
息を荒くしながら、神妙に謝った後、テアは目の前に立つ友人たちに問いかけた。

「テア…！」

行方不明になっていたテアが目の前にいて、ローゼは安堵のあまりテアに抱きつこうとする。

が、それはテア本人に止められた。

「あ、駄目です、ローゼ。今の状態だとローゼまで埃まみれになります」

「え……」

言われて、彼らはテアの白い制服が確かに汚れてしまっていることを認めた。

制服の生地が白いのであまり目立たないが、埃とそれから、細かい木屑が付着している。

一体何があったのかとローゼは詰め寄りそうになったが、それより前にディルクがただ彼女しか目に入っていない様子でテアの前に立った。

「テア……」

「ディルク」

テアの背筋がぴん、と伸びる。

「すみません、遅れてしまって。すぐに準備しますから……」

大切なコンサートにこんな風に遅れてしまって、ディルクは怒っているかもしれない。テアに失望しているかもしれない。それでもテアはディルクと演奏したいと思って、彼に頭を下げようとした。

しかしディルクは憤りも失望も持ってなどいない。ただ彼はテアの

ことを心配し、思いやっていた。

「いや、それより、怪我などはしていないか」

ディルクは確かにテアがそこにいることを確かめるようにテアの手をとる。

温もりは、確かにそこにあって、ディルクは安堵を覚えた。

間違いなく彼女はここにいる。

ここに、いてくれているのだ。

「はい……」

テアは、心配をかけてしまったのだと分かって、ディルクの手をそつと握り返す。

ディルクの眼差しに、いくら詫びても足りないような気が、テアにはした。

ざつと見た限りテアの身体に異常はないようで、テアも大丈夫だと頷いたので、気に病むテアにディルクはほつと微笑みかける。

「良かった……」

その、あまりにも優しく、神々しいほどに美しい微笑はあまりにも大きな破壊力を持っていた。

それを目の前にしたテアは息を呑んだが、さらに誰もが予想しなかったことをディルクは実行する。

「テア、」

ディルクはまるで壊れ物を扱うかのように大切そうに囁いて、そつとテアの腕を引く。

「ディルク、ク……」

戸惑うままに引き寄せられたテアは、体温があまりにも近いことに絶句した。

ディルクの腕が、テアの背に回る。

テアは ディルクに、抱きしめられていた。

「きゃあ!」「なんてこと……」という悲鳴を、テアは聞いたと思った。

けれどそれよりも自分の心音の方がうるさい。

真っ白になる頭でテアにできたことは、ただディルクの存在を感じることだけだった。

「……良かった、本当に、お前が無事で……」

首筋にディルクの吐息を感じる。

囁く声がほんのわずか、震えているように思えたのは、錯覚だろうか。

やがてディルクは体を離し、気遣わしげに問いかけた。

「それで、一体、何があったんだ?」

意識せず首筋から顔を赤く染め上げたテアは、何とか持ち直して、平静を装おうとした。

「それが……」

「……ちよつと待て。入り口を塞ぐと迷惑になる。場所を移そう」
テアが言いかけたところでそれを遮ったのはライナルトだった。

さすがの彼もディルクの行動には驚かずにはいらなかったようだ。若干呆れたような顔をしている。

ディルク一人が平然として、「そうだな」と頷いた。

ライナルトが先導して、ディルクはテアの背にそつと手を添えて促し、我に返ったローゼがその後が続いて、四人は注目を集めながらも空いている部屋に入っていく。

「時間も迫っているので手短かに事情をお話します……」

椅子に座りもせず、テアは話し始めた。

当初予定されていた控室を使えなくなつたと言われて、五階の一室に閉じ込められてしまったことを。

話しながら、「鼠」の符丁に、テアはもしかしたらあの「贈り物」の首謀者が今回のことも謀つたのではないかと考えたが、それを深く追究している場合ではないと頭の隅に追いやつた。

「…それで、仕方なくドアを壊して何とか今脱出してきたんです」「ドアを壊した?」

聞き間違いかと尋ねたのはライナルトだ。

テアは責められたのかと思いきや身を小さくした。

「すみません、それしか考えつかなくて…」

「いや、どうやってドアを壊したんだ」

テアの細腕をまじまじと見てライナルトは聞かすにはいられなかったようである。

「最初は椅子をぶつけていたんですが、そのうち椅子の方が先に駄目になってしまつて…。部屋を探してみたら金属の棒が出てきたので、それで思いつきがつんと…」

テアの繊細な見た目を裏切る所業に、ライナルトは何とも言えない顔をした。

そう言えば、テアはローゼと共に育つたのだつたなと、自身のパートナーを見て納得する。

ローゼはパートナーの考えていることを読み取って、軽く睨みつけてやった。

「そんなことをして、腕は平気か?」

「はい。気をつけていましたから」

だから問題はない。大丈夫だ、と。

ディルクの心配そうな問いかけに、ピアニストの矜持をもって、テアは頷いた。

そうしてまっすぐにディルクを見つめてくるテアに、ディルクはその思いを読み取る。

彼は真摯にテアに頷いてみせると、力強く告げた。

「演奏の準備に入ろう」

「はい」

だが、テアが無理しがちなことを知っているローゼは、心配な顔で念を押さずにはいられなかったようだ。

「本当に大丈夫なのですか? こんな事態があつたのに、普通にコ

ンサートで演奏するなんて……」

「こんなことがあったからこそ、余計に引けません。私なら大丈夫です」

テアはきつぱりと言い切り、ローゼはその決意の固さを知って納得するしかない。

そしてテアは、ローゼからディルクへと視線を移した。

「……ピアノを弾きたいのです。少しでも来て下さった方に楽しんでもらいたい。……そして、あなたとの演奏を、楽しみたい」
真つ直ぐな眼差しに、ディルクは微笑んだ。

「ああ。俺も、お前と同じ思いだ」

「それじゃあ、テア、ドレスに着替えますか？」

予定通り演奏をすることを決めたテアに、ローゼは問いかけた。テアは頷きかけたが、時間を確認したディルクがそれを止める。

「……悪いが、今回はそのままでいこう。もうさほど時間がない」

「でも、あなたがそれでテアだけ制服じゃおかしいですよ」

ローゼは不服そうな顔をした。

「ああ。だから俺が着替えてくる。俺が着替える分には五分もかからないからな」

「それに、テアから大分木屑をもらってしまったようだしな」

ライナルトがからかうように言っつて、テアは先ほどの抱擁を思い出し、耳を赤く染めた。

「テア、慌ただしくしてすまないが、制服を整えて準備をしておいてくれ。着替えたら舞台袖で集合しよう」

「はい」

ディルクは告げると、さっと話をしていた部屋から出て行った。ライナルトもそれに続く。

「……ディルク、テアの言葉を参考に犯人を探す。いいか」

歩きながら、ライナルトは周りの人間に聞かれないよう小さく問いかけた。

「すまないが、頼む。……おそらく、難しいとは思うが」
忌々しいことに、とディルクは怒りの滲む呟きを零す。

テアに対する何者かの所業にディルクは大きな怒りを覚えていた。だが、今はテアが無事であったことに対する安堵と、彼女の演奏に対するひたむきさに応えたいという思いの方が先に立つ。ディルクは何とか怒りを封じ込めていた。

「これだけの人出だからな。まあやるしかない。……ひとまず指示だけ出してお前たちの演奏を聴くことにしよう。期待している」

「ありがとう」

ディルクはそつと笑って、親友と別れた。

一度舞台袖の学院祭実行委員に、参加に問題がなくなったことを連絡してから、再び彼は控室に入っていく。

「テアにドレスを着せたかったんですけどね……」

一方、部屋に残されたローゼは残念そうに呟いていた。

テアにドレスを贈った「あしながおじさん」に不信はあるものの、ローゼは何だかんだとテアに似合っていた空色のドレスを彼女に着せて美しく着飾らせたかったのである。

そして、この親友はこんなにも素晴らしいのだと誰にも自慢したかったのだ。

「また機会はたくさんありますよ」

ドレスを着るのはローゼではなくテア自身で、テアも楽しみになっていたのはあるが、制服の方が着慣れているしずっと楽なので、彼女はローゼよりもずっと割り切るのが早い。

「そうですけど……」

ローゼは唇を尖らせながら、テアの制服からごみを払っていった。

テアは制服についてしまった汚れが目立つたろうかと心配していたのだが、ローゼは上手く綺麗に整えていく。

それから、ローゼはテアを椅子に座らせると、持っていた櫛で丁寧にその髪を梳いた。

控室に向かってもいいが、この方が舞台袖へすぐに行けるし、制服であればここでも問題はない、と考えてのことである。

「それにしても、ディルクがあんなに取り乱すなんて、驚きでした」先ほどまでのことが怒涛のように思い返されて、テアの触り心地の良い髪の質感を堪能しながら思わずローゼは呟いた。

「取り乱す……？」

テアは不思議そうにローゼを見上げる。

テアはライナルト相手に迫力みなぎる様相でいたディルクを知らないの、その言葉が彼にそぐわないように感じられたのだ。

ディルクは生徒会長でもあるし、常に人の前に立つことを意識している。その彼が取り乱したとは、どういうことだろうか、と。

テアの尋ねる視線に、ローゼはかいつまんでテアが閉じ込められていた間のことを話した。

「いつも肩を並べあっている二人がそんな風だったので、心臓が悪かったです……」

「そんなことが……」

実際のところを見ていないテアには、俄かに信じられないことであった。

これまで、ディルクとライナルトが言い争うところなど、議論する時ならともかく、見たことがなかったからだ。人の上に立つことの多いディルクをライナルトは誰よりも支えているし、ディルクもライナルトを頼っている。

生徒会長や副会長といった肩書きがなくとも、二人は互いを最も尊敬し尊重しあっている。

それを知っていたから。

「…その後ディルクがテアを抱きしめたのにも、相当驚かされましたけどね」

テアが気に病まないように、口に出す言葉に配慮していたローゼだ

が、テアの表情が曇ったのを悟って、からかうように言った。途端に、先ほどの抱擁を思い出してしまったテアの首筋が、耳が、真っ赤に染まる。

本当に、デイルクときたら罪つくりなのですから……。

ローゼはそんなテアの様子を見て思った。

だが、テアはローゼが思っていることを知らず、照れくさを追いやると、次のように言う。

「……デイルクは、このコンサートですつと演奏をしたかったのだと言っていました。だから、そんな風に取り乱してしまったのではないかと、思います」

「え……」

「本当に、あの方には、心配と…迷惑をおかけするばかりで…。だからこそ私は、あの方のお役に立ちたい。まずは、今からのコンサートで、少しでも……」

テアの言葉は凜としていて、その決然とした横顔は美しかった。しかしローゼは釈然としない思いにとらわれる。

あの時のデイルクは、コンサートのことなど二の次でした…。

彼は、ただただテアの身を案じていた…。だからあんなに取り乱して、テアが現れた時には、あんな風に……。

テアは誤解をしている。

けれど、ローゼはその誤解をどう解くべきかと迷った。

テアは謙虚な、控えめな性格だ。真正面からデイルクの思いを諭してもおそらくは信じないだろう。

自分などがどうしてそんなに思われることがあるだろうか…、そう考えてしまうのがテアだから。

ローゼはテアの髪を梳く手を止めて、テアには気付かれないように小さく嘆息した。

テアはこのままでもいいと、私は思っていますが…、けれど、いいんでしょうかね、本当に……。

「さ、テア、できましたよ」

だが今はやはり、まず目前に迫ったコンサートに向けてできることをすることが重要だ。

ローゼは自分の手鏡を見せて、テアに格好を確認させた。

「髪はどうでしょう。結った方がよさそうなら結いますが…。随分伸びてきましたからね」

「ええ…。ですが、このくらいなら、本番にも差し支えはないと思います。ありがとうございます、ローゼ」

テアは振り向き、ローゼに微笑みかける。

ローゼも微笑みを返して、テアを促した。

「いいえ。では、行きましょうか」

「はい」

テアはしっかりと頷き、立ち上がると、ローゼと共に部屋を出たのだった。

duet 11 (後書き)

読んでいただければ分かるとおりに……、
抱擁シーンが書きたかったんです。ずばり。
なのでこの学院祭編の事件シーンを書くのはとても楽しかったです。
書いた本人が一番にやにやしていたという……。……。

学院祭二日目に行われるコンサートは、終盤に差し掛かろうとしていた。

「もう少しでテアとディルクの二人だな」

コンサートホールの最も良い席に座る一人は、シューレ音楽学院の学院長その人だ。

黒髪に白髪がわずかに混ざるものの、彼はまだ若い。

悪戯っぽく隣に座る人物に笑いかけた学院長はさらに、子どもっぽくも見えた。

「ああ…。何だが、俺の方が緊張してきた。自分の演奏前より胃が縮む」

「なんだ、お前、案外自分の『娘』を信頼していないんだな」

「そういう意味じゃない、マテウス。ただ…、あの子の初めてのコンサートだし…、色々心配してしまうんだ」

「既に彼女はエンジユのリサイタルで演奏しているんだがな」

「それを言わないでくれ。どうして聴きにいけないのかとずっと後悔しているんだ…」

がっくりとうなだれる横で、マテウスと呼ばれた学院長 本名を

マテウス・キルヒナーという は笑う。

「仕事では仕方がない。しかし…、テアも聴きに来てほしかっただろうがな 『あしながおじさん』に」

「…：… 全くお前は昔から意地が悪い」

恨みがましく見てくるのに、学院長 マテウスは声に出して笑った。

そう、マテウスの隣に座る「彼」は、テアの「あしながおじさん」なのである。

仕事の都合をつけて何とか学院祭コンサートに足を運ぶことができた彼は、ずっとマテウスの隣でそわそわとしていた。

彼は、被後見人であるテアの姿を早く見たくて仕方なく、そして彼女の演奏が楽しみなのだ。

一方で、テアが失敗をしまつて落ち込むようなことがなければいいのだがと、つつい心配してしまっているようである。

テアが閉じ込められて見事脱出を果たしたことも知らず、「あしながおじさん」が憂慮するその間に、一組のパートナーがまたステージ上に立った。

「もどかしいな」

彼は呟くが、一度演奏が始まると、音楽家でもある「おじさん」は生徒たちの演奏に集中するのだった。

「ディルク」

テアが舞台袖へ入ったすぐ後に、着替えを終えたディルクも舞台袖に姿を現した。

制服姿で並ぶ二人に驚きの視線が集まるが、テアもディルクも平然としている。

「テア……」

ディルクはテアの気持ちがあつかっていても、やはり案ずる思いもあって、ほんのわずか逡巡を見せた。

ローゼの言った通り、あんな事件があった後なのである。

だが、テアは演奏をと強く思っていてくれ、ディルクにはその思いがよく分かった。

ディルクこそが、最も強くその演奏を望んでいるのだから。

テアはディルクが案じてくれているのが分かったが、直接は何も言わず、笑った。

「いきなり昨日のような演奏をする、なんて言わないでくださいね」
普段のような他愛ない言葉。けれどその瞳には、強い意志が垣間見えて。

ディルクは、今は案ずることを止めることにした。

「…俺も、お前ほどピアノが弾ける自信はないからな」
だから、ディルクもいつもと同じように返すのだ。

「あれだけ弾いていらしたのに…。サイガ先生のリサイタルの時も…」

「いや、やはり毎日練習を重ねているお前や先生とは比べ物にはならないよ。リサイタルの時も昨日も、色々誤魔化して弾いていた。

…気付いていただろう？」

「気にならない程度でしたが」

テアは言ったが、ディルクは首を振り、そこで学院祭実行委員が二人に手で合図するのを目に留めた。

「……さて、そろそろ時間になるな」

ディルクはテアを促して、いつでもステージに上がれるよう準備する。

「入退場は、リハーサル通りにやればいい」

「はい」

緊張と高揚を抑えるように、神妙にテアは頷いた。

「あとは」

ディルクはテアを見つめ、ふっと微笑んだ。

その眼差しの温かさに、テアはどきりとさせられる。

「音楽を楽しもう。そうすれば最高の演奏ができる」

「…はい」

テアも小さく微笑み返して、ディルクの横に並んだ。

いよいよ、待ちに待ったその時が迫っていた。

「ローゼ」

ローゼは、テアの身支度を整えてやり、激励をして彼女と別れてから、コンサートホールの客席に向かった。席はもうすべて埋まってしまっていて、一番後ろでの立ち見になってしまったが、テアたちの演奏が聴ければそれでいい。

そうしてテアたちの前の一組の演奏が終わって、ローゼが拍手を送っている、聞きなれた声に後ろから呼びかけられた。振り向くとそこには、思った通りライナルトがいる。

「ライナルト…。こちらに来てしまつて大丈夫なんですか？」

「ああ。裏方の仕事はもう学院祭実行委員だけで何とかなるだろう。私もできれば二人の演奏を正面から聴きたいからな」

その言葉にローゼは頷いたが、すぐに声をひそめて尋ねた。

「テアを閉じ込めた犯人は…」

「それについては信頼できる人間に任せてきた。だが…、この人の多さだ。外部の出入りも容易だからな。既に逃げられてしまっている可能性の方が高い」

「そうですね…」

ローゼの瞳が翳る。

ライナルトはそんなローゼの腰にそつと手を回して、自分の方へ引き寄せた。

「大丈夫だ。テアの行動力のおかげで犯人の目的は妨げられた。二人がこのコンサートで演奏を成功させたなら…、今まで以上にテアを認める者が増えて、手は出しにくくなるはずだ。今回のことが公になれば、学院側もテアを守ろうと動くだろうしな。今はすぐに犯人を捕まえられなくとも…、いつかは必ずあんなことをした人間には報いがある。あまり気に病むな」

「ええ…。ですが、私がつとテアを上手くフォローできたら、こんなことにはならなかったかもしれないと思うと」

「馬鹿だな」

ライナルトはローゼを遮るように、優しい眼差しで告げた。

「お前に非はなにもない。テアもそんなことは露と考えていないだろう…。いつもお前はテアを支えてやれている。お前はお前らしくテアの側についてやればいい。それが一番だ」

優しい言葉に、ローゼの瞳がわずかに潤んだ。

「…はい。ありがとうございます…」

「今は二人の演奏を堪能しよう」

「そうですね」

ローゼは明るく笑って頷いた。

そして二人は、テアとディルクがステージに現れるのを、待った。

フロアーディレクター役の生徒に指示をされ、テアとディルクはそれに頷き、ステージへと一步を踏み出した。

いよいよよ、なのだ…。

二人の思いは一致していた。

光溢れるステージ。

ここで演奏することを、ずっと目指してきた。

最善を尽くそう…。自分のために、パートナーのために、聴いてくれる人々のために……。

ディルクは後ろにテアの気配を感じ、テアはディルクの背中を見つめてただ強くそう思った。

そうしてステージに登場した二人に、惜しみない拍手が送られる。だが、同時にざわりと客席はざわめいていた。

ディルク、テアの美貌のせいもあるが 二人が制服姿だったからだ。

制服でステージに立つことは本来悪いことではない。学院で指定さ

れている制服は礼服として認められるものである。

しかし、ドレスアップすることがどちらかと言えば当然となっていたため、どうしても彼らは制服なのかと客たちは顔を見合わせていた。けれど客席の戸惑いなど気にも留めず、ディルクとテアは所定の位置で立ち止まり、タイミングを合わせて礼をする。

そしてテアはピアノの前に座り、ディルクはヴァイオリンを構えた。拍手はぴたりと止まって、コンサートホールはこれだけの人がいるにもかかわらずしんと静まる。

二人は目を合わせて頷き合い
。 。
テアは、指を鍵盤に落とした。

曲の始まりは、Allegro 速く、楽しみに。

心が浮き立つような旋律。

たくさんのお音が紡ぎだされる。賑やかに、盛り上げるように。

そんなピアノの音に、やがてヴァイオリンの音が重なって、溶けていく。

そう、この曲の主人公は 「彼」は、そうしてその明るい場所へ足を運んでいったのだ。

しかし、ふと、周りの音がかき消える。

いや、消えたわけではない。

「彼」の耳に届く音が、たったひとつになったのだ。

Adagio ピアノの旋律は、心地良い緩やかなメロディに変わっていく。

それに共鳴するかのように、ヴァイオリンも変化を見せる。

あまりにも美しいピアノの旋律に出会い、「彼」は胸を打たれたのだ。

その音に驚きと喜びと切望を感じる。「彼」は、音を掴もうと手を伸ばす。

だがその手は届かず、するりとピアノの音は彼の手をすり抜けていつてしまう。

ピアノの音が、消える。

「彼」はそうして悲嘆にくれた。

嘆きの音は、深く悲しく、ヴァイオリンはその感情を紡ぎ、誰もが胸を締め付けられるようだった。

あの音を、手にしたい。

「彼」は強く強く思い、思う音を手にするために、立ち上がるのだ。

Presto 急速に、速度が高まる。

それは「彼」の焦り、成長を表すかのよう。

ピアノの音が常に「彼」の前に行く。先行していく。

追いつこうとして「彼」は走るのに、どうしても届かない。

どこまでもどこまでも先を行くピアノの音。それを追いかけるようにヴァイオリンの音が続く。

ピアノの旋律はヴァイオリンを近づけさせず、撥ねつける。

けれどヴァイオリンは必死でそれに近づこうとして、くじかれて…。激しい音の追いかっこだ。

テアとディルクの視線は、合わない。

「彼」が目指す音と出会えていないことを象徴するかのよう。二人の間には明確に線があった。

「彼」は苦悩し、ヴァイオリンはそれを反映して悩ましげに響く。追い付きたいのに追い付けず。どれだけ思っても、何をやっても、伸ばした手は届かない。

「彼」は強く深く焦がれていた。

ただ一度だけ遭遇したその音に。

真に迫る「彼」の心情を表した音に、誰もが拳を握った。

何かを求めてやまないのは人間としての性。

彼の音は、人の心に訴えかけるのだ。

諦めたくない、諦めてなるものかと。

そうしてだんだんとピアノとヴァイオリンの旋律が重なりを見せ始める。

徐々に、徐々に、「彼」は音に近づいていたのだ。

速さは、Ritardando 徐々にゆったりとしたものにな

っていく。

やがて、ぴたりとピアノの音とヴァイオリンの音が重なって。

テアはディルクを見た。

二人の視線が交わる。

そして、二人は柔らかに微笑んだ。

優しく音が絡まり合った。

目指す音に再び出会えた歓喜が、「彼」を満たす。

ずっと会いたかったのだと、「彼」は笑う。

出会えた音は、驚いたように少し、跳ねて。

ありがとうと、「彼」とその音は微笑み合うのだ。

重なり合った二人の音は、出会った時以上の音に、変わっていく…。

そして、ピアノとヴァイオリンは喜びと希望の音楽を紡ぎ出す。

「彼」が、強く思う音をつかまえられたように。

誰もがきつと、大切なものを手にできるはずだと…。

苦しいことや悲しいこと辛いことはいくらでもある。

それでも希望は消えはしない。

いくつもの夜が心を覆っても。

そこに輝く光はある。

そう伝えるように。

「彼」は、その音が離れていかないようにしっかりと握りしめた。

だが、「彼」の歩んでいく道はそれだけで終わりはない。

出会えた音を抱いて、まだまだ長く続く道を「彼」は行く。

大切な音と共に、「彼」は進み続けるのだ。

Abmarsch 新たなる出発。

そして、曲は、感動的に終わる。

duet 12 (後書き)

あしながおじさん、初登場の回でした。

一人称が手紙と異なっていますが、

学院長が彼の悪友なので砕けた口調になってしまつたのです。

その辺は今後本文にも出てくるはず…。

そして今更ですが学院長の本名も初公開。

…この時初めて考えました…。

すまない学院長…。

ともかくも、学院祭編、ようやくテアとディルクの演奏でした。
学院祭編も残すところあと少し…。

テアは、鍵盤から手を離し、ディルクは、弓を持った手を静かに下ろした。

静かに二人は一瞬見つめ合う。

終わってしまった…？

それが二人とも、どこか信じられなくて。

けれど、やりきったのだという満足感はある。

やがて音を立てずにテアは立ち上がり、またディルクと揃って、丁寧に礼をした。

拍手はなかった。

だが、それは気にならなかった。

テアは聴いてくれたことに感謝を捧げるように下げた頭を上げると、舞台袖へ引き上げていく。

ディルクもそれに続いて、ステージの上から姿を消した。

その瞬間。

割れんばかりの喝采が、二人の後ろを追いかけてきたのだった。

二人の姿がなくなつてようやく、客たちは我に返つたかのようだった。

舞台袖でも、どこか茫然としたような生徒たちが、客席の拍手につられるようにして手を叩いて二人を迎える。

けれど、そうした周りの反応を意識するよりも先に。

へたり、とテアは舞台袖に入って何歩か歩いて後、床にしゃがみこんでしまっていた。

「テア……！？」

曲の余韻を感じていたディルクもそれには驚いて、慌ててテアに駆け寄る。

「大丈夫か!？」

「は、い……」

テアは弱々しく頷いて、どこか潤んだ瞳で、顔を覗き込んでくるディルクに答えた。

「すみません…、緊張の糸が切れたら何だか…、力が入らなくなっ
てしまつて……」

恥じ入るようにテアは俯く。

ディルクは、先ほどの事件が何かしら彼女に影響を与えたのではないと安堵し、テアの細い肩を包むように、そつと大きな手のひらを置いた。

「……お前のピアノは素晴らしかったよ。今日のような演奏ができたのはお前のおかげだ。ありがとう」

「いいえ、そんな」

テアは首を振る。

「私の方こそ、あなたがいてくださつたから…、とても心強く、楽しくて」

その言葉は、ディルクの胸を熱くするものだった。

「そう言ってもらえると、俺も嬉しい。…だがやはり、お前がいなければあの曲は演奏できなかつた。お前が…あの音を引き出してくれたんだ」

「ディルク……」

それは自分には過ぎた言葉だとテアは思った。

けれどディルクの瞳は真摯にテアを見つめてくれていて、テアは穏やかに微笑む。

「ありがとうございます……」

その控えめだが美しい微笑に、ディルクは心を奪われた。

テアとディルクの演奏が終わり、その後も順調にコンサートは進ん

でいった。

裏ではテアが閉じ込められたような事件もあつたわけだが、ほとんどの人間はそんなことがあつたとは知らない。

学院祭コンサートはそうして、無事に終わりを迎えようとしていた。

「…今年のコンサートはいつにも増してレベルが高かつたな」

深く座席に凭れ、テアの「あしながおじさん」は呟いた。

その手にペンが握られているのは、先ほどまで彼がテアへの手紙をしたためていたからだ。

テアとデイルクの演奏を聴いて、彼はペンを走らせずにはいられなかつたのである。

結局、テアたちの後の演奏を、彼は手紙を書きながら聴いていた。

手紙も書き終え、コンサートが終わって、彼が座席にまた深く凭れるのに、隣に座る学院長マテウスはからかうように笑う。

「その中でも自分の『娘』が一番だと言いたいんだらう」

「鼻屑目でなく、な」

真面目に「あしながおじさん」は答えた。

「だからお前もあの子の入学を許したんだらう。アウグストにかけあつてまで…」

「お前よりも人を見る目には自信があるからな」

学院長は意味深に微笑む。

「……今回のコンサート、どうしてここまで生徒が成長を見せたと思う」

「お前の教育成果が表れたとでも言いたいのか？」

「それもあるだらう」

いけしゃあしゃあと学院長は言つてのけた。

「だが大きかつたのは彼らの力だ。テアとデイルク…」

「……」

「デイルクがこのコンサートに参加したのは一年生の時以来のことになるが……。多くのコンクールで賞を受賞し、誰よりも腕のあるヴァイオリニストが参加するということになれば、誰しも彼と比べら

れることを考える。自分が劣っているなどという評価を受けたくはない」

「そうして生徒たちはいつもよりも力を入れて練習に取り組んだと……」

「さらに、テアが存在がある。ディルクに負けるならまだ当然と諦めもつくかもしれない。だが、不正入学したやら色々噂の飛び交っているテアには誰もが負けたくない」

むっと「あしながおじさん」は顔を顰めた。

テアは手紙に書いてくれないものの、初めての学校生活で彼女が苦勞していることを、彼は学院長から聞いて知っていた。

彼もこの学院の出身者であるから、テアがどういう目で見られるのか、一応予想をつけていたのであるが、しかし大切に思う被後見人が冷たい目で見られているのに寛容になればしないのだ。

「今回のコンサートの演奏の水準が高かったのは、そういう理由から生徒たちがより一層練習に熱意を込めたからだ。……しかし、テアはこれからまた苦勞するな」

「生徒たちはあの子の実力を認めさらに妬むか」

「それより何より……今日の演奏を聴いた人々は彼女の素性を明らかにしようとするだろう。記者もいたようだしな」

「それが最も厄介なことだな……」

彼は嘆息した。

「しかし情報が漏れることはほとんどあるまい。アウグストは周到だ」

「それでも、人々の好奇がどう動くのか、俺は心配だ」

難しい顔で彼は呟く。

「……時折思う。全てを世間に晒した方が良いのではないかと……。そうすれば、あの子も張り詰めた生活を送らずに済む……」

「それには同意するが、問題は、どのような形でそれを成すかだな」
「実を言うと少々考えていることがある。彼女とも少し話しはした

……。だが、実行に移す機会が難しい。何より、それをした後の騒

動が厄介だ。一番辛い思いをしてきたのは彼女なのに、また大きな困難に立ち向かわなければならぬとは……」

彼は深刻に眉を寄せたが、やがてそつと溜め息を吐いた。

「いや、今はそれについて深く考えるのは止めにしておこう。ともかくにも、今日は彼女の演奏を聴くことができて良かった。大変なことは多かったのだろうが、元気そうでも安心したよ」

コンサートの司会者が終わりの言葉を述べた後、客の大半は徐々にコンサートホールから出ていこうと立ちあがっている。

その中で彼は緞帳の下りたステージを見つめてかすかに微笑み、手紙の入った封筒を学院長に差し出した。

「すまないが、また彼女に渡してもらえないか。素晴らしい演奏をありがとう、と」

「本当に、会っていかなくていいのか？」

「会いたいが……、ここで目立った真似をするわけにもいかないからな。仕方がない」

心から残念そうに彼は言った。

「…それでは、頼む」

「ああ」

背を向けた彼を学院長は見送り、それから受け取った手紙に目を向けた。

おそらく彼女も、諦めたように笑うのだろうな。仕方がない、と……。

「どうして」

エッダ・フォン・オイレンベルクは、コンサートホールの裏手で一人、顔を蒼くしていた。

テア・ベーレンスは、学院祭コンサートには出られない……。そうな

るはずだった。

何故ならエツダこそが、テアをディルクと並び立たせないように、仕掛けを仕組んだのだから。

取り巻きの貴族に計画を吹き込んで、テアを一室に閉じ込めさせた。そしてテアとディルクが演奏する順番が訪れる頃合いを見計らって彼女を解放する。

テアがいなければ、ディルクは次の演奏者にステージを譲るだろう。次の演奏者の演奏が始まる頃、ようやく姿を現したテアを見て、ディルクが、周りの人間が何と思うか。テアに関しては悪い噂がいくつもある。

多くの人間が、テアはステージに立つことに尻込みして逃げたのだと、悪い方に捉えるだろう。

このコンサートには有名な音楽家が多くやってくる。何より彼女のパートナーはディルクだ。

エンジュ・サイガのリサイタルで演奏したとはいえ、他に経験のないテアが臆病風に吹かれて逃げたとしてもおかしくはない。

生徒たちは、テアがステージに立つことを拒み姿を隠したのだと思い、テアはやはりディルクにはふさわしくなかったと声高に言うだろう。

ディルクも、考えを改めてくれるかもしれない…。エツダはそう考えていた。

本当は、この思いつきを実行に移すべきか否か、彼女も迷ったのだ。この計画は、成功すればディルクがコンサートに参加することを邪魔してしまう、彼に恥をかかせてしまうものである。

また成功しても失敗しても、学院祭実行委員は容疑者として怪しまれてしまう。

逃げたと周りが噂するにしろテアは閉じ込められたことを主張するだろうし、彼女を閉じ込めた人間が学院祭実行委員の腕章をしていたことを証言するはずだ。実際には実行犯は外部の者に任せたので、実行委員を全員調べても誰が犯人だと明確に指摘することは難しい。

だが、犯人はコンサートホールの一室の鍵を周到に用意している。これは学内の人間にしかできないことだ。なので、当然のこととして、実行委員ではない誰かに実行犯をやらせた、共犯者もしくは黒幕が学内にいるという推理が成り立つ。

この時、最も鍵を手に入れやすく、腕章の入手も容易であり、そのように用意周到に計画を準備できる人間として、やはり実行委員のいずれかが犯人ではないかと疑われる可能性は大きすぎるほどに大きい。

不安はあったが、それでもエツダはデイルクからテアを引き離したく、計画実行の後押しをした。

エツダは直接命じたわけではなく、近しい貴族をほんの少し唆してやっただけだ。だからおそらく、テアを閉じ込めたのはお前かと指を差されることはないだろう。

生徒たちのテアに向ける不審の目が多ければ、テアが主張しても調べられることもないかもしれない。

そういった考えから、計画は実行された。

けれど…、テア・ベールレンスは自力で脱出を果たし、間に合う時刻に舞台袖に現れたのだ。

外側から鍵がかけられて、うち破られたドアの残骸を見て、彼女が遅れた理由が閉じ込められたからだ、それをわざわざ疑う人間はいないだろう。

計画は失敗に終わってしまったのだ。

そして、脱出したテアに、デイルクは。

コンサートホールの舞台裏で起こった出来事を鮮明に思い出し、エツダは片手で口を覆うようにした。

彼女にとってあの一連の出来事は、あまりにも直視したくないものだった。

デイルク様が、あのように声を上げて…、しかもあの平民を抱きしめるだなんて…。

デイルクの優しさは誰もが認めるところである。

テアでなくとも、ディルクのパートナーでなくとも、あのような状況に誰かが陥ればディルクは心配し、手を尽くすだろう。

しかし、それでも、彼が誰にでもあそこまでの焦りを見せることがあるのだろうか。

ディルクがあのように鋭い眼をして声を荒げたところなど、エツダは初めて見た。

学院祭の準備中、実行委員の失敗にもピリピリしたところを見せず、学院祭で起こった揉め事にも感情的にならずいつも冷静に対処していたディルク。

それが、テアが消えたと聞いた途端に顔色を大きく変えた。

そして、テアが現れた時に浮かべた、ディルクの笑顔は、あまりにも…あまりにも、優しすぎて。

まさか、ディルク様……？

彼女にとっては、どうしても認めたくない考えが頭に浮かぶ。

もしその推量が当たっているのなら。

ますます、テア・ベーレンスをこのままにしておくわけにはいかない…。

今日のテアの演奏は、確かに一定のレベルであるということを確認ざるを得なかった。

しかし、それはディルクがいたからではないか。

ディルクがいたから、あそこまでの演奏ができたのだ。

それは彼女の力ではない。

あれは、彼女の力ではないのだ、とエツダは思っ**て強く拳を握った。**

あの場所に本来いるはずだったのは、自分だ。

その過ちを、早く正さなくては…。

duet 13 (後書き)

次回、学院祭編完結です。
ディルクがとうとう………？

学院祭における全てのイベント・出店が終わり、後夜祭が始まった。空は闇を纏い、星々がその闇の中で瞬いている。

管弦楽サークルが音楽を演奏し、人々は後夜祭会場である広場でくるくると楽しそうに、祭りの名残を惜しむように、舞っていた。

後夜祭の開始の際の、生徒会長と学院祭実行委員長の挨拶を聞き、模擬店の来客動員数争いで上位を勝ち取った店への表彰をテアが見届けたのは、つい先ほどのこと。

踊りの中に入っていくローゼとライナルトを見送って、しかしテアは踊りの輪の中に入っていくことはせず、楽しそうな人々の様子を眺めていた。

本当に、終わってしまったのだ…。

この学院祭のコンサートのため、デイルクとこれまでずっと練習を重ねてきた。

けれどこれからはそれもなくなってしまおう。

おそらくまた新しいことが始まるだろう、と思うのだが、名残惜しさは尽きなかった。

あのよような演奏を、またできるのだろうか…。あの方と過ごす時間は、短くなってしまふのだろうか…。

そんなことを思っ、テアは首を振った。

いえ、これまで私はあの方の隣にすぎたくらいだ…。あの方を慕う人は多くいるのだから、例えパートナーといえどこれ以上私がデイルクと多くの時間を過ごしたいと思うのは、欲張りというものでしょう。ですが、せめてパートナーでいられる期間だけは、共に演奏をしていたい……。

デイルクとの演奏は、まるできらきらとした何かに包まれてでもい

るかのようで。

感情は高ぶり、それでいていつになく穏やかで、満たされて。だから何度でも、いつでも、いつまでだって、ディルクと演奏していたいのだ。

「テア」

テアがそんなことを考えてぼんやりしているところに、横から声をかけられて、彼女はゆっくりと身体の向きをそちらに向けた。

「学院長：先生」

にこやかな様子でそこに立っていたのは、その通り、学院長だった。踊らないのか？」

「あまりダンスは…得意ではなくて」

「そうか。私も、もう少し時間があって若ければ君を誘うところだが…」

一瞬、にやりとして学院長はそう囁き、続ける。

「…今日の演奏は、リサイタルとはまた違っていても良かったよ。君には、感謝しなければならぬ」

「感謝？」

テアはきよんとする。

「君の存在は生徒たちの実力の底上げに一役買っていた。ディルクもそうだが…。君にとっては苦労も多く、今日も事件があった後でこんな風に言っては文句の一つや二つは甘んじて受けなければならぬだろうが、一教師として本当にありがたいと思っている」

「…もしかして…」

テアは、昼のディルクとライナルトのやりとりを思い出し、その意味が分かって瞠目した。

「いえ、でも、そんな、私ごときが…」

「謙遜することはない。良い意味でも悪い意味でも君が注目されているのは事実だ。何より、今日のコンサートも、聴衆を満足させられたのは君の実力だ」

「注目…、ですか」

それは、以前のテアにとってでは遠慮したい言葉であり、今のテアにとっても戸惑うような言葉だった。

事情を知っている学院長は、テアの考えていることが分かって、苦笑する。

「そう、それで、君の演奏に甚く感動した男からファン・レターを預かってきた」

「え……」

「受け取ってくれ」

差し出された封筒を、テアは見つめ、受け取るうとして先に、周りをきよるきよると見渡した。

「……こんな中だ、誰も気にすまい。コンサートで気にいった生徒に音楽家たちが手紙を送るのはそうないことでもない。名前を出さなければ問題ないだろう」

「……すみません、気にし過ぎてしまうようで……。ありがとうございます」

テアは大切そうにその手紙を受け取った。

学院長は誰からの手紙かわわなかったけれど、テアには当然、その送り主が誰かが分かりすぎるほどに分かった。

「あいつも、会って自分の口から伝えたかっただろうが……」

「いいえ」

テアは首を振った。

「万ーのことを考えれば……、私とおじさんのことは、書類上のことだけということにしておかなければなりませんから……、仕方ありません」

きっぱりと言うテアの瞳は強い。

全く、お前たちときたら……。

学院長は会いたいことを我慢する後見人と被後見人の健気さに、わずかに切なさを感じた。

「……では、私もそろそろ仕事に戻ろう。お偉方に挨拶をして回らないといけない。全く、私もあいつについていけた方が、いっそ楽

だと思つよ」

テアはそのぼやきにくすりと笑つて、もう一度感謝の言葉を告げた。「本当にありがとうございます。お忙しいところに、わざわざ来て下さつて……」

「いや。君もしばらく忙しく、疲れも溜まっているだろう。しばらくはゆっくり休みなさい」

「はい」

気安く手を振つて去つていく学院長を見送り、テアは手の中に残された手紙を見つめた。

「あしながおじさん」からの手紙を。

約束してくれた通り、彼はテアの演奏を聴きに来てくれたのだ。

テアは広場の隅に設置されたベンチまで移動し、腰かけた。

音楽がかすかに遠くなり、人のざわめきも同じようになる。

部屋でゆっくり開封しても良かったが、何となく帰る気にもなれず、テアはそつとその場で封を開けた。

丁寧に、読みなれた字を辿っていく。

そして、ある文章でテアの目は見開かれた。

何より今日の演奏には……、とても……、そう、とても、胸を熱くさせられました。

君を見つけることができ良かったと、何度となく、そう思っています。

君の母上も、君の近くで大層喜んでるはずです。

こんな立派な娘に成長してくれたことを、誰よりも嬉しく誇らしく思っているでしょう。

君を見つけた私がそれを強く実感しているのだから、間違いありません。

これからも、君の母上と共に、君を応援し続けています。

「……あ」

不意に、こみ上げるものがあって、テアは口元を覆った。涙が一筋、頬を伝い落ちる。

温かい言葉が、テアの胸にそっと落ちて、テアを包んだ。これほどまでに、テアの胸に響く言葉を選べるのは、おそらく「あしながおじさん」だけだろう。

私の方こそ、あなたで良かった……。けれど、それも当然なのでしょう。何故なら、あなたは

その時、胸の呟きさえかき消してしまうような大きな音が夜空に上がった。

夜空に大きく広がった光は、花火だ。

テアは涙が流れ落ちるのもそのまま、その次々と打ち上がる花火をじっと見上げた。

その手に、何よりも大切な手紙を握りしめて。

後夜祭での挨拶を終えたディルクは、ダンスをする人々から少し離れて、テアを探していた。

広場に特設されたステージから降りてしばらくはその後の進行を見守っていたのだが、ダンスの音楽が本格的に流れ始めて、後は学院祭実行委員に全て任せておけばいいだろうとその場を離れたのである。

あれから結局、テアを閉じ込めたという女性を見つけることはかなわなかった。

犯人は学院の外に逃げてしまったようだ。

教師及び生徒の誰かがいなくなったという報告もなく、似たような人間が見つからなかったということはつまり、実行犯は学内の人間ではないのだろう。

だが、目撃証言はいくつか得られており、地道な調査を進めていけ

ば、該当する人間を見つけられるかもしれない。

しかし、鍵の入手などは学内の人間でなければできないことである。そうであれば、犯人は複数いる…ということだろう。

実行犯に関しては、おそらく今後学外者が学内に入ることは難しくなることもあり、顔も分かっているの、おそらく再びテアにどうこうすることは難しい。

問題は、学内に潜む共犯者である。共犯者が単数か複数かは分からないが、共犯者の正体も一向に分かっていないということは、テアに対する危険はいまだに去っていないということと同義だ。

今回は閉じ込められただけで済んだが、もっと悪いことになる可能性もある。

そのためデイルクは早いうちに犯人を捕らえたく、また犯人が捕まらぬうちにはなるべく目の届く範囲にテアといて、彼女を守りたかった。

だが、少なくともこの人が多く集まっている場所では、無体なことではできないだろう。警備の目もある。

それでも何となく落ち着かず、デイルクはテアを探した。

デイルクをダンスに誘いたい女性たちは、彼を熱い視線で見つめていたのだが、デイルクはいつものことと、気付かない。

先ほどすれ違ったライナルトは、『テアならばダンスには参加せず近くにで見ていると言っていたぞ』と伝えてくれたので、おそらく近くにいるはずなのだがと、デイルクは視線をあちこちに走らせて

ようやく、テアの姿をその瞳に映し出した。

デイルクはそれに、ほっとする。

次の瞬間、デイルクの背後で大きく花火の音がした。打ち上げ花火だ。

デイルクは振り返るように空を見上げ、その光のきらめきに一瞬、見入る。

花火は、この学院祭の見どころの一つである。大きな花火が五十発

近く打ち上げられるというのは、なかなか他でもないことなのだ。しかし、今は、とディルクは視線を地上に下ろす。

もう一度、テアに目を向けて…、彼は言葉を失った。

テアの瞳に涙が浮かんでいるのを、間違いようもなく、彼は認めただのだ。

けれどそれは悲しみの涙ではないようだった。

ディルクにそれが分かったのは、テアが微笑していたからだ。

それは、とても美しい涙だった。

それは、とても美しい表情だった。

けれどそれは同時に、寂しげにも見え…。

その美しい光景に、ディルクは動けなかった。

そこに、誰一人として入り込んではいられないような、錯覚。

それを覚えながらも、ディルクはテアに一人で泣いてほしくないと思った。

それが悲しみの涙であっても、喜びの涙であっても、分かち合いたい。

どうして泣いているのか、いや、それだけでなく、テアのことを知りたい。

彼女のそばへ、もっと近付いて、全てを、分かりあいたい。

誰にも奪われたくない。

失いたくない…。

「テア…。」

喉まで出かかった言葉を出すまいとするように、ディルクは喉の奥にその続きを呑みこんだ。

俺は、彼女のことを…。

ずっと胸にあつた強い想いの正体を、ディルクはようやく自覚する。

俺は、彼女のことを、これほどまでに好き…なのか。

その言葉は、想いは、花火の音にもかき消されないほど強く、ディルクの心に響いた。

そう、俺は…、テアを…、愛して…。

ディルクは自覚してさらに溢れてくる想いにただひたすらテアを見つめ、そこに立ち尽くしていたのだった。

duet 14 (後書き)

学院祭編(またの名をディルク自覚編という…)、完結です。

これほどまでに長くなる予定ではなかったのですが…。

ディルクの自覚までに30話だと、これから一体どれだけになるやら…。

それはともかく、次からの一連の話では、

テアの「あしながおじさん」について色々と明らかになっていきます…。

interlude

親愛なる、テアへ

前略

今日は、学院祭のコンサートに呼んでくれて本当にありがとう。

仕事のせいで、君に会えないまま帰らなければならないことが、残念でなりません。

けれど、堂々とステージで演奏していた君の姿を見ることができて、それだけで私はとても嬉しく思っています。

それにしても、数ヶ月前と比べても、君のピアノの腕は随分と上がり、驚きました。

何より今日の演奏には…、とても…、そう、とても、胸を熱くさせられました。

君を見つけることができたら良かったと、何度となく、そう思っています。

君の母上も、君の近くで大層喜んでいるはずです。

こんな立派な娘に成長してくれたことを、誰よりも嬉しく誇らしく思っているでしょう。

君を見つけた私がそれを強く実感しているのだから、間違いありません。

これからも、君の母上と共に、君を応援し続けていきます。

今後も勉学に励み、練習を頑張ってください。

けれど決して、無理はしないように。

今日は本当にありがとう。

草々

追伸

今度、この近くで演奏会をすることになりました。
チケットを五枚同封します。

よく手紙に出てくる友人たちを誘って、皆で聴きに来てくれると嬉しいです。

君だけの「あしながおじさん」より

眠りから覚めたテアは、ゆっくりと瞼を開いた。

外はまだ薄暗く、布団から出ると少々寒く感じる。

冬の訪れを感じさせる朝だった。

身を起こして時計を確認するが、起床予定よりもまだ早い。

しかし二度寝する気は起きず、さて今日はどのように過ごそうかと、テアは考える。

学院祭が終わってしまったから、既に二日。

本来なら平日であるこの日には授業があるはずなのだが、学院祭の一般開放日が休日だったため、また休息をとる必要もあるだろうということと、今日は一日臨時の休日なのだった。

本当に、終わってしまったんですね…。

昨日は学院祭の片付けがあつて、生徒会長であるディルクや副会長であるライナルトはもちろん、部活で出店していたローゼも一日後片づけに追われていた。

テアはコンサートには参加したものの、模擬店などには関わっておらず、特にやることがなかったため、昨日もほとんど休みの状態で、気兼ねなく練習室を独占していたのであるが。

今日は朝から久しぶりにローゼと身体を動かして、それからまたピアノの練習をしましょう。あとは…。

考えて、テアはふと自分の机の方を見た。

そこには、忘れないというように、一通の手紙が置かれている。

テアの「あしながおじさん」からの手紙だ。

学院祭のコンサートに、テアの演奏を聴きに来てくれたおじさんが、学院長に託し、テアに届けられた手紙。

その中に、五枚、「あしながおじさん」の演奏会のチケットが同封

されていた。

友人たちを誘って来てくれたら嬉しい　とおじさんは書いてくれた。
ていた。

おそらく、テアがこれまでに手紙に登場させた、ローゼ、ディルク、ライナルト、フリッツ、この四人を誘うことを考えてこの枚数なのだろうとテアは思う。

だから早速昨日のこと、まずテアはローゼに声をかけていた。

『ロベルト・ベーレンスのコンサート！？　しかもこんな良い席……いいんですか、本当に』

テアからチケットを見せられたローゼは驚愕の表情を見せた。

「あしながおじさん」を快く思わないローゼが、そこまで喜び驚くとは思わなかったので、テアの方が少々驚いてしまったくらいだ。

『せっかく頂いたものですから……。ローゼが一緒でしたら、私も嬉しいですし』

『ありがとうございます、テア！　とても楽しみです……。でも、すごいですね、ロベルトのコンサートチケットを五枚も送ってくださいなんて。普通のコンサートと比べたら彼のところはいつもリーズナブルですけど、だからこそすぐに売り切れちゃうんですよ』

そしてローゼは、おじさんのことを、いくらか見直すかのようにテアに尋ねたのである。

『もしかして……。テアのあしながおじさん、って……。ロベルト・ベーレンス縁の人なんですか？　テアがここに来てベーレンス姓を使い始めたのは学院長の余計な気の回し方だと思っていたのですか』

実は、逃亡中、そしてローゼのところに居候している間も、テアはただの「テア」だった。姓など持っていなかったし、持たないものは使えない。母カティアは実家の姓を捨てていたし、父親の姓を名乗るのは父の身を危険に晒すことだったので、カティアもただの「カティア」だったのだ。

だからテアが入学する際にテア・ベーレンスと名乗っているのに、

ローゼは最初、少々違和感を覚えていたものである。何故「ベールンス」なのかとローゼは尋ねたが、テアは曖昧に笑って答えなかった。

そのためローゼは、テアと同じように特別入学を果たしたロベルト・ベールンスから借りて、テアがそう名乗るように、誰かが 例えば学院長やテアの後援者が 書類上の手続きを済ませたのではないかと考えたのである。彼は逆境に負けず大物になった人物であるし、特にあの学院長ならば縁起を担いでそんなこともしようだと、そんな風に思っていたのだ。

テアは、ローゼに尋ねられて、ほんの少し困ったような表情を見せたが、首を横に振らず素直に答えていた。

『実を言うと…、おじさんはロベルト・ベールンスの楽団の、団員の一人なんです。その関係で、今回のチケットと、それに私が学院で使うための姓もベールンスはどうだろうかと 』

『そうだったんですね…。それなら、早く言ってくれば良かったのに…』

『この学院では、ロベルト・ベールンスは難しい立場みたいですから…。少し言いづらくて…』

『そんなの、気にすることありませんよ。ディルクだって、学院新聞のインタビューで一番尊敬する音楽家はロベルトだって答えてましたから 』

『え…っ 』

テアの瞳は嬉しい驚きに輝いた。

『ディルクが？ 』

『ええ。あの新聞、確か私が入学した年のもので…。ライナルトのインタビュー記事も載っていたので、確かどこかにとっておいたはずですよ 』

ローゼは「ごそごそ」と机の引き出しから、その新聞を掘り起こしてテアに渡した。

そこには確かに、ディルクが尊敬する音楽家について「ロベルト・

ベールンス」である、と印字されている。

『そうだったんですか……。今まで、そういう話はそう言えばしたことがなかったものですか……』

『二人は、いつも練習練習、そればかりみたいでしたからね……。これからは、もっと色んなことも話してみたらどうですか？ そう……。デイルクもこの演奏会、誘うんですよ。それもまた良いきっかけになりますよ』

ローゼはにっこりと言って、テアは何と答えたものか困った。

『……迷惑、ではないでしょうか……。何だかいつもデイルクにはこのように付き合ってもらってはかりいるような……』

テアの遠慮しがちな様子に、ローゼは呆れたように腰に手を当てる。『何を言ってるんですか。いくらデイルクでも本当に迷惑ならそれなりの態度をとりますよ。あんなに楽しそうにテアといえるのだから……。テアが気にすることなんて何もありません。それに、私がロベルトのチケットでこれだけ喜んでいるので、彼のファンであるデイルクなんかもう狂喜乱舞するに決まっています』

『狂喜するデイルクは……。あまり想像できませんが』

それでも親友の励ましの言葉に嘘はなく、テアは控えめに微笑みを見せた。

『そうですね……。次会った時に、誘ってみます』

そんな風に、テアは言ったのである。

今日はデイルクに会えるだろうか、とテアは思う。

チケットを彼が受け取ってくれたらとテアは考えて、今度こそベッドから離れたのだった。

学院祭明けの休日、久しぶりにのんびりと起床したデイルクは、日課のランニングを終えて朝食をとった後、図書館へ向かおうと部屋

を出た。

学院祭の疲れは、ゆっくりと眠ったおかげでとれたようだと思いなから、彼は廊下を歩いていく。

太陽が顔を出してもうしばらく経っていたが、寮はまだ静かだった。多くの寮生たちは、疲れのせいだろう、まだぐっすりと眠っているようだ。

昨晚、片付けの後、打ち上げをする面々も多くいたようだから、そのせいかもしれない。

それにしても、こんな風に、ゆったりとした気持ちで迎えられる朝もいいものだと思える。

多くの役職を持つ彼は様々な仕事に追われていることが多く、朝起きて今日はあれとあれをやらなくては…、などと考え実行することがほとんどなのだ。

しかし今日は、特にやり残している課題もなく、学院祭の反省会は明日だがつくらなければならない資料は昨日のうちに仕上げたので、やらなければならないことというのは特にはない。もちろん、やるうと思えばやりたいこともやらなければならないこともあるのではあるが…。

久しぶりに読みたかった本でも読んでのんびり過ごすのも悪くはないだろうと、ディルクは図書館へ足を向けたのだった。

もしかしたら、テアもいるかもしれないし、な…。
そんな思惑も持って。

特に何かテアに用事があるというわけではないが、もちろん学院祭での事件の進展などについて話したいことがあるといえはあるのだが、ただ、顔が見たい、会いたいと思ったのだ。

そこで、寮から出ていこうとしたディルクだが、親友の姿を認めて、足を止めた。

ディルクがランニングから部屋に戻った時既にいなかったもので、どこに出かけたのかと思っていたライナルトだが、生徒はあまり利用しない奥まったところにある倉庫のドアにもたれて、その正面にあ

るドアのガラス越しに外を見ているようだ。

「ライナルト」

声をかけると、ライナルトは顔をこちらに向け、片手を上げてみせた。

「デイルク、良いところに来たな。良いものが見れるぞ」

「良いもの…？」

ライナルトに誘われるまま、デイルクは彼のもとに近づいた。

確か、このドアの向こうは寮の裏手に繋がっていたはずだ。

生徒はあまり近づかないが、管理人がこっそり畑をつくったり園芸をしているのをデイルクは知っている。

綺麗な花か何かでも咲いているのかと思いつながらライナルトの隣に立ち、デイルクは目を見張った。

「テア」

それから、ローゼの二人だった。

二人は動きやすい服を身につけて、激しくその身体を動かしている。テアはいつもの眼鏡を外していた。

その手にあるのは、木の棒だ。怪我をしないようにか、布が巻きつけてある。

二人は剣に見立てたその棒を巧みに動かし、稽古をしているようだった。

「さすがモーリッツ卿に育てられた二人、というものだな。見事な型だ」

「ああ」

ライナルトのその言葉に、デイルクは感嘆するように頷く。

二人が剣を交える姿は流麗で、髪の色からテアの姿は流れる水や風を連想させたし、ローゼは燃え立つ炎のようだ。

真剣な二人の眼差しは美しく、気迫が感じられる。

「しかしテアがこれほどできるとは意外だったが…。あの扉を壊したというのも頷けるというものだな」

「そう、だな…」

半ば上の空で、ディルクは返事をした。

出会ってからこれまで、テアには驚かされてばかりいるような気がする、と彼はテアから一時も目を離さずに思う。

様々な表情を、様々な一面を見せられて、おそらく、その度に……。そんな、どこかいつもとは違う様子のディルクにライナルトはほんのわずか首を傾げたが、外のローゼたちが剣を打ち合うのを止めたのを見て、ドアの取っ手に手をかけた。

「ディルク、行かないか」

「あ、ああ……」

はっと物思いから覚めて、ディルクはライナルトに続いた。

ドアの開く音に、ローゼもテアもすぐに気付いて、二人の方に振り向く。

「ライナルト」「ディルク……」

ローゼは笑顔になり、テアはわずかに目を丸くして、パートナーたちを見つめた。

「おはよう。休みだというのに、稽古か」

「休みだから、ですよ。こういう時でもない、テアには付き合ってもらえないじゃないですか」

ローゼはタオルで汗を拭いながらさっぱりとした笑顔でライナルトに答える。

一方、「おはようございます」と二人に挨拶するテアに、ディルクは近づいた。

「おはよう。お前も……、剣を扱ったりするのだな。少し驚いたよ」

「ええ。けれど、私は本当にちょっと習ったくらいで……。ピアノのこともありますから、ローゼにはいつも手加減してもらっています」

「私は年季が違いますから。そんなに早くテアに追い付かれたら悔しいですよ。でも、これでテアは訓練生の誰よりも素早いので、とても良い相手なんです。だから良く付き合ってもらうんですよ」

テアが素早いというのは、ディルクにとってもライナルトにとっても意外さを禁じ得ないところであったのだけれども、先ほどの様子

を見た後であったので、ローゼの言葉に頷いた。

「そうだ、もし時間があるなら、ライナルトも少し身体を動かしてみませんか？　今までなかなか機会がなかったのですが、一度やってみたかったんですよ」

どこか好戦的な様子でローゼは瞳を輝かせながら提案する。

「お前と、か」

ライナルトは複雑そうな顔になったが、ローゼの目に押されて、やがて頷いた。

「だが、軽くて頼む。お前相手だといついても本気になってしまいそうだが何を仰います。それでは楽しくありませんよ」

「…万が一にも、お前に怪我をさせたくはないのだが？」

「そんなへまは致しません」

ローゼはライナルトにテアが持っていた棒を渡し、おもむろに攻撃をしかけた。

ライナルトは軽い動作でそれをかわし、逆にローゼの横を狙うが、それをローゼも最小限の動きで避ける。

テアとデイルクは、そんな二人から少し遠ざかったところで、二人が剣を交えるのを見ていた。

「ローゼは…、本当にさすがだな」

「けれど、ライナルトも隙がありませんね…。ライナルトも、

あなたも、やはり幼い頃から剣術などを学んでいらしたのですか？」

「ああ。一応一通りの武術は習わされたな…。戦争も国際状況を見る限り当面起こらぬだろうし、今の俺たちには最早必要のないものだ…、思いたい」

テアは、不用意な質問だっただろうか、とデイルクを窺った。

どうやらデイルクたちは、王族であることを捨てたことから分かるように、どうやら昔の自分たちの身分に関してあまり良い思いを抱いていないらしい。それを思い出させてしまったようだ、テアは少しの後悔を覚えた。

だが、デイルクはそんなテアに穏やかな眼差しを向ける。

テアの気遣うような視線に、その理由を知って。

「…知っていたのか、アイゲンの意味を」

デイルクは、ライナルトからテアはそのことを知らないらしい、と聞いていた。

けれど、どうやらテアはそれをいつの間にか知っていたようだ、今のテアの様子からデイルクにはそれが分かった。

誰かからそれを聞くこともあるかもしれない、とはもちろん考えていたことだった。

けれど、自分の口からテアに告げるべきだろうか、デイルクは迷っていた。

結局言わずにここまでできてしまったのは、それを告げることでテアの態度が変わってしまったり、自分たちの関係が変わってしまうのではないかということをおそれたからだ。

しかしテアは出会ってから変わらなまま、こうしてデイルクを真っ直ぐに見つめ返してくれる。

「はい…。すみません…」

「お前が謝ることはない。俺の方こそ、何も言わないままですまなかつた」

「いいえ。誰にも言いたくないことや言えないことはありますから…」

そのことを、誰にも言えない秘密を抱えているテアは良く分かっていた。

「…だが、俺の過去のせいで、身近な人間が傷ついてしまうようなことも、可能性がないわけではない。この学院にいる限りは安全だとは思いますが、一昨日のようなこともあるし、本来なら事情をきちんと説明しておくべきだったんだ」

「…それでも」

デイルクが淡々としながらも、どこか自己を責めているのが分かって、テアはそれが嫌だと思った。

「今のあなたは私と同じ場所に立っています。…私たちはシユール

音楽学院の生徒です。そして少なくともここにいる間は身分は関係ない。だから、あなたが身分のことを口にしないのは当然のことであり、謝る必要などないことです」

デイルクは強く見上げてくるテアの視線を受け止めて、無意識にテアの方に手を伸ばしていた。

どうして、お前はいつでもそう

「ありがとう……」

囁くデイルクはテアの頬に手を添えて。

一瞬、彼は眩暈のようなものを覚えた。

先日、後夜祭の時のことが思い出され、鮮明に脳裏に浮かぶ。

テアの涙、美しく切ないその光景が……。

あの時の感情は、一時のものでもまやかしてもない、とデイルクはそれを強く自覚した。

そして、あの時には近づけなかった大切なものに触れ、さらに想いを深くするのだ。

振り払われず、拒まれないことが嬉しく、心が歓喜の声を上げる。

しかし、デイルクは一昨日の涙が既にないことを確かめるように、かすかにテアの目尻に親指を走らせて、すぐに手のひらを離れた。

そのまま、腕がこれ以上の行為に及ぶことを、まるで恐れるかのよう

に。
テアは、その、何となくいつもと違う様子のデイルクにどきまぎとして、顔に熱を覚えたが、やがてデイルクに話したいことがあったことを思い出した。

「…あの、デイルク、話は変わりますが」

「なんだ？」

優しく、デイルクは目元を和らげた。

「え……っと、その……」

テアはぎこちなく俯く。

どうしてこんなにも、コンサートに誘うというだけで緊張してしまうのか、と思う。

おそらく…、私はただ、怖いのだ。断られることが…。そして、その時にディルクに謝らせてしまうことが、嫌なのだ……。いつも優しいと感じられるディルクの態度が、いつもより増して優しく柔らかだと感じられることが余計に、怖いと感じる心を増長させているような気がする。

決して彼は断らないのではないかと、そんな風に思えてしまうから、余計に…。

けれどテアは思い切って、告げた。

「あの、十二月二十三日は空いていますか？」

「ああ、今のところは確か…、何の予定もないはずだが」

ディルクは少し考えるようにしながらそう言った。

「それでしたら、その…、もしよければいっしょに管弦楽のコンサートに行きませんか？ ローゼたちと、皆で。あの、後見人の方からチケットをいただいたんです。なので、」

いつの間にか、テアは強く拳を握っていた。

ディルクは少し驚いた顔をしたが、すぐに微笑んで頷く。

「…ありがとう。それはとても嬉しい誘いだ。…ところで、曲目を聞いてもいいか？」

あっさりとディルクが頷いたので、テアはほっとし微笑んだ。

「オネゲルの『クリスマス・カンタータ』など、です」

そのテアの返答に、ディルクは思い当たることがあったような顔で、思わず詰め寄るように尋ねていた。

「もしかして、ロベルト・ベーレンスの演奏会か？ 隣町で行われる」

「そうです…」

ディルクの勢いにテアは少し驚いて、けれど頷いた。

そう言えば肝心のそれを言っていなかったと思って、ディルクが気分を害しただろうかと思っただが、彼はどこか興奮を抑えるように言う。

「それは、本当に楽しみだ。実は俺は…、数ある音楽家の中でロベ

ルト・ベーレンスが特に、そう、好きで、尊敬している。何度か演奏を聴きに行ったが、その度に感動させられたよ。あの人は本当にすごい…、そして他にない演奏をするから、とても面白いんだ」

ディルクは目を輝かせていた。それがテアには嬉しく、そして後見人である「おじさん」のことを思つて、とても誇らしかった。

「ええ、私も一度だけ演奏を聴いたことがあるのですが…。表現に縛られず多彩で、意表をついてくることもあったり、それでいてひどく感動的だったり…。とてもわくわくして、人を引き付ける魅力を持っていますよね」

「そうなんだ」

二人はそこで、ロベルト・ベーレンスの話題で盛り上がったが、すぐにそこにローゼとライナルトが加わってきた。どうやら、打ち合いは一段落ついたらしい。

息を整えながら近づいてくる二人の表情は、疲れたというよりも満足そうなものだ。

「良い汗をかきました。…二人も、話が盛り上がっていたみたいですね。ロベルトの話ですか？」

ローゼはタオルで汗を拭きながら、テアの様子からそれが分かつて尋ねる。

テアは頷き、突然出てきたロベルトの名に首を傾げるライナルトに問いかけた。

「あの、ライナルトも、十二月の二十三日、予定がなければ、演奏会に行きませんか？ ロベルト・ベーレンスの演奏会なんですけど、チケットをいただいたので…」

「ロベルトの演奏会のチケット？ それはすごいな…。是非行かせてくれ。ローゼもディルクも行くのだろう？」

テアと、そしてディルクとローゼも頷き、こうしてロベルトの演奏会に行くメンバーは四人が確定したのだった。

「それから、もう一枚チケットをいただいたので、よければフリッ

ツを誘おうかと……」

テアがそう付け加えた時、かすかにディルクの瞳に複雑な色が走ったのを、ライナルトは見逃さない。

「……そうだな、いいんじゃないか。それにしても、チケット五枚とは豪気だな」

「チケットは後見人の方にいただいたのですが、いつも手紙に書くのが四人のことなので、それで……」

ライナルトのその言葉に、テアは苦笑を浮かべて誤魔化した。

後見人か、とライナルトは内心ひとりごちる。

わざわざロベルトの演奏会のチケットを送ってくるということは、テアの後見人はロベルト・ベーレンスに縁のものなのだろうか。テアの姓を聞いた時から、もしかしたらとは思っていたのだが、とライナルトは考える。だが、テアは後見人について、詳しくは話したくない様子だ。どうしてそんなに隠すのか、ライナルトには少々疑問だった。後見人が有力であればあるほど、その権力はテアを守るだろうし、そこまで有力でなくとも後見人を明らかにすることは身分を明らかにし不審を避けられる。ロベルト・ベーレンスのチケットを一度に五枚もとれるのであれば、そう世間に知られていない人間ではないと思うのだが。

「ロベルトと言えば、先日の学院祭にもいたみたいですね。私は見なかったのですが、昨日片付けの時友人が噂していました」

「そうらしいな」

ローゼの言葉に、ライナルトは考え込むのを止めた。

「俺も、もし会えたらと思っていたのだが……、コンサートが終わってからすぐに姿を消してしまったそうだな。卒業生として後夜祭で一言くれないかと実行委員も事前に依頼したらしいのだが、忙しいと断られたようだ」

「でも、テアと、テアの後見人のおかげで彼の演奏会に行けるから、良かったですね。もしかしたら、お話もできるかもしれませんし

」

「演奏会ではますます忙しくて、さすがに後輩と言っても追い返されるだろう」

「ですが一度くらいは直接にお話を伺いたいものです。だって、ロベルト・ベーレンスと言ったらこの学院にいくつも伝説を残しているじゃないですか。本当なんでしょうかね？ 先生方と飲み比べて全員に勝ったから学費をタダにもらったとか」

こうしてしばらく、四人は大先輩であるロベルト・ベーレンスの話題で盛り上がっていたのだった。

…というわけで、ロボットのコンサート編、開始です。

テア達にはさくっとコンサートに行って帰ってきてもらっただけだ
ったのですが、

…またまたちょっとこの話も長くなりそうな感じですよ…。

「テア、おはよう」

臨時休業も終わり、授業が再開するその朝。

授業前、講義室に座って本を開いていたテアは、友人の声に顔を上げた。

「おはようございます、フリッツ」

テアに微笑まれフリッツはわずかに頬を紅潮させながら、彼女の隣に座る。

「学院祭、あつという間に終わっちゃったね…。あ、コンサートでのデイルクさんとの演奏、聴いたよ！ とつてもすごかった！」

「ありがとうございます…」

テアははにかんだ。

「新聞にもデイルクさんのことか、書いてあったしね。もう読んだ？」

「ええ」

テアは頷いた。

シューレ音楽学院の学院祭が記事になっていたのをテアが読んだのは、昨日のことだ。

昨日の午前中、四人で和気藹藹と過ごした後、デイルクと二人で図書館に行った際に目にしたのである。

王族であることを放棄したとはいえ、いや、もしかしたらその事実があるからこそ、デイルクやライナルトはマスコミのかっこうのネタのようで、二人の名は記事の中で取り上げられていた。生徒会役員であることも理由の一つかもしれない。

目玉であるコンサートでの演奏は特に絶賛されており、テアは嬉しいような複雑な気持ちになったものだ。

「もしかしたら、ディルクさんのパートナーだし、テアの名前も載るんじゃないかと思ってただけだ…」

「そんな」

フリッツの言葉にテアは苦笑して首を振った。

しかし、フリッツは続ける。

「記事に載るってことはすごいチャンスなんだよ。多くの人の目に留まるようにしなきゃ、これから生き残っていけない…。ディルクさんのことが取り上げられているんだから、テアもなんで載ってないんだくらいの気持ちでないと」

「はあ…」

それは確かにそうだ。テアはフリッツの忠告に複雑な気持ちで頷いた。

これからピアノを続けて、ピアノで生きていこうとするのなら、記事に名前が上らなかつたことを安堵してはいけないのだろう。だが、これまで逃げて隠れる生活を送ってきたテアだから、目立つことはあまり歓迎する気にはなれないのだった。

それに、特にマスコミというものは、ゴシップやスキャンダルというものに飢えている。

もしかしたら、今回のことでディルクのパートナーであるテアは、彼らに調べられているのかもしれない。

けれどおそらく、今回ディルクのことはあれだけ書いてありながらパートナーについては述べられていなかったのは、学院長や…あの方々が動いたのかもしれない…。

おそらくその考えは間違っではないとテアは思った。

けれど、いつまでもこのまま守ってもらえるとは限らない…。これからのことを、よく考えておかなくては…。

テアの瞳に一瞬、かたい色がよぎった。

「…と言っても、僕も人のことは言えないけど…。来年は僕ももつと腕を上げて参加したいよ。それで、たくさんの人や…、ロベルト・ベーレンスみたいな人に僕の演奏を聴いてもらいたい」

切望するようなフリッツの言葉に、テアは一瞬の物思いを思考の端に沈めて微笑んだ。

「フリッツはとても優しい音を持っていますし、努力を怠るようなことはしていませんから、きつと認めてもらえらると思いますよ」

「そうだといんだけど…。コンサートの客席でもたくさん見たことあるような顔があつて、それだけで緊張しちゃったんだ。僕は演奏しないのに…。おかげでサインももらえなかった」

「ぼやくフリッツは、本人が聞いたら気を悪くするだろうから口には出さないが、何だか可愛い感じがして、テアはくすりと笑った。

「ロベルトとか、結構近くの席に座ってたんだけどなあ…」

その言葉に、テアはわずかにどきりとした。

「それは…良かったですね。直に見るロベルト・ベーレンスはどうでしたか？」

「笑うと気さくな感じで、でも演奏はすごく真剣な顔で聴いてたよ。今回、彼がスカウトしたいっていうような生徒がいたのかな、学院長と話したりしてた。テアは何か声をかけられたりしなかった？」

テアは首を振る。

「そうか…。それにしても、やっぱり、かつこよかったなあ…。あの人が学院で色々なことをやったのは伝説みたいになっているけど、本当の話なのか本人に聞きたくなかったよ」

「それはローゼも確かめたいと言っていました。私が詳しい話を聴いたのはつい最近のことですけど、すごかったようですね」

「うん。とある音楽家に喧嘩を吹っ掛けてどれくらい演奏が続けられるかの耐久レースをしたとか…。寮に動物を連れ込んで歌を教えようとしていたとか…。信じられないような話がいくつもいくつも…。一方で、音楽に関しては誰にも負けない、誰とも一線を画したような才能を持っていたんだ」

憧れの眼差しでフリッツは言った。

自分の周りにロベルト・ベーレンスを悪く言う人間がいないことに、テアは安堵を覚える。

この学院において彼は複雑な存在だ。自分の楽団をつくり、現在活躍している点を見れば大きな功績者であるが、宮廷楽団の誘いを断ったという事実が一方ではある。

この学院設立の第一の目的は、宮廷楽団で活躍できるような人材を育成することであるから、その目的からすれば彼は裏切り者であり、異端者だ。

だが、宮廷楽団を目指しているはずのフリッツであっても、ロベルト・ベーレンスに対する憧れは篤いようで、テアにはそのことが誇らしく感じられるのだった。

「フリッツ、実を言うと私、今度のロベルト・ベーレンスの演奏会のチケットをいただいたんです。ローゼたちと皆で一緒に行きませんか？ 十二月二十三日なんですが、都合がよろしければ……」

「えっ！」

フリッツは目を丸くした。

「ロベルトの？ コンサート？」

「はい」

「ほんとに！？ ほんとのほんとのほんとに！？」

「はい」

今までで一番興奮しているようなフリッツの反応だった。

意外そうに、ちらちらとこちらを見てくる生徒たちもいる。

「すごいね。ロベルトのチケットって言ったら、売りに出した途端にソールドアウトしてしまうようなものだっていうのに！ 僕もまだ一度しか聴きに行けたことがないんだ！」

フリッツはまるで奇跡と言わんばかりで、少々大げさだとテアは思ったが苦笑に止めた。

「ちょっと待って、今予定を確認するから……」

フリッツは鞆をこそごそ言わせて手帳を取り出し、じつと眺めているうちに、絶望的な顔つきになった。

「何か予定がありましたか？」

「うん……。二十四日が神誕祭だから、その関係で家に戻ってこい

って言われてたんだ……。……テア、ちょっと予定がずらせないか聞いてみるから、返事は保留にしてもらっていいかな」

「はい。私の方は、返事はいつでも構いませんよ。他に誘いたい人は特にはいませんし……」

「ごめん……」

「謝らないでください。それに、もし今回は駄目になっても、また次の機会にチケットをいただけるかもしれないから」

肩を落とすフリッツにテアはそう言って慰めた。

「うん、ありがとう……。それにしても、ロベルトの演奏会のチケットをくれるなんて、誰か知らないけどすごいね。一枚買うのも結構大変なのに……」

その言葉に、テアが返事をしようとした時だった。

講義が始まることを告げる鐘の音が鳴る。

講義室に教師が入って来て、テアもフリッツも口を閉じ、前を向いたのだった。

「ようテア」

エンジュのレッスンのため、練習室で彼を待っていたテアは、部屋に入ってきた途端エンジュに頭をぐりぐりと撫でられて少々閉口した。

「な、なんですか？」

「……辛い？」

「疑問形なのはどうしてですか……」

ははつと軽くエンジュは笑って、テアの頭を撫でるのを止めた。

「いや、お前らの演奏、教師陣の間でも評判でなー。俺も鼻が高いっていうもんだ」

「それなら良かったです……」

今日はどんなお叱りを受けるだろうかと心構えしてきたテアは、少し拍子抜けしたような気分を味わった。もちろん、満足できる演奏はしたが、それでも課題が残っていることは分かっている。

「まあ今回は全体としていつもより聴き応えがあったな。学院長も生徒たちが成長したって泣いて喜んでたぜ。とはいえ、院長先生の功績つつうよりは…」

意味深にエンジユは笑いかけ、テアはそれに答えにくそうな曖昧な微笑みを返すしかなかった。

「ま、それはいいか。実際、演奏はわりと良かったぜ。技巧的には二人ともそう問題なかった。だがもつと聴衆のことを意識できれば良かったな」

「はい」

「そんな感じで、今回はあんまり厳しいことは言わないで置いてやる。ディルクとも反省はしてるだろうしな。で、これからのレッスンだが…、正直ちょっと迷ってるんだよな」

「え……」

エンジユは顎に手を当てて考え込むようにしながら続ける。

「一月に試験があるから、その対策はしないとまずいだろ…。けどそれだけじゃつまらんから、春にあるコンクールにでも参加してみるのもいいかと思ってな」

「コンクール、ですか」

「やっぱ俺の弟子なら、賞の一つや二つは当然とつといてもらわないとな。お前のことなめくさってる奴らも、今回のことで考えを変えたかもしれないが、一度の成功だけじゃまだ弱いだろうし、ディルクもいたからな」

「はあ……」

「お前としてはどうよ。コンクールに出たいと思うか？」

「それは、出られるのなら、出たいです、けど」

正直なところを述べて、テアは逡巡した。

もし万が一コンクールに出場して、賞をとれるようなことがあった

とする。

その時には、もしかしたら余計な詮索を受けることになるのかもしれない…。

今朝考えなければならぬと思っていたことが、早くもまた姿を現した。

考えすぎなのだろうかとは思つ。おそらく秘められた事実に向き着くことは困難なはずだ。

しかし……。

そんなテアの様子を見て、エンジユはやがて言った。

「ま、今すぐに決めるとは言わない。でもお前、これからずっとピアノを続けていくつもりなんだろ」

「はい……」

「それなら、いつかは腹をくくらなきゃならない。コンクールは大きなチャンスだからな。俺が待つのは、夏までだ。夏には絶対コンクールに出ることになるから、それは今から覚悟しとけ」

「は、はい」

夏には、コンクール、とテアは心に刻みつけた。

「じゃあコンクールについては保留として……。実を言うとな、学院祭に来てたやつらからお前のことを紹介しろって言われててな」

「え？」

「しばらくそいつらに来てもらって、皆に見てもらえればいいんじゃないかと思うんだが、いいな」

いいか、と尋ねるのではなく、いいな、という確認である。

「どうやら拒否権はないらしい。拒否、したいわけではないが」

「俺だけが見るより、色んなやつに見てもらった方が勉強になる。」

癪だが、俺が逃していることもあるだろうからな。色んなこと言われ過ぎて逆に混乱するかもしれんが、基本的には俺の方針を進めるし、もう学院長の許可ももらっちゃったし」

「……分かりました……」

啞然としつつ、テアは頷くしかなかった。

「学院祭の時にな、お前らの弟子の何倍も美人で見込みがあるだろうと言いまくってたら、まぐれかもしれないからもう一度聴かせるとかお前だけに良い思いさせるかと言われちまってな。大変だと思いが頑張れ」

「……」

他人事のようにからりと笑うエンジュに、テアは返す言葉が見つからなかった。

サブキャラ登場で重たくせず、済む良い部分はなるべくさくつとまとめようと思うのですが、どうして書いていると長くなってしまっているのでしょうか…。

そう言えば、遅ればせながらtwitterや活動報告を使い始めてみました…。

何となくときどきしております。

まだまだ使い慣れません、よろしくお願いします…。

学院祭明け、授業が再開された放課後。

泉の館では、生徒会役員と学院祭実行委員が集まり、反省会が開かれた。

反省会は、実行委員長が上手く仕切り、滞りなく進んだ。

学院祭は二日とも、テアが閉じ込められた事件を除いては特に大きな問題はなく、順調であったため、会議が下手に長引くことはなかった。

そして、反省会の後は、誰もが楽しみにしていた、打ち上げだ。

クンストでは成人は十八歳以上と定められているため、打ち上げでは当然のように酒類も出てきている。

委員長が乾杯の音頭をとり、教師に咎められない程度に賑やかに、打ち上げはスタートした。

ディルクは果実酒の入ったグラスを片手に、話しかけてくる生徒たちに愛想よく対応していたが、その内人の輪から外れて難しい表情になる。

そんなディルクに、同じように集まってくる人込みから抜け出したライナルトが近づいて行った。

「どうした、ディルク」

「……テアが閉じ込められた事件のことを考えてしまっただけ」

賑わう中なのでライナルト以外の耳にディルクの声が届くことはおそらくなかっただろうが、ディルクはそれでも声を落として告げる。

「ああ……」

予想がついていたらしく、ライナルトは軽く頷いて、談笑する生徒たちに視線を走らせた。

「おそらく、この中にいるのだろうか……」

共犯者、もしくは黒幕が。

「…できれば、こんな風に疑いたくはないのだが」

「仕方あるまい。状況が状況だ。一般生徒の可能性もあるが、いずれにせよ学内に共犯者がいることは間違いないだろう…」

それを思うと、何となく、誰と話をしても、もしかしたらなどということを考えてしまつて、ディルクは表面で笑いながらも、内心穏やかではいらなかったのだ。

こんな風に、同じ学び舎で学ぶ仲間を疑うのは、真つ直ぐな気性のディルクには特に苦痛だった。

また、この中の誰かがまたテアを傷つけるのではないかと考えてしまつと、今すぐにテアが無事かどうか確認しに飛び出していきたくなるような衝動を覚えてしまふ。

「だが、今は事件については学院長が動いてくれている。テアには一人にはなるべくならないよう、誰かと一緒にいるか、大勢の中にいるようにと、気をつけるように言つてあるし、お前がそんなに考えすぎることはない」

ライナルトはディルクの気性が分かつていて、宥めるようにそう言つた。

今回の事件は、テアが大げさにしたくないと訴えたこともあつて、警察に届けるようなことはしていない。学院側としても、そのような事件が起こることは世間の信頼を大きく損ねることとなるので、大つぴらにはしたくなかつたようだ。

だが、だからといつてだんまりを決め込むのではなく、学院長は独自に犯人捜索に力を傾けていた。そのため、おそらく犯人のことはいずれ明白になるだろうと、ライナルトは考えている。

また、生徒の不安を煽らないようにするため、学院から生徒全員へ正式に事件のことが伝えられることはなかったが、教員には周知し、犯人が捕まるまではと警備の目も強化して、テアに関しては手出しができないよう配慮は既に終えている。

また、事件のことを知っている生徒たちには、なるべく他言しない

ようにと通達がなされた。それがなくとも、事件を知っている主な生徒たち　つまり学院祭実行委員は、あまり事件のことを話したがる様子を見せていない。彼らも気付いているのである。最も疑わしいのは自分たちであると。だから、多くは口を開かず、学院内で事件のことが表立って話されることは今のところ見られなかった。

「分かっているのだが、な……」

ライナルトはそんなディルクの肩にそつと手を乗せた。

よく似た二つの美貌が並ぶその光景は一枚の絵のようで、その場にいた者たちの目は自然とそこに集まっていったのだった。

明日も授業は普段通り行われるので、打ち上げはそう遅くない時刻に終了した。

打ち上げで少し疲れてしまったディルクは、ライナルトに勧められて早めに寮に帰ることにして、足を寮の方へ向ける。そのライナルトは、反省会の資料を少しだけまとめから戻るといふ。

ライナルトには気遣われてばかりだなとディルクは申し訳なく思いつつも、ライナルトのような親友を持つありがたさを思った。

「ディルク様　」

そんなディルクに後ろから掛けられる声がある。

女性の声だった。

振り向くと、後ろから追い付いてきたのは、エツダ・フォン・オイレンベルクだ。

「もしよろしければ、少しだけお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

礼儀正しくエツダは頼み、ディルクは鷹揚に頷いた。

「ああ、別に構わないが……。どうかしたのか？」

「いえ……。あの、十二月二十三日、もしディルク様のご都合がよろしければ、お誘いしたいところがあります　」

「二十三日？」

ディルクは咄嗟にテアのことを思い出し、かすかに表情を揺らしたが、それもほんの一瞬のことだった。

「…すまない。その日は既に予定が入ってしまった。その日ではないと駄目か？」

「いえ」

気落ちしたように、エツダは眉を下げた。

実を言えば、エツダはロベルト・ベーレンスの演奏会にディルクを誘ったのである。チケットも入手済みで、できれば二人きりで…、ということを考えていたのだ。ディルクがロベルト・ベーレンスを誰よりも尊敬しているということはもちろん、エツダにとつては当然の知識だった。だから、ディルクに喜んでもらいたかったし、少しでもエツダに好感を抱いてほしかったのだ。

だが、ディルクに既に予定があるというのなら、余計なことはいわない方が良かったろうと、彼女は判断した。下手に彼をがっかりさせたくはなかったし、また自分があまり落胆した様子を見せれば彼は気を遣うだろう。しつこくして、迷惑だと思われるのも嫌だった。何よりも、スマートでない反応はプライドが邪魔をしてできない。

だが、この時の彼女の判断は、バッドではなかっただろうが、ベストでもなかった。しつこくしてはいけないうと、彼女はディルクの予定を聞くことを選ばなかったのだ。もし聞いていたならば、また違った選択肢をとることができただろう。

彼女は憤まじやかに首を振り、告げた。

「どうしてもというわけではありませんので…。申し訳ありません、気になさらないください。その」

「エツダは上手く取り繕う。」

「今度の生徒会選挙で立候補しようと思っただけで、それでできれば相談に乗っていただければと…」

「ああ」

ディルクは、エツダのこうした積極性を好ましいと感じていた。そ

れが、彼女がディルクに近づきたいがための手段であるとはもちろん分かっていない。けれどももし分かっていたとしても、彼はエツダの行動力を認めるに吝かではないだろう。ディルク、それに関わるテアに対する彼女の感情と、それによる行動がどんなものであったとしても、エツダの一生懸命さと有能さが本物であることには間違いがなかった。

「お前が生徒会に入ってくれれば心強い。俺でよければいつでも相談に乗ろう。二十三日は無理だが……。選挙まではまだ時間もある。今度また、ゆっくり話ができる時にで、いいか？」

「ええ、もちろんです。ありがとうございます」

ディルクに「心強い」と言われたことが、エツダを笑顔にした。頬を赤らめて微笑む彼女は、瑞々しく薫る花のように美しい。

「お引き留めしてしまい、すみません。ではまた次の機会にお願いします。おやすみなさい」

「ああ。帰りは気をつけてな。おやすみ」

エツダは寮生ではなく、自宅　というより、学院近くのフォン・オイレンベルクの別荘から馬車で通っている。フォン・オイレンベルクの領地は首都の隣の街であり、本邸はそこにあるのだが、そこは学院に通うには少々時間がかかる場所なのだ。

ディルクと別れると彼女は、侍女を従えて校門の方へ向かった。

ディルクとほんの少しでも言葉を交わせたことが、エツダの心を浮き立たせ、彼女を幼い少女のようにも見せている。

二十三日にディルクと演奏会に行けないことは残念だったが、ディルクがエツダだけに微笑んでくれたから、それだけでエツダは報われるような気持ちになった。

もちろんもつとディルクと同じ時間を過ごしたいと思っているのだが、他の女性のようにただディルクに纏わりつくのは違う、と彼女は分かっているのだ。

何より、ディルクと話してかすかにあった懸念が晴れた。

テアを閉じ込めた事件のことで、ディルクに疑われてしまうことを、

エツダは恐れていたのだ。だが一見してディルクは普通に見えたと、エツダに対して含むところはないようだった。どうやら自分は容疑者の圏外にいるらしい、とエツダは判断する。実際に、実行犯が捕まったとしてもエツダまで容疑者とされることはまずないだろうから、不安になることはないのだが、ディルクに不審の目で見られるのは何よりも嫌なことだった。

だが彼女は知らない。ディルクは疑っていないわけではなく、ただ誰をも疑いたくないだけなのだ。

そんなディルクを知らない彼女は思った。このままピアノも生徒会選挙も真面目に努力して取り組みアピールを続ければ、ディルクの気持ちを引き付けることもできるだろう、と。

後の問題は、ただ、テア・ベーレンスだけ……。

そう、テア・ベーレンスさえ、いなくなれば。

優雅に歩くエツダの瞳には、嫉妬と憎しみの焰が揺れていた。

学院祭が終わってからの時間は、殊のほかゆっくりと過ぎているように、デイルクには感じられていた。

学院祭までは毎日のようにテアと練習をして…、あつと言う間に時間が過ぎていたというのにな…。

既に学院祭が終わってから、一週間が過ぎている。

生徒たちの間にも既に学院祭の名残はなく、通常の空気が戻ってきていた。

デイルクの生徒会長としての仕事も、学院祭関係のものから、これから行われる生徒会選挙のものへと移行している。

シューレ音楽学院生徒会役員選挙は、毎年、一月末の試験前に行われる。

十二月中旬から冬休みが始まる前までに立候補したい者が立候補届を出し、届が認められた立候補者は冬休みが明けてから宣伝活動を行うのだ。

シューレ音楽学院は生徒の自治を重んじており、選ばれた役員によって学院の雰囲気、過ごしやすさがらりと変わるので、生徒たちも立候補者の推薦や応援には力を入れる。

例えば身分社会を重んじる者が生徒会長になった際には、貴族は優遇され平民は冷遇されるということがあった。学院側は身分平等を掲げているが、教員もほとんどが平民であるから、貴族の子弟が強気に出るとそうそう逆らえなかったのだ。それは結局、学校全体の雰囲気が悪くなり、平民の生徒たちが不満を訴えたために、学院長らが働きかけてその生徒会は途中で解散となったのだが。

そんな例もある中で、多くの生徒からの支持・推薦を受けて立候補し、入学して二年目で生徒会長となったのがデイルクだった。本来

生徒会長を務めるのは、四年生であるというのが慣例だ。しかし、一年生の時点で誰も注目を集めて彼は立候補するにいたった。さらに、彼の場合はその次の年も多くの生徒の推薦を受け、今も生徒会長を続けている。学院の歴史の中でも、二年連続で生徒会長に選出されたのは、ディルクが初めてだ。

誰に対しても平等で、貴族も平民も区別せず、生徒たちの意見ひとつひとつを疎かにしない、ディルクはそんなリーダーだった。音楽の才能も誰もが認めるところであつたし、真面目で成績が良く教師からの信頼も厚い。だが、ただ真面目すぎるということもなく、ユーモアも持ち合わせていて、気さくで親しみやすい。そこで、誰もが彼ならばと考えたのである。彼についていきたい、と。

そこで、今年もまたディルクを生徒会長にという声は多くあつたが、ディルク自身は後はもう次の人間に任せようと決めていた。多くの生徒が支持してくれることは嬉しかったのだが、卒業に向けて、ディルクには専念したいことがあつたのだ。

なので現在の彼は、新たな生徒会役員のための引き継ぎ資料の作成を主に仕事としてやっている。

その日の放課後も、ディルクは泉の館で、資料の整理をして、ひとり寮の部屋へ帰った。

ライナルトも同じように引き継ぎ資料をつくっていたが、ディルクは仕事に一段落ついたところでヴァイオリンの練習をしようと思つたのである。

ちなみにライナルトは、ディルクと同じく入学二年目にして副会長に就任し、同じように二年連続で副会長を務めたが、ディルクと同様に今年は選挙には出馬しない予定だつた。ディルクが生徒会長にならないのならば、ライナルトが　という声もあるのだが、彼は自分を、ディルクのようにリーダーには向いていないと評し首を振つたのである。もともとライナルトは、ディルクのサポートをするため役員になつたので、ディルクが止めるというのならばそれに続くだけだつた。

ライナルトはライナルトで良いリーダーになるだろうとディルクも思っていたが、ライナルトの行動の理由が彼には分かっていたから、ほんの少し苦笑しただけで無理強いはず、頼りになる親友がついてきてくれることを頼もしく嬉しく思うのだった。

ディルクが泉の館から外に出ると、風は冷たく手指に絡みついて、吐く息は白く変わった。

学院祭が終わると、季節は一気に冬へと移り変わったようだ。

いや、日に日に寒さは増して、冬はすぐそこに来ていたのだろうが、学院祭までの日々はどんな時よりも音楽に熱中していたから、気付いていなかっただけなのかもしれない。

ディルクは沈むのがずっと早くなった太陽を見つめながら、季節の移ろいを感じた。

しかし寮の玄関の扉をくぐると、建物の中は冷たい風を遮断して温かく感じられる。

ディルクは部屋にヴァイオリンを取りに行こうとして、その前にとメールボックスの中身を確認した。

メールボックスの中には、封筒が一つ、ぽつりと投函されてある。

それを見た瞬間に、ディルクの顔は強張った。

上質な紙でつくられているらしい、上等な手触りのそれをディルクは手に取り、蠟で封をされたその紋章を見、くるりと返して宛名を見つめる。

そこには、「ディルク・フォン・シーレ様」と、流麗な文字で書かれていた。

ディルクはそれを認め、封を開けることもなく、手の中でその手紙を握りつぶす。

あの人はまだ諦めていないのか……。まだ、分からないのか……。ディルクの胸を、唐突に、急速に暗いものが包み込んだ。

その手紙の中身を確認するまでもなく、宛名を見ただけでディルクにはその内容が手に取るように分かり、やりきれない思いがした。手の中に手紙を握りしめたまま、ディルクは部屋に戻る道ではなく、

共用棟への道を選んで歩き出す。大股で足早に行くその様子は、怒りを堪えているような、そんな風に見えていた。

決めていた通りにヴァイオリンを取りに行くような気分にはなれず、彼はそのまま、予約していた寮の練習室へ入っていかうとする。

防音設備の整った練習室で、叫んでもやりたい気分だった。

ディルクをそれだけ刺激するものを、この手紙は持っていたのだ。しかし。

「ディルク？」

その声に、はっとディルクは足を止めた。

ちょうど共用棟に足を踏み入れたところで彼が振り返ると、女子寮から共用棟に至る廊下に、テアが立っていた。

どこか気遣わしげな表情でいるテアに、すっとディルクは頭が冷やされていくのを感じる。

「テア……」

テアは、小走りにディルクに近づいてきた。

「何かあったのですか？ 随分と顔色が悪いような」

「いや……」

柔らかな黄金の瞳に見つめられ、胸に清々しい風が舞い込んできたような気が、ディルクにはした。

「いや、何でもない」

自然と自分が微笑むのが分かる。

肩に入っていた余計な力が抜けた。

「……ですが、」

「大丈夫だ」

ディルクはテアを安心させるように言った。

そんなにひどい顔をしてしまっていたのだろうか、とディルクはテアの心配げな顔を見て思う。

「それよりお前が今の時間にここにいるのは珍しいな。泉の館には来なかったようだし……」

「それは」

テアはなおディルクを探るように見つめたが、追究はせず素直に答えた。

「実を言うと今の今まで、レッスンだったんです。少し疲れたので、一度部屋に戻るうとした時にあなたを見かけて…」

「今の時間までレッスン？」

ディルクは軽く目を見張った。午後の最後の授業が終わる時間から、もう何時間も過ぎている。

エンジユはスパルタだが、今の時期にそこまでレッスンをさせるのかと疑問に思った。

「コンクールに参加でもするのか？ またリサイタルがあるとか…」

「いいえ、そうではなくて…。その、今日見てもらったのはサイガ先生ではなくて、他の先生だったんです。忙しい方なので、毎週定期的にということもできず、今日やれることをやろうと…」

それだけでは説明が不足していることは分かっていたので、テアは続けた。

「学院祭がきっかけで、コンサートを聴いて下さったサイガ先生の知り合いのピアニストの方々にも少しですがレッスンをしてもらうことになったんです。それで、今日…」

「…なるほど」

異例のことに、ディルクは驚きながらも頷いた。

「それは確かに良い経験にも勉強にもなるだろうな」

だが、これを他の生徒が知ればまたどんなことを言われるだろうか
とディルクは思う。

テアだけ特別扱いではないか、と言われてもおかしくはないところ
だ。

だが、学院側はこれを許可したらしい。

「ちなみに、誰が来ているのかは、俺が聞いてもいいのか？」

「それは、もちろん。特に秘密の話というわけではないですから。

…個人的には、あまり大々的にしてほしくはありませんが」

テアは耳打ちするように、数人の名をディルクに教えた。

その名に、ディルクは唸りたくなるような気持ちがある。

いずれもピアノリストとして、名を馳せているものだったからだ。

「その相手方が、指導役を買って出た…のか」

テアは答えづらそうに言葉を濁しながら答える。

「サイガ先生の話だと…、そんな感じらしいのですが…。どうも学院長先生が許可した…というより断れなかったのは、そのせいみたいなんです…。今後も学院に協力してもらえるようにということもあるんじゃないかと…」

テア自身、釈然としないような様子だ。

おそらく彼女は、どうして自分にとっと思っているのだろう、とディルクは推測する。

しかし、指導者に立候補したピアノリストたちの気持ちは、ディルクには良く分かった。

テアは磨きたくなる原石なのだ。今でもその音色には驚かされるが、おそらく彼女はこれから伸びていくだろう。テアはそんな可能性を感じさせるのだ。引き付けられずにはおれないのだ。

学院祭コンサートでテアの演奏を聴いた生徒たちも、彼女の實力は今度こそ認めざるを得なくなったようである。ディルクがいたからだ、エンジユが教師なのだから当然だ、あの時がたまたま良く聴こえただけだ、とそんな悔し紛れの台詞を吐く者たちもいるようだったが、素直に認められずとも、内心では彼らもおそらく本当は分かっているはずだ。

あの音は彼女の努力の結果であり、實力であると。

ディルクはそんなパートナーを見つめ、手の中にいまだ握ったままの手紙の存在を感じながら、切り出した。

「テア」

何となく改まったディルクを、テアは不思議そうに見上げる。

「疲れているとは分かっているのだが…、良ければ一曲何か聴かせてくれないか？」

ディルクが上の階の練習室を指すようにして頼むと、一瞬きよとん

とした表情を見せて、次にテアは破顔した。
「はい、喜んで」

何でもない、とディルクは言ったけれど、やはり何かあったのだらうとテアはディルクの隣を歩きながら思った。

先ほど、ディルクを遠目から見た時、彼はどこか思い詰めるような張り詰めたような表情を浮かべていた。

テアを見て、彼は微笑んでくれたけれど、どこか疲れのような何かがあったように思う。

一体どうしたのだらうかと、テアは心配だった。

ディルクは高い能力を持っており優れた人物である、それは誰もが認めるところだ。

それゆえに彼は誰からも慕われ、頼られ　だからこそ一人で何もかも背負ってしまったっているような、そんなところがあるのではないかとテアは思っていた。

けれどいくら彼が優れているといっても、皆と同じひとであることに変わりはない。

傷つくこともあるだろうし、無理をすれば疲れるのだ。

ディルクが無理をして微笑んでいるのでなければいいと、テアは思った。

無理はせず…、もし何かその胸を重いものが塞いでいるのなら、打ち明けて欲しい…。

少しでも、ディルクの力になりたい。

そんなことを思って、テアは内心首を振った。

打ち明けて欲しいなどと思うことは、余りにもおこがましい。

打ち明けられぬことを多く持っているのは、テアの方なのだから。

けれど少しくらいは、自惚れてもいいのでしょうか…？

ディルクがピアノを所望してくれたということは、少しの気晴らし

にでも自分が役立つということだろう、とテアは解釈した。

少しでも力になりたいという思いが迷惑でないのなら。

そして、少しでも彼に頼ってもらえ、彼のために何かできるなら。

それは、とても嬉しいことだ。

やがて、ディルクとテアは、ディルクが予約していた練習室に入った。

テアは早速ピアノに近づいて、ディルクに問う。

「何かリクエストはありますか？」

「そうだな」

ディルクは鞆を置き、手紙をその中にすると滑り込ませて、無意識に答えていた。

「『月の光』を……」

「ドビュッシー、ですね」

「ああ」

テアは確認して、微笑んだ。

「それでは……」

テアはピアノの前に腰を下ろし、椅子を調節して、静かに指を鍵盤に落としていった。

優しい優しい　光が零れて差しこんでくるような音。

ディルクはその音を間近で聴いて、瞳を閉じた。

どこか労わるようなところもあるそれに、テアの気遣いを感じて苦笑が漏れる。

荒立つ感情を見透かされてしまっているな、と。

けれどそれは決して嫌な感覚ではなかった。

優しく温かく包みこまれて、大きな安心感を覚える。

ああ、やはり、あの時と同じだ……。

「月の光」　それこそ、彼が幼い頃の夏、出会った曲だった。

あの夏祭りの日、少女が小さな手のひらで奏でていた、淡く、けれど本当の光のような音楽……。

それまで、音楽はディルクにとって教養のひとつでしかなかった。

けれど、あの時からデイルクの音楽に対する考え方はがらりと変わった。

音楽はただの娯楽だけのものではない。

あの時、デイルクの胸に「光」を灯したように。

音楽は大きな力を持っている。

あんな音を出せる人間になりたい、音楽で自分も誰かに言葉にしきれないこの感動を伝えられたら　そんな風にデイルクに思わせ、ここまで彼を連れて来てくれたほどには、大きな力を。

そして、目指してきた音は、今、目の前にあった。

テアの音楽が、デイルクに確信を与えてくれる。

ここまでやってきたことは、決して間違いではなかったと。

そして、これから進んでいく道もきつと正しい、と…。

だから、あの手紙のことなど、今は気にする必要はない。

気にしても、今はどうしようもないのだから。

デイルクはきつぱりと思って、ただテアの音に身を委ねる。

やがて　曲が終わり、テアは鍵盤からそつと指を離した。

ずっとピアノの側に寄り添うように立っていたデイルクを見上げ、

テアはどこか照れくさそうに微笑む。

そんなテアにデイルクも穏やかな微笑みを返して、告げた。

「ありがとう……」

それが本当に、心からのものだったので、テアは返って恐縮してしまふ。

「いえ、そんな、大したことでは…」

「いや、お前のピアノを聴いていると…、心が休まる。安らぎもするし…、励まされる気持ちになる。お前の　」

デイルクはそこで、少し躊躇うように言葉を切った。

「お前の…、ピアノが、俺はやはり、好きだな」

「あ、ありがとうございます　」

テアは頬を紅潮させ、真っ直ぐにデイルクを見つめられずに、ピアノの方に視線を下ろした。

ディルクはそんなテアを見て、ふと手を伸ばしかけ、しかしはつと手を戻して、誤魔化すように言葉を紡ぐ。

「…それにしても、随分と久しぶりのような気がするよ。お前とこうして練習室にというのは…。まだ学院祭からは、一週間しか経っていないというのにな」

「そうですね…。私も何だか、この一週間は長かったように感じられて…。今までがあまりにもあつと言う間だったのかもしれないが」

テアが同じような思いを持っていたことが少しだけ嬉しくて、ディルクは微笑んだ。

その時、さらりと前に零れてきた髪をテアが後ろへ流す仕草を見せ、今度はそちらに目を奪われる。

「随分と…、お前の髪も伸びたな」

「ええ、出会った頃と比べると、そうですね」

「以前お前は髪を売る…、というようにことを言っていたが、切りはしないのか？」

「はい、その」

ぱつとテアはまた顔に朱を散らして答える。

「しばらく、伸ばしてみようかと…」

「そうか…。良かった。…いや、こんなことを俺が言うのも変な話だが、やはり、前にも言った通りお前の髪はとても綺麗だから、もつたいないなどと考えてしまつてな」

「いえ、そんな」

テアはどこか恥ずかしくて、俯きがちに首を振った。

ディルクが本気で言っていると分かるからこそ、一層身を縮めてしまふのだ。

「だが、髪を結んだりはしないのか？ そう言えば…、この前図書館に行った時に、少し手元が暗そうだと思ったんだが…」

「ローゼも同じようなことを言つて、結んでくれようとしたのですが、私は少々不器用で…」

テアは困ったように、照れたように微笑んだ。

「結んでいても、少しずつ緩んできたりするでしょう？ その時に一人だと上手く結び直せなくて…。結局ほどこいたままになってしまっているので、このままです」

正直なところを言っつて、テアはディルクが呆れるのではないかと思っつたが、彼は少し悪戯っぽく笑っつて言っつた。

「練習をすればいいんじゃないか？ 良かったら付き合っつぞ。もしくは…休み時間の度に俺が結び直してもいい」

その申し出に、テアはぶるぶると首を振る。

「そ、それには及びません」

「そうか」

ディルクはテアのその様子に軽く笑いながらも、ほんの少し瞳に残念そうな色を見せた。

しかしすぐに、彼は違っつ調子で同じ言葉を繰り返す。

「そうか」

「？ どうかしましたか？」

「いや、少し良いことを思っついたんだ」

ディルクはその言葉通り、どこか楽しそうにテアに笑いかけた。

何だろっつかとテアは少し首を傾げたが、ディルクがいつも通りに

少なくとも先ほどまでの翳りをなくして 笑っつて見せたので、

ほっつとして微笑みを返したのだった。

デイルクがテアと別れて部屋に戻ると、既にライナルトが戻っていて、湯を沸かしていた。

「ヴァイオリンがそのままなのにお前がいなから何かあったかと思っただ」

帰ってきたデイルクにライナルトはそう言っただ続ける。

「ちよつど湯が沸いたところだ。紅茶を淹れよつと思つが、お前も飲むか？ ローゼからもらつたブランドケーキもある」

「相伴に預かることにするよ」

デイルクは頷き、鞆から丸まつたままの手紙を取り出して、鞆はいつもの場所に置いた。

そのまま、茶の用意をするライナルトの後ろで、デイルクは暖炉に近づき、マッチを手取る。

そのままマッチで無造作に火をつけて、デイルクは手紙を燃やした。すぐに燃え上がつていくそれを、デイルクは暖炉の中に放つて、燃え尽きるのを見つめる。

封すら開けないままの手紙。

しかし、読まずともデイルクにはその中身が手に取るように分かつていた。

分かつているからこそ、燃やすのだ。

「デイルク」

手紙が燃え尽きるのを見送つたデイルクは、ライナルトの声に振り返つた。

ライナルトは、ティーカップを持ち、険しい顔をしている。

「それはまさか」

「ああ…」

ディルクは肩を竦めるように頷いて、ライナルトはやや冷然とした様子でティーカップをテーブルに置いた。その冷やかさはもちろん、ディルクに向けられたものではない。手紙を送ってきた主へのものだ。

既にローゼの手作りらしきケーキはきれいに等分されて、皿に並べてある。

茶の用意が整って、良く似た美貌を持つ二人は、テーブルを挟み向かい合うように座った。

ディルクはライナルトに短く礼を言って、紅茶で喉を潤す。

「…相変わらずのようだな、『彼女』は」

「そうらしい」

皮肉っぽく冷たく微笑んだライナルトに、ディルクもそう愉快そうではない様子で頷いた。

手紙を送ってきた主を知っているのはもちろん、ライナルトにはその手紙の内容についてもおおよその見当がつく。だからこそ、ライナルトは親友の気持ちが分かって、手紙の送り主に対して不愉快な気持ちを隠さないのだ。

だが、それでもライナルトは常と同じ冷静沈着さを崩すことはなく、ディルクの様子を良く見て、疑問を覚えた。いつも、この手紙が来る時ディルクは苛々した様子を隠さないのだが、今はそんな様子がまるでないのだ。

「…ディルク、お前、随分と落ち着いているな」

「そうでもない。…全くやるせないと思っっているよ。あの人は…、いつまで経っても分かるうとはしないんだ。『ディルク・フォン・シーレ』などという人間はもういない。彼女が求めるものは、夢の中にしかない…ということを」

独白するように、ディルクは物憂く呟いた。

「彼女にとって『俺』はないものであり、いつでも彼女の中で『俺』は『ディルク・フォン・シーレ』でなければならぬ。それが、
どれだけ……」

ディルクは首を振った。

「いや、それこそ、今の俺には関係のないことだな。気分を悪くさせてすまなかつた。この話は止めにしよう」

「お前が謝ることはない。だが、そうだな。ケーキでも食べて気分を入れ替えよう」

ライナルトに勧められ、ディルクは少々苦笑気味に頷いて、ローゼ特製のブランドケーキをつまんだ。洋酒がきいていて、甘すぎず、つつい軽く食べてしまえるような美味しさに、さすがだと思う。

「ライナルト、頼みがあるのだが」

「なんだ？」

「今度の週末…、来週でも良いのだが、ローゼが頷いてくれれば、彼女を休日の日一日借りたい。いいか？」

思いがけない頼みごとに、ライナルトは軽く目を見張った。

「…何故だ？」

「買い物に…、付き合ってもらいたくてな。その…、神誕祭も近いし、ロベルト・ベーレンスの演奏会に誘ってくれたテアに少しでも何かできたらと思ったのだが、」

「テアへのプレゼントか…」

ディルクの言葉を最後まで聞かず、ライナルトは答えを導き出した。「お前がそう言うならローゼは躊躇いもなく頷くだろうな。ローゼに否やがないなら私は別に構わないのだが…。お前は別にセンスが悪いということもないし、わざわざローゼを連れていくことはないのではないか？」

「テアのことは何よりローゼが一番良く分かっているだろうし、好みのことや…色々と参考にしたいんだ。…何より、俺が一人で女性向けの店に入っていけば何と言われるか…分かるだろう」

溜め息交じりの言葉に、ライナルトは深く納得した。

今のライナルトにはローゼがいるため、そういう店に入って、もし知り合いに見られても、彼女へのプレゼントだろうと誰もが想像し、わざわざそれが広く口外されるようなことはないだろう。

だが、ディルクは別である。特定の相手を持たないディルクが一人で女性向けの店に入り、何かプレゼントらしきものを買ったとする。もしそれを学院の生徒、もしくはその知り合いなどに見られてもしたら、意中の人間がいるのだろうか等、色々と言われ騒がれてしまうことは間違いがない。それは遠慮したいところであった。

しかしローゼがいれば、買い物の主体はローゼであるとはほとんどの人間が思うだろう。少なくとも直接ディルクが誰かのために何かをということには、そうならないはずである。ディルクとローゼのことを勘ぐる輩もいないとは限らないが、ライナルトが知つてのことなら周りが何と言おうと問題は無い。ローゼの存在は、ディルクの目的のためのかっこうの隠れ蓑になるのだ。

「苦勞が絶えないな、お前は……」

半ば同情するようにライナルトは言った。彼の美貌ではなかなか人目につかないということがまず難しいし、人目を引きすぎる彼はどうしても誰かしらに見られてしまい、また話題にものぼる。そして噂と言うものは呆れるほどあつと言う間に広まってしまうものである。大げさでなく、ライナルトはディルクが苦慮していることが良く分かった。

「だがそれにしては律儀だな。別にわざわざ私にそんな許可を得るような真似などせずとも……」

「お前は気にならないか？　もし何も言わずに俺とローゼが二人きりで出掛けたり……、人伝てにそれを見たと言われたりしたら……」

「相手がお前なら、そう気にはしないな」

ライナルトは素直に答えた。彼はローゼには後ろ暗い隠し事などそうできないということを知っているし、誰よりもディルクのことは信頼し尊敬しているからだ。

だがディルクはやや渋面になって返した。

「俺なら……、あまり快くはないな。いくらお前だとしても……」

「……」
ライナルトは持っていたティーカップをそっとソーサーに戻した。

「私は思ったよりお前に信頼されていないということか？」
そんなことは欠片とも思っていないが、敢えてライナルトは口にする。

「そういうことじゃない。信頼しているしていないということは全く関係のないことだ。誰であつても…、何もないと分かっているても、気分が悪くなる。俺はどうやら、独占欲が相当強いタイプだったらしい……」

ディルクはカップの中の紅茶に映る天井を見つめ呟いた。
ライナルトは少し考えて、核心を突く。

「……それは、誰のことを想定して話しているんだ、ディルク」
ディルクはそれに、自分の心を隠さず答えた。
顔を上げて、彼は親友を見返す。

「テア・ベレンス」
返答に、ライナルトは心の中だけで溜め息のようなものを漏らした。
少し前から、ディルクの様子が変わったことには気付いていた。
おそらく、自分の想いに気付いたのだろうと…、予想は付けていたが。

臆さず堂々と告げてくるディルクの潔さ、真っ直ぐさには、いつもながら気圧されるような思いがする。

「ディルク、お前は……」

「ライナルト、お前なら気付いているかもしれないと分かっていた」
ライナルトの言葉を遮るように、ディルクは言った。

「だが一応、はっきり言っておく。俺は」
ディルクはそして、断言する。

「俺は、テアのことを好きだ」

ひたむきな、眼差しだった。

ライナルトは、何故か胸を突かれるような思いがした。

「……それは、私ではなく本人に言うべき言葉だろう」

「お前以外の人間の前で、このことを言うつもりはない」

それは、テアの前であっても同じだと、ディルクはきっぱりと言う。先ほど、テアと話して思いついた「良いこと」は、テアにプレゼントを贈るということだった。

そして、ローゼにプレゼント購入に付き合ってもらうことを考え、思考は巡り、それから例えライナルトであってもテアと誰かがということは考えたくもないなと思った。

自分の中の独占欲を自覚し。

俺は彼女を束縛したいのだろうか…。

そんな資格も権利もないというのに。

そんなことを、考えた。

テアに対する想いを自覚し、その想いをこれからどうすればいいのか、ディルクは迷っていた。

テアにも同じように想ってもらいたい…と、そんな欲は確かにある。ライナルトとローゼのような一対になりたいとも、考える。

もしそれをかなえようとするならば、テアに自分の想いを伝えて、彼女にも同じ想いを持ってもらえるように働きかけ努力するのが正攻法というものだろう。

しかしディルクはこうも考えずにはいられなかった。

だが、本当に近づいていいのだろうか？ これ以上不用意に近づくことは、彼女を…、テアを傷つけることに繋がるのではないか…？

捨てたはずの過去はディルクを連れ戻そうと手を伸ばし続けている。その証拠が、ディルク・フォン・シーレ宛の手紙。それはまだ彼のもとに届き続けている。

その過去に決着をつけるまでは、誰とも、これ以上深く関わることは慎まなければ。そうでなければ、自分の運命のせいで、何よりも大切なものを失うことに繋がりがかねない…。

ディルクはテアへの想いを自覚し、その想いを認め、そしてその想いをただ大切に抱えていくことだけを決めたのだ。

「俺は俺の過去に彼女を巻き込みたくない」

デイルクの短いその言葉だけで、ライナルトには全てが分かって、何も言えなくなった。

「だがお前にだけは、きちんと知っていてほしいと思った。ただ俺の中だけで死んでいく想いには、したくなかった…。だから」
「真摯な瞳に、どこか傷ついたような色が見えた気がして、ライナルトは言葉を探した。

「……分かった」

頷いて、しかし彼は言葉を繋げる。

「だが、デイルク、全ては変わっていく。お前も、過去を置き去りにしたまま、ただそれだけで前へ進もうというのではないだろう」
「今は、今の状態、状況でいるしかない」とライナルトは分かっていたが、未来がどうなるかは分からない。

デイルクも分かって、頷いた。

「もちろん、いずれは全てに決着をつけるつもりだ。そして」

「ああ。だから、あまり最初から諦めるな。それこそ、お前らしくないじゃないか」

ライナルトは言って、励ますように微笑んだ。

もちろん、未来に何もかもが好転するわけではないし、新たなしがらみが生まれてくるのかもしれない。だが、それでも親友の尊い感情を封じ込めるだけにはさせておきたくなかったのだ。

「……ああ」

ライナルトの言葉を受け、デイルクは強く両手の指を組み、やがて首肯した。

「そつだな」

テアへの想いを自覚したディルクの懊悩でした。
こうして両片思いの日々は始まります…。にへにへ。
といってもまだテアは自覚していません。

そういえば、みれば今回のup時、
お気に入り登録件数が300件、総合評価が700ptという、
なかなか嬉しい数字で揃っていました。

何だか本当だろうかと疑ってみたくなくなったりもするのですが、
この作品を読んでくださる方がこんなにいるのだな…と思うと、
感慨深いと言いますか、本当に土下座でもしたくなる気持ちになります。

本当にありがとうございます。

これからもよろしく願います。

テアへのプレゼント、を思いついたディルクは、翌日には早速ローゼのもとを訪れようとしていた。

朝にも食堂でローゼと会うのだが、その際にはテアも必ずと言っていいほど一緒だ。

やはりプレゼントを渡すその時までテアには秘密にしておきたく、ディルクはローゼと二人で話をしたいと思っていた。

放課後なら、ローゼはライナルトと練習をしているか、調理部にいるかどちらかということがほとんどだが、ライナルトに聞いて今日は調理部に参加しているはずだということで、ディルクはこの放課後調理部を訪ねようとサークル棟へ向かう。

だが、サークル棟に辿り着く前に、竜胆色の長い髪を靡かせながら颯爽と歩いていく後ろ姿を見つけて、ディルクは後ろから声をかけていた。

「ローゼ！」

ローゼはすぐに振り返り、ディルクを認めて微笑む。

「ディルク…、奇遇ですね」

「いや…、実を言うとお前に頼みたいことがあって、会いに来たところだったんだ。少し時間をもらってもいいだろうか」

「ええ、構いませんが…」

ローゼは少し不思議そうな顔をした。

「あなたがお一人で私にというのは珍しいですね…。頼みというのは、テアに関することですか？」

ずばりと聞かれてディルクは、そんなに分かりやすかっただろうか、見透かされたような気持ちにもなり、複雑な表情をつくった。

「…ライナルトに聞いたのか？」

「いいえ、何も聞いてはいませんが。生徒会などの仕事に関する事なら、ライナルトから話をする方が早いでしょうし…。個人的な事ならライナルトかテア絡みのことにほとんど絞られますから、わざわざ私一人にということでしたら今はその可能性が一番高いのではないかと思っただけです。実際、正解だったみたいですね」にこりと笑ってローゼは答えた。

「…ああ」

デイルクは苦笑して頷く。

彼は周りを見渡し、周囲にあまり人がいないことにほっとしながら、本題に入った。

ロベルトの演奏会に誘ってくれたお礼として、テアにプレゼントを贈りたいと考えていることを、率直に告げる。

「…それで、できれば週末、お前に買いに行くのを付き合ってもらえないだろうかと思っただけ。テアのことはお前が一番よく分かっているだろうし」

「喜んで協力させていただきます」

ローゼは二つ返事で頷いた。

「テアもきつと喜びますよ。…それで、何を買うかとかどういったお店に行くのかとかは、もう決めてらっしゃるんですか？」

「ああ」

デイルクは頷き、自分が考えていることを述べた。

デイルクの言葉にローゼは納得したように頷く。

「なるほど、さすがはデイルク、ですね。けれどあの辺りのお店なら確かに…。ますますお一人では行けませんね。週末なら、生徒も多く出歩いていますし」

「そういうことだ」

憂鬱そうな顔のデイルクにローゼはくすりと笑った。

「ライナルトもいっしょの方が、カモフラージュにはなるかもしれないですね。私と二人きりでは、また余計なことを言われかねません」
「それも考えたが…。何となく癪にさわってな」

「え？」

聞き間違いかと、ローゼは目を見張った。

ディルクがライナルトをそんな風に評するとは思えなかったのだ。しかし、それは空耳でも聞き間違いでもなかった。

ディルクはこう思っていたのだ。テアへのプレゼントを選ぶのに、他の男の意見を取り入れるのはどうにも気分が良くない、と。別にライナルト個人にどうこうというわけではない。

ただ、テアと姉妹のような関係を持っているローゼのような立場の人間にならともかく、他の人間に口を出されたくなかった。あくまでもディルクが選びたかったのだ。

「ともかく、すまないが週末は頼む。ライナルトには、一応もう話はしてあるが……」

「マメですね。別に私もライナルトも気にしませんよ」

「それはあいつにも言われたが、一応な」

ディルクは苦笑したが、ローゼはふと思い当たることがあって真面目な顔になった。

「……ですが、そうですね、テアにはちゃんと理由をでっちあげて言っておいた方がいいかもしれません。多分……というか絶対、何かしらの噂は流れるでしょうから。ディルクもテアに変な誤解はされたくないですよな？」

念を押されるように聞かれ、ディルクはやはり見透かされる気分で、頷いた。

「そう……だな」

「でしたら……、そうですね……、テアには私がライナルトへの贈り物を買うのにあなたに付き合ってもらおうと言うことにします。単純ですけど、それが一番もつともらしいでしょう」

「気を遣わせてすまないな」

「いいえ、テアのためですから」

ローゼはさっぱりと笑って続ける。

「それにしても、学院祭が終わってから喜ばしいことが多くて嬉し

い限りです。ディルクの頼みことも良いことでしたが…」

「何かあったのか？」

「それはもう！」

ローゼは晴れやかに笑った。

「ディルクも聞いているでしょう、テアに関する生徒たちの話を。

特別入学が認められたのも当然だ…とようやく皆が認め始めて、テアが正当に評価されるようになって、私は嬉しいんです。どうしてブランシュ家の私がテアに肩入れするのかなんて、失礼千万なことを言ってくる輩もいなくなりましたしね！」

どうやら、テアが入学してからそんなことを言われ続けていたらしいローゼは、鬱憤を晴らすかのように高らかに告げる。

「まぐれだとか馬鹿なことを言う連中もいるみたいですが、そんなのはただの負け犬の遠吠えです。偶然であそこまでの演奏ができませんか？ サイガ先生やあなたがいるから当然だなんて言う中傷も聴きましたけれど、それこそテアがそんな二人の求めるレベルに比べようとそれだけの努力をしてきたということではないですか。大体その時だけの演奏ならば、多くの演奏家がテアに興味を持つこともないし、今のテアの状況だってありません」

エンジン以外のピアノリストにテアが教えを受けている現状を指して、ローゼは言った。

口さがない連中のために彼女はかなりストレスを溜めこんでいたようだ、ディルクは彼女の言葉に軽い苦笑を浮かべる。きつい文句もあつたが、窘めようと思わなかったのは、ディルクもほとんど同じことを考えていたからだ。

「テアの実力が示されても…、嫉妬する生徒たちはどうしても多いみたいですけどね。それでも、嫌がらせは随分と減ったみたいですよ」

「それは良かった」

他ならぬローゼからの言葉なので、ディルクは心からそう思って微笑した。

まだ完全に気を緩めるわけにはいかないし、注意はしていきたいが、少しは安心できる。

「後は…学院祭の時の犯人が捕まればいいのですけど」

「ああ、同感だ。学院長が動いてくれるから、いずれ…と思うが」

「はい…」

「ローゼ、テアはあれから事件のことで何か気にしたりはしていないか？ 何と言っても被害者はテアだが、あいつは何も言わないし…、お前になら何か打ち明けていることがあるかもしれないと思っ
ていたのだが」

「それは……」

ローゼは何かをいいあぐねるような顔になった。

「…それに関しては、週末にゆっくりお話しする、ということではないでしょうか？ 立ち話もなんですから…」

「ああ…」

ローゼの反応が気がかりだったが、ディルクは頷いた。

週末でも良いということは、そこまで緊迫したものがあるわけではないのだろう。

「すまないな、長く引き止めてしまった。…週末は、よろしく頼む」

「はい。私も今から、テアの喜ぶ顔が楽しみです。よろしく願います」

ローゼは屈託なく笑って、今度こそサークル棟に向かって歩き出す。

ローゼを見送ったディルクは、彼女に背を向け、週末に想いを馳せたのだった。

『テア、今度の休日、ディルクを借りますね』

ローゼがそう切り出したのは、数日前のことだった。

その休日である今日この日、テアは朝から図書館に赴き、課題を仕上げている。

休日の午前中ということもあって、図書館はがらんとしていた。なるべく一人にはなるなと言われているテアだったが、他に人がいないことに何となくほっとしてしまつて、何冊か本を積み上げながら課題に集中する。

しかしふと窓から晴れた空を見上げて、今頃友人たちは楽しく買い物をしているところだろうか、さらに思い返した。

『実はライナルトにプレゼントを考えていて…、それでディルクにアドバイスをもらいたいです』

ローゼがそう続けるのを、テアはきょとんとして聞いていた。

ライナルトの誕生日が冬であるというのは聞いていたので、プレゼントを考えるのは至極当然のことだが、ディルクを「借りる」というローゼの言葉が腑に落ちないものに感じられたからである。

別にディルクはテアの所有物というわけではないのだから、と。しかしそれを言うとローゼは何故か呆れた目をして、テアを見つめてきたものだ。

『ディルクはテアのパートナーじゃないですか』

ローゼは当然のように言ったが、他の意味もあつたような気がしてならない。

だが、その意味は考えてみても分からなかったのだが…。とにかく、ローゼとディルクは連れたつて買い物に行くらいしい。

ディルクの様子が何となくおかしかつたのをテアはずっと気に留めていて、あれからディルクを見かけるたびに注意していたのだが、あれ以来ディルクはいつも同じ様子で、テアはほっとしていた。今日も外に出かけていくというのだから体調は悪くないのだろうし、安心だ。

あの時の彼に一体何があつたのか、気にはなるけれど…。

考えながら、テアはまたペンを走らせ始めた。

『私より、ライナルトには何と言つてでかけるのですか？』

『それはディルクにお任せしています。テアも、プレゼントを買いに行くということは、秘密にしておいてくださいね』

丸投げだ。テアは苦笑した。

『それはもちろんですが…』

『良かったらテアも来ます？ 神誕祭も近いですから、ディルクにプレゼントとか…。まあ、買い物にはディルクにも付き合ってもらうんですけど』

『ディルクがライナルトに何と言うかにもよりますが、私も行ってライナルトだけ誘わなかったら、秘密にしておいてもばれしまいそうですから…。週末は溜まっている課題を終わらせることにします』
今回の買い物にテアの同行は避けなければいけないところなのだが、ローゼは敢えてそう言った。テアがそんな風に返してくるだろうことは、分かっていたのである。

『それなら、冬休みに入る前に、今度は二人で出掛けられるといいですね。この辺りのお店にはそれなりに詳しいですから、行きたいお店とかがあればいくらでも付き合いますよ』

『ありがとうございます』

テアはその申し出に微笑んで頷いた。

神誕祭のプレゼント。

そのことを思い出して、どうしようかとテアは手を止めた。

プレゼントを渡すとすれば、「あしながおじさん」、ローゼ、ディルク、ライナルト、フリッツ、モーリッツに、よければ学院長、もしかしたら「あの方」に贈るのも良いかもしれない。

そんなことを考える。

しかし一体、何を贈れば喜んでもらえるものだろうか。

あまりテアはこういったことを考えるのは得意ではない。

けれど心は何となく楽しい、浮き立つような気持ちになった。

ああ、そうだ、お母さんにも何かを贈ろう……。

ほんのわずか、テアの口元に笑みが浮かんだ。

その、後ろで。

ひとりの影が、そつとリマに近づいてきた。

空は雲ひとつなく、晴れていた。

吹き付けてくる風は冷ややかだが、太陽の光が差す場所には心地の良い暖かさがある。

十二月に入ったばかりのその休日、ディルクとローゼは学院から徒歩で二十分程度の場所にある繁華街を歩いていた。もちろんディルクの目的は、テアへのプレゼントを買うことだ。

おしゃれな店が建ち並ぶその通りには、若者の姿が多く見られ、その中でも石畳の道を行く二人は大変目立つ存在だった。

休日と言うことで、もちろん制服ではなく、二人とも動きやすそうなラフな私服で、服装に特別派手さがあるわけではない。

だが、ディルクは類稀なる美貌の持ち主であるし、ローゼは華やかな美女である。

その二人が颯爽と並んで歩いていく様子は目に麗しく、その存在感に、誰もが目を引き付けられずにはいられないようだった。道行く人が立ち止まり、まじまじと二人を見送ってから歩き出すという光景が行く先々で見られている。おそらく、似合いのカップルだと思っただ人々もいただろう。

だがやはり、そのような視線にはもう慣れ切ってしまった二人は気にも留めずに、目的の店へとただ真っ直ぐに向かっていた。

「それにしても、ピンポイントでお店を指定してくれましたよね。雑誌でチェックでもしたんですか？」

歩きながら、ローゼは軽く尋ねる。

この道沿いにある店の商品が気になっていると、ディルクはローゼに今日の買い物に付き合ってもらうことを頼む際に、既に告げていた。

ディルクが指した店は女性向けであるし、この辺りも女性やカップル向けの店が多い。

なかなかディルクのような青年が足を運ぶような場所ではなく、どこで目的の品の情報を手に入れたのかと、ローゼは少しばかり疑問に思っていた。

「学院祭の準備でこの辺りを歩く機会があったんだ。色々と買い出しが必要でな」

ディルクは明快に答える。

「店の中には入らなかったが、ウィンドウ越しに見えたものが綺麗で、テアに似合いそうだなと思った。本当に一瞬のことです。その後は思い返すこともなかったのだが、この前ふと思いついてな」

「そうですね」

さりげなく言ってくれろと思いつつながら、ローゼは頷いた。

「…あ、あそこの店ですよ」

ローゼの指さす先に、目当ての店があった。

シンプルだが上品な佇まいの店だ。

普通の学生には少々敷居が高そうではあったが、ディルクは躊躇わずにそのドアを開けた。

ちりんちりん、と涼やかなベルが鳴る。

一瞬にして、中にいた客の視線ははっとディルクに引き付けられた。店内にはちらほらとしか人がいなかったが、誰もが息を呑んでしばらくの間彼に見惚れる。

ディルクはしかし入店すると構わず、外から眺められる位置に置いてある棚に近づき、ローゼもそれに続いた。

先日ディルクが目にしたそれは、同じ位置で同じ輝きを持ってそこにあつた。

それにディルクはほっと胸を撫で下ろして、商品を手に取る。

「ローゼ、これなのだが、どうだろうか」

それは、金メッキの金具に、深い青の藍晶石を中心に董青石や藍玉、水晶をちりばめた、美しい装飾のバレッタだった。

「ええ、確かに、これでしたらテアの髪によく映えると思いますよ」
ローゼは感嘆の溜め息を吐く。

「素晴らしいですね。意匠もこだわっていますが、こんなに美しい、澄んだ青の藍晶石は滅多に見ませんよ…」

「ああ…。それから、この金具であれば、扱いやすいだろうか」
ディルクの言葉に、ローゼはくすりと笑みを零した。

「ええ、テアでも簡単に髪がまとめられると思いますよ。ただ、やはりこれだけのものだと思えますね」

「値段は気にしないが…」

王族から一庶民となったディルクだったが、コンクールの賞金やアルバイトなどでかなりの稼ぎを出している。無駄なところで金を使うような性格でもないので、貯金はかなりの額だった。

「あなたのお金の心配はしてませんが、テアは気にするかもしれませんよ」

「…それは、確かに」

「テアがこんな高そうなもの、って言ったら、安物だったって言い張るんですね。じゃないと突っ返されますよ」

「そうしよう」

苦笑してディルクはそのアドバイスを受け取った。遠慮がちなテアのことだから、確かにローゼの言うとおりになりそうだ。

「では早速会計を…」

「あ、ちよつと待ってください」

会計に行きかけたディルクの服の裾をローゼは少し握って、引きとめた。

「カモフラージュを忘れてます。それだけ持って行っても、私が付けるんじゃないって丸わかりです。そのバレッタは素晴らしいですが、私の髪の色には合いませんから。見る人が見ればテアへのプレゼントだってばれちゃいますよ」

ローゼは言いながら、自分でも気になったものを一つ手に取った。

「それでそれも、ちよつと貸してください」

ディルクは素直にローゼにバレッタを手渡す。

「それで、一緒に会計しましょう。いいですか、今日はたまたまこの店の前で私に気になるものを見つけてお店に入って、テアへのお土産と一緒に買った。たまたま買い物に付き合っていたあなたが奢ってくれた、という設定でいきましょう」

「…ああ」

細かい設定まで用意してきたローゼにディルクは何とも言えない顔になったが、それくらいのことでも必要だろうと頷いた。

「安心してください、ちゃんと自分の分は自分で払いますから」

「いや、今日のお礼に代金は俺が…」

「さすがに、ライナルト以外の男性から、普段身につけようと思っ
ているものをいただけませんよ。例えあなたが相手でも」

それもそうかとディルクは思って、代案を提示する。

「それでは、せめて今日の昼食くらいは奢らせてくれ」

「はい、それは、お言葉に甘えます」

ローゼは躊躇わず厚意を受け止めて、にこりと笑ったのだった。

背後から静かに近づいてくる何者かに気付いて、テアははっと身を強張らせた。

この学院で、このように気配を殺せる人間は多くはない。

そして、気配を消してテアに近づいてくる理由はほとんど、悪意からのものに限られるだろう。

テアは一気に警戒を強めたが、それを相手にそうとは悟らせなかった。

神経を研ぎ澄ませて、テアはペンを握る。

そして、相手がさらに近付いてくるとみて、やおらテアは握ったペ

ンの先を相手に突きつけるように振り返った。

が、しかし。

「……っと」

相手が驚いたように一歩身を引いて、その顔を見てテアの身体から力が抜けた。

「ライナルト……」

「驚かせるつもりだったが……、逆に驚かされてしまったな」

苦笑を浮かべるのは、間違いようもなく、ライナルト本人だった。

「す、すみません」

テアは慌てて手を引いて謝る。

「いや、私が妙な近付き方をしたのが悪かった。こちらこそ、すまなかつたな」

「い、いえ……」

首を振るテアは、警戒を解いてすっかりいつも通りだ。

ライナルトは先ほどのテアの敏捷な動きを思い出して、すっと目を眇める。

ライナルトが図書館に資料の返却に来て、テアを見かけたのはつい先ほどのこと。

ほんのわずかの悪戯心で気配を消してみたのだが、予想外の反応が返ってきたものだと思う。

先ほどのテアは、全身を戦闘用に切り替えたようだった。

片手ではペンで攻撃を仕掛け、もう片方の手は積み重ねられた本に伸びていた。

おそらく、相手がライナルトでなかったならば、本も凶器として扱っていただろう。

モーリッツに護身術を習っていたといっても、実際にここまでではないかなか動けないものだ。

しかも、気配を消すことに長けているライナルトに気付いて、テアは動いた。

テアはこうしたことに慣れているのではないか。ライナルトはそんな

な風に思った。

何よりもあの鋭い冷ややかな眼差し。

普段は穏やかな色を湛えている黄金が、冷たく光りライナルトを見据えていた。

あんな瞳もできるのか…。

普段のテアとのギャップ。酷薄に光っていた黄金の瞳。

そこに、テアが秘めている何かがあるとライナルトは考えた。

だがそれについてすぐに触れることはせず、ライナルトはテアに近づく。

「お前は本当に勉強熱心だな。授業の課題か？」

「ええ。ここにはたくさんの本があるので…、ついつい色々読んでいるうちに時間ばかり経ってしまつて、まとめるのに時間がかかつてしまつているのですが…。勉強熱心というより、要領が悪いんですね」

「そんなことはないと思うが。読めば読んだだけ、ためになるだろう。しかしいずれにせよ、邪魔をすまなかつたな。返却に来たらたまたまお前を見かけたので…、少し話でも思つたのだが」

「いえ、そんな。ちょうど集中力も切れかけていた時だつたんです。それに提出締切はしばらく先のことですから」

「それでは…、少し休憩ということで、お前の時間をもらうことにしよう」

ライナルトはテアに断つて、彼女の前に座つた。

「こうしてお前と二人で、というのは初めてだな」

「そうですね。普段でしたら、ローゼやディルクがいますから…」

テアは二人の外出のことは口にしないように気をつけながら告げた。結局ディルクがライナルトにどう言つたのか分からないし、ライナルトのことだから勘づくこともあるだろうが、ローゼのためにプレゼントのことはとりあえず秘密にしておかなくてはなるまい。

「…実を言うと、少し前からお前に聞きたいことがあつたんだ」

「何でしょう」

改まった様子のライナルトに、テアは内心身構えた。

何となく、ライナルトが聞きたいことの予想はついていて、どう答えるかをテアは頭の中に用意しておく。

「こんなことを言えばお前は気を悪くするかもしれないが、テア……、お前は人に打ち明けられないような何かを抱えていると、私は考えている」

そのように、率直に始められたライナルトの言葉は、テアの予想通りの内容だった。

「それ自体は誰にでもあることかもしれない。だが、私はお前のそれが、ローゼやディルクに何か」

「ライナルト」

やんわりと、テアは率直なライナルトの言葉を遮った。

「すみません、嫌なことを尋ねさせてしまつて……。きちんとお応えします」

真つ直ぐに見つめ返してくるテアを、かすかな驚きを持ってライナルトは見つめた。

唐突にこんなことを聞いて、テアが何も言ってくれない可能性の方が高いと思つていたので。

けれどライナルトは、聞かずにはいらなかったのである。

ライナルトは、テアへの想いを自覚したディルクに、その想いを諦めないようにと激励したが、ディルクの本気を知るにつけます、テアの背負う何かガディルクに何か危害を加えるようなものではないと確信しておきたかった。

秘密を明らかにしてしまうことを、誰もが望んでいないにしても。大切なものを守るために、ライナルトはどんなことでもする覚悟だった。

「ライナルトの言うとおり、私は誰にも話せないものを……持つていきます。そしてその秘密は、危険なものを孕んでいる……」

二人の他には誰も見当たらない図書館で、静かにテアは話し始める。「それをお話することはできません。ですが……、それが一番確実

な方法なんです。私が何も言わなければ、誰も傷つくことはありません」

どこか、諦めたような、悲しげな微笑を見せて、テアは言った。

「ですから、安心してください。私はこのことを誰にも何も言うつもりはありません。私さえ口を閉ざしていれば…、誰も傷ついたりはしない。そのはずですから」

決然と告げるテアに、ライナルトは胸を打たれる思いがした。

「そうか…」

自分さえ口を閉ざしていれば、ということとは、テアはたったひとりで、その秘密を抱えていこうというのだ。危険なものを孕んでいるというその秘密を。独りで。

それは、どんなに辛く、苦しいものなのだろうか。

その苦痛は、テアにしか分からないのだらうけれど。

痛みを想像することは、できた。

だがその孤独を思いながらも、ライナルトは一方で安堵もするのだ。テアが周りを守ろうとする限り、ライナルトの大切な人間も守られるということを知って。

しかし、テアを親友とするローゼのことを思えば、テアを想うディルクのことを思えば、そして友人であるテアのことを思えば、そんな秘密などどこかへやってしまいたかった。

「お前の抱えるそれを…、どうにかすることは、できないのか？」

「実を言うと…、少し、考えていることはあるんです」

思索を巡らせる様子で、テアは呟くように答える。

「難しいこともあります…。その時には、皆さんにきちんと全てをお話することができると思います。驚かせてしまうとは思いませんけれど…」

「…分かった。何か私にできることがあれば、言ってくれ。無理に話させてしまった詫びをさせてくれれば嬉しい」

「いいえ、そんな…。私の方こそ、余計な気を使わせてしまって…。ライナルトが気にするのも当然です。自分でも、時々思ってしまう

ますから。話すことができないことがたくさんあつて…」

本当に、私はここに来てしまつて良かったのだろうか…。私は、本当は

そんなことを、思うのだ。

表情を翳らせたテアを見つめ、ライナルトはゆっくりと口を開いた。

「……テア、もう少しだけ、時間をもらつてもいいだろうか？」

「はい、大丈夫です」

「話しぶらいことを話させてしまったからな…、私も普段は話さないようなことを少し話してみよう」

「えっ…」

テアはライナルトを気遣うような表情になり、彼は苦笑した。

「多分、聞いていてそれなりに面白い話だと思うぞ。ディルクの話だ」

「ディルクの…」

テアが興味を引きつけられた様子になつたので、ライナルトは微笑んで続けた。

「どうやら詫びの一つにはなりそうだと思ひながら。」

「あいつは自分では幼い頃の話などしないだろう？ お前は、もうアイゲンの意味は知っているのだったな。それなら、私が知っているあいつの一番幼い頃の話をしようか……」

「少し、昔話に付き合っただけですか？」

豊富に苺などのベリー類が添えられたバナライスのデザートにスプーンを入れながら、ローゼは言った。

目的のものを購入してから、ディルクはローゼに付き合ってもらっているというよりローゼに付き合っていくつかの店を回らされ、今はローゼの希望したカフェに入って食事をとっているところだった。とはいっても、既に食事は終え、ディルクはコーヒーを、ローゼはデザートをそれぞれ食後に楽しんでいるところだ。

「ああ、いくらでも」

唐突なローゼの切り出しに、ディルクはよどみなく頷く。

何となく、ローゼの雰囲気からテアの話をするのだろうかと思った。

「…ありがとうございます」

ローゼはディルクの返答に、ふふつと笑い、続ける。

「……昔と違って、私が十二の頃のことですから、八年前、ですか。あれはまだ、寒さを残した春の始めだったと思います。そこで初めて…テアと出会ったんですよ」

思い出すように目を伏せるローゼの言葉に、ディルクは耳を傾けた。八年前といえば、テアはまだ九つだ。

彼女は一体どんな少女だったのだろうか。

そんなことを考えながらディルクは静かに姿勢を正していたが、ローゼの語る昔話は穏やかなものではなかった…。

ブランシュ家に与えられた領地は決して広大ではないが、隣国との

境界で、守りの要所となっていた。「クンストの剣」と呼ばれるフォン・ブランシュがそこにあることが、重要なことだったのである。フォン・ブランシュは他国に例を見ない、特殊な家柄だ。

「クンストの剣」と呼ばれ、その名に恥じない有力な騎士だけを輩出してきた血筋。

政治的な分野では四大貴族には及ばないが、その武力に関して皇帝は長年フォン・ブランシュを頼みにしてきた。

実際に長きに渡って戦においてもその名は負け知らずで、他国からも恐れられているほどである。

そして、フォン・ブランシュは多くの騎士見習いを受け入れ、力ある騎士を育てあげることでも国に貢献してきた。本来、騎士を目指す者は、騎士見習いとして主君に仕え騎士道などを身につけていくものであるが、フォン・ブランシュはその慣習とは少々異なる形で騎士を生み出していたのである。それに関して、この国では少々軍のあり方などが他国と異なっているのだが、詳しい話は省略する。フォン・ブランシュが軍事に長けているのなら、その領民も荒っぽい連中が多いのかというと、そうでもない。騎士見習いが多いと言っても、何十人も抱えているわけではないし、皆もあつて兵が構えているとは言つても、農民や商人がいなければ食べるものも着る服もなくなってしまう。

兵は確かに他よりも多く見かけはするが、情勢は比較的安定しているし、領民たちはそこで農耕や商売に明け暮れながらものんびりと暮らしていた。

それには、当主であるモーリッツ・フォン・ブランシュの人柄が最も影響していただろう。

彼は兵たちに乱暴な振る舞いを許さなかったし、「クンストの剣」を受け継いだモーリッツの方針に逆らつて荒つぱく振る舞うような連中はいなかった。むしろ領民には親切にするようにと呼びかけていたくらいである。

また、彼は領民たちからももちろん税を徴収していたが、他の領地と

比べればそれは軽いものだった。立派な砦も聳え立つそこに暮らしていれば、兵たちの養いもあり本来であれば負担がそう重くないはずはない。だが、フォン・ブランシュには騎士見習いの子弟たちが多く集まる。そこで貴族などが多額の寄付をしてくれるので、ブランシュ家は潤っていたのだ。

とはいえ、モーリッツの器量がなければ、ここまで領民たちの負担が軽いということとはなかっただろう。

それを領民たちも分かっていたから、誰もがモーリッツを尊敬していた。

そして、モーリッツの娘であるローゼ・フォン・ブランシュも、領民たちには親しみのある存在だった。

普通の貴族の少女と言えればたった一人で外出することなど考えられないことだったが、ローゼは型破りなお姫様で、たったひとり供も連れずに町娘のような格好で下町を闊歩し、気さくに領民に話しかけるような娘だったのである。それを許す父親も父親ではあったが、それはともかく。

その日も、ローゼは稽古を終えて、ほんの少しおしゃれをしてから町に出た。

綺麗なドレスはこの頃の彼女も目を輝かせるものであったが、歩き回るには少々不便なのだ。

今日は自分でつくる菓子/materialを揃えるつもりで、市場を見て回る。こつした買物を使用人に任せても良いのだが、ローゼは人々の賑やかな様子を見るのが好きだったし、将来自分が背負って立つことになるこの町のことをきちんと知っておきたかったのだ。

そうして、輝くような瑞々しい果物を手にとって、市場の見知った顔と声を交わしながらローゼが楽しそうにしているときだった。

「ローゼねえちゃん！」

声をかけられて、ローゼは声のした方を見た。

彼女の左手から駆けてきたのは、幼い少年少女たち。

稀に、ローゼが剣の稽古をつけてやっている、農民の子どもたちだ

った。

「こら！ あんたたち、ローゼ様とお呼びといつも言ってるだろ！」
叱責の聲が飛ぶが、子どもたちはそれに肩を竦めてローゼのもとへ馳せてくる。

「どうしたんですか？」

ローゼも呼び方のことなど気にせず、子どもたちに問いかけた。

「それがさ、ちょっと変なのがいるんだよ」

「お母さんに言ってみただけど、ほっとけて」

「でも、なんかさ、ケガとかしてるみたいだし」

「お医者さん呼ぼうかと思っただけど、お金のこととかあるし、おれたちが呼んでも来てくれないかもだし」

「それに、近づいたらにらむの…。こわくてなんにも言えなくて」
子どもたちの話はまとまりがなく分かりにくかったが、どうやら怪我をしているかもしれない不審なものがあるらしい。

話だけだとそれが人間なのか動物なのか微妙なところだが、ローゼは頷いた。

「分かりました。行ってみましょう」

「ローゼね…、ローゼ様ならそう言ってくれと思うってたよ！ こっち来て！」

無造作に手を引かれるまま、ローゼは走り出した。

子どもたちにもあんな風につきあってくださって、と親たちから申し訳ないようなありがたがるような視線が送られたが、気にも止めずに。

子どもたちの言葉に嘘はなかったし、もし怪我人がいるのならば領主の娘として、「クンストの剣」として助けるのは当然だ。もし不審人物ならば、捕まえることもまた使命のうち。

まだ十二の少女でありながら、ローゼには既に次代当主としての自覚も覚悟もあった。

「あそこだよ！」

そうして、ローゼが連れてこられたのは、町の外れも外れにある小

さな廃屋だった。

持ち主も分からなくなってしまうたそこを子どもたちがこっそりと遊びに使っているらしいことを、ローゼは知っている。

一方で、稀に浮浪者などが寝泊まりに使っていることもあって、老朽化もしており危ないので早めに取り壊した方がいいかもしれないと大人たちが話しているような建物なのだ。

「中にふたりいるよ」

「親子みたい」

ふたり、ということとは、相手は人間らしい。

ローゼは、先ほどまでとは打って変わって彼女の後ろに隠れるようにした子どもたちを引きつれながら、無造作にその廃屋に近づいた。確かに中には人の気配がある。

朽ちかけた木製のドアの前に立ち、彼女はそのドアをノックしかけた。何となく、そうしなければならぬような気がしたのだ。

しかし、不法に滞在しているだろう相手にそんな礼儀を尽くす必要はないだろう。

ローゼは一瞬の躊躇の後、ドアを開け放った。

そこには。

「どちら様でしょうか」

若い女性と、幼い少女が、いた。

ローゼはその二人の姿に虚をつかれたような思いで、しばし立ち尽くす。

ローゼに向けて、静かに誰何の声を上げたのは少女の方。

少女は、不揃いに刈られた、くすんだような青っぽい髪の毛を持っていた。その身体は余りにも小さく細く、細身に見えながら鍛え上げているローゼが少し力を加えれば簡単に壊れてしまいそうだ。その身に纏うのは飾りもない質素な白のワンピースのようだが、ほとんど赤茶っぽく汚れていて元の白さが一体どのようなものだったのか分からない。

そんな、少女のぼろぼろな様子とは正反対に印象的なのは、その瞳。

その黄金に光る瞳は、少女の小ささに比してとても大きく感じられ、さらに少女の意思を反映してか、他者をたじろがせるような強さを湛えていた。

そんな少女が後ろに庇うようにしているのが、ローゼたちに背中を向けるようにしている女性。いくらか少女よりも小奇麗に見えたが、少女と同じような髪の色。顔立ちも、二人は良く似ていた。子どもたちの言うとおり、親子なのだろうとローゼも思う。そして彼女は、背中に傷を負っているようだった。

ローゼがすぐにそれと分かったのは、女性が背をむき出しにしている、包帯を巻いているのが見えていたからだ。どうやらローゼは、彼女たちが包帯を変えている最中に踏み込んでしまったらしい。

「興味本位でいらしたならば、すぐに退出をお願いします。関わらない方が賢明です」

その少女は、ローゼよりも幼いだろうに、まるで大人のような口調で、冷ややかに言い切った。

「もし他にご用事ということでしたら、……その内容によっては、」
ローゼの後ろで、子どもたちが息を呑む音がした。

少女の纏う雰囲気は、あまりにも あまりにも鋭く、物騒で。

少女は凶器も持っておらず、あまりにも非力に見えるのに、慄然とした感情を喚起させた。

「……テア」

しかし、後ろの女性の窘めるような声で、少女の不穏な雰囲気は少々和らぐ。

ローゼも、幼い少女の雰囲気には圧されていたが、女性の優しげな声によろやく言葉を発することができた。

「私は、ここの領主の娘、ローゼ・ブランシュです」

ローゼの名のりに、少女は目を眇めた。

疑われているのだろうか、ローゼは思う。

それも仕方のないことかもしれない。普通の貴族の娘であれば、こんな場所に農民の子どもたちを引きつれて来るといったことはないは

ずだから。

「疑われるかもしれませんが…」

「本当だよ！ ローゼね…、ローゼ様は『クンストの剣』なんだから！」

子どもたちが、後ろで声を上げた。

少女は特に表情を動かすことなく、それに答える。

「疑っているわけではありません。見れば…それなりのことは、分かりますから。…それで、領主様のご息女がわざわざこんな場所に来られたのはどうしてですか。…ここに勝手に侵入したことならば、謝罪します。出て行けというのならばすぐにも出ていきます。罰するというのならば私がその咎を受けましょう。ですから、それ以上のことは」

言い募る少女に、ローゼは切なさにも似た苦さを覚えた。

少女は、女性を守るようにローゼたちに立ちほだかっている。

少女は女性を 母親を守りたいのだ。ローゼはそれを強く感じ取ることができた。

少女は、ただただ、守りたいだけなのだ。そのために、自分はどうなっても構わないと、そう思っている。

こんなに小さな、少女なのに。

おそらく、彼女に庇われている女性も、ローゼと同じことを思っているのだろう。ローゼよりもずっと強く、思っているのかもしれない。

そんな彼女はローゼとおそらく同じような表情をして、けれど怪我のために口をきくのもつらそうな様子だった。

ローゼは心を決めて、二人に話しかける。

「私は、あなた方を害しようと思ってきたわけではありません…決して。私は、『クンストの剣』として…、苦しんでいる人たちがいるのならば、少しでも力になりたいと思っています。よければ、うちの屋敷に来ませんか。そこでならきちんとした治療もできますし、少なくともここよりは体を休めることができますが…」

少女は、その真意を確かめようとするようにますます瞳に鋭い色を宿して、ローゼを見つめた。

こんな表情ができるような何かが、この少女にはあったのだろう。ローゼは痛切にそれを感じ取り、ますます彼女たちを守らなければならぬという思いを強くした。

自分よりも幼いこの少女が、こんな剣呑な様子でいなければならぬことは、きつと間違っている。

「『クンストの剣』は、国民のためにあるのです。日々剣を研ぎ澄ませていても…、使わなければ意味がない。それが戦でなくとも…、少しでも、手を差し伸べることを許してはもらえませんか？」

ローゼは心からそう告げ、答えを待った。

「その申し出、ありがたく、お受けします」

そして、ローゼの真摯な言葉に応えたのは、少女ではなく、後ろの女性だった。

「お母さん、」

少女がそれでいいのかと問うような声を上げて後ろを向く。

女性は、そんな少女に優しく手を伸ばした。

「『クンストの剣』…、そう、モーリッツ卿なら…、きつと悪いようにはなさらないはず」

「で、も……！」

女性はそっと、少女を抱きかかえた。

「……『クンストの剣』にお願いいたします。どうか、少しの間だけでも、私たちにその守護の手を……」

それから、ローゼは人を呼び、父親であるモーリッツの許可を得て、二人をフォン・ブランシュの別邸　ローゼの暮らす屋敷に運ばせた。

フォン・ブランシュには当主の住まう本邸と、少し離れた場所に別邸がある。

本邸には現在見習いも寝泊まりしているため、少女がひとり男性の

中で暮らすのはあまり好ましくないだろうと、ローゼは別邸へという形になったのである。母親がいたならばまた別だったのだろうが、ローゼの母親は彼女が幼い時に事故に亡くなっていて、メイドはいるもののローゼは紅一点なのだ。

とにかく、そのように本邸には見習いもいたし、人の出入りが激しい。怪我人を治療するには少々騒がしいだろうと配慮して、ローゼはそうさせたのだった。何よりも、彼女が保護した親子はなるべく人目には付きたくない様子だったので、そうした方がいいと思ったのである。

そうして、フォン・ブランシュの抱える医師に診せたところ、女性の怪我は思っていたよりも危うい状況にあっただらう。あのままであったならば、必ず何らかの病気を併発して死に至っていただろう、と医師は言った。しかし、医師の適切な処置のおかげで女性は一命をとりとめた。女性を必死で看病する少女を見守りながら、ローゼは間に合って良かった、と強く思ったものである。

そして、女性の治療が落ち着いてようやく、ローゼは二人の名前を聞くことができた。

少女はほんのわずか、警戒を解いた様子でこう名乗った。

「申し遅れました…。私はテアといいます。母はカティア、と。…」

…母を救っていただいたこと、感謝いたします、ローゼ様」

…ライナルトによるディルクの昔話の前に、
テアとローゼの出会い編を少し。

貴族に関して(も)勉強不足な部分が多く、
フォン・ブランシュに関してはまた書き直すかもしれませんが…；
一応モデルは近世・近代寄りで考えているのですが、
中世的な部分も取り入れたりしていて、
ここは違うんじゃないかという意見はあるかと思いますが、
……ファンタジーなんです！ と言いつけて逃げてみる…。

今回はローゼが何故昔話をするに至ったかという部分へいきます。

「それから、テアとカティアさんはうちで暮らすようになったんですよ。最初は、カティアさんの怪我が治ったら出ていくって二人は言い張っていたんですけど…、もともとカティアさんは体が丈夫ではなかったらしくて、そのまま…。私は家族が増えたみたいで嬉しかったんですけど…、こういう風に言つのはあんまり良くないですかね」

「…そんな、ことが…」

デイルクはローゼの口から語られた話に、様々なことを考えさせられて、すぐには何を言つて良いのか分からなかった。

「…テアから母親とずっと旅をしてきたとは聞いていたが、やはり口で簡単に言えるほど楽なものではなかったのだな…」

「当然でしょうね。何と言つても、女だけの旅ですから。テアは楽しかった話や珍しい話はたくさんしてくれましたけれど、きつとそんなことばかりではなくて…。罵られたり騙されたり…もつとひどいこともあったのかもしれない」

「テアの母親の怪我のこともそのひとつ、というわけか…」
嘆息交じりにデイルクは言った。

「そうですね…。『悪漢』に襲われて、テアを庇つて、と二人は事情を説明してくれましたが…」

ローゼは言いながら違うことを考えているように呟く。

「…しかし、そんなこともあるというのに何故二人は旅を…、」
デイルクは言いかけてすぐに止めた。

「いや、すまない。今の疑問は忘れてくれ」

尋ねるならば直接テアに尋ねるところだろうし、立ち入りすぎたかと謝罪するデイルクに、ローゼは首を振る。

「いいえ、当然の疑問でしょう。私も…、ずっと思っていることですから」

ローゼが口になると、ディルクは意外そうにわずかに目を見張った。「お前も、知らないのか」

「ええ……」

少なくとも、私は「知らない」ことになっている…。例え何かに勤付いていたとしても。私は何も知らない。そうでなくてはいけない。

ローゼは心の中で呟く。

それが、テアのためなのだ。

「仕方ありませんよね。テアが話したくないと思っっているのなら…」

「…そうだな」

「水臭いとは、思いますけれど。それに、私は何も知らないのに、父は全てを知っているようで、それが少しばかり腹の立つところですよ。…まあ結局、子どもの私が二人を守るためにできることなんて微々たるもので、最終的には父の力が大きかったわけですから、当然なのかもしれません」

「確かにモーリッツ卿でなければならなかった部分は大きいだろうが…。お前がお前でなかったら、テアたち親子はモーリッツ卿の保護下に入ることなかっただろう」

ディルクは冷静にそう指摘した。

慰めではないような様子で、ただ事実を言っているそれが、慰めよりもずっと励ましになる。

「…そうですね」

ローゼは淡く微笑んで、ただ頷いた。

「まあ、テアが水臭いことについては、今は置いておくことにしてローゼは昔話を持ちだしてついつい感傷的になってしまった気持ち切り替え、どうしてこの話をするに至ったのか軌道修正をすることにした。

「古い話がついつい長引いてしまいましたが、本題に移りましょう。そもそもどうして昔の話をしたかという点、先日の疑問にお答えしようと思っただけですよ」

「ああ…、話を聞いて、俺も思っていた。…つまり、あの事件自体は、今までに多くの経験をしてきたテアにとっては、そこまで大仰なものではない。そういうことか？」

さすがはディルク、察しがいい、と思いながらローゼは首肯する。「そうですね。普通の女性だったらもっと恐怖が後に残ったりするでしょうけれど…。実際のところ、テアにとってはあの程度見戯にも等しかったんじゃないかと思えます。犯人の目的も、テアをステージに立たせたくない、それだけのようでしたしね。それに、テアは命が無事でピアノさえ弾ければそれ以外の自分のことには無頓着なところがありますから、自分のことに関しては怯えるどころか腹を立ててすらいらないかもしれません。テアが怒っているとしたら、ディルク、あなたに迷惑をかけてしまったことに関してのみですよ。きつと」

確かにテアは、事件の直後も、学院祭が終わって学院長らに事情を説明する時も、不思議なくらいいつも通り冷静だったとディルクは思い返す。

「ただ、それでも、何の影響もなかったとは言えないみたいで…」「なんだ？」

「何だかぴりぴりしていて、警戒している感じが、昔に戻ってしまったみたいなんですよね…」

ローゼは溜め息交じりにそう告げた。

「警戒、か…。それに関しては俺も多少は感じる場所があったが、だがそれは、そうだろうな…。犯人もいまだ捕まっていない状況だ。学院の警備は増強されたが、隙を突こうと思えば学院内にテアへの反感を持った者はまだ多いし…」

「ええ。一度失敗した犯人が、犯行をエスカレートさせてくる可能性も高いですね。警戒心が全くない、無防備な状態よりは、マシ

だとは分かっているのですが」

ローゼは腕を組んで、気に食わなそうな顔をした。

「それでも、私はテアに昔みたいに帰ってほしくなかったんですよ。せつかく、普通の女の子と同じように、学校生活だって楽しめるようになったのに」

「昔のテアは、そんなにも？」

「……そうですね、私と出会ってすぐの頃は、カティアさんがあんな怪我だったこともあったので、特にひどかったんじゃないかとは思いますが。カティアさんの容態が良くなってからは、よく笑ってくれるようにもなりましたし……。けれど、やっぱり、誰も信じてはいけないというような、頑ななものがとても強く……感じられていて。

私はずっと、テアのそんな信念を崩したいと思っていました。だって、やっぱりおかしいじゃないですか。たった九つの女の子が、そんな風にしなくちゃいけないなんて。もちろん、それはテアだけに限った事ではないのかもしれませんが。でも、私にできることはしたくて。それが余計なお世話でも」

「……ああ」

その思いはデイルクにもよく理解できたが、少々耳に痛い話ではあった。

テアのような子どもたちが存在してしまうのには、国の政策等の問題点もあるからである。

元王子、元王族のデイルクとしては、考えずにはいられないところなのだ。

だが、王族を放棄してしまった時点で、デイルクにできることは余りにも少ない。

選んだ道を後悔したことはないが、もしフォン・シーレのままであったなら、何かできることがあったかもしれないなどということを考えてしまう。

そう考えてしまう自分を、傲慢かとも思うけれども。

「まあそれでも、昔よりはずっと良い方向に向かっていることは確

かです。テア自身も、ここに入学することがきつかけになったのか、ちよつと気を緩めるようにしているみたいです。入学したての頃なんか、ドジさに加速がついていたくらいですから」

思い当たることがあって、ローゼの言葉にディルクは笑いを零した。そんなディルクを真っ直ぐに見て、ローゼは告げる。

「ディルク」

「何だ？」

「私が言うのも何ですけど、これからもテアのこと、よろしくお願ひしますね。きつと…、あなたのような方が側にいてくだされば、テアはもつと…、心を開いていけるんじゃないかと思うんです」

他でもないローゼからのその言葉に、ディルクの心は揺れた。自惚れそうになる自分、それを戒める自分が心の中で囁く。

「……俺も、テアのこととはかけがえのない友人だと…、パートナーだと思つている。だから、できる限り、力になりたい」

本音を隠して、けれど偽らざる気持ちで、ディルクは答えた。

「だが、俺などよりも余程お前の方がテアの力になれているだろう」

「そうになりたいと思つて、その自負はありますが。及ばないことも、多いですから」

ほんのわずか、寂しさを滲ませてローゼは呟く。

「私にしかできないこともあるし…、あなたにしかできないこともある。そういうことです」

言つて、ローゼはずつと手にしたままだったスプーンを、既に空になつている硝子の容器の中におさめた。

ディルクはそれを合図にしたかのように、ほんのわずか残っていたコーヒーを飲み干す。

冷めてしまったそれは、口の中に苦かった。

「……さて、では、そろそろ帰りますか」

「そうだな」

二人は時計を見て頷き合つた。

立ち上がるうとするローゼに、ディルクは微笑みかける。

「ローゼ、今日は一日ありがとう」

「いいえ。私としても、なかなか楽しい休日でした。…本当に、あなたがテアのパートナーで良かったと思います」

実を言えば、昔のことを語るのに、少々の躊躇いを持っていたローゼだった。

今のテアのことを伝えるのに一番分かりやすいだろうし、これから何かがあった時に役にたつかもしいないと思っただけだが、それで逆にディルクがテアを軽蔑したり負担に思ったりだとか　そういうこともないとは言い切れなかったのだ。

だが、ローゼはディルクを信頼した。ライナルトの親友であり、テアの信じるパートナーであるディルクならば、と。

そして、やはり…と言っただろう、ディルクはテアに対する思いやり以外のものは見せなかった。

親友の密かな感じ取って、ローゼは二人のことを応援したいと思っただけだが、ここで彼女は確信を持つ。

ディルクならば誰よりもテアを大切にしてくれるだろう、と。

今のディルクの身分は平民であるし、身分的に不釣り合いということもない。

もちろん周りにはうるさいだろうが、それも二人でいれば乗りきれてしまう問題だろう。

ディルクほどの人であれば、テアを任せられるというものです
ね…。

まるで母親のように思って、ローゼは笑う。

「…光栄だよ」

ディルクはローゼの言葉に一瞬面食らったような表情を浮かべたが、本心からそう返した。

「…さて、とは言つて、どこから話し始めたものか…」

休日の図書館、テアと向き合うライナルトはそう呟きながら考えた。ライナルトはあまり多弁な方ではない。このような打ち明け話をしようとすることも珍しいことだった。

なので、彼は少し迷ったが、ほんのわずか考えて、言葉を探し、話し始める。

「順当に始めるならやはり、ディルクが私の部屋に忍び込んできたところからが良いだろうか」

「忍び込んできた…ですか」

その単語にテアは目を丸くする。

「ああ」

その時のことを思い出してか、ライナルトは笑つて続けた。

「私も最初はひどく驚いたものだったよ…」

ライナルトはその頃、第二王妃の息子、ライナルト・フォン・シーレであった。

十二歳の、夏。

彼は可愛げのある子ども、とは言い難い存在だった。

毎日、剣の稽古や公式行事などがある時以外は、与えられた居室に籠り本ばかり読んでいる。

寡黙で、笑うことも少なく、王族特有の白藍の瞳は冷たい。

侍女たちにも、何を考えているのか分からない、不気味だ、とまで噂されていた。

ライナルトは自分が周りからどういう目で見られているのか知っていたが、特にそれをどうこうしようとも思っていなかった。彼はその年で、様々なことを諦めてしまっていたのである。他人に、期待することも。他人を、信じることも。

何故彼が若干十二歳にして老成したかのようになってしまったのか、それにはもちろん理由があった。

彼の母親、第二王妃の存在である。

彼女は、四大貴族の一つ、エーベルハルト公爵家の令嬢だったが、王妃となる以前、想いを交わした相手がいたのだという。

だが、彼女は家の事情、また国の事情により王に嫁がなくてはならない運命にあった。

エーベルハルト家は、四大貴族の一。他の、四大貴族に名を連ねるバンゲンハイム家、ルーデンドルフ家、オイレンベルク家とは対抗関係にある。

皇帝はしかし、フォン・バンゲンハイムの娘を第一王妃　正妻に選び、エーベルハルト家は一步遅れる形になったのである。

そこで、エーベルハルト家は第二王妃　愛妾という形であっても少しでも皇帝に、権力に近づこうと娘を嫁がせることにしたのだ。同じくして、ルーデンドルフ家も娘を嫁がせようと画策しており、これ以上遅れまいとしたということもある。

王宮としても、四大貴族の勢力均衡が崩れないよう図ることは、国政を乱さぬためにも必要だった。跡取りのことを考えても、複数の王妃の存在は必要だ。

他に想う相手がいるなどと言っても、彼女の意思などまるで無関係に、話は進められ。

だが、彼女にとっては想う相手と結ばれることだけがその望みで、第二王妃という地位を得ても毎日を嘆き暮らすばかりだった。

彼女は想う相手を忘れることも、国のために皇帝に尽くすこともしないままだった。

生まれてきた息子も、彼女にとっては何の意味もない存在で。意に沿わない相手との間にできた子どもに与える愛情も、彼女は持ち合わせてはいなかった。

だが、子どもはそれでも母親を慕うものである。もつと小さな頃のライナルトといえば、どうして母親が自分によそよそしいのかわからず、少しでもいいから微笑みかけてもらいたいと、努力に努力を重ねていた。

勉強も、剣も、何もかも、人並み以上に努力をして。結果を出せば、母親が喜んでくれるかもしれないと思った。けれど何をして。

何をしても、彼女はライナルトの存在をないもののように振る舞った。

母親の微笑みなど、ライナルトは一度として見たことがない。やがて、彼は分かるようになってくる。

母親の事情も。自分に笑いかけてくれない理由も。

全てが、無駄だったのだ。

ライナルトは、そう思った瞬間、全てを諦めた。

いつか微笑みかけてくれると、そう信じていたことが裏切られたように、何かを信じていてもいつかは裏切られるのだ、と。思って。

何かを信じることを止めた。

政治の道具となるしかなかった母親の息子。

ならば、それらしく生きていけばいいのだろうと、彼はただ道具に徹することにした。

意思を持たず、ただやらなければならぬ義務だけをこなした。

そんな、ある日。

「……ライナルト、ライナルト、だろう？」

つまらない哲学書を読みふけていたライナルトは、呼ぶ声を聞いたように思って、顔を上げた。

「…………？」

「……つと」

そして、ぎよつと、少年ライナルトは椅子から立ち上がった。壁に取り付けられた大きな本棚の一番下の段だけ沈むようになって、そこから人の顔が覗いていたからだ。

今までにない事態に、思わずライナルトは声を上げそうになったが、その顔に見覚えがあることに気付いて、とりあえず衛兵を呼ぶのは中止する。

ライナルトが声を抑える間にも、もぞもぞと人影は狭い隙間からライナルトの部屋に侵入していた。

「驚かせてすまないな。こういう方法を使わないと、なかなか会えないものだから」

少々埃を身に纏って、そこに立っていたのは、ライナルトの異母兄弟、第三王妃の息子、ディルク・フォン・シーレ。

ライナルトと同じ、皇帝の息子ということで、当然面識はあった。公式行事などでは同じテーブルにつく仲だ。しかし、言葉を交わしたことはほとんどなかった。公式行事以外で顔を合わせることも皆無に近い。

同じ王宮内とは言っても、第二第三王妃の居住に与えられているのは王宮とは渡り廊下で繋がれた小さな離宮であつたし、それぞれが離れているのだ。また王妃たちの生家は対立関係にあるため、王妃同士の交流も滅多にない。息子たちもそれはまたしかり、ということだ。

特に第三王妃は第一第二王妃に対するライバル心が強く、息子に対しても競争相手に近付かないように言い聞かせていると聞く。

それがどうして、こんなところにいるのかとライナルトは訝った。しかも、わざわざ一部の人間しか知らないような秘密通路を使ってくるなど、尋常なことではない。

「さすがに、俺が誰かは名乗るまでもないな。母は違えど兄弟だというのに、こうして話すのは初めてのようない気がするが……」

警戒するライナルトとは真逆に、異母兄弟はあっけらかんと話しかけてきた。

「デイルク・フォン・シーレ。……何のつもりだ」

「もちろん、お前に会いに」

デイルクは率直に言っつて、ライナルトと同じ白藍の瞳を細めて笑った。

「少し前、ちょっと冒険してみようと思ってこの離宮の秘密通路を探検していたら、フルートの音が聴こえたんだ。隙間から覗いてみたら、演奏していたのがお前で……。一緒に演奏してみたら楽しいだろうと思っただ。俺がピアノを弾くから、フルートを吹いてくれないか？」

ライナルトは思わず絶句していた。

どこから突っ込んで良いものか分からない。

フォン・シーレを名に持つ者が、王宮の秘密通路で「ちょっと冒険」とはどういうことだ。

そして、唐突にフルートを吹いてくれとは、一体どういった見だ。

「駄目だろうか？」

「……断る」

本当に、共に演奏したいと、それだけで今までに接触のなかった異母兄弟が現れるなど到底信じられない。何か企みがあるのかもしれない。

何よりも、ライナルトはデイルクのことを正直好きではなかった。

自分と同じ立場でありながら、まるきり境遇の異なるデイルクのことだ。

だから、ライナルトはデイルクを拒絶した。

「……分かった」

デイルクは少々気落ちした様子で頷いたが、しかしすぐに明るい声でこう続けた。

「今日はこんな場所からの訪問だったし、お前の予定も聞かずに済まなかった。今度はもう少しちゃんとした方法で、予定などもきち

んと踏まえて訪ねることにしよう」

「……は？」

「では、今日は退散することにする。すまなかったな。では、また後日」

また後日、ではない。

もう来なくていい。

ライナルトはそう言いたかったが、言い返す前にディルクは素早く姿を消してしまっていた。

しばらくしてライナルトは、あれは白昼夢だったのかもしれない、と椅子に座りこんだ。

しかし。

ディルクはその言葉通り、数日後にはライナルトの前に再び姿を現したのである。

しかも、ライナルトが思いもしなかった方法で。

その午後は特に予定もなく、ライナルトはいつも通り部屋に籠り、教師に出された課題をこなしていた。

その時、コンコン、とドアがノックされ、下男が「お飲物をお持ちしました」と部屋へ入ってきたのである。

ライナルトは少しの間気付かなかったのだが、見ない顔だな、と盆を持って入ってきたその少年を間近で目にして、絶句した。

「ディルク……」

「よく気がついたな」

そう、その下男は 下男に扮装してそこに立っていたのは、ディルクだったのである。

彼は鬘でもかぶっているのか、髪の毛で上手く顔を隠すようにして、さらに化粧か何かで多少人相を変えていた。

王族が下男に身を竄しているなど、到底考えられることではなく、

ライナルトは開いた口が塞がらない。

しかしディルクはそんなライナルトに茶目つ気たっぷりにウインクして見せて、

「なかなか上手く化けただろう?」

とむしる誇らしげに言ってみせる。

「何故……」

「先日言っただろう? お前と演奏がしてみたいと思ったんだ。今は駄目か?」

「そこじゃない。いや、それもあるが……」

前回と同じだ。いや、それ以上かもしれない。ディルクの言動は理解の範疇を越えていて、ライナルトは混乱するしかなかった。

そして混乱したまま、一番重要だと思うことを訊くために彼は口を開いていた。

「…どうしてそんな格好までして? 演奏が云々という理由など、信じられない……本当は一体何が目的なんだ」

ディルクは頭を抱えるようにしたライナルトを見つめ、冷静に答える。

「お前を暗殺するために来た、とでも言っただ方が、お前は信用してくれただかな」

そうなのか、と疑るような眼差しでライナルトはディルクを見返した。

ディルクは苦笑する。

「だが、おそらくお前も考えている通り、俺がいくら子どもといっても、お前を殺そうとするならもっと上手い手段を考えついて実行するさ。少なくとも、お前の目の前に姿を見せたりはしない」

それは、先日ディルクが現れた時からライナルトも考えていたことだった。

「…お前と演奏したい、というのは俺の本心だよ。本当は、もっと前からお前と話してみたいとは思っていた。だが、第三王妃のことは、当然お前も承知しているだろう。俺は大っぴらにお前に会うわ

けには行かなかったし、だから今回も正式にアポイントを入れることもできなかった。だからこういう形になってしまったことに対して、俺も多少反省はしているが、前回よりはましだろう?」

自分の母親のことであるのに、第三王妃、とまるで他人のようにディルクは口にする。

それにほんのわずか違和感を覚え、しかしそれには触れずライナルトはなお追究した。

「お前の登場の仕方についてはどちらも同じようなものだ。だが、どうしてそこまでして私と演奏をなどと言っ?」

「お前が言うほど、俺にとってはまだ『そこまで』というほどでもないが…」

ひとりごちるようにディルクは言って、続ける。

「似ている、と思ったんだ」

一体何が、とライナルトが問う前にディルクは告げた。

「お前の音を聴いて　　こういう言い方は陳腐かもしれないが、俺たちは同じような孤独を知っているのだなと、思った」

瞬間、かっとなライナルトは頭に血が昇るような感覚を覚えた。

「俺とお前が?　馬鹿なことを言うな!」

だが、ディルクはライナルトのその言葉に取り乱したりはしなかった。

彼には、ライナルトがそのように否定の言葉を吐き出す理由がおおよそのところ、分かっていたからだ。

「……ピアノを貸してくれないか?」

ディルクは誠実な姿勢で、ライナルトに頼んだ。

その静かな眼差しに、ライナルトは怒りを削がれる。

「勝手にしろ」

と、彼は部屋の片隅を指した。

「ありがとう」

ディルクは広い居室に鎮座するグランド・ピアノの前に座る。

このピアノはライナルト自身が弾くためにあるというよりも、一種

の部屋の飾りだった。だが、音楽の教師が来た時に使われることがあるので調律はきちんとされている。

ディルクは音を確認かめて頷くと、おもむろに鍵盤に指を落とした。

「……！」

はっと、ライナルトは息を呑む。

その旋律は、先日ライナルトが心の赴くままに奏でていたものと、そっくり同じものだったからだ。

悲しみや寂しさ、やりきれなさをぶつけた、音。

ライナルトと、同じ。

ライナルトは、ただ茫然とディルクの音を聴いていた。

ディルクの音は、ただの猿真似で出せるようなものではなかった。

そして、「似ている」とディルクが言ったように、ライナルトと全く同じ音ではない。

ディルクの旋律には、そう、憎悪さえ滲んでいるような。

しかし、ぷつりと途中で音が切れて、ライナルトははっとする。

「…俺がこの前聴いたのは、ここまでだったからな。続きは知らないんだ」

ディルクは顔を上げて、ライナルトに微笑んだ。

あんな音を出したとは思えない顔色で。

ライナルトはひとつ息を吐き、答える。

「実を言えば、私も適当に弾いていたから、終わりはまだ決めていないんだ」

ディルクは一瞬目を見張り、笑った。

「そうか。では、二人で合わせながら曲を完成させないか？」

その提案に、ライナルトは今までとは違う諦めのようなものを覚えながら、頷いていた。

彼にも、今まで接触の少なかった異母兄弟に対する興味が芽生え始めていたのだ。

guardian 11 (後書き)

ディルクとライナルトの出会い編、でした。
もう少し昔話は続きますー。

それから度々、ディルクはライナルトのもとを訪れるようになった。毎度のことながら、下男の格好で、である。

ライナルトもその内に、ディルクがここの手伝いに来た場合は自分のところへ寄せせと言いつけたくらいである。

離宮を監督する女官は、ライナルトの命令に驚きながらも喜んで頷いた。身分のこともあってなかなか友人もできない彼が誰かを気にしていることは良いことのように思えたのだ。ディルクは年頃もライナルトと近しく見えだし、年齢の割に落ち着いた雰囲気があったので、それも良かったのだろう。

ただ、そのように格好だけそれらしくしてみても、滲み出る気品のようなものが彼にはあった。それでも、人目を欺ける振る舞いがディルクにはできていたのだ。

しかし、下男の格好をしてみても、見慣れない人間ならば警戒されるだろうし、どうやってライナルトまで辿りついたのか、それがライナルトには疑問の一つだった。

「以前から時折この格好で王宮の下働きをしていたんだ。時々ここにも手伝いに来ていたのだが、さすがにお前の近くにはなかなかいけなかった。この前は、『一度でいいから殿下のご尊顔を近くで拝見してみたい』としおらしくお願いして任せてもらったんだ」

ライナルトの疑問に対して、ディルクはけろりとして答えたが、ライナルトは更に良く分からなくなった。

「…何故下働きなど自分から進んで？ 大体、いくらもともと王宮に住んでいるとは言っても、勤めるのであればそれなりの手続きがあるだろう。変装しただけでどうなるものでもない。一体どうやってめぐりこんだ？」

「働き始めるのは簡単だった。陛下に許可を頂いたんだ。そうしようと思っただのは、同じような毎日から脱却したいと思っただのと…、色々なことが知りたかったから、かな」

「父上に？」

ライナルトは訝しく呟いた。皇帝は軽々しく秩序を乱すことを好むような人間ではない。いくら息子が請うてきたからと言って、相当の理由でなければ許可など出さなかっただろう。デイルクは身分違いの行動の理由を簡単に告げたが、もつと他にも理由があるのだろう。あるはずだとライナルトは思った。

「それで、知りたかったことというのは、知れたのか」

「そうだな…、少しは。だが、知る度に俺はこんな閉じられた王宮ではなく、もつと外の世界を見てみたいと、そう思うんだ」
外の世界。

ライナルトはこれまで、そこに大きな興味を抱いたことはなかった。外に広がる世界に関しての知識はもちろんなあったけれども、基本的に彼は王宮から出ることがなかったし、自らの未来への期待も失いつつあったライナルトにとってみれば、それはその他多くのどうでもいいことの中に埋没していたのだ。

だが、デイルクの憧れるような言葉に、ライナルトも外の世界を見てみたいかと少し、思った。

母親が悲嘆にくれる毎日を過ごすこの小さな離宮から出ていくことができたなら、自分も違った人生を送れるかもしれない。王子として、国や政治の道具になるだけではなく、もつと他のことができるのかもしれない。

けれど、王族に生まれた以上、その義務を放棄することはできないのだろう…。

そうしてだんだんと、ライナルトはデイルクに打ち解けるようになっていった。

二人の距離を縮めた最初のきっかけは二人で演奏をしてみたというデイルクの思いだったが、会う度に演奏をしていたわけではない。同時期に同じような本を読んだことが分かればそれに関して議論を深めたりして共に過ごす時間を終えることもあったし、他愛もない話であつと言つ間に時間が過ぎてしまふことも多かつた。稽古で剣を交えることも少なからずあつた。

その内、デイルクに引つ張られてライナルトも秘密通路へ冒険に行つたり、部屋から出て会うことも増えてきた。

この時からライナルトはデイルクの行動力に舌を巻き、そして憧れていたものである。

ほとんどデイルクのことを知らなかつた頃のライナルトは、むしろデイルクのことを嫌つていたというのに。

不思議なものだと思ひながら、その憧憬の念はライナルトにとって不快なものではなかつた。

そして、ちょうど二人が親交を深めて一年が経つた夏のことだつた。「ライナルト、明日、城下町で祭りがあるんだ。お前が良ければ……だが、ここを抜け出して、二人で出掛けてみないか」

それは、供も連れずに、こっそりと、という意味だつた。王族が大つぴらに祭りに参加するということになれば、護衛やら何やらの手配が必要となるし、自由に動くこともままならない。それではつまらないから、身分を隠して楽しもうというのがデイルクの思いだ。

デイルクから今までに散々街の暮らしなどに関しても聞いていて、ライナルトも一度はちゃんと見てみたいと思つていた。王族としての義務とは関係なく、ただ純粹に、市井の人々の中に入ってみたいかつた。

だが、ライナルトはほんのわずか、抵抗を覚える。

フォン・シーレという姓を持つ彼にとつて、デイルクの誘いに乗ることはあまりにも軽はずみなことだ。

それは本来、デイルクも条件は同じなのだが、どうして彼はこうも

ライナルトの目の前にある壁を軽々と越えていこうとするのだろうか。

「あまり遅くならなければ、問題ないだろう。俺も一人で行くばかりではつまらないからな。お前が来てくれればいつもより楽しめるんじゃないかと思っただ。どうだ？」

魅力的なディルクの言葉に心を揺らしていたライナルトは、ディルクが付け加えた言葉にそうして頷いてしまっていた。

「…全く、お前は唆すのが上手い」

その日の午後、ライナルトは王宮の隣に広がる湖の辺りを散策すると言って馬に乗り離宮を出た。

供として、既に離宮の人々から認められていたディルク 使用人の姿をしている際はその名前をもじって「ルーク」と名乗っていたが を連れて。

使用人としては下っ端の彼のみを連れていくことには反対する人間もいたが、過去にも何度かライナルトは同様のことをしていたので比較的すんなりと出かけることができた。

王宮から出て、二人はこつそりと笑みを交わし合ったものである。しばらくして二人はディルクの下町での知り合いのところを馬を預けて、祭りの会場へ足を踏み入れた。その際に、二人とも着替えは済ませて、一見したところでは貴族には見えない、簡素な服装となっている。

その扮装だけでもライナルトにとっては新鮮だったが、街の雑踏や並ぶ店々、賑わう街の活気ある様子は、公式行事等の時に経験したことのあるものとまた異なっていて、それだけでライナルトはきよるきよるとしてしまった。

ディルクは度々こつして変装して下町に出ているらしく、ライナルトもその話を聞いてはいたが、やはり話に聞くのと実際に見るのでは違う。

ディルクは不慣れそうなライナルトを人込みから上手く庇いながら、並ぶ露店を指さして色々と説明してやり、ソーセージやじゃがバターが売られているのを見て持ち金でそれを買ってやった。

「その金は…？」

さすがに王子とは言え、大金が与えられているということではなく

国家予算上は割り当てられている分があるが、まだ十二、三の少年にそれを委ねることはされていない、ライナルトはそもそも金を贅沢に使うような生活をしていなかったため、ディルクが当然のように金を使っているのに何となく違和感があった。

「下働きの給金と、それに下町に出た時に稼いだものだ。貯めるばかりじゃなく、こういう時に使わないとな。経済が潤わない」

下働きと言っても多少は趣味のようなものかと思っていたライナルトは、ディルクの言葉に若干衝撃を受けた。だが、働いているのなら、給料をもらうのは当然のことなのだろう。

「下町に出た時に稼いだというのは…」

「ああ、それは話していなかったか。時折道端でヴァイオリンを演奏したり、売りを手伝ったりしていたんだ」

ディルクは平然とそう答えたが、王宮での下働きのことを知っていたライナルトも、外でもディルクがそんなことをしていたと知って、また驚かされずにはいられなかった。

「…お前は本当に…」

「どうした？」

「いや…」

どこからそんな行動力が湧きでてくるのだろうか。

いつでもライナルトは疑問に思っていた。

眩しすぎる、存在だ。

それなのに、彼はライナルトと同じような孤独を持っているという…。

この時のライナルトは、それを全てディルクから打ち明けられたわけではなかったが、おおよそのところを察してはいた。

「良いのか、私がもらってしまつて」

熱々のソーセージを受け取りながらライナルトが問うと、ディルクは笑つた。

「ついてきてもらつた礼だよ。遠慮なく食べてくれ」

「…それでは、遠慮なく」

ライナルトが気にしないようにというディルクの気遣いを無用にせず、ライナルトはディルクの手からそれを受け取つて、早速齧つてみた。

「…うまい、な…」

これもまた、驚きだつた。

それからあつと言う間にライナルトが食べ終えてしまつたので、ディルクは少しおかしそうに笑つたのだった。

途中で酔つぱらつた大人に絡まれてそれを撃退するというようなハプニングにも遭遇したが、そういったこともありつつ、楽しい時間はあつと言つ間だつた。

「しまつたな…、少し遅くなつたか…」

急いで馬を走らせて帰りながら、ディルクはそう呟く。

「仕方がない。大事になつていたとしても謝るしかないな。…それよりも、今日はありがとう。お前がいなければ、こんな経験はできなかつただろう」

「礼を言われることじゃない。というより、俺の方が礼を言う立場だな。やはりなかなか、こうしてつるめるやつはお前以外にいないし、楽しかつた。それに、俺はどちらかと言つと…、お前にとって悪い虫、だろつからな」

「そうかな」

確かにこれまでの慣習を破るという点において、ディルクの右に出る者はいないだろう。

しかし、ディルクは閉じこもるばかりだつたライナルトを外へ連れ

出してくれた。

母に顧みられることがなくとも、この広い世界、他の希望の可能性もあることを、ディルクは教えてくれているように、ライナルトは感じていた。

誰もがいつかは自分を裏切ると思っていた。自分を産んだ母親がそうしたのだ。他の誰が裏切らないと言えるだろうか、そう思っていた。信じてしまえば、裏切られて傷つく。それが怖かった。けれど、同じ孤独を見せてくれたディルクなら。

同じ傷を持っているディルクなら。

おそらく、ライナルトに同じ傷をつけることはないだろう。そしてもし彼に裏切られるようなことがあつたとしても。傷ついたとしても。

世界は広く、きつとまた信じられる人間が見つかり、その傷も癒えるだろう。

その新しい可能性を、ライナルトは信じてもいいと思いつめていた。

「……まずいな、少々騒ぎになっているようだ」

「……普段優等生ぶっていたのがここに来て災いしたか……」

王宮に戻ってきた二人は、若干宮中が騒がしくなっているのに気付いて、揃って顔を顰めた。

「俺だつたら放蕩王子で一晩程度の留守なら誤魔化せるんだがな」
ディルクは言ったが、実のところ彼には信頼できる侍従がいて、いつも上手いこと誤魔化してくれているのだ。

一方のライナルトはいまだにディルク以外の人間はそうそう信用できず、誰にもディルクとのことは打ち明けていなかったし、また本人が言った通り今までに周りに心配をかけたことなどほとんど皆無だったのだ。そんな彼の帰りが遅いことを皆心配しているのだろう。しかも、連れて出た供がディルク一人だったというのも、それに拍車をかけたのかもしれない。

潔く遅れたことを謝らうと、ライナルトが指揮をとっている者のも

とへ足早に向かっていくと、すぐに気付いた女官や下男が近づいてきた。

ざわめきの中から、あわや捜索隊が出されるところだったと分かって、ライナルトはひやりとする。

「ライナルト様、ご無事でしたか！」

「ああ、心配をかけてすまない。少しはしゃぎすぎて遅くなっちゃった」

「いいえそんな…、ああでも、怪我も何もなかったようで安心いたしました。本当に、良うございました」

女官たちに心配され安心されるライナルトがいる一方で、下男に再び扮装したディルクはきつい叱責を受けていた。

「ルーク、お前がついていながら、どういうことだ!?!」

「申し訳ございません」

言い訳もせず、ディルクは深く謝る。

「やはりお前ひとりに任せたのがまちがいだったな。連絡もせず」

叱責の言葉はその後も長く続くはずだったのだろうが、それは主であるライナルトに止められた。

「ディ…、いや、ルークは悪くない。それ以上は言わないでやってくれ。私かわがままを言ったのを、彼が聞いてくれたのだ」

一年前のライナルトであれば、そんな風に誰かを弁護することもなかっただろう。

その変化を与えたのがこの下男ということとは離宮で働く者にとっては明白であった。

「しかし、殿下……」
その時だ。

「殿下、ご無事に戻られたようで何よりでございました」
低い声はその場にいた者の耳に響く。

静かにライナルトたちのもとへ歩み寄ってくるのは、初老で瘦身の侍従長だった。

ライナルトの侍従は口を噤んで、一步引く。

「陛下と第二王妃殿下もご心配なさっておいでです。お疲れとは存じますが、離宮へお戻りになられる前に、足をお運び頂けますか」
第二王妃の名に、ライナルトはびっくりと眉を動かしかけたが、神妙に分かったと頷いた。

「皆には心配と迷惑をかけてすまないことをした。通常の持ち場へ戻ってください」

ライナルトのその言葉の後、侍従長も頷いてみせたので、その場にいた使用人は速やかに散らばっていく。

その場に残ったのは、侍従長とライナルト、そしてディルクの三人だ。

「……ルーク、お前も付いてくるように」
「はい」

ディルクはかしこまって頷いた。

それは侍従長とただの下男にはふさわしいやりとりではあったが、ライナルトにはぴんときた。

侍従長はやはり、知っているのだな。ルーク＝ディルクである
と…。

侍従長を先導に、ライナルト、ディルクの順に続いて、三人は皇帝と第二王妃が待つという部屋へ足を運ぶ。

皇帝アウグスト・フォン・シーレは、ゆったりとした姿勢で、滑らかな光沢の見るからに豪華なソファに腰を下ろして、彼らを待っていた。

その横に、ひっそりと第二王妃は控えている。彼女は美しい女性だったが、表情は抜け落ちたようで、まるで生気を感じられない様子だった。しかも、余りにも堂々とした、威圧感のある皇帝が隣にいるので、余計にその存在感は淡いものを感じる。

ライナルトとディルクは、礼儀にかなうよう、その前で膝を折った。
「お前にしては随分と珍しい真似をしたな、ライナルト」

深みのある、良く通る低い声だ。皇帝は礼儀を重んじる方であった

が、無駄な言葉を費やして時間を浪費することの方が罪悪だと考えているらしい。 magari なりにも家族間でのことということもあるのだろう、前置きもなくそう告げる。

「…は。お騒がせいたしましたこと、心からお詫び申し上げます」「何事もなかったのなら良い。だが、またこのようなことがないよう自らの立場をわきまえよ」

「…はい」

ライナルトは神妙に頷いた。

もつと色々と尋ねられるかと思っていたのだが、深く突っ込まれないことにほんのわずか違和感を覚える。

「お前からは、何か言うことはないか」

そして、皇帝は無造作に第二王妃に話を振った。

ライナルトの背中が緊張に強張る。

しかし第二王妃は小さく口を開いて、ただこう言った。

「……何もございません、陛下」

その言葉にはあまりにも力がなく、ライナルトへの無関心がそのまま表れたようだった。

諦めの吐息を、音にしないようにライナルトは吐き出す。

やはり、この人は……。

既に諦めてしまっていたので、さほど落胆も感じなかった。

本当に、息子であるライナルトが消えようがどうなるうが、彼女は取り乱しはしないのだろうかと思う。

「何も無い、ということはないだろう」

ライナルトが小さく肩を落としたその後ろで声がして、はっとライナルトは視線をそちらに向けた。

デイルクが立ち上がり、第二王妃を強く見据えているのが視界に入る。

「あなたは自分の腹を痛めて産んだライナルトのことを、少しの心配もしなかったというのか？ 母親ならば…、もつと何かかけられる言葉があるだろう！」

デイルクは、真っ直ぐに、怒りの瞳を向けていた。その拳は、強く強く握られている。

デイルクの怒りを込めた視線に、第二王妃は息を呑み、恐れるように目を伏せた。

「…そなた、無礼でしょう。…使用人風情が、分かったような口を……」

「使用人でなければいいのか」

デイルクは荒々しく鬘をむしり取るようにした。

はっと、第二王妃は目を見開いた。

「そなた、三の王子……？」

「そんなに自分が可哀相なのが心地いいのか」

デイルクは強く切り込んだ。

「自分の不幸だけではなく、あなたはもっとちゃんと周りを見るべきだ！」

「私は」

第二王妃はその剣幕に蒼白になっていた。

その頃合いを見計らって、アウグスト・フォン・シーレは口を挟む。

「侍従長、第二王妃は大分疲れている。休ませてやれ」

「は……」

侍従長は頷き、そっと第二王妃をその場から連れ出して、後を女官に託した。

「デイルク……」

第二王妃が去るまで、茫然と成り行きを見守るしかなかったライナルトは、無意識に立ち上がり、そっとデイルクの腕に触れる。

「…すまなかった、つい……」

第二王妃がいなくなった部屋で、デイルクは先ほどまでの怒りを消し去り、頂垂れた。

「……実を言うと、俺は少しだけ期待していたんだ。彼女が少しはうるたえでもしてくれたらと……」

夏の祭りにライナルトを誘ったのは、共に楽しみたいと思ったから

だった。

けれど、それだけではなく、ディルクは一度だけ、試してみたいと思ったのだ。

第二王妃を。ライナルトの母を。息子に愛情がないと言われる彼女の本心を、確かめたいと。

この日、ディルクは単純に楽しかったということもあるが、帰りの時間を「わざと」遅らせたのは、そのことで、彼女が少しでもライナルトのことを心配してくれるのではないか…、そう思ったからだった。

ディルクはこの賭けが成功することを望んでいた。

この賭けが成功すれば、ライナルトは少しでも報われる。ディルク自身も…、少しでも救われただろう。

けれど。

「だが、駄目だったな…。結局、またお前を傷つけただけで…」

今度は、先ほどとは違う、自分への怒りで、ディルクは拳を固めた。「すまなかった」

「いや、お前が謝る理由はない」

しかしライナルトは真っ直ぐにディルクを見つめて、きっぱりとそう言った。

「お前以外に…、あんな風に私のために怒ってくれた人間はいない。私には、それだけで十分だ」

ディルクはその言葉に顔を上げてライナルトを見返した。その瞳に、嘘はなく。

「賭けには負けたようだな、ディルク」

はっ、とライナルトは父親の存在を忘却していたことに気付いて慌てた。

だが、ディルクは平静な口調に戻って、皇帝の言葉に応える。

「…残念ながらそのようです、陛下」

「だが、その代わりに、なかなか得られぬものを得られたらしい」

「……ええ」

ディルクは深く頷き、一瞬ライナルトに視線をやった。

「これでお前への借りは無しだ、ディルク。今後はこのような茶番は許さぬ」

「分かっています。……ですが、陛下も多少は、鬱憤を晴らせたでしょう?」

ディルクのその言葉に、皇帝は笑った。

ライナルトは、この時は二人の会話の全てを理解したわけではなく、親子というよりは共犯関係にでもあるような二人の雰囲気を感じていた。

「…これからも、またお前を誘ってもいいか?」

一週間の謹慎を命じられてから退出を許された二人は、離宮へ戻りながら言葉を交わした。

「もちろん。…というよりも、今日の外出で私もますます興味がきたてられたよ。お前がいてくれれば…、心強いし、楽しい」

「それは、何よりだ」

ライナルトの言葉に、ディルクは輝かしく笑った。

私は、もうただの道具ではない。

いてもいなくても同じというような存在でも、かわりがきくような存在でもない。

ディルクの笑顔に、ライナルトはそう思うことができた。

guardian 12 (後書き)

ライナルトとディルクの過去編、これにて一旦完結です。

こんなに大人びた十二歳で良かったのか…ですがまあこんな感じですよ。

初皇帝登場の回でもありましたが、いかがでしたでしょうか…。

次回からは現在に戻ります！。

テアは、ライナルトの話を興味深く聞いていた。

ライナルトは普段そこまで饒舌ではない方だが、話術は巧みで、テアは引きこまれるようにその話に耳を傾けていた。

ライナルトの話に登場するディルクはライナルトの認識を反映してかとても活き活きとしていて、話を聞くテアの脳裏に描かれる幼いディルクも眩い笑顔で活発に動く。

テアに対するライナルトの話は、王宮の複雑な人間関係にはあまり触れない、主にディルクと重ねた冒険話が主だったので、そのせいもあるのかもしれないが。

「…僭越かもしれませんが、その頃のあの方に、私もお会いしてみたかったです」

テアは笑みを零しながらそう告げる。

「あいつも、そう言うんじゃないかな」

「え？」

ディルクは、テアのことであれば何でも知りたいたいと思っているだろう。

ライナルトはそれを分かっていた。

「だが、もしかしたらすれ違ってくるくらいは、していたかもしれないぞ。

テア、王都へ行ったことは？」

「数度ありますが……」

「あいつは頻繁に王宮を抜け出していたからな。気付かずともそういうこともあったかもしれない」

「そう言われると、逆に何だか悔しくなっちゃいますね」

テアは苦笑する。

それにライナルトは軽く笑って、もうあれから八年も経つのか、と

思った。

あの出会いからこれまで、様々なことがあったけれども、二人は支え合ってここまで来た。

これからもライナルトはディルクの右腕として在るだろう。

ディルクがライナルトの存在を明るく照らしてくれたように。

ディルクがどんな困難の道を歩むとしても、その傍らで力を貸せるように。

そんな風に、ライナルトとテアが談笑していた時だった。

大きな鐘の音が響いて時刻を知らせる。

二人が顔を上げて窓の外を見やると、外は夕闇に包まれていた。

「…長居してしまいましたね。そろそろ閉館ですか」

「昔話が過ぎたな。少しの邪魔のつもりが、すっかりお邪魔虫になつてしまった」

「いいえ、そんな。とても楽しい時間でした。こうした機会は…なかなかないでしょうし」

あいつも自分の常識外れなやんちゃぶりは、特にテアには知られたくないだろうしな。

ライナルトはそう思い少々人の悪い顔で笑う。

「寮に戻るか？ そろそろディルクたちも帰ってくる頃だろうし、食事時でもある」

「そうですね」

二人は立ち上がり、図書館を出ようと足を向けた。

「今日は本当に、色々とありがとうございました」

「礼を言われることじゃない。だが…、また機会があれば、話せるといいな」

「そうですね、楽しみにしています」

テアは本心から言つて微笑む。

ライナルトはその繊細そうな横顔を見て、ディルクとテア双方の抱える問題が早く片付いてしまえばいいのだがと思つた。

テアは、ディルクを過度に美化もせず、幼い頃の常識外れな行動を

聞いても変な理由をつけたり否定敬遠することなく、ただあるがままのディルクを受け止めてくれている…。そうライナルトは感じた。ディルクの想いが前提としてあるのはもちろんだが、テアがディルクの相手であることは理想的だとライナルトは考える。テアの本心をはっきりと聞いたわけではないが、彼女のディルクへの想いが人並ならぬことは確かだ。それならば、ディルクの想いを受け止め、そして彼と結ばれて欲しい、とライナルトは思う。

しかし、ままならないものだな…。

ライナルトは内心嘆息しながら、先ほどテアに尋ねようかどうしようかと思ったことを問うことは止めようと思った。王都に何度か足を運んだことがあると言ったテア。ディルクが出会った運命の音は、やはり彼女のものなのかもしれない。

それをライナルトは今確認することができた。だが、その答えを聞くべきは彼ではない。いつかディルクからその話を聞ける時が来るだろう。それを待つて、ライナルトはその問いを封じた。

ローゼとディルクは、薄暗い夕空の下校門をくぐった。

特に立ち寄るところもないのでそのまま、二人は寮へと足を向ける。寮の玄関から冷たい風の遮断される室内へと足を踏み入れて、二人はすぐに慣れ親しんだ二つの顔を見つけた。

「テア、ライナルト」

ローゼが声をかけると、声を交わしていた二人は同時に振り向き、帰ってきたローゼとディルクに気付く。

「お帰りなさい」

とテアは柔らかに微笑んで、それにローゼとディルクは何となくほ

つとさせられ、顔を見合わせた。

二人には、テアのことと同じように考えていたことがあったのだ。それは、つい先ほど、帰り道で遭遇した出来事に端を発している。

学院までほど近い石畳の道を、ローゼとデイルクは歩いていた。

太陽が隠れようとする時刻、空気はずっと冷え込んで、早く暖かな場所へとローゼは足を速め、デイルクはそんなローゼに歩調を合わせていた。

その時、そんな二人の前に立ちふさがる一つの影があったのである。「や、全く彫像みたいに綺麗な男女が並んで歩いていると思つたら、片やデイルク元殿下ではないですか。お久しぶりです」

馴れ馴れしい口調で話しかけてきたのは、おそらく三十代くらいの、ひよろりとした瘦身の男性だった。茶の混じるくすんだ金髪は癖のある巻き毛で、小豆色の瞳はどことなく印象的な光を宿している。

服装はいたってシンプルなYシャツにチエックのズボンで、それだけ見ればどこにでもいそうな男性だったが、その手にある使い古されたようなペンとノートが特徴的といえば特徴的だ。

見ず知らずの人間に愛想よく笑いかけられてローゼは警戒し困惑したが、相手が「デイルク元殿下」と呼びかけただけあって、どうやらデイルクは相手のことを知っていたらしい。

「元殿下と言うのは止めてくれ、デИБォルト。それに、お前とはついこの間会ったばかりだろう」

「そうでしたね」

あくびせずに相手は笑う。憎めない、愛嬌のある笑顔だった。

「それにしても、あなたが女性と二人連れというのは珍しいですね。あの例のパートナー殿かと思って声をかけてみたのですが、フォーン・ブランシュの跡取り様だったとは！ 申し遅れましたが、オレはロルフ・デИБォルトと申します。『クンストの剣』にお目にかかれるとは光栄です。以後、お見知りおきを」

「はあ…」

捲し立てるように自己紹介をされて、ローゼは頷くしかなかった。しかし、ローゼの顔だけ見て彼女を「クンストの剣」だとすぐに分かるとは、この男は一体何ものなのだろうか、訝しげな視線を向けてしまう。

ディルクを問うように見上げると、彼はすぐに答えをくれた。

「ディボルトはヴァイス・フェーダーの記者だ」

「ああ…」

ローゼは納得して頷いた。

ヴァイス・フェーダーというのは、民間の新聞社の名前であり、クンストにおける全国紙の名でもある。

見聞の広い記者ならば、ローゼのことを知っていてもおかしくはなかった。またその手にあるペンとノートの理由も分かりやすい。

「ディルク…様、この呼び方もあんまり嬉しくないって？ ではディルク殿で妥協していただきましょうか　ディルク殿とは、ディルク殿下と呼ばせて頂いていた頃から縁がありました。先日シュール音楽学院の学院祭の様子もオレが書いたんですよ」

「ああ…、そういえば署名に R・Diebold、とありましたね」

「これは嬉しい！ 『クンスト』の剣にあの駄文を読んで頂けたとは！」

大げさに喜ばれて、ローゼはたじたじとなった。

ディルクは嘆息まじりに囁く。

「こいつは悪い奴ではないんだが…、こういう奴なんだ」

「はあ…」

ローゼは胡乱な眼差しでロルフ・ディボルトを見やった。

相手はローゼの不審そうな眼差しに気付いているのかいないのか、にこにここと微笑んでいる。

「それで、お前はこんなところで何をしていたんだ？」

あまりろくなことではないだろう　と言いたそうなディルクの問いただった。

「正直なところを白状しますと、あなたに首でも絞められそうな気がするんですがね」

それにロルフは少し躊躇うような、もったいぶるような様子を見せたが、続ける。

「実を言うと、あなたのパートナーに少しでもお話が聞けないかと思つて張つてたんですよ」

ディルクはそうと予想していたのか泰然と構えたままだったが、その台詞にローゼははつと顔を強張らせて、ロルフを睨みつけていた。「ローゼ嬢は、ディルク殿のパートナーと懇意にしているのでしたね」

ロルフはたじろぎもせず笑つて、ローゼは決まりが悪くなる。もともと彼女はポーカーフエイスが得意ではないのだ。

だがそれがなくとも彼はそれなりに既にテアのことを調べていたよつで、その口調がそれを物語っている。

「…彼女は、取材は遠慮したいと希望した。余計な詮索をすると身を滅ぼすぞ?」

ディルクは普段と同じ調子で言ったが、それには威圧的な何かがあった。

「怖いですね…あなたにそう言われると。それだとやっぱり、テア・ベールンス嬢に深入りするなつて上に圧力をかけたのは元殿下ですか」

肩を竦めながらも彼はのんびりと尋ね、ディルクはぴくりと眉を動かした。今の「元殿下」、には先ほどまでとは違う意味が含まれていた。

「…いつも言うようだが、今の俺はただの一般人だ。彼女のことに關して、そういうことがあったのか?」

「ただの一般人にしては雰囲気がありすぎると思いますが…、まあ、そうです。だからこそ余計に好奇心がそられてしまいましたね。」

若干十七にして、シューレにこれまで音楽界に影も形もなかった少女が特別入学を果たし、あのエンジユ・サイガの弟子になり、今度

はあなたのパートナーときた。隠すのも難しいくらいの存在じゃないですか。それなのに彼女には謎がたくさんある。一体彼女は『誰』なのか、誰がどうして彼女を隠しておこうとするのか、誰だっけ気になるでしょう?」

同意を求められたが、ディルクもローゼもそれに同意するわけにはいかなかった。例えロルフと同じようなことを疑問に思っていたとしても。

「ローゼ嬢は何かご存じではないですか。それとも、ご存じどころか全てを知っていてテア・ベーレンス嬢のことを秘匿しようとしているのはあなたご自身、とか?」

「私は何も知りません」

白を切るつもり、というよりも、正直にローゼは答えた。

もともとそんなに嘘は上手くないし、また好きでもないローゼだ。

「新聞社にそういう圧力がかかっていたことも今初めて聞きました」

「そうでしたか…。それでは、どういう経緯でテア・ベーレンス嬢と懇意になったのか、お聞きしても?」

「あなたはそれを聞いて、記事にして載せるつもりなのですか?」

誰もそんなに読みたいなんて思っていないと思いますけれど」

ローゼの切り返しに、ロルフは楽しそうに笑った。

「そこを読みたくなる記事にするのがオレたちの仕事ですよ、ローゼ嬢。けど今のところ記事にしようと思ってもストツプがかかるでしょうし、教えて欲しいと言ったのは単なるオレの好奇心です。とにかくオレは、色んなことが知りたくてたまらないんですよ。それこそ病気みたいだね。何か箱に入ってるけど、中身は開けてみないと分からない。そういうものがあると、開けて悪いことが起こる可能性があっても絶対に開けてしまふ。そういう人間なもので」

「…危険、ですね」

「よく言われます」

呑気に笑うロルフを、ローゼは信用ならなかった。

ディルクは悪い奴ではないと言うけれど、テアに余計な手出しをし

てくるような相手はまず気に食わない。

これ以上根掘り葉掘り聞かれてものらりくらりとかわしてやるとローゼは意気込んだが、相手は飄々として夕空を見上げた。

「……と、そろそろ戻らないとどやされそうなので、退散することにします。ディルク殿、テア・ベールンス嬢に関しては、くれぐれもご用心を」

「ああ、分かっている。ありがとう。……だが、お前も近付かないでくれるとありがたいがな」

「難しいことを言いますね。オレの性格はよく知っているでしょうに」

「知っているからこそ言おう。俺は敵と認めた相手に容赦はしない」
「…肝に銘じておきます」

最後にわずか苦笑を見せて、ロルフは二人に背を向けると雑踏にまぎれていった。

ローゼは何となくほっと息を吐いて、それから唇を尖らせてディルクを見上げる。

「どうして、彼にお礼なんて言ったんです？」

「わざわざ忠告に来てくれたからさ。あいつのように、テアのことをこそこそと嗅ぎまわっている連中がいる、とな」

「それは……」

答えを聞いても、ローゼは腑に落ちない顔をする。

「けれど、彼こそテアのことを色々暴いてしまおうとしている輩の一人でしょう。どうしてそんなに落ち着いていられるんです？」

「あいつは中身の知れない箱を開けずにはいられない人間だが、開ける前には出来得る限り中身のことを調べるし、それで危険だと分かれば他人を巻き込まないようにする配慮を持っているからな。何よりも、箱の中身が爆弾だった場合、あいつは自分自身でそれを解体して誰にも知られずに処分する賢明さも持っている」

「それは……」

ローゼはその比喻に眉を顰めた。

「彼は、迂闊に情報を漏らすような人間ではない、と？」

「そうだ」

再び歩き出しながら、ディルクは頷いた。

「それでも、彼自身が知ろうと動くことは変わらないじゃないですか。私はああいう輩がテアに対して無神経なことまですかずか聞いてきたり探ろうとしたりするのが気に食わないんですよ」

声を高くしたローゼに、ディルクはわずかな苦笑を見せる。

「気持ちは分かるが、ああいう人間を上手く使うことも必要だと俺は思う。警戒して全てを寄せ付けないというだけでは、敵の弱みさえ分からないだろう？」

「それは…確かに…」

諭されるように言われて、ローゼは渋々納得するように頷いた。

「何より、少なくとも、テアが学院の中にいればディボルトも…、他の記者連中も手が出せない。外出する時に俺たちが目を光らせておけば問題はないだろう」

「まあ、そんなんですけどね。危うい芽はついつい先に摘んじやいたくなるんです」

「お前にとつては初対面の相手だからな。神経を尖らせても仕方がない。俺も、一応信用はしているが、そこまであいつに信頼を置いているわけではないからな。だが、ヴァイス・フェーダーは他の低俗な新聞雑誌よりは余程ましだ。その記者だと思えば、少しは気も和らがないか？」

「そうですね…。学院祭の記事も…至極まともなものでしたし…
…それに、確かに彼の警告は貴重でした。記者などにも気をつけていなければならなかったんでしょけど、実際にはあまり気にしていませんでしたから」

ようやく気持ちを切り替えてきて、ローゼは言った。

しかし、ローゼは記者連中のことをあまり気にしていなかったようだが、ディルクの方は生い立ちもあって、彼らの存在には敏感だった。学院祭に関しても、ディルクのパートナーであるテアはもつと

取りあげられ騒がれるかもしれないと危惧していたのである。例えば取材を断つても、低俗なゴシップ誌はあることないこと書き連ねるのが常であるし、そういうことがあるならばテアをフォローできるようにしておかなければと思っていたのだ。実際には、ディルクのことは何やかやと書かれていても、テアに関してはほとんどこの手で触れられておらず、ディルクは拍子抜けしていた。誰かが裏で手を回したのかと、ロルフに教えられる前から彼は疑惑を持っていたのだが、どうやらその通りだったらしい。

「ですけど……、テアのことには深入りするなと圧力をかけたのは、一体どこの誰なんでしょうね」

ディルクの思考を読み取ったようにローゼは呟き、ディルクは隣で歩くローゼに視線を向けた。

「事件のことを公にしたくない学院が伝手でその辺の貴族にでも頼んだんでしょうか」

「そう……だな」

二人はしばらく、それに関してそれぞれの考えを巡らせた。

事件のことを公にしたくないという学院の立場は分かるが、それがテア自身に深入りするなということには直接は繋がらない。事件のことだけ隠しておけば済むのだから。

やはり、テアの背景には容易に触れられない何かがあるらしい、とディルクは確信を持って思った。

そして、それを隠そうと働きかけた誰かは、相当の権力の持ち主だ。そうでなければ、ここまで徹底してテアのことを書かれないということは、まずなかっただろう。

どこのゴシップ誌でもディルクはテアの名前すら見かけなかった。シューレ音楽学院の学院祭のコンサートで、あそこまでの演奏をした彼女が、エンジユの弟子だとかディルクのパートナーという形ですら紹介されなかったのはやはり腑に落ちない。

ローゼは知らずとも、モーリッツ卿が動いたということは考えられるな。他の誰かとすれば、明らかになっていないテアの後見人

か…。後見人イコールモーリッツ卿なら、確信が深まるどころだが、違うという話だから…。俺の全く知らない『誰か』という可能性も低くはないわけだし…。

ここでも謎は深まるばかりかとディルクは嘆息したいような気持ちになった。

テアのことを知りたい、と思う。何よりも、彼女を守るために。

しかしそれもディルクのエゴでしかない。

もっと距離が縮まれば、テアはディルクに打ち明けてくれるのだろうか。

けれど、距離が縮まるということは、テアをディルクの運命に、危険に巻き込むということをも意味して…。

ジレンマを覚えるディルクの一方で、ローゼも頭を悩ませていた。

もしかしたら父が動いたのかもしれない。それとも、テアの後見人だろうか、とディルクと同じようなことを考える。しかし、テアの後見人はロベルト・ベーレンスの楽団の一団員だという。一楽団員がそこまでの力を持っているということはまずないだろう。それならば、やはり父であるモーリッツ・フォン・ブランシュカ。しかし、彼がそこまで手を回せるかというと、娘であるローゼは首を傾げたくなるのだ。別にモーリッツの力量を低く見ているわけではないのだが、モーリッツは一領主として政治も行うがどちらかというと武人であり、ローゼに近いところがあるので、そこまで新聞やら雑誌やらのメディアに対して強いかというと少々疑問だった。

けれど、それならばもしかして『彼ら』が…？ けれどそんなことがあるのでしょうか…。いえ、もしあったとしたなら、一体何がどうなって…。

分らない。多少なりとも事情を理解しているローゼだからこそ、中途半端な把握のために余計に事態が分からなかった。

「……まあ、でも、ともかく」

嘆息しながらも、ローゼは口を開いた。

「誰が新聞社などに圧力をかけたのか分かりませんが、当面は安心

できると言えば安心できるというわけですよね」

「そうだな…。テアが直接取材を受けずとも、生徒たちが余計な噂を彼らに吹きこむ可能性などもあるが、何らかの圧力が本当に存在しているなら、しばらくテアのことを追究するような記事はこの新聞雑誌にも見られないはずだ。テアがその気にならない限りは」

二人は前向きに事態を考えることで同意する。

「とりあえず、ミスター・デイルトのことはテアには内緒にしておきましょう。余計な心配をかけることはないでしょうから」

誰に言われるまでもなく、テア自身既に警戒をしているだろうし、それがいいだろうとデイルクも頷いていた。

そんなことがあって、ますます早足で帰路を辿ったローゼとデイルクだったのだが、穏やかなテアの様子を見る限り、今日一日特に妙なことはなかったようだ。

お帰り、と告げるテアとライナルトに、ただいま、と返しながらローゼとデイルクは近付き、いつもの四人が顔を揃えることになったのだった。

新キャラ、ロルフ・デiboldt登場の回でした！。

しばらく出番はない…というかあまり出番は多くないと思われる彼ですが、

結構重要な役目を持っていたりします…。

休日の夜。

図書館で一緒になったテアとライナルト、そして共に出かけたローゼとディルクが帰ってきて、寮の玄関で偶然四人揃うことになった後。

当然のように、彼らは部屋に荷物を置くと食堂に集まって共に夕食を囲んでいた。

「そうだ、お前と初めて夏祭りに行った時のことをテアに話している思ったのだが、二十三日、どうせなら早めの時間に出かけて神楽祭のマーケットに顔を出してみるのはどうだ？」

いささかわざとらしく意地悪く、そう口にしたライナルトに、過敏に反応したのはディルクである。

「……なんだって？」

「マーケットに行くのは不満か？」

「そつちじゃない。テアに話したのか？」

無然とした様子でディルクはライナルトに詰め寄る。

それに「すみません」とおろおろとしてみせたのはテア、「珍しく二人揃っていたら思ったならそんな話をしていたんですか。私も聞きたかったです」と言っただけなのはローゼだ。

テアがやはり聞いてはいけなかっただろうかと眉を八の時にしたのに、ディルクは慌てて表情を和らげる。

「いや、お前が謝る必要はない。ただ…、昔は色々…、やんちゃをしたものだから…」

本当にディルクが話してほしくないことならば決してライナルトは口にはしないだろうから、話の内容は無難なものにおさまっていただろうが、それでもテアに色々と聞かれて呆れられるのがディルク

は嫌だったのだ。

ディルクが本気で怒っているわけではなく、照れくさいのを隠そうとしていたらしいので、テアはほっとした。勝手に話を聞いてしまったことにほんのわずか罪悪感を覚えるが、忘れようとは思えない。忘れたくなかった。ライナルトから聞いた、ディルクの少年時代の話を思い返しながらテアは思う。

「今も昔も、お前は人を驚かせることばかりしている。そう変わらないさ」

ライナルトは嘯き、面白がるなどディルクは親友を軽く睨んだ。

「……そう、そうですね」

しかし、ライナルトの言葉を受けて、テアが同意するように頷いたので、ディルクは目を見張った。

確かにディルクは、今も昔も人を驚かせるようなことをやってのける。だがそれは決して悪い意味ではなく、とテアは思ったのだ。た。

テアの同意がディルクにとって不本意なものではないというのは、ディルクにもテアの表情を見れば分かった。そしてテアはなお、続ける。

「それに、昔も今も、ディルクは揺るがない信念……そのようなものを持っているのだなと……、少なくとも私はライナルトの話を聞いてそう感じて……。そういうところも、尊敬せずにはいられないと思いました」

テアは静かに、そして無自覚にディルクに爆弾を落とした。

「……ありがとう」

ディルクは数秒の間、硬直する。

が、何とかテアに不審を与える前に復活した。

しかしテアも何となくそのぎこちなさに気付いて、慌ててディルクに頭を下げる。

「いえ、あの、でも、勝手に色々聞いてしまったことは本当に申し訳ありませんでした」

「いや、いいんだ」

デイルクは苦笑して首を振る。

「どうせライナルトが話し出したんだろう？」

「また機会があれば、という約束もしてある」

テアの落とした爆弾に平静を装うとする親友に同情を覚えながらも、ライナルトは言った。

デイルクはそれにまた若干顔を引きつらせる。

「……テア、昔話をするのは別にいいんだ。だが、こいつは時折面白がってあることないこと吹き込みそうだから、またの機会がある時は俺から直接話させてくれないか」

「いいのですか？」

「ああ」

テアは嬉しそうに微笑んで、昔話をするのに複雑な気持ちのデイルクも何となく喜ばしいような気持ちにさせられる。

このくらいは、刺激してやつてもいいだろう。

ライナルトは親友とそのパートナーをちらりと横目で見つめて思った。

デイルクは自らの危険にテアを巻き込むことを恐れて一定の距離を保とうとしているし、その気持ちはライナルトもよく理解している。またテアの事情も分かっているが、二人が双方を慮りすぎて離れてしまうことは、距離を近付けるよりもマイナスなのではないかと感じられるのだ。テアがデイルクに害をなすのならば、と思っていたライナルトだったが、図書館でテアと一対一で言葉を交わして、やはりデイルクにテアのような存在が必要だと思ったのだった。もちろん、テアがデイルクを守ろうとする限りにおいてはあがあるが。それでも、こういう方法でも、多少なりとも、二人には絆を深めて欲しかった。

こうした一連の流れをローゼは興味深く聞いていて、ライナルトの意を悟り、ほんのわずか苦笑のようなものを彼にだけ分かるように見せる。ライナルトもそれに同じような笑みで返し、ローゼは話を

元に戻した。

「それで、マーケットに行こう、という話でしたよね。私は賛成です。隣町と言ったらそれなりに大きな市が開かれるそうですし…。ロベルトのコンサートは夕方からですから、早めに出発して立ち寄ればちょうどいいと思いますよ」

「俺も否やはない」

「そうですね。良いと思います」

ライナルトの提案に三人とも賛成して、二十三日　ロベルトのコンサートが開催されるその日は早めに寮を出ることになったのだ。た。

そのように　シユール音楽学院では、冬休みを控え、穏やかな日々が続いていた。

冬休み、そして神誕祭を前に、学院祭とはまた違う、待ちきれないようなちよつとした浮ついた雰囲気もあつたが、年が明ければ試験もまた控えていて、それが多少抑制剤になつていらっしゃるらしく、生徒たちが羽目を外し過ぎているということはないようだ。

そんなある日、テアとデイルクは二人揃つて学院長に呼び出しを受け、放課後、学院長室に赴いた。

二人揃つて呼び出されるなど、一体何事だろうかと首を傾げていた二人だったが、入室して勧められるままソファに並んで腰かけると、正面に座つた学院長は早速用件を切り出す。

「学院祭で起きた事件の犯人が分かつた」

その言葉にはつとして、テアとデイルクは表情を改めた。

学院祭で起きた事件とは、言うまでもなく、コンサート直前にテアがコンサートホールの一室に軟禁された事件である。

「それについて、順番に話そう」

学院祭が終わり、学院長はすぐに調査を開始していた。学院の対面

を保つために事件のことは内密にという方針がとられたため、警察等外部に協力を要請することはできなかったが、これまでの人脈等を駆使し、犯人を見つげるために労は厭わなかった。

犯行は共犯で行われ、学外者の実行犯と学内の黒幕がいるということとは、明白。

テアが覚えている実行犯を見つげることができれば自然に黒幕の姿も明らかになるだろうが、テアの証言に当てはまる風体の人物をただ闇雲に探しても時間を無駄にするだけだ。

学院長はまず、テアが閉じ込められた部屋の鍵を比較的持ち出しやすい立場にあった学院祭実行委員とその周囲を中心に調べていくことにした。

「全く、入学試験の時ですらこんなに真剣に生徒の情報を集め眺めたことはない」

と、自嘲気味に学院長は呟いたものである。こんな事件が起きることを許してしまった自分が、そして生徒を疑わねばならない立場になってしまった自分が何とも情けなかったのだ。

…だが、そうして調べていくうちに、ふと気にかかる情報を目にした。

それは、貴族出身の生徒の実家で一人の使用人が解雇されたという内容から見れば変哲もないものであったが。

もしかしたら、という推測は簡単に成り立った。

もしかしたら、テアを閉じ込めた実行犯を、切り捨てたのではないかと。

学院長はその解雇されたという使用人を探させることにした。見当違いでも良かった。推測が間違っただけでも、ひとつ可能性が消えれば正解に辿り着きやすくなる。

もちろん、それと同時に他の実行委員の周囲にテアが言ったような女性がいなかったか、生徒たちの周囲に変わったことはなかったかなど、様々なことに手を尽くした。

そうするうちに、やがてその解雇されたという使用人と接触するこ

とができたのだが、彼女はテアが証言した、そのものだった。そう、学院長の不審は当たっていたのだ。

その使用人こそ、テアを閉じ込めた実行犯だったのである。学院長が自ら赴いて、用件を切り出すと、彼女は青くなりながらも思いの他あつさりと自分の犯したことを白状した。

主人に命令されて、仕方なくテアを閉じ込めたのだと。

しかも主人はテアを閉じ込めてコンサートに参加できないようにするだけではなく、本当はステージから逃げたのではないかと言う疑惑を周囲に植え付け、テアを学院から追い出そうとしていた、と。

どうして、そこまでして。

とディルクは話を聞いていて思わずにはいられない。テアに嫉妬羨望の思いを抱く気持ちは分かる。だが、それならば正々堂々音楽で勝負すればいい、と思うのだ。姑息で陰惨な事件を企むくらいならば、己の血を流すほどに練習を重ねればいい。その方が余程健全で、前向きであるし、何よりも自分のためになる。

「それで、その方に命令を下した主人というのは？」

強く拳を握ったディルクの隣で、当事者のテアはむしろ淡々と学院長に尋ねた。

「三年ピアノ専攻の、ゾフィー・フォン・ハッセという女生徒だ」
テアにとっては知らない名前だった。だが、ディルクは何度か言葉を交わしたことがあり、その姿が脳裏に浮かぶ。

学院長がその使用人を証人として呼び、ゾフィーに話を聞いたところ、自分は何も知らないと彼女は最初、容疑を否定した。解雇にした逆恨みかと元使用人を罵り、誰かが自分をはめようとしているのだとまで言い出した。

だが、学院長はその使用人の証言だけではなく、確固とした証拠もきちんと手に入れていたのである。実行犯だったその元使用人は、全てが終わった後は学院祭実行委員の腕章も、部屋の鍵もきちんと始末するように言いつけられていたが、下手に捨ててしまえば見つかってしまいそうで、怖くてずっとそれを手元に持っていたのだ。

その鍵を見せて、学院長はゾフィーに告げた。

「君が犯人でないというのなら、指紋を取らせてほしい。この鍵には、実行犯である彼女にこれを渡した共犯者の指紋がついているはずだ。この鍵に君の指紋がなければ、君の言うとおり君をはめようとした事実があるということになるだろう……」

ちなみにこの時代、指紋による捜査は警察で取り入れられてはいたが、まだ一般的には常識というほど浸透してはいなかった。そのため、ゾフィーも全く考慮に入れていなかったらしい。指紋を取らせたいという学院長に頷けなかった彼女は、ようやく自分が企んだことだったと肩を落として小さく白状したのだった。彼女はその動機も口にしたが、それはわざわざ説明するまでもないだろう……。

「ひとまずゾフィー・フォン・ハッセには謹慎を命じてある。学院側としては、被害者であるテア、コンサートへの不参加を余儀なくされようとしたディルク、その他事件関係者への謝罪を求めた後、彼女には退学してもらうつもりだ。また実行犯である彼女には、今後ケールに足を踏み入れないことを約束させるだけに止めている。彼女が証拠を手元に持つてくれていたおかげで主犯を確保できたし、何よりも本人が恥ずべきことだったと反省しているようだったから、情状酌量の余地があった。だが、ここで二人の意見を聞いておきたい。……これらの処分が君たちは納得できるか？」

学院長はそう言って真つ直ぐテアとディルクの二人を見つめた。

怒りの感情のまま、それくらいでは足りない　　というの簡単だ、とディルクは学院長を見返しなから思う。だが、人が人を裁くということは、そう簡単なことではないだろう。感情のままやり返しても、ただ憎悪を重ねるだけだ。彼女たちがテアへした行いを、ディルクは容易に許せそうではなかったが、しかしまず犯人たちを許すか否かの決定権を一番に握っているのはテアだ。

ディルクはそつと隣のテアを見下ろした。それを意識してかしないでか、テアは静かに唇を開く。

「意見をお許しいただけるのなら……、謝罪は必要ありません。少

なくとも、私には。もしあちらが心から謝罪をしたいと足を運んでくれるのなら受け入れませんが、そうでなければ無用のものです。それから、フラウ・ハツセへの退学処分は、適切ではないと考えます。一ヶ月の停学処分が適当ではないかと」

少し意外そうに、学院長は片方の眉だけを器用に上げて見せた。

「停学処分で構わないのか？」

「不遜ながら、退学にして終わり……というほど優しくして差し上げることはないと考えます」

テアの言葉は穏やかに聞こえたが、内容は酷薄なものを孕んでいた。束の間、学院長もデイルクも言葉を失う。

テアの言葉が指すところはつまり、こういうことだった。停学処分にするということは、彼女は停学期間が過ぎればこの学院に戻ってくる。事件のことは公にはなっていないものの、把握している生徒は多くはないが少なくもない。犯人であると公表はしなくとも、噂は巡り、彼女は遠巻きにされるだろう。また全ての教師は事情を知っているから、どうしても先入観が残る。これまでのように普通の学院生活はどうしても送れないはずだ。しかも、来月には試験があり、一ヶ月の停学処分が下されれば、彼女はまた一年を最初からやりなおさ然的に留年することになる。彼女はまた一年を最初からやりなおさなければならず、それは退学よりも余程屈辱的なことだろう……。

退学であっても何かしら後ろ指を指されることはあるだろうが、学院に残るよりも、直接それを身の上で感じることはないはずだ。音楽の勉強ならばここでなくともできるし、宮廷楽団にも本当に入りたいならばシューレ音楽学院だけが唯一の手段というわけではない。貴族である彼女が学院を退学になったからといって、大きなダメージを受ける可能性はむしろ少ない。

淡々として見えるテアだが、デイルクの思いを踏みにじろうとしたことに関して腹に据え兼ねていたらしい。ゾフィー・フォン・ハツセがより苦しむであろう罰を、彼女は口にしたのだった。テアもこれから犯人と同じ学生生活を送ることになるのだが、そんなことは

ささいなことだと言わんばかりに。

学院長はそれらを全て分かって小さく溜め息を吐くと、頷くように目を伏せて言った。

「こちらとしても軽々しく生徒を放り出してしまうことは本意ではない。彼女の処分についてはもう少し考えることとしよう。…ディルク、何かあるか」

「いいえ。俺はテアが良ければそれで構いません」

ディルクはそう言うが、テアの方はむしろ、ディルクにこそ犯人たちを糾弾する資格があると考えていた。コンサートであの曲を演奏することをずっと望んでいたというディルク。それなのに、それを妨害されそうになったのだ。ディルクはもつと、犯人たちを　　そしてテアを、責めていい。それなのに彼は、閉じ込められたテアを気遣うばかり。テアはそれが心苦しく、それと同時に　　。テアがぎゅつと唇を引き結んだ時だった。

学院長が椅子から立ち上がる。

「今回の事件が起こってしまったことは学院長として誠に遺憾であり、反省を覚えるばかりだ。被害者であるテア…、それにディルク。君たちにはいくら頭を下げても足りない。本当にすまなかった」

真摯に頭を下げられて、テアもディルクも驚いた。

「学院長、あなたが謝ることは…」

「そうです。状況から言っても未然に防ぐということは難しかったですし…」

「いや、だが、テアに対する生徒たちの反感は分かっていたことだった。時間が経てば認識は変わってくるはずだと思い、実際にそういう流れにはなってきたが…、まさかここまで行動に移してくるとは考えられなかった。私の甘さだ」

「手出し無用としてもらったのは、私の意思です」

悔やむような表情の学院長に、テアはきっぱりと言った。

「いつか自分の力で、と。それは今も変わりません」

強く煌めくような黄金の瞳に、一瞬マテウスは気圧される。

やがて彼は苦笑して、再び椅子に腰を落ち着けた。

「……それでは、護衛をつけるという提案には、賛成してもらえそうにはないな」

「護衛？」

テアの目が驚きに見開かれる。

「……学院祭の軟禁事件の犯人は判明したが、彼女ひとりだけが不穏分子ではなからう。お前の後見人からも、護衛をつけた方がと言われている」

後見人、という単語にテアの肩がかすかに揺れた。

しかし彼女は、それでも首を振る。

「必要ありません。自分の身は、自分で守ります。何より、そんなことをすれば余計な刺激になるだけです」

それはテアにしては不遜な物言いだった。それだけ護衛を認めたくなかったのだから。

そしてディルクも、進み出るように言った。

「……確かに、護衛は大げさに過ぎると俺も思います。 テアに護衛が必要と言うならば、俺ができる限り側にいて彼女を守りましょう」

「ディルク……！ それは、」

テアは言いかけたが、それを遮ってディルクは人差し指をテアの唇の前に差し出した。

そんなディルクは、優しい微笑みを浮かべている。テアは何も言えなくなつた。

「その責は俺にもあるが……、テアへ嫉妬の目を向ける生徒たちはまだ多い。けれどその一方で、彼女を大切な仲間だと思っている者も当然いる。俺もそうだし、ローゼやライナルト、フリッツ……、皆テアを守りたいと思っています。力になりたいと」

ディルクの誠実な言葉に、学院長の瞳が興味深そうに光る。

「……仕方ない」

学院長は苦笑交じりに提案を退けた。

「ここは譲ろう。……今日は突然すまなかつたな。後日また、事後処理のことで呼び出すことがあるだろうが、その時も悪いがよろしく頼む」

学院長は二人を解放しようとして、ふと机の引き出しに手をかけた。「…それから、これを忘れるところだった。その使用人の彼女から、手紙を預かっていたのだった」

「手紙、ですか？」

「ああ。どうしても、テア、お前に詫びねば済まない…。本当は直接お前の元まで行くのが良いのだろうが、また見たい顔ではないだろうし、もうこの地を踏むことはできないからと、手紙を託された。受け取ってくれるか？」

テアはほんのわずか目を丸くしたが、やがて微笑んで学院長が差し出した手紙を手にとった。

「ありがたく…、受け取りましょう」

学院長室を退出し、テアとデイルクは教員棟の外に出た。

「デイルク…」

何となく、どう声をかけたものか迷い、テアは唇を閉ざす。

しかし、デイルクは屈託なく笑い、何事もなかったかのようにテアを誘った。

「泉の館に行かないか？」

「え？」

「そろそろピアノのところに行かないと、お前が禁断症状を起こすのじゃないかと心配だ」

「デイルク…！」

テアは顔を赤らめたが、それはからかわれた、というだけでなく、見抜かれているという恥ずかしさも混ざっている。そう、今のテアはピアノに触れたいという衝動に抗いがたい状態だったのだ。"こいう時"にはまずピアノ、なのである。

そんなテアを見つめ、とにかく犯人が見つかったことは良かった、とディルクは思った。

覚悟していたとはいえ知っていた顔が犯人であったことに対して、苦い気持ちは抑えきれないが、少なくとも今後彼女がテアに手を出すことはないだろうから…。

先ほど言ったように、また同じような卑怯なことを考えるような輩が出てきても、必ず彼女を守ろう。ディルクは愛しい存在を白藍の瞳に映して、もう一度心にそう誓った。

「 行こう」

そうして二人は、いつものように並んで泉の館へと歩き出したのだ。った。

学院祭の事件はひとまずこれで決着です。

…大分間が空きましたが；

次回、久々にエツダ登場です。物騒な決断がなされます。

十二月下旬。

シューレ音楽学院は、冬休みに入っていた。

既に大半の寮生が実家に帰省しており、学院内は冬の気配にも覆われて、どこか寂しげに見える。

そんな冬休みの十二月二十三日。

ロベルト・ベーレンスの演奏会当日。

太陽が空の真上に昇る頃、テア、ローゼ、ディルク、ライナルトの四人は学院を後にし、隣町の、神誕祭のための特設市場に足を踏み入れていた。

職人の手によるツリーの飾りや蠟燭、チョコレートなどの菓子や、グリューワインを振る舞うテントがところ狭しと並んでおり、それらを目的とした人間が路上を埋め尽くしている。

そんなマーケットの雰囲気を楽しみながら、はぐれないような気をつけていたテアだが、ふと嫌な視線を感じて振り返った。

しかし振り返ってみたところで、何かが見つかるわけでもない。

そんなテアの様子に気付いて、ローゼが声をかけた。

「テア、どうしたんですか？ 何か良いものでも見つかりました？」

「あ…いえ、何でもありません」

テアは慌てて首を振る。

「フリッツはどんなものをお土産にしていけば喜ぶでしょうかと考
えていて…」

「ああ…」

ローゼは苦笑した。

「フリッツは本当に残念でしたよね。最後まで粘ってみただけで駄目だったのでしょうか？」

「はい…。ご実家の都合ですから、仕方ありません。でも、あれだけ行きたいと言って下さっていたので、何だか申し訳なくて…」
「テアが申し訳ないと思う必要は、ないと思いますけど」

テアはロベルトの演奏会にもう一人の友人であるフリッツも誘っていたのだが、彼は実家に帰らなければならぬらしく、今回の演奏会は遠慮することとなっていた。

先日、悲しげな顔で「楽しんできてね…」と手を振ってくれ別れた友人に、何か良いお土産を買って行って、年が明けて再会したら渡せるようにしよう　とテアは決心していたのである。

まあ、全く残念だっただろうな…。

と、ライナルトなどは少々人の悪い意味でローゼに同意し、女性二人に視線を向ける。

演奏会というのを意識して、四人はそれなりにフォーマルな服装をしていた。

ディルクとライナルトの正装も男前でいつものように人目を引くのだが、ローゼとテアのドレス姿には特に一見の価値があると言っている。

ローゼは光沢のある藤色のロングドレスを身につけていて、ふわふわとしたファーショールを肩に掛けている。身体の線が分かりやすいのでその見事な曲線美に思わず目が奪われ、彼女が足を動かすたびに光沢のある生地がさらりと輝いて、ローゼの上品な動きが艶めいて感じられるのだった。

一方テアが身につけるのは、「あしながおじさん」から贈られた空色のドレスである。学院祭のステージではついに袖を通すことが叶わなかったもので、ここでようやく披露することができたのだった。ローゼよりも少し丈の短いミディアムドレスで、スカートが程良くふんわりとしている。ローゼが最初にこのドレスを見た時は、少しテアには可愛らしすぎるのではないかと思ったのだが、テアが身に着けてみると驚くほどしっくりと似合っていたのだった。エンジューのリサイクルの時のドレスが大人びていたので、そのイメージが先

行しすぎていたのかもしれない。何にせよ、その空色のドレスはテアを可憐な風情に引き立たせていて、テアの持つ色彩からも、詩人がいれば風の妖精という呼び方でもしそうなほどであった。寒さを補うために、ローゼとお揃いのファーショールをテアも巻きつけていて、それも大層良く似合っている。

この女性二人のドレス姿を　特にフリッツの場合はテアの姿を見られないというのは不敬といっても良いかもしれない、とライナルトは冗談交じりに考える。

とにかく、ライナルトとディルクでさえ眼福だと敬服するくらいだから、フリッツには実に気の毒な話であった。

そんな風に人目を引く四人が連れ立って歩いているので、衆目を引くのは仕方のないことだったが、それにしても好奇では収まらない、殺気といってもいい視線をテアは先ほどからしきりに感じて落ち着かない。

気のせいではない、と思う。生まれてからこれまで命を狙われ逃げ続けてきて鍛えられたテアの危険察知能力は並みのものではない。

一体、誰が……。

シューレ音楽学院に入学する前であれば心当たりは一つしかないのだが、入学して以来多くの嫉妬を不本意にもかってしまっているのだ、予想がつかない。…というよりも、テアの知らない人間がテアを疎んじている場合が圧倒的なのだ。学院祭の事件の犯人は捕まったというのに、状況はそう変わらないものだと思うと、少々やりきれない気持ちにもなる。

だが、少なくとも狙いはテア以外の他の三人ではないようで、それが唯一テアにとっては心の救いだった。テアだけでなく他の三人も殺気を察知することには長けているはずである。彼らが気にするよくなそぶりを見せないということは、奇妙な視線の主は他の三人のことは眼中にないと、そういうことなのだろう。もしくは、気付いてはいても、彼らにとっては流してしまえる程度のものなのかもしれないが。

とにかく、用心は欠かさないようにしよう、とテアは思った。学院祭の二の舞にならないよう。かけがえのない友人たちに心配をかけるないう。

この三人といれば、手出しをできる者はほとんどいないだろうし、大丈夫だろうと思うけれども…。

「……っ」

その時、よく分からない視線に気を取られていたテアは、前から来た人の肩にぶつかり、倒れそうになった。息を呑んで踏みとどまろうとするが、慣れないヒールのせいで上手くいかない。

「テア」

しかし、そんなテアを後ろからしっかりとディルクが抱き止めて、テアは転倒を免れた。

「す…すみません、ディルク」

「いや…、大丈夫か？」

テアの細い肩を抱いて思わず動揺してしまったディルクだが、平静を装ってその華奢な身体を手放す。

「はい…おかげさまで助かりました。ありがとうございます」

そうして恥ずかしげに笑うテアに、ディルクは右腕を差し出していた。

「…掴まっている」

「え？」

「何だか先ほどから足元が危うげだ」

「ですが…」

ディルクは躊躇うテアの手を半ば強引に取って、自分の腕に掴ませる。

自分でも、墓穴を掘っている、とディルクは思った。ただでさえ、普段かけている眼鏡もかけずその美貌を顕わにして、美しく着飾っているテアに先ほどから意識させられっ放しなのだ。しかし、それよりもテアへの心配が勝ったのだった。

「ライナルトたちにおいて行かれる。行こう」

「は…はい」

実際、いつの間にかライナルトとローゼは随分二人の前を行っていた。

また迷惑をかけてしまうと思ったが、テアはディルクの好意に甘えることにして、その腕に掴まらせてもらうことにする。

実のところ、ディルクが危うげだと称した通り、ヒールで長時間歩くことに慣れていないので、その申し出は有難かった。

テアをリードするディルクは、素直に身を寄せられるとますます強く相手のことを意識してしまい、平然としていられなかったのだけだ。

それを分かるのは、今のところは彼の親友であるライナルトだけだった。

ローゼとライナルトが、遅れているテアたちに気付いて立ち止まる。それにゆつくりと、テアとディルクは近付いて行った。

不気味な視線が、その間もずっと、テアのことを追いかけている。

その視線の主は、テアが警戒している通り、テアのことを狙っていた。

それを命じたのは エツダ・フォン・オイレンベルク、その人である…。

時を遡り、十二月中旬。

冬休みを目前にしたシューレ音楽学院の、サークル棟にある談話室で、エツダ・フォン・オイレンベルクはティーカップを片手に取り巻きたちの無邪気な話を聞くともなしに聞いていた。

ほとんどが聞く価値のないような類のものだったが、ふと聞こえてきた会話に「テア・ベーレンス」という固有名詞があって、エツダはそちらに注意を向ける。

「ロベルト・ベーレンスのコンサートに？」

「そうなの。とても残念がついていらして…。その御用事、わたくしが変わってさしあげたかったわ」

「けれど、フリッツ様を誘ったのはあの女なのでしょう？ あの方とご一緒したいだなんて、フリッツ様はやはり変わっていらつしやるわ。悪い方ではないと思うけれど…。それに、少し軟弱そうではない？」

「そんなことないわ！ あんなにお優しい方、そんなにいないわ。あの女と一緒にいるのだって、お優しいから仕方なくそうしていらつしやるのよ」

「まあ、確かに、そうでなければ伯爵家の方があんな女をお相手にはしないわよね。けれど、どうやってあの女はロベルト・ベーレンスのコンサートのチケットなんて手に入れたのでしょうか。卑しい平民の生まれで…。しかも私生児だという話じゃない？ 後見人がどういった方なのかも分からないけれど、口にできないような者だから秘密にしているという話だわ。でも、普通、一枚のチケットを手に入れるのだって難しいのに」

「あら、そんなの、簡単よ。だって彼女は下賤の生まれなんですよ？？」

くすくすと、上品とは言えない会話をして彼女たちは含み笑う。

「ああ、けれど、思い出したわ。コンサートにはディルク様やライナルト様、ローゼ様もご一緒なさるとい話よ」

「あら、それじゃあチケットはどなたかが入手されたのね」

「それが、でも、全ての女がどうにかしたというのよ。本当かどうか分からないけれど。そうするとやつぱり、あの女、ロベルト・ベーレンスと何か関わりがあるのかしら」

「馬鹿ね。それなら黙っている必要なんてないじゃない」

「そうね。それに、ロベルトが関わっているなら、もっと大きく取り上げられているはずだものね。それならやつぱりアレかしら」

「きつとアレよ。…でも、そうだとするとディルク様たちが本当に

気の毒だわ」

「そうよね。それに…、あの噂が本当なら…」

「あんなもの、嘘に決まっているわよ。パートナーならまだ学院のこと。デイルク様があの女に優しくして差し上げるのも分かるけれど…、あの女とデイルク様が…、お付き合いしているだなんて…」

「…」
いくらなんでも、分不相応よ　と囁くように言われた言葉を、エツダは聞いて静かに立ち上がっていた。

「　根拠のない噂話で尊い方を貶めるのはお止めなさい」

冷たく澄んだ声が、無邪気に会話していた二人の女生徒の耳に突き刺さり、二人を絶句させる。

エツダは感情を見せずにその場から一人立ち去ったが、後に残された面々はしばらく戦々恐々として口を開けなかった。

エツダがデイルクを敬愛し、テアを忌み嫌っているというのは、彼女がはつきり言葉にしなくとも誰もが知っている事柄で、デイルクを敬いテアを貶める類の会話はエツダの周りでは頻繁だった。

だが、誰もが予想した以上にエツダはデイルクとテアの関係について過敏になっていたらしい。

これからは気をつけなくては、と彼らは思い、不興をかった彼女たちはその事実にも身を縮めていた。

エツダは普段楚々とした風情で、上級貴族らしい上品で優雅な調子を崩さない。あからさまに偉ぶるようなところはなかったが、リーダーシップには優れていて、そのカリスマ性に、そして圧倒的な美貌に、誰もが彼女を崇拜していた。

そんな彼女はおおよそのところ寛容で、怒りを見せることはほとんどなかったのだが、だからといって厳しくないというわけではなく、一方で彼女の中の一定の基準から外れる者は厳格に遠ざけられるのも常だった。

侯爵家の人間であるエツダから「追放」を命じられればどんなことになるか　、彼らはそのことを考えると身を震わせずにはいられ

ない。

そんな取り巻きたちの思いなど考えもせず、エツダは怒りのまま足を動かしていく。一人の侍女が急いでその後を追っていたが、エツダは構わない。

ロベルト・ベーレンスのコンサートに、ディルク様が、あの女と…!?

既に予定が入ってしまったっているとディルクが言ったのは、そういうことだったのか　とエツダは歯噛みした。先を越された悔しさが込み上げる。

負けた、とは思いたくなかった。けれど、ぼつと出のテアに既に何歩も先を行かれていることは事実。パートナーのこともそうであるし、今回のこともそうだ。

しかも。

『あの女とディルク様が……、お付き合いしているだなんて……』
分不相応、まさしく、その通りだ、と彼女は思った。

けれど、ディルク様は……。

そのことを考えると、エツダの胸は暗雲に覆われ、締め付けられたように苦しくなる。

学院祭で、閉じ込められたテアの無事を確認したディルクは、心から安堵したように微笑み、彼女を抱擁してみせた…。

ディルクとテアが交際している、という噂話がたったのも、あの出来事がきっかけだ。

だが、実際にはそこまで彼らの関係が進んでいるということはないはずだ　とエツダはここ約一月の間ディルクを見守っていてそれを確信していた。

そう思いたい、私の願望ではないはず…。

それがエツダにとっては光明と言えば光明であったが　。

それでも、噂が立っているというそれだけのことが、既に彼女にとつては許せないことだった。

それはデイルクを汚す行為だ、とエツダは信じて疑わない。

とにかく早く、テア・ベーレンスという存在をどうにかしなくては、とエツダはずっと考えていた。

考えてはいたが、確実な手がなかなか思い浮かばず、ここまで来てしまった。

学院祭の事件の余波で、警備が厳しくなったことが、用いることのできる策の数を狭めたということもある。学院祭のことがなくとも、もともと貴族の子弟が多いこともあって学院内のセキュリティはそれなりに整っていて、みだりに乱暴な手段に訴えられなかったのだ。学院祭は外部にも学院を解放するというので、かつこの隠れ蓑だったのである。また、学院祭の事件での犯人が先日どうやら判明してしまったようで、エツダは自分に類が及ばなかったことにわづかばかり安堵していたのだが、いざという時に罪を被せることができなくなってしまった。学院祭に続いて同じような事件を起こせば、同じ犯人がことを起こしたのだと、攪乱することもできただろうに…。

そして学院内で行動を起こせないとすると、テアが学院の外に出る時が絶好のチャンスだったのだが、彼女はなかなか外出しない。しかも数少ない外出時にはローゼ・フォン・ブランシュが同行していて、下手なことはできなかった。よりもよって、どうして「クンストの剣」が、あんな少女に肩入れするのか…、と嘆息するしかない。

けれど、これ以上手を拱いてはられない。これ以上、テア・ベーレンスの存在を許しては…。

その胸に憎悪を滾らせて、エツダは当てもなく足を前に進めていたが、その足がふと止まった。

サークル棟を出て、エツダは無意識に校門の方へ向かっていたのだが、彼女の憎悪の対象であるテア・ベーレンスが練習棟に入っているのが見えたのである。

テアは自分の名では練習室の予約を取れない。その策を最初に弄

したのはエツダではない。その時のエツダはまだテアのことなど歯牙にもかけていなかったのだ。しかも、その行為は泉の館のピアノのためにささいな嫌がらせにしかならなかったのである。その後もエツダはこの件に関しては何の手出しもしておらず、というよりそんな嫌がらせなど止めさせてテアが泉の館へ来るのをむしる阻止したいと思っっているのだが、エツダの手が回らないところでその嫌がらせは続いているようだ。テアは泉の館に入り浸っているが、時折思い出したように練習室の予約をしており、それを邪魔してやるのが、嫌がらせを続ける誰かの楽しみらしかった。どうやら管理人を買収すらしているようだ。テアが学院にもつと意義を申し立てれば、学院長や生徒会も積極的に動いたのだろうが、泉の館のピアノの存在もあって、何も変わらないままここまでできている。

今日も、きつと彼女は練習室を使うことができないだろうに、わざわざ足を運んで。

そう思うと、少しばかり、いい気味だと胸のすくような思いがする。だが、いつまで経ってもテアは練習棟から出てこなかった。

気落ちした顔でも拝んでやろうかと意地悪く思っていたエツダだが、ふと、嫌な予感を覚える。

エツダは練習棟に足を踏み入れ、予約票を確認する。最上階の一番奥の部屋に、「補習」と書かれているのに、不審を覚えた。授業と定められた時間以外にも、教師がレッスンを行ってくれることはままあることであるが、普通予約は生徒が個人名で取るものだ。

エツダは思いのまま、階段を上がった。最上階の、一番奥の練習室を、そつと覗く。練習室は基本的に外から中が見えるようになっていたから、覗くのは簡単なことだった。逆に中から外も見えるわけだが、中の人間はピアノに集中していて、エツダにはまるで気付いた様子を見せない。

その部屋の中にいたのは、エツダが思いついていた通り、テア・ベールンスだった。そして、ピアノの前に座るテア・ベールンスのすぐ横に立っているのは。

ピアノリストの…ヴィンツェンツ・ジーゲル…！

エツダは息を呑んだ。エンジュ・サイガに勝るとも劣らない高名なピアノリストである。エンジュとは異なり、厳格な音楽を奏でることでは有名な人物だが、シューレ音楽学院の教員ではないはずだった。

どうして、テア・ベーレンスが彼に…。

エツダはそこで、もうひとつ噂話を思い出した。最近、高名な音楽家たちがちらほらとシューレ音楽学院で見かけられるのだという。毎年、学院祭の後、政財界の著名人や音楽家たちが目に留まった生徒に声をかけることは珍しいことではない。それにしても、今年は例年に比べてもたくさん顔を見る…のだという。一年生のエツダとしてはその実感には薄かったし、ディルクほど目立つ存在がいればそれも自然なことだろうと思っていた。

だが、まさかテア・ベーレンスがその恩恵を受けていたとは。不覚だった。テアをいまだに侮っているエツダにすれば、予想外のことだった。

どうして…？

愕然としながら、エツダは思う。

エンジュ・サイガも、ヴィンツェンツ・ジーゲルも、……ディルク様も、

きゅっと拳を握って、問う。

どうして、彼女を。

どうして誰もが彼女を選ぶのだろう。

どうして、テア・ベーレンスが選ばれるのだろう。

自分ではなく、彼女が。

許せない。

許せない許せない許せない。

許せることでは、ない。

足踏みをしている場合ではなかった。

一刻も早く、彼女の存在を、消さなければならぬ。

エツダはくるりと踵を返した。

一度、自分を落ちつけるように瞳を閉じ、すぐに開いて、力強く彼女は歩き出す。

全ての躊躇いを捨て、一つの決断を胸に秘めて。

guardian 15 (後書き)

よじやく、ロボットのコンサートへ…！
ここからが一番一連の話で書きたかったところだったので嬉しいと
ころです。
テアの「あしながおじさん」について少しずつ明らかになっていき
ます…。

夕刻。

マーケットを楽しんだテアたち四人は、ロベルト・ベーレンスの演奏会会場である劇場に足を踏み入れた。

客席が約二千もある大きなホールを持つ劇場で、まだ開場前だというのに人がずらりと並び始めている。

「さすが、人が多いですねえ」

とローゼはやや呆れ顔だ。

「でも…、何だか皆さん楽しそうです」

他の三人と共にいれば問題ないだろうと、一旦怪しい視線のことは保留にして演奏会を楽しむことにしたテアは、周りを見渡しながら呟くように言った。

誰もが、開場を、開演を待っている。ロベルトの楽団の演奏を、待ち焦がれている。

けれど、その待つ時間すら期待に輝いているように感じられて、テアは何だか嬉しくなった。

こんなに多くの人々を引き付け魅了しているロベルト・ベーレンス率いる楽団。

ここに、テアの「あしながおじさん」はいるのだ。

「あしながおじさん」を尊敬するテアが、誇らしく胸躍らせるのも無理からぬことであった。

そんなテアの様子に、腕を握られたままのディルクも何となく微笑ましいような気持ちになる。

劇場に足を踏み入れて、きゅっと少し力の籠ったテアの手のひら。

それは彼女の精神の高揚と、ほんのわずかの緊張のようなものを表していた。

今までに見られなかったようなテアの様子に、ディルクはまた惹きつけられる。

「少し時間より早いが…、そろそろ開場のようだな」

そのライナルトの言葉に、テアの横顔をそっと見守っていたディルクは前方に注目した。

案内役の人間が、順番に客を通そうとしているのが見える。

「…いよいよ、か」

「楽しみですね」

テアに見上げられ微笑まれて、ディルクも「ああ」と眩いような微笑みで返した。

ディルクも、テアとそう変わらない心持ちで、ロベルト楽団の演奏を心待ちにしていたのだ。

そうして　ロベルトの演奏会は開演の時間を迎えた。

待ち構える聴衆の前に、奏者である楽団員と、合唱隊とが現れ…、そして、ロベルト・ベーレンスがステージに登場する。

その途端、ホールが壊れるのではないかという危惧を覚えてしまいそうなほど、大きな拍手がホールに響き渡った。

それは、彼　ロベルト・ベーレンスの人気を表すものである。

ロベルト・ベーレンスは今年で四十を迎えるが、後ろに全て撫でつけられた髪は黒々としていて、まだ三十代前半のような若さを感じさせた。その紺青の瞳も印象的な光を宿していて明るい。穏やかな風貌で、ぱっと見た限りではどこにでもいそうな風体なのだが、その自信に満ちた堂々とした様子には、はっとさせられるものがあった。

そのように、聴衆の拍手をその身に受けるロベルト・ベーレンスだが、実はあまり格式ばったことが好きではない。コンサートでのマナーなどもそこまで気にしなくてよいのではないかと思っていると

ころがあつた。そのため、最初ステージに登場する時はいつも「皆さん来てくれてありがとう！」等々、叫びたいくらいなのだ。しかし、慣習と違うことをされると戸惑う聴衆の方が多いだろう。と周りに諭されていて、今回もしぶしぶ通例に従って楽団員たちの方へと身体を向けた。

そして、彼はおもむろに　タクトを振り下ろす。

拍手が鳴り止んだホールで、聴衆の期待に応えるように、音楽が、始まった。

なんて重厚な…！

テアはびりびりと身体に響いてきた音に息を呑む。

音量は大きいものではなく、むしろ不安を煽るようなごく微量のものであるのに　。

ロベルト・ベールレンスの演奏会、その一曲目は、オネゲルの「クリスマス・カンタータ」。

この曲はオネゲルがその死を前に作り上げた彼の最後の作品で、その曲は混迷の時代に神が生まれ、それを讃える…というような流れになっている。

その最初の、どこか恐ろしくも感じられる音楽の世界に、聴衆はいつきに引きこまれていく。

ホールの前方よりの中央の、演奏を楽しむのに最適な場所に座るテアたち四人も例外ではなく、その音に熱中した。

やがて、神が降臨する場面となり、神々しい旋律が現れる。優しい柔らかない歌声が登場する。

この音の重なり…。

その心地良さに、全てを委ねてしまいたいそうだ。

ほとんどの人間が神への信仰を持つこの国で、テアはその唯一神の存在を信じてはいない。

救いの神がいるのなら…、その神は母を救うべきだった。母は救われるべき人だった。

もし神がいると信じたとしても、母を救わなかった、そんな神に手

を合わせることなどできそうにはない。

けれど、神を讃えるこの曲に、心を揺さぶられるのは、矛盾しているだろうか。

矛盾はしない、とテアは思う。

国の人々が崇める唯一神ではなくても、テアにはテアの”神様”がいる。それはたったひとりではなく、それは母であり、かけがえない友人たちであり、テアを支えてくれるたくさんの人々だ。

温かい人々の顔が脳裏に描かれる。

感動的に響き渡る音色に、テアは目頭を熱くした。

フィナーレへ向かい、曲は最高潮の盛り上がりを見せる。高らかな合唱、壮大なオルガンと管弦…。

身体をいっばいに使ってタクトを振る指揮者。

そして、静かに曲は終幕を迎えるのだ。

テアは肌が粟立つのを感じた。

この曲も、楽団員の能力も、いずれも素晴らしい。そして、全てをまとめあげ己の音楽の世界をこうして見せつけるロベルト・ベールの腕はやはり、確かなものだった。

再び、大きな拍手が会場を包む。

テアも、ディルクたちもその中で同じように、熱に浮かされたように手を叩いていた。

「豪華なプレゼントをもらっちゃいましたね」

演奏会が終わって、ローゼが最初に口にしたのはそんな一言だった。「クリスマス・カンタータ」が終わり、二曲目、三曲目、アンコール曲、と演奏会はあつと言つ間に予定の演目を終え、客席は名残惜しげに席を立つ客たちのためにざわついている。

ローゼの台詞に他の三人は深く同意して、席を立つことができなかつた。

まだ演奏の余韻に浸っていたかたし、演奏会が終わってしまったということを感じたくないような気持ちもあったのだ。音楽を学ぶ彼らにとって、実りの多い演奏会だった。

その多彩な表現力、完璧な演奏、どれもが。思い返す度に、思い出の中でさえ圧倒的な音の奔流に飲みこまれそうになる…。

だが、いつまでも居座り続けているわけにもいかない。そろそろこの重たい腰を上げなければと、四人が思い始めた時だった。

「…テアお嬢さん！」

やや高めの男性の声が、テアの名前を呼んだ。

テアは顔を上げ、右手の方から近付いてきた人影に目を止めて、立ち上がる。

テアにとつて見覚えのあるその人物は、気さくに手を振りながらやって来て、テアは微笑んでいた。

「フューラーさん！」

「ご無沙汰してます。お元気でしたか」

ちようどテアたちの座る席の後ろが通路になっていたので、その人物は背もたれを挟んでテアの後ろ側までやってくると、軽く会釈してみせた。

「はい。フューラーさんこそ…」

「俺の方は相変わらずです。それよりも今日は、いらしてくださいありがとうございます。あの人、朝からソワソワしてずっと落ち着かなくなつて、普段緊張なんて全然しないのに、緊張しまくりだったんですよ。お嬢さんのおかげで面白いものが見れました」

にかつと爽やかに笑うその青年は、名をアロイス・フューラーという。

狐色の髪に同じ色の瞳を持つ、やや童顔の持ち主だった。

かっちりとしたスーツを身につけているが、どこか服に着られているような、そんな印象がある。

「…で、そちらのお三方がお嬢さんのご学友さんですか」

「あ…はい。紹介します」

テアは突然現れた人物に驚いている三人に視線で謝意を示し、テアと同じように立ちあがっていた仲間たちを順番にアロイスに紹介した。

「…それから、こちらがロベルト・ベーレンス楽団のアロイス・フューラーさんです。私の…後見人の方の知人で…」

「どうも、今日はわざわざ足を運んでくださって、ありがとうございます。ありがとうございました。楽団のメンバーと言っても、俺は演奏なんてからきし駄目で、雑用一般を任されてるだけなんです。よろしくお願ひします」

テアが紹介し、本人が請け負った通り、アロイスはロベルト・ベーレンス楽団の一員であり、「あしながおじさん」の付き人でもある。だから、彼はテアのことを知っていて、「お嬢さん」と呼ぶのだ。

「それにしても、噂には聞いていましたが、皆さん衆目が痛いくらいですね」

ずばりとしたその台詞に、ディルクたちは苦笑を零すしかない。

しかし、何故だろう、このアロイスという青年、どこか得体が知れないところがある。とローゼ、ディルク、ライナルトの三者は感じた。ぱつと見は、どこにでもいそうな、人の良さそうな青年だが……隙がない。只者ではなさそうだが、と三人はちらりと視線を交わしあった。テアの様子を見る限りでは、そうそう警戒はしなくてよさそうだが、かといって油断できそうにもない。

それにしても、「噂には聞いていた」というが、その噂をした主というのはテアのことなのだろうか、とふとディルクは首を傾げる。今回の演奏会のチケットに関して、テアは後見人が送ってくれたのだと言った。それならば、やはりテアはロベルト・ベーレンスに縁があるのかと密かにディルクも思っていたのだが、アロイス・フューラーの登場を見る限り、その通りであったようである。ローゼのようにテアから直接、後見人が楽団の一員だと聞いていないディルク

クはそう納得した。

「…と、あんまり無駄口叩いていると怒られるな……。俺はメツゼンジャーを仰せつかってきたんでした。テアお嬢さんに、これを」
言って、アロイスが取り出したのは、小さな白いメツゼンカードだった。

「是非今開けてやってください」

「はい…」

「あしながおじさん」からだ、とはテアには言わずとも知れたことだった。

テアはディルクたちに断ると、少し戸惑ったように二つに折られた紙を開き、その中身に目を通す。

やがてその瞳が驚きに見開かれ、アロイスを見上げていた。

「フューラーさん、これは…」

「はい。我が主は、皆さんを楽屋に招待したいと仰せです。貴重な時間を奪ってしまうことは申し訳ありませんが、是非、立ち寄っていつてくださいますか」

大仰にアロイスは言つてのけた。

その台詞に驚いたのは、ディルクたち三人も同様である。

「楽屋に!？」

「楽屋と言つても、その一部屋ですが。是非、テアお嬢さんとそのご友人に会いたい、と言つております」

「どなたが…？」

それは分かりやすく推測できることだったが、突然の展開にローゼは確認せずにはいられなかった。

「それはもちろん、先ほどまでステージ上にいた、テアお嬢さんの後見人、保護者である人です。直接自分の口で演奏会に来てくれた礼を言いたいと、わがまを言つてましてね」

やれやれと、アロイスは肩を竦めて見せる。

直接的な彼の表現に、ディルクもライナルトもやはり、と思うしかない。テアの後見人は、ロベルト・ベーレンスに関わりが深かった

のだと。

「忙しい学生さんを引き止めるものじゃありませんと、一応忠告はさせていただきましたが……」

「いいえ、とんでもない！ 楽団の方とお会いできるチャンスなんて、そうそうありませんから、むしろ良い勉強になります」

ローゼは首を振ったが、横にいるテアの顔色を見て息を呑んだ。

テアは、手の中のカードを強く握りしめていた。掴み潰さないように、それでも、強く。その顔色は、薄化粧のため目立たないが、蒼白で。

ステージが良く見えるようにとかけられた眼鏡の奥で、黄金の瞳が非難の色を持って、アロイスを見据えていた。

「…行けません」

そんなテアの様子に、デイルクもライナルトも驚いて見守るしかない。

だがアロイスは穏やかな顔つきのまま、静かに問いかけた。

「何故です？」

「それは」

テアは詰まった。

アロイスは、全てを知っているはずだった。テアが首を振る理由も、全て分かっているはずだ。

「大丈夫ですよ、お嬢さん。あなたがた四人が揃っていれば、問題はありません」

その言葉の意味を、的確に把握しえたのは、テアだけだった。

「…でも……！」

「ノープロブレム。心配のし過ぎは身体に毒ですよ。俺も一応プロですし、あの人も馬鹿じゃない。どうぞ、お任せください。時には自分に素直に、思うがままに行動してみることも大事です。お嬢さんは、あの人に会いたいですか、それとも、会いたくないですか？」

「あ………」

テアは手のひらの中のカードを見つめた。

アロイスの言葉に、完全に納得したわけではない、けれど。

「…会いたい、です…」

にこつとアロイスは微笑んだ。

「それでは決まり、ですね」

テアはふつと息を吐き、心を定めて顔を上げた。

「……すみません、皆さん、付き合っただけですか？」

決然としたテアに、三人は当然、首肯する。

「それでは皆さん、俺に付いて来て下さい」

アロイスを先頭に、テアが続き、他の三人が続く形で、総勢五人は関係者以外立ち入り禁止となっている廊下へと足を踏み入れていった。

この時、謎めいたテアの後見人の顔がいよいよ拝めるのだ、というのがテアとアロイスを除いた三人の共通した思いである。もちろんロベルト・ベーレンス楽団の人間と対話できることを歓迎する気持ちも強い。

しかし、何故あんなにもテアは後見人に会うことを拒んだのだろうか。「会いたい」とテアが口にした気持ちは、嘘ではなかった。それならば、拒むことはない。アロイスの言つとおり、最初から素直に頷いていても良かっただろうに…。

毅然と目の前を歩くテアの背中には、一体どのような重みがあるのだろうか。

三人は、それへと思いを馳せずにはいられなかった。

「この階段を下りて、すぐですよ」

階段の前でアロイスは振り向いて、足元に気を付けてください、と言った。

「…テア、掴まっている」

「は、はい…。すみません、ありがとうございます」

ディルクに腕を差し出されて、テアは素直に手を取る。

階段の段が高めだったので、遠慮して躓いてしまうことが洒落にな

らない、という判断からであった。

そつと差し出されたテアの指先は、ひんやりとしていて、ディルクは彼女の緊張を知る。

ディルクはそんなテアの足元に気を配りながら、共に階段を下りて行った。

その、最後の一段に足をかけようとした時。

「テア」

待ちかねていたように、階段を下りて短く続く廊下の、一番奥の部屋のドアが開いた。

はつと、テアは顔を上げる。

そこに立っていたのは、紛れもなく。

「お……」

テアはひゅつと一度、外に出ようとした言葉を呑みこんで。

「……おじさん……!!」

ディルクの腕を放し、思わず、大きく足を踏み出していた。

先ほどまでの逡巡は、今のテアの頭からは消え去っていた。

もうしばらく対面することはないはずだった「あしながおじさん」を目の前にして。

冷静なままでは、いられなかったのだ。

そして、彼女の「あしながおじさん」とても、会うことのままならないテアの姿を目の前に見て平静ではなく、ただ思いのままに、彼は大きく腕を広げていた。

「テア……!!」

「あしながおじさん」が開いたドアにぶつかると同時に、後見人と被後見人の絆で結ばれた二人は温かい抱擁を交わす……。

テアに追い抜かれたアロイスはそれを見て苦笑を浮かべ、それから

ローゼ、ディルク、ライナルトの三人は、瞠目したまま身動きもとれなかった。

ただ一言、テアの「あしながおじさん」を見つめて彼らは呟く。

「ロベルト・ベーレンス……」と、そう。

少々間が空いてしまつて申し訳ありませんでした…！

ようやく「あしながおじさん」が一体誰だったのかが明かされまし
たが、

いかがでしたでしょうか…。

少し展開が早いだろつかと、色々悩みましたが、こつこつ形となり
ました。

今でもまだ唸っている点があったりしますが、とりあえずこのまま
続きます。

「その…、紹介します。私の後見人を務めて下さっています、」
「ロベルト・ベーレンスです、よろしく。いつもテアと親しくしてくれて…、それから今日は演奏会へ来てくれて、ありがとう」
テアの言葉を引き取るように、「あしながおじさん」　ロベルト・ベーレンスは紳士的なにこやかさでディルクたちに挨拶した。
後見人と被後見人の久々の再会が感動的に行われて、後。
アロイスに背中を押されるようにして、他の面々は楽屋の一室に詰め込まれた。

鏡面に囲まれ、白一色で統一された、こぢんまりとした一室である。その鏡に存在感のある姿を映しながら、ディルクもローゼもライナルトも、いまだに驚きの中にあつた。

だが、全く予期しなかったこと　というわけではない。

テアの後見人が、ロベルト・ベーレンスである、ということとは。

テアの姓を聞いて、ロベルトを連想しないなどということがあつたらうか。

音楽界の人間ならば、誰でも少しは疑うだろう。

テア・ベーレンスという人間は、ロベルトに近い人間であるのかと。

実際に、ディルクもフリッツもその名を最初に聞いた時、ロベルトを思い浮かべずにはいられなかったのだ。

しかし、テアは自身の後見人に関して固く口を噤んでいて、親友であるローゼにすらわずかのことしか伝えていなかった。

ロベルト・ベーレンスが後見人であるならば秘匿する必要などないはずだ。また、世間的にも注目度の高いロベルトが後見人を務めるということにでもなつたならば、それなりに話は出回つたはずであ

る。今までにもロベルトは何人かの有望な若手を支援しており、その者たちの名前は明らかにしているのだ。

しかしテアの場合、それがなかった。

そのことが、誰もが考え得る可能性を否定させていたのだ。

ディルクもローゼもライナルトも、ロベルトの楽団にテアの後見人がいると分かってても、それがロベルト・ベーレンス当人ではないだろうと、思いこんでしまうくらいには。

もちろん、ただの楽団員であれば誰かの後見を務めるといっほどの財力は通常ないはずだから、それなりに力のある人間だと、数名の名を候補として考えてはいたのだが、ロベルトの名はその中に括弧つきで入っているくらいだった。

だが、こうしてテアとロベルトが並ぶのを目の当たりにすると、疑問を覚えるよりも納得してしまうような気がするのがまた、不思議だった。

「…とはいえ、ディルク君とライナルト君とは初対面ではないが…。久しぶりだね。大きくなった」

ロベルトの言葉によろやく、青年たちは我に返った。

久々に会った親類のような言葉に、ディルクとライナルトは苦笑する。

「お久しぶりです。今日はお招きありがとうございました。ご健勝のようで、何よりです」

「元気だけが取り柄だからね」

笑って頭を掻く仕草を見せたロベルトに、アロイスは人の悪い笑みでまぜかえした。

「いやいや、そんなにご謙遜なさらずとも、他にも取り柄などたくさんあるでしょう。面倒臭い仕事から逃げる才能とか、ところかまわず動物を拾ってくる才能とか、後先考えず自由に行動する才能とか」

「…アロイス、才能ある若者たちに偏見を植え付けるのは止めてくれ」

「偏見？ 事実の間違いじゃないですか？」

二人のやりとりに、若者たちはくすりどりと笑わされ、肩の力を抜いた。「…お知り合い、だったのですか？ デイルクたちと」

驚いた様子のテアに聞かれて、ロベルトは頷く。

「ああ。随分昔に少し顔を合わせた程度だったが…、まだ二人が王子だった頃だね。アウ…、いや、陛下が紹介してくださったんだ」「陛下が？」

不思議そうな顔をしたのはローゼである。

宮廷楽団の誘いを蹴ったロベルト・ベーレンスと皇帝陛下に、何らかの関わりがあるというのが奇妙に思えたのだ。むしろ皇帝はロベルトを怒り、嫌悪していてもおかしくはない。

「あまり知られていないことだが、陛下はロベルト殿を殊のほかお気に入りだ。これほど爽やかにきっぱり宮廷楽団の誘いを断った人間もいない、と言って。宮廷は、それがあまり他に知られるとまずいだろうと、知らないふりをしているようだ」

それはそうだろう。皇帝が、大げさに言えば反逆者を笑って許しているは大変なことになる。

「そうだったんですか…」

そういうこともあるものかと、ローゼは頷いた。

ロベルトはそんなローゼに微笑みかけ、告げる。

「フロイライン・ローゼ・フォン・ブランシュ。初めまして、だが…。私は君にいくら感謝しても足りないほどの感謝を持っているよ。ずっとテアのことを守ってくれたと聞いている。本当に、どうもありがとうございます」

「いいえ、そんな」

ロベルトほどの人に頭を下げられて、ローゼはややうろたえたが、すぐにいつものように毅然と返した。

「テアは私にとって親友であり家族でもあります。だから私はただ、テアの側にいただけです」

それでも言葉にせずにはいられなかったのだろう

ロベルトは最

大の感謝の意を瞳に込めたのだった。

テアはその隣で、どこか面映ゆそうにしている。

「でも…それにしても驚きました。いつ…どのようにしてテアと出会われたのですか？」

テアが母とフォン・ブランシュの元に身を寄せるようになってから、テアはほとんど外出らしい外出もしなかったし、外に出る時はローゼと一緒にだった。今とほとんど変わらないと言えば変わらないが、それだけに交友範囲もかなり限定されていて、入学前のテアの間関係でローゼの知らないことはほとんどなかったのだ。

ロベルトはローゼの問いに懐かしむような瞳を見せて、口を開く。

「今から、一年前のこと…いや、まだ一年も経っていないけれど、フォン・ブランシュの領地の隣で演奏会を開くことになってね。少し時間が空いた時にぶらぶらと近くを散策していたら、いつの間にかフォン・ブランシュの領地内に足を踏み入れていたようで…、そうしたら一つのお邸からとても綺麗なピアノの音が聴こえてきたんだ」

「その日帰ってきた時、大層興奮なさっておいででしたね。行き先も告げずに無断でどこへ行ったのかとこちらの心配など聞く耳持たず、心あらずでそのことばかり」

その時のことを思い出して、アロイスも微笑みながら告げた。

「ちゃんと謝っただろう…」

「ええ、謝罪だけはいつもしてくださるんですよ」

だけ、の部分に力を入れられて、ロベルトは首を竦めた。

この二人は万事このような調子なのだろうか、若者たちは失笑してしまう。

ロベルトはこほんと咳払いをして誤魔化して、続けた。

「ともかく…、その、邸の中から響いてきた音が忘れられなくてね。切なく哀しく、…そしてとても美しいものだった。季節は春も始まるうという頃で陽射しが温かく心地の良い日だったのだけれど、その邸はそのピアノの音で寂しそうに佇んでいるように見えたよ。…

分かるだろうか。それだけの影響を持ちえた、人の心に響く音だったんだ」

夢見るようにロベルトは語った。彼の聴いた音が、話を聞く者の耳にも届くかのように。

彼の話の続きを待たずともその音の持ち主というのは明らかで、耳元を真つ赤に染めたテアは隣のロベルトの服の裾をそつと摘むようにして抗議の視線を向けた。

「おじさん…、誇張し過ぎですよ…」

「誇張なものか！ あの時は心を打たれたあまり本当に邸の前から動けないと思つたんだ。いや、むしろ堂々と乗り込んで行つて奏者のところへ行つて跪きたいとまで思つたよ！」

「うう…。絶対、鼻眞目です…捏造されています…」

テアは唸り、ここから姿を消したい…、と願つたが、ロベルトは話を続ける。

「とはいえ、その内ピアノの音も止んでしまつて、これ以上居座ると不審者とも間違われかねないと思つたから、その日は渋々帰つたんだ。唐突に訪ねて行つてもおそらく追り返されただろうし、次の日には演奏会が控えていたから、私もさすがに帰らないとまずいと思つてね」

うんうん、とアロイスは頷いた。あの時はちゃんと帰つて来てくれて本当に良かった　と思つているらしい。

「でも次の日、演奏会が終わつてからも、前日に出会つた音のことばかり考えてしまつて…。夜遅かつたけれど、何となく足を向けてしまつたんだ。また、あの邸へね」

「こちらとしては皆が演奏会の成功で酒を飲んで席にあなたがないんで心臓に悪かつたものですよ。他のメンバーは一番上の人間がない方がぱーつと騒げるなんて嘯いていましたが、俺の役目はあなたの面倒を見ることですから」

「…もう分かつたからあまり責めないでくれ。あの時はお前もすぐにあの場所に来たじゃないか」

「それは前日のあなたの話を聞いていたからできたことですよ。…昨日も急に姿を消したと思ったら、近くの公園で野良猫に餌をやっているんだから！　いくら今日が特別な日になるからって、徘徊するのは止めて欲しいものです」

昨日もそんなことがあったのならば、アロイスが今こんなにも嫌味を続けたくなるのも仕方がないのかもしれない、とやや呆れ気味に聞き手の若者たちは思った。

「分かった、悪かったよ！　今度から、外に出たくなったら絶対お前に声をかけるようにするから。話の腰を折らないでくれ」

「いつもそう言っただけでふらりと出て行っちゃうんですから…。俺の目を盗んで行けるんだから、本当に素晴らしい才能ですけどね。お願いしますよ。お嬢さんの前で約束したんですから、ちゃんと守ってください。じゃあ、俺はしばらくちゃちゃいれずにいますよ。どうぞ」

アロイスに促されて、ようやくロベルトは話を再開することができた。

「それでだな…どこまで話したんだっただか、そう、次の日の夜、私はまたあの邸に足を向けていた。夜更け、というほどの時間ではまだなかった。それでもその時間に音は聞こえまいと分かってはいたんだが、ついでね。そうしたら…、驚いたことに、一人の少女が邸から出てきたんだよ。もしかしたら、と私は思った。そして…、思わず声をかけていたんだ」

それが、テアとの出会いだったのだと、ロベルトは語る。

「月の美しい夜で…、足が向いた先におじさんがいた時は…、本当に、驚きました」

何故か気まずそうに、申し訳なさそうにテアは呟いて、ロベルトを見上げた。

「私も驚いたよ。けれど…、何度でも思うんだ。出会うことができ、良かったと。素晴らしい導きがあったと…」

穏やかで優しいロベルトの瞳が、テアを見つめ返した。

テアはふと胸に詰まるものを感じて、そつと俯く。

二人が出会ったその夜に、具体的にどういう出来事があったのかは、第三者には分からない。

けれど二人にとって決定的な何かがその夜にあったのだと、はつきりと言われずとも感じられた。

それにふと、デイルクは胸をざわつかせる。

「……とまあ、それでその導きに従うほかはない、と私はそれからお邸にあげてもらい、テアを楽団に誘ったんだ。そこがフォン・ブランシュの邸だと知ったのはそこに足を踏み入れた時でね。ちょうどモーリッツ卿も居合わせて、彼女を楽団にとかき口説いたものだったよ」

「楽団に!?!」

それも初耳だ、とローゼは声を上げた。

「そんな話が先にあつたんですか……」

「すぐにお断りした話です。私は……今まで誰かからきちんとピアノを教授されたわけではなかったですし、ただ感情のままにピアノを弾いていた私がこれまで苦労してこられたプロの方と肩を並べるなんて、とんでもないことですから」

謙虚な言葉に、アロイスが感心したように言う。

「……いや全く、この人にはもつたいたないくらいに真面目なお嬢さんですよ。普通なら舞い上がって頷いてしまうところですから。俺が駆け付けた時がちょうど、テアお嬢さんがばつさりその申し出を断るところで、この人半泣きでしたよ」

「泣きもするさ。今だって喉から手が出るほどここにいて欲しい、と思っっているんだ。だがテアの意志が固いのならば仕方がない。……とはいえ、私もただでは諦めなかった。埋めておくには、あまりにも惜しい、魅力あるピアノストだ。誰かにきちんと師事したことがないことを後ろめたく感じるのならば、これから師事すればいい。それで是非シューレにと勧めて、今に至るわけだ」

「では……、テアは学院を卒業したら、ここに入団するのですか?」

「それは…まだ」

ローゼの問いに、テアは逡巡を見せた。

ロベルトはそれに鷹揚に微笑む。

「私はそれを期待しているが、まだテアは学院の生活を始めたばかりだ。その中でじっくりと自分自身の答えを見つけてくれれば、それでいい」

格好つけて、とアロイスは苦笑を唇に乗せたが、言葉にはしなかった。

テアが「あしながおじさん」の言葉に感謝するようにそつと頭を下げたので、無粋な真似は控えたのだった。

しかし、そんなロベルト・ベーレンスとの歓談の時間は、残念なことに長くは続かなかった。

楽団の撤収が進み、楽団長としてロベルトも様々な務めを果たさなくてはならなかったのである。テアたちと会う間は副団長に仕事を任せていたのだが、全てを任せきりにしておくことはできなかったのだ。

副団長が、「劇団のオーナーが団長に会いたいと言ってきている」と伝えに来たのをきっかけにして、テアたちは楽屋から出ていかななくてはならなくなった。

『来てくれてありがとう。元気そう良かった』

と慈しむように微笑みかけてくれたロベルトを思い浮かべて、テアはそつと口の端に笑みを乗せた。

既に楽屋を出て後、彼女は化粧室にいて、鏡の中の自分と向き合っている。

演奏会終了から時間が経っているので、劇場内は閑散としていた。

その静けさの中、テアは再会を終えたばかりの「あしながおじさん」のことを考えずにはいられない。

『手紙にも書いたけれど、学院祭のステージ、とても良かったよ』

『その、ドレス…着てくれたんだね。ありがとう。よく似合ってる』
ロベルトを「あしながおじさん」を一目見た時、思わず駆け寄ってしまった。取り乱したところを見せてしまった。

けれど、ロベルトはそんなテアを受け止めてくれ、温かい言葉をかけてくれた。

今日、会うことができ、本当に嬉しかった、とテアは思う。
だが、とテアはその秀麗な面に翳りを見せた。

本当に、会ってしまつて良かったのだろうか。デイルクたちにも、様々なことを曝してしまつた。

それがテアにとつては気がかりでならない。

『今回のことは、ご内密に』

分かれ際、アロイスはそう、人差し指を立てて見せた。

何故、と当然デイルクたちは訝しげにしてみせたものだ。

アロイスは、それについてこう説明した。

『テアお嬢さんが、この人を後見人だと秘密にしている理由と同じですよ』、と…。

『この人が宮廷楽団の誘いを蹴つたというのは、皆さんご存じの通りです。それで、この人は随分と親王派の連中に嫌われてしまつてね。愛国心が足りないとか訳の分からないいやもんをつけてくる輩は少なくないんです。あの人は宮廷を軽んじているとかそういうことじゃなく、ただ身分などに関係なく多くの人と音楽がやりたかつた、それだけなんです。宮廷楽団は確かに腕のいい音楽家さんが揃っているみたいですが、聴衆が上の階級の方だけと、あまりにも限られていますからね』

『とにかく、反逆の意図を持つてるわけでなし、あの人が何をどうこうできるわけでもないから、放っておいてくれればいいんですが、残念なことに、親王派の一部の過激な連中はこの人のことを目障りだと目の敵にして狙ってくるんですよ。特に最近になってまた、不穏な影が増えてきていますね』

話の流れが分かつて、その時デイルクとライナルトは苦々しげな顔になつた。元王族の彼らにとっては、耳が痛い話だつただらう。

『テアお嬢さんに後見人の件を公にしないでもらっているのは、親王派がお嬢さんにまで手を伸ばさないようにするためです。ご覧になつた通り、この人はお嬢さんのことを目に入れても痛くないほど慈しんでいらつしやるので、それを知られば相手がどう出るか、分かつたもんじゃありません。今回は、皆さん揃っていますから、懐かしい学院の後輩とちよつと会つた、くらいで済むでしょう。で

すが、万が一ということがありますし、皆さんのことも下手に巻き込むわけにはいきません。…まあ、お三方には手を出したくてもそう容易く手を出すことなんてできないでしょうが…』

その言葉に、ディルクたちは納得したように頷いた。テアも後見人であるロベルトを慕っているようであるし、彼と口外しないと約束したのなら、テアは固く口を閉ざすだろう、と分かったからである。それに、先ほどテアがロベルトとの面会を断ったのも、ディルクたちを巻き込むまいと思ったことから発したことであるのならば納得できる、と思っただけだった。

そのディルクたちの考えは間違っではない。

だが、テアが危惧を抱いているのは、アロイスが口にした事柄に関することだけではなかった。

アロイスが口にしたことは決して嘘ではないが、真実のすべてではない。

テアが最も恐れているのは、顔も名前も分からぬ親王派などではなく、その名前も力も明確に分かっている相手。

その相手も、アロイスが言葉にした通り、元王族であるディルクやライナルト、「クンストの剣」であるローゼには容易には手を出すことなどではしないだろうが、それでももしもということがある。何より、少し前にディルクが明言してくれたように、彼らはテアを守るうとしてくれるだろうから。

そうすれば、巻き込まずにはいられなくなってしまふ。

何より、「おじさん」を守るためには…、あんな風に心そのままに駆け寄るなどということは、してはいけなかった…。

しかし、過ぎてしまったことをいつまでも悔やんでいても仕方がない。

ロベルトはもちろん、ディルクたちは今回のことを他言しないだろうし、全ての真実を何れかに知られてしまうことはきつと、ないだろう。ロベルトには、アロイスという心強い人間もいてくれるし、心配することはない。これから、今までのように気を付けていれば

いいことだ。

今度こそ、きつと守り通して見せる。

もう二度と、大切なものを失いたくない。そのためなら、どんなことでもしてみせよう。

テアは鏡から目をそらし、化粧道具をバッグにしまつと、化粧室から出た。

そしてふと、首を傾げる。

「ローゼ？」

テアよりも一足先に化粧室を出たローゼが、すぐそこで待っているはずだったのだが、その姿がない。

きよろきよろと広い廊下を見渡そうとして、その時はつとテアは後ろに飛び退った。

「……っ」

他に人気のない廊下。

そこに、黒づくめの格好をした男が一人、立っていた。

ほんのわずか、その表情が驚きを表していたが、それはすぐに無表情へと変化して。

「テア・ベーレンスだな？」

「……人違いです」

男の手に握られた、鈍く黒く光る物体に、テアは目を細めつつ答えた。

だが、尋ねながらも男は対峙する相手を間違えたとは思っていないらしい。かすかに眉をピクリと動かししたが、続けた。

「大人しく付いてきてもらおう。そうすれば痛い目を見ずにすむ。抵抗するようなら……、殺す」

テアの「あしながおじさん」がロベルト・ベーレンスである。

ローゼはそのことに驚き、それをずっと隠していたテアを水臭い、と改めて思わずにはいられなかった。

アロイスの言う事情があるにしても、「クンストの剣」であるローゼを脅かせるほどの存在はそうないのだから、話してくれていても良かったのに、と思うのだ。

それでも万一のことを考えて慎重になっってしまうのはテアらしさでもある。

だが、もっと信じて、頼ってくればいいのに、と思ってしまうのはどうしようもないことで。

それはおそらく、ディルクも同じだろう、とローゼは考えた。

でも……、どうしてテアは学院に入学することを承諾したのでしょうか……。

テアはロベルト楽団への入団の誘いを蹴った、という。

その理由は、テアが口にしたこともあるのだろう。

しかし何より、テアが首を振らなければならなかった大きな理由がもうひとつあることを、ローゼは知っている。

フォン・オイレンベルク。

その存在が、これまでテアと、テアの母カティアを苦しめてきたことを、本当のところ、ローゼは理解していた。

テアが知らないでいて欲しいと望んでいるから、何も知らないというスタンスを守っているけれども。

テアたちが「クンストの剣」を頼ったのも、その存在から身を守るため。

ならば同じ理由で、テアは学院に入学することも頑迷に拒む、はずだった。

学院にいるのは貴族や、貴族の後ろ盾を得たものばかりだ。学院には、テアが公に姿を現すわけにはいかない人々が集まっている。テアが入学を果たしてしまえばすぐにもその話は「敵」に伝わってしまうだろう。

そのことを何よりも恐れているはずなのに、どうして、とローゼは

考えずにはいられなかった。

テアが音楽のことを本格的に学びたいと思っていたことを知っているから、テアが今学院で勉強に励めることは喜ばしいことだと思う。だが、フォン・オイレンベルクのことはどうなっているのだろうか。ローゼが入学する時、事情を半ば悟りながらもローゼは、自分が守るからと、テアと一緒に入学しようと熱心に誘ったのだ。その時もテアは頷かなかったのに。

ローゼが入学試験を受けようとする際には、カティアも存命だったから、それもあつたのだろうけれど…。

ロベルト・ベーレンスが両者の間に介入した、のでしょうか…。ロベルト・ベーレンス自身は、高名な音楽家であるけれども、大きな権力は持たない、ただの平民だ。

四大貴族に太刀打ちできるとは考えられないが、先ほどの話で聞いた通り、ロベルトが皇帝と密かに懇意だと言つのなら、ひとつの仮説が成り立つ。

何かしらの約束が交わされて、それでテアは……。

テアが学院に入学することを決めた、と聞かされた時から、実を言えばずっと、ローゼはそのことを疑問に思っていた。

この時になつてようやく納得できる答えに辿り着けて、ローゼは少しほっとする。

この仮説が全て正解、というわけではないかもしれないけれど、何も分からないよりはずっとましだ。

テアを守り切つてみせると思つていたけれど、それでも脅威が彼女の存在を消してしまうのではないかと、ローゼは不安を抱えていたのである。父であるモーリッツもテアの入学に反対しなかったのだから大丈夫だと自分に言い聞かせて、これまで不安を紛らわせていたのだ。

だが、警戒すべきことがなくなつたわけではない。テアは相変わらず自身のことに關して何も語ってはくれず、そのことは「敵」が完全にテアのことを諦めたわけではないことを示しているし、彼らの

存在がなくとも学院にはテアに対する暗い感情が渦巻いている。

テアの後見人がロベルト・ベーレンスと知れたらまた、どんな騒ぎになることか…。

ローゼは想像するだけでうんざりした気持ちになった。

誰もかも、テアの背景など気にせず、その演奏を聴いてそれによって彼女を正当に評価してくればどんなにか。

ロベルトと別れ、楽屋を辞してからずっと、ローゼはそんなことを考えていた。

「先に外に出ていますね」

と、共に入った化粧室から、テアより一足先に出てきたのも、少しの間だけでもひとりで色々と考えてみたかったからだ。

そうして、ローゼが冷たい壁に背を付けてテアを待つ体制になったところで、劇場内に時を知らせる鐘の音が響いた。

「時計……」

それにふと、ローゼは眩きを漏らす。

先ほどのロベルトとの歓談の中で、気になったことがもうひとつあった。

『もう、そんな時間か…』

副団長が団長であるロベルトを呼びに来た際。

落胆を隠しもせず、ロベルトは懐から懐中時計を取り出すと、その文字盤を見て溜め息を吐いた。

その懐中時計が。

テアと同じものに見えましたけど…、でも、そんなこと……。

しかしそれ以上考える前に、ローゼは顔つきを厳しくしてはっと身構えた。

殺気、のような物騒な気配を感じたのだ。

ローゼは鋭くその気配を辿ったが、その次の瞬間。

しゅっ、と、小さく鋭利な何かが横を掠めるように飛んできた。

ローゼは俊敏にそれをかわし、大理石の床に跳ね返り転がった細い短刀に眉を寄せる。

曲がり廊下の向こうに、逃げていくような気配。

犯人を追いかけるか否か、一瞬ローゼは迷ったが、身体は自身を狙った獲物への怒りで既に動き出していた。

とっ捕まえて、すぐに戻ってきましょう。

化粧室の中のテアが気掛かりではあったが、ローゼは高いヒールを履いたままで驚くほどのスピードで走り出す。

それを見送る影があったことに、ローゼは気付くことができなかった。

一方、ディルクとライナルトは、楽屋を辞してから化粧室へ向かった女性二人を、ロビーのソファに腰掛けて待っていた。

客の姿はちらほらとまだ残っているが静かで、時折スタッフなのだらう人々が足早に過ぎゆく足音がやけに大きく聞こえる。

「ロベルト・ベーレンスに、まさかこういう形で再会するとはな」

「ああ…。あの人がテアの後見人だとは…」

ディルクはライナルトの言葉に複雑な顔で頷いた。

ロベルト・ベーレンスがテアの音を気に入っただというのは、非常に納得できる話だった。

ロベルトを尊敬するディルクは、だからテアが羨ましい、と思う。

その一方で、テアと確かな絆を持っているロベルトが妬ましい、と思う。

しかしまた、ディルクがテアのパートナーであることをロベルトが認めてくれたことは、この上もなく光栄なことだとも思うのだった。

『これからもテアのことをよろしく』

そう、ロベルトは笑って言ってくれた。

だが、その彼が親王派に狙われているとは、とディルクは苦々しく思う。

テアが後見人を明らかにできず、学院で侮られている原因が、皇族

に関わっていると思うとやるせなかった。既にデイルクたちは皇族ではないのだが、それでもかつてその身がその中であつたことを考えると、どうにも割り切れない。

『…行けません』

と、テアは最初後見人に会うことを頑なに拒もうとした。本当は会いたいと思っているのに、そうしなければならなかったのだ。

けれど、テアが首を振った理由は親王派に関することだけではないだろう、ともデイルクは考えるのだった。

アロイスが言った通り、その理由があるにしても、デイルクとライナルト、ローゼに関してほとんど危険が及ぶことなどないだろう。だからといって、テアが自分の身の安全を図るただけに、最初あんな風に会うことを拒むなどは、テアの性格を知っていれば考えられないことだ。

おそらく何か他にも理由があるに違いない。

それは、ライナルトも共通して考えていることだった。そして。

『私は誰にも話せないものを…持っています。私が何も言わなければ、誰も傷つくことはありません』

ライナルトに向けて、静かにそう言ったテア。こつとも簡単に後見人のことを明らかにしてくれたということは、彼女が最も口にはできないと考えていることは他にあるのだろう。

それが、テアがロベルトには会えないと思っっている、その理由なのかもしれない。

デイルクとライナルトがそれぞれそんな風に考えを巡らしていた時だ。

「……………ライナルト、デイルク！」

ローゼの焦ったような呼び声が、ロビーに反響しながら二人の耳に届いた。

ただならぬ声の調子に、二人は思わず立ち上がる。

ローゼはドレス姿で走りにくい様子も見せず、駆け寄ってきた。

その不安に満ちた表情に、ディルクたちは既視感を覚え…。

すぐに、学院祭の時と同じではないか、とさつと顔を強張らせた。

「テアが……！」

泣きそうな声で、ローゼは続ける。

「テアが、いないんです」

それは、悪夢の再来だった。

「大人しく付いてきてもらおう。そうすれば痛い目を見ずにすむ。抵抗するようなら……、殺す」

黒服の男に銃を突きつけられ、そう脅されても、テアは怯えた様子も見せなかった。

少しの間、テアは警戒と言う名の鎧を纏って沈黙していたが、やがて冷静な様子で口を開く。

「……ローゼを 私より先にここにいた女性を、どうしました？ 全く怯まずに問いかけてきたテアを相手は訝しんだようだったが、表情を動かさずに答える。

「それを知りたければ、大人しくこちらの要求に従うことだ」
なかなか賢明な返答だ、とテアは思った。

ローゼがテアに何も言わずどこかに行ってしまうということはほとんど考えられない。

それが今ここにおらず、テアの目の前には不審な男。

ローゼの不在と今の状況が偶然出来上がったものとは思えない。

おそらくローゼは何らかの手段でこの場から引き離された、のだから。

それを考えれば、この男の他にも人数は分からないが仲間がいる。

とはいえ、ローゼがこういった手合いにどうこうされるなどはテアは思わなかった。

ローゼの実力を、テアは知っているし、信じているから。

それならば、時間を稼いでローゼが戻ってくるのを待つか、自分の身を守るために何らかの行動を起こすか。

ひとまず時間を稼ごう、とテアは決断した。その間に誰かが通りかかって相手が退散してくれるかもしれない。

銃にどうやら付けられているらしい消音器、ローゼを追い払い誰にも目撃されないようテアが一人の時を狙ってきた状況からして、相手は穏便にことが済むのを望んでいる。それを逆手にとるのだ。

「今の状況ではそちらの要求に従うのもやむなし、と言ったところですが…。どこの誰が、どういった目的で私を連れて行くつもりなのでしょうか？　そして大人しく付いて行った場合、私はどこへ行かされるのです？」

銃口を目の前にして、まだ少女とも言える人間が、どうしてこうも落ち着いた問答ができるのか。このままでは、せつかく「クンストの剣」を誘き寄せたのに、何か他の邪魔が入るかもしれない、と男は表情に出さないながら焦りで手のひらを汗で濡らした。

しかし、「クンストの剣」と行動を共にするだけのことはある、ということか、と男は何とか焦燥を抑える。

「……こちらは何も知らされていない。誰がお前をとということを知りたければ、それこそ大人しく付いて来ることだな」

なかなか食えない相手だ、とテアは内心嘆息した。

どうやらそちらの道のプロらしく、隙もない。

だがあちらも、どうやらテアに尋常ではないものを感じているらしく、不用意に近づいてはこない。

受け答えからしても分かる通り、慎重な性格のようだ。

問答無用で動いて騒がれるのを嫌ったのかもしれないが、ありがたいことだとテアは思った。

真っ向から攻撃されれば、テアの力では長くは抵抗できない。

何より相手は銃を持っている。消音器がついているとはいえ音はするから、なるべく使いたくないと考えているのではないかと予想できるが、テアが少しでも大きな声を上げたならその時は誰かに目撃される前にさっさとテアを殺して逃げてしまえるだろう。

今は武器という武器も持っていないし、なるべく隙を見せずにいて、相手が躊躇している間にどうにかこの事態を切り抜けなければ。

テアは周囲を横目で見渡しながら、打開策を練った。

「考える時間をそう長くくれてやることはできない。返答を」
まっすぐに銃を向けられ、返答を促され、テアは拳を握る。

ローゼは戻ってこず、他に人の気配はない。

それならば、今の私が、自分の身を守るためにできる最善のこととは……。

大人しく付いて行って隙を見て逃げ出すということもできるかもしれないが、相手の慎重な性格を考えるとそう易々と逃がしてくれるとは思えない。

何よりもことが大きくなりすぎて、大切な人たちにも大きな心配や負担を強いてしまうことになるだろう。

テアはまっすぐ顔を上げ、あくまでも抵抗することを決めた。

「……分かりました」

その言葉と、自分の有利を改めて思い、相手は油断したか。

「ですが、あなたの言葉に従う義務はありません、ね！」

テアは思いきりよく、手に持っていたポーチを相手の顔面に投げつけた。

投げる時にポーチを開きやすくしておいたので、中のものがばらばらと廊下に飛び散り、男の邪魔をする。

テアは一瞬のその隙を見逃さず、身を翻して走り出した。

相手が不意をつかれ、すぐには動けない内に、廊下を右に曲がる。

少しでも相手の視界に入らない時間をつくるために。

そして走りながら、テアは良案を思いつき、それを実行した。

窓を開け、ヒールを脱ぐと、それを持ってそこから外に身を投げたのである。

すとん、と土の上に身軽に着地して、テアは先ほどまでいたのが一階で良かった、と思った。

だが、ここで安心して立ち止まっていては追い付かれてしまう。

劇場入り口まで逃げ延びて、ディルクたちに合流出来れば、とテアは考え、ヒールを小脇に抱えたまま走り出した。

劇場の隣は、こんもりとした小さな森になっていて、その下の土が走るテアの足をやさしく押し出してくれる。

空は既に夜闇に包まれていたが、劇場から漏れる光のおかげで迷う心配はしなくて良かった。

走りながら、一体誰がこんなことを、とテアは考える。

先ほどアロイスに言われたばかりの親王派、ということとはほとんどないだろう。これまでテアはロベルトとの繋がりを隠し通してきたつもりだし、先ほどのロベルトとの再会を万が一知られていたとしてもあまりにも行動が早すぎる。

それならば、と仇敵のことを考えるが、あの約束がある限り彼らが動くはずはないのだ。もし彼らが約束を破って動き出すとしても…、今はまだ、時期尚早に過ぎる。
だとすれば。

やはり、学院の……。

溜め息をつきたい衝動にかられたが、そんな余裕はなく、テアはただ走った。

学院の誰だかは分からないが、テアを邪魔だと感じて、国外に追放しようとしても画策したのかもしれない。何にせよ、人を使ってこういうことができるのだから、貴族かもしくは財産を持った人間か、いずれかに縁のある人間の仕業だろう。

考えていると、やがて、劇場の入り口が近づいてくる。

もう少し…、とテアがほんのわずか気を緩めた、その瞬間。

「おい、お前！」

前方から潜めたような、けれどきつい誰何の声がして、テアは身体を強張らせた。

少し距離をおいたところに、先ほどの男と同じような雰囲気、黒づくめの人物が二人、いる。

先ほどの男の仲間だ、とテアは直感し、それは間違っていないかった。彼らはどうやら、テアを連れ去るための待機要員のようなのだ。

仲間がいるだろうとは予想していたがこんな風に遭遇してしまうと

は、とテアは自分の見通しの甘さに舌うちしたくなった。

後ろから追いかけてくる男が一人、前に二人、ローゼを引き付けているだろう相手が一人以上。

そう考えれば、最低でも相手は四、五人いることになる。

私のような子娘一人に、用意周到なことです。

皮肉っぽくテアは唇を歪めたが、ふと前方の二人に見覚えがあるような気がして、記憶を辿った。

劇場の方からテアを見つけて追いかけてくる二人のせいで、劇場の方へ足を進めることができず、テアは正反対に方向転換しながら頭を働かせる。

もしかして…、そういうこと、ですか……。

思い当たることがあって、テアは自分が誰の命令で何のためにこうして逃げなければならぬのか、分かった気がした。

だが今はそれが分かったとてどうしようもない。

劇場に逃げ込むことができなくなった今、テアは他の手段で自分の身を守らなければならない。

ローゼたちから引き離されてしまっている分、相手は容赦なくテアを追い詰めることができる。

とにかく、人がいそうな場所へ逃げて、警官か何か頼りになりそうな他者に助けを求めよう。

もしくは、このまま逃げ続けて追手を撒いてから劇場へ戻ろう。

本当は、後者の手段が一番いい、とテアは思った。

もう誰も、自分のために犠牲にしたくないから。誰も巻き込みたくないから。

自分の身は、自分で守るのだ。

それを考えれば、増えた追手がディルクたちのもとへ行かせるのを防いでくれたことは、幸いだったのかもしれない。

男たちは銃を持っているようだし、テアを狙った弾丸が、万が一にでもディルクたちを掠めるようなことがあつたら…。

そんなことは、考えるだけで身が竦んだ。

目の前で倒れ行くディルクの姿を想像しそうになっただけで恐怖が足を止めそうになって、テアは首を振る。

別のことを考えよう、と思っ、朝から感じていた視線のことを思い出した。

おそらく朝からの不気味な視線は、今テアを追ってきている相手のものだったのだろう。

フューラーさんに少しでも話しておけば良かったかもしれないね…。

今更悔いても仕方がないが、アロイスに一言心配ごとを告げて確認してもらえていれば、こんな事態にはならなかったかもしれない。

だが、とにかく今はこの事態をどう切り抜けるのが問題だとテアは思考した。

距離はあるが、確実に後ろから続いて来る足音がある。

落ちている枝を武器にしようか、とも思うが確実に相手を倒せるとは言えず、あまり試したい手段ではない。

あ…、あれは……？

そこでふと、テアの目に止まるものがあった。

少しばかり走る方向を修正して、テアはそちらに近寄る。

テアが走り寄ったのは、森の木に寄生するヤドリギだった。

少し黄色がかった、白くて小さな実をつけている。

思いつくことがあって、テアはその実をいくつか拝借し手のひらに握った。

懐かしい思い出話が、頭の中に蘇って、胸を締め付けるような気がする。

だがゆっくりとそれを思い出している場合ではない。

テアは再び、強く駆けだした。

「私のせいです。私が、テアを一人にしなれば」
自責の念を強くするローゼの肩を、ライナルトはそっと抱いた。
化粧室の前で、ローゼは何者かの襲撃を受け、その犯人を追いかけ
てテアから離れた。

だが、犯人の逃げ足は速く逃げられてしまい、急ぎ戻ればテアの持
ち物が廊下に散乱して、テア自身の姿は欠片も見当たらなかった。
テアが何の連絡もなしに突然消えるわけはなく、その惨状だ。

何もなかったわけもなく、自身に起きたことと関連付けて考えない
ことなどありえなかった。

誘き寄せられたのだ、本当の狙いはテアだったのだ、と、ローゼは
急いでディルクたちの元へ足を向けた。

もしかしたら、ディルクたちのところへテアが逃げ込んだのかもし
れないと。

しかしここにもテアの姿はなく、ローゼは軽い絶望感に襲われて肩
を落とした。

一連の状況を聞きながら、ディルクもライナルトも学院祭のことを
思い出さずにはいられず、顔つきを険しくする。

「また何者かに連れて行かれた…のだろうか」

「かもしれない」

テアが殺された、と最悪の事態は考えたくもなかった。何よりもた
だ殺したいだけならばローゼがいない間に犯行は犯してしまえる。

その場に血の痕などはなかったというし、捕まっただけだ、と思い
たかった。いや、もしかすると誰かに危害を加えられそうになり、
今はまだ捕まっておらず犯人から逃げている最中かもしれない。

「可能性はいくつか挙げられるが、いずれにせよ猶予はそうないだ
ろう」

様々な可能性を頭の中に巡らせながら、ディルクは必死に冷静であ
ろうと努めた。

そうでなければ、激情でただ突っ走ってしまいそうだったのだ。

だがそれでは、守りたいものを守ることができない。

「二手に分かれよう」

デイルクは告げた。

「俺はテアがいなくなつた現場から後を追えないか手掛かりを探して追つてみる。ライナルトとローゼはロベルト氏のところへ行つて何か知っていることがないか聞いてきてくれ。もしかしたら、テアはそちらに身を寄せているかもしれない」

ローゼは何か言いたそうにしたが、デイルクの決然とした態度に頷き、早速ライナルトと共にロベルトの元へ向かおうとした。

一体何者が、どういつ目的でテアを襲つたのか、確たることは分からない。

だがテアを守るために、とにかく行動しなければならなかつた。

しかし、三人がそれぞれ動き出そうとした時だ。

「お三方……！ テアお嬢さんはこちらにいらつしゃいますか！？」
焦る様子で今度駆け寄つてきたのは、先ほど別れたばかりのアロイス・フューラーだった。

彼はテアの姿を探すように視線を彷徨させたが、それでテアが見つかるはずもない。

「それが……」

どうしてアロイスがと思うところはあつたが、ローゼは早口で事情を説明した。

アロイスはそれに顔色を変えて、

「それじゃあ、やつぱりさっきのあれは……」

「何か心当たりがあるんですか！？」

「心当たりと言うか何と言うか、先ほど団長がふと窓の下に目をやった時に、外の森にお嬢さんらしき人影を見たというんですよ。それで心配したあの人の代わりに俺が確認に来たんです。どうやら見間違いじゃなく、あれはテアお嬢さんだったみたいですね」

「外の森につて、一体どういう状況だったんですかテアは！？」

「一人で、何かから逃げているように急いで走つていった　そうです。本当に一瞬で見えなくなつてしまったので、よく分からな

ったそうですが」

「それなら、テアは今、私を誘き寄せた連中に追われて、逃げていくということですか…?」

「おそらく、そうですね」

深刻そうな顔で、アロイスは重々しく頷いた。

「テアお嬢さんのことです。易々と捕まりはしないでしようが、俺が今からテアお嬢さんを追いかけます。皆さんはテアお嬢さんが戻ってきた時のためにもここで待って」

「そんなことはできない」

アロイスの言葉を遮るように、ディルクは厳しい顔つきで言った。

「テアは俺たちの大事な仲間だ。テアが危険な目にあっているというのに、俺たちだけここで待っているというのは無理だ」

ローゼとライナルトもそれに頷く。

「俺たちならば、あなたの足手まといになるということもないだろう。ローゼを誘き寄せた人間と、テアを追い詰めた人間、犯人が複数と言うのは確実だし、相手がどういう武器を持っているかも分からない。いざという時のためにも複数で動いた方がいい」

「…正論で攻めてきますね。いいでしょう」

アロイスはやれやれ、と肩を竦めながらも爽やかに笑った。

「テアお嬢さんは本当に良い御友人をお持ちになりましたね。行きましょう、急がなくては」

何故こんな追いかげごっこをすることになってしまったのか、と先ほどまでテアに銃口を向けていた黒服の男は思った。

たかが子娘一人相手にここまで苦勞することになるとは、昨日までは思っていなかったというのに。

テア・ベーレンスという少女は、暗闇の中を躊躇いを見せることなく駆けて行く。

長い距離を走ってきて、そろそろ疲れをみせてもいいはずなのに未だそれはなく、距離はなかなか縮まらない。

彼女が時折ふと角を曲がる度、その姿を見失いそうになって、ひやりとした。

ひらりひらりとスカートの裾が揺れて、追い詰めているのはこちらの方なのに、玩ばれているような、そんな気すらしてくる。

裏社会に身を置くこの男に、今回の依頼があつたのは、一週間ほど前のことだった。

依頼があると呼び出しを受け、行ってみれば依頼人の代理だという身なりの良い女が待つており、おもむろにこう切り出したのだ。

ある少女を指定した場所に連れて来てほしい、と。

できれば生きたまま、多少なら怪我をさせても構わない。ただ字を書いてもらわねばならないので少なくとも片手は何の問題もないように。

淡々と、女は続けた。

だが、いざという時は殺してしまっても良い。
。 。
いっそ、さつさと殺してくれと依頼された方がまだ簡単だったかもしれない。

テア・ベーレンスという少女を追いかけながら、男は自嘲気味に笑

う。

いざという時は殺してもいいと言われたが、できる限り生かしておけという命令だった。今手を出すのは、気が短すぎるというものだろう。

何より、こちらの都合としても、できれば少女を手に掛けたくなかった。それは、人を殺したくないなどと言う綺麗事から来るものではない。

「クンストの剣」に守られている少女だ。そんな少女を連れ去るだけならまだしも、万が一にでも手に掛けてしまったら…、消されるのはこちらの方だ。

それにしても、厄介な依頼を引き受けてしまったものだと思う。一体どの誰が何の目的で、と問いたいのは、実は男も同じだった。

依頼人の代理の人間とは対面したが、結局男は依頼人の名も聞かなくままで、何故少女を連れていく必要があるのかも教えてはもらえなかったのだ。男も敢えて聞くことはしなかった。より多くを知ることがいかに危険なことか、男にはよく分かっていたから。

だが、この依頼を引き受けない、という考えは最初からなかった。男の仕事に楽で安全なものなどありえないし、仕事を選べる状況でもなかった。示された報酬は莫大なもので、簡単に首を振るのは躊躇われたし、その報酬の金額からしても依頼人が只者ではないといふことは分かったから、断れば今後この世界で生きていくのが難しくなったかもしれない。

「クンストの剣」のことさえなければ、こんな依頼、と男は思う。

「クンストの剣」が関わっておらずとも仕事で手を抜くつもりはないが、とにかくその存在はあまりにも目障りだった。

テア・ベーレンスはシューレ音楽学院に在籍し、そこで生活をしており、警備の目があるそこから滅多に出てこない。外出する時も、「クンストの剣」を伴っていることがほとんど。

そうであるから、依頼人は冬休み、少女が学院の外に出る時を狙え

ばいいと告げた。

しかし学院から出て少女が帰省のために向かうのは、「クンストの剣」が統べるブランシュ領。それにはもちろん、「クンストの剣」も同行する。

だから、学院からブランシュ領へ入るまでのわずかな時間。少女がひとりになった瞬間を逃さないようにしなければならぬ。

今日一日、少女が学院を出てから、男は依頼人が寄こした他のメンバーと気を尖らせながら、ずっと少女が一人になる時を狙っていた。だがチャンスはなかなか巡って来ず…。

ようやく策を用いて「クンストの剣」を誘き出し、目標を孤立させることができたのだった。

その上、慎重に慎重を重ね、劇場の廊下には見張りを立たせたし、少女の友人らしき男性たちにも見張りを付け、間違いの起らぬようにした、つもりだった。

それなのに、その絶好の好機ですら、少女を捕まえるには至らず。

それでも、とにかく少女が同行者と離れ、一人きりになった今しか依頼を果たすことはできまい、と男はしつこく少女を追いかけているのだった。

それにしても、「クンストの剣」を常に隣に置くテア・ベーレンスという少女は一体何者であろうか。

大層な依頼人にいざという時は殺してもいい、と言わせるほどの、何かがあるのか。

少なくとも、普通の学生は男のような人間に銃口を向けられて平然としていることなどではしないし、こんな風に逃げ続けることも難しいだろう。

詮索は無用と分かりながらも、男が余計なことを考えていた時だった。

狭い石畳の道に入りこんだ少女が、急に立ち止まってこちらを向いた。

よくよく目を凝らせば、少し先は行き止まりだ。

ようやく観念したかと思うが、しかし少女は、まだ距離があるとはいえ、複数の男相手に、不敵な、表情で。

「……あなた方の雇い主は、フォン・オイレンベルクですね？」
そう言った。

テアは劇場隣の森を抜け、石畳の街の中を走っていた。

テアはローゼのように、高いヒールで動き回ることに慣れていない。窓から飛び降りる際に脱いだヒールを小脇に抱えて、テアは素足のままだった。

陽が沈んでからもう随分と時間が立っており、石の道はすっかり熱を失って、冷たい。

しかし走り続けるテアの身体は熱かった。

白い息が短く吐き出され、すぐに暗い空気に溶けて消える。その、繰り返す。

勝手の分らない街の中で、できれば人が多い場所にと想ったが、その意思に反してどうやら人気がない路地にテアは入りこんでしまったようだった。

だがそれはそれで、悪くはない。見知らぬ他人を巻き込むことを考えずに済むし、たくさん曲がり角でなるべく行く方向を変え、追ってくる男たちを翻弄するにはもってこいだ。

ローゼのようなドレスでなくて良かった、と足に触れるスカートの感触に、テアは思う。テアのドレスは短く、ふわりとしてそう動きの邪魔をしないが、ローゼのドレスは足に纏わりつきそうで、見るからに動きにくそうな塩梅だった。あれで戦おうと思えば戦えるローゼを、テアは素直にすごいと感心し尊敬する。

だが、動きやすいものの、気になってしまうのは、スカートの丈が

やや短めなので、足が人の目に触れる面積が広い、ということだ。こういう状況だから仕方がないが、デイルクたちがいたらこんな走り方はできなかっただろう。

昔は……、もつと長めのスカートで、もつと動きやすいシンプルなワンピースだったから、何も気にせず走っていられた。何よりもまだ子どもで、羞恥心もそう、なかったように思う。

月が皓々と照らす宵闇を見上げて、テアは過去のことを思い出した。思い出す小さなテアも、こうして見知らぬ街を駆けていた。命を狙ってくる追っ手を振り切るために。

母と、二人で。

そう、あの頃はいつだって、母が隣にいてくれたのだ。

だから、追っ手のことが恐かったけれど、恐くなかった。

母がいてくれれば、二人でいれば、きつと大丈夫だと、信じていたから、走り続けることができた。

一人ではなかったから、母が生き抜く事を願ってくれたから、強く地面を蹴って駆け出すことができた。

時には、母に隠れていてもらい、小回りの利くテアが一人で追っ手を撒くようなこともあった。

その時でも、一人だったけれど、独りではなかった。

母は必ずテアのことを待っていてくれる。そう知っていたから。

そうして追っ手を撒いて母の許へ誇らしげに戻れば、テアの無事を確認するように、母はいつだってテアを強く抱きしめてくれた。不謹慎かもしれないけれど、その温かさがテアは好きだった。

ここが自分の帰る場所なのだ、と実感できて。

母に望まれていることで、命を狙われて死を望まれているテアでも生き続けることが許されているような気がして。

それでは、今の自分はどんなのだろうか。

テアは自問する。

母は、もういない。

だからといって、易々とこの身を相手に委ねていいのかというと、

答えは否だ。

母はもういないけれど、命をかけてテアを生み、その生をずっと願
い続けてくれたその人のために、テアは生き続けなければならぬ。
例えばテア自身が己の命を軽んじていたとしても、それでもこの命は
母の願いのために守らなければならない。

それに、あの頃も、今も、こうして一人で走り続けているとしても、
テアは独りではない。

それをちゃんと、テアは理解している。

母がいなくなってしまうっても、テアには新しい帰る場所がある。

そこに、きつと、帰るのだ。

月の光を受けて駆けながら、ピアノが弾きたいとふとテアは思った。
思えば今日は朝からピアノに触れていないのだ。

だから、早く帰ろう。

思いながらも、襲ってくる寂しさがあって、テアは涙の気配にこく
りと息を飲んだ。

感傷に流されていてはいけない。

今はただ、生き延びる、術を。

テアはまた角を曲がりながら、塀に見つめたくぼみに、追ってくる
男たちには気付かれないように素早く、持っていたヤドリギの実を
押し込んだ。

先ほど森で取ってきた、小さな実である。

もしかしたら、誰かがテアを助けるために追ってきてくれるかもし
れない。そこで、テアの通ってきた場所が分かるように考えた印が
これだった。

相手が気付いてくれるかは分からないがやらないよりはまし、とい
う程度の気休めだが、テアが確実に劇場に戻るための一手段として
も悪くはない。

ただ来た道に戻るといふのは追っ手のことを考えても無理だろうか
ら、おそらく最初はまたよく知らぬ道に行くことになると思うが、
違うルートで戻るにしても、通れば行きの道が分かるようにしてお

くのは有効な手だろう。

とはいえ、テアは、追っ手を撒いた後のことはあまり心配していなかった。星空で方角を確認することも怠っていなかったし、幼い頃からの慣れもあるから何とかなるだろうと、その点は楽観視している。

問題はどうかやって追っ手を撒くかだ。

相手はつかず離れずの距離ですつと追いかけてきているし、何かしらこちらから仕掛ける必要があるだろうが、複数の男にどう対処するか…。

昔はまだ身体が小さかったので簡単にどこかに隠れたものだったが、今は状況からしても難しい。

また、先ほどから何か利用できる物はないかと探しながら足を動かしているのだが、なかなか良い物には巡り合わなかった。

体力の限界を考えても、そろそろ何かの手を打たなければとテアは考えを巡らす。男たちの体力が先に尽きてくれればいいのと思うが、そんな期待は抱くだけ無駄と言っものだろう。

……、あれを使わせてもらいますか。

そんな時、目についたものがあったて、テアはそれを利用することに決めた。

先ほども一度目にしたものののだが、決心がつかずに保留にしたのだ。

だが、逃走を始めて時間も大分立つし、ここは勝負に打って出るべき、だろう。

何よりもここは、先ほどよりも条件が良い。

テアは決断し、すぐに実行した。

立ち止まり、男たちの方を向くように急転換する。

驚いたような顔を浮かべる男たちの様子がほんの少し、おかしかった。

そうしてテアは、攻撃を仕掛ける。

「……あなた方の雇い主は、フォン・オイレンベルクですね？」

最初の爆弾投下はそれだった。

「どうやら、テアお嬢さんはここから森の外に出てしまったようですね」

テアはここから外に脱出したらしい　と分かった窓から、アロイスを先頭にデイルクたちは外に出、テアの足跡を辿っていた。

森の中は、人の通った跡が何となくだが分かって、アロイスが持つ灯りのおかげで特に迷うこともなく進むことができたのだが。

森を一步出れば、続くのは舗装された石畳の道で、足跡を辿りたくとも辿れない。

「さてどうしたものでしょうか」

アロイスの口調はどこかのんびりとも聞こえたが、その目は油断なく周囲を見渡している。

デイルクたちも何か手掛かりがないかと暗闇の中目を凝らした。

「二手に分かれてはどうでしょう」

「それがいいかもしれんな」

ローゼの呟きにライナルトが頷いたが、アロイスはふと目を眇めて若者たちを止めた。

「いえ……、そうする必要はなさそうです」

「何かあつたんですか？」

「ええ、多分」

曖昧に返したが、迷いのない足取りでアロイスは駆け出した。

デイルクたちはほんのわずかの不安を覚えながらも、アロイスの後に続く。

すぐ次の角でアロイスは右に曲がり、そうしながら後続する彼らに断言した。

「ほぼ間違いない、テアお嬢さんはこちらにいます」

「どうして分かるんですか？」

「これですよ」

再び路地を曲がりながら、アロイスは左手の塀の方に手を伸ばし、何かを掴み取る。

その何かを軽く渡されて、ローゼは首を傾げた。

手のひらに乗るのは、白っぽい小さな実。

「これは…、ヤドリギの実、ですか？」

「はい。テアお嬢さんが目印に置いていったものだと思います」

「テアが？」

「森を抜けてすぐにところにも、方向を示すようにいくつか一直線に並べてありました。それからこうして曲がる場所にも」

「それは…、確かに自然なものではないようですが、テアとも限らないのでは？」

「大丈夫です。ヤドリギは団長の恩人なんですよ。いや、木に恩人と言うのは変ですかね…、恩樹？ まあとにかく、ヤドリギというのは団長に縁があるものなんです。森の中でお嬢さんが目に留めるのは当然、と言うべきでしょう」

本当だろうか、と思うが、その真偽を確かめるにも当人であるテアを探している最中である。

どうやら捕まらずに逃げ続けられているようだが、今一体どんな状況にいるのだろうか。

その苦境を考える度、ディルクは胸が締め付けられるような思いがした。

どうして、こんなことになる前に駆けつけられなかったのだろうか…。無理な状況だったと頭では分かっているが、感情は納得しない。

守ってみせると思っているのに、大切なものはこの手のひらをすり抜けて行く。

前の時も、そうだった。

苦い思いで、ディルクは唇を噛む。

だから、今度は。

必ず、守りきる。

まだ、間に合う。

アロイスが敏捷に駆けて行くすぐ後ろで、ディルクは強く大地を蹴った。

このアロイスと言う人物も、一体何者なのか、疑念を持ってしまふ。こういう類のことにどうやら慣れていているらしいと分かるが、それがどうしてロベルトの楽団にいるのだろうか。

ロベルト・ベーレンスが側に置いていいるからには、悪い人間ではないのだろうと思う。

態度こそ砕けているものの、ロベルトの付き人としてロベルトのことを大事にしている点は間違いないようだし、だからこそロベルトの被後見人であるテアを守ろうとしてくれているのだろう。

疑うべきではない。

だが、もし万が一アロイスが敵方の人間で、尤もなことを言ってディルクたちを翻弄していたとしたら、どうだろう。

そんなことまで考えてしまって、ディルクは内心首を振った。

だとしても、こんな風に駆けずり回るような、面倒なことをする必要はない。

不安で疑心暗鬼にかられている。

だがそれだけではなく、これは嫉妬だな、と自嘲気味にディルクは思った。

テアの後見人であるロベルトの側にいる人間なのだから、当然なのかもしれない。

けれど彼が、テアのことをよりよく知っているように、見えるから。こんな時に、何を馬鹿な、とディルクは強く拳を握った。

今は、テアに追い付き、彼女を守ることだけを考えよう。

テア、どうか……。

そうして、見知らぬ夜の街を駆け抜けて。

唐突にアロイスが立ち止まり、「しっ」とディルクたちを制した。

道の向こうに人影が見えて、ディルクたちははっと息を呑む。

そこに、テアがいた。そして彼女が対峙するのは、五人の黒服の男たち…。

「どうやら相手は銃を持っているようですね。下手に出て行くとま
ずいことになるか…？」

ひとりごちるアロイスの言葉に、戦慄が走った。

テアと、男たちの内の一人が、何か言葉を交わしているようだったが、その内容は彼らには届いてこない。

チャンスを待つて固唾を飲むディルクたちの前で、そしてそれはあまりにも素早く実行された。

テアが、やおら脇に挟んでいたヒールの片方を片手に持ち、それを濃い色のサングラスをつけた男の目元に強く叩きつけたのである。

その上、彼女は勢いよく片足を振り上げ、男の急所にその蹴りをクリーンヒットさせると、踵を返し、また駆け出した。

あまりのことに唾然とする男たち、そしてアロイスたちであったが、今がチャンスとローゼが誰よりも早く前に進み出る。

「…行きますよ！」

業を煮やしたようにローゼが一喝し、アロイスたちははっと我に返ると、彼女の後に続いた。

静かだった夜が、賑やかな夜に変貌した瞬間だった。

「……あなた方の雇い主は、フォン・オイレンベルクですね？」

テアの台詞に、男たちの内二人が　わずかに反応を示した。

何故、という驚愕の表情に、テアはやはり、と思う。

先ほど彼女が、見たことのある顔だ、と思った二人だ。

間違いなく、相手はフォン・オイレンベルク。

だが、男たちの内でも、依頼人の本名を知っているのはごく一部だ

けらしい。

仲間二人の反応を見て、他の男たちにも本当にそうなのかという疑念と動揺が浮かんでいる。

「もつと限定して言うならば、公爵の長女、でしょう。私を遠い土地にでも送って、二度と戻って来られないように…、そんなつもりでいる。違いますか？」

「黙れ！」

驚愕を見せた内の片方　後方にいた男が、銃を取り出してテアの方へ向けた。

この男の顔…、濃い色のサングラスをかけているが、テアには分かった。

この男と、もう一人。

以前一度だけ、テアが母とオイレンベルク家に連行された時、邸にいたSPたちだ。

憎い憎い、母の敵…。

ずっとテアたちを追い詰め苦しめてきた男たちの一人…。

テアは、自身が冷え冷えとした瞳で相手を見つめるのを自覚した。

この場でテアが男たちと同じ凶器を持っていたならば、彼女の方がこの男たちを撃ち殺していたかもしれない。

胸の内を冷たいものが満たす。

感情に支配されそうになって、けれどテアは自身を律した。

劇場の中でテアに銃口を向けた、今はテアの一番近くにいる相手が、感情的になつた後方の男を抑えるようにしながらも、先ほどと同じように銃口を向けてテアに近づいてくるのを、油断なく見据える。

「余計な口は聞かない方が身のためだ。依頼人が誰であったとしても…、お前は追い詰められた。大人しくこちらに付いて来るしかない」

そう言つて男が腕を伸ばしてくるのを制するように、テアは口を開いた。

「依頼人が誰であつたとしても、あなた方は報酬がもらえればそれ

でいい、というわけですね。ですが、このまま私を連れて行ったとしても、あなた方にとっては本意ではない結果になるでしょう。公爵の娘が依頼した今回のことを…、公爵本人は決して許しはしないでしょうから」

男の腕がピクリと動き、躊躇を示す。

「…戯言だ」

「そう言うのなら、確認してみることです。公爵家の現当主に落ち着いたテアの言葉に、男は迷いを覚えた。

テアの言葉に嘘は見えない。

しかし、信じられるわけのない内容だった。

テア・ベーレンスというのはシューレ音楽学院に通う平民、それだけの存在ではないのか。

どうして四大貴族の名前が出てくるのか、男が不審を覚えるのは当然だった。

今回の仲間の反応から見て、依頼人に関してテアの言ったことが間違っていないようだとは分かる。

だからといって、狙う相手の言葉を鵜呑みにし依頼を果たさないとするのは。

「取引をしませんか？」

逡巡を見せた相手に、テアは不敵に笑って見せた。

「私はあなた方に付いて行ってもいい…。けれど、連れて行く場所はオイレンベルクの当主の前にしてほしいのです。そうすれば今私が言ったことが証明できますし…、あなた方のことも不問に処すようお願いします」

「…万が一お前の言った通りだとして、その取引を呑んで、相手がその嘆願を聴き入れてくれるのか？」

「ええ」

テアは頷くふりをして、ほんの一瞬だけだったが、男に気の緩みが見えた。

「それはもちろん…、どうか知りませんが！」

そして。

テアはその一瞬をついて、小脇に抱えたままだったヒールを思い切り相手の目元にぶつけた。

敵の急所を狙うのは、護身術で習う一番最初のことである。

テアはサンングラスさえなければこれだけで済んだのだがと思いがながら、次に思い切りよく足を振り上げて相手の急所に蹴りをくらわしてやった。

相手が悶絶する内に、素早く踵を返して走り出し、残りの男たちを、
、 ” 誘い込む ” 。

これで、次の手が成功すれば、とテアが思ったその時だった。

「がつ！」

と男の呻き声が後ろから聞こえて、振り返る。

そこには。

鮮やかなドレス姿で、男に拳を打ち込むローゼの姿があった。

続いて、デイルク、ライナルト、アロイスが姿を見せる。

彼らもローゼと同様に、不意をつかれた相手を完全に気絶させてしまった。

そうして、黒服の男たちは本当に「あつ」という間もなく、沈められてしまったのだ。

思わぬことにテアはあつけにとられて、茫然と、助けに現れた友人たちを見つめる。

もしかしたらと全く考えないわけではもちろんなかったのだが、ここまで来てしまつてはと、自らが彼らの元へ帰ることばかりを考えていたのだ。

「テアっ！」

立ち竦むテアにローゼは駆け寄ると、思いのままに親友を抱擁した。
「無事で良かったです…！ もう、どうなる事かと思いましたが、本当に良かった…！ ごめんなさい、あいつらの一人にまんまと誘い出されてしまって、あなたを一人にしまいました。」

「いいえ、そんな…」

ローゼの温もりに、テアはじわじわと緊張が抜けてゆくを感じた。
「ありがとうございます、ローゼ。おかげで助かりました…」
そっとローゼの肩にテアは頭を寄せる。

帰って、こられた…？

そう、思った。

「ああ、でも、思い出すだけで腹が立つてきましたよ。私が一発でノックダウンさせてやったあいつだったんですけどね、先ほどは逃げられてしまつて…」

ローゼはテアから離れると、憎々しげに気絶した男たちの一人を一瞥した。

アロイスが、どこから取り出したのか、手際よく男たちに縄をかけている。

「…怪我は、ないか？」

それを見、もう大丈夫なのだと力を抜くテアに、固い声がかげられた。

そうして、歩み寄ってくるディルクにテアは頷く。

「はい、大丈夫です。皆さんのおかげで…、ありがとうございますました」

「いや…。駆け付けるのが遅くなって、すまなかつた」

頭を振るディルクに、テアはそんな、と首を振った。

「そんなことはありません！ 本当に助かりました。今から、一か八かの賭けに出るところでしたし」

「賭け？」

ディルクもローゼも、テアの無事を確認するように近付いて来ていたライナルトも、テアの言葉に首を傾げる。

「えっと…恥ずかしながら…、あそこの樽を伝って扉まで上つて、それから樽を道に転がして…、それで相手を撒いてしまえばいいと」

テアは壁沿いに積まれた樽を指して説明しながら、やはり言うのではなかつたかと思つた。

子どもの頃はともかくとして、今のテアの年齢で、しかもこの格好でやることではない。

「一度扉に上つてしまえば家の庭などに隠れさせてもらうこともできますし…、ここは道が狭いですから、混乱して結構上手くいくと思っただんです…」

だんだん言い訳がましくなっていく。

だが昔は、何度か使った方法だった。

空の樽があつた時には、その中に隠れたり、その中に入ったまま樽を転がして逃げたりしたこともあつたものである。

「いやあ、さすがテアお嬢さんですね。面白いことをしようとなさる」

無茶なことを考える、とデイルクたちは絶句していたのだが、そこで楽しそうに笑つたのは、男たちを拘束し終えたアロイスだった。

「ヤドリギの実もなかなか粋な計らいでしたし。おかげで追い付けました」

「ああ…、気付いていただけたのですね…」

実を言えば、ロベルトのことをよく理解しているアロイスなら、と少しばかり思っていたから、テアはほつと微笑みかけた。

「そう言えば、ヤドリギが恩人…とか仰ってましたね？ どういうことなのか、お聞きしてもいいですか？」

好奇心を刺激されたらしいローゼが尋ねると、アロイスは笑って答える。

「多分 皆さんにならお話しても問題ないでしょうから、お答えしましょう」

そう言って話したアロイスを、ほんのわずかどきりとしながらテアは見上げた。

「昔々、団長が素晴らしい恋をなさつたそうなんです、その恋人に初めてキスできたのがヤドリギのおかげだったんですよ。なかなか可愛い話でしょう？」

「ああ…」

神誕祭の日、ヤドリギの下にいる男女にはキスしても良い、という言い伝えがあるのだ。

「雑誌記者なんか喜びそうですね。ロベルト・ベーレンスにはそういう浮いた話がありませんから」

「ええ。ですからここだけの秘密にしておいてください。相手のこともありますからね」

アロイスは悪戯っぽく人差し指を立てて見せた。

「さて…それでは、と。団長の恋路についてはまた今度本人に聞いてもらうこととしましょう。……テアお嬢さん、こいつらの処分なんです、こちらに任せてもらっても構いませんかね？」

そう切り出したアロイスに、ローゼは怪訝な顔をした。

「警察に引き渡すのが一番ではないですか？」

「貴族連中が今回のことに絡んでいるとしたら、簡単に釈放されてしまうか、こいつらにとつてはもつと悪いことになりますよ。それくらいならば、誰がどういう目的でお嬢さんを狙ったのか確実にこちらで突き止めて対処した方がマシかと」

貴族連中が、とアロイスが口にして、ローゼたちは顔を顰めた。

「それは確かに一理あるかもしれませんが……。テア、この男たちどういふつもりでテアを狙ってきたのかとか、何も言わなかったんですか？」

「ええ、なかなか慎重で、何も言おうとしてくれませんでした」

テアの言葉には嘘はなかったが、彼女はあえて黙っていた。

一体誰がどういふつもりでこんなことをしでかしたのか…。

それをテアが話してしまえば、テアの出生に関して漏らすようなこととに繋がるかもしれない。

何よりも、彼らがテアを狙った理由を知ればきつとディルクは傷つくだろう。

「それなら、信頼できる人にお任せした方がいいのかもしれないけれど…。こういう風に言ってしまうては失礼にあたるかもしれないが、フューラーさんにはそれができるのですか？」

率直にローゼに尋ねられて、アロイスは気にした様子もなくからりと笑った。

「そう言えば、俺に関しては詳しい話をまだしていませんでしたね。疑うのも無理からぬことですし、全く失礼なんてことはないですよ。実を言うのですね、俺は」

アロイスが言いかけた時だ。

「……隊長！」

アロイスたちがやってきた方向から、駆けてくる人影が二つある。アロイスより若干年少の青年が二人、アロイスと同じような正装に身を包みながらやって来た。

まさか黒服の男たちの仲間かと一瞬思われたが、彼らはアロイスの前までやって来て敬礼してみせる。

「失礼します、隊長」

「もう隊長じゃないと言ってるだろう。首尾は？」

「はっ！ 劇場に二名、隊長に言われた通りの連中を発見し、拘束しています。楽団の撤収は無事終了しており、そちらには問題ありません」

アロイスはそれに鷹揚に頷いた。

「よし。こちらの方も、お前たちに手伝ってもらう前に片付いた。悪いが、これを二つずつ運んでくれないか。後の一つは俺が持つていくから」

「イエス・サー！」

「だからもうそんなに固くしなくていいんだって……」

「つい癖が出てしまいました、隊長」

「わざとやってるだろ……？」

にやりと笑った青年たちに苦笑して、アロイスはテアたちの方へ向き直った。

青年たちはテアたちにぺこりと丁寧にお辞儀をしてから、アロイスに物扱いされた男たちを二人ずつ運んでいく。

ローゼたちはアロイスと青年たちのやりとりに驚きを隠せずにいる

が、ようやくアロイスがどういう人間なのか、というのが少しばかり理解できた。

「隊長…ですか」

「元、ですけどね。今でこそアロイス・フューラーなんて名乗ってますが、実を言うと俺はこの国の生まれじゃなくてですね、昔は他国の軍籍にありました。諜報関係の部隊で指揮をとってたのが一番長かったですかね。それがどういう因果か、色々あつて死にかけていたところを団長に助けられました。今はその助けてもらった恩返しがしたくて、団長の護衛という立場で楽団にいさせてもらっています。まあ、主には雑用ばかりしてますけどね。あいつらは俺の昔の部下です。あいつらも団長に恩義を感じて、俺と一緒にこつちについてきちやっただんですよ。頼れる奴らです」

道理で、とデイルクたちは納得した。

それならばアロイスの隙のなさも、先ほどからの妙な手際の良さも納得できる。

そしてテアもそのことを知っていたから、アロイスのことを信じて色々と頼りにしているのだった。

「そういうわけで、こういう輩をとつちめたりするには慣れてますから、ご心配なく。団長もお嬢さんを狙った奴らのことですから、便宜を図ってくれるでしょうし」

「申し訳ありません…、お願いします」

テアが頭を下げると、アロイスは首を振った。

「お嬢さんがそんな風になさることはありません。悪いのはこいつらですし、俺はこれが仕事ですからね」

アロイスは気安く笑って、残された一人の男を担ぎあげた。

「それよりも、お嬢さんは本当に怪我なんかはないですか？ もし何かあるなら劇場に控えている医師に診てもらいましょう」

「いいえ、それは大丈夫です。それに…、そろそろ駅に向かわなければ、時間が……」

「ああ、そうでしたね！ 大丈夫なら、いいんです。それなら、皆

さんは駅へ向かってください。皆さんの荷物は部下に駅まで届けさせますから」

これから、テアとローゼは帰省のためにブランシュ領へ、ディルクとライナルトはこの休暇中に滞在する予定の場所まで、鉄道を使って向かう予定だった。

「いいんですか、そんな…」

「はい、気にしないでください。テアお嬢さんがこんなところまで来ることになったのには、こっちの甘さもあつたわけですし、罪滅ぼしさせてください」

テアたちが気にしないようにと、アロイスは軽く笑って見せる。

その気遣いが分かったから、遠慮はしないことにした。

「では…、すみませんが、お願いします」

「はい、お任せされました」

おどけたように笑うアロイスに、テアはおずおずと切り出した。

「…それから、あとひとつ、お願いがあるのですが…」

「なんででしょう?」

「おじさんに…、伝えてほしいことがあるんです」

言うてから、テアは少しだけどうすべきか悩むように躊躇いを見せたが、やがて告げた。

「その…、『私の問題』で心配をかけてしまつてすみません。けれど『約束は破られていませんから』。それだけ、お願いします」

アロイスはその言葉を聞いてかすかに目を見張つたが、やがて腑に落ちたというように頷いた。

「…分かりました。ではその通りにお伝えしておきます」

頷いたアロイスに、テアは伝えたかった本当のことを伝えられたらしい、と眼差しで謝意を示す。

「それでは、俺は一足先に行かせてもらいますね。本当なら駅までお見送りしたいところですが、テアお嬢さんには頼もしい方々が他にもいることですし…。こいつらに関して、何か分かったらすぐにお知らせしますから」

「お願いします。本当に、ありがとうございました」
「いえいえ」

アロイスは深くお辞儀するテアにほんのわずか苦笑を見せると、手を振って男を担ぎ、来た道を戻っていったのだった。

guardian 21 (後書き)

ちよつと長めになつてしまいました…。

切りどころが難しくちよつと続き方が微妙だったでしょうか…。

vs 黒服との戦いはテアたちの勝利ということですねこれにて幕引き。

ロベルトのコンサート編も終わりにとうとう近づいて、

次回はディルクとのラブラブー直線です(笑)

「皆さんにも…、ご迷惑をおかけしてしまって、すみませんでした」
アロイスを見送って、テアは他の三人にも深く頭を下げた。
それにローゼは眉を吊り上げる。

「もう、テアのそういう律儀なところは嫌いじゃありませんけど、いちいちそんなことしなくっていいんですよ。大体今回のことで迷惑をかけてきたのはあの男たちの方で、テアはなんにも悪いことなんてしていないじゃないですか」

腰に手をあててはつきりと言うローゼに、テアは顔を上げて曖昧に笑った。

「ああもう、思い返すだに腹立たしい奴らでした！ もっと痛めつけてやればよかったです。一体誰がどういつつもりで送りこんできたのやら…、その辺りはフューラーさんの連絡を待つことにしますけれど、はつきりしたら首謀者に関してはただじゃおきませんからローゼの剣幕にライナルトは苦笑しながら、宥めるように言う。

「それはそうとして…、駅へ向かおうか。冷え込んできたことだし…」

他の三人はその提案に頷き、テアはずっと抱えたままだったヒールを履こうとして、ふと手を止めていた。

「あ……」

片方のヒールが、折れてしまっている。

先ほど、黒服の男の顔面を打ったせいだ、とすぐに分かって、テアはやってしまった、と思った。

「テア、ヒールが？」

ずっとテアの拳動を見守って、本当に怪我などがないか確認していたディルクが声をかける。

「はい…、折れてしまったみたいです…」

「これは、ここで簡単に直すのは難しそうですね…」

ローゼもそれを見て顔を顰めた。

そしてディルクはさらにあることに気付いて、顔を険しくする。

「……テア、もしかしてずっと素足のままで走ってきたのか？」

「ええ、私はローゼのようにヒールで走ることは慣れていませんから」

当然のように返したテアに、頭を抱えなくなった面々であった。

「ローゼ、テアの足を…」

「はい」

言われずとも、とディルクの言葉に、ローゼは道の脇に置かれた木箱にテアを座らせて、テアが戸惑うのにも構わずその足の裏を診た。「切ったりはしていないようですけれど、擦れて赤くなっていますね…。霜焼けには幸いになっていないようですが。鉄道に乗ったら救急箱を借りて消毒させてもらうことにして…。今は一応ハンカチを撒いておきましょう」

「ローゼ、大丈夫ですよ、これくらい…」

「これくらい、じゃありません！」

きつぱりと撥ね退けて、ローゼはハンカチを取り出す。

「じゃあせめて自分でやらせて下さい…。汚いですから…」

しかしローゼはテアの言葉を無視して、さっと応急手当をしてしまった。

「全く、もつと自分の身を大切にしてくださいよ…。こんなに冷えた地面の上をずっと走ってきただなんて…。仕方がなかったとは思いますが…」

「すみません…」

テアは頭を下げるしか術を持たず、申し訳なさそうに眉を下げる。

「だが、どうする？ このままテアを歩かせるわけには行かないだろう」

「大丈夫です、歩けますから」

ライナルトの言葉にテアはそう返したが、誰も賛同しなかった。

ただ、ディルクがさっとテアに近付き、驚いた顔のテアを横抱きにして抱き上げてしまう。

「デイ、ディルク」

「これで問題ない。駅周辺に行けば靴の代わりも見つかるだろう」戸惑いの声を上げるテアに構わずそう言うと、ディルクはそのまま歩き出した。

素晴らしい、とローゼは目を細め、苦笑を浮かべるライナルトとそれに続く。

「ちょ、ちょっと待ってください、こんなの、駄目です。下ろしてください」

ただ一人、テアはディルクの腕の中で頬を紅潮させながら抗議した。「ヴァイオリニストのあなたが、こんな重いものをずっと持っていないなんて、いけません…！」

そうやって、自分のことを「こんな重い物」と主張し、ディルクを案ずるテアに、ディルクは思わず口元を綻ばせる。

その時ようやく、随分と自分は緊張し怒りもしていたらしいとディルクは自覚した。

学院祭の時と、同じように。

テアを失ってしまう可能性に、怯え、身を強張らせていた。

ただ、待つことしかできなかったあの時とは違い、テアの足取りを追って自分で足を動かすことができたから、こういう言い方をするのも妙だが、まだ良かった。

あの時アロイスが無理にでもディルクたちを止めようとしていたのなら、もしかしたらアロイスを殴り飛ばしてでも、ディルクはテアの元へ駆けつけようとしたかもしれない。

絶え間ない焦燥にかられて。

だが、もう一つ、あの時と異なることは。

今回は本当に、テアが死と隣り合わせの位置にいた、ということだ。改めてテアが銃口を向けられていた光景を思い出して、ディルクは

身震いしそうになる。

自分が銃口を向けられてもこうはなるまい。

もし、駆けつけたのが自分ひとりだけだったならば、とディルクは白藍の瞳に物騒な色を浮かべて思った。

全員、手加減も忘れて殺していたかもしれないな、と。

失うかもしれないという恐怖　それを与えようとした相手に対する怒りが、ディルクの胸の内に滾る。

『首謀者に関してはただじゃおきませんから』と言ったローゼに、ディルクは全面的に賛成だった。

一体どの誰がどんな理由でこんなことをしでかしたのは知らないが、その犯人を決して許しはすまい。

「……大丈夫だ。駅までお前ひとり運んだところで支障をきたすような軟な腕じゃない」

だが、まだ恐怖と怒りの残滓は強く胸に残っているものの、こうしてテアに触れていれば自然と固くなっていった心も解れてくる。ディルクはようやくよく自然な表情でテアに微笑みかけた。

「ですが……!」

「それに、こうしていると安心できるんだ」

反論を封じるように言われた言葉に、テアは首を傾げた。

「え……?」

「お前が無事だったと　実感できる」

真っ直ぐ前を見つめて言うディルクに、テアは絶句する。

それほどまでに強く心配され、案じられていたのだと、分かって。

遠い昔、抱きしめてくれた母の腕を思い出す……。

テアはようやくよく身体の力を抜き、けれどなるべくディルクの負担にならないようにして寄り添った。

「……ごめんなさい、ディルク……」

その囁きは、多分ディルクの耳にも届いただろう。

けれど彼は何も言わなかった。

ただほんのわずか、テアを抱きかかえる手に力がこもって、それは

まるで、気にするなと伝えるようで…。

『俺のパートナーとして共に音楽をやらないか』

あの時、頷かなければ良かったのだろうか、とテアはディルクの体温を感じながら思った。

あの時、この手を取らなければ、彼にこんな心配をかけることもなかった……？

けれど、そんな後悔は間違っている。

それは、テアの母がテアを産んでくれたことを否定するのと同じようなもの。

小さかった頃、テアが存在があったからこそオイレンベルクは親子を追ってきた。

だからテアはずっと、思っていたのだ。

私さえ、いなければ……、と。

けれどそれを表に出すことは決してしなかった。

母が悲しむと、分かっていたから。

テアがいてくれてよかった、と言ってくれる母を傷つける考えだと分かっていたから。

だから、あの時ディルクの手をとった自分の選択も、テアは否定しない。

それこそがディルクを傷つける行為だと、分かるからだ。

私はこれからもこの方と共にある。

少なくとも、このパートナーの関係が続く限り。

ディルクが、望んでくれる限り。

テアたち四人は、鉄道の発車時刻に間に合うように駅に到着することができた。

駅にはすでにアロイスが手配してくれた彼の部下が四人の荷物を持

つてきてくれていて、その辺りの受け渡しもスムーズに進み、またテアの靴の代わりと足の消毒も終わることができた。

結局駅までディルクに運んでもらうことになってしまったテアは恐縮しきりだったが、縮こまるテアをローゼが引っ張って、四人は一つのコンパートメントを占領することに成功する。

やがて、四人を乗せた鉄道は、時間になるとゆっくりと発車した。

「なんだかあつという間でしたけど、もう冬休み、なんですなぁ…」
ようやく腰を落ち着けてほっとすることができて、窓際に座ったローゼはしみじみと呟いた。

「とはいえ、冬休みが明けたらすぐに試験ですから、あんまりゆっくりもしていただけませんが。試験前には生徒会役員選挙も控えていることですし…。特にライナルトやディルクは、去年大変そうでしたよね」

その言葉に、ローゼの隣のライナルトが頷く。

「ああ。だが今年は引継資料も作ってしまったし、あとは選挙管理委員がしっかりとやってくれるだろうから、まだ気が楽だ」

「結局はまたしばらく色々と担ぎ出されるかもしれないがな」

苦笑するディルクに、テアは少し前から疑問に思っていたことを尋ねた。

「そう言えば、今年はお二人とも立候補しない予定と伺いましたが…、何故とお聞きしてもよろしいですか？」

惜しむ声は山とあるだろうし、ディルクもライナルトもやりがいを持って務めていたと思うのだがと首を傾げる。

「生徒会よりもずっと大きなものをつくり上げようと言うから、そちらの方が余程面白そうだと思ってな」

テアの疑問に、ライナルトはそう答えて正面に座るディルクに視線をやった。

ディルクはそのライナルトを何か物言いたげに見やったが、やがて不思議そうな顔をする女性陣に向けて実は、と口を開く。

「もう少しちゃんとした形になってから言おうと思っていたのだが

……。新しく、楽団をつくらうと思うんだ」

それは、ローゼも初耳だったらしい。テアと二人で驚きの表情になった。

「それは、学院の中で、ということですか？ それとも
それにディルクはつきりと告げる。」

「ロベルトのように……、たくさんの国で様々な聴衆に音楽を楽しんでもらえるような楽団をつくりたい。今はまだ本当にその準備段階だが、夢で終わらせるつもりはない。卒業したらすぐにでも国内で演奏する機会をつくるつもりだ」

告げるディルクのその瞳には、冷静さと熱意が同居している。本気なのだ、と誰もが疑わない真っ直ぐさだった。

「……実を言うと、学院に入学した当初目指していたのはロベルトの楽団に入団すること、だったんだがな」

懐かしそうに笑ってみせて、ディルクは言う。

「音楽を学ぶうちに、やりたいことが大きくなって……。指揮科に転向したのも、だからなんだ。自分ひとりで奏でもいい、アンサンブルも楽しいと思う。だがもっと多くの人と、一緒に音楽を楽しみたい……。一人ではできないことを皆でやりたいと、そう思うようになったんだ」

ディルクではなく、他の人間が語ったならば、それは本当にただの夢だったかもしれない。

けれど、彼ならきつとその夢を現実にしてしまえるだろう……。

そんな気持ちにさせられるものが、ディルクにはあった。

テアは感嘆して、素直に応援の言葉を口にする。

「あなたなら きつとできます。きつと……」

黄金の瞳が確信を持って、ディルクを見つめた。

ディルクは一瞬息を呑み、やがてかすかに照れと嬉しさの混じる微笑を口の端に浮かべた。

「ありがとう……。お前にそう言ってもらえると、これからも頑張っていけると思うよ」

そして誤魔化すように、軽い口調で続ける。

「だが、その時はお前の後見人の聴衆をかつさらってしまつかもしれないが」

「おじさんも、負けてはいられないとこれまで以上に熱心にやっていくでしょうから、分かりませんよ」

まだ見ぬ未来に期待を寄せながら、テアも悪戯っぽく返した。

「ですが、おじさんのライバルの調査も兼ねて、是非聴きに行きたいです。最初の公演のチケットを、今から予約しておいてもいいですか？」

「ああ。では、お前が一番の客だな」

「では二番手は私で」

「了解だ」

ローゼが拳手するのにディルクはまた頷いて。

「これで、少なくとも聴衆がゼロということとはなくなったな」

最後にライナルトがそんな風に言って、四人で笑い合ったのだった。

「あっ！」

そうして、鉄道が走り始めてしばらくして。

談笑していた四人は、外が暗闇に包まれているということもあって、ほとんど外に視線を向けていなかったのだが、ふと窓に目をやったローゼが声を上げていた。

「雪ですよ、雪！」

それに、他の三人も窓の外へ目を向ける。

「初雪、か…」

ちらちらと舞い始めた六花は、暗闇の中でも　だからこそか、なかなか風情のある光景を見せていた。

「じつとしているからこんなにも寒さを感じると思っていたのですけれど、実際に随分冷え込んでいたんですね…」

しばらく四人はじつと流れて行く外の景色を見つめていたが、やが

てすつくとローゼが立ち上がり言った。

「私たち、ちょっとオープンデッキに出てきますね。そこからの眺めもきつと素敵でしょうから」

たち、と言った通り、ローゼの腕はライナルトの腕を掴んで引いている。

ライナルトは苦笑しながらも立ち上がって、行ってくる、とディルクたちに告げた。

「風邪をひかないように、気を付けてくださいね」

二人の邪魔をするのもなんだと、ディルクもテアも同行するとは口にしなない。

「大丈夫ですよ。これくらいで風邪を引くほど軟じゃありません。

じゃあ、行ってきますね」

コンパートメントのドアを開け放ちながら、ローゼはディルクに目配せをした。

その意味を明確に読み取って、ディルクは目で軽く頷いてみせる。

そして、寄り添って通路の向こうに姿を消したローゼとライナルトを見送り、テアはゆっくりと今度は反対方向の窓の方へ首を向けた。夜の雪は、幻想的なまでに美しい。

だが、テアは雪というものがあまり好きではなかった。

ピアノの音も、近くの温度も、全てが雪に吸い込まれ奪われてしまうような気がするから。

幼い日 凍えそうな夜のことが思い出される。

寒さのために母の体調が思わしくなかった時、その小さな咳の音でさえしんと積もる雪にかき消されていくようだった。自分の身体さえ冷えていく中で、母の温もりまでこの雪で失われはしないかと、テアは何度も何度も母の温度を確かめずにはいらなかった。

その恐怖を、今でも思い出して。 。
隣のディルクでさえ気付かないような、ほんの小さな溜め息をテアは零す。

「…三月の、雪の上のダイヤモンド…」

その時、そんなデイルクの眩きが聴こえて、テアは顔を上げた。

すぐに、デイルクの白藍の瞳と目があつて、何故か動揺してしまう。

「し…シベリウス、ですね」

「ああ、何となくそれを思い出したよ…」

見つめられながら告げられて、テアはその歌曲の詩を思い出した。

顔が熱を覚えそうになるのを誤魔化すように、テアはデイルクの腕に目を落とす。

「あの、本当に腕は大丈夫でしたか…?」

「お前は先ほどから、そればかりだな」

デイルクに横抱きにされている間も、その腕から下ろされてからも、テアはずっとデイルクの心配ばかりしていた。

デイルクはその心配を吹き飛ばすように軽く笑う。

「本当に、大丈夫だよ。これからタクトを振れと言われてもすぐに振れるくらいにはな」

「それならば、よいのですが…」

「俺のことよりも、お前のことだ。お前は平気だ、と言うが、あれだけずっと走って逃げ続けて…。時間が経ってからどこか痛むということもありえないではないし…。あんな輩に囲まれて…」

デイルクが気にかけてくれていることが分かって、テアはそっと微笑した。

デイルクは、命を狙われずと走って逃げ続けたテアの身体と、そして精神の両方を思いやってくれているのだ、と。

「私も…大丈夫です。小さい頃からの旅のおかげでこれでも体力には自信がありますし、モーリッツさんにも一応扱かれましたから、あんな連中、どうということもありません」

強がりではない、テアの言葉。

だが、いたって平然としているテアだからこそ余計に、デイルクは気掛かりだった。

ローゼから聞いた、テアの過去の断片。

テアにとっては、過去に何度か遭遇したような出来事だったのかも

しれない。

けれど、慣れているから大丈夫だ　　などとは思ってほしくなかつた。

あんなことに、慣れるべきではないのだから。

けれどそんなデイルクの思いも見透かしたように、テアは続けた。

「銃口を向けられた時は少し…、どきりとさせられましたけれど…。

私は決して死なない、と思っていましたから」

確信に満ちた口調。

「どちらかというと、死ねない、に近いですが…。私にはまだやりたいこともありますし…。私という人間を認めてくれる人たちのところへ絶対に帰るのだと決めていましたから。何があっても、最後まで抵抗するつもりでした。例え発砲されても、避けてやるくらいの気持ちで…。これでも、意外にタフなんですよ。だから、大丈夫です。それに、もし何か異状が出てきたら、きちんと伝えますから…。」

テアの言葉は、死を遠くにあるものだと、その存在を避けて言う根拠のないものではなく。

死の存在を身近に感じながらも、それに屈しない強さを秘めたものだった。

痛みや恐怖に鈍くなるのではなく、それを感じながらも打ち克とうと言うのだ。

その強さに、デイルクは敬意を感じて目を伏せた。

「お前は、すごいな…」

「え？」

小さく咳かかれた言葉がはつきりと聞きとれずに首を傾げるテアに、デイルクはもう一度言った。

「お前はすごい、と言ったんだ。……あの男に食らわされていた蹴りもなかなか見事に入っていたし……。」

「みつ、みみみ、見ていたんですか!？」

デイルクたちが登場してきたタイミングからして、見られていたか

もしれない、とは思っていたが、それを事実として確認させられテアは赤面した。

「ああ…。あれは効いただろうな…」

そこで重々しく告げたのは、わざとだった。

このまま先ほどの件に関して話を続けてテアに負担を強いるのも嫌だったし、自分が何かしらの感情に従って何かを口走ってしまいそうである。

「忘れて下さい、綺麗さっぱり消去してください」

そうやって必死に言い募るテアは、先ほどの一撃を放った人物とは思われない可憐さであった。

「そうだな、忘れても良いが…」

ディルクはそんなテアの様子を堪能しながら、ローゼの目配せを思い出して、今が良いタイミングだな、と思い、ポケットの中にそつと手を入れる。

「その代わりに、これを受け取って欲しい」

「え？」

差し出された物を反射的に受け取ってから、テアは手のひらに置かれたそれを見つめた。

青と白のボーダー模様の包装紙で包まれ、青のリボンで飾られた、手のひらに乗るサイズの箱は、どう見ても。

「神誕祭、だからな。これまでもお前には世話になったし、今日はお前のおかげでロベルトの演奏会にも足を運ぶことができた。その礼だ」

「そんな、いつもお世話になっているのは私の方で」
首を振るテアにディルクは笑った。

「いいから、開けてみてくれ」

「は、はい…」

促されて、テアはぎこちない手つきで、それでもなるべく綺麗なままにと包装を剥がしていった。

出てきたのは、紺青色をしたビロードのケース。

それだけでいかにも高級感があるような気がして、テアは触れるのを躊躇ってしまった。

「大したものじゃなくて、悪いのだが…」

さらりと、しかしテアがなるべく気にしないようにと思いを込めて、デイルクは告げる。

そうしてテアがそつとケースの蓋を開けて出てきたものは、天然石を散りばめた美しい装飾のバレッタだった。

「綺麗、ですね…」

その輝きにテアは見入ってしまったが、どう見ても、「大したものではない」というような物には見えない。

「あの、でも…」

「留めやすい金具のようだし、これならお前でも大丈夫だろう？」

読書の時や勉強する時、髪を束ねるのに使ってくれ」

デイルクが、読書の際などにテアの手元が暗いのではないかと気に掛けてくれたことを思い出して、ずっと気にしてくれていたのか、とテアはその気持ちだけで胸がいっぱいになるような気がした。

「デイルク」

「受け取って、もらえるだろうか？」

真摯に尋ねられ、テアは手のひらの上に乗ったケースをぎゅっと抱きしめる。

自分がこの贈り物を頂いてしまってもいいのかと、躊躇いが全くないわけではないけれど。

「はい…、あの、ありがとうございます…。わざわざ…。…嬉しいです」

「…良かった」

微笑したテアに見上げられ、それを直視できないながらもほっとして、デイルクも微笑む。

「テア、よければ少し、お前の髪に触れさせてもらえないか？」

「え…あ、は、はい…」

楽しそうにデイルクはテアの手元のバレッタを取り上げて、テアは

その様子首を横に振ることもできず頷いていた。
ディルクはどこからともなく櫛を取り出して、結われていたテアの髪を一度ほどいてしまう。

さらりと零れた髪に、まるで宝物でも扱うように櫛を入れられ、その大きな手のひらに、テアはどきりとした。

心臓が、うるさい、とテアは思っただ。

ディルクがテアに触れていた時間はそう長くはなかったのだが、テアにとってはとても長く、そしてとても短くも感じられたのだった。

「…どうだ、不快感などはないか？」

「はい…」

後ろですっきりと髪がまとめられているのをテアは感じて、頷いた。そっと後ろに手をやると、バレッタの冷たい感触にあたる。

先ほどまで高い位置でまとめられていた髪だが、それよりも下の位置でシンプルに留められているので、ずっと楽に感じた。

いつもとは違う感触に、テアはわずかの戸惑いを覚えながら、ディルクを見上げる。

「やはりお前の髪に…よく、映えるな」

神々しいまでの微笑みで、ディルクは言う。

テアはそれを真正面から見えてしまい、眩しい太陽を直視してしまっただかのように顔を熱くした。

「…本当に、先ほどの蹴りも忘れてしまいそうだ」

「ディルク！」

その軽口に、思わず声を上げ、テアは一瞬前とは違う意味で体温が上がるのを自覚した。

ディルクが喉の奥で楽しそうに笑うのを見て、唇を尖らせる。

「…もう、本当に忘れてください」

テアは頬を紅潮させ、けれどいつまでもディルクが笑っているので、話をそらすように自身のバッグに手を伸ばした。

「……今が良い機会なので、私もお渡しします」

こほん、と小さく咳払いをして、小さな袋を手にする。

「あなたから頂いてしまった後で、こうしてお渡しするのもなんだかやりにくいですが…。その、私も、神誕祭のお祝いと、いつもお世話になっているお礼…です」

その言葉の後に差し出されたシンプルな袋に、ディルクは目を見張った。

自分が渡すことばかり考えて、もらうことは全く考えていなかった。ので、予想外の喜びが胸を満たす。

「その、こういう贈り物をする機会が今までにあまりなくて…、少しでもお気に召していただければ良いのですが…」

台詞通り、自信のなさそうな様子で差し出されたそれを、ディルクはしっかりと受け取った。

「いや…、ありがとう…。開けてみても良いか？」

「はい…」

ディルクは慎重な手つきで、小さな袋の中から贈られたものを取り出した。

それは、とても綺麗な音でしゃらり、と音を立てて、ディルクの手のひらの中で転がる。

「これは…、オルゴールボール、か」

ディルクの親指の先ほどの大きさで、一見したところは、簡単に言ってしまうえば金属のボール。

それはけれど青みがかった色で光を反射して、まるで満月のように美しかった。

「はい。…いつもディルクは生徒会長として、寮長として立派に仕事を果たしていて…、勉強に関しても演奏に関してもその努力は簡単に真似できるものではありません。けれど、だからこそ…、時にはこういうものでも、ほっとしていただけたらなと、思っています…。」

「すみません、生意気でしたでしょうか…」

「いや…」

小さくなるテアに、ディルクはまた輝くような笑顔を向けた。

「そんな風に言われるほどのことはない、と思うが…。お前がそん

な風に俺のことを気に掛けてくれることは…、本当に何より、嬉しいことだよ」

心からディルクは告げて、手のひらの上でその贈り物を転がした。しゃらり、しゃらりと、心を癒す音が流れる。

まるで、テアのピアノのようだ。優しく綺麗で繊細で…。俺を、満たす。

「ありがとうございます…大切にしますよ」

「いえ…。私も 大事に、使わせていただきます」

そんな風に微笑み合う二人の胸には、冬の寒さも関係なく、ただ温かい灯が燈っていたのだった。

ロベルトのコンサート編、これにて完結です。

次回からはタイトルを新しくして、新章を開始したいと思います。

と、ふと気がついてみれば、夜の灯火連載開始から既に一年と少し経っていて、

何となく自分でびっくりしたりしております。

その間にお気に入り登録していただけたり、評価や感想をいただいたり、

読んでもらえているのだなあと思うととても嬉しくて、

読んで下さっている方々には本当にいくら感謝してもし足りません…。

まだまだ話は続いていきますが、これからも夜の灯火をよろしくお願います。

さて、と言いながら、更新に少しの冬休みをいただきます…。

大みそかの日までごたごたしていきまして、すみません……。

遅くとも1月末までには戻ってくる予定ですので、
新章をお待ちいただければ幸いです。

それでは、少し早いですが、

Merry Christmas & Happy New Year !!!

interlude

親愛なる「あしながおじさん」へ

新年おめでとうございます。

年末年始、いかがお過ごしでしょうか。

私はブランシュ領で、いつものことではありませんが、毎日のようにピアノを弾いています。

冬休みが明けると試験があるので、その勉強にもかかりきりです。

入学試験以来の大きな試験なので、今から何だか緊張しています……。

さて、先日は演奏会へ招待してくださり、本当にありがとうございます。また。

私の語彙では表現しきれないのが悔しいくらい、とても素晴らしい演奏でした。

そして、会うことは叶わないだろうと思っていたおじさんと、久々に直接言葉を交わせたことが、とても嬉しかったです。

ですが、おじさんと別れた後であんなことが起きて……、ご心配をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。

多忙なはずの学院長先生も、そのことに関して冬休みの間にブランシュ領を訪れて下さり、色々詳しい話をしました。

この手紙が届く頃、学院長先生から直接お話を聞くことになると思います。どうかよろしく願います。

おじさんたちには迷惑ばかりかけてしまって……、本当にすみません。

フューラーさんにも、ご迷惑をおかけしてしまったことへの謝罪と、
助けて下さったことへの感謝をお伝えください。

それでは、新しい年も、全てが良いようになりますように！

テア・ベールレンスより

「そんなに心配しなくても、彼女は元気だったよ」

シューレ音楽学院院長マテウス・キルヒナーは、被後見人からの手紙を手にしたロベルト・ベーレンスにそう告げた。

新しい年が明けて、数日が経っている。

多忙の合間を縫って、マテウスはロベルト楽団の事務所を訪れていた。

事務所と言ってもささやかなもので、事務室にちょっとした会議室と応接室がくつついている程度のごんまりとしたものだ。

ただし、その隣には楽団員のための規模の大きな練習場が設置されているのだが。

「お前たちにはかり後始末をさせてしまうことを気に病んではいたがな」

その事務所の応接室のソファにゆったりと腰掛け、出された紅茶に口をつけながらマテウスは続けた。

彼の目の前に座るのがロベルトで、その後ろに控えるようにアロイス・フューラーが佇んでいる。

年始と言うこともあって、今この事務所にいるのはこの三人のみ。

どこかひっそりとした中で、音楽界で名の知られた二人と元軍人の一人は、神誕祭の前にテア・ベーレンスの身に起きた事件について、言葉を交わすのだった。

「あの子は責任感が強すぎるからな…。悪いのは仕掛けてきたあちらだし、気にし過ぎることはないというのに…」

届けられた被後見人の手紙に目を通したロベルトは、それを丁寧に畳みなおすと、そっと机の上に置く。

「で、テアから詳しい話は聞いてきたが、拘束したと言う連中

は今どこに？」

「俺の伝手で、ここから近いある場所に閉じ込めてあります。尋問は既に終えて、首謀者に関しては口を割らせました」

マテウスの質問に答えたのは、アロイスである。

「ふむ…さすが、というべきかな。オイレンベルクの子飼いで口を割ったか」

「いえ、子飼いと言っても大した連中ではなかったようですよ。それよりもやはり、テアお嬢さんには首謀者が分かっていたようですな」

マテウスが軽く口に出した名前に、アロイスはうつすらと笑みを浮かべる。

テアを襲った男たちを連れていこうとした際に、テアが残した言葉があった。

その場にはディルクやローゼ、ライナルトもいたので、犯人に関して分かったことを直接的な言葉では口にできなかったようだが、聡明な彼女は彼らに覺られずロベルトたちにはしかし分かるようにメッセージを残したのだ。

その言葉は、『約束は破られていない』。

テアが言う『約束』が指すのはたったひとつだけ。

オイレンベルクと交わした、あることと引き換えに、テアには手出しをしないという、約束。

それが破られていない、とわざわざ言うことはつまり、テアを襲った連中はオイレンベルクの関係者ではあるが、オイレンベルクの総意でテアをどうしようとしたわけではないということ。

そして、さらに彼女は『私の問題』だ、と言った。

その示すところは。

「ああ。以前にオイレンベルクの邸で見たことのあるSPが混ざっていたらしい。それでカマをかけてみたらすっかり相手が肯定の反応を見せてくれたということだ」

「なるほど、それで…」

「だが、まだ約束は交わされたばかりで、当主が万が一動き出すにしても早すぎる。何よりもあちらが本気で仕掛けてくるならば、もつと容赦なく抜かりなくやるだろう。それで、オイレンベルクの当主が動いたわけではない、いや、むしろ何も知らなかっただろうとテアは考えたらしい。実際に絞った連中もそう答えたのではないかな？」

「ええ、その通りです。何も知らないふりをして、ということも考えられましたが、やはり当主が関わっているという可能性は低いでしょう。現にこうして失敗しては、あちらにとってのリスクが高すぎます。それに口を割つちやいましたからね。公爵家の長女に命じられたと。何も知らなかったと言うにしても、吐かせる名前が自身の娘のものでは言い逃れできません。一応情報を知っている者は襲撃者の中でも数名でしたし、口止めもしていたようですが……」

「……これから襲撃者を連れていくつもりでいるが、そうとなれば事実を知った時真っ青になりそうだな、公爵は」

幾分同情気味に、マテウスは呟く。

ロベルトはそれに厳しい顔で尋ねた。

「しかし、何故、オイレンベルクの長女がテアを？ テアがオイレンベルクの系譜に繋がる人間だとは知らないはずだろう。確か彼女はテアと同時にシュールに入学したと記憶しているが……。テアが自分の問題だと言ったのは、その繋がりで何かあったのか」

「……彼女はテアと同様にとても優秀な生徒だよ。偉そうにしているだけのお貴族様たちとは違って率先して様々なことに取り組む積極性があるし、人望も厚い。だが……、そう、彼女は優秀すぎたのかもしれん」

「初めての脅威が……、テアだったと？」

「しかも専攻も同じピアノだ。何よりも……、知っていたか、ロベルト」

少しだけ人の悪い笑みを、マテウスは浮かべて。

「ディルクが殿下と呼ばれていた時……だがな、彼女は婚約者候補だ

ったことがあるんだよ、デイルクの」

「ま…さか、そんなことで　！？」

ロベルトは皆まで言われずとも全てを察し、絶句して、次いで込み上げる怒りを感じた。

それを読んで、宥めるようにマテウスは言う。

「お前だつて”あの時”は半狂乱だったじゃないか？　本当に失いたくないものがある時　人はどんなものにだつてなつてしまつてものだ」

何故テアを傷つけようとした相手を庇うような言い方をするのか、とロベルトは怒鳴りたくなつたが、その相手もマテウスにとっては大事な生徒なのであると気付いて、何とか堪えた。

「シューレでももう少して後期が始まる。そうすれば新しいパートナーを組むことができるからな。学院内でテアに手出しすることはもう難しいし、今しかないと焦つたのだろう。…襲撃者はテアを捕まえてどうするつもりだつたのか、それも吐いたのか？」

「ええ。万が一の時は口封じもかねて殺してしまえということでしたが、捕える事が出来たならば国外追放か…、人身売買組織や他国の奴隷商のところへやつてしまおうとでもしていたようです。まあ、死体を作つてしまふよりはそつちの方が逆にやりやすいでしょうからね」

既にそのことはアロイスから報告されていたが、改めて聞かされてぶるぶるとロベルトの拳が震えた。

今回は本当に僥倖なことで、テアは怪我らしい怪我もせず無事だったが、もし万が一敵の思い通りになつてしまつていたら　と考えると、それだけで恐怖と怒りに襲われる。

「それもテアの推測と同じ…か。ライバルを蹴落とすにしても過激な方法だ、お前がそんな風に蒼くなるのも無理はないが…。あの時と同じような暴走はするなよ？」

「そんな風に心配しなくとも、テアは無事だつたんだから、あの子が気に病むようなことはしない。だが…、テアはそんなことまで推

測していたのか…？」

それなのに、手紙にはこちらに対する気遣いの言葉ばかりで。一層、首謀者を許せない、という気持ちに襲われたが、ロベルトはぐっと堪えた。

「他にはテアは何か？」

「今後の対処について希望を告げられた。まず、あの取り決めに関しては破られていないようなので、例の件を公表することはしない。だが今後同じようなことがあつては困るので、首謀者に対してはこれ以上テアに干渉しないように、当主から厳命させる。直接テアを襲った連中についてだが、これも今後一切テアに関わらないという条件で、厳しい処罰や命を奪う行為は止めて欲しいということだ」

「それではほとんど…、不問に付す、ということじゃないか」

「まあ、首謀者に対してはそれくらいしか手がないしな。テアも余り大げさにしてほしくないのだから、私もテアの希望通りにするのが最適なのではないかと思う。あまり妙な動きを見せるとどこかの誰かに色々と嗅ぎつけられるかもしれないしな」

「だがそれでは…、これからもテアはその相手と同じようにシユーレに通うのだろうか？ それはテアにとって…」

「そこまでお前が気を揉む必要はなかるう」

憂慮を浮かべるロベルトを、マテウスはぱつさり切り捨てた。

「テアがそれでいい、と言ったんだ。お前が考えているようなことは全部考えた上で出した結論だろう。お前がとやかくしたところで何にもならん」

「しかしな…」

「信用してやれ。テアならば処せる。何より、敵などこれからいくらでも増えていくんだ。その度にお前がそんな風に過保護にしてやるのか？ できまいよ」

厳しい言葉に、ぐうの音も出なかった。

「テアは確かに一人で何もかも背負いすぎるくらいがあるから、お前の気持ちも分かるがな。私も最初は、お前に同調して護衛を付け

ていればと思つたものだし…」

今回の事件をマテウスはロベルトからの手紙で知り、学院祭の時の事件と同様に自身にできたことがあったのではないかと思つてしまつた。

だが、直接事情を詳細に聞きに行くことのできないロベルトの代わりにブランシユ領へ足を運び、テアと会つて。

彼女ならばどんな困難も乗り越えていけるだろうと、確信したのだ。何よりも、学院祭の時にも思つたことではあつたが、テアは決してひとりきりではなく、彼女と共にあることを願う仲間たちがいるから。

そこにしゃしゃり出るほど、無粋にはなれそうになかつた。

「多くの場合、才能のある子どもにとって、家庭は温室であるか火消し道具であるかのどちらか…か」

「そういうことだな」
もつともらしく、マテウスは頷いて。

「とにかく、襲撃者たちやら首謀者やらへの対応はこれから私が直接オイレンベルクと協議して行おう。あと考えておくべきはアウグストのことだが…」

「黙つて終わらせると拗ねそうだな」

「まあ、一応概要は伝えておく。あいつも忙しいし、今のところ変な手出しはできないだろうからそれで問題ないだろう」

この二人が話しているのを聞いていると、その名前の持ち主に關して大切なことを忘れそうになるんだよな…。

頷き合うロベルトとマテウスの二人を見て、何となくアロイスは遠い目になつた。

「それではあまり時間もない。アロイス君、捕まえた人間を連れていくのに一人貸してくれるか？」

「ええ、構いませんよ」

「そろそろ連れていくと目立つからな。今回は話が通りやすそうなのを一人連れて行って、後のメンバーはその後あちらに回収しても

らった方が楽だろう。君には手間をかけて申し訳ないが、それで構わないかな」

「もちろん。では、ひとり呼んできますので、少々お待ち下さい」
「ああ」

アロイスは颯爽と応接室を出て行った。

それを見送り、ロベルトはゆっくりと口を開く。

「……しかし、そうか、ブランシュ領へ行って来たのか」

「ああ。ゆっくりとはできなかったがな。…挨拶は、してきたよ」
「そうか……」

ロベルトはそっと瞳を閉じる。

やがてすぐにアロイスが部下を一人連れて戻ってきて、マテウスに紹介した。

よろしく、と気さくに言っつて、マテウスは別れの挨拶を口にする。

「では、紅茶をありがとう。アロイス君にあまり迷惑をかけるなよ、ロベルト」

「私が一体どんな迷惑をかけたと言っつんだ？」

「あはは、もっと言っつてやっつてください」

「アロイス……」

無然としたロベルトに、マテウスはくすりと笑みをもらして。

「ああそうだ、あとこれを忘れていたな。新しい年も、全てが良いようになりますように！」

Match 1 (後書き)

もう年が明けてから一月経とうとしています、

明けましておめでとございます。

長らく間を空けてしまい、申し訳ありませんでした！

これからまたペースを戻して更新していきたいと思いますので、

(それでもあまり早いペースとは言えませんが…)、

どうぞよろしく願います。

見渡す冬景色はほんの少し、寂しさを感じさせる。

けれど、それにも味わいがあった、とても良い。

冬休み、テアが身を寄せているブランシュ領　ブランシュ家の邸のすぐ近くに、小高い丘がある。

そこには光の樹、と呼ばれる背の余り高くないほっそりとした幹の木々が立ち並んでいて、テアはなだらかな丘の一番高いところに生えているその樹の前に立ち、街並みを見下ろしていた。

この丘はフォン・ブランシュの邸の方からしか近付けないような形になっており、他に人気はない。

まだ朝早い時刻だと言うのもその理由のひとつだろうけれど。

冷たい風が吹きつけてきて、テアは少し、身を震わせる。

ここは、ブランシュ領に身を寄せるようになってからの、テアの気に入りの場所だった。

テアと　、それから、母カティアもこの場所を気に入っていた。

ここから目にできる景色は美しい。人々の営みも、季節毎に移り変わってゆく自然も、どちらも目にする事ができる。

だからカティアは、ここに眠りにつくことを願っていた。

テアのすぐ隣の光の樹の根元には、白い墓石がひっそりと横たわっていた。

テアの母カティアの眠る場所であることを示す、墓標が。

明日から冬休みが明け、シューレ音楽学院での授業が再開される。

今日にはこの地をまた立つため、テアは母に一時の別れを告げに来たのだった。

しばらくテアは、冷たい風を受けながらもそこに立ち尽くしていら

彼女が訪れてから随分経って聞こえてきた足音に、静かに振り返る。

「……テア？ そろそろ時間です、けど」

遠慮がちにやってきたのは、ローゼだ。

「もうそんなに経ってしまいましたか……。すみません、わざわざ呼びにきてもらってしまって……」

「いいえ。私も挨拶していいですか？」

「もちろんですよ」

テアは笑って、ローゼと並んだ。

「行ってきますね。テアのこととは私がちゃんと守り抜きますから、大船に乗ったつもりでいて下さい、カティアさん」

拳を握って告げられたその言葉にテアは苦笑したが、続けて言った。

「では、行ってきます。お母さん」

穏やかに告げて、テアはそつと踵を返す。

また頑張ってきました。だから、見ていてくださいね……。

そうして歩き出す背中を、冷たくも優しい風がそつと後押しして……

……新しい年が、始まるうとしていた。

新年が明けて、冬休みも終わり、シユール音楽学院で授業が開始されるという、前夜。。

学院の講堂において、年明けを祝うパーティが開催されていた。

参加は義務付けられてはいないが、親交を深めたり情報を交換したりするため、ほとんどの生徒・教師が参加するものである。

基本的にはパートナーといった同伴者と共に、という慣習があるが、それも必ずというわけではない。

春に行われる、学院内コンクールの後に開かれるパーティとは違って、わりと気軽なものとなっている。

それへ テアとディルクも参加していた。

実を言えば、未だにダンスが苦手なドレスも着慣れていないテアはあまり気が進まなかったのだが、ディルクの方は生徒会長だということに参加しなければならなかったのだ。

旧年中、ディルクは無理をしなくてもいい、別に一人でも構わないのだから、と笑ってくれたのだが、申し訳ない気持ちになつてしまふのは仕方がない。

ローゼには同伴者がいないとディルクには次々ダンスの申し込みが来てもう大変なことになるのだと耳打ちされるし、しかも他の女性を誘つても良かったのに、ディルクはテアというパートナーがいるのに他の女性を誘うのは抵抗がある、と言ってそうしなかつたのだ。そんなこんなで、別に心底嫌だと言つわけではなかつたし、こうした場にも慣れておいた方がいいだろうと思ひ、テアは行くことを決めたのだつた。

とはいえ、やはりこういう場は苦手だ。

と、テアは小さく溜め息を吐きながら、一人グラスを傾けた。

この国の法律では成人は十八からとされ、まだ誕生日を迎えていない十七歳のテアは未成年であるので、もちろんその手にするのはアルコールではなくジュースである。

会場に入り、最初の一曲をディルクと踊つたまでは良かったが、その後はディルクも生徒会長として立ち回らなければならず、テアは今ひとりだつた。

ローゼやライナルトもパーティーには参加していたが、それぞれ他の交友関係で会場をあちこち行つたり来たりしているらしい。

会場には豪華な食事が並んでいたが、緊張もあつてかそれらに手を付ける気にはなれず、テアはそつと壁際にもたれる。

生徒たちから微妙な評価を受けているテアに、しかもディルクがパートナーということが気後れを引き起こすらしく、誘いをかけてくるような男性はいなかつた。

それに関しては全く不満などない。むしろダンスが不得手なテアにとつては幸運なことだつた。先ほど一曲ディルクと踊つたことに対

しても、ディルクの優雅さがあまりに眩しすぎて、自身のダンスの拙さに全く申し訳なかつたと思つているのである。

テアは会場を一望し、煌びやかな世界をまるで他人事のように眺めた。

馴染めない、と思つてしまふのは、幼い頃からの思い込みだろうか。生い立ちからくる、反感だろうか。

ローゼに着飾らされて、今のテアの姿はどこ誰が見ても立派な淑女であつたのだが、テア自身にはまるで自覚がなかつた。

自覚がないまま、音楽家として生きていくことを考えればこうした雰囲気は多少なりとも学んでおかなくてはならないだろう　と義務的に視線をめぐらせて。

ディルク……。

会場で音楽を奏でる演奏者に近い位置に、彼はいた。

講堂の中は煌びやかな人で溢れている　それでも、彼の姿だけはすぐにテアの目に入ってきた。

探さずとも自然にその姿が目飛び込んでくるところに、改めて彼のカリスマ性を感じる。

誰もが惹かれてやまない彼の周りには、大勢の人間が集まつていた。『もう、去年のディルクは生徒たちに押しつぶされそうな勢いでしたから……。パートナーがいるというだけで、全然違つてくると思いますよ！　ライナルトも、テアがいた方がディルクは助かるだろうつて言つてましたし』

ローゼはそんな風に言つてくれたが、やはり自分では力不足だつたようだ、と思う。

私ではなく、彼女だつたなら……。

ふと、そんなことを考えてしまふ。

ディルクの側に見える、燃えるような濃紅の髪。

ディルクの隣に立つても遜色のない容貌と才能を持った、彼女エツダ・フォン・オイレンベルク。

ディルクを想い、彼のパートナーであるテアをここから遠ざけよう

とした、テアと血のつながりを持った女性。

テアに手を出したように、手段を選ばないという点においては問題があるかもしれないが、彼女のディルクへの強い想いは確かだ。彼女が四大貴族の生まれだということを考慮するならば、テアに対してなした行為も、ある意味では完全に間違った行いだとも言いきれない。

そうと考えるならば、彼女がディルクのパートナーであった方が良かった、のだろうか。

けれど、ディルクが選んだのはテアだ。

そしてテアもディルクを尊敬していたから、躊躇いがないということとはなかったけれど、その手をとった。

その選択は、間違っただけだ。

そう、テアは思っている。

それなのに、不安がきざすのは、何故だろう。

彼女の方がなどと、考えてしまうのは、自分に自信が持てないから？それとも、彼女が恐ろしいから だろうか。

生まれた時から、テアにとってオイレンベルクは憎むべき敵であり

そして恐れるべき対象だった。

彼女への憎悪は、胸の内にとどめておけるよう、自身の心と決着をつけたけれど。

まだ恐怖も当然、残っている。

それでも、いつでもこの命が危険に曝されていたからこそ、恐怖を持ってもそれに負けはしれないと思っっているし、母が望んでくれた命を意地でも守ってみてると思っっているから、決して屈しはしないとテアはその点において揺るぎない。

決断は間違っただけならず、信念を持って、堂々としていればいい。
分かってはいる。

だが、こうしてディルクとエツダが並び立つところを見てみると

、足もとが覚束なくなるような、そんな錯覚を起こしてしまって

ディルクはそこにいるのに、遠い世界にいるように感じて、近づけない、そんな気がしてしまう。

このパーティだけではない、今までも、そうだった。

彼女と直接言葉を交わしたのは最初に出会った一度だけ。

それ以来顔を合わせたことはなかったけれど、大抵テアが彼女のことを見つける場合は、ディルクを視界に見つけてそれからということが大半で、その度にテアは……、やはり不安のようなものを覚えていたのだ。

自身の中の、どこか昏い感情に、テアはほんのわずか自嘲気味に口の端を上げて、思う。

冬休み、学院長に対し、これからも何事もなかったかのように、彼女と同じ学院で生活することを受け入れる、と告げたばかりだといふのに、と。

実際、今後エツダから危害を加えられるということに関しては、学院長とオイレンベルク当主との協議により、彼女に致命が下るはずであるから、決まっていなくとも、それは分かっているから、そういう意味での不安はない。

それならば、一体何が、こんなにも。

「テア」

柔らかな声に横から名を呼ばれ、テアは物思いから覚めてそちらを向く。

「新年おめでとう」

「フリッツ……」

そこには、学院に入学して以来の友人である、フリッツ・フォン・ベルナーが立っていた。

「おめでとーございます。…新しい年も、全てが良いようになりませよーに」

「ありがとう」

テアからの新年の挨拶にフリッツははにかむように笑う。
ぴしっとしたタキシードに身を包んだフリッツは、なかなか様にな
っていた。

「冬休みは、いかがでしたか？」

「うーん、何か余計な気を遣って疲れちゃった。やっぱり学院での
生活が僕には一番だよ。とはいえ、今度は試験が迫ってきてるから、
それはそれでちょっと気が重いんだけど……」

フリッツと話していると、何となく和やかな気持ちになって、テア
はそっと微笑んでいた。

「冬休みと言えば……、ロベルトの演奏会でフリッツにお土産を持っ
て帰ってきたんです。明日の授業の前にお渡ししますね」

「ロベルトの演奏会……、せっかく誘ってくれたのに、ごめんね……。
ほんともう、残念で仕方なくて帰りの馬車の中から逃げ出したかつ
たよ……。でも、お土産なんて、ありがとう！」

演奏会に行けなかったことを思い出して肩を落としたフリッツだっ
たが、テアのお土産という言葉に嬉しそうな笑顔を隠さなかった。

「いいえ。今度また機会があつたら是非一緒に行きましょう」

「うん、ありがとう」

嬉しそうな笑顔のまま頷いて、フリッツはテアの隣の壁に凭れる。

「それにしても、ディルクさんは相変わらずすごいねえ……」

「そうですね……」

フリッツの視線の先には、先ほどと変わらず人に囲まれているディ
ルクの姿がある。

ふとテアの瞳が翳りを帯びて、フリッツはそれに目聡く気付いてい
た。

「テア……、あのさ」

「はい？」

「テアとディルクさんって、その……」

「はい」

口籠るフリッツを、テアは不思議そうに見つめる。

しばらくフリッツはもごもごしていたが、やがて観念したように続けた。

「……お付き合い、してるの？」

「はい？」

率直に聞かれて、テアは言葉を失った。

何とも言えない様子のテアに、フリッツは蒼くなったり赤くなったりして弁明する。

「いやあの、なんか少し前から噂があつて、二人が交際しているとかいないとかそういう噂なんだけど、ちょっと気になっちゃって、ぶしつけでごめん、あの中でも、やっぱり噂が本当ならこんな風にテアがひとりなんてあれだし、あのその、」

だんだん自分でも何を言っているのか分からなくなってきたフリッツに、テアは何か浮かんだ疑問を口にしてみた。

「ええと……、そういう噂があるのですか？」

「う、うん、学院祭終わった後、くらいからかな……？ それっぽいような話がちらほらと」

私と、デイルクが、交際……？

何故だろうか、心臓が跳ねて、若干顔が熱くなってきた気がする。

「ど、どうしてそんな話が出てきたのか、分かりませんが……。そんな事實は、ありません。そんな、恐れ多い……」

口に出して、テアは少しずつ冷静になっていった。

「そ、そっか……」

フリッツもどきまぎと、けれどどこかほっとしたように笑い、それから苦笑を向ける。

「ごめんね、突然」

「いえ……」

フリッツもデイルクを尊敬しているようだから、気になっても仕方がないだろう、とテアは見当違いなことを思った。

「テ、テア、そうだ、僕と踊らない？」

テアとデイルクの噂の真偽について確かめようとしていた緊張から

解放され、確かめられたという安堵もあって、何となく気まずい雰
囲気を払拭するように、勢いのままフリッツはテアを誘っていた。

「え、あ、はい…、でも、そう言えばフリッツのパートナーの方は
…？」

「これからは自由行動、って別れてきたから問題ないよ。わりと緩
いパーティーだし…」

「…ディルクもあの状態では、断りの入れようがないですしね」

テアはそう言っ、差し出されたフリッツの手を取った。

フリッツとは授業でもあれから何度か踊っているから、そう躊躇い
もなくその手を取ることができる。

「足、踏んでしまったらごめんなさい」

「大丈夫だよ。テア、本当にダンス上手くなったしね」

「ありがとうございます」

フリッツの言葉に嘘はなかったが、それがお世辞でも、穏やかな笑
顔で言われてテアは少し胸を張ることができた。

そうして二人は、くるくると流れる音楽の中、ダンスの輪の中に入
っていった。

ダンスが終わり、フリッツが他の友人に声をかけられたのでテアは遠慮して、また一人になった後。

交際。

その言葉が何故かまた頭の中を一人歩きし出して、テアは困惑した。根拠も何もない、ただの噂だ。

ディルクに関する噂など人の数だけ流れているだろうし、気にしたところで何の意味もなく、どうしようもない。

分かっているのだが、何故だろう、落ち着かない。

静かな所に行きたいと思つて、テアは給仕係からひとつグラスを受け取ると、会場から抜け出すようにテラスに出た。

幸いにも他に人はおらず、テアはパーティに背を向けるように手すりに前のめりに凭れ、俯く。

陽はもうとつくに暮れており、外は真つ暗だったが、会場内の明りが洩れて、地面の芝生がぼんやりと目に映った。

グラスからオレンジ色の液体をそっと口に含むと、胸の辺りがかつと熱くなる。

間違つてアルコールをもらつてきてしまったと気付いたが後の祭りだ、テアは小さく嘆息した。

テアは生真面目な性格だったが、未成年と言いつつ今までにアルコールを摂取したことがなかったわけではない。

幼い頃、母と旅をしている最中、金を稼ぐために酒場でピアノを弾いたりしたことがあったが、母は何事も経験などと言って、酒場の客がテアにアルコールを勧めるのを止めなかったし（さすがに度を過ぎる場合はもちろん止めていたが）、冬の寒さにはアルコールが一番だったのだ。

『何事も経験よ、テア!』と、自身も酒を飲んで言い切った母の姿を思い出して、テアは笑う。

一度口をつけてしまったし、もったいないので、と言い訳しつつ、テアはちびちびとグラスに口をつけた。

味は甘ったるくジュースのようなのに、喉元を過ぎれば身体の中を熱くするアルコールを口にしながら、そう言えば、他人の恋に触れる機会があっても、それを自分のこととして考えたことはなかったとテアは思う。

母は父との思い出を色々と言ってくれたけれど、母とまだ見ぬ父が並んで立つところを想像しているだけで、何だか温かい気持ちになれて、それ以上は考えが及ばず。

ローゼとライナルトのことを聞いた時も、親友であり姉のような存在であるローゼが幸せであるようにと思うばかりだった。

確かに、母と父のような、ローゼとライナルトのような、そんな男女の結びつきは素晴らしいと思える。憧れないと言えば、嘘になる。

けれど、自分には資格がない。

少なくとも今は、母のようなローゼのような、そんな恋をする資格を持たない。

今はこうして無事にシューレ音楽学院に通うことができているけれど、それもいつまで続くのか、オイレンベルクとの決着はついたわけではなく、不確定要素は多い。

もし、大切な人ができたとしても、巻き込みたくはないから。

深く関わってしまう前に、遠ざけなければならぬ。

その人を守るためには、それが一番だ。

その人を……。

『…怪我は、ないか?』

『駆け付けるのが遅くなって、すまなかった』

「……………」

何故かその時 神誕祭直前に起きた事件のことを思い出して、テアは不意に胸を突かれたような気がした。

あの時も、もし何かのタイミングがずれたり何か予測もしないことが起こっていたりしたら、彼が傷つくようなことも、あったかもしれない。

巻き込みたくないのに。

失いたくないのに。

彼だけは。

彼、だけは……………。

そう思つて、ふとテアはグラスを下ろしていた手を止めた。

どうして今ここで、ディルクのことばかり考えているのだろう…。

いや、交際に関する噂について考えていて、その噂というのがテアとディルクに関するものだったのだから、別におかしなことではない。

おかしなことではないが…。

何だろう、これは何だろう。

ちりちりと、胸が疼く。

久しぶりにアルコールを摂取したのが、やはり良くなかったのかもしれない。

考えがまとまらなくて、混乱して。

「……………テア？」

後ろから、聞き慣れた、耳に心地よい低音に名を呼ばれて、テアは肩を揺らした。

早くなつた鼓動を落ちつけるように、テアはゆっくりと振り返る。

「ここにいたのか。見つけられて良かった…」

言葉の通り、どこかほっとした様子で、パーティの賑わしさから遠ざかりながら近付いてくるのは、ディルクだった。

会場から漏れる明かりはあれども、夜の闇の中。彼の姿はそれでも眩しくテアの目に映る。

「すまないな、なかなかお前の所まで戻って来られなくて……」

「いえ……」

パーティーが始まって間もなく、会場正面のステージで生徒会長としてディルクは短い挨拶をしたのだが、その際にテアと別れたまま、ディルクはあちらからこちらから声を掛けられ引きとめられて戻るに帰れなかったのだ。

「もう……、良いのですか？ 先生方や生徒会の皆さん方や……、色々お話することがあったのでは？」

「いや、休みも終わってこれから毎日同じ学院で過ごすんだ。授業や仕事の話はこれからいつでもできる。今日は最初の挨拶だけして後はお前とのんびり気楽に食事でもしていたいと思っていたのだが……、ステージを下りた途端に囲まれて逃げるに逃げられなくなつた」

どこか哀れっぽく言ってみせるディルクに、テアは思わず少し笑っていた。

「あなたがそういう風に言うのは、珍しいですね」

「そうか？ 確かに……、様々な人と言葉を交わすことは大事だと思うし、勉強にもなるから、人と接する機会は大切にしたいと思ってるが……。こういう場は独特の雰囲気があるし、入れ替わり立ち替わり知り合いがやって来てどうも落ち着かないからな。何よりもやはり、親しい人間とゆっくりできるのが一番だよ」

そうして、ようやくそうできると言うように、ディルクはテアの前で肩の力を抜いて微笑を見せる。

親しい人間、とディルクが口にする一人がテアであることはこの場合明白で、嬉しいような照れくさいような気持ちで、テアは少しディルクから視線をそらした。

交際、の文字がまた、頭に浮かんでしまう。

ディルクの言葉の意味はそうではないと、分かっているのに。

そう言えば、ディルクはその噂のことを知っているのだろうか。もし、既に知っているのだとしたら。一体、どういう風に思っただろう。

もし、これから知るのだとしたら。一体、どういう風に思うのだろうか。

困るのだろうか。

そう、それは、困るだろう。事実無根の噂なのだから。

だが、ディルクほどの人だから、これまでもきつと多くのこういつた噂が飛び交っていたのだろう、とも思う。

ディルクの本当の気持ちは、分からないままで、噂だけが。

ディルクの本当の気持ちは。

「テア？ 何だか顔が赤いが……、大丈夫か？」

「え？」

ふと気付けば間近にディルクの顔がある。

手を伸ばされて、テアは思わず後ろに逃げようとしてしまったが、すぐに手すりに背中がぶつかってそれは叶わなかった。

そうして、テアの額に、そっと大きな手のひらがあてられる。

「……………」

「少し、熱いな。熱があるんじゃないか？ 具合は？」

「い、いえ」

体調には問題はない。

テアは首を振り、咄嗟に見えた手の中のグラスに言い訳を思いついた。

「その、間違ってお酒を飲んでしまったので……、熱いのはきつとそのせいです」

「酒？ ……お前は確かまだ」

「ええ、その、……すみません」

神妙に頭を下げたテアが何だかおかしくて、ディルクは少し笑いを零した。

「いや、そんな風に謝らなくてもいいが……。俺も人のことは言えな

い。テアの年にいかない頃から飲酒も含め『何事も経験』など言
つて色々やっていたものだし」

それに、今度はテアが小さくふき出す。

「…母も、同じようなことを言つては無茶をすることがありました」
「気が合いそうだな」

「傍から見ていると心臓に悪いんですよ。でも…、すごく楽しそう
で、なんだかんだと最終的には私も同じようなことをしていたりや
らされたり……」

その後にはテアはけろりとしているのに、身体の弱い母は寝込むこと
が多かったのだが、それも良い思い出だ。

呆れながらも心配して看病するテアの前で、母は熱を出しながらも
『昨日は楽しかった！ またいつしよにやりましようねテア！』と
元気そうに言っていたものである。

それでテアが当然のごとく駄目だと言つと、唇を尖らせて、こう言
うのだ。

『あなたのお父さんなら付き合ってくれたわよ。……でも、何だか
んだ言いながらテアも付き合ってくれるのよね。やっぱり親子、そ
ういうところも似るのね』

それは単に父もテアも母が大事だから放っておけないだけだ、と思
つたけれど、母の慈しむような表情にテアはいつも何も言えなくな
った。

そして母は大抵こう続ける。

『ええ、でも、テアがお父さん似で良かった。本当に優しい人だっ
たもの。例えばあの時だつて』

何度も聞かされた、父と母との惚気話。

テアは耳にたこができるほど聞かされて、具合を悪くしているんだ
からもつと安静にしていなと思うのに、母があまりにも楽しそ
うだから、いつも大人しく聞いてしまっていたのだ。

『テアもいつか見つけるわ。あなただけの、特別なひとりを』
そうなのだろうか。

母の言葉に、テアはいつだって半信半疑だった。

逃げて逃げて、逃げ続ける日々がずっと続くのだと思っていたから。けれどこうして、幼い頃は予想もできなかった穏やかな日々の中に今、テアはいる。

そして、大切な人も、今、目の前に……。

「一体どういうことをしたのか聞いてみたいものだが……、……テア？ 酔っているのか？」

知らず知らず、じっとディルクのことを見つめてしまっていたテアは、慌てて視線を逸らした。

だがその拍子に眩暈のようなものを覚えて、ほんのわずかよるめく。それをディルクは咄嗟に、けれどちゃんと支えて、労わるように囁いた。

「大丈夫か？」

「は、はい……。すみません……」

「酒に弱い体質なのかな。俺のパーティーでの仕事はもういいし、寮に帰ろうか。明日から授業だしな」

だがまだ、パーティー終了時間までは間がある。

テア一人帰るのはいいが、ディルクまで早くに寮に帰らせてしまっ
ては何だか申し訳ない気がした。

「いえ、でも、あの……」

「気にするな。行こう」

だが、そんなテアの逡巡も分かっているのだろう。

ディルクは屈託なく笑うと、テアが持っていたグラスを奪い、テアを支えるようにその背中に手を回して、出口へ向かうために賑やかな会場へ戻っていく。

パーティーのざわめきは、変わらない。

けれどいくつもの視線を感じて、テアは思った。

こんなに大勢の生徒がいる前でこんなに密着しては、ますます例の噂に拍車をかけてしまうのではないだろうか……。

とはいえ急に身体を離せばディルクは気分を害するかもしれないし、

それはそれで妙な印象を与えるかもしれない。

何よりも、テア自身が望むのが。

「……やはり少し、酔ってしまったようですね……」
背中に感じる手のひらがとても熱く感じるのも、きつと、アルコールのせい。

ディルクの言うとおりに早く帰って寝た方が良さそうだと、テアはディルクのエスコートに従って、パーティ会場を後にしたのだった。

星屑が降ってくるような音だ、とディルクは手のひらの中でオ
ルゴールボールをゆつくりと転がしながら思った。

パーティから抜け出し、テアを送ってから、ディルクも寮の自室に
戻っている。

シャワーを浴びてすっきりして、勉強机を前に深く椅子に腰かけ、
机の上に大事に飾られていた、テアからの贈り物を手に。

彼女のことを、つい、考えてしまう。

冬休みを終えて、久しぶりに会ったテアは、変わらない様子で「新
年おめでとございます」と言った。

その後頭部で輝くのは、ディルクが送った髪留めで…。

勉強の時や読書の時だけでも、とっていたものだったから、身に
着けていてくれたことは、素直に嬉しかった。

しかし。

無理をさせてしまっただろうか……。

別れ際の、頼りなげな風情のテアを思い出して、ディルクは眉を寄
せる。

ディルクが無理にテアを誘った、というわけではないけれど、気に
してしまう。

テアはああいう場が苦手そうであるし、ディルク自身も「殿下」な
どと呼ばれていた時分に飽きるほど出席させられて、人間関係のあ
れやこれやをまざまざと見せつけられ、もうこういうのはいい、と
思っていたのだ。

なかなか会えなかつたり話せなかつたりする人たちと顔を合わせる
ことができるから、そういう点では嫌いではないのだが…。

何よりもロベルト・ベーレンスの演奏会で起きた事件で、テアはそ

の身を狙われたばかりである。

事件の黒幕はいまだ不明のまま、この学院に黒幕が潜んでいる可能性も、低くはない。

パーティーに何食わぬ顔で出席していたということだって、あり得る。テアもその可能性は考えているだろうし、彼女は平気だと笑うけれど、気にしないわけではない。

去年のうちからパーティーの話はしていて、その時からテアは「参加したいと思いますので、よろしく願います」と言っていたから、事件のことがあったからと言って前言を翻すのは躊躇われたのか。

同伴者がいた方が好ましい、そういうパーティーだ。テアがパーティーとして義務感を覚えてもおかしくない。

あまり経験がないというせいもあるのだろうが、パーティーの最初から何となく緊張を見せていたテアを思い出し、ディルクは嘆息する。生徒会長という肩書きがなければ、パーティー参加は義務ではないし、むしろ練習室にでもテアを誘っていたのに。

だが、実際のところ、パーティーでディルクはテアの存在にとっても助けられていた。

会長として挨拶を終えて、壇上から降りたところで人に囲まれて

何だかんだと、テアの存在を理由に様々な誘いをやんわりと断ることができたのだ。

別に言い訳のためだけにテアの存在を口にしたわけではなくて、断る理由に「早くパーティーのところへ戻りたいので」と言っていたのは、単にディルクの本心ではあったのだが。

しかし、そういう言い訳を口にすることが可能でありながら、なかなかテアのところへ戻れなかったことは、悔やまれる。

何とか人の群れをやり過ぎ、テアの姿を探して 明るい会場の中にその姿を見つけられなかった時には、恐怖すら覚えたものだ。

ディルクの中にも、学院祭での事件やロベルトの演奏会での事件は

根深く残っていて。

テラスにテアの姿を見つけられた時には、本当に心から安堵を覚えたものである。

だが、テアの様子はやはりどこかおかしかった。

アルコールを口にしてしまつて、とテアは言っていたけれど、本当にそれだけなのか。

ディルクがいない間に、誰かに何かを言われたりでも、したのだからうか。

けれど、言葉を交わすうちに見せたテアの笑顔は、本物で。

母のことを語るテアの瞳に浮かぶのは、穏やかな懐かしさで…。

それを壊したくなくて、踏み込むタイミングを逃してしまつた。

テアが憂いを見せるなら、それを取り除きたい。

それはディルクの思いだが、一方的なものだとも、分かっている。

それでも大切だから、どうしてもいつだって気に掛けずにはいられなくて。

それでもやはり、無理矢理に懐に入り込むような真似はしたくなくて。

ディルクはジレンマに襲われるのだ。

そうして、ディルクが考え込んでいたところに。

トントン、とドアがノックされて、外側から鍵が開かれる。

「ただいま」

「おかえり」

ディルクは振り返り、パーティから帰ってきたライナルトを認めた。

「思ったよりも早かつたな」

「ああ。明日は普通に授業があるからな。長居して酒が過ぎてはま
ずいだろうと、ローゼと抜け出してきた。お前こそ、随分と早いじ
やないか」

「誘いを断り続けるのに疲れたんだ」

ディルクの返答にライナルトは笑う。

「テアはどうした？ ローゼが気にしていたが」

「間違つてアルコールを口にしてしまったらしい。少しふらついて
いるようだったから玄関まで送ってきたよ」

「テアが？ ああ、それでか…」

何故かライナルトは納得したように呟いて、上着を丁寧にクローゼ
ットのの中にしまった。

「シャワーを浴びてくる。気になる話があるから、後で話そう」

「ああ、…?」

何かパーティーで耳にしたのだろうか、ディルクは首を傾げつつも
頷く。

ライナルトはそれ以上思わせぶりなことも言わず浴室に入って、そ
う時間の経たない内に戻ってきた。

そして おもむろに言う。

「お前とテアは交際しているらしいな？」

束の間、ディルクはライナルトの言葉の意味が分からなかった。

「……は？」

「生徒たちの噂によると」

珍しいディルクの間の抜けた返答にライナルトは軽い笑みを見せる。
ライナルトが続けた台詞に、ディルクはようやく事態が呑み込めて
来て、持ち直し、天井を仰いだ。

「そ…んな流言が？」

「広まっているらしいな」

「……ここに入学してから何人目だ？」

「さて、両手では数え切れないが…」

「俺は一体どれだけ無節操だと思われているんだ…」

つい頭を抱えて嘆いてしまうディルクである。

当然ながら、テアと同様、当人であるディルクもその噂に関して把
握していなかった。

ライナルトもそれが分かっていたから口にしたのである。

「誰もそんなことは思っていないだろうが、優良物件が売れ残って
いるなんて皆信じられないから噂するんだろう」

優良物件云々の台詞にディルクは顔を顰めた。

「お前…、そういう台詞、ローゼに似てきたんじゃないか？」

「お前の次に共にいる時間が長いからな」

飄々とライナルトは気にした風もなく頷く。

開き直ったライナルトの、軽い惚気の入った言葉にディルクは苦笑して、手のひらに握ったままだったオルゴールボールを見下ろした。「それで…たかが噂をわざわざ伝えてくるということは、いつもとは何か違うんだな？」

「好奇心な噂というよりは、既に疑念や確信に近い。先ほどもパーティーから帰る時テアを支えて、密着していただろう？ 私ですら、噂を聞いたこともあったからかもしれないが、一瞬疑ったくらいだ。お前に理由を聞いて、ひどく納得させられたがな」

「しかもテアは、俺が初めて選んだ異性のパートナー、か…。あの人は、気にするかな。それとも利用しようとする…か」

しやらり、とディルクの手のひらの中でオルゴールボールが小さな音を立てた。

そう、ディルクが察したように、ライナルトが言いたかったことはつまり、そういうことだった。

ライナルトはディルクほど、「あの人」のことを「彼女」のことをよく知らない。だがおそらく、「彼女」のような人間であれば、平民であるテアがディルクに近付くことを歓迎はすまい。テアのことを取るに足りぬ者だと認めるからこそ、その存在をもってディルクを縛るようなことも考えつくかもしれない。

それはディルクが口にしたように、彼の方が明確に分かっていることだろう。

だからライナルトは、ディルクに注意を喚起しておきたかったのである。

「…巻き込みたくない、と思っているのだが…。そんなに俺は傍から見ていて分かりやすいか？」

「お前は、真っ直ぐだからな」

ライナルトの言葉は、肯定だった。

「テアは、さすがに気付いては…」

「いないだろう。テアは…相手からの好意には鈍いようだな。フリッツ・フォン・ベルナーの気持ちにも 全く気付いていないようだし」

ディルクは、パーティで見たテアとフリッツのツーショットを思い出して、ほんのわずか動揺した。

オルゴールボールを握りしめたディルクを見つめ、ライナルトは静かに口を開く。

「…お前は、これからもテアとパートナーを組みたいと考えているのか？」

弾かれたように というほどでもないが、はっとディルクは顔を上げた。

「俺は…」

しかし、言葉は続かない。

先日ディルクはライナルトに言った 『俺は俺の過去に彼女を巻き込みたくない』と。

だが周囲は、ディルクにとってテアは切り離せない存在なのだと認識し始めている。

そして、これから試験が終わり、後期が始まって新しいパートナーを選ぶという際に、またテアの手を取れば、噂はより真実に近くなるだろう。少なくとも周囲はそう納得するはずだ。

まだ今は、「彼女」にとつてもテアはただ学院の規則で決められたパートナーであるだけに止まっているだろうけれど このままディルクがテアの側に居続けることを選ぶならば、それはテアにとつて、危険なことになる。

「……………」

そんなことは、この想いを自覚した時から分かっていたはずだった。危険だと判断したならば、テアから遠ざかるべきだ。

いつかはそうしなければならないと、そう思っていたはずなのに。

ライナルトの言葉に答えられないディルクがいる。

黙ってしまったディルクに、ライナルトはそっと近づいて、その肩を軽く叩いた。

「すまない、聞くまでもないことだったな」

椅子に座っているディルクは、微笑するライナルトを見上げる。

「お前はお前の思うとおり生きればいい。私は何があっても、お前を最後までバックアップする」

「ライナルト…」

「今回の件、お前が気にするのならば、噂を収束できるよう手を回すが？」

「いや…」

心強い言葉に感謝しながらも、ディルクは首を振った。

「下手に鎮めようとすれば余計に怪しまれるだけだろう。噂に関しては放置しておこう。ただの噂だと無関心でいれば、今は騒がれていてもいずれ消えていく…はずだ」

心を乱されながらもディルクは冷静な判断を下す。

「いつもと同じように、か。過剰反応するよりはその方が自然だな。そのパターンでこれまで、噂の中でお前の相手の名前がころころ変わっていったわけだが…」

気分を軽くするようにか、ライナルトが冗談のように口にした内容に、ディルクは苦笑を浮かべた。

「…他のことは、もう少し考えてみることにするよ」

「それがいい」

「お前には迷惑をかけるが…」

「気にするな」

軽く言っただけで笑ってくれる親友の存在は、とてもありがたいものだった。

ディルクはだから素直に、ありがとう、と言っただけだ。

優しい音が、余韻を持って、響く。
。ピアノの前に座ってテアが奏するのは、ドビュッシーの「亜麻色の髪の乙女」だった。

気の向くままに鍵盤に指を下ろしたところ、その旋律を奏でようと手が動いたから、そのままに任せて、テアはピアノに集中する。だが、曲はそう長いものではなく、弾いているとあつと言つ間に終わってしまった。

余韻を感じながらも鍵盤から指を離して、テアは軽く溜め息を吐く。その耳元で、ふと囁く声があつて。

「……ディルクのことも考えてたのか？」
思わず、テアは両手を下ろして目の前の鍵盤を叩いていた。バーン、と強い音が響く。

「……お前、なんちゆう分かりやすい動揺するんだ」
テアの後ろ、嫌そうな顔で耳を抑えるのはテアのピアノの教師、エンジンジュ・サイガだった。

授業が開始された日の午後。
テアは彼のレッスンを受けるために、開始時刻よりは随分と早かったが、練習室に来ていた。

テアが来た時に確認した際には誰もいなかったから、テアがピアノに集中している隙にこっそりとエンジンジュは練習室に入ってきたのだろう。

今までにもそうやってエンジンジュはテアを驚かせて楽しむことがままあった。

だからいつの間に、ということをやテアは口にしない。そうして驚かされたことに対する抗議をするよりも、エンジンジュの台詞に対する驚

きの気持ちの方が大きかったので、振り返ったテアはこう言った。

「どうしてここでディルクの名前が出てくるのですか…!？」

「そりやお前、あんなきらつきらった音出してたら、なんかお前がイメージしてそうなのはディルクかなーと思うだろ」

「そ……っ」

そんなことはない、と否定しかけて、テアは自身を振り返った。

自分は一体、何を考えて先ほどの曲を演奏していただろう、と。

「お前、相変わらず分かりにくそうで分かりやすいなー。ま、とりあえず新年おめでとさん。今年もよろしく」

「お、おめでとございます…、よろしくお願いします…」

ぽんぽんと頭を軽く叩くように撫でられて、テアは動揺を引きずりながらも挨拶を返す。

本当は会ったら一番にきちんと挨拶しようと思っていたのに、エンジユのマイペースな振る舞いに調子を崩されてしまった。

「この髪留め、キレイだな。よく似合ってるぜ。イメチェン？」

さらりと新年の挨拶を終え、テアの頭を撫でていたエンジユは手を離して褒める。

それにテアはわずかに頬を紅潮させた。

「ありがとうございます。…髪が長くなってきたので、こうしておけば演奏の時や勉強の時も邪魔にならないだろうと…」

「ふーん」

テアの反応に、なるほど、と勘良く思い当たったエンジユはにやにやと笑って、あることを尋ねた。

「でさ、ホントのところ、お前とディルクって、どうなわけ？」

その答えをよく分かっていながら聞くところに、彼の人の悪さが表れている。

「どう…とは？」

意味を掴みかね、テアはきよとんと首を傾げた。

「なんか噂はしょっちゅう聞くんだよ、結婚を前提としたオツキアイが始まっているとかいないとかさあ。実際はどうなのかなーと、

師匠としては気になるわけだけど？」

「け……っ」

交際の噂については昨日聞いたばかりだが結婚云々は初耳である。その衝撃にテアは言葉を失いかけたが、何とか言葉を返した。

「そ、その噂は眉唾です。…どうして先生が生徒間での噂を御存じなのですか？」

「そりゃー俺は人気者だからな。ついでに言うとお前たちに関するやつは別に生徒間だけのもんじゃないぜ。学院中での、が正しいな。ま、意外かもしれないがこういうのは教師の方が良く知ってたりするもんだ。他に娯楽がないからな」

からからとエンジュは笑って言う。

娯楽、とテアは口の中だけで呟いて。

「…できればもう、それに関しては耳にしたくないものです…」

「なんで？」

「心臓に悪すぎます…」

「眉唾もんなら気にせず放っとけよ。人の噂も七十五日、どうせ皆すぐ忘れていくもんだ。頼りない噂話に振りまわされて、って周りを笑っとけばいいのさ」

「はあ…」

それができれば苦悩はしない。

昨日噂について聞き、今日の朝それを思い出して頭を抱えなくなり、それからずっと考えないようにしてきたテアだ。

「それともなんだ？ 噂の相手がディルクじゃ不満か？ ああそれとも、どっか別に相手がいるから変に騒がれると困るってか」

「そんなことは…！」

ない、と言いかけてテアは口を閉ざした。

「……ただ、ディルクの迷惑になるのではないか、と」

「別に気にしないだろ、あいつは。あいつに関する噂話なんて、どれがホントでどれがウソやら分かったもんじゃないのが山ほどあるし、女関係のやつだって数え切れない。今更迷惑も何もあつたもん

じゃないさ」

「そう…ですか」

何だろうか　胸にツキリと痛みを覚えた気がして、テアはかすかに俯いた。

「　難儀だねえ…」

その様子に、散々弟子を振りまわした本人であるエンジユがぼつりと呟く。

そこでようやく授業開始のチャイムが鳴って、さて、とエンジユは伸びをするように背筋を伸ばした。

「よっしゃじゃあ、新年初レッスンを始めるとして　」

テアもチャイムに思考を切り替えてエンジユを見上げる。

「お前さ、実技試験の課題曲が何に決まったのか誰かに聞いたのか？」

エンジユはいつもながら単刀直入だ。

テアはその問いに少し戸惑いを覚えながら首を振った。

「え？　いえ、私はまだ何も…」

「じゃ、単なる偶然か。発表しちまうと、ピアノ専攻科一年の実技試験の課題曲はドビュッシーの『亜麻色の髪の乙女』に決定」

先ほどまでテアが気まぐれで弾いていた曲。

エンジユから楽譜を手渡されながら、テアは軽く目を見張った。

「後は前々から言ってたように初見演奏を一曲させられる。試験までは課題曲に集中するかな。今までは色々なヤツらに初見演奏聴いてもらってたし、感想聴く限りでもそつちはやっぱり得意みたいだから、そんなにやんなくても問題ないだろ」

「は…はい」

一月末に行われる学期末試験には、筆記試験と実技試験の両方がある。

ピアノを専攻する生徒たちが受ける実技試験の内容は、初見演奏と課題曲演奏の二つ。

課題曲は今まで発表されていなかったために練習しようと思っても

できなかったもので、これまでレッスンにおいて試験対策として行ってきたのは初見演奏ばかりだった。

学院祭が終わってからこれまで、テアはエンジュの知り合いのピアノストに度々ピアノを聴いてもらっていたが、専らそれが初見演奏に限られていたのは、そういうわけがあったからである。

「それにしても…『亜麻色の髪の乙女』…ですか」

「お前ドビュッシー好きだし、今の演奏聴いた限りじゃ普通に大丈夫だろ」

「そう…でしょうか。試験というものを受けるのが入学試験以来二度目なので自分では何とも…」

「ま、何だかんだ言うより、とりあえずもう一回弾いてみるか」

「はい」

エンジュに促されて、楽譜を譜面台に置くと、テアはもう一度ピアノノに向き直った。

一呼吸おいて、指を鍵盤の上にそっと置いて。

『……ディルクのことも考えてたのか？』

エンジュの言葉が脳裏によみがえって、いけない、とテアはわずかに躊躇した。

けれど目を閉じて、テアは何とか頭を切り替えて。

指を、滑らせる。

弾きながら頭に描いていたのは。

「……で、今度は何考えながら弾いたんだ？」

鍵盤から指を離してすぐにそう突っ込まれて、テアは詰まった。

「悪くはなかったけど、なんかお前の『月光』のイメージに近かったな。簡単に言えば寂寥、悲哀、慈愛。さつき聴いたのはどっちかっていうと光輝、慕情。俺としては最初に聴いたやつの方が良かったと思う。もともと『夏の明るい陽をあびて、ひばりとともに愛をうたう、桜桃の実のくちびるをした美少女』に捧げた曲だろ？」

「はい…」

エンジユの言葉に、テアは少し項垂れた。自分でも音の違いは分かっていた。

先ほどの演奏では、ディルクのことを考えまい、としてあえて他の人物のことを思い浮かべていたのだ。

そう…、母の、面影を。

「さつきみたいに、ディルクのこと考えながら弾いてみるよ。どうせ俺以外にはお前が具体的に誰のこと思い描いてるかなんてそうそう分かんねーだろうし」

「だ　駄目です、できません…」

「はあ？」

首を振ったテアに、エンジユは無造作に聞いた。

「なんで」

「それは…その…」

テアは口籠る。

ディルクのことを尊敬している、その気持ちを表現するのにはなんら問題はないはずなのに。

抵抗心が、ある。考えてはいけない、と思ってしまうのだ。

困惑しているようなテアの様子を見て、エンジユは溜め息を吐いた。

さつき調子に乗ってつつきすぎたかね…。

反省はしていないが、反省めいた独り言を心の中にする。

「ま、別に今の演奏でも、試験乗りきるだけなら問題はないと思うけどな」

ふむ、とエンジユは考えるそぶりを見せた。

「でもお前の師匠としては、演奏するなら最低限こなすだけじゃなくて、最上を目指してほしいんだよな。俺はどっちかつーとSだし、甘くしてやるのは癪だしな」

「後者の理由はなんなんですか…？」

思わず突っ込みを入れたテアである。

それには答えず、うーん、とエンジユは首を捻って、続けた。

「よし、じゃあ、お前に新年初の課題を出す」

「は…はい」

「一日だけ時間やるから、今回の試験、どう演奏するのかよく考えてこい。今日のレッスンもこれで終わりにしてやる」

「え…」

「試験まで間がないからな。あんまり時間を多くはやれない。だから一日しっかり考えてくること。OK?」

「……はい」

頷きながらも、今までに覚えたことのない不安をテアは覚えた。

一日でその課題を エンジュが納得するほどにできるのだろうか。「ま、基本的な知識なんかは問題ないだろうから、お前ならいけるだろ」

「先生、」

どこか縋るように呼ばれたエンジュは、テアの表情を見て苦笑した。おせつかいはしたくない、だがなんだかんだと言いながらつつい口を出してしまう。

「逃げんなよ、テア」

投げかけられた言葉に、テアはひゅつと息を呑んだ。

「コンクールと同じだ。いつまでも逃げ続けられるもんなんかない。お前はそろそろ、気付かなきゃいけない…そういう時期なんだから、多分な。それで、ちゃんと受け止めて、そうしたらきつとお前の音楽はもつと面白くなる。俺にそれを聴かせるよ」

抽象的なエンジュの言葉。

テアはそれに応える術を、持たず。

「と、言うわけで。ちよつと早いが俺は退散するぜ。練習室は放課後まで借りられるようにしとくから、ここでずっとでも、場所移したくなったらどこへ行っても、とにかく考えてみるよ。じゃあな」最後にエンジュはにっこりと無造作に笑うと、さつとドアを開けて練習室を後にしてしまった。

取り残されたテアはどこか茫然と、その背中を見送るしかなかった

の
だ。

ポーン、と澄んだ音が響く。

エンジュがいなくなった練習室で、テアはひとり、ピアノを前に悄然と座っていた。

気が塞ぐ　けれどピアノの音を聴いていれば、少しでも気が休まった。

考えたくない、とテアは思う。

考える、とエンジュは言った。

でも、嫌だ。

頑固な子どものように思って、テアはひとり苦く笑う。

こうして拒めば拒むほど、答えは眼前に迫ってくる。

何故、嫌なのか。

どうして、考えたくないのか。

「離れたくないから」だ。

テアはもう一度鍵盤に触れて、ざわつく心を抑えた。

昨晩から、意識的に、ずっと考えないようにしていた。

ディルクとの噂話。

エンジュの言うとおりだ。

これまでも、テアに関する噂話だけでも様々あった。いちいちそれを気にしていたらきりが無い。誤解は少し悲しかったけれど、それでも自分らしくあれば良いと、構わなかった。

けれど此度の流言は、どうしても聞き流せなくて。

途方もないデマだと、笑い飛ばすことなんかできなくて。

何故なら。

私は、「嬉しかった」のだ……。

例えデマであっても、そういう話が出回るといふことは、
ディルクの隣に立つ人間として、テアは認められうる、といふこと
で。

嬉しかった。

そして。

噂が、真実ならばいいのに。

そう、思ったのだ。

その思いの、示すところは。

尊敬を、超えていて。

「なんて、おこがましい……」

自嘲の言葉が漏れる。

気付きたく なかった。

だから、聞きたくなかった。

自分と彼がそういう関係になってもおかしくないのだという事実
に耳を塞いでいたかった。

聞いて、知れば、考えてしまう。気付いて、しまう。

だから、弾けなくなった。

彼の人のことを考えながら弾いてしまえば、明らかに
してしまう。
自分のこの……想いが。

この想いには、気付きたくなかった。

気付いてしまったら、離れなくてはならない。

特別なひとりを、自身の運命に巻き込みたくない。

傷つけない。失いたくない。

だから、離れなくては。

全ての決着がつくまでは、大切なものほど、遠ざけておかなくては。それなのに。

どうして。

切望してしまうのだろう。

離れたくない。

離れたくない。

離れたく、ない！

だから気付かないふりをしよう。

私は気付いていない。

この想いには気付いていない。

こんな想いは「知らない」。

だから、このまま、隣に。

彼の、隣に。

けれど、駄目だった。

本当は、ずっと前からきつとこの想いは存在していて、でも蓋をして、見えないように、隠していた。

そう、蓋はあったのだ。

それなのに、どうしても想いは溢れ出そうとして、かたかたと蓋は音を立てて自己主張し始めた。

それでも、ずっとずっと、それを知らぬふりで、今までやってきたのに。

昨日突きつけられた事実には、何とか閉じていた蓋はずれてしまった。そして今、開いた蓋はどこかに転がって。

蓋を探して、その中身には、見えない振りをして。目を背けて。

何とか、何とか、凌ごうとして。

逃げて、逃げていたのに。

限界だった。

逃げているのに、奏でる音は彼への想いを描いていて。

無意識にでも、引き寄せられて。

逃げ切れなくなっていた。

エンジュに見透かされて。

それでも、逃げきろうとして。

母の面影に、逃げ込もうと、足掻いて。

けれど足掻けば足掻くほど。

離れたくないと、思えば思うほどに。

たったひとつの感情が、浮き彫りになってしまう。

「私は…」

そうだ。

考えるまでもない。

本当は、多分、以前から気付いていた。

ただ気付きたくなくて、気付いていない振りをしていただけ。

心の真実を見たくなくて、目を瞑っていただけ。

離れたくなくて、側にいたくて。

音楽の「パートナー」であることを、全ての言い訳にしていた。

「私は……」

私は、見つけてしまった。私だけの…、特別な、ひとりを。

テアはようやく、それを認めた。
自分が、恋をしているのだと。

「デイルク……」

そして彼女は、ぼつりとその想いの向かう名前を呟く。
しかし、万感の想いがこめられたその音を聴く者は、彼女の他には
誰もいない。
それに安堵して、テアは瞳を閉じた。

同じく、授業開始日の放課後、ディルクはひとり、教員棟へ向かっていた。

昨日のパーティで、学院長に話があるから来て欲しい、と言われていたのである。

生徒の代表であるディルクと学院長が言葉を交わす機会はこれまでも多々あった。

パーティではゆっくり話す暇もなかったし、今回は選挙が迫っているからおそらくそれに関連した話があるのだろう、とディルクは見当をつけながら歩いていく。

学院長室の前まで来るとドアをノックして、聞き慣れた返事を合図に一声かけてドアを開ける。

いつものように学院長は正面のデスクの前に座っていて、ディルクが入室すると立ち上がり、ソファにかけるよう促した。

「忙しいところすまないな。昨日のような場ではできる話ではなかったんだ」

「いえ、構いませんが」

学院長の言葉に、ふと訝しさを覚えながらディルクが返す間に、学院長もディルクの前のソファに腰を下ろす。

すかさず秘書の男性が二人の前に紅茶を出して、丁寧に礼をすると部屋から出て行った。

学院長はディルクに紅茶を勧めると、自身もカップに口をつける。

「…冬休み、また事件に巻き込まれたようだな」

カップをティーソーサに置いて、そう始めた学院長に、ディルクははっと視線を向ける。

「どうして、」

それを知っているのかと言いかけて、思い当たることがあった。

「…そう言えば、学院長はロベルト・ベーレンスとご学友でしたか」
「そんな丁寧な言葉よりも、腐れ縁、と言われた方がしっくりくるが」

そう、学院長は笑う。

「あいつは多忙だからな、私がメッセンジャーとして立つことになったわけだ」

「…それでは…、もう何か掴めたのですか」

デイルクの問いに、学院長は表情を引き締めた。

「……件の犯人は既に判明した。対応も、終わっている」

その言葉に、デイルクは何故かあまり良い印象を覚えることができない。

「一体、誰が」

「すまないがそれには答えられない」

ぐっ、とデイルクは拳を握った。

「何故…ですか。黒幕が 貴族だからですか。それも、ひどく力のある」

デイルクはずばりと口にする。それに学院長も躊躇わずはつきりと答えた。

「そうだ。そして今回のことが公になれば、デイルク、お前が思う以上に厄介な事態になる可能性がある。そのため、今回の件は学院祭の時と同様、公的機関に任せることはしない」

学院長が公平な人物であることは、デイルクも知っている。

彼が秘匿を否定しないということは、実際に何かしらの危険が潜んでいるということなのだろう。

だが簡単には納得できず、デイルクは食い下がった。

「しかし、それでは、犯人がテアにまた危害を加えるかもしれない。それに…、あれだけのことをした人間が何の償いもせずにいられるというのは…、間違っています」

真っ直ぐな視線に、ほんのかすか、学院長の口の端が上がる。

しかしすぐに真面目な表情に戻って、言った。

「犯人が再びテアに手を出すことはない」

「それは…、確実に言えること、なのですか」

「ああ」

学院長は頷いたが、彼を認めるディルクでも、それを鵜呑みにすることはできなかった。

「今回のことでは犯人に償いの機会は与えられない。だが、今回のことが我々に露見して、犯人にとってはあまりにも大きすぎるリスクになった。もう一度同じ過ちを繰り返すようなら、…犯人にとって最も起こって欲しくない事態を我々は引き起こすことになるだろう」

「それは…、一体どういう…」

その問いに、学院長は答えなかった。

「…：…すまないが、このことを…、事件は一応の解決を見たとお前から他の関係者に話してもらえないだろうか。できれば直接こうして話をしたかったのだが、まとめて来てもらうにしろ私が出向くにしる少々目立つことになるので、悪いが控えさせてもらった。当事者であるテアには、既に話はしてあるが」

ディルクと学院長が直に話すということは珍しいことではないが、他の関係者ともとなると確かに、他の人間の注目を浴びることに繋がりがかねない。事件のことが公になるとは考えにくいのが、勝手な憶測が広がっていく可能性もある。ディルクが学院長の立場であつても同じように慎重な姿勢を崩さなかつただろう。

「…分かりました」

この話を伝えればきっとローゼは怒るだろうとディルクは想像しながら、頷いた。

「テアはこのことについて、了承したのですか」

「ああ」

それは聞くまでもないことだったかもしれない。

テアの性格を考えれば、彼女が首を振るはずはない。

学院祭の時も、そうだった。テアは自身のことにはほとんど無頓着で、周りのことばかり気遣って……。

強い意志を秘めた黄金の瞳を脳裏に浮かべ、ディルクはそっと、けれど強く、拳を握った。

「……学院長、いくつかお伺いしておきたいことがあります」

「答えられることなら、いくらでも」

「犯人の動機は、何だったのですか」

「……」

学院長は束の間沈黙し、やがて苦笑した。

「……ディルク、お前も、人が悪いな」

「あなたは嘘をつかない、と信じているだけですよ」

ディルクが推測できる、テアが狙われる理由と言えば、二つ。

無名だったテアがシユールに入学を果たし、エンジユ・サイガという有名な音楽家を師としたことを妬んで。

もしくは。

ディルク・アイゲンをパートナーとしたことを、妬んで。

これ以外にも、ディルクの知らないところで何かがあるのかもしれない。

それでも、この二つのいずれかが犯人の動機であつただろうと、あれからディルクはずっと考えていた。

だが、犯人の動機がディルクにあると本人が知れば、彼は気に病む。そう学院長は考えて、犯人の動機が後者であればディルクに対してそれを出さないようにするだろう。

だから、ディルクたちに対して誠実であろうとしてくれている学院長が前者を答えればそれが真実で。

学院長が沈黙すること、それはすなわち犯人の動機がディルクだと知っているも同然ということになる。

「……テアはこのことを知っているのですか。いえ、学院長はテアに対してどこまで口にしたかは仰らなかつた。テアは一体どこまで知っているのですか？」

「お前…、あまり頭が回るのも考えものだな」

学院長は苦い顔を見せて、それでも真摯に答えた。

「……彼女は何も聞かなかったよ」

この場合は嘘をつく方が誠実なのかもしれない。

そう思うが、学院長である彼にしてもこの聡明な相手を前にして見破られない自信はなかった。

それでも、嘘ではなくとも、学院長の言葉は本当でもない。

テアは何も聞く必要もなく、最初から、誰よりも先に全てを知っていて、全てをなるべく隠そうとした。

自分の周囲の人々のために。

この目の前にいる、青年のために。

学院長の詭弁を分かって、答えにくい質問をしなければならぬことを申し訳なくも思いながら、ディルクは続ける。

「それでは…、テアにはいつ、この話を？」

「冬休みの間だ」

「そう…、そうですね…」

新年が明けて、ここで再会した時のテアの微笑みを思い出す。

自身が襲われたことなど、何もなかったように、笑っていた。

思うことは、色々あるだろうはずなのに、何も表には出さず、いつも通りに笑っていたのだ。

おそらく彼女は事件の裏側を半ば理解している、とディルクは直感していた。

テアは公正な人間だ。いくら大層な貴族が相手でも、相手が罪を犯せば償いをさせるのが当然のあり方だし、今後一切手を出さないからと、それだけで済ませることを許すのはおかしい、とディルクは思う。

表には出さずとも、何かしらの償いを課させることはできるはずだ。だがそれをさせない、というのは、それをさせると何かあったと勘づくようなことがあるのではないか。

例えば、この学院の中に犯人がいて、犯人である生徒に何かし

ら異変があれば…。

もしくは、学院の外のことであっても、名のある貴族に何かしら異変があれば…。

ディルクは疑うだろう。先の事件に関連してのことではないか、と犯人の動機がディルクにあるのならば、おそらくテアはそれをディルクに気付かせまいとする。

気付けばディルクがディルク自身を責めることを、彼女は分かっているだろうから。

けれど、彼女は多分ディルクにそうさせたくない、と思ってくれているだろうから。

だから、隠そうとする。全てを。

名のある貴族が相手だから、黙るのではない。

守るために、彼女は口を閉ざすことを選ぶのだ。

公正さを、捨ててでも。

これは、自惚れかもしれない。

それでも、テアがディルクをパートナーとして尊重してくれているというのは、間違いではないはずだから。

「最後にひとつだけ、確認しておきたいことがあります」

だから、テアのパートナーとして、彼女に恥じないよう、自分もこうして向き合わなければならぬのだ。

「なんだ？」

「……先の事件に、ルーデンドルフは関与していますか？」

その名に、学院長は少しばかり息を呑んだが、やがてゆっくりと首を振る。

「いや…。誓って言う、この件にルーデンドルフの関わりはない」

「そうですね…。すみません、質問ばかりになりました。学院長からのお話は以上ですか」

「ああ」

「それでは、伝えるべきことはライナルトたちにも伝えておきます。お忙しいところ、ありがとうございました」

「いや、こちらこそ……。悪いな、色々」と

「いいえ。それは俺が言うべき台詞でしょう。気遣いを無駄にするような真似をしました」

「全くだ」

言葉とは裏腹に、気にするなと言うように、学院長は笑う。

それに軽く笑いを返して、ディルクは立ち上がった。

「それでは、失礼します」

落ち着いた、丁寧な仕草で、ディルクは来た時と同じようにその部屋から出ていく。

その内心は、おそらく入室の時とは比べ物にならないほどに、落ちて着いてなどいかなかっただろうけれど。

「……全く……、難儀なことだな。ああ、全く……」

ドアが静かに閉まったのを確認して、学院長は深くソファに凭れ、そうひとりごちたのだった。

やはり、離れなければならないのか。

学院長室を退出し、教員棟から出て、ディルクはひとり、広い構内をあてもなく歩いていた。

かけがえのない、たったひとりの存在を、大切にしたいと強く、思うのに。

ディルクが接近したせいで、テアは何度も人の悪意の標的にされてしまった。

パートナーを組んでから、もともとあまり好意的ではなかった生徒たちの彼女へ向ける視線はますます冷たくなって。

ずっとひどい嫌がらせが続けられて。

学院祭では監禁させられそうになり、神誕祭には命を狙われかけた。ディルクが近づかなければ、まだしも彼女は平穏な生活を送れただ

ろう。

分かっていた、はずだった。

それでも、最初は、あの曲を、あの音と共に、奏でたくて。

そして今は、ただ、彼女の側にいたいと、思う。

けれどそれは全てディルクのわがままでしかない。

テアが受け入れてくれ、頷いてくれたからこそそのパートナーではもちろんあるのだけれど、ディルクはそう感じてしまう。

けれどそれも、テアの望みになわぬこと。

守りたいと、きつと守ってみせると、そう思いながら、ディルクは守られてばかりいる。

今回のことも、そうだ。

彼女は穏やかに微笑んで、ディルクを傷つける事実などなかったかのように隠そうとした。

ディルクが自分を責めることを、彼女は良しとしない。

だからディルクは、本来なら、こんな風にネガティブに考えるべきではないのだろう。

テアの本意を思うなら、ただ何も恥じることなく前を向くことが正しいのだろう。

けれど。

守りたいのに、守られて。

守りたいのに、守れなくて。

自分を責めるのも自己満足で、テアが望まないことだと分かっている、やはりそれは嫌だから、自分を叱咤してしまう。

そして、テアを守ることを一番に考えるのなら……、おそらく、ディルクがテアから距離を置くのが、一番簡単で効果的な方法。

だからディルクは、テアを守りたいと思うのならば、身を引くべきなのだ。

それなのに、守りたいと思うのに、離れたくないという思いも強く存在している。

それこそ自分勝手な望みだと分かっている。

けれど、側にいたいのだ。

彼女の隣で、彼女の全てを見ていたい。
他の誰にも、彼女の隣を譲りたくない。

　　いつそのこと、彼女を閉じ込めて、自分としか触れあえぬようにしてしまいたい。

そうすれば、彼女が傷つけられることに怯えることはない。

そうすれば、自分が一番彼女の近くにいられる。

そう考えて、その昏い情念に、ディルクは自嘲するような笑みを仄かに浮かべた。

それを為せば、築いてきた関係も、テアの穏やかな笑顔も全て失ってしまうことになるのだろう。

そうなってもいいから、彼女が欲しいと、心の一部は告げる。
けれどそれも、ただの逃げだ。

大切なものを守れない自分から、ただディルクが逃げたいだけだ。

もし欲のままそうしても、結局のところディルクは何も満たされることはなく、テアを傷つけるだけで終わってしまうだろう。

テアから離れなければと思うのも、もしかすると逃避なのかもしれない。
守れない自分からの逃避。

ただの、自己満足。

もし、ディルクがテアから距離をおいたとして…、テアがそれをどう受け取るのかを考えていない。

彼女は、傷つくかもしれない。

彼女は、自分が何か過ちをおかしてしまったのかもしれない、と自分を責めるかもしれない。

それでも、余計な感情を抜きにしてみれば、ディルクがテアから離れるという選択肢が最も彼女を危険に晒さない手段だと　　そう、考えて。

ディルクの思考は、止まる。

世界が色褪せてしまったように感じる。

こんなにも、テアへの想いが大きくなっていることに、改めて気付かされて。

だからこそ、離れなければならない。

けれど、離れたくない。

そう思っで。

その相反する感情に、ただただ、強く胸が締め付けられた。

どちらかを選択する決断は、まだくだすことはできなかつた。

Match 7 (後書き)

しばらく更新できずすみませんでした！

また少しずつ更新頑張っていきたいと思います。
のでよろしく願いします…。

そんなこんなで、今回はディルクの苦悩でした。

前回のテアに引き続き、思考の流れをつらつら書いてみましたが、
どうも二人のぐるぐるは考えるのは楽しいけれど、

書いてみるのは難しかったりして、

読みづらい点が多々あるかもしれませぬ…。

すみませぬ…(汗)

今回はまた視点が変わって、久しぶりのエツダ登場となる予定です。

ちょっと動きが出てきて書きやすく…読みやすくなる、かな、

なるといいなーと思います…。

「すまない、パートナーを待たせているから……」

シューレ音楽学院の新年パーティーで、集まってくる人々をそうやってかわし、ディルクは遠ざかっていった。

少しでも振り返ってくれないだろうか、とその背中を熱く見つめてエツダ・フォン・オイレンベルクは思ったが、その願いが聞き届けられることはなく……。

振り向かず去っていく背中。彼の人を探すのは、彼のパートナーであって、それ以外ではない。

ディルクにとつて、自分は決して特別なひとりではなく、その他大勢のうちのひとりなのだ実感させられて、エツダはひとり唇を噛んだ。

どうして……。

どうして、どうして、どうして、どうして。。。

シューレ音楽学院の冬休みが始まってから、そして新年が明けてからもずっと、エツダの内心はその言葉でいっぱいだった。

どうして、テア・ベーレンスは変わらずにディルクの隣で微笑んでいるのか。

彼女は、自分が消すはずだったのに。

そう、エツダは学院が冬休みを迎えているうちに、テア・ベーレンスという存在をディルクの隣から排除するつもりだった。

けれど、それを配下の人間に実行に移させたその日。

エツダの元に、成功の報告は来なかった。

いくら「クンストの剣」が側にいるとは言え、多勢に無勢。用意したメンバーで事に当たれば失敗する確率は低い、と踏んでいたのに、それ以後もずっと何の連絡もなく、エツダは眠れぬ夜を幾夜も過ご

すこととなった。

テア・ベーレンスは一体どうなったのか。

計画が失敗して、誰かにエツダの企みだと知られてしまったのか。様々な事態が浮かんでは消え、浮かんでは消え……。

そうして、冬休みが終わらぬうちに、オイレンベルク家当主である父、コルネリウス・フォン・オイレンベルクに呼び出された。

「オイレンベルク当主として、お前に命じる。今後一切、テア・ベーレンスと関わるな」

コルネリウスはどちらかと言えば穏やかな人物で、家族に対する時に柔和な表情を崩すことはそう、ない。

しかし、エツダが父に呼び出され出向いた執務室で、彼はとても厳しい表情を浮かべ、そう言った。

事は露見してしまったのだ。とエツダは蒼白になり、父の前に立ち尽くすしかなかったのだ。

しかしコルネリウスは言葉で厳命を下しただけで、具体的な処罰を課すということとはなかった。

ただそれだけを、エツダに命じたのだ。

エツダの為したことで、その全ての責任は当主である自分が負う。だからこれ以上何もするな、と。

それはとても一方的な通告で、エツダは不安を覚えた。

何かしら、父の背後に大きな意思が動いているような、そんな感覚……。

そして同時に、違和を感じた。

オイレンベルクの前当主でありエツダの祖父である人は、目的のためなら手段を選ばない人間だった。エツダの行為に対しても、寛容に笑いすらしたかもしれない。

しかし、コルネリウスはそうではない。彼は前当主のやり方にはことごとく反対していた、貴族にしては珍しいくらいに清廉潔白な人物だ。エツダのしたことを知れば、エツダが実の娘であって、躊躇いを感じるにしろ、何らかの処罰を与えるくらいはする。そういう

人だ。

その人が、エツダに何の責任も負わせようとはせず、ただこれまで通りにしていると言うのだから、不審を覚えるのは当然というものであったかもしれない。

そもそも、コルネリウスはどのようにしてエツダの行為を知ったのだろうか。エツダの配下が、実行に失敗して？ 「クンストの剣」に背後にいるのがエツダだと知られてしまった？

「クンストの剣」としても、四大貴族であるオイレンベルクと事を構えるわけにはいかず、ただエツダにテア・ベーレンスへの手出しを禁じた…、そういうことなのだろうか。

そう推測するが、何となく腑に落ちない。例えそうであったとしても、せめてエツダに謹慎くらいは命じそうなものだと思うからだ。

そしてエツダ自身も、この父に知られてしまった場合は、シユーレを去ることになるかもしれないと、漠然と覚悟していた。だがそんなことにはなりたくなかったから、焦ってはいても成功するように、人員を集めたのだ。

それでも、計画は失敗してしまい、エツダが背景にいて全てを動かしていたのだと知られてしまった。

もつと時間をかけて計画を練り、焦らず確実に成功できるようなタイミングで実行すべきだった、とその点において後悔を覚えるが、後の祭りである。

何よりも、エツダにとってテアを排除するのはこの時でなければならなかった。新しいパートナー選びの前に、彼女をディルクの側から消さなければならなかったのだから。

そう、ディルク。

一番の懸念事項が、エツダの心を蝕んだ。

彼はエツダの行為を、エツダが仕組んだことだと知ってしまったのだろうか。父の言葉の端から感じられる限りでは、情報は限られたごく一部の人間しか知らないように思える。

もし、ディルクに今回のことが全て知られてしまったら…。

それが最も、エツダの恐れることだった。

だから今回も、配下の人間には多額の金を渡して口止めしたのだ。関係者にはなるべくエツダが背景にいることを知られないようにし、目的も話さなかった。

デイルクの清廉潔白さは、コルネリウスに通じるものがある。エツダの行為を知れば、おそらくデイルクはエツダを軽蔑する。

それを分かっているなお、エツダはテア・ベールレンスの存在を抹消しようとした。そうしなければならなかった。エツダが、デイルクの隣に立つために。

けれど、今あの方の隣にいるのは私ではなく、あの平民なのだ……。見えなくなったデイルクの背中を、それでも追い求めるように、彼の人が消えていった人込みを見つめ続けながら、エツダは思う。

ここに来て、エツダの強い懸念は払拭された。デイルクはいつもと同じようにエツダに微笑み、生徒会選挙に向けての激励をしてくれたから。

もしデイルクがエツダのなしたことを知っていれば、あんな風には笑いかけてくれないだろう……。

エツダがその想像に心胆を寒からしめ、蒼白になって立ち尽くしていた、コルネリウスの執務室で、彼は小さく嘆息し、娘の心を読んだかのようにこう言った。

『エツダ……、シユーレを辞めたくなくなったのなら言いなさい』

『お父様……、何を言うのですか？』

『正直なところ、私は今でもお前がシユーレに通うことには反対だ。お前にはこれまでオイレンベルクの人間としてふさわしい教育を受けさせてきたし、いくらシユーレが国を背後に持つ学院だからと言って、オイレンベルクの人間が庶民と同じように勉学をするというのは本来褒められたことではないのだ。それはお前自身も重々承知していることだろう』

『お父様、それについては入学前に散々話しあったはずですよ。私は

…、辞めません。少なくとも、あと一年は…絶対に』

『お前がそうしてシユーレに執着する理由は、分かっている。エツダ…、言いたくはないが、改めて言おう。お前はオイレンベルクの人間だ』

『改めて言われずとも…』

『いや、お前は分かっているのではないのだ。エツダ…、以前にお前が婚約者候補だった相手の男は、今は平民だ。陛下の血を引いているとは言え、彼は皇族であることを拒否した。そんな男に、オイレンベルクの長女を任せるわけにはいかない』

『お父様！ 一体何を仰るのですか…！？』

『それでもお前が彼と結ばれたいと言うのなら、この家を出る覚悟でいなさい。お前の覚悟がそれほどのものならば、私も お前の母も反対はしない。だが、このオイレンベルク家のためには、お前にはオイレンベルクの姓を捨ててもらわなければならない。もちろん私はお前に生活で苦しい思いはしてほしくない 陰ながら支えになることはもちろんだ。だが、今と全く同じ生活はできない。お前はそれを本当に分かっているのか？』

父に内心を見透かされていたという羞恥と怒りもあり、エツダはその父の言葉にその時答えられなかった。

『それでも、あの方は陛下の血を引く高貴な方です。私の相手として、これ以上ないくらい申し分のない、素晴らしい殿方です』

本当は、彼女はこう反論したかったのだ。けれど、父の静かな視線に負けて、何も言えなかった。

ただ、彼女はテア・ベールンスには手出ししないと誓い、今後もしユーレに通う旨のみ告げて、逃げるように父の執務室から立ち去ったのである。

今でも、エツダの胸には父に反論したかった言葉が強く燻って残っている。

そう、私はずっとあの方に恋焦がれてきた…。あの方以外のことなど、もう考えられない…。

だから、テア・ベールンスへの手出しが禁じられた今、エツダにできることはただひとつ。

これまで以上にあの方に近づけるように努力して…、そしてこの想いを告げる。

理想は、ディルクからその言葉をもらうことで、そのために彼の人の気持ちをこちらに向けようとし続けてきた。

やはり男性の方から、というのが慣例としてあるし、ディルクの想いを確信できるまで、自分から告げることは怖かったのだ。

けれどももう、そんな風に足踏みをしてはなかなか距離は縮められない。

次のディルクのパートナーになるために、エツダは勇気を出すことに決めたのだ。

ああ、けれどやはり、あの存在は目障りに過ぎる。

切なくディルクの残像を探すエツダの目に、仄暗い色の焰が揺れていた。

「……何か、御用ですか？」
凍りついてしまいそうなほどに冷たい声で、テアは見知らぬ生徒にそう問いかけた。

シューレ音楽学院で授業が再開されてから、既に一週間ほどが経過している。

テアはちょうど、エンジユのレッスンを受けに行くために講義棟から練習棟へ向かうところで、講義棟の階段を静かに下りていた。その時。

不意に後ろに不穏な気配を感じて、直感のままに振り向けば、そこには一人の女子生徒が、今にもテアの背中に触れそうな形で、腕を中途半端に伸ばして立っていた。

どうやらテアを階段の上から突き落とそうとでもしたらしい。ちょうど人がいない時だ。とんと背中を突いてすぐに逃げれば、ばれないうとでも思ったのだろう。

相手の驚愕の表情に、テアはそんな都合を読み取る。

けれどテアが振り向くと同時に伸ばした手は、その生徒が中途半端に伸ばしていた腕を強く掴み、逃れることを許してはいなかった。

「い、いえ、あの、私……」

テアの酷薄な表情に、目の前の相手は怯えたように後ずさるうとすらる。

その様子に、テアは相手の腕を離した。

突然掴まれていた力が消えて、相手の生徒は後ろに倒れそうになる。相手はそのまますぐにでも逃げ出したい気持ちだったが、テアの瞳にはそれを許さない力があって、彼女をその場に縛り付けていた。

「何もないのなら、良いのですが。気をつけて下さい。こんな階段

の上でぶつかるようなことがあっては危ないですから」

「は、は、は、はい……！」

こくこくと頷く生徒。テアはもう相手が自分を害することはないと、すぐに踵を返してまた階段を下り始めた。

レッスンの時間が迫っていたので、先ほどよりも足を速く動かして。

講義棟を出て、テアは外の穏やかな空気を感じ、気持ちを落ちつけるように深く呼吸をした。

先ほどのことは、半ば八つ当たりだった、と少々反省する。

多少は沈静化していたテアへの嫌がらせだが、ここに来て何故か直接的な行為が増えてきていた。

昨日も講義棟から出るところで、上から汚れた水が降ってきたのだ。何とか頭からかぶることは避けられたが、スカートが少し汚れて、ローゼに隠すのに四苦八苦する羽目になった。

それが本当にテアを狙ったものであったかは分からない。もしかしたら、うっかりした間違いで、謝罪するのも気が引けたのかもしれない。だが、タイミングが良すぎた。テアは前期の授業の関係でいつもその時間にはその場所を通っていたから、狙うのは簡単だったはずなのだ。

他にも、テアは毎日のように図書館に通い、大体同じ席に座っている。先日も常と同じように書物に目を通していたら、すぐ傍の窓ガラスが外から割られるという事態があったのだ。司書には風で物が飛んできたようだと話したが、実際にそこまで風が強かったかというところではないし、そんな偶然もそうあるものではない。幸いにして怪我はなかったが、おそらく狙われたのだろうと思っていた。これで寮がローゼと相室でなかったら、あてがわれた自室などしっちゃんかめっちゃんにされていたかもしれない。今のところ、誰しも「クンストの剣」であるローゼに表だって反抗を示したいなどとは思わないらしく、寮での生活は安泰だったが。

けれど、どうして今、また？

歩きながら、テアはそのことを考える。入学当初と比べれば、随分と嫌がらせも少なくなってきたのに、ここにきてまた度を越すようになってきたというのが不可解だった。

エツダが年末にテアを襲った理由だと考えていることと同じ理由で、他の生徒も動いているということなのだろうか。

考えたくないことだが、再びエツダが裏で動いているということも考えられないわけではない。だが、前回の失敗で彼女はこちらに弱みがある。デイルクに彼女の犯したことをいつでも教えることができるという切り札を、こちらは持っている。万が一エツダが背後にいて、それがこちらに知られれば彼女にとっては最悪のことになるだろう。こちらとしてもあまり想定したくない事態ではあるが、その危険をわざわざ犯そうとするだろうか。

先ほどの生徒に、誰かに唆されてもしたのかと聞いてみれば良かっただろうか、とテアは少しばかり後悔を覚えた。ささいな嫌がらせならばいくらでも無視できるが、さすがに怪我を負うようなものが何度も続くのは困る。試験に集中しきれないというのものもあるが、何よりこれ以上周りに心配をかけたくないし、巻き込みたくもない。早い内に原因を究明して解決してしまいたい、どうしたものか。テアはひとつ、溜め息を吐き。

それともこれは……、許されない想いを抱えてしまった罰なのだろうか

そんなことまで思って、テアはきつく唇を結んだ。

そんな馬鹿なこと、と分かっている。

ただ今はどうしても、この感情をネガティブに捉えてしまっていて

。テアはそれ以上考えまいとするように、練習棟の階段を駆け上がり、練習予定の部屋のドアを開けた。

そこには既にエンジユが来ていて、いつぞやのように床でごろごろしている。

彼は寝転がったまま、「よう」と軽く挨拶して、反動をつけるようにして上半身を起こした。

そうしたエンジュの動作を見る度に、テアは猫を思い出す。

「すみません、遅くなりました」

「別にそんなに待ってねーし、まだチャイムも鳴ってねーんだから謝んなよ」

エンジュはどこか呆れたように笑い、立ち上がると軽く服についた埃を払った。

「ま、でも早速レッスンを始めるか。試験までそんなに余裕があるわけじゃねーしな」

「はい」

テアは頷き、ピアノの前に座った。

試験の課題曲である「亜麻色の髪の乙女」をどう弾くのか。エンジュが出した課題に対し、テアは課題が出された次の日までに、答えを用意することができていた。

「まず一度、弾いてみる」

エンジュは言う。課題が出された翌日も、エンジュはそう告げた。

そしてテアは、鍵盤に指を落として。

きらきらと、輝くような音を紡いだのだ。

脳裏に描いたのは、とても眩くて、力に満ちた存在。

煌めくその存在を見つけて、近付きたいと思う。

けれど、それに躊躇い、足踏みしてしまう…。

不用意に近付けば、その存在の輝きを損なってしまうのではないかと、恐れて……。

迷って、悩んで、そして決めるのだ。

このまま、遠くからその美しい輝きを見つめているだけでも、いいと。

あの明るい笑顔が在ってくれただけで、いいのだと。

そうして、零れるような輝きは、この手には触れることなく、けれどいつまでもきらきらと瞬き続けるのだ……。

テアが長くはない演奏を終えて、静かにエンジユを見上げると、彼は苦笑して、こう言った。

『お前つてやつぱ…、そつちに思い切つちまうのな』

テアの頭に手を伸ばして撫でながら、何事かをエンジユは吹き。

『…まあいいか。とりあえず試験はそれでいこう』

師は、テアの演奏を認める発言をした。

だからテアは、試験に向けて、こうと決めた表現にさらに磨きをかけていく。

エンジユの指導を受け、練習を重ねて。

けれど、エンジユが言ったように「思い切った」わけではないのだ。多分エンジユも本当にそうであると思っっているわけではないだろうし、テアもそれを自覚していた。

まだ、迷いはある。確実に、この胸に、強くある。

簡単に覚悟など決められなかった。

彼から　デイルクから遠ざかることを、まだ自分は選びきれないのだ。

その感情の揺れが、演奏にも影響して、何度もエンジユに同じ個所で注意を受けている。

毎日のようにレッスンは行われているが、今日もエンジユの指摘は耳に痛かった。

何度も何度も繰り返し弾き続けて、そうこうしているうちにあつという間にレッスンの時間は過ぎてしまう。

レッスンの終わりを告げるチャイムが鳴ると、エンジユは重い溜め息を吐いて、テアも俯いたまま顔を上げられなくなってしまった。

「あのな、テア」

「はい」

「俺、明日からちょっと急な仕事でこつち来られなくなるんだわ」「え…っ」

テアは驚いて顔を上げる。冗談かと思っただが、エンジユは至極真面目な顔をしていた。

「試験の一週間前には戻ってくるんだが、それまで自主練でいいか？ どっかから臨時教師呼んでもいいけど、下手にいじると余計悪くなりそうだし」

余計、という言葉にテアの肩は下がった。

「俺のこと待つんなら、他の教科の勉強時間にあててもいいしさ。」

一応、これまで通り練習室は俺の名前で予約しとくから」

「は、い……」

テアはまた悄然とした。試験も差し迫り、練習がなかなか思うようにいっていない時に、師もいなくなるということに、不安になる。

「大丈夫だつて。色々演奏には駄目出ししてるけど、試験に落ちて留年とかつてことには絶対ならないから。そのレベルは余裕にクリアしてるし。ちゃんと試験前には戻ってくるからさ」

「はい……」

エンジユはそう言うが、不安はそう簡単になくならない。

それでも頷くしか術を知らずに首肯するテアに、エンジユは苦笑して腕を伸ばすと、その頭をいささか乱暴に撫でた。

「先生……」

「お前つてさ、」

複雑な表情で見上げてくるテアに、エンジユは言った。

「こついう時、冗談でも、わがまま言わねえのな」

「わがまま、ですか？」

「そ。お前が必死こいて試験が心配だからずっといてくれて頼んできたなら、俺も多少仕事ほっぽってもいいかなーって気分になるかもしれないのにさ」

「……なりますか？」

「ま、ならんだらうけどさ」

疑わしげに首を傾げると、エンジユは簡単に言っただけ。

その返答にますます肩を落としたテアに、エンジユは笑った。

「俺が言いたいのはさ、お前の場合、もちつとわがままになってもいいんじゃないかねえかなってことだよ」

「はあ……」

ぴんと来ない様子のテアに、エンジユは続ける。

「わがままでいいから、もっと自分の気持ちに素直になれよ。そうしたい、と思ったたらそうすればいい。お前はただでさえ遠慮がち過ぎるんだから、多少羽目外したって誰も文句言わねえよ。何でも簡単に諦め過ぎんな」

「でも、先生は……、例えば私がそうしても、行くんですよね？」

「ほら、そうやって最初から諦める。そりゃ行くけどさ、お前が本当に縋ってきて、それを無碍にするほどは鬼畜じゃねえぞ、俺は」
本当だろうかと疑念を持ちつつも、どこか促すようなエンジユの視線に、テアは口を開こうとして。
できなかった。

「……ほい、タイムオーバーと」

エンジユは持ち上げた自分の鞆で、軽く触れるくらいの力でテアの頭を叩いた。

「悪いな、俺はあんまり気が長くないんだよ」

叩かれたところに手で触れながらテアがエンジユを見つめると、少しだけ可笑しそうにエンジユは笑って、それからふと真顔になる。

「そっぴやさ、お前、最近ディルクと練習したりとか、会ったりしてんの？」

「え……」

その問いに、テアは一瞬口ごもった。

「いえ、最近は選挙の関係でディルクはお忙しいようで……。私も、試験勉強で図書館や練習室に籠りがちですし……。ディルクに何かご用事でも？」

「うんにゃ。ちょっと聞いただけ。……しかしまあ、なるほどねえ……」

小さく呟いて、一瞬だけ思案するような色を見せたエンジユだが、次の瞬間にはにかつと笑っていた。

「んじゃ、そろそろ時間だから行くな。仕事終わって戻ってきたら、

連絡してすぐにレッスンを再開すつから。またそんな時にな」

「はい。お気をつけて…」

「おう。お前も根つめて体調崩さんようにしろな」

「はい」

素直に頷いたテアを背に、エンジユは練習室を出て行く。

「……犬も食わない、ってやつのような気もせんでもないし、これ以上俺がつつくこともないよな」

振り向くことなく廊下を真っ直ぐ行く彼は、こう、ぼそりと呟いた。

「ま、帰ってきた時なんか変わってりや面白いんだけどな」

そんな薄情な師がいなくなつて、たつたひとり、静かになつた練習室で、ピアノの譜面台に置かれた楽譜を見つめ、テアは途方に暮れた表情になる。

今日は…、もう帰ろう、かな…。

普段であればしばらく残つて練習していくのだが、テアにしては珍しく、気が乗らない、という心境だった。

試験が迫っている時だ。何度でも練習を重ねるべきで、そうすれば多少は演奏もマシになるかもしれない。

けれど今は、ただこのままがむしろに弾き続けても演奏が良い方向に変わるとは思えず、気分も重くて、腕が持ち上がらなかつた。

テアはのろのと立ちあがると、楽譜や筆記具を鞆にしまい、練習室を出ていく。

自然と重い溜め息を吐いてしまつて、ますます気分が暗くなつた。

わがまま、か……。

行かないでください、と言えば良かったのだろうか。

そうすれば、まだ安心していられたのだろうか。

だが、本当に口に出して、それを叶えようとするならばエンジユにも、その仕事の関係者にも迷惑をかけることになつただろうし、それを見ればきつと後悔するのだ。

テアは先ほどエンジユに叩かれた額の辺りに触れながら、昔のこと

を思い出した。

お母さん…。

彼の人にも、『いけないで』と、ずっと言いたかった。でも、言えなかった。言えば困らせてしまう、それが分かっていた。だから嫌だった。

けれど、今でも、言えるものならば言いたいと思う。

『いけないで、戻ってきて……』

それで、母が本当にずっと隣に居続けてくれるなら、いくらでもそう言っただろう。

でも現実はそのうちではなくて。

言葉に出しても、本当にそれが叶うわけではない。

だから、そう、簡単に諦めてしまう。

諦めることができなければ、期待し続けてしまえば、叶わなかった時に傷つく。

それがただ、怖いだけなのかもしれない。

何よりも、やはり。

わがママを言った時に、相手から迷惑だと思われるのが。困らせて、嫌われてしまうのが。

怖い。

わがママを言わないのは。言えないのは。本当はただ、臆病なだけなのだ。困らせたくない、相手のことを考えている振りで、ただ自分が傷つきたくないだけ。

ちゃんと、分かっている。

一方で、時々わがママ、ささいなそれは、嬉しいものだというところも、知っている。

それは、相手に必要とされている、ということだから。

だが、いずれにしろ 言えるわけがない。

ずっと側にいて欲しい、なんて……。

そうやって物思いにふけりながら、練習棟を出て、寮へ向かって歩

いていたテアはふと立ち止まった。

遠目にデルクの姿を見つけてしまったのだ。

その隣には、エツダの姿がある。

二人は並んで、どうやら泉の館に向かっているらしい。

おそらく生徒会選挙の関係だろう。学期が再開してから、生徒会選挙の活動は活発に行われていて、エツダが役員に立候補したことを当然テアも知っていた。

そして、彼女がそれに関して助言を求めているのか、現生徒会長であるデルクと二人で並び立つところを、何度も目撃していた。

嫉妬、か……。

胸に燻る感情を隠すように、テアは両手でぎゅっと鞆を抱えた。

学院祭の頃も、二人を見る度に感じていた感情。

それは、エツダがフォン・オイレンベルクだから、それだけではなかったのだと、今更になってテアは気付いていた。

あまりにも、並び立つにふさわしい二人に見えるから。

だから嫌だったのだ。

『もちつとわがままになってもいいんじゃないか』

エンジュの言葉が脳裏に響いて、テアは遠ざかっていく二人の背中を見つめながら、心の中だけでそつとわがまを呟いた。

彼女の隣じゃない、私を見て、私だけを、見て……。

微笑んで。名前を呼んで。寄り添っていて、ほしい……。

そんなわがまま 言えるわけがない。

許されない。

だから、やはり……。

離れていくしか、ないのだろう。

そう、思うのに、目を逸らしたい一方で、いつまでもデルクの背を目で追ってしまう。

この気持ちを自覚してから、どうすれば踏ん切りがつくのか、そればかりを考えていた。

何度でも、母に問いかけた。

どうやって父と離れる決心をつけたのか、と。

テアを守るために、父を守るために、旅立ちを決意した母の強さが欲しかった。

全てのことに決着がつくまでは、近付き過ぎてはならないと、分かっ
ていて。

守りたいと、強く、強く思うのに。

誰よりも側に在りたいと、同時に願ってしまう。

そんな風に想ってしまう気持ちを、捨ててしまいたかった。

その弱さを、振り切りたかった。

そうでなければ。

手を、伸ばしそうになってしまうから。

”パートナー”としての距離をこえて。

踏み出してしまいそうだから。

この気持ちも、簡単に諦められるものだったら、良かったのに
……。

もう見えなくなってしまった背中を、見つめて。

それでも、この距離こそが正しいのだと、テアは自身に言い聞かせ
た。

簡単に諦めきれなくても。

諦めたふりは、できるから。

そうして、遠ざかるように、目をそらして、テアは再び歩き出した。

Match 9 (後書き)

また間が空いてしまつてすみません……。しばらく多忙で、しかもまだその多忙が続きそうな状況です……。ゆったりペースな更新になりがちだと思いますが、どうかご容赦ください…。

というわけで、今回はテア視点でのぐるぐるでした。

もう少し展開するはずがだらだらとしてしまい……反省。

次回はもっと物語が動いていく、はず、なので、楽しみにしていただければ幸いです。

「一体何をやってんですかあの男は……！」

生徒会選挙、そしてその後試験を控える一月も半ばの午後。

その日の全ての授業を終えたローゼは、予約していた練習室で一人楽譜と睨めっこを続けていた。

ふと集中が途切れて窓の外に視線を移した先、遠目にディルクとエツダの並ぶ姿を見つけてしまい、思わず呪詛のような暴言を吐いてしまう。

「……選挙活動の手伝い、だろうな」

そこに、後ろから不意に冷静な合いの手が返ってきて、ローゼは肩を揺らし、ぎくりとしながら振り向いた。

「ら、ライナルト……」

聞かれてしまった、と後悔を覚えるが、ライナルトは楽しそうな笑いを口の端に浮かべて近付いてくる。

「また気配を消してましたね？」

「『クンストの剣』が、声をかけるまで気付かないというのはどうなんだ？」

「そんなの……、相手があなただからじゃないですか……」

罵倒を聞かれてしまった羞恥もあるのだろう、唇を尖らせたローゼは上目遣いにライナルトを睨みつけた。

そんな風に拗ねてみせる表情が可愛らしい上にその台詞か、とライナルトはさらに破顔して、ローゼのすぐ隣に立った。

「遅くなってすまなかつたな」

「それは別に、いいんですけど……」

もともと、二人で試験に備えた練習をしようと約束していたローゼとライナルトだった。

少し遅くなるかもしれない、とローゼは予めライナルトから聞いていたし、そこまで長い時間待っていたわけではないから、ライナルトに対しては特に怒ってはいない。

が、窓の外、既に姿を消してしまったディルクのことは別だった。ここのところずっと、ローゼはディルクに対して苛立ちを抑えきれずにいる。

ディルクは　　テアを、避けていた。

そして、テアも……、ディルクを、避けている。

そのことにローゼが気付いたのは、まだ学期が再開して間もない頃。先に目に付いたのは、普段から共に過ごすことが多いテアの行動だった。

最初は気のせいかと思った。

けれど、テアは食堂に行く時間をずらし、エンジュの名を借りて練習室を使うようにして泉の館に近寄りなくなり、二人が揃う場面を見なくなった。

自然にそうなったのなら、最近ディルクと会う機会が少ない、くらいテアが口に出してもおかしくないが、全く彼の話題がテアから出ないというのは、妙な話で。

故意にテアがディルクのことを避けているのだ、と分かった。

しかし理由はと考えると。

喧嘩でもしたのだろうかと思ったが、そういう雰囲気でもない。

ローゼはそれに気付いた時テアに問いかけようとしたが　　、できなかった。

ディルクからもらった髪飾りを、毎日とても大切そうに取り出して、綺麗に保っているテアを、見ていたら。

その表情はとても、切なげで、儂げで……。

言葉に、出させてはいけない気がした。踏み込めなかった。

ローゼは、冬休みの間、テアがずっとディルクにもらった髪飾りを上手くつけられるように練習していたのを知っている。そう、冬休みと、授業が再開して数日、その間はずっとテアはそれを身につけ

るようにしていたのだ。

そんな風だったから、一体何があったとしても、テアがディルクを嫌いになったなどということは考えにくい。

けれど今、テアはもらったそれを見つめるだけで、普段は箱の中にそっとしまっておくに止めている。

一体何があったのだろう、と打ち明けてくれないテアの行動の理由を、ローゼは数少ない情報から導き出そうとして、もうひとつの異常に気がついたのだ。

ディルクもテアを避けている、ということに。

気が付いてみれば、それは明らかだった。

今までは、一日に最低でも一度は二人が言葉を交わすところを見ていたと思うのに、それが全くない。

一方的にテアがディルクを避けているにしても、それだけで接触が皆無になるということはないだろうし、ディルクが、今までにはあったはずの顔を合わせる機会がない、ということに気付かないということもないだろう。そして、ディルクの性格からして、気付いていてただ黙っているということはないはずだ。

二人の間に何かがあって、示し合わせて距離を置いているのか、と思っただけれど、違う。

二人とも、気付いていないのだ。互いに避けあっている、ということに。

そして二人とも、自身が相手を選んでいるということを、相手にならなく意識されたくない、と願って、同じような思い込みをしている。

テアはおそらく、ディルクは生徒会選挙もあり、その関係で忙しくしているから今はまだ気付かれていないだろうと思っている。

ディルクはディルクで、テアは生真面目だから試験勉強に勤しんでいて、避けられていることを察してはいないだろうと思っている。

その様子を見ていて、ローゼは、そんなところで気が合わなくてもいい、と呆れすら覚えてしまったものだ。

そうして二人のことを見守りながら、ローゼは二人の行動の理由におおよその見当をつけていた。おそらく大きく外れていることはないだろう、と思う。

だからこそ、下手に介入することはできないと、本当は思い切り間に入ってあげたいと思うのに、それができないでいる。

ディルクの事情も薄々察しているからそう責めたくないのだけれど、どうしようもできない自分が嫌で、ディルクに八つ当たりしているのかもしれない。

「……もどかしいな、見守るくらいしかできないというのは」

見透かしたようなライナルトの言葉に、窓の向こうに視線を向けていたローゼは顔を上げた。

「……ええ……」

ライナルトはディルクの事情を全てを分かっているのだろう。それを聞きたい衝動にかられたけれど、おそらく今回の背後のことは打ち明けてくれるまで待った方がいい内容だとローゼは分かっていた。ライナルトも、ローゼが薄らとでも事情を把握していることを察しているからこそ、ローゼの暴言の理由も分かって、先ほどのように口にしたのだろう。

「真面目すぎるんですよ、あの二人は。開き直って、ただ思う通りにしてみればいいのに……」

臆病だ、と言わなかったのはローゼの優しさか。

「……あいつは一度、失いかけているからな」

低く言われた言葉に、ローゼはどきりとした。

それを自分に言ってしまったっていいのか、と動揺を覚えながら、ローゼも返す。

「テアも……だから、なんででしょうね」

二人は親友たちの来し方行く末を案じ、しばしの間、沈黙の中이었다。

「……周りが二人のことをもっと放っておいてくれればいいんですけど……」

「そうだな。だがあの二人、意図せず目的は早々に達成しそうじゃないか。噂の流れは”選挙”に向かっているようだし」

「私としては、それも気に食わないんですが」

テアとディルクが避けあっているおかげ、というのも変な話だが、その分エツダが選挙を手段にディルクに急接近をしかけているので、生徒たちの好奇な噂の方向は、七十五日も経たない内に、ディルクとテアの二人ではなく、ディルクとエツダの二人へと変わりつつあった。

「これでまたディルクとテアがパートナーを組むとなったら……、周りはそれをどう解釈するんだろうな」

「それで多分二人とも真剣に悩んでるんじゃないですか」

「……やはり少し、根回ししておこうか」

「えっ？」

呟いたライナルトに、ローゼは訝しげな瞳を向けた。

「根回し……って、」

「来期も二人がパートナーになった場合に備えて、少し……な。今の中から学院長や……協力者に話しておこうかと。ローゼ、お前にも少し手伝ってもらいたいのだが……」

「それはもちろん、私にできることで、二人のためになることならばなんでもします。でも一体何を？」

ライナルトはその質問に悪戯っぽい微笑を見せ、ローゼの耳元で「根回し」の内容を囁く。

それを大人しく聞いていたローゼは、話が終わると啞然として自身のパートナーを見つめた。

「……いいんですか、そういうのって」

「最良ではないが、効果的だろう？」

「それはそれで、色んな反応が怖いんですが……。それに、話を通しておいて結局二人がパートナーを諦めてしまったら、」

「大丈夫だよ」

遮るように言って、ライナルトは笑った。

「大丈夫だ」

その自信のある言葉には、ライナルトのディルクへの強い信頼のよ
うなものが見えて、ローゼは納得しほつとするよりも嫉妬を覚えた。
「……早く、そうなると良いですね」

「そうだな」

頷いて、ライナルトは目を細めると優しくローゼを抱擁した。

突然のことに、ローゼは目を丸くする。

「あ、の……？」

「二度目までは我慢できたが、さすがに三度目となるとな」

「ライナルト……？」

戸惑いながらも拒まないローゼに気をよくして、ライナルトは少し
身体を離すと、相手のその滑らかな頬にひとつ、口付けを落とした。
「……！」

「本当に可愛いな、お前は……」

「え、ちよ、今、な、な、な、」

顔を赤く染めて混乱するローゼの頭をそつと撫でて、ライナルトは
抱擁を解いた。

「……そろそろ練習を始めようか」

「……なんなんですか急に、なんなんですか平然として……！」

真っ赤になりながら頬を膨らますローゼだが、ライナルトに手を取
られて練習室の真ん中、譜面台の方へと移動する。

ライナルトはローゼを宥めるような笑みを浮かべながら楽譜を示し、
ローゼの照れ隠しのような怒りを受け流した。

もう……。

ローゼは速くなった動悸を鎮めるようにフルートの冷たさを感じな
がら、もう一度だけ、窓の外に視線を向ける。

大丈夫だと言った、ライナルトを信じてみようと思う。

けれどそれでも、今はこんな風と一緒に試験に向けて練習すること
もない二人を思って、切ない気持ちが胸に湧き上がるのは抑えきれ
なかった。

match 10 (後書き)

また長らく間が空いてしまい、申し訳ありませんでした…。
大分落ち着いて小説に時間がとれるようになってきたので、
多少なりとも更新頻度を上げて参りたいと思います…。
またよろしくお願いします。

「お嬢さま、最近とてもお楽しそうですね」

「そうかしら」

朝、侍女に髪を丁寧に梳られながら、エツダは澄ました顔で返した。だが、実際のところ侍女の指摘は正解だ。

こここのところずっと、エツダは学院生活が楽しくて仕方がなかった。毎日のようにデイルクと二人きりの時間がとれている。それが理由だ。

学院祭の実行委員をやっていた時もデイルクの側にいられる時間は多かったが、他のメンバーもいることが大半だったし、何よりもテアが泉の館にしょっちゅう顔を出していたから、デイルクとテアのツーショットを見なければならぬ場面も多かった。

だが今は違う。今回の生徒会選挙ではエツダは個人的にデイルクに相談に乗ってもらっていたし、二人きりになれるように努力もした。そしてテアがまずデイルクの側に現れない。

だからか、少し前までは不愉快な噂を聞くことが多かったというのに、ここ数日ちらほらとエツダの情報網に引っかかってきたのは自分自身とデイルクとの噂話。

思い出すとついつい口元が緩んでくるのを引きしめて、エツダは朝の支度を終えた。

鏡に映る白い制服に身を包んだ彼女は、今朝も完璧にその美貌を整えている。

学院に通う間はオイレンベルクの本邸を離れ、学院近くの別荘で暮らしているエツダだが、別荘とはいえ大勢仕えている使用人に見送られ、馬車に乗ってその日も学院へ向かった。

選挙日まで残り僅か……。

馬車に揺られながら、エツダは心の中でそう呟く。

準備は万全、自身が当選するだろうことを、現時点でエツダは確信していた。

何より力になってくれたディルクに報いるためにも、エツダは絶対に生徒会役員にならなければならないのだ。

そして、当選した暁には……。

そのことを考えて、エツダはぎゅっと強く膝の上で拳を握った。

生徒会選挙で当選することができたら、ディルクにパートナーの申し込みをしよう。

エツダはそう決めていた。

一步を踏み出すために、生徒会選挙当選は良いきっかけだった。

だが、断られるかもしれない、と、そのことを考えると、怖い。

選挙に対しての自信はあったが、恋に対してはそこまで強くなれなくて、臆病に構えてしまう。

ディルクにふさわしい女性にと努力を続けてきた彼女であっても。

今日も、そうして、エツダはその時のことを何度も頭の中でシミュレーションした。

その内に馬車は学院に辿り着き、エツダは不安を微塵も見せない堂々とした態度で校門をくぐったのだった。

「ディルク様、演説会の草稿なのですが、気になった部分や指摘された部分を訂正したので、またチェックしていただいて構いませんか？」

「ああ」

生徒会選挙も間近に迫り、選挙の一日前には候補者による演説会が開かれることになっていて、エツダはそのための原稿を用意しているところだった。

原稿を完成させるため、その放課後、講義棟の一室を借り、エツダ

とディルクは小卓を挟み向かい合って座っている。

講義に使われない時間帯、講義室は生徒の勉学やグループワーク等のために開放されているのだ。

とはいえ練習室と同じで基本的には予約が必要で、エツダは選挙のため、何よりディルクの助言を受けるために、連日講義室を使用していた。

図書館にも同様の部屋がいくつか用意されているのだが、彼女が図書館を敬遠したのは、テアが頻繁にそこを利用しているからだ。

ディルクにもエツダと同様図書館に行き辛い理由があったし、特に異を唱えることもなく、エツダに従っていた。

その理由を、エツダは知る術もないが。

ただ彼女は、自身が持ってきた原稿に目を通すディルクの姿をこっそりと見つめ、彼の近くにいられることに幸福を感じていた。

自身の原稿を見てもらっている、ということに緊張も感じるが、それよりもこの距離間による動悸の方が激しい。

エツダの原稿を真剣に見てくれているディルクは、何度見ても美しく、一瞬でも目を離すのが惜しくなる。

ずっとこの時間が続けばいい、とエツダは思った。

二人きりの時間、ディルクを独占できる時間……。

年が明けてから確実に、ディルクと過ごす時間が増えた。

年明け当初はあんなにも恐れていることがあったというのに、その幸福に恐怖はぼんやりとしたものになりつつある。

エツダのために、試験前ということもあるのに、貴重な時間を割いてくれるディルク。

もしかしたら、本当に……、過ごす時間が増えるにつれて、彼が少しでもこちらに想いを向けるようになってくれているのではないかと錯覚してしまいそうになる。

いいえ、錯覚などではない。本来、そうあるべきだったことなのだから。

あの時、学院祭でディルクが見せた動揺とテア・ベーレンスへ

の抱擁。エツダはその一部始終を遠くから見つめていて、デイルクの想いを疑った。

けれど、あれも、一時の気の迷いのようなものだったのかもしれない。

彼女が、テアがデイルクに選ばれたのも、あまりにも学院にそぐわない彼女にデイルクが同情したから。

眞実はきつと、そうなのだ。

そう思ってもやはり、テアの実在は目障りで。

エツダはそつと、テアに反感を持つ者たちに囁いていた。

『彼女がいなければ、デイルクが後期のパートナーに誰を選ぶか分かりませんわね。いいえ、いたとしても続けてデイルク様がある娘を選ぶなどあり得ないけれど』

そう、思うでしょう？

エツダがそう首を傾げて微笑んでみせれば、男女関係なく、彼らはずかに頬を紅潮させて頷いた。

エツダはただそう言ったただだったが、だがその後彼らが密やかに始めたことを知っていて、止めるということもしなかった。

これは約束の反故にあたるだろうか、と彼女は自問し、否、と自答する。

エツダの父が彼女に言ったのは、テアに関わるな、手出しするな、ということだけ。

エツダが口にしたのは、あくまでも後期のデイルクのパートナーに關してのことだ。と、いくらでも主張できるし、直接テアに関わつたわけではない。

他の人間がその言葉を受けてどう行動しようと、それはその人間が起こしたことであって、自分には関係ない。

けれど、それ以上のことは口にしなくとも、誰でもいい、早く、とエツダは思っていた。

あの娘を、ここから、消してしまつて。

自分の視界から。デイルクの、隣から。

「先日見せてもらったものより、ずっと良くなっているな」

やがて、原稿を読み終えたディルクは顔を上げ、エツダに微笑んだ。「ありがとうございます」

物思いから覚めたエツダは、彼女の努力を認めて微笑むディルクに笑顔を返す。

「いくつか気になる箇所があったが、そこを少し手直しすればもっと良いものになるだろう」

ディルクはそう言って、問題と思われる場所を指摘した。

エツダはディルクの指摘に頷きメモを取ると、返された原稿を受け取る。

他にいくつか聞いておきたいことがあったので確認して、エツダは座りながら丁寧に頭を下げた。

「今日もありがとうございます。ディルク様もお忙しいのに、いつもすみません」

「謝ることはないさ。お前くらい一生懸命な人間が役員になってくれたら、俺も安心して後が任せられる」

「そんな……」

エツダは恥じらうように少しだけ顔を俯かせた。

その様子に何故かディルクは既視感を覚えたが、その感覚も一瞬のこと。

「ディルク様、演説会の打ち合わせには参加なされますか？」

「あ、ああ。少し早いが、一緒に行こうか」

「はい」

エツダは嬉しそうに頷き、ディルクと同じタイミングで立ち上がり、二人で部屋を出て、演説会の打ち合わせが行われる泉の館へ向かったのだった。

そんな風にして、あつという間に日々は過ぎ、演説会を迎え、翌日の生徒会選挙当日。選挙会場は講堂、朝の八時から夕方の五時までに、生徒たちは任意の時間に来て投票できることになっている。

一時間に一度選挙管理委員会が投票用紙を回収し開票するため、その日の内に結果が出、翌日全校生徒に公開されるのだ。

その日一日を落ち着かずに過ごしたエツダは、すぐに帰ってしまうというのも気が進まず、夕方、構内のベンチに一人座っていた。と言つても、その側に控えるように侍女が立っているのだが。

投票時間が終了するまであとわずか。演説会以後選挙活動は禁止され、泉の館にも選挙管理委員以外立ち入れなくなる。

さすがに取り巻きたちの追従にあまり余裕も見せられず、動揺を他人に知られるのも嫌で、彼女は一人になれる場所を選び、ざわりと風に葉を揺らす樹の下腰かけているのだった。

とは言え、エツダの当選への確信が揺らいだとか、そういうわけではない。

彼女が考えるのは明日、当選の発表がされるその後のことだった。結果が出たら、ディルクにパートナーの申し込みをする。

今日はもう、そのことで頭でいっぱい、講義中も気もそぞろだった。

ディルクは頷いてくれるだろうか、それとも。考えても答えは出ないし未来が分かるはずもない。エツダは本日何度目になるのか、大きな溜め息を吐いた。

せめて来期までディルクが生徒会長を務めてくれれば、パートナーという接点が万一见出せずとも、エツダが生徒会入りすることでその側にいることはできたかもしれないのに……。

そんな後ろ向きなことを考えてしまう。だが実際、エツダだけではなく他生徒もディルクの退任に惜しむ声

を上げている。

昨日の演説会でも、候補者の前にディルクが挨拶をしたのだが、辞めないうで欲しい、と言う声はその時いくつか上がっていた。

ディルクの跡を継ぐ生徒会長候補は今回一人で、任期が終わるまで現生徒会役員の会計である青年だ。

堅実な性格で仕事をきっちりこなし、他の生徒からの人望もある。ディルクが彼の手腕を認めて推薦したらしいが、やはりというか当然というか、ディルクと比較してしまえば見劣りするのはいたしかたないことだった。

それにしても、ディルクは何故今期での退任を決意したのだろう。多くの生徒に期待されて、ディルク自身生徒会長という役職をやりがいを持って務めていた、と思う。

何よりも飛び級したディルクは来年最上級生で、最も生徒会長であるのにふさわしい時期とも言えるだろう。

エツダは不思議に思っ、一度それとなく尋ねたことがあったがはぐらかされてしまった。

その姿は何かを隠しているようにも見え、エツダはディルクとの間に壁を感じて、悲しくなったのだ。

思い出して、エツダは俯いた。

また、壁をつくられてしまうのだろうか。それとも彼は受け入れてくれるだろうか。

そうして下を向いていたエツダの耳に、五時を知らせる鐘の音が届いた。

投票時間の終わりを告げるその音に、ますます明日が近づいてきたことを感じ、エツダはぎゅっと両手を結んだ。

生徒会役員選挙の結果が公表された。

一般生徒・教師にはペーパーの形で、候補者と現生徒会役員は朝から泉の館に集められ、その一室で選挙委員より発表を受けた。

その結果はデイルクが予想していた通りで、特に大きな感慨はなかったが不安も覚え、これからは彼らに任せようと、肩の荷が一つ下りた気持ちになる。

とはいえ試験が終わり、後期の最初の日に就任式が行われるまでは現生徒会は続行するし、その後も引継があるのでまだまだデイルクの役目が終わったわけではないのだが。

選挙委員は開票結果とその詳細に関して告げると、就任式とそれ以後のスケジュールについて簡単に説明し、これからの生徒会への激励の言葉を送ってから、その場を解散とした。

それでもすぐに全員がその場から去るということにはならず、ほとんどの者がその場に残って、これまでの健闘をたたえあったり、今後のことに関して盛り上がる。

その中でデイルクは、当選した者、しなかった者、いずれにも声をかけて励ました。

「エツダ。当選おめでとう」

「ありがとうございます。これもデイルク様のおかげです」

「いや、俺は少し手伝っただけだ」

かしこまって言われて、デイルクは苦笑する。

何より、デイルクは今選挙におけるエツダの努力を知っていたから。朝から放課後まで、講義に出てきた生徒に声をかけたり、各サークルを巡って挨拶をしたり、アピールを欠かさなかったし、公約内容も良く練られていた。演説会でのスピーチも堂々たるものだったし、

彼女がディルクの後継でも良かったかもしれないと思うくらいだ。多少ディルクの偏見も入っているが、学院に通う貴族の生徒というのは後継ぎではないお気楽な身分の者がほとんどで、国立の名門校だからというそれだけの理由で入学してきて、他平民ほど必死になつて勉強する必要もないから卒業できる程度にやっついていく、というような場合も多い。

それと比較すれば 比較せずとも、四大貴族と言う名門中の名門の出身でありながらエツダは努力を怠らない生徒だった。

やろうと思えば実家の名前を出すこともできただろうが、少なくともディルクの前でそれをあからさまに見せることはなかった。

分からないことがあれば積極的にディルクに質問してきたし、何事も手を抜いて疎かにするということもなかった。

だからこそ、一年生ながらにして役員当選、なのだろう。

ディルクのように入学して半年で生徒会長、というわけではないが、生徒会役員は会長・副会長・書記・会計の四人のみ。

エツダが今期の役員 書記に当選したというのも滅多にあることではなく、それに彼女の人望と才能と努力が表れていると言えた。

「最初は慣れないことも多いだろうが、お前ならすぐに立派にやっ
ていけるだろう」

「私にはもつたいたいお言葉です……。ですが、期待を裏切らない
よう努力は忘れません」

「ああ、応援している」

ディルクが微笑むと、エツダは嬉しそうに笑い返したが、彼女にし
ては珍しく、言い淀みながら次の言葉を発した。

「あの……ディルク様」

「なんだ？」

「折り入って、お話したいことがあるのですが……。今日の放課後
は御用時が入っていますでしょうか？」

「いや、特にないが……。何かあったのか？」

めでたい日だろうに、エツダの顔は緊張か何かで硬くなっているよ

うで、ディルクは心配になった。

「いえ、そんな、ディルク様に心配をさせていただくようなことは何も！ ただ少し、話したいことがあるだけで……。あの、いつもの講義室に授業の後で……。構いませんか？」

「ああ、大丈夫だ」

「良かった……。お待ちしていますね。すみません、今は、ここで失礼します」

ディルクが頷くと、彼の次の言葉を聞くまいとでもするように、エツダは頭を下げて、その場から立ち去った。

どこか慌てたような　まるで逃げるようにも見える様子に、ディルクは、彼女にしては珍しい、と思いつながらその背を見送る。

その時のディルクには、エツダのそんな態度を見ても、彼女の内心を推し量るべくもなかったのだ……。

生徒会選挙も無事に終わり、また一つ将来に向けて集中できる要素が増えた。

それはいいのだが、と考えながら、その放課後、ディルクはエツダに言われた講義室に向かっている。

もう何日、テアと顔を合わせていないだろう……。

中途半端な気持ちのままテアと向き合うことができず、罪悪感を覚えながらも彼女のことを避け始めてしまって、それでもふと気付けば、考えるのはテアのことばかり。

やがて思考は、けれどだからこそ離れなければ、とそれに向かって、そのことを考えたくないから他の雑事に没頭する。

最近はその繰り返しだった。

生徒会選挙は、テアのことを考えないようにするためのかつこうのもので、引継資料もほとんど去年完成していたのに、手を加え過ぎ

るほどに加えてしまったほど。

その上で試験勉強に手をつければ、思い悩んでいる暇もなく一日が過ぎていった。

睡眠時間も碌にとらず、机に向かって仕事をしているか勉強をしているか、もしくは練習室に籠るか、そんな日々を過ごしてライナルトには窘められ心配もされたが、息抜きに外へという気分にもなかなかない。

自分でも何をやっているのかと呆れてしまっただが、どちらに一步を踏み出すか、決意を固めるのは容易ではなく、ぐらぐらと揺れる心に翻弄されてしまうのだ。

目的の講義室の前まで来て、デイルクはふっと息を吐くと、意識を切り替えるようにそのドアに手をかけた。

講義室の中にはエツダが一人、窓際に立っている。

その姿に一瞬だけテアの姿が重なって、デイルクはエツダと共にいて何度か感じたことがあった、既視感の正体を知った。

エツダとテアの容姿には、似通ったところがあるのだ。

二人の雰囲気の違いすぎ、またテアが普段から眼鏡をかけているから今までそう思わなかったのだが、そうと気付いてよく見れば、目元や耳元など造形がよく似ている　ように思う。

だから、だろうか。

助言を請われて、頷いて。他の候補者との兼ね合いもあったから彼女だけを特別扱いしたつもりはなかったし、他の候補者に対しても配慮を怠ったつもりはなかったが、それでも彼女と過ごす時間は増えていた。それは、事実。

テアと離れることを考えたくなくて、答えが出ないまま顔を合わせても曖昧な態度で彼女を傷つけてしまいそうだったから、会うこともできなくて。

だから、エツダと過ごしていたのは純粹に彼女の努力に応えたかっただけではなく、ただ無意識に求めていたのだろうか。テアの、面影を。

「デイルク、様？」

「……すまない、待たせてしまったか」

ドアを開けてもなかなか中に入って来ないデイルクに、エツダは首を傾げて促した。

「いいえ。それに、忙しいデイルク様をお呼び立てしたのはこちらですから」

エツダは微笑んだが、それはいつもの彼女のものとは違い、ぎこちないものだった。

デイルクはそれを怪訝に思いながら、エツダの方へ近付く。

「……折り入って話したいことがある、と言っていたが、どうかしたのか？」

「ええ、その……」

エツダはすぐに口を開かなかった。

自分を落ちつけるように、少し俯いて、何度か深呼吸する。

「……率直に、お願いすることに、します」

そう予告するようにして、顔を上げたエツダは、どこか挑むような、請うような瞳で、デイルクを見上げた。

「デイルク様。　来期、私とパートナーを組んではいただけませんか」

その申し出は、デイルクの予期しないものだった。

束の間言葉を失ったデイルクの様子を何と見たのか、エツダは少しだけ視線をそらすようにして続ける。

「その、私はまだ一年ですし、未熟な点多いと分かっております。けれどこれまで、ピアノも一生懸命練習してきましたし、勉強も人の一倍努力してきた、つもりです。私は、ずっと、ここに入学して、デイルク様とパートナーになりたいと、そう思ってきました。その気持ちは、誰にも負けません。それに、入学してからこれまで、

ディルク様と過ごして、確信したんです。きっと、お互いを支え合える良いパートナーになれる、そう……」

その琥珀色の瞳が、どこか情熱的とも思える色に、煌めく。ディルクはこの時ようやく気付いた。エッダの秘めた想いに。全く感じていなかったこと、というわけではなかった。

けれど彼女が自分に向けてくれるのは、兄に向けるような類の好意だと、勝手に解釈していたのだ。

エッダと初めて出会ったのは、まだディルクが少年の頃。

王宮で、将来婚約を結ぶかもしれない娘だと聞かされてから、引き合わされた。

『エッダともうします、ディルクさま。よろしくおねがいます』
舌たらずな挨拶。彼女は少年だったディルクよりもっと小さくて、本当に人形のようなだった。

素直に可愛いな、と思った。

少年だったディルクは、小さな彼女のために膝を下り、その手をとってキスをした。

『こちらこそよろしく、エッダ嬢』

それから何度か、彼女とは共に過ごす機会があった。

一つ年下の小さな少女とは、共に過ごすと言っても絵本を読んだり、庭園で遊んだり、それくらいのお愛のないものだったが。

妹というのは、こういうものだろうか、とディルクは思っていた。

そう、可愛いと思った、その気持ちは、おそらくエッダの求めるものと必ずしも同一のものではなかったのだ。

そしてそれは、今でも変わらない。

だが、それでも、今彼女が言葉にしたのは、パートナーにならないかという、それだけ。

それだけならば、彼女に伝えてもいいのではないか。

そう、逃避するように考えて、ディルクは馬鹿な、と自身を罵った。エッダ・フォン・オイレンベルク。

それはディルクの中にあるテア存在を隠すのに、なんとなくつ

けの名だろう。

皇族であることを放棄したとは言え、それでも皇族の生まれを持つ
デイルクと。

四大貴族の一、オイレンベルク家当主の優秀な娘エツダ。

誰も文句は言わない組み合わせだ。

文句など口にしても淘汰されるだけ、讃える者の前には、それは霞
む塵に過ぎない。

そして、”彼女”も。

エツダならば、微笑んで受け入れるだろう。

デイルク・フォン・シーレが帰ってくる、そんな風にさえ、思うか
もしれない。

デイルクが、非情で残酷なことも躊躇わない人間だったならば、彼
女を利用して、本当に大切なものを守るために、エツダに頼いただ
ろう。

だがデイルクは、それも残酷と知りながら誠実でしかいられない人
間で、妹のような彼女を利用するという選択肢を選び、頷くことは
できなかった。

何よりも、彼が望むのは、たったひとり。

たったひとり、だけだったから。

「エツダ……」

デイルクは謝するように目を伏せ、答えを、告げた。

「　　すまない」

「どつして……ですか？」

心臓が早鐘を打っている。

うるさい。

乱暴に思って、動揺を隠しきれないまま、エツダはそう口にしてい

た。

「私、ディルク様をご不快にさせてしまうようなことを、してしまいましたか？ 悪いところがあれば、直します。ディルク様に願っていただけなら、何でもします。理由を 聞かせてくださいませんか」

「お前が悪いということではないんだ」

ディルクはどこか苦しげな表情でいる。

そんな表情を、して欲しいわけではなかった。

けれど、追究の言葉は止まらなかった。

「それでは……」

「俺の、個人的な事情だ。……お前の努力は知っている。ピアノの腕も、もう俺では敵わないくらい、大したものだ。だから、俺などよりもずっと、お前に相応しいパートナーを、」

「そんな者、いませんわ！」

思わず、エツダは声を上げていた。

「ディルク様以上に、私のパートナーに最上の人なんて……、おりません……！」

言ってしまったから、こんな風にディルクの前で取り乱してしまうなんて、とエツダは後悔をせずにはいらなかった。

それでも、一度胸に湧き上がった熱は、簡単には消えず。

冷静にならなければと思いつながら、エツダはその言葉を口にしてしまった。

自分を、そしてディルクをも追い詰める、その言葉を。

真実を。

「……ディルク様、誤魔化さずに教えて下さい。もう既に、心に決めた方がおられるのでしょうか？ だから、なのです……？」

その相手の名は、口にするまでもなく。

「エツダ……」

そしてディルクは、その言葉を肯定も否定もしなかった。

「すまない」

それだけが、答えだった。

エツダはディルクを見上げる。

傷ついているのは、申し出を断られた自分のはずなのに。

悲しそうな、まるで傷ついているような表情を浮かべているのは、ディルクも同じだった。

その瞳に宿るのは、罪悪感、だけではない。

何か別のことに、囚われているかのように。

無力感や虚無感、悲壮感や絶望感、敗北感や喪失感、悲観や諦観、様々な感情が入り乱れて、そこにあった。

ああ……。

ずっと、身体中の熱が冷めていくのが分かる。

ここにいるのに。

ここにいるのは、エツダ・フォン・オイレンベルクというひとつの存在なのに。

彼が見ているのは、ここにいる自分ではないのだ。

それが、分かってしまった。

ずっと強く握っていた拳を、さらに白くなるくらいに握って、エツダは何とか呼吸を整える。

これ以上、慕っている相手に無様なところは見せたくなかった。

涙を見せて続けるには、エツダはディルクのことを知りすぎていて、自分が傷つくだけだと分かっていたし、高い矜持が邪魔をした。

「……踏み込んだ質問をしまいました。申し訳ありません」
普段と同じ調子の、言葉。

「エツダ、」

気遣わしげなディルクの呼びかけを遮るように、エツダは顔を上げて微笑んだ。

「らしくもなく取り乱したところをお見せしてしまいましたけれど、ディルク様は紳士ですから、見なかつた振りをしてくださいますよね？」

「あ、あ」

「今日はわざわざ時間を割いて下さって、本当にありがとうございました。生徒会役員のことでもた分らないことがあったら質問に
窺わせて下さい」

ディルクに言葉を差し挟む余地を与えないように、エツダは一息で
言い、ひとつ優雅にお辞儀を試みた。

「それでは、申し訳ありませんが、先に失礼します」

ディルクの横を通り過ぎ、エツダはドアノブに手をかけた。

「また、な」

その時、後ろから、そう、声をかけられて。

エツダは一瞬、肩を震わせた。

けれど、それもなかったかのように、笑って振り返ると、彼女はは
つきりところ言つて、ディルクの前から姿を消した。

「ええ、また」

そして、早足で、エツダは廊下に行く。

ディルクから遠ざかるほどに、彼女の瞳が潤んだ。

ああ、ああ、ああ！

駄目だった、駄目だった、駄目だったのだ！

彼が優しいのは知っていた。

それでも、自分だけを瞳に映して微笑んでくれていたから、自惚れ
ていた。

きつと頷いてくれると、思っていたかった。

首を横に振られてしまう可能性も、決して忘れたことはなかった。

けれど、希望と期待の方が、大きかったのだ。

だからこそ。

深い絶望が心を覆う。

失意に、呑まれそうだ。

ずっとずっと、幼い頃から、彼だけを見つめて、彼だけを追っ

たのに。
拒絶された。

表面上は、学院でのパートナーについての話、だった。
けれど。

ディルクはエツダの気持ちを察していた。

察して、受け入れることはできない、と伝えたのだ。

エツダが悪いのではない、と彼は言ったけれど、これまでの全てを、
自分自身を、否定されたような気がした。

どうして！？ あんな女よりもずっと、私の方が
全てにおいて優れている。

何よりも、誰よりも、ディルクを愛しているのに。

テア・ベーレンス、あの女さえ、いなければ

彼の隣は、自分のものになるはずだった。

許さない、許さない、許さない、許さない

呪詛の言葉を、心の中に澱ませていく、エツダの瞳に、そして。

彼女の憎悪の対象が、何の因果か、因縁か、運命か、宿命か、必然
か……偶然か。

映り込んだ。

その瞬間、エツダの理性は荒ぶる感情の波に押し流され。

彼女は、駆け出していた。

驚きに目を見張るテア・ベーレンスの元へ。

その存在を、消すために。

何をやっているのだろうか……。

その放課後、テアは自分自身に呆れながら、先ほど出てきたばかりだった講義室に戻っていた。

教師が講義室に来るまで読んでいた本を、講義が始まる際、机の下の物入れに入れておいたのだが、退室する際にそれを鞆に入れ忘れ、本だけ講義室に置いてきてしまったのだ。

レポートに使用する本だったのだが、一度図書館に行つてレポートを作成しようと本を取り出そうとして、ようやく忘れたことに気が付き、今に至る。

本は誰かに持つていかれることもなくそこにあつて、テアはほっと息を吐くと、鞆の中にそれをしまった。

顔をあげて、視界に入った窓の外には葉を失った木立がそびえ、ひとつの人影もない。

「……静か、ですね……」

数日前までは、試験前とはいえ、生徒会役員選挙を控え、候補者がサークルを巡ったり、帰宅者に向けてPR活動を行っていたりして賑わしさのようなものがあつたのに。

演説会以降は候補者の宣伝も禁止され、冬らしい静けさが戻ってきたように感じられる。

生徒会選挙、か……、と、テアは演説会でのディルクを思い出した。あの時、とても久しぶりに、彼の姿をきちんと見た気がする。

距離をおけば、少しでも気持ち薄れさせることができるのではないか、と思つて。

距離をおいて、早く彼のいないことに慣れなくては、と思つて。

テアは少しでもディルクとの接触を避けていた。

けれど、会わない日が続けば続くほど。
会いたい、という気持ち募るのだ。

あの日、講堂のステージに立つディルクを見て、泣きそうなくらいに、テアは 嬉しくて、切なかった。

全く変わらない、むしろ強くなったような気さえする、自身のどうしようもない感情が、厭わしくて、辛かった。

感情を、抑えつけることには、慣れていた、はずだったのに。

抑えつけて、でも膨れ上がって、両方の圧力に、心が押しつぶされてしまいそうだ。

そして、そんな風に、苦しいと思えば思うほど、ピアノの音も重く濁っていく。

どうしていいのかわからない 途方に暮れて、テアは以前と同じようには、ピアノに触れられなくなってしまっていた。

ピアノができないなら……、ここにいて、意味もない。
逃げて、しまいたい。

そう思って、あしながおじさんの、優しい笑顔が浮かんで。
けれど駄目だと首を振る。

今度こそ、守られるだけではいたくない。
守りたいのだ。

だから……。

コツコツコツ、と静けさの中に小さく響いてきた足音に、テアの物
思いは破られた。

余計なことを考えている暇があったら、今は勉強しよう。
ぼんやりと立ち竦んでいたテアは、ゆるゆると鞆を持ち上げ、足を
ドアの方へ向ける。

その時。

殺気、のような強い何かを感じ、テアははっと顔を上げた。

その瞬間、彼女の目に映ったのは、まるで、血のような……、濃紅。

エツダ・フォン・オイレンベルク。
テアがそう認識した時、彼女のしなやかな腕が伸び、テアは彼女に押されるように、床に背中を叩きつけられていた。

「……っ」

眼鏡が床に落ちて転がる音がした。

それを無意識に聞く中で、背中をしたたかに打って、テアは息を詰まらせる。

一瞬、もしかしたら意識が飛んでいたかもしれない。

その上、上から押し掛かるようにされ、テアの首にエツダの細い指が巻きついた。

テアは身をよじるが、エツダの細い腕に、どこに潜んでいたのかというくらい力で首を締め付けられ、なかなか拘束から抜け出せない。

「……どうして、あなたなの……。どうして私ではなく、あなたのような女を、ディルク様は」

呼吸を制限され、息苦しさで戦いながら、テアは見た。

目の前のエツダの美貌が歪んでいる。

それでいてなお美しい、その琥珀色の瞳は燃えるようで、まるで蠟が溶けてでもいるかのように……。テアの頬に、エツダの涙が零れ落ちた。

「許さない、許さないわ……。あなたさえいなければ良かったのよ。そう、あなたさえいなければ……！」

エツダの言葉に、テアの頭はすつと研ぎ澄まされるように、冷えた。

エツダ・フォン・オイレンベルク。

私の従姉妹。

まるで、もう一人の私を見ているよう……。

許さない、そう、私は私を許せない。

そしてあなたたちを許せない。

あなたを許せない。

オイレンベルクの娘。

何故なら全て、私から大切なものを奪った者たちだから。

テアは妙に冷めた頭で、利き手を伸ばし、護身用に身に付けていたそれを手に取った。

意識がぼやける、その中で、テアはそれを、エツダの喉元に突きつける。

「手を離さない。エツダ・フォン・オイレンベルク」
かすれてはいたが、鋭利な刃物のような言葉だった。
エツダはそこでようやく我に返ったように、肩を揺らす。

エツダの喉元に突きつけられたのは、短いナイフだ。その冷たい感触に気づき、エツダの手が緩む。

テアはその隙を逃さず、エツダの身体を押しつけた。

解放された喉から身体が酸素を欲しがって、テアは何度か強く咳き込んだが、鋭いナイフの切先を、エツダから逸らそうとはしなかった。

エツダはそれを、蒼白な顔で見つめる。

彼女は先ほどまで我を失った状態だったのだろう、今は、半ば茫然と、立ち竦んでいた。

「……そんな、もの……、私を、殺す気？」

「それはあなたにこそ問いたいですね。もうこちらには関わるなという約束だったはずですよ」

クリスマスのこともあり、最近の嫌がらせも度を越してきていたので、テアは護身用にそれを持ち歩くようにしていたのだ。

実際に使うことになるとは、あまり思いたくなかったのだが。

「約束、あなた、全て、知って……？」

「あなたにとっては、残念ながら。ジョーカーを握られていながら、

よく手出しができたものですね。……デイルクと、何かあったのですか？」

皮肉るように、嘲るように、テアを知っている人間が見れば愕然とするような冷やややかさで、テアは問うた。

今までテアと一定の距離を保っていたエツダが、こんな風に直接的な行為に及ぶということは、デイルクと何かしら決定的なことがあったのだろう。そう見当をつけることは、難しいことではなかった。

「……っ、あなたには、関係ありませんわ！」

デイルク、とこれ見よがしに呼び捨てを強調されたような気がして、エツダは険を露わにする。

「あなたが……、デイルクを傷つけるような行為さえしなければ、こちらとしても関係など持ちたくはないのですが」

「私が、デイルク様を傷つける、ですって？ そんなこと……」

「ありえない、とは言えないでしょう。神誕祭の時のことは、あまりにも軽率でした。あの時……、一歩でも間違えば、デイルクも傷を負っていたかもしない。悪ければ、命さえ」

「私はきちんと命じましたわ、あなただけを。それ以外には手を出すなと……」

「だから？ 命じればそれが全て忠実に実行されるとでも？ 現にあなたは失敗した。知らないようだから言っておきましょう。あなたが差し向けた方々と私が対峙していた時、デイルクたちもその場にいたので。あの時は何もなかったから良かったようなものの、彼らが持っていた銃が、デイルクを傷つけることだってあったかもしれない」

「……」

淡々としたテアの言葉に、エツダはいよいよ蒼白になった。全く考慮に入れていなかったというわけでは、なかった。けれど確かに、大切な人の安全を完全に確保していたわけでもなかった。狙いはテアだけで、存在が消えてなくなるとしたらテアだけだと、勝手にそう思い込んでいたのだ。

「今もそうです。あなたが私にしたことがどうということなのか、本当に分かっているのですか」

テアがエツダの社会的な存在が危ぶまれることを心配するはずもないから、もう一つ頭に浮かんだ回答をエツダは口にする。

「……それは、あてこすりのつもりなのかしら？ あなたを害せばデイルク様が傷つくと？ けれど勘違いなさってはいけませんわね、それはただあの方が人一倍優しいというだけであって
ふう、とテアは遮るように、わざとらしく嘆息した。」

「そうですね、あの方はとても優しい……、言われるまでもなく、それが私でなくとも、少しでも親しくした人間に不幸でもあれば、悲しむでしょう。だから、それもあります……。あなたは”約束”のことを忘れています。それに、私にとっては少々意外なことですが……、デイルクとのことで、自身を過小評価しているのでは？
それとも、想像力が足りないだけでしょうか、とテアはあからさまにエツダを蔑視する言葉を吐いて。

「何を、言っ……」

言い返そうとしたエツダは、テアの言葉の意味を理解しようとして頭を回転させて、ようやく気付いた。

「ま、さか……」

凝然と、愕然と、テアを見つめる。

「あの約束を言い出したのは あなた……？」

それにテアは無言で返したが、是、という答えをエツダは受け取った。

そうして、確かにあった、違和の正体を、今、エツダは掴んだ。

父がエツダの犯したことを知って、処罰を与えず、ただひとつだけを約束させた理由。

それは約束を提案した者が、デイルクに、「エツダの仕業だと知られないようにしたかった」ためだった、のだ。

それを知れば、デイルクは。

思わずエツダは、その手で自身の口を覆った。

テアが保身のみを図るならば、エツダを遠ざける選択をしただろう。そうしなかったのは、ディルクに真実を知られないようにするため。何故父がテアの言い出した約束を受け入れたのか、そこは判然とせず、気にかかる点ではあったが、今はそんなことはどうでもいい。テアはディルクを守ろうとしていた。

それならば、エツダがしたことは、しようとしたことは。先ほどもずっと強い敗北感がエツダを襲った。

けれど、それを認めたくない、と彼女の矜持が声を上げる。

「……なるほど、確かに、考えが足りなかったかもしれないわね、私は……。けれどそれはあなたと同じ。テア・ベールンス……。あなたが、あなたが分不相応にディルク様のパートナーになるようなことがなければ、ディルク様はこれまで通り過ごしていられた。あなたのせいで、いらぬ謗りを受けることになった。そもそもあなたがいないければ、ディルク様が余計なことでも思いつく可能性もなかった……！」

それは負け犬の遠吠えと言って差し支えないものであったが、テアの胸に突き刺さるものでもあった。

けれどテアは動揺を表には出さず、変わらない冷静な態度で口を開く。

「あなたが私のことをどう思っているかが構いません。ただ、お話ししたように、もうディルクのことは巻き込みたくない……。今後は今回のようなことは慎むようお願いします。今日のことは、私の胸の中だけにしまっておきますので……。あなたが真にディルクのことを想っているのなら、約束を守って、もう二度と私には近寄らないでください」

真にディルクのことを想っているのなら。その言葉が、エツダにはまるで、テアに本当に切りつけられたかのように痛かった。

その想いも、先ほど拒絶されたばかりだったから。

「……私も、好き好んであなたのような方に近寄りたくないなどとは思

「いませんが」

それでも、口元を歪めて、エツダは嗤ってみせた。

「けれどディルク様のためを思う、と言うのなら、あなたもディルク様の側から消えるべきではなくて？」

「……それは、ディルクのパートナーになるのは今期限りにしろ、ということですか」

「本当に、思い上がりも甚だしい方ですわね。万一にでも、どうしても一度あなたなどとパートナーを組みたいと思うでしょうか？」

この学院から消えなさい、そう言っているのです」

「それは……」

「守りたいのでしょうか、あなたも。それならばそうすべきです。ねえ、本当は分かっているんじゃない？ ディルク様の唯一の汚点……、それは今あなたが彼の人のパートナーだということ」

「私が消えたところで、その事実が変わることはないでしょう」「いいえ、あなたがいればいつでも誰かが思い出さずにはいられない。けれどあなたさえいなくなれば、皆すぐに忘れてしまい、やがて何もなかったことになる……」

そうだろうか、と思う一方、そうかもしれない、とテアはエツダの言葉に内心、頷いていた。

それは単なるエツダの願望かもしれないが、テアも同じようなことは何度となく考えたのだ。

自分さえいなければ、何事もなく、日々は平穩無事に過ぎていっただろう、と。

学院に入学してから、だけではなく。母が亡くなる前も、幾度自分がいない世界を想像しただろうか。

テアは目を伏せ、逡巡を見せた。

いずれにせよ、エツダの提案はここでそう簡単に結論を出せるものではない。

ここに入学したのはテアの意思だが、背中を押してくれた人々の存在がある。それを疎かにすることはできない。

今のエツダはおそらく、テアへの悪意だけで言葉を発している。それに安易に頷いてしまうのも躊躇われた。

「デイルク様を巻き込みたくない、と仰ったではありませんか。どうしてそうしないのです？ 守りたいと思いつながら、結局は自分の方が大切なのですかね」

黙ってしまったテアに、エツダは弱みを見つけたような錯覚をした。挑発するように、残虐な色を口の端に湛えて、エツダはせせら嗤う。「自分から辞めることができないというのなら、私が引導をお渡ししてあげましょうか。そう……、例えば、そのナイフ。今私がこの部屋を出て行ってあなたに襲われそうになったと主張したら、どうなるでしょうね？ 駆け付けてきた方がそのナイフを見たら……、私のことを疑うなど、きつと思ってもよらないことでしょう」

「……そう、でしょうね」
小さく呟くように同意して、自嘲を覚えながらも、テアは淡々と続けた。

「確かにあなたの言うことにも一理ある。ですが、こちらにも簡単に頷けない理由があります。そういう手段をとられて、私とあなたが一対一になったと知られるのも、“約束”に関わっているのは私だけではないので、いささか問題がある……。引導を渡して頂けるといふのなら、もっと平和的に願いたいものですね。……どうでしょう、私とあなたで勝負するというのは」
思いついたように、テアはそう言葉に出した。

「勝負？」

怪訝に問い返してきたエツダに、テアは明瞭に答える。

「ええ、そうです。……今度の試験で、あなたが私より上位であれば、私は退学します。けれどその逆であれば、私はここに残り、もう一切あなたは私に関わらない。そういうのはどうですか？」

「あなた……、その勝負に勝てると思いますか？」

見下すように視線を向けてくるエツダにも、テアはあくまでも冷静だった。

「それはやってみなければ分かりませんが……。そもそも、あなたが引導を渡して下ると仰ったのでしよう?」

挑発を返され、エツダはテアを一層強く睨みつける。

「……あなたが約束を守るといふ保証は?」

「ご心配なく。私はあなたとは違います」

それには強く反論できず、悔しさを堪えるしかない。

「……そう、それならもう一つ付け加えてもいいかしら? 退学の上、それ以降デイルク様と関わらない、と。そうでなくては意味がありませんものね?」

「構いません。それではこちらからも一つ」

テアはエツダの言葉を待っていたかのように即答し、エツダはテアが一体何を言い出すのかと身構えた。

「私がここに残るとなった場合、さりげなくでよいのですが、私を害しようとする生徒がいて、あなたが気付いた場合、それを止めさせて欲しいのです。正直、最近色々仕掛けられて困っているのですよ。迷惑がかかるのが私だけならばよいのですが、そうではありませんし。広い人脈をお持ちのあなたなら、そう難しいことでもないでしょう?」

エツダは自身がやってきたことを、全てテアに知られているのではないか、と若干窺うようにテアを見やったが、彼女はあくまでも無表情を貫くばかりだ。

だが、付加された条件が無茶なものではないことに、癪ではありつつわずかに安堵する。

「……いいでしょう。私がそんな労をすることは、きっとないでしょうけれど」

そして、エツダは頷き。

二人は、互いの間にあるものに決着をつけるために、ここで契約を交わしたのだ。

やがて。

「……それでは私は失礼しますわ。せいぜい、ここにしがみついて
いられるよう努力なされることね」

「……」

そんな捨て台詞を吐いて、去っていくエツダの背中を、見送って。
テアは手の中にあるナイフを見下ろした。

それを掴む自身の手は、力の込め過ぎて強張ってしまっている。

背中を打ちつけたこともあり、心配だったが、指を握ったり開いた
りして、ピアノを弾くのに問題はないだろうと分かり、安堵する。

酷い疲労を覚えて座り込みたくなかったが、あまりここに長居するの
はまずい。

テアは素早く護身用のナイフを再び身に隠し、眼鏡を拾ってかけな
おすと、近くに転がっていた鞆もさつと拾い上げた。

エツダと向かいあっていた最中も気にはしていたが、もう一度近く
に人の気配がないことを自分なりに探って、誰にも見られてはいな
かっただろうと、ドアの方へ向かう。

部屋の中には特に痕跡らしいものもないから、このまま去ってしま
って問題ないだろう。

エツダも、そろそろ講義棟からは出ていっただろうから、とテアは
窓の外と、部屋の中を確認して、ようやくドアを潜った。

歩きながら、空いた手で制服に付いた埃を簡単に払う。

このまま何もなかったように図書館に戻る気にはさすがになれず、
テアは一度寮の部屋に戻ろうと、足をそちらに向けた。

その顔色は若干青白いものの、表情は何事もなかったかのように平
素のまま。

ただ、その指先がほんのかすかに震えていて、動揺の残る彼女の心
情を表していた。

講義棟を出て、寮に戻りながら、テアは俯きがちに先ほどのことを反芻し、よく耐えたな、と無感動に胸の内言葉にした。

一度は封印したはずの憎悪が溢れ出るのは容易なことだった。あの、ナイフの冷たい輝きで、彼女の、エツダの命を奪ってやりたかった。

テアから最も大切なかけがえのない存在を奪っておいてなお、ようやくできた居場所も何もかもを奪おうとする彼女が、憎かった。エツダを前にして、無表情の仮面を外さなかったのは、外せなかったのは、それをしてしまえば憎悪がテアの内から外へまでも溢れかえってしまうと分かっていたからだ。

あの頃の私であれば、こうはいかなかっただろう……。たったひとつのかけがえのないものを失ったばかりの、あの頃であれば。

憎悪の衝動に従うことに、何の躊躇いも覚えなかっただろう。だが、今は違う。

いや、あの時も本当は同じだった。ただ、あまりにも喪失が深すぎて、それ以外のことは考えられなかっただけで。

あの頃も、今も、テアを大切に思ってくれている人たちがいる。そしてテアも、同じように思っている。

テアがその手を血に染めてしまうことは、彼らを悲しませてしまうこと。

それは、想像に難くなかった。

それだけは、それだけが、嫌で、テアは踏みとどまっている。

彼女は、エツダは、その想像を少しでもしなかったのだろうか。

テアはそれが不思議でたまらない。

そもそも、テアがいなくなっただけからといって、その後すぐにディルクがエツダを選ぶかなど、分からないではないか。

他の女性が現れたら、また同じことを繰り返すのか。

それともテアさえいなければ次はエツダ、という自信があるのか。一時でも他の女性が彼の隣にいるのが我慢ならなかった、そういうこともあるのだろうか。

あまり考えたくないことだと思いつながら、テアは更に思い返す。

先ほどの彼女の様子。尋常ではなかった。誰に見られるか分からない場所であんな行為に及ぶなど、通常ではあり得ないことだ。幸いなことに、誰にも見られなかったようではあるけれど。

心当たりはディルクのこと、もしくはテアの出生に関わること、二通りが浮かんだが、後者のことであのような取り乱し方をするとは思えない。

何より彼女の反応を見て確信を持てたが、ディルクと一体何があったのだろうか……。

そのことを考えると、胸が締め付けられるように痛んだ。

ここにあるのは復讐心だけではない、とテアは未だ落ち着かない自身の鼓動を感じながら思う。

相手を消してしまいたいと思うのは、エツダだけではなくて。

その理由にディルクの存在があるのも、エツダだけではないのだった。

本当に求める唯一を手に入れるためなら、多少の犠牲を出してもいい、エツダはそう思って、ディルクがその行動をどう捉えるのかは、後回しになってしまったのかもしれない。

それを少しでも理解できることに、テアは嫌悪の念を抱く。

これが恋というものなのだろうか。

こんなに辛苦にあるものを、この胸にさえ抱かなければ、良かったのに……。

彼女も　自分も。

テアは寮の部屋へ戻り、ローゼがまだ帰っていないことにほっとした。

勘の良い彼女のことだから、まだ先ほどの余韻が残っている状態であってしまえば、何かあったとすぐに気付かれてしまうことだろう。それに、何よりも。

鏡で首元を確認して、テアは嘆息した。

そこまで目立つ、というほどのものではないが、エツダに首を絞められた指の痕が残ってしまったている。

こんなものをローゼに見られたら、大騒ぎだ。

一体何があったのかと問い詰められ、その場を誤魔化せたとしても、ローゼは犯人を捜し出して懲らしめることを諦めないだろう。

昨年末の事件のことも、学院長からディルクへ話がいき、ディルクからそれを聞いて、納得できないと憤慨していた。

ディルクたちでその話をしていた、という時、テアはその場に居合わせなかったが、どうやらライナルトが上手く宥めてくれたようで、それがなければ、ローゼは滅多に使おうとしない権力を使ってでも犯人に辿りつこうとしていたかもしれない。

確かにあの時は本当に、一歩間違えば人死に出る事態になっていたかもしれないのだから、彼女の主張も分かるし、テアも心配をされているというのは承知しているのだが。

少なくとも、今はまだ、決して知られるわけにはいかないのだ。

さて、どうしましょうか……。

首に何かを巻いておくか、化粧でもして誤魔化してみるか。

だがそれでは、何かを隠していると見せつけるようなものだ。

困った、と途方に暮れながら、テアは時刻を確認した。

ここ最近の放課後、部活も試験前で休みになり、ローゼは常以上にフルートの練習に勤しんでいる。

部屋に戻ってからは学科試験の勉強もしているが、今回のフルート

専攻科二年の実技試験課題曲は難易度の高いもので、苦戦しているようだ。

ライナルトと共に楽譜に向き合う様子も、テアは何度か目撃していた。

常と同じであれば、彼女がこの部屋に帰ってくるまで、もう少し時間がある。

それまでに対策を考えなくてはなるまい。

隠しておきたいのはローゼだけではない、他の生徒や教師にだって知られたくはないのだが、一体どんな方法を使えば、上手く隠し通せるだろうか。

首の上に重いものが落ちてきて、とでも言っただけで包帯を巻く？

あまり言い訳としては上等のものではなさそうだ。

「いつそ……」

痕が消えるまで、知人とは会わずにいればよいのではないか。

ブランシユ家に匿われていた時のように、引きこもるとするのは、この場合難しい。

この寮の部屋はローゼとの二人部屋であるし、学院でしばらくに渡って身を隠すところなど簡単には浮かばない。

だから、その逆を行えばいいのだ。

痕が消えるまで。そう、試験が始まるまでの、何日かだけでも。

ここから、出ていけばいいのだ。

それがあまりにも魅力的で、心から離す気にならず、そのことに自分で驚いた。

試験は一週間かけて行われ、最終日に実技試験がある。その試験週間まではあと三日。それだけあれば、この痕も薄れていることだろう。

試験日一日目にテアが受ける学科は、試験でなく全てレポート提出で代替することになっていて、そのレポートは完成させてあるから、三日と言わず四日空けたとしても問題ない。

試験前には戻る、と言っていたエンジユからも連絡がないし、それ

もあって実技試験のことでテアが悩んでいるのをローゼも知っていたから、息抜きという名目を建前に外泊してみても、心配はやはりかけてしまつかもしれないが、エツダのことに話が及ぶことはないだろう。

数日間試験勉強ができないだろうというのが辛いところだが、これまでピアノの調子が乗らなかった分、学科試験の勉強はかなりできた、と個人的には思う。

あとは本番でどれだけその成果を出せるかどうかだ、と開き直ってしまえばいい。

決断、と形容するほどのことはなかったが、これ以外にないとテアは思いこむように決めてしまつて、そんなことをつらつらと考えながら、時間も無いしと、早速必要最小限のものだけを、クローゼットの奥にしまいこんであつた、小さなバックパックの中に詰めていく。眼鏡も外して、ケースと一緒にその中へ。

その手際はかなり慣れたもので、そう時間もかからずに荷造りは終わってしまった。

次は着替えだと、それもテアはてきぱきと済ませてしまつ。さすがに制服で何日も外をうるつくわけにはいかないから、街を歩いていても問題ない格好になつた。

だがそれに、一般の女性として、という形容がつくなら、少し話がかわつてくるかもしれない。テアは、普段ローゼと外出する時のようなワンピースなどではなく、下はパンツ、上はシャツにベストに上着という、普通に街に出るのに女性が身を包むファッションとしては、あまり一般的ではない出で立ちだ。

何故テアがそんな服装一式を持っているかというところ、何かあつた際に逃げやすい……動きやすいものが必要だろうという考えから、入寮の際、念のため持ってきてあつたのである。

普段であれば使わないようなバックパックもその時のためのものだ。その上テアは烏打帽をかぶり、長い髪もその中に隠すようにしまつてしまつた。

胸のふくらみも隠すようにしたので、一見、テアは街にいそうな少年、といった風情だ。最初からテアを女性と知っているのでなければ、その容貌を見て、すぐにどちらの性別かとは判別しがたい、そんな中性的に見える装いだっただ。

それにさらに、首元を隠すようにスカーフと、その上にマフラーも巻きつけるようにする。

テアは手袋も出してきたが、その前に、とペンを手に取り、ローゼに伝言を残しておくことにした。

文言に悩んだが、簡潔に「息抜きに外に出てきます。試験には間に合うように戻るので、もし何日か帰らなくても心配しないでください」とだけ書きつける。

それから手袋をはめて、靴も動きやすいものに履き替えると、全ての準備を終えてしまい、先ほどまでとは打って変わった展開に、いっそ苦笑するしかない。

だが撤回の意思はまるで起こらず、早々にテアはバックパックを持って部屋の外へ出た。

今のテアを見て、すぐにそうと分かる生徒はほとんどいないだろう。誰かとすれ違っても別に構わないが、不審に思われて咎められたら、寮生の身内で会いにやってきたが迷子になってしまったとも言えはいい。

制服を着ている時よりもむしろ堂々とした態度で、テアは廊下を進んだ。

門限時間より帰宅が遅れる際は、寮の入り口の鍵のことがあるので管理人に届け出が必要だが、寮の鍵が空いている時間に入りますならば書類提出は必要ないから、管理人室の前は素通りする。

これが所謂貴族のお嬢様であったりすれば、外出や帰宅がチェックされていたりするのだが、平民であるテアはそういう点では扱いが緩い。後見人がそういう点で厳しくないというのもあり、信用されていることも感じて、素直にありがたいと思う。

そのまま特に誰とすれ違うこともなくテアは寮を出ると、人が多い

正門ではなく裏門の方へと向かった。

裏門にもすっかりと警備の人間が待機しているが、学生証をちらりと見せて、普通に出ていく。

学生証をまじまじと見られると、性別欄で不審な顔をされたかもしれないが、気をつけてという言葉だけで終わって、幾分かほっとした。

おそらく学院長の通達で、テア・ベールンスという名前を警備の人間は全て把握しているだろうから。

別に外出のことを知られるのは構わないが、今の格好では学院長に何かあったと思わせてしまいかもしれない。

行きと帰りのことを考えるとこの服装は良い判断とは言えないが、何日か帰らないつもりで、いざとなったら野宿でもするつもりでいるというのに、普段通りのスカートでは上手くない。

季節が季節であるし、明らかに女性と分かる格好で深夜外にいたら、一体どういうことになるか。

だから着替えを持って行って、行き帰りにだけ普段通りという選択肢もあったのだが、それでは荷物がかさばりすぎる。

多少のやりにくさはあるが、これが一番だとテアは考えたのだった。いずれにせよ、学院を出てしまえばそれらの問題も終わったようなものだ。

あとは帰りだが、首のあざさえなくなってしまうえば言い逃れは何とでもできる。

そうして、裏門から学院を出、学院から離れるテアの足取りに迷いはなかった。

勢い任せの外出だったが、行き先は一応決めてあったのだがここからは結構な距離があるので、徒歩では随分かかってしまいかもしれない。

それも、いい。

テアは軽い足取りで、赤く染まる空を見上げながら歩いた。

先ほどまでとはまるで違う、浮つくような気持ち。

本当はずっと、こうしたかったのだろうか……。

テアは頬を打つ冷たい風すら心地良いものを感じて、目を細める。深く息を吸って、吐く、その時胸にいつぱいになったのは酸素だけではなくて、解放感でも満ちているように思えた。

ピアノと本と、大切な人たち。

それがあれば、後は何もいらなと思うていたけれど。

こうした時間も、必要だったのかもしれない。

今まで気付いていなかっただけで、こういうところも、もしかしたら母に似たのだろうか。

生まれつき病弱でベッドに寝付くことの多かった母は、ずっと外の世界を見て歩いてみたかったのだという。

両親は厳しい人たちだったけれど、母の身体のために力を尽くしてくれ、世話をしてくれた人々も温かく優しく、環境は満たされていた。

けれどそれでも、母は自分の足で外を見てみたかったのだと言った。優しさに包まれていたのに息苦しかったのだと言った。

『だから今が一番幸せなの。あの時が不幸だったというわけじゃないけれど、選択も自由もなかったから』

『でも今はどこにだって行けるわ。何より、テアもいてくれるしね』
朗らかに笑った母の顔を思い出す。

それでも彼女は、自身の身体のせいで、”どこにでも”行けるわけではなかったのだけれど。

幸せそうな笑顔に嘘はなかったと思う。

私も、息苦しかったのか……。

逃げ続ける生活からは、一応、逃れることができているが、学院で様々な注目を浴び続けて。

覚悟して入学してきて、昔と比べれば何でもないことだと思っただけれど、やはりそう簡単に割り切れるものでもなかったのだろう。生活には何不自由ない、けれどどこか閉塞感を覚えてしまっ……。何という驚沢な、と自嘲するが、生まれた時から流れ者として生き

てきたテアだから、ブランシユ家に匿われ、学院で生活するという
ことの方が違和感が強い、という本音も確かにあるのだった。

このまま、戻らなくても、いいかもしれない。

その可能性を、考える。

悪くはない、と頷く自分がいた。

立ち寄る先で、ピアノを弾いたり、本を読ませてもらったりしながら、
思うがままにあてどなく旅を続ける。

それはとても素敵なお仕事のように思えた。

何よりも、たったひとりの流れ者であれば、誰かを巻き込むこと
もない。

大切な人を失う恐怖に怯えることも、ない。

だが、それを実行するには少し、遅すぎた。

あそこには、学院には、自分のことを仲間だと思ってくれる人々が
いる。

そして彼らのことを、テアも大切だと思う。離れたくない、とも。

ローゼ、フリッツ、ライナルト……、ディルク……。

書き置きは残してきたが、それでも何日も戻らなければ、彼らはき
つとテアの身を案じるだろう。

それが、今回のこの外出の最大の問題点だ。

だが、早く戻ることは考えられなかった。

この首に残る指の痕を、彼らには決して見せるわけにはいかないの
だから。

テアはマフラーに手をやり、首元のそれを少し強く掴む。

今こうして学院の外へ出ているということは、エツダとの勝負にお
いては不利に働くのだろうなということをはっきりと思った。

あの時、勝負、などと言い出したのは本当にふと思いついたことだ
つたのだが、踏ん切りをつけるにはちょうど良い案だった。

ディルクへの特別な気持ちを、なかったことのようにしようとして、
できなくて、どうしていいのかわからなくなりそうだったから。

もし、彼女に勝てたなら。それは、少しだけなら自分に猶予を与え

てみよう、という自分の甘さへの寛容。

想いは封印しなければならぬ、それは分かっている。だから、ほんの少しだけ。せめて、友人という距離で、もう少しだけでも近くにいさせてもらえるように。

その猶予の間は、何が起ころうと、自分の命をかけても、大切な人をきつと守り抜いてみせるから。

もう少し気持ちが落ち着くまで、時間を。

けれど、彼女に負けたなら。その時は、潔くこの学院を去ろう。デイルクとも、会わない。少なくとも自身のことに決着がつくまでは勝負の決まりごとという理由があれば、諦められるから。離れることを、きつと決意できるから。

だからテアは勝負を持ち出した。

正直なところ、勝ち負けにはこだわっていない。いや、この場合負けた方がいいのかもしれない。いずれにせよ、その結果次第で決断する。それ以降は悩まない。そう決めてしまった。

あれだけ「あしながおじさん」や学院長には尽力してもらい、これからまた迷惑をかけてしまうかもしれないけれど、ずっと悩んで、迷って、どうにもならなくて、苦しくて、もうそんな日々が決着をつけてしまいたかったのだ。

そういう動機が大きかったから、実のところ、エツダが約束を守るかどうかはあまり重要視していない。あれだけ脅すように言ったのだから、少なくとも「テアに直接関わることはしない」という約束は、もう破られることもないだろう、とそこは幾分楽観視もしている。ああいう分かりやすい勝負を設けることは、エツダにとっても自身の気持ちを割り切るのに良いのではないか、などということも、考えないではなかった。

賽は、どちらに転がるだろう。

勝ちか負けか。テアかエツダか。猶予か離別か。

「今それを考えても仕方がない、か……」

呟きながら、テアは歩み続けた。

陽が落ちた暗い道を、たったひとりで。

試験前の休日の午後。

ディルクは学院を離れ、街の境界近くにまで足を運んでいた。そこに、ディルクがよく利用するヴァイオリン工房があるのだ。

工房と言ってもそこは、ヴァイオリンを作る場というだけではない。ヴァイオリンのメンテナンスや修理、ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロといった弦楽器やその部品の販売まで行っている。

当然、ディルクも自身の手によるメンテナンスはこまめに行っているが、年に数回はプロにも見てもらうことにしており、その時に利用しているのがそこだ。

何度も訪れているので足取りに迷いもなく到着すると、ディルクは躊躇いもなく工房のドアを開いた。

「いらっしやい」

ドアを潜ると、迎えてくれるのは芳しい木の香りと、柔らかいテノール。

工房と言っても、入ってすぐは部品などを販売しているスペースで、実際に作業を行う工房は小さなカウンターの奥にある。

そのカウンターの中から、穏やかに客を迎え入れるのが、この工房の若い主、マイスターであるヴィクトール・バインリヒだ。

彼の仕事に対する真摯さは確かなもので、ディルクは彼の腕を信頼し、いつも自身のヴァイオリンを預けている。

今日訪れたのはメンテナンスのためではなかったが、その信頼があつて、今日もここに来たのだつた。

ヴィクトールも、ディルクを認めると、なじみの客に対する親しげな笑顔になる。

柔和な風貌はディルクと同じ年と言っても通じるほど若々しいが、

実はディルクよりも一回りは年上という話なので、もう三十代。

黒々とした髪に濃緑の瞳を持つヴィクトールは小柄で、ディルクと並んで立つとむしろ彼の方が年下に見られるかもしれない。

「久しぶり……というほどでもないけど、今回もメンテナンスかな？」

「いえ、実は、学院で出された課題で、いくつかお尋ねしたいことがあって、お話を窺えればと足を運んだんです。連絡もなしに、申し訳ないとは思いますが」

そう告げて、土産に持ってきた菓子を差し出してくるディルクに、ヴィクトールは気さくに笑って、ディルクからそれを受け取り礼を言った。

「ディルク君なら大歓迎だよ。今は急ぎの仕事もないし、他のお客様もいないしね。それならひとまず、こっちに」

「ありがとうございます」

ヴィクトールは店の隅に置かれた簡素な椅子を引っ張って来て、ディルクに勧めた。

工房の中に他にも二人、年嵩の男性が作業していて、ディルクは彼らにも声をかけてから、勧められた椅子に腰かける。

一度工房の奥へ姿を消したヴィクトールは、すぐにティーカップを二つ持って戻って来て、片方をディルクに手渡した。

「ごめんね、こういうのはあんまり得意じゃなくて。口に合わなかったらそのまま残してくれればいいから」

「いえ、そんな」

首を振って出された紅茶を一口すする。

ヴィクトールの言葉は謙遜ではなかったが、飲めないほどでもない。ヴィクトール本人もカップに口をつけて首を捻り、まあいいか、などと呟いている。

ちょうどいいからとディルクが持ってきた土産も箱が開かれて、ヴィクトールは美味しそうにそれを頬張った。

そうして二人して少しゆっくりし、ディルクがどう話を進めていこ

うか考えていると、ヴィクトールの方から切り出してくれる。

「それで、課題って言ってたけど、試験前にわざわざここまで足を運んでくれるなんて、一体どういうものが出されたのかな？」

仕事柄、学院の行事やスケジュールに関しても把握しているのだから。

首を傾げてくる仕草に幼いものを感じてディルクは苦笑を洩らしつつ、率直に話し始めた。

「ええ、それなのですが、歴史科の講義のレポートで、ヴァイオリンの材質やその変遷についてまとめることになりました」

ペンと紙を用意しながら、ディルクは課題の詳細と、自身がまとめようと考えている内容、それに関する質問をざっと並べていく。ディルクも自分で調べられることは既に調べてきていて、ヴィクトールに聞きたい内容というのは、本にもなかなか載っていないようなことだ。

ふむふむと大人しくそれらを聞いていたヴィクトールは、納得して頷くと、「こういう内容も吟味してみるといいんじゃないかな」とアドバイスマもまじえつつ、質問にひとつずつ丁寧に答えていった。

これまでヴァイオリンを仲介にして工房主と依頼人という立場で交流を深めてきた二人だったから、それからヴァイオリンの話題で大いに盛り上がる。

時折話が脱線したり、工房に訪れた客のためにヴィクトールが中座することもあったが、課題のためとはいえ楽しく時間は過ぎ、陽が暮れる時刻になるのもあつと言っ間だった。

工房にいた二人の男性もやがて帰ってしまい、ディルクもそろそろ暇を告げなければと思うのだが、ヴィクトールの温和な雰囲気につたりと落ち着いてしまつて、帰れという風でもないので、立ち去り難く長居してしまう。

それは、一人になつてしまえば余計なことを考えてしまつと分かっていたからかもしれないが。

「……ディルク君、なんだか、痩せた？」

課題のことで聞きたいことは全て聞き終え、窓の外が暗くなってきた頃、やがてヴィクトールはそう口を開いた。

その予期せぬ内容に、ディルクは目を丸くする。

「そんなことはない、と思えますが……。そう見えますか？」

「うーん、前回の十二月のメンテナンスの時と比べると、何となくだけどね。少し顔色も悪いような気がするよ。試験だからって、無理をしてない？ 君のヴァイオリンを見てると分かるけど、ディルク君は本当に真面目みだから、逆に心配だよ」

「すみません……。ありがとうございます。ですが、大丈夫です。確かに、少しばかり根を詰め過ぎているかもしれませんが」

「君の少しが他の人にとってどれくらいなのかっていうのが微妙なところだけど、本当に無理はしないようにね」

「ええ。……。それより、今日は長くお時間を割いていただいて、ありがとうございました。助かりました」

心配顔のヴィクトールにほだされて、これ以上ここには余計なことまで口にしてしまいそうだ、とディルクはようやく重い腰を上げることにした。

「おかげで課題も上手くまとまりそうです。今回の礼は、必ず」

「そんな、言ってもらう程のことはしてないよ。こっちこそ、雑談ばかりしてたような気がして、何だか悪かったね」

「いえ、楽しい時間でした」

微笑して告げるディルクをヴィクトールは見上げて、そうだ、と口にした。

「もしディルク君の時間が大丈夫なら、お礼の一曲、今聴かせてくれないかな。君に会って、一度も演奏を聴かないというのも何だか妙な感じだし」

メンテナンス後、必ずヴィクトールは持ち主に目の前で演奏してもらって、出来を確認してもらうことにしているのだ。ディルクのメンテナンスの際も、その例に漏れない。

「……実を言うと、俺もここに来るのにヴァイオリンを持たないの

は妙に感じて、持ってきてしまったんですよ」

同じような違和感を二人で覚えていたのだと分かり、ディルクは苦笑して、足元に置かれた彼のヴァイオリンケースに目をやる。

「ですが、俺の演奏一曲くらいで、いいんですか？ 他にもあれば言ってください。随分と長くお邪魔してしまいましたし……」

「うーん、それがあれば十分なんだけどね。お菓子も頂いちゃったし。もし思いついたら追加することにするよ」

「では、待っていることにします。曲目は、何かリクエストは？」

「ディルク君の、弾きたいもので」
にこにこ笑って促される。

いいのだろうか、と思いつつ、ディルクは一曲を思い浮かべて立ち上がり、調弦を行ってから、おもむろに弓を弦にあてた。

彼が選んだのは、「タイスの瞑想曲」と呼ばれる有名な曲だ。

歌劇「タイス」の中で演奏される間奏曲で、ディルクはその美しいメロディを、葛藤と苦悩を秘めながら、弾く。

やがて静かに音が夕の闇に吸い込まれ消えて、余韻を感じながらディルクが弓を下ろすと、ヴィクトールは手を叩いて彼の演奏を賞賛した。

「とても良かったよ！ 何だか切なくて、胸にぐつとくるような演奏だった」

「少しでも満足していただけたなら、良かったです」

「少しどころじゃないよ。耳が離せなかった」

ヴィクトールは力説して、ふと思いついたように言葉を続けた。

「そう言えば……、昨日もたまたまこの曲を聴いたんだけど、その時の演奏も、本当に切々という感じだったな。この曲も結構たくさん人の演奏を聴いてきたけど、本当に人によって受ける印象がまるで違うんだから面白いよね、音楽って」

「ええ、俺もそう思います。……昨日もこの曲を、というのはいや

リメンテナンスの後で？」

「いや、それが、ヴァイオリンじゃなくてね、ピアノで弾くのを聴いたんだよ。時々この帰りに立ち寄る酒場があるんだけど、そこにピアノがあつて。いつもはただ置きっぱなしなんだけど、マスターが本当にたまーにね、弾くんだよ。それが昨日一昨日行ってみたら、若い子がいて、どうも一晩中ピアノの前に座っていて、お客さんからリクエスト受れたり、騒がしすぎるってことはないけど、いつもより賑やかにやってたんだ」

「ピアノ……で」

「良い腕のピアニストだったよ。それこそ、学院や宮廷楽団にいてもおかしくないくらいだと、僕は思ったね。曲もそれこそクラシックに限らずたくさん知っているみたいだったし、一晩中弾き続けられるくらいピアノが好きなんだね」

それほどのピアノ好きと聞いて、デイルクの脳裏に思い浮かぶのはたった一人で、心がそれだけのことにかき乱される。

ヴィクトールが口にする人物が彼女であるはずはない、のに。

「……俺も、その場で聴いてみたかったですね。ヴィックさんがそれほどもでに言うピアノなら」

「それなら、一緒にこれから行く？」

「え？」

提案に、デイルクは目を瞬かせた。

「明日までは来るみたいな話を聞いたから。多分今夜も、行けばいるんじゃないかな。……と、試験前の学生さんを飲み誘うのはさすがにまずいか。寮にも確か、門限とかあつたよね？」

「いえ、大丈夫です」

デイルクは首を振っていた。

先ほどの台詞は嘘ではなかった。興味がわいたのは本心だ。

様々なことを考えすぎて眠れぬ夜を過ごすなら、たまにはそんな気まぐれな行動を試してみるのもいいだろう。

確かに寮の門限があつて、届も出していないし、遅くなれば出入口

の鍵を掛けられてしまつから夜は帰れなくなるが、一晩外で過ごしてもディルクには支障はない。

寮長であるディルクが無断で外泊するのも問題があるといえはるだろつが、その辺りはライナルトが上手くやってくれるはずだし、一晩留守にするくらいなら、そう心配をかけることもないだろう。

「同行してもいいのなら、行つて聴いてみたいと思います」

「お客さんも、ディルク君と一緒にヴァイオリン弾いてくれたりしたら喜ぶかもね。それじゃあ行こうか」

ヴィクトールは、それと決まつたら早速と笑い、厚い外套をかぶつて、ディルクを促した。

そうして、工房をすっかり施錠したヴィクトールと連れ立って、ディルクは宵闇の街を歩いていく。

出かける際には思いも寄らなかつたことになつたが、久々の冒険というほどでもないがそんな気まぐれに、少しでも胸が躍つた。

ライナルトにも助言されていたのだが、やはり無理矢理にでも外に出てみた方が、少しはすつきりしていたかもしれないな、と反省する。

最近はずつと鬱屈を胸に抱えていて、こんな気持ちになることもなかつたから。

「もうすぐに着くよ。ほら、見えてきた」

ヴィクトールがよく利用するという酒場は、工房から徒歩十分ほどの距離にあつた。

宿屋や食堂が複数並ぶ通りの、一軒だ。

ぼんやりとした明かりが、そのドアを照らしている。

そこから漏れ聴こえてくる音に、ディルクは思わず、足を止めた。

脳裏に鮮やかに浮かんできた光景は、ずっと昔の夏の夜のもの。

道を埋め尽くす人波、並ぶ露店。ざわりざわりと意味のない音と、知らない人間の熱が自分のすぐ側を通り過ぎていく。その中で聴こ

えてきた、たったひとつの音。少女の奏でるピアノ。心はその音に吸い寄せられるのに、身体は心についていけない。

ようやく、見つけたのに

「デイルク君？」

遠い昔に束の間心を奪われ、茫然と立ち尽くしていたデイルクは、穏やかな声に我に返った。

「どうかした？」

「いえ……、ここから聴こえるだけでも、良い弾き手だな、と……」取り繕うように言った、その言葉も嘘ではない。

聴こえてくる曲のタイトルをデイルクは知らなかったが、弾むようなテンポの、楽しい曲だ。思わず、身体を動かして踊ってしまいたいそう。

過去に聴いた「月の光」とはまるで違う曲調。けれどあの時のことを思い出したのはどうしてだろう。

あの時の少女が、この中でピアノを弾いているとでもいうのだろうか。

「それなら、近くでもっとじっくり聴いてみたいよね。早く行こうか」

ヴィクトールが酒場のドアを開け、促してくるのに、デイルクは鼓動が早まるのを感じながら、店内に一步を踏み入れ、見つけた。

一步入れば、店の内部は全て見渡せる作りになっている。正面にL字型のカウンターと、複数のテーブル席。席はすでにそこそこに埋まっている。そして店の奥に置かれた黒いピアノ。

そのピアノの前に座るのは、デイルクの良く知る人物だった。

デイルクの胸を占拠し続けている、少女。

錯覚か、幻覚かと一瞬自身を疑ったが、違う。

「デイルク君？」

また、ヴィクトールが訝しげに見上げてくる。

今度はすぐには答えられず、デイルクはただ声にならない声で、呼

「……」
「……」
「……」
「……」

んだ。

どうして、何故。

その言葉がディルクの頭の中を占拠する。

ケーレの街の片隅にある酒場で。

あまりにも思いがけずにピアノの前に座るテアと出会って。

茫然と、目を見開いてディルクは立ち竦んでいた。

ディルクが酒場に足を踏み入れて間もなくして、一曲が終わりテアが顔を上げる。

ディルクと目が合ったテアも、驚いたように目を丸くして固まり

けれど次の瞬間には酒場の客にリクエストされて、またすぐに演奏に戻ってしまった。

これではなかなか、話しかけにもいけない。

「ディルク君、座ろうか」

同行者であるヴィクトールに袖を引つ張られるようにして、ようやくディルクは空いているカウンター席に彼と隣り合うように座った。

「とりあえずビールでいいかな？」

聞かれて反射的に頷く。

ヴィクトールはカウンターの向こうにいる初老の男性をマスターと呼び、ビールを注文すると、すぐに黄色い液体で満ちたジョッキが目の前に置かれた。

乾杯してヴィクトールはすぐにそれを空にしてしまうと、もう一杯と頼み、ディルクに尋ねる。

「……ピアノスさん、知り合いなんだ？」

あれだけ分かりやすい反応をしてみれば分からないはずもない。

「ええ。……ただ、ここで会うとは思わなかったものですから……、

驚きました」

ディルクが顔を上げて、ピアノに指を滑らせるテアに目をやると、ヴィクトールの視線もそちらに向いた。

学院で顔を合わせるテアとはまた印象の異なる彼女がそこにいて、一目でテアだと分かったのは少しばかり不思議なくらいだ。

驚くべきことに彼女は男装していて、眼鏡は外し、長い髪は被っている帽子の中に隠しているようで、しかもその帽子があるから容貌がはっきりとせず、もとのテアを知らない人間ならば彼女のことを少年だと判断して全くおかしくなさそうなのだ。

実際、酒場の客たちは「坊主、次はもつと激しいの弾いてくれよ！」などと声かけしている。

テアは昨日もここでピアノを弾いていたらしいが、学院の生徒だということを知っているのかどうか。

どうしてここでピアノを弾いているのか、何か事情があるのか、不明な内からあまり余計なことと言わない方がいいのかもしれないと、ヴィクトール相手でもディルクは自身の発言に注意することにした。

「奇遇だねえ」

だが、そんな風にディルクがあまり口にしたくない様子であるのを感じ取ったのか、ヴィクトールは深く追究してこず、それだけ口にして、杯を呷る。

「おう、ヴィック、今日はえらく別嬪なにーちゃん連れてんじゃねえか」

しばしディルクとヴィクトールがピアノの音色をつまみにジョッキを傾けていると、ヴィクトールの肩を軽く叩いてきた男がいた。

ヴィクトールの友人らしい男は、いかにも仕事帰りに寄ったという風体で、酒がまわっているのか顔を真っ赤にしている。

ディルクに対する形容も、素面であれば決してできなかったものだろう。

「うちのお得意さんなんだよ。あんまり絡まないであげてね」

「へえ、にーちゃんも音楽をやりなさんのかい。もしかして学院の

学生さんか？ どっちでもいいけど、プロと比べてもやっぱうめえ
だろ、あの子の演奏はさ」

「ええ」

ディルクは苦笑を浮かべつつ、相手の台詞に同意した。

「学院でもなかなかいいでしょう、あれほどの弾き手は」

「言うな、にーちゃん。気が合いそうだ、一杯奢るぜ」

ディルクの本音に、男はにっと笑い、マスターに「俺の奢りで一杯
やってくれ」と声をかける。

「俺も昨日今日と聴いてるけどな、全然飽きねえし、楽しかったり
なーんかぐつときちまつたりなあ、これから毎日でも来てほしいく
らいだぜ。でもま、そういうわけにもいかないらしいな。こんだけ
うまいんだ、こんなとこでだけ弾いてるんじゃないねえよなあ

……」

こんなとこ、と言われたのが聞こえたのか、マスターが顔を上げて
男を睨み、彼は首を竦めた。

ちよと元いたテーブルの仲間たちからも呼ばれて、「ゆっくりし
ていけよ！」と男は去っていく。

ヴィクトールはそれを苦笑しつつ見送り、口を開いた。

「……ごめんね、気を悪くしなかった？」

「いえ、酔いのせいもあったでしょうが、ああいう風に話しかけて
くれたのは嬉しかったですよ」

ディルク自身は、こうした酒場や人々の雰囲気がとても好きだ。

だが、実際にはこうした場所に馴染む存在にはなかなか成りえない
と分かっているから、知らない人間にでも親しみを込めて接される
のは、真実喜ばしいことだった。

生まれを捨てても、その容貌や、身に付いてしまった皇族としての
気品は簡単に取り除けるものではない。

それを隠そうとすれば隠せるが、こうして自分らしくいる時にはど
うしても、こうした市井の中に紛れ込むことは彼にとって困難なこ
とだった。

酒場に入った瞬間も、今も、常連客が多いということもあるのだろうが、ディルクに向けられる客たちの視線はまるで異物を見るかのようなもの。

それが訝しさや反感と同時に賞賛や感嘆を含んでいても、彼らとディルクが異なるものだという認識がそこにはある。

だが俺は選んだんだ、”ここ”にいることを。”あそこ”ではなく……。

その選択が、いかに他人に受け入れがたいものか。

何度でも、ディルクは噛みしめてきた。

いつしか、ピアノの調べは物悲しい旋律に変わっている。

それを聴きながら、ふとディルクは思った。

例えば、彼女にとっても、ディルクの選んだ道はあつてなきがことしのものであったのではないか、ということ。

彼女 エツダ・フォン・オイレンベルク。

ディルクにパートナーとなることを申し出てくれた後輩。

ディルクに好意を抱いてくれていた、妹のような存在。

ディルクはその想いを拒絶した。

あの時エツダが見せた失意の表情を思い出せば、罪悪感に胸が塞ぐ。だが、自分の気持ちに嘘をついて、エツダの想いを受け入れることはできなかった。

もし願っていたとしても、結局のところは互いに辛い思いをする事になっただろう……。

ディルクの想いのベクトルは、既にエツダとは別の方向に向かっていて。

そして、エツダはおそらく、ディルクの中にとくに消えてしまった幻影を、見ているから。

ディルクを「様」付けで呼ぶ彼女は、解っているのだろうか。

ディルクがとくに貴族という身分をなくし、一平民であるという事実を。

それは他の人間にも言えることではあるが、今は皇族の気まぐれで

市井に下りているだけで、また王宮に戻るつもりがあると、そんな風にも捉えられているのではないだろうか。

身分がどうこう、というのを口にするのはあまり好きではないし、シューレ音楽学院という特殊な環境の中にいるから、一々そのことを追究しようとは思っていない。

だが、おそらく。学院を卒業して、街中でエツダとディルクが出会ったとして。

彼女は一平民であるディルクに笑顔でへりくだり、「ディルク様」と呼ぶのだろう。

その光景は、あまりにも易々と想像することができた。

一方で、他の平民に対し、彼女は一体どんな尊大な態度で振る舞うのだろう。

ディルクは、酷く残酷だと承知の上で、一つの質問を胸中に抱かずにはいられない。

例えば俺の生まれが皇族ではなく、平民だったとして、この学院で出会って、パートナーになりたいと、お前はそう思うだろうか……？

皇族の生まれだという事実は今もはや変えることはできず、幼い頃の記憶も決して消えることはないのだから、そんな前提の話をするのは卑怯かもしれないし、間違っているかもしれない。

それでも、ディルクは問わずにはいられない。

本当に、今のままの、ありのままのディルクを求めてくれているのかと。

今のディルクは、四大貴族の一、オイレンベルク家出身の彼女とは身分上比べるべくもない存在だ。

貴族でプライドの高い彼女が、本当にそんな男を隣に置きたいと思うのか。

情を交えずに、淡々と考えてしまえば、その疑念はディルクの中に大きかった。

疑念……、いや、多分ディルクは分かっていた。

彼女はディルクの選択を知ってはいても、理解はしていない。
彼女が望むのは過去ののだと。
だから……相容れない。

自分勝手な言い分、酷い男だな、俺は……。
自己嫌悪を、覚える。

だが、それこそがディルクの本音だった。
ありのままの自分を受け入れて欲しい、という、それが、何よりも
彼の欲することだった。

正しいと思って、選びとってきた道。誇りを持って、歩んできた。
それを否定され、見ないふりをされて、見たいところだけを見、そ
こだけに向かつて微笑みかけられる。

その苦痛は、もう二度と味わいたくない……。

ディルクはぐつと酒を飲み干し、杯をテーブルに置いた。

一曲がまた、終わる。

「次は温かくなるような曲がいいなあ」

と、ディルクの隣のヴィクトールが小さく呟いたのを聞きとめたよ
うに、ピアノストが次に奏でる曲は、明るすぎないものの、穏やか
で温かみのあるものだった。

それでは、彼女は。テア・ベールンスという少女は、どうなのだろ
う。

そうしたかったわけではないが、比較してしまうことに罪悪感を覚
えながら、考えずにはいられなくて、ディルクはまた、思う。

テアは最初、ディルクの生まれを知らなかった。

「生徒会長」と、「先輩」と、ディルクを呼んだ。

「様」と、「殿下」と呼ぶことは決してなかった。

いつ、どのようにして彼女がディルクの出身を知ったのかは分から
ない。

ただ彼女はずっと変わらなかった。いつ知ったか、それを悟らせな
いほど変わらず、「ディルク」と呼んで、媚びるでもなく、いつで
も穏やかに微笑んだ。

彼の夢に対しても、困惑するのでも笑い飛ばすのでもなく、応援してくれると言った。

デイルクが皇族の生まれだからと言うのではなく、「デイルクだから、デイルクならできる」と。

これはひとりよがりな思い込みだろうか、とデイルクは自問する。彼女への特別な感情がそう思わせるのか。

否、逆だ、とデイルクは心の中で首を振る。そんな彼女だから惹かれずにはいられなかったのだ。

それに、とデイルクは内心小さく呟く。

彼女とデイルクは似ている。

貴族の中にあっても、平民の中にあっても異端の存在。

自分だけではない、何故かテアにもそんなところが感じられる。

だから、なのではないか。

彼女がデイルクを見つめる、その眼差しが他の人間と異なるように思えるのは……。

デイルクは顔を上げ、ピアノに向かうテアをひたむきに見つめた。

同じ学院にずっといたのに、しばらく見ることも避けていた彼女のことを。

ここならば、こうしていても許されると思つて。

久しぶりの彼女の音に、こんなにも胸が満たされる……。

やがてまた、一曲が終わる。

店の中は曲の余韻を残すように温かなざわめきに満ちていて、次はあの曲で、という声がちらほらと上がった。

その中で。

「今度はヴァイオリンとの協演でどうでしょう？」

隣のヴィクトールが立ち上がって声を上げたので、デイルクは驚いて彼を見上げた。

「ここに将来有望なヴァイオリニストがいます。聴いてみないと損ですよ。今ならタダで聴けますからね。将来聴こうと思つたらお金取られちゃいますよ。ピアニストさんも、きつと楽しいと思います

し」

その言葉に、周囲が楽しそうに沸いた。

「おっ、ヴィックが言うなら相当うめーんだろっなあ」

「いいじゃねーか、坊主もにーちゃんもやれよ！」

「期待してるぜ！」

ディルクに向けられる笑顔に、躊躇いを持って彼はテアの方を見、またヴィクトールに視線を戻した。

「ほら、行っておいでよ」

と促されて、ディルクは柔らかな声音に逆らわず立ち上がる。

ケースからヴァイオリンを取り出し近付いていくと、おそらくディルクと同じような顔で茫然としているテアと目が合った。

「その……、良いだろうか？」

ディルクが声をかけると、はっとしたように頷かれる。

その唇が、曲は、と問うように動いた。

「……昨日も弾いていたという、タイスで」

テアはまた首肯し、ディルクが調弦を終えるのを待った。

演奏の準備が終わると、店内のざわめきが少しずつ消えていく。

ヴィクトールの煽りが客たちの期待を高めたのか、先ほどまでとは異なる、息を潜めて待つような緊張感のある空気に包まれた。

演奏者たちは視線を交わして、頷き合う。

テアが鍵盤に指を落とし、それにディルクが続くように、始まった。「切々と」と、ヴィクトールが形容したその音は、見事にディルク

の音と重なって、ぐっとディルクは込み上げる感情に蓋をするように奥歯を噛みしめる。

優美で甘美な旋律は、恋の美しさを描くようにも思えるのに、二人が奏でる音楽には、まるで身を切られるような切なさがある。

二人での演奏は初めての曲だから、完璧な演奏とはもちろんいかな

い。しかし音のそのすれ違いも、切なる感情の発露のように思われて、悪くはなかった。

テアも、こんな風に誰かを想って苦悩するのだろうか……。

それを思えば、ますます胸の内は苦しくなった。

けれど、だからこそ、このままずっとこうして彼女と演奏を続けた
いと願った。

この時だけは、ディルクがテアを独占してられるから……。

最も強い自身の素直な想いを、ディルクは自覚した。

やはり俺は、ここにいたい。テアの隣に……。

彼女を失いたくないから離れなければならない、けれど側にいたい
と、その葛藤も本物で、今も胸に巢食う。

だが、心は当然のごとくに、彼女の隣にいる未来を望み、そちらに
傾きつつある。

どうか、もう少しだけでもいい、猶予をくれ……。彼女との時
間を、もう少しだけでも

ディルクは切なく強く願いながら、最後のフレーズを弾き切る。

テアとの演奏が終わる度、この音を途切れさせたくないのにと、そ
う思うが、それも叶わず、今もまたテアと視線を交わして、音を響
かせて、終えた。

続くように、店内に拍手歓声が上がる。

それは通常のコンサートとは異なる形での賞賛であったが、ディル
クは勇気づけられたように感じて、テアと、そして聴衆に微笑みを
向けたのだった。

「……………ディルク……………」

彼の姿を見た瞬間、時間が止まってしまったように感じた。そう感じたのも、束の間であったようだけれど。

学院を出たテアがそのまま足を向けたのは、街外れにある酒場だった。

昔 母と逃亡の旅を続けていた頃に、テアは一度ケーレの街に立ち寄ったことがあったのだ。

とはいえ中心部には足を踏み入れず、街の片隅に一晩の居場所を求めて、という形ではあったが。

その時に足を踏み入れたのがこの酒場で、今も続いているかどうかが不安だったが、以前と変わらない店構えに安堵を覚えた。

あの頃この店を選んだのはちょうどその時店の外からでもピアノの音が聴こえたからで、今でもやはり同じようにピアノが置いてあったことが嬉しかった。

ピアノを弾いていいかと尋ねると歳をとった店主はひとつ頷いて、それに甘えるように三晩も続けて足を運んでしまった。

昔を思い出してとても懐かしく感じ、同時に母がいないことに寂寥を覚えずにはいられない。

それでも思い出の中の母が微笑んでいて、テアは最近の不調などなかったかのようにピアノを奏で、とても楽しい時間を過ごしていた。そして、何故あんなにも音を紡ぐことが難しくなっていたのか、分かったような気がした。

心を押し殺すことばかりを考えていたから、それが響きを濁らせ、指を鈍らせていたのだ……………。

けれどここでは、何も隠す必要はない。

テアはただ思うがままに奏でた。客たちの反応に合わせながら臨機応変に指を動かしていくのも、学院での演奏とは違って面白いことだった。

客たちは異なる会話を交わしながらも、店の中にどこか一体のような空気が流れる。

楽しみ、癒される、そんな空間が心地良かった。その一部であることが光栄だった。

しかしまさか、ここでディルクと顔を合わせることになるとは。露ほども思っていないかった出来事に、テアは動揺を隠せなかった。音が揺れたのを、誰かに気付かれただろうか。

気付かないでいて欲しいと思った。特に、ディルクには……。その内に、ディルクと共に店に入ってきた青年が声を上げた。

テアに、ディルクと一緒に演奏して欲しいと言う。その言葉に、さらに心が揺れた。

演奏をと請われて近付いてくるディルクの足取りは、どこか慎重でゆっくりとテアのすぐ側に立った彼の姿に、胸が高鳴った。

その存在を近くで感じられるのは久しぶりで、避けていたのは自分の意思だったはずなのに、喜びで胸が詰まる。

演奏が始まれば、いつかと同じような心地良い緊張感と泣きそうなほどの歓喜で包まれて、演奏に集中しながらも、テアは一方で不安だった。

こんなに、近くで。こうして、共に奏でて。この気持ちを、知られてしまうのではないだろうか、と。

それでも想いは溢れていた。

やはり、私は、ディルクのことが、好きだ……。

一層想いは募って、胸がはちきれてしまいそうだ。ディルクと演奏できることが、こんなにも幸せで。側にいられることが、こんなにも嬉しい。

『わがままでいいから、もっと自分の気持ちに素直になれよ。そう

したい、と思っただらそうすればいい』

エンジユの言葉が、脳裏によぎる。

その言葉に、縋ってしまいそうだ。

一番の願いは、”今”。

この時が、ずっと、永遠に続けばいい……。

けれど、永遠はきつと許されない……、自分が、許せない。

それでも、今しばらくと、それだけ、ひとつだけ、望んでもいいだろうか。

この想いは自分一人の胸の中だけにしまっておくから。

口には決してしない、誰かに気付かれたとしてもいくらでも首を振る。

守るためには、何だってする。

ただ、ひとつだけを、もう少しだけという期間を限定して、許して欲しい。

永遠は望まないから、一時だけでも……。

今すぐにこの存在の側から離れることは、やはり無理なのだと分かってしまったから。

心が歪んで、壊れてしまいそうだったから。

この時ようやく、テアは師の言葉の通りに、素直になることを決めた。

だから、私は、きつと勝とう。あの、賭けに。

曲が終わわり、テアは顔を上げてディルクを見つめた。

その瞳には、既に決意と覚悟が固まっていた。

結局、その後も客たちの声があつて、テアとディルクの協演は続いた。

その内に夜も深まっていき、一人、また一人と、酒場から客たちは引き上げていく。

そしてヴィクトールもそろそろと腰を上げ、デイルクはヴァイオリンを下ろしてピアノから離れヴィクトールを見送ったが、しかし彼と共に辞すことはしなかった。

「ごめんね、僕もなるべく長くいたかったけど、明日も早いから」「いえ……。こちらこそ、ありがとうございました。ここで演奏が聴けて……。共に演奏することができて、本当に良かった。あなたの、おかげです。今日は借りだらけですね」

「いや、演奏を聴かせてもらった僕の方こそ、ありがとう、だよ。今日は楽しかった。また一段と冷え込んでいるし、帰る時は気を付けてね」

「ヴィックさんも」

店の外まで出て、デイルクはヴィクトールを見送った。

「……そうだ、デイルク君」

「はい」

「恋、上手くいくといいね」

「！？」

耳打ちされ、啞然としたデイルクに、ヴィクトールは悪戯っぽい笑みを零す。

「君、思ったよりも分かりやすかったんだねえ。それじゃ、また！」「……また」

返すデイルクの言葉にはあまり力がなく、その顔は少々紅潮していた。

小さくなっていくヴィクトールの背中に、デイルクは唸るように内心呟く。

見抜かれていた、か……。

気をつけよう、とデイルクは心に留めて、鼓動を落ちつけると、再び酒場のドアを開ける。

店内では、デイルクが外に出ていた間も、今も、変わらずピアノの音が止まらずに続いていた。

もう一度共に、というよりも、またゆっくりとピアノを聴いていた

くて、ディルクは先ほどと同じようにカウンターに座る。それからずっと、彼はピアノを聴いていた。彼以外に、客がいなくなるまで。

「……何を食べる？」

最後の客が店の外に消え、ピアノの蓋を閉めて立ち上がったテアに、店主はぶっきらぼうに、けれどどこか温かさの感じられる声で尋ねた。

今日ここに来て初めてマスターの声を聞いたような気がして、ディルクは店の主を思わず見つめてしまう。

「では……、シチューをいただけますか？」

テアが答えるのに頷いて、カウンターの奥の厨房にマスターは姿を消した。

その前に彼は店のドアに「準備中」の札をかけていったが、特に退店の言葉もかけられなかったので、ディルクは黙認に甘えることにして、カウンターに座ったままにいる。

その隣に、一つ席を空けるようにして、テアは腰を下ろした。

「……驚きました」

テアが口を開いて、彼女の声をまともに聞くのも久方ぶりだ、とディルクは思う。

他の客がいる間、テアはまともに声を出さず、コミュニケーションをとる際も、身ぶり手ぶりで終えていたから。

「まさかここで、あなたに会うとは……」

「俺もだ」

顔を合わせて、苦笑し合う。

互いに避けあっていたことなど知らず、二人はただ、以前の距離を手探りしつつ、おそらく変わっていないだろうその距離に安堵を覚えていた。

「この近くに来る用があって、ここで良い腕のピアニストが演奏し

ていると聞いて立ち寄ったのだが、まさかお前だったとは……。どうしてここに？」

テアはその問いに言葉を探すように間を空けたが、やがて告げる。

「……実技試験の課題曲の練習が捗らなくて……、気分を入れ替えてみようと思っただけです。ここには昔、母と来たことがあって……、その時もピアノを弾かせてもらったものですから」

その言葉に、デイルクは驚くと同時に、自身の情けなさを感じずにはいられなかった。

自身の感情に翻弄されるばかりで、テアが悩んでいることに気付きもしなかったとは……。

「……良い気分転換になった、ようだな」

「ええ。おかげで納得できる演奏ができるような気がしています」それは今までの演奏と、今のテアの表情に翳りが見られないことでも明白だった。

「だが何故その格好なんだ？ 皆お前のことを少年だと勘違いしていたようだったが……」

テアはその問いに少々罰の悪い表情になる。

「その、やはりこういう時間に女性が一人というのは問題があるかと思ひまして……。こちらの方が動きやすいですし」

昨日も今日の昼間も公園と喫茶店で睡眠時間を確保したので、そういうことを仮定しての装いなのだが、さすがにそれを素直に口には出せずに少しばかりぼかして答える。

それに、逃亡や人の目を避けることに慣れたテアには、こうして別人に見える装いの方が何となく落ち着くような気がして、そんな理由もあるのかもしれない。

「だからか、なるべく声を出さないようにしていたのも」

「はい……。私の声はもともとそう高い方ではないですし、低めを意識すれば大丈夫かと思ったのですが、声を出さないのが一番確実でしたから」

「そうだな」

ディルクは頷き、間近でもう一度テアを見つめる。

「しかし、上手くしたものだ」

「……呆れて、ます?」

「いや、感心しているよ。お前は本当に……、面白いな」

面白い、と形容されてテアは複雑な表情になったが、ディルクは特に揶揄するといつつもりもなく、素直な言葉だった。

テアと言えば、普段は清楚で、そこらの貴族よりもよほど淑女と呼んで差し支えない様子である。

というのに、ローゼすら剣を持つ時以外でこんなことをするかどうか。彼女なら面白がってやりそうな気もするが。

だから面白い、と思う。

警戒心の強いテアのことだから、そこまでしてもあまり奇異には感じず、どちらかと言うと、そこまでするほど演奏に詰まっていたのか、と案じる気持ちの方が強かった。

「……何にせよ、何事もなかったようで、良かった」

ディルクは手を伸ばし、帽子の上からテアの頭を撫でるように何度かぼんぼん、と触れた。

そこに、店主がシチューを盛った皿を二つ持って、奥から現れる。

そのためにディルクは気付けなかった。テアの耳が赤く染まっていることには。

「……」

店主は無言で、テアだけではなくディルクの前にもシチューを置く。

「俺は……」

「食っていけ。演奏代だ」

端的に告げられ、支払いも拒否されて遠慮は当然もたげたが、ディルクは苦笑して厚意を受け取ることにした。

酒場に入ってからディルクは飲みはするものの食事は取っていないから、それを店主もちゃんと分かって、気を遣ってくれたのだろう。

ありがたく、ディルクはテアと共にスプーンを持った。

温かいシチューに身体を温かくしながら、しばらくテアとディルクの二人は黙々と食事をする。

「……昔、母ともこうしてここのシチューをご馳走になったんです」
やがて、懐かしそうに目を細めて、テアは小さく言った。

「けれどまさか、あの一晩のことを、マスターが覚えていてくださったとは思ってもいませんでした……。ずっと前のことでしたし、私も以前とは随分様変わりしたと思うのに……」

ああ、だからテアは彼の前で普通に口を開いたのか、とディルクはようやくそれが腑に落ちた。

けれど寡黙な店主は、口を結んだまま、コップを丁寧に磨き続けている。

「幼い頃のお前はどんな風だったのか……。俺も会って見たかったな」

「きつと、可愛げのない子だと呆れますよ。あの頃はこんなに小綺麗な格好もしていませんでしたし」

「いや……。マスターが覚えていくくらい、可愛らしい子どもだったのだと思う。今のお前が……。こんなに、綺麗なのだし」

そうでしょう、と店主に同意を求めるディルクにテアは反論しようとして口を開いたが、できず、ただ口をぱくぱくとさせて、結局真っ赤になって押し黙るしかなかった。

そうこうする内に、二人の皿もすっかり空になり、腹が落ち着いたところで、テアがまた席を立て言う。

「……マスター、あと一曲だけ、ピアノをお借りしていいですか？」
店主は無言で頷き、テアは礼を告げて、ディルクに向き直った。

「ディルク、聴いて欲しい曲があるんです。その……。試験の課題曲なのですが、忌憚のない意見をお願いしますか」

「ああ」
テアの表情はどこか緊張感の漂うものだった。

それは、しばらく不調だったという事実からくるものだったのだらう。

ディルクは頷き、テアがピアノの前に移るのを見守った。ピアノを前にして座ったテアは、一度深呼吸して、肩の力を抜く。そしておもむろに一度、ディルクへと視線を向けた。眼鏡をかけないテアの、硝子を通さない瞳は凧いでいるようで、一方その奥に熱を隠し持っているようにも見え、ディルクの胸はさざめく。

テアはやがて目を伏せ、静かに、ピアノに指を落とした。

まるで太陽みたいだ、と思った。

あなたに最初、出会った時。

とても眩しくて、熱い、けれど惹かれずにはいられない、そんな存在。

心が揺れた。大きく。

だから。

近付けたことがとても、嬉しくて。

側にいられることが、幸せだった。

共にいられば、この音も豊かに色づいて。

永遠を願わずには、居られなかった。

ああ、けれど。

さよふなら、さよふなら、さよふなら！

そんな、別離の言葉を言わなくてはならない。

その輝きを損なうことがないように。

でも、どうしても、その笑顔が向けられればそんな言葉、口に出せなくなってしまう。

どうしたらいい？

感情の板挟み。

苦しい　苦しい。

だって、あなたを、愛しているから。
あなたを、愛しているのに。
あなただけを……。

その言葉は、決して口に出せない、真実の気持ち。

いつかきつと告げなければならぬのは、さよならの言葉。

けれどこの気持ちはきつとこの胸にあり続ける。

だからどうかずっと、あなたはそのままいて。

幸せに、笑っていて。

私はきつと、それを守る。

きらきらと輝く、大切な、人。

だから。

最後の一言が、静かに響いた。

ディルクはいつの間にか立ち上がっていた。

いつ腰を上げたのか、自分でも定かでない。

ただ、圧倒されて。

優しく悲しいのに、それでいて情熱的な、音。

魅了され、心が揺さぶられて。

動揺を、抑えきれなくて。

何故なら、テアが奏でたのは。

きつと、恋の曲だったから。

何より、最後の音を弾き終えた瞬間に。

どうしてだろう、テアがいなくなってしまうような、そんな錯覚を感じて……。

離れなければとそればかりを考えていたのにと、自身を滑稽に感じるほど。

「……ディルク？」

ゆっくりと立ちあがったテアが、いつの間にか側に近付いていることにも気付かず、ディルクは立ち尽くしていた。

茫然とするディルクを、心配するようにテアは見上げて。

ようやくディルクは、ぎこちなく微笑んだ。

「すまない……」

「いえ、謝ることなんて。それより、大丈夫ですか？ 具合が悪くなつたのでは？ もしかして、そんなに演奏がひどかつたですか？」

見当違いなことを言つて、真剣に案じてくるテアに、ディルクは今度は自然に込み上げる笑みを感じる。

「そうじゃない。逆だ」

「逆……？」

「お前の演奏が……、今までとはまた違う感じを受けたから、驚いて……。それが、ひどく胸に迫つて、音に呑み込まれるよう……。なかなか、余韻から覚めない。それくらい、感動した」

「え……」

信じられない言葉を聞いたかのように、今度固まるのはテアの番だった。

「正直、妬げるくらいだ」

それは複数の対象に向けられた、言葉。

だがテアがその言葉の意味を、正確に把握できるはずもなく。

「そんな……」

ただ、謙遜の首を振るだけだった。

一瞬だけ、ディルクは切ない色を瞳によぎらせる。

お前は一体、何を、誰を想つてあの曲を弾いたんだ……？

「タイスの瞑想曲」の時にも思ったこと。

そうテアに、問いかけた言葉、ディルクは呑み込んで。

「そう、思うでしょう?」

カウンター向こうの、店主を振り仰ぐ。

店内を整えていたその手を止めて彫像のように固まっていた店主は、ディルクのその言葉によろやく我に返ったように手を動かし始め…

…。

彼は何も言わなかったが、その様子がディルクへの同意を物語っていたのだった。

時刻は早朝と呼べる時間に移り変わろうとしている。

そとそろ暇を告げなければ店主にも迷惑をかけてしまっだろう、とテアが顔を上げて窓の外を見ると、まだ太陽も昇らぬ暗い中に、ちらちらと白いものが見えていた。

「また、雪が……」

テアの呟きにつられるようにディルクも顔を上げる。

「あまりひどくならない内に帰った方がいいか……」

これ以上長居するわけにもいかないだろう、という思いもあって、ディルクは立ち上がった。

そして、テアの方へ、手を差し伸べる。

「帰ろう、テア」

この時、ディルクが「お前もこのまま学院に帰るのか?」と、テアの都合を聞かずに、そう告げたのは。

多分、先ほどのテアの演奏から受けた印象を、引きずっていたからだった。

このまま別れてしまえば、テアが戻らず、行方知れずになってしまいうのではないか……。

もう、手の届かないどこかへ行ってしまうのではないか。

根拠もなく、そんなことを思ってしまったからだった。

テアも、まるでその懸念を裏付けるように、一瞬、躊躇いを見せてけれど、彼女は首を横に振ることはせず、ただ、頷いた。

「はい」

テアは素直にディルクの手を借りて立ち上がる。

そのことだけに、ディルクは大きな安堵を覚えた。

テアは立ち上がると店の片隅に置かせてもらってあったコートを羽

織り、手袋とマフラーを身に付ける。

ディルクも外に出る支度をして、店内を整えている店の主に、テアと共に挨拶をした。

「ごちそうさまでした。ありがとうございます」

「何日もお世話になってしまって、すみません。楽しい一時を過ごさせていただいたこと、感謝します」

丁寧に礼をされ、店主は大したことはしていないと言うように、緩く頭を振ってみせる。

「……持っ ていけ」

そうして別れ際、変わらずぶっきらばうな店主が差し出したものは、一本の紺の雨傘だった。

雨傘と言えば、最近街でも少しずつ見られるようになってきたが、結構な高級品だ。

何故酒場にあるのか不思議だと思ってしまうがそれはともかく、簡単に頷いて借りていいのか困る代物で、テアとディルクは顔を見合わせた。

確かに、テアは帽子があるものの、ディルクはもともと日帰りのつもりでいたから無防備なもので、ここから学院までの距離を思えば厚意を受けたいとも思っただが。

「これ以上甘えてしまっつのは、」

「また演奏するついでに返しに来い。一緒に」

遮るように半ば無理矢理、ディルクは傘を押し付けられ、そう告げられる。

二人はその心遣いに、遠慮を捨てることにして、笑顔を浮かべた。

「……ありがとうございます」

「また、来ます」

長く短い夜の明け、二人は寡黙な店の主に見送られ、そうしてちらちらと雪が舞う外へと足を踏み出した。

石畳の道に、雪はうつすらと積もり始めている。

その中を、デイルクとテアの二人は静かに歩いていた。

一本の、雨傘の下で。

最初テアは帽子があるからと、デイルクに傘を全て譲ろうとしたのだが、それでは肩が濡れてしまうと諭されて、結局二人で傘の下並んでいる。

久しぶりに顔を合わせ、演奏をすることができて、さらにこの、今の二人にとっては、今しか叶えられないと思えるような距離。

いっそ、幸せな眠りの中で見ている夢なのだと言われた方が信じられるくらいの一瞬だと、二人共に思っていた。

街はまだ眠りの中にあって、その眠りを妨げないよう、気遣うように黙ったまま歩き続ける二人。

ただ静謐な雪の音と足音と、二人の熱だけが、世界の全てのように感じられた。

それだけでいい、と思えていた。

しかし、どれほど歩き続けただろう。

不意に、その静寂が破られる。

二人が向かう先から、一つの人影が忙しない様子で走ってくるのだ。こんな時間に一体、とデイルクは傘をもう片方の手に持ち直し、庇うようにテアの肩を抱いていた。

肩を抱くデイルクの手は大きく熱く、テアは鼓動を跳ねさせる。

ばたばたと向かってくるその人物は、そのまま二人の横を通り過ぎていくかと思われたが、足を止め驚いたように声を上げた。

「おやこれは驚いた！ デイルク殿下じゃありませんか！」

風情を壊す、男性にしては少し高めの声。

デイルクも相手の顔を認めて驚き、相手の名を口にしていった。

「デiboldト。何故……」

そう、雪で肩と帽子を濡らしている男は、ヴァイス・フェーダーの記者、ロルフ・デiboldトであった。

彼はデイルクの問いに、快活に笑う。

「そりゃもちろん、取材のためですよ！」

その答えに、テアは小さく身体を揺らし、顔を伏せた。そんなテアの反応を腕の中で感じて、ディルクはテアの肩を抱く手に力を込める。

「こんな時間にか？」

「いやー、もつと早く到着する予定だったんですが、ここに来る前の取材先で思ったより時間を食ってしまいました……。馬車も急がせたんですが、この天気ですし、走った方が間に合うかもしれないと思って降りてきたんですよ。知ってます？ この先にある酒場。」

この変では珍しく朝までの営業を許されていますからね、急げば何とか…….と思っただんですが」

「酒場？ お前は芸術専門ではなかったか？」

「ええ、そうですよ。だから、ピアニストの取材です。その酒場に突然現れたピアニストがかなり良い腕らしいって、昨日たまたま噂話を耳にしまして。プロが隠れてふらつと足を運んだのかもしれないし、こりゃ一見の価値はありそうな具合だと、もともと入っていた取材の後に予定を入れてみただですよ。今夜も来そうだって、話をしてくれた奴からはそう聞いたもので。でもまさか、こんなところでディルク…….殿と会うとは思いませんでしたが。もしか、噂のピアニストはあなたじゃないですよね？」

「ああ。だがその方がお前にとつてはいいだろう？ 学院近くでピ

アノを弾いたと言って、俺の名ではそう大した記事にもなるまい」

「いや、それはそれで話題性がありますよ。是非にとお願いしたいところですが…….、そう言えば、そちらの方は？」

そこですよやく、ロルフはテアの方へ視線を向けた。

好奇心の強い彼が、知らない顔のことを聞かないわけではない。

ディルクは内心の揺らぎを表に出すことなく、変わらぬ調子で答えた。

「知り合いの子なんだ。実を言うと先ほどまで、一緒にその酒場にいてな」

「ええっ、そうなんですか!？」

「ああ。お前の言うとおりのピアニストの演奏を最後まで聴いてきた。ピアノが好きらしくてな、帰りたくないと言って、俺も付き合っただ。俺たちが最後の客だったのだが、酒が入ってしまった上この時間だから足もとが覚束ないらしい。今送っているところだよ」
「へえ……。それはそれは。どうでした? やはり噂通りの演奏でしたか?」

「ああ。かなりのものだった。俺が酒場を出てくる時はまだ店にいたから、急げば何とか会えるのじゃないか」

「本当ですか! それなら是が非でも会ってみないと気が済みませぬね。それじゃディルク殿、またその内! あなたのパートナーにもよろしくお伝えください! それでは!」

また慌ただしく、ロルフはディルクたちが来た道を辿るように去って行った。

ほっとテアは肩の力を抜く。

「……大丈夫か?」

「はい……すみません」

ディルクに嘘を吐かせてしまったことが申し訳なく、テアは悄然とした。

といつても真に嘘らしい嘘は、テアに酒が入っている辺りくらいのものであったが。

「気にするな。お前がああいうのを苦手とするのは分かるから……」

「……記者の方、だったんですよね?」

「ああ。ヴァイス・フェーダーの記者だ。学院祭の時の記事を書いたのもあいつだった」

「そうですね……。でも、わざわざ街の小さな酒場にまで足を運んでくるなんて……」

予想もしていないことだった。

まだ胸がざわついて、嫌な動悸がしている。

素性を隠していて良かった、とテアは思い、事情を知らないはずな

のに、隠していたいことを理解してくれているディルクのことが有り難かった。

「あいつはフットワークが軽い……というか、興味を持ったことには躊躇いもなく飛びつくんだ。それだけお前の演奏が聴いた人間にとって魅力的で、伝え聞いただけでも足を運んでしまいうくらいだったのだろう」

その言葉にテアは喜んでいいのかどうか迷ったが、ディルクが心を軽くしてくれようとしているのは分かったから、微笑した。

「そんな、大層なものでは……。ですが、きつと行ってがっかり、なさるのでしょね」

「その前に、マスターに店にすら入れてもらえないかもしれないがな」

冗談っぽく、ディルクは告げる。

テアもそれが想像できて、少しだけ声に出して笑った。

少なくともあの寡黙な店主がテアのことを記者相手に簡単に話してしまうとは考えにくいから、件のピアニストがテアであると知られることはないだろう。

そのことに安堵して、やがて二人はまた、暗い朝を歩き出した。

その内にロルフが乗って来たらしい馬車と遭遇することができたので、馬車を使って二人は学院へ戻ることにする。

馬車の中、ディルクの隣で揺られながら、きつといつかまた、あの記者とは顔を合わせるだろう……、そんな確信がふとテアの胸をかすめた。

けれど、今は、ただ。

隣にいてくれる人の温もりだけを感じていよう。

余計なことなど考えずに。

テアは思っ、束の間、瞳を閉じた。

その傍らのディルクもまた、同様に。

雪の朝、太陽の昇る姿は見られない。

だが、厚い雲がかかっている空は白み始め、世界は色を取り戻し、

新しい日がまた、
始まるうとしていた。

まだ、こんな時間……。

まどろみから覚めたテアは、一人、寮の自室のベッドの上で身を起こすと時刻を確かめた。

学院に戻ってから、まだ数時間。

窓の外、空はまだ厚い雲に覆われていたが、雪は止んだようだ。

ぼんやりとしたまま、習慣に従って、枕元の眼鏡をかける。

眼鏡越しに見える外の景色はうつすらと白く変貌して美しく、静寂を纏っているような気がした。

あまりにも静かすぎて、こうしていると、ここ数日学院の外にいたことが、ここにはない音を、熱を感じていたことが、まるで夢の中の出来事だったかのようにならぬ感じがする。

首の痣も消えてしまった今、エツダ・フォン・オイレンベルクとの邂逅もまた遠く感じられ、このまま、このただ静かな日々が続いていくのではないか……、そんな錯覚がよぎった。

だが、全てが現実なのだ。

自身に秘せなくなってしまうた想いも苦悩も、エツダとの賭けも、酒場での一時も、雪の朝に触れた大切な人の温度も。

そして私は、選んだ……。

身体はまだ休息を求めていると分かっていたが、テアはベッドから降りた。

やりたいことが、やらなければならないと思うことがあったから。機敏とは言い難い動作でテアは制服に着替えると、部屋の真ん中に置かれたテーブルに用意された軽食に目を向け、少し笑う。

数時間前、ディルクと共に学院へ戻り、彼と別れて寮の部屋に戻ったテアは、その物音に起き出したローゼに説教をくらうことになっ

た。

書き置きはしていったとはいえ、それだけで唐突に何日も部屋を空けてしまい、やはりローゼには相当な心配をかけてしまったようだ。自分を宥めながらも心配でじっとしていられず、テアを探しに出ようとすらしてくれたらしい。ライナルトが待とうとローゼを諫め、ディルクにも告げず、大事にならないよう計らってくれたので、大げさなことにはならず済んだようだけれど。

近い内にローゼにもライナルトにも詫びと礼を何かしよう、とテアは思っていた。

そして、ディルクにも……。

テアはローゼに散々説教されたが、ローゼはそれでも何やかやと気を遣って、ずっと夜中起きていたというテアを半ば無理矢理ベッドに押し込んだ後、テアが起きた後に食べられるよう軽食まで用意していつてくれたようだ。

ローゼ自身も今は試験の最中で、そんな日なのに、とテアは心から申し訳なく思う。

学院の外に出た判断を誤りだとは思わない。けれど、帰って来たテアを迎えたローゼの表情は、今にも泣きそうなもので……。

今までも、これからも、ローゼにはどれだけ心配をかけてしまうだろう。

それでも。

いや、だからこそ。

そう、テアは決意を強くする。

有り難く、テアはローゼが用意してくれた食事に手をつけ、それから部屋を出た。

テアの目的は練習室だったが、その前にと掲示板を確認する。

「……、」

その掲示板の一角を見、テアは小さく声を漏らした。

そこに、エンジュからの呼び出しが貼り出してあったからだ。

戻って来られたんですね……。

彼はテアの学科試験の日程も把握している。呼び出しは学科試験に問題のない今日の午後の早い時間になっていた。

久しぶりのエンジュのレッスン。エンジュに、演奏を聴いてもらうのだ。そのことに、否が応でも緊張が高まった。

それにしても、本当に、間に合って良かった……。

テアは自身の首元に手をやりながら、思う。

数日前、エツダとの邂逅によって残ることになった首の痣。

それは学院の外でデルクと再会した時にはほとんど消えかけていて、昨晩も安堵したものだった。

痕がいつまでも消えなければこの朝も学院にはいなかったかもしれず、すぐに消えるもので良かったとつくづく思う。

まだレッスンまで時間には余裕があったが、テアは胸元でぎゅっと拳を握り、踵を返してそもそも目的地だった練習室へ向かった。

最初からピアノのために部屋を出てきたのだが、エンジュのレッスンが控えているならば尚更、ゆっくりなどしていられない。

テアはまっすぐ、師が用意してくれている練習室を目指した。

学院の外で見つけた自分の音を、もっと確かなものにしておきたい。

彼女はまた、ピアノのもとへ。

試験週間が始まった、その午後。

「……………」

エンジュ・サイガは練習室の中、ひとりピアノに向かう弟子の姿を認めると、小さくドアを開け、固まった。

もっと早く帰るつもりだったのだが、天候その他もろもろの事情があつて、戻ってくるのが予想以上にオーバーしてしまったのだ。さすがのテアも怒っているだろう、何を言われても謝るしかないなと、

普段は飄々としたエンジユも時期が時期だけに少々気が咎めていたのだが。

テアの音が、エンジユのそんな思いをかき消した。彼の脳裏に浮かんだのは、懐かしい面影。

ずっと側にいられるわけではなかった、それでも共に生きていくのだと思っていた、けれど失ってしまった彼の人。

愛していた。

愛して、いる。

そう想い、そしてそう告げてくれた人。

それなのに……。

行くな、逝くな、俺を置いて、どこにもいくんじゃない！

過去の自己の叫びが胸によみがえった。

辛い、切ない、寂しい。

それなのにどうしてこんなに、愛しいという想いは鮮明で、温かくて優しい気持ちに包まれているような気がするのだろうか？

「

茫然とするエンジユの口から、小さく、一つの名前が零れた。

「……先生？」

はっとエンジユは顔を上げた。

見れば、テアが目を見張って立ち上がっている。

一体今自分はどんな顔をしているのだろうか。

エンジユは不安を覚えたが、何とかいつも通りに笑ってみせた。

「よう、テア、久しぶり！」

「お久しぶり……、です」

どう返すか若干困った風で、それでもテアは律儀に頭を下げる。

エンジユは練習室のドアを閉め、そんなテアに近付いた。

「いやー、戻りが遅くなっちまって、悪かったな。俺もこんなにかかるとは思わなくてさ」

「いえ、それは……いいんです。それより、先生、無理をなさっているのではないですか」

「へ？」

気遣わしげに問われ、妙な声を上げてしまった。

「何となくですが、顔色が優れないような……」

「あー、や、大丈夫大丈夫。元気元気。……つつつか、お前の方が顔色悪いんじゃないか？」

気付いてエンジユは、弟子の顔を見つめた。

テアは心当たりがあるのか苦笑して、それに答える。

「少し睡眠不足で……。大したことはありません」

確かに顔色は悪かったが、瞳には強い色があつて、その言葉は嘘ではなさそうだと分かった。

「お前のことだから、夜遅くまで勉強してたりしたんだろ」

エンジユの言葉に、テアは誤魔化すように笑った。

若干目が泳いでいるが、エンジユがいない間に何かあつたのだろうか。

いや。

何もなく、そう簡単にあんな音になるわけがない……。

「あんま無理すんなよ。お前には俺の弟子として、ばあさんになつて老衰するまでピアノを弾き続けてもらわなきゃいけないんだからな」

「そ、そうなんですか……？」

「そうなの。だから、出てきてもらつて悪いけど、今日はもう帰つてゆつくりしとけ」

「え……。で、ですが、実技試験の課題曲が……」

「ああ、それなら大丈夫だ。今聴いて分かった」

「え？」

「ピアノ専攻科一年の首席はお前だ」

エンジユはそう、断言した。

真面目な響きに気圧されたように、テアは絶句する。

「一応明日も、試験が終わったならここに来い。いくつか指摘したいことがある。だがとりあえず、今日は身体を休める。勉強したいかもしれないが、それもほどほどにな」

エンジユの言葉は優しいものだったが、有無を言わさぬものでもあった。

「お疲れさんだったな、テア」

「……はい。それでは今日は失礼します。先生も、無理はなさらずに」

「俺はだーいじょうぶだって」

最後ににっと笑ったエンジユはいつも通りに見え、テアは幾分ほっとして練習室を出た。

練習室に入ってきた彼が泣きそうに見えたのはきつと気のせいだろう……、と、早々に練習室から追い出されてしまったことを幾分気にしながらも、テアは去っていく。

彼女の気配が遠ざかって、エンジユはピアノの前に座った。

「……ちよつとあいつを見くびってたかな、俺は……」

小さく呟いて、鍵盤に、指を落とす。

愛しい人の面影に想いを馳せて、彼は奏でた。

エンジユも、テアと同じなのだ。

ピアノが、大切な人と今の自分を繋ぐ絆。

だから彼も、いつも、いつまでも、奏で続ける。

「なあ、」

呼びかけに答える声はなくても、エンジユの耳には届いた。窘めるように、笑いを含んだ優しい声が彼の名を呼ぶのを。

明日はちゃんと今の弟子をフォローしてやろうと思いつながら、彼は今だけと、この一時を自分に許した。

その翌日から実技試験当日まで、テアは連日エンジュの指導を受け続けた。

学科試験を受けつつの練習だったが、今までの練習に手応えがなかった分、試験週間の間の練習の方がずっと充実していたかもしれない。

もちろん実技試験にはかり気を取られていたわけではなく、テアは学科試験にも全力を尽くした。

もともと生真面目な性格だから手を抜かない、というのもあるが、後見人である「あしながおじさん」にがっかりされたくない、というのもテアの熱心さに拍車をかける。

それ以上に、今回の試験には学院に残るか否かがかかっていた。

最初は、ここから去った方がいいのだと、そう思った。

だが、心は残ることを望み、テアは自分にそれを許そうとしている。だから、明らかな形で、彼女は勝たなければならなかった。

エツダ・フォン・オイレンベルクに。

そして。

自分自身に。

そうして、試験漬けの毎日があつと言う間に過ぎ、試験週間最終日の実技試験もとうとう終わってしまっ

「さ、テア、行きましよう！」

張り切るローゼに手を引かれるようにして、その日、テアは寮を出、講義棟へ向かった。

試験週間が終了を告げた次の日、月も変わって二月となり、学院は一日の休校だった。

生徒たちは試験から解放され、久々に休日をゆっくりと楽しんだ。

テアもさすがに精神的な緊張の糸が切れて、その休日は一日ゆっく

りとしていた。

エッダとの勝負のことがあったから、結果のことが気になり胸がざわつくのは抑えきれなかったが、試験が終わってしまった以上もうどうしようもないことだと、なるべく考えないように、読書をした、ローゼとお茶をしたり、穏やかな時を過ごした。

その翌日から、後期の授業が開始される。

前期試験の結果発表は試験終了から一週間後であるが、試験終了後こうしてすぐに後期の授業が開始されるので、教師陣のスケジュールは慌ただしい。

試験週間終了直後の休校も、教員にとっては平穩とは程遠いもので、結果発表に備えて教師たちは試験の採点を終え、成績開示の準備をしなければならず、教員棟は殺気溢れるものとなっていた。

だが、それにも終わりを告げる、前期が終わって、そして後期が始まってから一週間経ったその日。

教師たちが死屍累々となって終えた試験の採点結果、その中の一部、成績優秀者の発表が講義棟の掲示板に大きく貼り出されていた。

成績優秀者は、学年別に、学科試験と実技試験とに分けて掲載される。

学科試験は共通科目の総合点が高かった者から上位十名と点数を。

実技試験は専攻科毎に首席の名のみ挙げられていた。

成績優秀者の発表とは別に、各々の生徒の、全ての学科試験のそれぞれの点数と実技試験の順位と評価は、担当の教員から渡されることになっていく。

テアはまずその結果を知らなければと、エンジュのレッスンに向かうのが先で、成績優秀者の発表を見るのは後回しにしてしまおうと考えていたのだが。

朝からローゼに急かされてしまい、テアは結局早々と掲示板の前に来ることになった。

それはいいのだが、掲示板の前に大勢の生徒がひしめいている光景

に、テアは若干引き気味に小さく呻き声を漏らす。

相変わらず外の寒さは厳しいものであるのに、溢れる人の熱気でその寒さもどこかへ行ってしまうようだ。

朝一番は生徒が大勢見に来るものだと言っていたが、ここまでとは思わなかった。

これでは肝心の掲示板が見られない。

「ローゼ、やはり後にした方がゆっくり見られると思うのですが…」

とても前まで分け入っていく気にはなれずにテアは提案したが、ローゼがそれに否の答えを返すより早く、テアとローゼの姿に気付いた生徒たちが、少しずつ道をあけてくれた。

え……？

わざわざ譲ってくれるなんて、ローゼがいるからだろうか。

リサイタルや学院祭コンサートの後にも感じた視線によく似ているものを感じて、テアは腑に落ちないような気がして首を傾げ、そして。

「ああ、やっぱり！」

ローゼの歓声に、顔を上げた。

「これを早く見たかったんですよ！ テア、おめでとございます！」

「え……」

ローゼが笑顔で指差す先を見つめ、テアは大きく目を見開いた。

「一年の学科試験一位、テア・ベールレンス。実技試験ピアノ専攻科一年主席、テア・ベールレンス！ W首席なんてこんな快挙、滅多にないことですよ！」

はしゃぐようなローゼの声を聞き、掲示板を見上げて自身の名を認めながら、それでもテアは信じられない気持ちで立ち尽くす。

本当に……？

『ピアノ専攻科一年の主席はお前だ』

脳裏にエンジユの言葉がよぎる。その言葉を、正直なところテアは

信じられなかった。

エンジユの言葉を疑ったというよりは、自分自身に自信が持てなかったのだ。

エツダに勝つことを目指していた。「あしながおじさん」に恥じないよう努力だけは怠るまいとした。

だがそれがまさか、こういう結果になるとは思わなかったのだ。

天下のシューレ音楽学院である。優秀な人間が集まっていることで、その頂点に立つなど、どうして想像できただろう。

結果を待つばかりだったこの一週間、落ち着かずは何度もそのことを考えていた。

勝った時のことも、負けた時のことも。

でも、まさか、首席なんて……。

「……何かの間違いとかじゃないですよね」

「もう、こんな時にまでそんなに慎重に考えずに素直に喜びましょうよ。間違いなんかじゃありません。正真正銘、あなたが新入生の首席なんです、テア」

驚きを引きずりながら、テアは笑顔のローゼを見つめ返す。

嘘ではないのだ、と実感が湧いてきて、胸が不思議に熱くなった。誇らしさが溢れてくる。

嬉しかった。

何よりも、ここに残れることを、自分に許せることが。

私は、ここにいたいと、こんなにも望んでいたのか……。

今更それを実感するほど、胸に溢れる喜びは大きいものだった。

「あなたの努力の結果なんですよ」

優しいローゼの笑顔。

テアはそれに、はにかむような笑顔で返した。

う、そ……。

成績優秀者が貼り出されている掲示板を見上げ、エツダ・フォン・オイレンベルクは立ち尽くしていた。

ピアノ専攻科一年実技試験首席、テア・ベーレンス。

学科試験首席、テア・ベーレンス。

エツダの名は、その学科試験首席の隣に一つだけ、刻まれていた。

私が、二位……。負けた、なんて、そんな……。

信じられなかった。信じたくなかった。

けれどいくら見つめていても、書かれた文字が変わるわけもなく……。

足元が揺らぐような錯覚。

悔しいという感情より、自身のこれまでを全て否定されたような絶望がエツダを襲っていた。

ディルクには受け入れてもらえず。

そして、ディルクの側にふさわしくないはずのテアに敵わなかった。点差は僅差であったけれども、テアよりもずっと長く、常に努力を続けてきた自分が。

今までの私は、一体、

そう思ってしまったって、喉元に閉塞感を覚える。

これではまるで、今までの努力はテア・ベーレンスを引き立たせるためにあったかのようなではないか。

人望厚く、優秀だと言われてきたエツダを超える逸材。

今回のことで、周りはテアをそう口にするようになるだろう。

そうなれば、テアには確実に手に入ってしまう。ディルクの側に居続けられる、その理由が。

テアからの勝負を受けたあの時。

負けるはずなどないと思っていた。

努力を続けて。出場したコンクールでも何度も入賞した。試験でもレポートでも、誰にも負けられないような点数を出し続けて、教師からの覚えも良かった。

それなのに……。

テアは理由を手に入れ、エツダは理由を失ってしまった。

私、は……。

目元が熱くなる。

けれど。

「お嬢様、そろそろレッスンのお時間が……」

後ろに控える侍女の、どこか気遣うような声。

エツダはぐつと奥歯を噛みしめた。

心が泣き叫んでいても、それを表に出すわけにはいかないのだ。

自分はオイレンベルクの娘なのだから。

「……そうですわね」

平静を装って、エツダは踵を返した。

侍女のほつとしたような表情に、取り繕った仮面が失敗していないことが分かる。

怪我をしたわけでもないのに、胸が痛くてたまらない。

けれどその痛みを堪えて、エツダは常と同じように足を踏み出した。

「よくやったなー弟子ー！」

エンジュのレッスンに向かったテアは、練習室に入るなり笑顔のエンジュに迎えられ、肩をばしばしと叩かれるようにして喜びを示された。

い、痛い……。

喜んでもらえるのはいいのだが、とテアは若干口元を引きつらせる。「いやー、やるだろうとは思ってたけど本当にやったなー。実技は確信あったけど、学科試験も落とさなかったか。すごい点数並んでるぜーほれほれ」

ぐいぐいと試験結果が書かれた書類を押し付けられ、テアは幾分閉口気味にそれを受け取った。

実技試験の批評と、学科試験の点数にざっと目を通す。

掲示板に示されていた点数にはやはり間違いはないようで、テアは改めてほつと頬を緩めた。

「優秀な弟子たちを持って師匠は嬉しいぜ。ディルクも首席だったんだろ？」

「はい」

成績優秀者の中に入っていたその名前を見落とすはずもない。

飛び級制度を使ったディルクは四年の学科試験と実技試験（ヴァイオリン専攻科、指揮専攻科双方）のトリプル首席、そしてライナルトは三年の学科試験首席。

ローゼは、と言えば残念ながら掲示板にその名が挙げられることはなかったが、『いいんですよ、私の目的はこれじゃありませんから』と、からりと笑っていた。

一年生の学科試験の二位にはエツダの名があり、そして何と、八番目にはフリッツの名があつて、彼が宮廷楽団の一員となるために努力していることがその結果となつて表れていた。

「実技試験で首席になれた奴には特権が与えられるからなー。今度から練習室も他人の名前使ったりせずに思う存分使える。良かったな。何よりここの実技試験に不正なんてありえねーから、これで今までぐちぐち言つてた奴らも黙るだろ」

にっ、とエンジユは笑う。

同じことをローゼも口にしていたと、テアは曖昧に微笑んだ。

学院の実技試験は、不正を防止するため、まず試験官数名が当日に決定される。教員の中から、その朝にくじ引きで選出するのだ。

生徒の方も、同様に朝にくじで試験の順番が決まる。

そして、決められた部屋で試験が行われるのだが、この時試験官と生徒が互いに誰か分からないよう、部屋の真ん中にカーテンが引かれるのだ。

生徒は試験中常に番号で呼ばれ、名では呼ばれない。生徒も試験官も声を出してはならず、試験中部屋で口を開くのは案内役の教員だけだ。

何故そんな体制で実技試験を行うことになったのかと言うと、以前はこの実技試験に不正が横行していたからである。

例えば、試験官の名が分かっていたならば、生徒が試験官に賄賂を渡して優秀な成績を得る、ということがあった。逆に、生徒に金品等を強要して、その見返りに良い成績をとらせる、という教師もいたようである。

そのため、始終、試験官が誰で受験者が誰なのか分からないようにすることで、そうした不正を防止することになった、というわけだ。これまで入学から出してきた結果で、テアは少しずつ周りからの評価を高めていたが、まだ根強い不信感や侮りを持つ者もいた。

しかしそうした者たちも、積み重なってきた結果と、こうした試験の結果を照らし合わせてみれば、もう何も言えなくなるだろう。

何よりもそれによって、あの方についても良いという理由ができた、ということが私にとっては……。

「と、まあ試験は無事に終わったし、万々歳として」

エンジユが声の調子を変えた。テアははっと顔を上げる。

「これから、の話をするか」

「は、はい」

そうだ、少なくとももうしばらくは自信を持って先の話をしていいのだ。

テアは真面目な顔になってエンジユを見上げた。

この一週間、後期が始まって、試験結果が出て落ち着くまではとエンジユは新しいことをするより、実技試験の振り返り等を主にし

ていたから、ここからが本当の再スタートとなる。

「春のコンクールの話なんだが、院内コンクールに参加するか」

「院内コンクール……ですか」

「ああ。本当はもつとでかいのに出て、ド派手にデビューしちまう方が俺としては楽しかったんだが……」

「は、はあ……」

「院内コンクールで腕試しして、夏に国際ピアノコンクールに出るつてのを方針として考えてる。どうだ？」

国際コンクール、という単語に怯んでしまいそうになるが、まだそれは先のことだ。

少し前テアがコンクール出場に躊躇を見せたから、学院内で、というこでエンジユも妥協してくれたのだろう。

ひとまずはそのことを考えよう、とテアは口を開く。

「院内コンクールというと、四月に行われる……」

「そう。ピアノと管楽器と弦楽器、それに声楽四つの部門に分かれるけど、当然お前はピアノ部門での参加だな。一応外部からの参加も受け付けてるけど、基本はうちの生徒が大半で、二次予選までは実技試験と同じ形式だから、そう固く考える必要もない。ま、外部のやつらと他学年のやつと、ライバルは増えるけどな。お前なら普通に本選まで行くだろ。で、本選のみこのコンサートホールで聴衆もいる中での演奏になる。この場合ちょっと厳しいのが各部門につき入賞者の枠が上位三名のみで、空枠はあってもよほどの演奏をしない限り特別賞なんかもないつてとこだな。ま、それはそう考慮しなくてもいいかもしれんが……。で、明らかに他と違うのは何かっていうとだ」

「はい」

「コンクール後の入賞者演奏会で、希望すりゃパートナーを交えての演奏もできるつてとこだ。その場合、入賞者はソロで一回、パートナーとの演奏で二回、聴衆の前で演奏できる。これは結構でかいアピールになる。入賞者にとつても、そのパートナーにとつてもな」

「そう……ですね」

「だからお前、今回の院内コンクールに関して、ディルクと話ししとけな」

「え？」

「え、じゃねーよ。お前ら、どうせ後期も組むんだろ？ お前は入賞するから、そうしたら二人で演奏すればいい。演奏会での曲目とか決めて、今から二人で練習しとけよ。俺も見てやるしさ。ディルクも弦の方の部門で参加するかもしれんから余計、練習時間を捻出せにやいかんだろ。早め早めに動いとくのが肝心だぜ」

エンジユの中で、テアとディルクのパートナーと、テアの入賞は確定したものであるらしい。

テアが返事もできずにいると、エンジユは一人楽しそうに笑って、テアに楽譜を差し出した。

「ほれ、これが一次予選の課題曲だ。参加受付はもう俺が終わらせといてやったから、早速練習入るぜ。ま、本来ならお前に腕試しなんて必要ないと思うんだが、それはそれ、とにかくやるからには本気出さないとな」

せ、先生……！

テアは何も言えないでいる内に、そうして四月の学院内コンクールに向けて練習を開始することになったのだった。

先生、根回しが早すぎです……。

エンジユのレッスンの終了後。

レッスン自体は充実していたものの、エンジユのペースに翻弄され過ぎたテアは、疲労を覚えながら練習棟の階段を下っていた。

コンクール参加については、「あしながおじさん」にも相談しておく必要があるだろうと考えながら、ずれた眼鏡に手をやる。

その時、目に入ってきた人影に、テアはふと足を止めていた。向こうから階段を上がってくる人物が、エツダ・フォン・オイレンベルクだったからだ。

侍女を従えているから、先日のような真似に走ることはないだろうが、とテアはひそかに身を固くする。

その予想通り、エツダもテアに気付いたが、すぐに目を伏せて、同じ調子で階段を上ってきた。

そのまますれ違っていく、と思われたが、テアとすれ違うその瞬間、テアにだけ聞こえる声で、エツダはこう、囁いた。

「 約束は守りますわ」

冷えた声音で、彼女はそれだけを言い、去っていく。

「……」

テアもそんなエツダを顧みることなく、ゆっくりと階段を下りていった。

そうして練習棟を出たテアは、その後特に授業も入っていないなかったので、何となく講義棟の掲示板へ足を向ける。

当初はエンジユのレッスンは終わった後、ようやくこうして掲示板を前にする予定だったから、予定通りの行動とも言える。

朝とは違い、他に人のいないがらんとした廊下で、テアは掲示板を見上げた。

そこには当然、消えることなくテアの名がある。そして、ディルクの名も。

それはテアに、ここに居続けていいと許してくれるものだった。

そして、テアに勇気をくれるものだった。

テアはぎゅっと拳を握る。

ディルクに、会いに行こう。それから……。

……その時だ。

「 テア」

後ろからの呼びかけに、テアはかすかに肩を揺らした。

とくり、と鼓動が速くなる。

その声を、テアが間違っていることはない。

振り返るとそこには、ちょうどその面影を心に浮かべたばかりだった、ディルクがいた。

「ディルク……」

「良かった。ちょうどお前にと頼まれた物を預かったところだったんだ」

微笑みながら、ディルクは静かな足取りでテアに近づいた。

「頼まれた物、ですか？」

「ああ。ちょうど、これに関することだな」

ディルクは掲示板を指差す。

不思議そうに眼を瞬かせるテアに、ディルクは祝いの言葉を贈った。

「一年首席、おめでとう」

「ディルクこそ……。専攻を二つ掛け持ちで双方で首席なんて、さすがです」

「目標が目標だからな。結果が自ずとついてきてくれた、というか……。だから、お前の後見人のおかげ、と言えるかな」

純粋にディルクの努力の結果だろうと思ったけれど、それは言葉にはせず、テアはただ笑った。

「手強いライバルもいることだし……」

「ライバル、ですか？」

「ああ」

ディルクはふつと笑って、テアに銀に光るものを差し出した。

「ライバル殿へ。確かに預けたぞ」

「え……」

ライバル、という言葉が、ディルクと対等の関係を表しているようで、嬉しかった。

けれど、その形容されるほど、自身がディルクと肩を並べられる存在とも思えなくて、テアは戸惑う。

何よりも、ディルクから受け取った、この手の平の中で光る鍵は、
一体？

「練習室の鍵だよ」

「練習室の……」

「首席特権だ。実技試験の首席は決められた練習室が常に使えるようになる。先ほどたまたま学院長に会って、お前に渡すように頼まれた。サイガ先生に預けるのを忘れていたらしくてな。俺の方が早く確実にテアに渡せるだろうからと」

「ああ……。すみません。ありがとうございます」

「今日から使えるから、これで気兼ねなく練習できるな。とはいえ、この結果を見れば、もうお前にどうこうしようという連中もいないだろうが……」

「そう、だと良いのですが」

エツダのことを思い出す。

約束を守る、と彼女は言ったが、それがどれだけ信用できるかわからない。

だがおそらく、目の前にいるディルクのために、エツダはそれを守るだろう。

気に掛かるのは、先ほどすれ違った時に見た、暗闇の宿る瞳。

テアとの勝負に負けたことが原因、なのだろうか。

けれど一度の結果だけで、あんな風になるだろうか。

彼女は、もしかしたら……。

テアはディルクを見上げる。

私も、彼女と同じようになるのかも、しれない。

その可能性を考えながら、手の平に落とされた鍵に残る温もりに、背中を押されるように、テアは口を開いていた。

「ディルク、あの……」

「なんだ？」

「えっと……、少しお話ししたいことがあるのですが……、もし今時間が大丈夫でしたら……」

「構わないが、どこか落ち着いた場所の方がいいか？」

ここではいつ人が来るかわからない。

テアは頷いた。

「それならちよつどいい。お前の練習室に案内しよう。実を言うと首席に与えられた練習室は、教員棟にあるんだ。多分行ったことがないだろうし、少し分かりにくい場所にあるから……」

ディルクは言つて、テアを促した。

そのまま二人は教員棟へ向かい、目的の部屋に辿りつく。

「教員用の練習室は、臨時の先生とのレッスンの時に使わせてもらうこともあつたのですが……、こんな奥にも練習室が用意されていたのですね」

「ああ。教員棟の上の階に先生たちの練習室があることは皆知つているが……、一二階のこの奥の部屋は一般生徒も、教師もなかなか近づかない。知らない生徒も多いんだ。首席特権と言つても、使わない生徒もいるしな」

教員棟というのが、生徒にとってはそう頻繁には立ち入りたくない場所だから、それもおかしくはない。

テアに貸し与えられた部屋は二階の奥の一室だったが、広くはないものの、部屋に揃えられた物品は贅沢なものだった。

それにふとテアは疑問を感じる。

学院の奥まったところに、隠されているようにも感じられる部屋。

調度品は高級なものが置かれ、首席特権とは言つても、普段の練習室と異なりすぎる印象があつた。

「ここは……、もともとこつした目的で作られた部屋なのですか？」
「敏いな」

テアの質問にディルクはさすがと言つように笑つて、答えた。

「実を言つと創立当初は、皇族や四大貴族等、他の生徒と同じようにして学院に通うわけにはいかなかった人間のために作られた部屋だつたということだ。身分の隔たりが今よりも大きかつた時代だからな。だが今では使われなくなつて……、勿体ないから開放しようということになった。だがまあ、こつという場所にある部屋だし、こつという部屋だから、成績が優秀な者に優先して使わせてはどうかと

いうことで、今の首席特権ができた、というわけだ」

「なるほど……」

ディルクが語った内容にテアはどきりとしたが、ディルクは特に気にした風もなく笑っている。

テアは幾分ほつとして、肝心のピアノの前に立ち、蓋を開けて何音か試しに弾いてみた。

当然、調律はきちんとされているようだ。

澄んだ音に、口元が綻ぶ。

少し触れただけでこの時は満足して、テアは蓋を元通りに戻した。

「もういいのか？」

「はい、今日は……」

顔を上げて、ディルクと視線が交わる。

先ほどから感じていた緊張が一気に高まった。

「ディルク」

怖い、と感じた。

他愛ない話を続けたのは、多分、逃げたいという気持ちがあったからだ。

けれど、決めていたことだから。

勝負に勝ったら……、自分自身との賭けに勝ったなら。

伝えよう、とそう、決めていた。

望みが叶わなくても、それでも叶えるためには、伝えなければならぬから。

テアが伝えよう、としていて、それに緊張していることを、目の前にいるディルクも感じ取っていたが、急かさずにディルクはテアの言葉を待った。

「その……」

目を伏せ、一度深く息を吸って、吐く。

もう一度顔を上げたテアは、自身が逃げてしまう前に、告げた。

「もう一度、私と、パートナーを組んでもらえないでしょうか」

？」

その台詞に、デイルクは目を見開く。

「私……、とても楽しかったんです。前期、デイルクとパートナーになれて、同じ時間を過ごすことができて……。私はここに入学生ばかりで、何も知らなくて、あなたの足を引っ張って、迷惑をかけるばかりで……。それなのに、こんな申し出、厚かましいとは思いますが、けれど、でも……。もしできるなら、もっとあなたと演奏したい、そう思ってた……。」「緊張に指先が震えた。

途切れ途切れに伝えた思いも、それ以上はもう言葉にできなくて、テアは俯く。

「テア」

優しい、声。

けれどその呼び声はどこか掠れていて、テアははっと顔を上げようとしたが、その前にデイルクが動く方がはやかかった。

「……！」

テアの頭を引き寄せるように、デイルクはそつと、彼女を抱擁していた。

それはあまり身体が密着するものではなかったけれど、テアの熱と動悸は一気に跳ね上がる。

「ありがとう……」

今、おそらく自分は情けない顔をしている。デイルクはそう自覚して、この体勢ならば顔を見られる心配はないと、先を続けた。

「本当はずっと、俺もそれをお前に言いたかったんだ……」

「デイルク」

耳元で囁く声が、テアに染み込んでいく。

静かで、けれど心の込められたその言葉に、テアは集中していた。

「できれば前期が終わる時……。新しくパートナーを選ぶ時期が来る前に、きちんとしておかなければと思って……。だが、言え

なかった。お前は俺に迷惑をかけたと気にしているようだが、それは逆だ。俺のせいで、お前にいらぬ苦勞をかけることになった。だから、これ以上お前に辛い思いをさせることになるのなら　と、そう、思つて……」

「デイルク、それは違います！　私は……」

「ああ」

テアの告げたいことは分かっている、と言つように、デイルクはテアの頭に回した手に力を込めた。

「だが、俺もお前と同じなんだ。お前という時間がとても楽しかった。共に演奏する度に、止めたくないと思つた。多分……、来年、最後の年、俺は卒業後の準備で頻繁に学院の外に出ることになる。誰ともパートナーを組むことはできない。だから今期が最後のパートナーになる。それをお前と組みたい。そう思つていた。……なかなか言い出せなくて、お前に先を越されてしまったな」
言つて、デイルクはそつと、テアを解放した。

「お前の言葉が、何より、嬉しかったよ。……本当に、俺でいいのか？」

「それは、私の方こそ……。本当、に……？」

これは現実だろうかとすら疑つて、テアはデイルクを見上げる。揺らぐテアの眼差しを、デイルクは真摯に受け止めた。

その瞳にも、密やかに熱が宿つていて。

「ああ。お前以外には考えられない」

「……っ」

熱を帯びたテアの頬が、ますます紅潮する。

「またたくさんのことに挑戦することになるだろうが　二人で力を合わせて、頑張ろう。きつとお前となら、何度でも最高の演奏ができる」

「ありがとうございます」

テアは差し出された手を握り返して、デイルクの手の温もりと、その力強さに、これは本当のことなのだ、と強く、実感した。

「これからまた、よろしくお願いします」

「ああ」

そっと微笑んでみせたテアにディルクは頷いて、他には見せないような笑顔を、その端正な顔立ちに刻んだのだった。

match 20 (後書き)

これにてmatchは完結です。

こんな風ですがまだまだくつついていない二人です。

……傍から見たらもう立派な恋人同士でしょうが……。

次回からは新章となりますが、番外編的な趣の話になる予定。
そんな新章も、またよろしく願います！。

interlude

親愛なる、テアへ

前略

そちらでもまたひどい雪になったと聞きましたが、風邪など引いてはおりませんか。

こちらは皆と音を合わせるより何より、降雪のために次の公演場所へ向かうのに苦労する日々です。

また後期では彼とパートナーを組むことにしたそうですね。

彼はとてもしっかりした青年だし、君と合うのだろう。

学院祭でもそう感じたし、年末のコンサートで会った時もそう感じました。

だが……いや、だからその内彼とは少し話をしたいと思っています。ああ、君が心配する類の話ではないから、ここは気にしなくて大丈夫。

それより、君達のパートナー関係について、”調停人”が関わっているという噂があると聞きました。

それで君が不利益を被っていないか、私はそれが心配です。

何かあれば、私でももちろんいいし、誰かに相談して、一人で無理しないように。

最後に。

前期試験首席、おめでとう。よく頑張ったね。

君の一生懸命なところが目に浮かぶようで、とても誇らしかったです。

後期もその調子で頑張ってください。

でも一番大事なのは、君が充実した楽しい日々を送ってくれ
ることだと思っていますので、あまり根を詰め過ぎないように。
何であれ、私はずっと君のことを応援しています。

草々

追伸

コンクールの件ですが、了解しました。
気にせず、参加の方向で練習を頑張ってください。
近々都合をつけて、会いにいきます。

君だけの「あしながおじさん」より

シューレ音楽学院では後期が開始し、既に二月も半ばである。

テアはその日の授業を終え、練習室から寮の部屋へ戻る途中で「あしながおじさん」からの手紙を受け取ったので、机に向かって早速それを広げていた。

それにしても、耳が早い……。

「あしながおじさん」の手紙には、数日前にテアが聞いたばかりの噂のことも書かれていて、そう思う。

テアがこの前に手紙を出したのは、後期が始まって間もなく。

試験結果が出てすぐ、デイルクにパートナーの申し込みをして、諾の返事をもらってからのこと。

その時には噂のことまでは書かなかった、というか知りようもなく書けなかったというのに、学院長経由で伝わったのだろうか。

返事もかなり早い到着なので、テアの手紙を受け取ってすぐ、話を聞いてその場で返事を書いてくれたのかもしれない。

思いながら、テアは小さく溜め息を吐く。

テアとデイルクがパートナー登録をした直後に流れ出したらしい噂のことを思い出して。

テアに憂鬱な溜め息を吐かせるその噂曰く、「学院祭のコンサートに出席出来なかった皇帝陛下が、演奏家に評判の高かった息子とそのパートナーの再びの演奏を望んだ。それがあって学院側から二人にパートナーを組むように持ち掛けた」。

根も葉もない、とテアはそれを聞いて啞然とするしかなかったが、実は、と親友に打ち明けられた事実さらに愕然とした。

その噂の発端はライナルトで、積極的に広めたのはローゼだというのだ。

しかしその理由を聞いてしまえば、どうしても責めるわけにもいかなかった。

自分のせいでテアに嫌がらせされることを気に病んでいるディルク。ライナルトはそれをよく分かっていて、それならばパートナーを組んだことを自分たちの意思とは無関係にしてしまえばいい、と言ったのだ。どうしたとしても手の出しようがない相手の意思にしてしまえばいいと。

抗えない他者から強制されたパートナーであれば、他の生徒も諦めざるを得ない。その他者が最高権力者ならば尚更だ。嫉妬はあっても、皇帝の名にテアに手出しが出来なくなる。皇帝に対して恨みに思っても、手出しなどできるはずもない。

それは実際にテアとしても、良い隠れ蓑になる話だった。

自ずから選んだわけではない、対外的にそう思わせられれば、ディルクを巻き込んでしまう懸念は減る。強制的な関係、と思わせられれば、余計な勘ぐりもそうされないだろう。

実のところ、ディルクについても、噂の発端はテアと同じ理由の方が動機として大きかったのだが、テアがそれを知る由もない。

ただ、彼女の中に違和感があった。皇帝がこうしたことに関して自身の名を出すようなことを好むようには思えなかったのだ。

だがいずれにせよ、学院長を通し、皇帝自身にまで許可を得て流したという話はもう学院中が知ることになってしまったから、撤回などできようはずもない。何より話が通してあるということは、噂がある意味では真実であるということも意味しており……。

一体いつの間に、いつから手筈を整えていたのかとテアはライナルトの手腕に舌を巻き、諦めるしかなかった。

皇帝陛下の期待、というプレッシャーが重過ぎるという問題はあったが……。

もう一度、そつと溜め息を吐いて、テアは大切な手紙を綺麗に畳み

直し、封筒にしまった。

「……………テア、明日なんですけど、これでいいと思います?」
後ろから声をかけられて、テアは振り向く。

そこには、ライナルトとのデート前にはいつものごとく着ていく服に悩むローゼがいた。

明日は聖ウアレんティヌスの日で、ちょうど学院も休日だ。

聖ウアレんティヌスの日と言えば、恋人たちの日。男性が女性に花を贈り、恋人たちは互いの気持ちを確かめ合うのだ。

ライナルトとローゼは以前から出かける約束をしていたらしく、ローゼはその日をひどく楽しみにしていた。

そして彼女が今身体の前に合わせるように持っているのは、彼女に良く似合う、薔薇色のドレス。

先日、新しく仕立てていたものとテアは知っていた。確か、ライナルトと一緒に選んだのだと……………。

「いいと思いますよ。ライナルトが選んでくれたものでしょう?」
テアが微笑んで言うと、ローゼはほっとしたように、嬉しそうに、頷く。

「はい……………。ありがとございます、テア」

それでは今度は服に合うアクセサリーとバッグとあれとそれと、とローゼはまた頭を抱え始める。

だがそれも、何だか楽しそうだ。

テアが思わず笑いを零すと、ローゼは上目遣いに軽くテアを睨み付けた。

「なんで笑うんですか」

「楽しそうだな、と思って」

「もう、テアだってその内きつところなりますよ」

それは……………、どうだろう。

テアが思ったことはローゼにも伝わったのか、言葉にせずとも反論された。

「そうなります。私だって最初は……………、何と云うのか、負けてたま

るか、みたいな気持ちだったんです……。変わる、ものですよね」
負けてたまるかとは、何とも色気のない言葉だ。

テアは目を瞬かせて、尋ねた。

「そういえば……。今まで聞いたことがなかったですけど……。ローゼはライナルトとはどのようなにしてパートナーを？ やはり王宮などで縁があつたりしたのですか？ ……いえ、無理に聞こうと言うのではないのですが……」

テアの問いにローゼは逡巡を見せたが、口を開いた。

「入学以前にも確かに顔を合わせたこともありましたけど……。本当に数度、式典などで、私はいつも父の後ろに控える形でしたから、会話らしい会話もなくて……。出会ったと言えるのはやはりここに入学してからですね。その出会いにしろ……。何故その後ライナルトが声をかけてくれたのか、よく分からなくて……」

「と言うと、申し出をしたのはライナルトだったのですね」

「ええ……。そうです。最初は正直、からかいのつもりか何かと思つて、断ったんですよ」

「断った……。んですか」

テアはそれをひどく意外に感じた。

少なくともテアがよく知る今の二人からすれば、そういうことがあるとは思われなかったからだ。

「だって、その出会いにしろ特別なことがあつたわけではなかったんですよ。むしろ私は恥ずかしいところを見せちゃったくらいで……。それなのに次に会ったらパートナーの申し込みですよ。正直信じられなかったんです。今まで私に近付いて来た男共は大体『クンストの剣』といつても女じゃ大したことないと思つていて、私が剣を持つところを見れば逃げていくし、最初から腕を知っているとそういう意味では近付いてこないし……。普通の女性らしいとは言えないと自分でも分かっていますから、ライナルトも何か勘違いしているかからかっているか、いずれかだと思つたんです。フルートだつてそんな、大した腕というわけでもありませんでしたし」

そんなローゼの言葉を聞きながら、テアはブランシユ領領主の顔を思い浮かべていた。

騎士見習いでもローゼに憧れる方は結構いたんですけど……、モーリッツさんが睨みをきかせていたから迂闊に近寄れなかったんですよね……。

ローゼはおそらく大いなる誤解をしている。

逃げていった、というのも、全部が全部ローゼの言う通りだったわけではなく、強面ながら愛娘を溺愛しているモーリッツが関わっていたかもしれない。

だから例えライナルトが一目惚れしたとしても全くおかしくなどないのだ。

他の女性とは確かに異なっているかもしれない。けれどローゼは彼女しか持ち得ない魅力を持っているのだから。

テアはそう思うが、ローゼはこういうことに関しては案外奥手で、自信が持てないようだった。

相手がライナルト、というのが余計にそうさせるのかもしれない。

そんな風にテアが思っていたのをローゼはどう捉えたのか、彼女は拳を握って力説し出した。

「テアだって、あの時の私の立場だったら絶対疑います。話しますから、聞いてください」

そうして結局、請われる形でテアはローゼの話を書くことになったのだ。

rose 1 (後書き)

新章開幕、でした。

こんな感じで、今回はローゼとライナルトの話が中心になります。
番外編的な回ですが、お楽しみいただければ幸いです。

しまった……、迷ってしまった……。

ローゼ・フォン・ブランシュは細い路地を見渡して、肩を落とした。季節は初秋。

ローゼがシューレ音楽学院に入学して間もなくの頃。休日、ローゼはケーレの街を散策していた。

早くこの街に慣れたい、と思っていたし、秋晴れのとても気持ち良い日で、外出しないのは勿体なくらいだったのだ。

しかし、知らない道を行くのだからと、いつでも戻る道を忘れないように気をつけていたというのに、うっかり風にスカーフを飛ばされてしまい、追いかけて捕まえたまでは良かったのだが……。

元来た道に引き返そうとしてできず、迷ってしまったようだった。

こういう時に限って人も通り掛からないんですね……。

憂鬱な溜め息を漏らす。

そこへ、

「てめえ！」

人の争う声が聞こえ、反射的に彼女はそちらへ首を巡らせた。

争いならば、放っておくのは本分ではない。

入学草々そうしたことには首を突っ込むのは気が進まないが、と思いつながらローゼは声のする方へ向かった。

「スカした面しやがって！」

「俺たちの邪魔しやがったんだ、せいぜい代わりにサンドバックになつてもらうぜ」

「膝ついて謝るんなら少しは手加減してやってもいいけどなあ」

何とも分かりやすい台詞を並べ立てている三人組に、行き止まりを背にして対面しているのは一人。

奥にいる一人は暗くてよく見えないが、その向かいの三人組の姿と、その内の一人がナイフを手に行っているのは見てとれた。

三対一か……。

何があつたか知らないが、これだけ分かりやすい状況だ。そのままにしてはおけまい。

「……そこで何をしているのですか」

ローゼがさほど大きくはないものの、凜としたよく通る声を上げると、はっとしたように三人組は振り向いた。

一瞬だけ怯むような色を見せた彼らだが、ローゼを見てそれを好色なものへ変える。

「へえ、こりやえらい美人だ」

「こいつの代わりに相手してもらいてえな」

「そりやそつちの方がいいな。いくらおキレイな顔しても男じゃ勃たねえからなあ」

そう言つて下卑た笑いを上げる彼らに、ローゼは呆れたような視線を送った。

全く、どこへ行つてもこういう輩は同じですね……。

「黙っていただけですか、下衆。これまでも似たような台詞を汚い声で聞かされてきて、耳が腐りそうです」

「んだと、このアマあ……」

「状況分かつてんのかあ？」

「こつちにはこいつもあるんだぜ」

「痛い目みたくなきゃ、せいぜいおとなしくしな」

「そうそう、たつぷり可愛がつてやるからよ」

「おいお前、今日のところはこれで勘弁してやる。もう俺たちの邪魔すんじゃねえぞ」

そう言つて三人は、先ほどまで相手をしていた一人になど興味を失つたようにローゼに近付いて来た。これみよがしにナイフを見せつけながら。

不用意に身体に触れてこようとする彼らに、ローゼは冷たい一瞥を

くれてやって、

「もう少し、相手の力量を見極める目を養った方がいいですよ」

と、まず一人、隙だらけのそのみぞおちに、無造作に拳を打ち込んでやった。

言葉もなく、一人は悶絶し崩れ落ちる。

「……っ」

「このアマあ、何しやがる！」

逆上して声を上げる残りにもまるでたじろがず、ローゼは向かって来る一人の急所に蹴りをくれてやり、そのまま軽くターンするようにもう一人に後ろ蹴りを決めた。

一瞬の出来事。

凶器を振る間もなく終わってしまい、三人は苦しそうに蹲るしかなかった。

「どうせならもつと手応えが欲しかったですよ、全く。これに懲りたら少しは自分たちを省みることですね」

ローゼは忠告してやったが、痛みの中にある彼らの耳に届いていたかどうか。

そしてローゼが顔を上げ、細い道の奥に視線を向けたその時。

「……お見事、と思っていたら、もしかやローゼ・フォン・ブランシユか？」

どこか冷たくも感じられる硬質な、美声。

三人に囲まれていた一人が、路地奥の暗がりから姿を表す。

類い稀なる美貌の青年……、ローゼはその顔に見覚えがあった。

「……ライナルト殿下？」

驚きを込めてそう、この国の第二皇子の名を呼ぶのに、つい声を潜めてしまう。

何故こんなところに、と訝しく思ってすぐ、ローゼは思い出していた。

彼は数年前に第三皇子と共に皇室を出た身で、今はローゼと同じ、シューレ音楽学院の生徒であると。

ライナルトはローゼが口走った呼称に苦笑を浮かべており、ローゼは罰が悪くなった。

「今はライナルト、とお呼びした方が？」

「ああ」

「……相手があなただったのですしたら、余計な手出しだったでしょうか。ここからだ、奥にいたあなたの顔が見えなかったものから……」

「いや、助かったし、良いものを見せてもらったよ。さすがだな」

「やめてください。こんな連中相手に。あなただってその気になればすぐにでも片付けられていたでしょうに。何故こんなところで彼らの御託を聞いてやっていたのですか？」

「いや、なかなかこういうこともないものだから、物珍しくてつい……」

つまり彼らは面白がられていたわけだ。

ローゼは呆れた。

「……珍しくも絡まれることになったわけをお尋ねしても？」

「ああ……、」

ライナルトは少しばかり躊躇ったが、手出しすることになったローゼには聞く権利があるだろうと口を開いた。

「彼らが女性を無理矢理暗がり引き込もうとしていたから……、それを止めさせたんだ」

「へえ……？ つまりこいつらは、暴行未遂犯の上、強姦未遂犯だと、そういうわけですか」

ローゼは目を剣呑に光らせ、隠しもせずその単語を口にした。

「それならもつと念入りに急所を潰してやるべきでしたね……」
妙齢の女性が迫力を持って呟く言葉ではない。

ライナルトはおかしそうに目を光らせた。

「その代わりと言うか……、警察にでも連れていくか？」

「そうですね……、それがいいんでしょうけれど……」

何故か言葉を濁したローゼに、ライナルトは首を傾げ……。

「……警察署が分からない、と言うかそれ以前に、ここはどこでしょう……？」
真顔で問いかけられ、ライナルトは次の瞬間、笑いを堪えきれずにふきだしていた。

「全く、あんなに笑わなくてもいいじゃないですか……？」
休日が明けて、次の日。

授業を終えた放課後、ローゼは入学草々入部した調理部の活動に参加していた。

今日は部活見学に来た他の一年生を含め、皆でジンジャークッキーを作っている。

ローゼは、寝かせておいた生地を取り出して型抜きをしながら昨日のことを思い出し、ついぼやいた。

あれから結局、ライナルトの案内で例の三人組を警察に引き渡し、帰り道もエスコートされたローゼだった。

あれ以上道が分からなくなる羽目になるよりは良かったのだろうが、何となく癪に障ってしまう。

別にそこまで大層な気持ちであの場に割って入ったわけではなかったが、助けはいらなかったようだし、むしろ助けられてしまったという事実が何とも言えない羞恥を誘うのだ。

まあ、もう関わりあいになることはないでしょうし……、あまり考えないようにしましょう……。

あれだけ目立つ青年だから、学院で見掛けてしまうのは頻繁かもしれないが、きつとそれくらいだ。

ローゼは努めて羞恥の記憶を封印しようとした。

悶々としながらも、やがて生地焼成に入り、仲間たちとクッキー

の焼き上がりを楽しみに待つ。
その時。

「……何を作っているんだ？」

その声に、調理室はしんと静まり返った。

それが、明らかに部員のものではない、一度聞いてしまったら忘れられなくなりそうな美声だったからだ。

「ラ……っ」

その声に一同が振り向き、思わず叫びそうになった部員たちが慌てて口を塞ぐ。

「ライナルト……！ どうしてここにいますか……！」

ローゼも後ろを振り返り、一瞬絶句して、しかし次の瞬間叫ぶように呼んでいた。

昨日の今日で、一番顔を会わせたくなかった相手がそこにいて、抑えるのは難しかったのだ。

いつの間にかローゼの後ろに立っていたライナルトは、どこか楽しそうに笑っている。

「お前に会いに来たんだ、ローゼ」

「な……」

驚愕に驚愕を重ねるローゼだが、周囲は色めき立った。

もしかして、と囁く彼女たちにローゼははっと我に返って、このままではあることないと言われてしまう、とライナルトの腕を掴む。

「ちよつと来てください」

引つ張って行くローゼに、引きずられていくライナルト。

それを見送る調理部の面々は、「もしかして……？」と目を輝かせる。

あることないこと噂が駆け巡るのは、避けられそうになかった。

サークル棟の中では人目につきすぎる、とローゼはサークル棟を出、

その裏手に回り込んだ。

すぐ脇が鬱蒼とした茂みになっているので、あまり人は寄りつかないそうだ。

「……会いにつて、何か御用でも？」

驚かされた恨みを込めて、ローゼがいささかつっけんどんに問うと、ライナルトは質問で返してきた。

「調理部はいいのか？ 何か作っている途中だったのだろうか？」

「もう焼成に入っていますから終わったようなものですし、他の方がやってくれます」

ライナルトが表れた途端に浮足立った周囲の様子を思い出す。

例えローゼが抜けることに問題があっても、ローゼがライナルトを待たせていたら、ローゼを含め部員全員通常通りに続きができるわけもない。

用件が終わったら片付けを手伝いに戻らなければとローゼは思ったが、戻ったら根掘り葉掘り聞かれそうだと、想像しただけでげんなりした。

「良い匂いがしていたな。何だったんだ？」

「ジンジャークッキーです。たくさんありますから良ければ差し上げますよ。昨日のお礼にでも」

「いいのか？」

「構いませんよ、それより用件を」

早口でいかにも早く済ませようとするローゼだが、ライナルトは楽しそうに笑うばかりで気にした様子もなく、彼女の望む通り用件の内容を単刀直入に告げた。

「……ローゼ」

「何です？」

「私のパートナーになつてもらえないだろうか？」

その瞬間、ローゼの思考は停止した。

ライナルトは涼しげな顔で、ローゼの答えを待っている。

「……何ですつて？」

「私と、パートナーを」

幻聴ではなかったらしい。ローゼは慌ててライナルトの言葉を遮った。

「いえ、繰り返さずとも結構です！ 本気ですか？」

むしろ正気ですか、と尋ねるような雰囲気だった。

ライナルトは心外そうな顔になる。

「もちろん本気だが？」

それに尚疑わしげな視線を向けて、ローゼはさらに聞いた。

「……何故、私なのですか？ ご存じかどうか知りませんが、私は別に成績が優秀というわけではないし、フルートだってそこまで腕がいいとは言えません。あなたならもつとできる人をよりどりみどり選びまくりじゃないですか！ どうしてそんな、良く知っている仲というわけでもないのに……」

ライナルトとその異母兄弟ディルクの優秀さは、学院の生徒のみならず国民全てが知っていると言っても過言ではない。

皇子の頃から皇帝の息子の三兄弟がずば抜けて優秀であるというのは有名なことだったし、この学院において彼らの話を聞かない日はないのだ。

加えてその並はずれた容姿に、ディルク、ライナルトをパートナーにと望む声は男女問わず多い。

それが何故、この学院において特別優秀というわけでもないローゼをパートナーにと望むのか。

ライナルトの本心は、掴めない。

「だから、かな」

「え？」

「知らないから、知りたいと思った。こういう風に言えばお前は気を悪くするかもしれないが、正直お前の成績が良くとも悪くともお前ならそれでいいんだ。側にいて、ずっと見ていたい、と思う。他の誰かがお前の隣りに立つのは嫌だった。だから、お前がまだパートナー登録をしていないと知って、焦って来たんだ。今日もできれ

ばもつと早くに來たかつたんだが、確實にお前が掴まえられそうなのは放課後だったから……」

訥々と語るライナルトの言葉に、ローゼの顔は真っ赤に染まっていた。

「……っ、それじゃ、まるで、パートナーの申し込みというより、愛の告白ですよ、ライナルト……」

ローゼは熱い頬を誤魔化そうとして、笑い飛ばすように言ったが、返ってきたのは肯定だった。

「ああ、私はお前が好きになったんだ、ローゼ」

真顔で肯定したライナルトに、ローゼは息を飲んだ。

「だからこれはパートナーというより……、交際の申し出だな。他の誰かではなく、私の手をとってもらえないだろうか、ローゼ」

それはとても甘やかな響きを伴って、ローゼを誘惑した。けれど。

「お、お断りしますっ!!」

一刀両断、とばかり、気付けばローゼはそう口走っていた。

好きになった、なんてとても信じられない。

きっかけは当然昨日あったのだろうが、一体昨日のあれでローゼのどこを気に入ったと言うのか。

容易に頷けることではない。

しかし、断りの文句を口にしたはいいが、ライナルトの顔を何故か直視できず、ローゼはくるりと踵を返していた。

「……それでは私は部活に戻りますから!」

そのまま振り返らず、ライナルトから逃げるようにローゼはその場から去った。

だからローゼは知らない。

「……参ったな……」

ローゼの背を見送ったライナルトがこう呟いたことを。

「ますます、諦めきれなくなったじゃないか……」

「おかしいです……。学院生活ってこういうものだったんですか？
皆が皆パートナーパートナーって、もう疲れちゃいましたよ……」
夜だった。

ローゼはぐったりしながら、寮の食堂で夕食をとっている。

「そりゃ今はパートナー登録期間だからね。皆躍起になっていい相
手を探してるわけだ。もてる人間は大変だな」

その隣に座るのはローゼと同様新入生で彼女の友人である、リーザ・
フォン・ライモンド。

ブランシュ領の隣、小さな領地を治めるライモンド男爵家の末娘で、
ローゼとは幼い頃から交流があった。

彼女は上に兄を四人も持つており、両親にとっては念願の娘だった
のだが、兄たちの影響の方が強く、非常にさばさばとした性格で、
女性らしさより男性っぽさを醸し出している。

そんなところが逆にローゼと合って、縁がずっと続いているのだっ
た。

「……そんな他人事みたいに……」

「だって他人事だし」

じとつと見つめても、友人はけろりと返すばかりだ。

そろそろ入学して一ヶ月が経とうとしていて、パートナー登録期間
も終わりに近付いている。

ローゼはこれまで何人もの男子生徒に申し込みをされているのだが、
今日申し込みしてきた相手が非常にしつこく、今は殊更うんざりし
ているのだった。

「……ここは宮廷楽団を目指す人が集まっているんですね。それ
ならもつと巧みな奏者に声をかければいいのに、どうして私なんで

すか……」

「そりゃ全員が全員宮廷楽団を目指してるわけじゃないからね。国の学校を出たって言えばそれだけで箔がつく。あんただって、別に宮廷楽団に入りたいなんて思ってないっしょ」

「う……」

「で、音楽はそこそこで済ませようって連中は、腕はそんなに問わないし、むしろ美人でいいとこのお嬢さんであるあんたを標的にするってわけだね」

「ちつとも嬉しくない見解をありがとうございます……」

ぐつたりと溜め息を吐いたローゼに、さすがに哀れな感想をもよおしたのか、リーザは幾分同情気味に言った。

「でもま、今日は確かに相手が悪かったと思うよ。災難だったな。

まさかいまだにローゼの男運の悪さが發揮されているとは……」

「それは私慰められてないですよね……？」

友人曰く、ローゼは男運が悪い、らしいが、それをローゼも積極的に否定できなかった。

幼い頃からローゼは持てはやされることが多かったのだが、彼女を普通の貴族女性と同様に考えている男性は多く、ローゼが剣を振るえば、その迫力に話が違うとばかり去っていった。

そんな、「クンストの剣」がいかなるものかも理解していない人間などこちらから願い下げだが、そんな人間ばかりが次々と現れて来るのである。

かと思えば、「そのおみ足で私めを是非……」などと頭を差し出してくる変態もいて、そんな輩はブランシユ家の見習いに生贄（と書いて練習相手と読む）としてくれてやったが、一体何を求めてくれているのかと肩を落とすばかりだ。

その上良い男はモーリッツ卿を超えようなんて彼の弟子になるのはいいけど、そうするとモーリッツ卿にも心酔しちゃってますますローゼに近付けないなんてことになってるんだよなあ……。モーリッツ卿も狙ってるわけじゃないのに虫除けしてるんだからすごい。

ホントにくだらない輩は見習いも合わせて皆で裏で始末してるみたいだし……。

友人がそんなことを考えているなどローゼは知る由もなく、溜め息を吐くばかりだ。

「ああ、でも今度は良いのもいたよね。ライナルト・アイゲン。今からでもイエスの返事してあげれば？」

「え……っ」

何故か動揺してしまい、ローゼは顔を上げた。

「断られてもずっと会いに来てみたいだし、本気の証じゃない。

ローゼもなんだかんだずっと彼の話ばかりだし。そんなに嫌ってわけじゃないんでしょ？」

「か、彼の話が多くなるのは毎日のように出没してくるからで……、他意があるわけではなくて……、それに断っても断っても来るなんて、いつものDMの変態なのかもしれないじゃないですか！」

慌てたように、ローゼはライナルトに変態の容疑をかけた。

そう、ローゼはライナルトの最初の申し出を断った。

しかし、その後もライナルトは懲りずにローゼの前に現れてくるのである。

それは最初のように調理部の活動中だったり（クッキー等作ったものは惜しげもなくライナルトに進呈された。他の部員たちによって）、その帰りに寮まで共に帰ったり（ライナルトは聞き上手の話し上手でわりと話が弾んだ）、練習室でローゼが四苦八苦している時だったり（押しつけがましくなくライナルトはローゼの演奏にアドバイスをくれた）、寮の談話室や図書館で勉強している時だったり（やっぱりライナルトは良いアドバイザーだった）、寮の裏手で身体を動かしている時だったり（他の男のように引くどころか賞賛された）、こうして食事している時だったり……。

少しすれば飽きるだろうと思っていたが、それもなく、どんなローゼを見ても他の男たちのように期待外れだなどという言葉は口にならない。

いつだって楽しそうに、ローゼの側にいる。

信じても、いいのだろうか……。

ローゼはそう思い始めていた。

今までの経験から、そう簡単にはできそうにないけれど。

そして、ライナルトの言葉を信じるとしても、彼の申し出にイエスと頷くかどうかはまた別の話なのだ。

あの時は、信じられないと半ば勢いで首を振った。けれど、ライナルトがローゼのことを知ろうとしてくれたように、ローゼもライナルトと同じ時を過ごすことで彼のことを知った。

知って、嫌いになった、ということはなかった。むしろ好ましいと感じている。友人として共に過ごす時間は楽しいと。

だからと言って、ライナルトが先日告白してくれたように、彼のことが「好き」なのかというところ、正直、分からないのだった。

動揺を隠しきれないローゼに、

「……まあ、一歩間違えばストーカーって言われてもおかしくはないわけだけど……、それにしても……」

ぼそりと呟きながら、リーザはふと気がつくことがあって目を丸くし、次いで人の悪い笑みを浮かべた。

「うん、元とはいえ皇子様に堂々とそんな形容するなんて、さすがだよローゼ」

リーザはぼんと軽くローゼの肩を叩き、ローゼの後ろを指差す。

「何です、か……!?!」

つられるように後ろを振り返ったローゼは、後ろにその当人　　ラ

イナルトの姿を認めて固まった。

どうやらライナルトはローゼの言葉を聞いていたらしいが、気を悪くした風もなく、むしろくつくつと楽しそうに笑っている。

「ら、ライナルト、いつから　　」

「いや、今ちょうど食べ終えて帰ろうとした時にお前を見かけてな。私はDMではないと思うのだが　　、お前の尻になら敷かれてもいいと思うのだから、少しはその気があるのかな」

「そ、それは、その……っ」
ライナルトの口からその単語が発せられると、少しばかり違和感がある。

何とも弁解も返答のしようがないローゼは、結局こう言い放って、後悔した。

「わ……私はそんなドSじゃないですよ！」
隣でリーザが思い切りよくふき出す。

ローゼはそんな友人を横目で睨んだ。

「……これは、私はもう一度振られてしまったということかな？」
首を傾げるように呟いたライナルトの言葉にしかし、ローゼはまた心をかき乱されて。

「こう見えてローゼは初心なんですよ。何度振られてもめげずに頑張ってみてください」

そんなローゼをフォローするかのようになり、リーザは笑いを堪えながらライナルトに言った。

さすがの彼女も、ライナルトの前で素のまま話し続けるのは難しいらしく、一応それなりに丁寧な態度である。

「リーザ・フォン・ライモンドか。挨拶もせずにすまなかったな」
「いいえー。こちらこそお邪魔様ですみません。でも、よく私のことをご存じでしたね」

「お前はよくローゼといるからな。確かライモンド領はブランシュ領とも隣接関係にあるし、付き合いも古いのだろう？ ローゼにもっと訴えかけるにはどんな手段が有効だろうか」

「そうですね、先輩はそのまんまでいいと思いますよ。下手に装ったりすると、斬って捨てられちゃいますから。努力してればきっとその内認めてもらえるんじゃないかと思います。何年かかるかは分かりませんが、ローゼは一生懸命努力する人が好きですから」

「本人の前で何を話していきやがりますか！」
顔を紅潮させて、ローゼはその会話を中断させた。

「リーザはもう黙っていてください。ライナルトも、変なこと聞か

ないで下さいよ。しかもこんな場所です！」

ローザは友人をもう一度きつと見据え、同じようにライナルトを上目遣いに睨んだ。

「そうだな、すまない」

素直に謝ってきたライナルトに、ローゼは少し拍子抜けする。

けれど次の瞬間、再び動悸が跳ねた。

「……顔色が少し悪いように思ったが、元気そうだな」

まるで、気遣うようにそっと、頬にライナルトの手が添えられたから。

「……ラ、」

口を開きかけたローゼだったが、その前にライナルトがからかうようにこう言った。

「それでは、この続きはまた今度お願いしよう」

「私はいつでもいいですよ」

先ほどから面白そうな表情を隠しもしないリーザが、笑顔で返す。

「リーザ！ ライナルト！」

「じゃあまたな、二人とも」

声を上げたローゼにも微笑を崩さず、ライナルトは去っていった。

ローゼは憤慨したように頬を膨らませてその背を見送り、ぼやく。

「もう、一体何しに来たんですかあの人は……」

「何って、そりゃああんたと少しでも話したかったんだよ。それに

ローゼ、さっきまで落ち込んでたから、傍から見てて心配になっただんじやない？」

「……」

今度は黙り込んだローゼを、人の悪い笑みでリーザは見つめた。

「やっぱり良いじゃない、彼。OKしてあげればいいのに」

「……良いと言うなら、あなたが組めばどうですか」

「あの人が望んでるのはローゼじゃん。それに、私は今回自分では選ばないって言ってるっしょ。全てを天に任せてみる。その方が面白そうだし。余りものには福があるってね」

きつぱりと、リーザはそう言って。

「大体ローゼは、それでいいわけ？ 私とか、他の相手が彼と組んでも？」

「……！」

突き付けられた言葉に、思わずローゼは息を呑んでしまった。

何故か返す言葉が見つからない。

別に構わない、その方がローゼにとっては気の休まる話のはずなのに。

「……ま、いざとなったら私はフリーだし、良い相手が見つからなかったらパートナー登録してもいいからさ。ゆっくり考えてみなよ」

「ありがとうございます」

どこか固い表情ながら、ローゼは微笑した。

「じゃ、食べ終わったらし、課題もあるから先に部屋に戻るよ。おやすみ」

「おやすみなさい」

リーザは励ますようにローゼの肩を叩き、席を立つ。

何年も、はいらなみだいな。

去り際、そう心の中で呟いて、悩ましげな友人の後ろ姿から目をそらした。

「ローゼ・フォン・ブランシュ？」

呼びかけられて、ローゼはくるりと振り向いた。

九月最後の休日の朝。

街に出て済まさなければならぬ用事もあり、また散策をしたいというもあり、ローゼは歩きやすい私服で寮の玄関をくぐるうとしていたところだった。

「おはよう」

振り向いたローゼの目に映ったのは、眩いまでの美貌の主。

学院の生徒会長であるディルク・アイゲンが、ローゼに向かって爽やかに笑いかけていた。

「ええと……、おはようございます」

挨拶を返したものの、ローゼは戸惑いを隠せなかった。

当然彼の顔は知っていたが、こうして直接顔を合わせて言葉を交わすのは初めてだったからだ。

「突然すまない。驚かせたか？」

「いえ……。ですけど、何かご用が？」

「用、というわけでもないが、最近ライナルトからよくお前の話を聞くので、一度話してみたいと思っていたんだ。俺もちようど外に出るところなんだが、校門まで一緒に構わないだろうか？」

「ええ……、もちろん」

特に断る理由もない。ローゼは頷き、ディルクと共に寮を出た。

だが、実際のところ、ローゼの内心はあまり穏やかでない。

ディルクと言えばライナルトの異母兄弟で、元皇族。

ここで出会う前のライナルトと同様、宮殿や式典で何度か近付くことはあったが、深入りすることもなかった相手だ。

ライナルトと同様に、いやおそらくそれ以上に、生徒たちからの信頼厚く、誰からも慕われる存在。

だからといって必要以上に恐れ入るような性格ではなかったが、確かにこうして近くにいと、その存在感はますます圧倒的なように思われた。

それに、とローゼはディルクを窺いながら、心の中で呟く。

遠くから見て思っていたよりも、ディルクとライナルトは似通った容貌をしていた。

そのことが何故か、今のローゼの心を揺する。

そして何より、「ライナルトからよく話を聞く」というディルクの言葉に、ローゼの心はざわついていた。

一体ライナルトはディルクにどんな話をしたのだろうか……。

「これから街で、買い物か？」

しかし、ローゼの内心の思いとは関係なく、ディルクが口にしたのは初対面の相手同士にはふさわしい、他愛ないことだった。

「ええ……。手紙も出したいですし、まだまだ慣れたとは言えませんが、もつと街を色々見てみたいんです」

「それはいいな。俺は今から演奏会だ」

「え……」

さらりと言われた言葉にローゼは驚き、ディルクの手元のヴァイオリンケースに納得した。

「聴きに、ではなくて演奏しに、行かれるんですね」

「ああ。後援者からの呼び出しでな」

学院の生徒でも、演奏会に呼ばれるような機会はそうはないだろう。それを至極当然のように口にするディルクは、別世界の人間のように思われた。

「……ライナルトは一緒ではないのですか？」

「あいつはあまり大勢の前で演奏するのが好きではないらしいから」

「そうなんですか？」

それは新事実だ。学院に入学して、成績も優秀と謳われているのに、人前で演奏するのが好きではない、とは……。

「意外か？」

「そう、ですね。意外なような、意外でもないような……」

確かに、ライナルトには表で大々的に活躍するような印象は乏しい。それにより当てはまるのはディルクの方だろう。

二人は共に見かける機会も多く、述べられる際もその名が並ぶことの方が多いが、ディルクが表でライナルトが裏という形で捉えられているように思う。

ライナルトがそうであることを望んでいるから、そうなのかもしれない。

だが、それならばどうしてこの学院に入学したのだろう……。

「それに、あいつは街を散策する方が好きらしい。ここに入学して

からは頻繁に外出しているからな」

「それは、正直意外です」

「実を言うと俺もだ」

デイルクの同意にローゼは笑い、二人は笑みを交わし合った。

だがそう言われてみれば、入学してライナルトと出会ったのも街の中だったのだ。

「デイルク……、も一緒にでかけることが多いんですか？」

呼び捨てに躊躇を覚えたが、他の呼び方には違和感があるし、殿下とは最早呼べない。それを望むデイルクでもないだろう。

ローゼは窺うようにデイルクを見上げたが、彼は特に気にした風もなく答えた。

「いや、俺も散策は好きだが、そう頻繁には、な。なるべく音楽に集中していたいし、俺は目的を持って街に出る……、あいつは目的を探しに外に出ているからな」

それはどういう意味か、と尋ねることは容易だったが、この時は深く聞けずに、ローゼは別のことを口にする。

「それじゃあ……、休日は二人は別々に過ごされることが多いのですか？ 学院で見かける時はだいたい二人でいるので、何だか不思議な気がします」

「そんなにいつも一緒にいるか？ いや、まあ、確かに否定はできないか……。寮の部屋も一緒だし、生徒会役員なのも一緒だしな。だがお前に会いに行く時はいつもライナルト一人だろう？」

「そういえば、そうですね……。こうして考えてみると、今まであなたとこうして話すこともなかった、というのが変な気がしてきました」

「……その理由は、至極単純だがな」

苦笑を浮かべるデイルクを、ローゼは不思議そうに見やった。

「何です？」

「分からないか？」

「……」

意味深に問われ、ローゼは考えてみたが。至った答えは自意識過剰だ、と思われるもので、口には決してできそうになかった。

だが、もしそう的外れでないものなら……。

心臓が、大きく鳴り始めるのを、ローゼは感じた。

心なしか、顔が熱いような気がする。

いや、きつと気のせいだ、と思おうとして、ふとローゼは思い至った。

ディルクの言動からして、おそらくライナルトはローゼをパートナーにと望んでいることを、そしてそれには恋人としての意味も含まれていたということ、彼に話している。

見つけた答えはローゼの勘違いかもしれないが、もしそれが正解なら、ディルクはそのことを、どう思っているのだろうか。

ローゼへの態度は自然で、気安く、嫌な感情は見当たらない。

しかしよくよく考えてみれば、ディルクとライナルトの付き合いは古く、去年二人はずっとパートナー同士だったのだ。

そこに突然ローゼが現れて、ライナルトはローゼに誘いをかけた、わけだが。

ディルクはそれをどう捉えたのだろうか。

「あの、ディルクは」

「うん？」

これは聞いても良いことだろうか、ローゼは悩みながらも口にせずにはいられずに、聞いていた。

「ディルクは、今期のパートナーは……」

「探し中だ」

簡潔に答えてから、ディルクはローゼの懸念が分かってしまったのか、こう続けた。

「実を言うと前々からやりたいことがあって、良いピアニストを探しているのだが……、なかなか巡り合えなくてな」

「そう……なのですか」

「このまま見つからなければ、学院に交渉して特例を作ってもらおうかと考えている」

「特例、というと？」

「ああ。去年の俺たちの噂は、おそらくお前の耳にも届いているだろう。大体のことは本場で、色々大変だったわけなんだ」

「ディルクはそう、小さな溜め息を漏らす。

「……それは、今私が遠くから見ているだけでも想像がつかます……」

「ローゼは同情気味に呟き、ディルクは苦笑しつつ答えた。

「このままであれば、また同じようなことが起こる。だから、パートナーを作らなくとも良い、と言ってもらおうかと」

「学院がそれを、認めますか？」

「認めざるを得ないだろうさ。去年の前例がある。何より、パートナー制度は協調性を養い、仲間を増やしてさらなる実力向上を目指して設けられた、とされている。パートナー制度を使わずとも、それらを達成していれば……、と納得してもらおうさ」

「尤もらしくディルクが言えば、学院も否とは言わないか、とローゼは頷いた。

「いや、むしろ組みたい相手が見つからないのであれば、混乱を防ぐために、それをむしろ喜んで受け入れるかもしれない。

「まあそれも、俺がライナルトか、片方だけが上手くいった場合の話だがな。互いに上手くいけばその相手と組めばいいし、上手くいかなければ、またあいつと組むことになるだろう」

「淡々と続けられたディルクの言葉は、ローゼに気遣い無用と言っているかのようで、杞憂だったかとローゼは少し肩の力を抜いた。

「……いずれにせよ、ライナルトの選択肢はお前か俺か、誰も選ばないか、だ。だからもしパートナー登録期間が終わる前までにお前の心が決まらなくとも、その後、ゆっくりでいいからあいつのことを前向きに考えてやってくれると俺も嬉しい」

「ディルク」

何と答えたものかとローゼが見上げる先で、ディルクは一度足を止める。

「……残念だが、今回はこれで時間切れだな」
話す間に、いつの間にか正門は目の前だった。

「今日のことは、ライナルトには秘密にしておいてくれ。二人きりでお前と話したとばれるとあいつが怒って、寮の部屋が寒くなる気がするんだ」

人差し指を口の前に立てて、冗談っぽくディルクは告げる。

何となく、寮の部屋で怒ったライナルトと肩を竦めるディルクが想像できて、ローゼはちよつと笑ってしまった。

「短い時間だったが話せて良かった。それじゃ、気をつけて」

「ディルクも。頑張ってください」

「ああ。良い休日を」

ディルクは笑って、颯爽と学院前に控えていた馬車に乗り込んでいった。

残されたローゼはその馬車が動き出すのを見送って、自分だけに聞こえる声で、意図せず、呟きを零す。

「本当に、本気で、私を……？」

ライナルトの言葉を信じられない気持ちはなかなか払拭できなかった。

けれど、もしディルクの言葉がその通りなならば。

ローゼは火照る顔に気付かないふりで、誤魔化すように晴れやかな空を見上げる。

「今日は本当に、良い天気ですね……」

太陽が燦々と輝く、その下を、ローゼは街へ向けて、リズムカルに足を運んでいった。

rose 3 (後書き)

どちらかというと、

二人でいる時はライナルトがSでローゼがMかな、
という気もしますが…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6103i/>

夜の灯火

2011年12月27日23時50分発行